愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第18集

大渕遺跡

1991

財団法人　愛知県埋蔵文化財センター

序

この度、財団法人愛知県埋蔵文化財センターは、名古屋環状２号線建設工事に伴う事前調査として、海部郡甚目寺町大渕遺跡の発掘調査を愛知県の委託事業として実施しました。この結果大渕遺跡においては、弥生時代中期の52軒の竪穴住居や、まだ県内でも調査例の少ない古墳時代から室町時代にかけての掘立柱建物群が検出され、町名の由来となっている白鳳期創建の甚目寺との関連や当時の低地部における集落の姿が注目されました。また弥生時代の円窓付土器や魚網に使用されたと思われる古代の土錘などをはじめ多数の遺物が出土しております。

調査にあたり、愛知県教育委員会のご指導、並びに地元住民の方々及び関係諸機関・関係者の皆様に格別のご協力をいただきましたことに深く感謝申し上げる次第であります。

また、本報告書が地域史研究や埋蔵文化財に対するご理解の一助となれば幸いと存じます。

平成３年３月

財団法人　愛知県埋蔵文化財センター

理事長　松　川　誠　次

例　　言

1．本書は愛知県海部郡甚目寺大字甚目寺字大渕に所在する大渕遺跡の調査報告書である。

2．調査は名古屋環状２号線（一般国道302号）建設に伴う事前調査として、建設省・日本道路公団から愛知県教育委員会を通じて委託をうけ、財団法人愛知県教育サービスセンター・財団法人愛知県埋蔵文化財センターが昭和58年度から昭和60年度にかけて行った。

3．調査担当者は下記のとおりである。

58年度　田中信夫（現　豊田市立梅坪小学校）、 福岡晃彦、宮腰健司

59年度　清水雷太郎（現　尾西市立尾西第三中学校）、 梅村清春（現　小原村立本城小学校）
梅本博志（現　愛知県教育委員会文化財課）、 福岡晃彦、長島　広（現　春日井南高校）、 宮腰健司

60年度　竹内尚武（現　国府高校）、 山田耕治（現　蒲郡市立塩津小学校）
平野　清（現　津島高校）、 梅村清春、宮腰健司
北村（浅井）和宏、池本正明、酒井俊彦、竹内宇哲（現　名古屋市見晴台考古資料館）、 中野良法（現　春日井南高校）

なお、担当調査区については表１に示した。

4．調査にあたっては、次の各関係機関のご協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課、建設省愛知国道工事事務所、日本道路公団名古屋建設局、甚目寺町教育委員会

5．本書の執筆分担は下記のとおりである。なお、編集は宮腰健司が行った。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　宮腰健司
Ⅳ―１　石黒立人、宮腰健司
Ⅳ―２　宮腰健司
Ⅳ―３　池本正明、宮腰健司
Ⅴ―１　石黒立人
Ⅴ―２　宮腰健司、古橋佳子（調査研究補助員）
Ⅵ―１　三辻利一（奈良教育大学教授）
Ⅵ―２　森　勇一、前田弘子（調査研究補助員）
Ⅶ　　宮腰健司

6．調査区の座標は、国土座標Ⅶ座標系に準拠する。

7．遺構の旧番号と新番号の対照、遺物の登録番号は表として本文中に示した。

8．本書の執筆にあたり下記の諸機関・諸氏にご指導・ご助言をいただいた。
記して感謝申し上げたい。（敬称略）
上村安生、内田智久、加藤　優、斎宮歴史博物館、西宮秀紀、林部　均、藤澤良祐
三重県埋蔵文化財センター、三辻利一、吉水康夫

目　　次

Ⅰ．調査の概要……1
Ⅱ．位置と環境……3
Ⅲ．遺　　構……5
　1．遺構・層序の概要……6
　2．弥生時代……8
　3．古墳時代後期～平安時代中期……22
　4．平安時代後期～室町時代……37
Ⅳ．遺　　物……43
　1．弥生時代……45
　2．古墳時代後期～平安時代中期……54
　3．平安時代後期～室町時代……64
Ⅴ．考　察　1……75
　1．弥生中期土器にみる複数の＜系＞その2
　　――大渕遺跡並行期を中心として――……77
　2．大渕遺跡出土の土錘について……91
Ⅵ．考　察　2……111
　1．大渕遺跡出土須恵器の蛍光X線分析……113
　2．大渕遺跡から検出された珪藻遺骸について……118
Ⅶ．ま　と　め……124
遺構一覧表……133
遺物一覧表……139
図版……149
写真図版……209

図版目次

遺構図割付表

図版 1

〜　下面遺構図

図版 7

図版 8

〜　上面遺構図

図版20

図版21　弥生時代土器実測図　1〜 17

図版22　弥生時代土器実測図　18〜 41

図版23　弥生時代土器実測図　42〜 55

図版24　弥生時代土器実測図　56〜 78

図版25　弥生時代土器実測図　79〜104

図版26　弥生時代土器実測図　105〜122

図版27　弥生時代土器実測図　123〜137

図版28　弥生時代土器実測図　138〜150

図版29　弥生時代土器実測図　151〜158

図版30　弥生時代土器実測図　159〜179

図版31　弥生時代土器実測図　180〜195

図版32　弥生時代土器実測図　196〜211

図版33　弥生時代土器実測図　212〜226

図版34　弥生時代土器拓本　227〜258

図版35　弥生時代土器拓本　259〜295

図版36　弥生時代土器拓本　296〜306

図版37　弥生時代土器拓本　307〜327

図版38　弥生時代土器拓本　328〜342

図版39　Ⅰ期土器実測図　343〜371

図版40　Ⅰ期土器実測図　372〜389

図版41　Ⅰ期土器実測図　390〜410

図版42　Ⅰ期土器実測図　411〜424

図版43　Ⅰ期土器実測図　425〜447

図版44　Ⅰ期土器実測図　448〜466

図版45　Ⅰ期土器実測図　467〜491

図版46　Ⅰ期土器実測図　492〜515

図版47　Ⅰ期土器実測図　516〜543

図版48　Ⅱ期土器実測図・拓本　544〜563

図版49　Ⅱ期土器実測図　564〜595

図版50　Ⅱ・Ⅲ期土器実測図　596〜630

図版51　Ⅳ期土器実測図　631〜663

図版52　Ⅴ期土器実測図　664〜696

図版53　Ⅴ期土器実測図・拓本　697〜728

図版54　Ⅴ期土器実測図・拓本　729〜766

図版55　加工円盤実測図　767〜817

図版56　石器実測図　818〜854

図版57　特殊遺物実測図　855〜866

図版58　製塩土器・木器実測図　867〜897

写真図版 1　特殊遺物　1〜 7

上面SE01　8　（西から）

下面SE03円窓付土器出土状態

（上：南東から、下：南西から）

写真図版 2　60A$_1$上面（南から）・60B$_1$区上面（南東から）・60A$_2$区上面南側（北東から）・59A区（北から）・60D区上面西側（東から）・60C$_2$・C$_3$区上面（東から）・60E区（北から）・60H区（北から）・60G（南から）・59B区（南から）

写真図版 3　60A$_1$下面西側（東から）・60B$_1$下面（南から）・60A$_2$区下面北東側（西から）・60C$_3$区下面西側（東から）・60F区中世遺構（東から）・60F区（東から）・60I区南側（北西から）・60J区（北東から）・60K区（東から）・60L区（東から）

写真図版 4　下面SB05・SB06（東から）

下面SB05（東から）

下面SE03　上層土器出土状態（南から）・下層土器出土状態（西から）

写真図版 5　下面SB14　炭化材・土器出土状態（南西から）

下面SB26　炭化材・土器出土状態（東から）

下面SB19

写真図版 6　SE22　井戸枠・曲物出土状態（東から）

SE10　井戸枠出土状態（北東から）

SE13　土器出土状態（北から）

写真図版 7　SE14　井戸枠出土状態（北東から）

SE14　井戸枠・砂おさえ出土状態（南から）

SE24　土器・曲物出土状態（北から）

写真図版 8　SE11　土器出土状態（北西から）

SE03　曲物出土状態（西から）

SK125　土器出土状態（南から）

写真図版 9　弥生土器　8〜 15

写真図版10　弥生土器　16～ 23
写真図版11　弥生土器　24～ 30
写真図版12　弥生土器　31～ 38
写真図版13　弥生土器　37～ 45
写真図版14　Ⅱ期遺物　46～ 59
写真図版15　Ⅱ・Ⅲ期　60～ 75
写真図版16　Ⅱ・Ⅲ期　76～ 87
写真図版17　Ⅱ・Ⅲ期　88～106
写真図版18　Ⅳ・Ⅴ期　107～120
写真図版19　Ⅴ期遺物　121～132
加工円盤　133～136
写真図版20　石器　137～170
写真図版21　特殊遺物　171～176
木製品　177～182
写真図版22　土錘　183～190

表　目　次

第１表　発掘調査工程表…… 1
第２表　SXO１計測表 …… 20
第３表　端面処理状況表……92
第４表　形態別重量分布表……94
第５表　土錘計測グラフ……96・97
第６表　魚網の種類……98
第７表　土錘計測表……100～105
第８表　大渕遺跡出土須恵器　蛍光Ｘ線分析データ…
…… 117
第９表　大渕遺跡から産出した珪藻遺骸のリスト…
…… 121
第10表　古墳時代後期以降時期別主要遺構…… 126

挿図目次

第１図　調査区位置図…… 2
第２図　遺跡位置図…… 3
第３図　周辺の主要遺跡…… 4
第４図　層名基本図…… 6
第５図　土層模式図…… 7
第６図　弥生時代挿図一覧…… 8
第７図　SB04・05（１：40)…… 9
第８図　SB14（１：40)……10
第９図　SB21～23土器出土状態（南東より)……10
第10図　SB16炭化材出土状態 …… 10
第11図　SB17（１：40)……11
第12図　SB26（西より)……12
第13図　SB27（西より)……12
第14図　SB35（１：40)……13
第15図　SB39（１：40)……14
第16図　SB52（１：40)……15
第17図　SE01（１：40)……16
第18図　SE02（１：50)……17
第19図　SE03（１：50)……17
第20図　SK13土器出土状態（南から)……18
第21図　SK47（１：40)……18
第22図　SD01（１：40)……19
第23図　SX01（１：200）……21
第24図　古墳時代後期～平安時代中期挿図一覧……
……22
第25図　SB24（１：40)……23
第26図　SB17・SB18（１：40）……23
第27図　SB20・SB21・SB22・SB23
（１　：40)……24
第28図　SB33・SA17（１：40）……25
第29図　SB37・SB38・SA18（１：40)……26
第30図　SB41・SB42・SB43・SA41
（１　：40)……27
第31図　SB47（１：40)……28
第32図　SB48（１：40)……28
第33図　SE01（１：40)……29
第34図　SE08（１：50)……30
第35図　SE09（１：50)……30
第36図　SE10（１：50)……31
第37図　SE13（１：50)……31

第38図　SE14（1：50）……32
第39図　SE22（1：40）……32
第40図　SE21（1：50）……33
第41図　SE28（1：50）……33
第42図　SE24と出土折敷・曲物……33
第44図　SE07（1：50）……34
第45図　SE23（1：50）……34
第46図　SE25（1：50）……34
第47図　SX01（1：200）……36
第48図　SX04（1：200）……36
第49図　SX06（1：200）……36
第50図　SX41（1：40）……36
第51図　平安時代後期～室町時代挿図一覧……37
第52図　SB06・SB08・SB09・SB11
（1：40）……38
第53図　SB30・SB31・SB32・SA12・
SA42（1：100）……39
第54図　SE04（1：40）……40
第55図　SE11（1：40）……41
第56図　SE16（1：40）……41
第57図　SE18（1：40）……41
第58図　SE27（1：40）……41
第59図　弥生時代後期以降出土土器（1／4）…53
第60図　主要器種分類……55
第61図　灰釉系陶器　椀・皿の分類……64
第62図　SD15出土土器……74
第63図　Ⅱ系土器の消息……84
第64図　IE系……87
第65図　Ⅳ系……88
第66図　Ⅳ系……89
第67図　諸系……90
第68図　弥生時代の土錘……91
第69図　土錘分類模式図……93
第70図　製作法のわかる土錘……94
第71図　大渕遺跡出土土錘(1)……106
第72図　大渕遺跡出土土錘(2)……107
第73図　大渕遺跡出土土錘(3)……108
第74図　大渕遺跡出土土錘(4)……109
第75図　大渕遺跡出土土錘(5)……110
第76図　6C後～7C前の須恵器Rb－S，分布図
……114
第77図　7C前の須恵器のRb－S，分布図……114
第78図　7C後の須恵器のRb－S，分布図……114
第79図　8C後～9C初の須恵器のRb－S，分布図
……115
第80図　10C前の須恵器のRb－S，分布図……115
第81図　11C中の須恵器のRb－S，分布図……115
第82図　大渕遺跡出土須恵器のK－Rb相関図…116
第83図　Fe因子の比較……116
第84図　試料採取位置図……118
第85図　大渕遺跡出土珪藻遺骸写真……123
第86図　弥生時代遺構図……125
第87図　土師器甕細分類……127
第88図　主要遺構軸線方位グラフ……128
第89図　グループ別掘立柱建物……129
第90図　主要遺構変遷図……131

Ⅰ．調査の概要

大渕遺跡は、昭和56年のガス管埋設の立会い調査による須恵器片等の出土によって初めて確認された。当初は北側にある阿弥陀寺遺跡との関連で阿弥陀寺南遺跡と仮称していたが、名古屋環状２号線に伴う昭和58年度の愛知県埋蔵文化財センターの試掘調査によって、阿弥陀寺遺跡とは旧福田川を挟んだ異なる微高地上に立地する古代を中心とする集落であることが判明したため、改めて「大渕遺跡」と命名した。

調査は、昭和58年度の16ケ所400㎡の試掘調査、昭和59年度の東側側道部分1620㎡、昭和60年度の本道・西側側道部分8427㎡と三ケ年にわたって実施された。また、昭和61年度には遺跡西部において福田川整備事業に伴う調査もおこなわれている。なお、以上の調査は全て愛知県教育サービスセンター及び愛知県埋蔵文化財センターによって行われた。

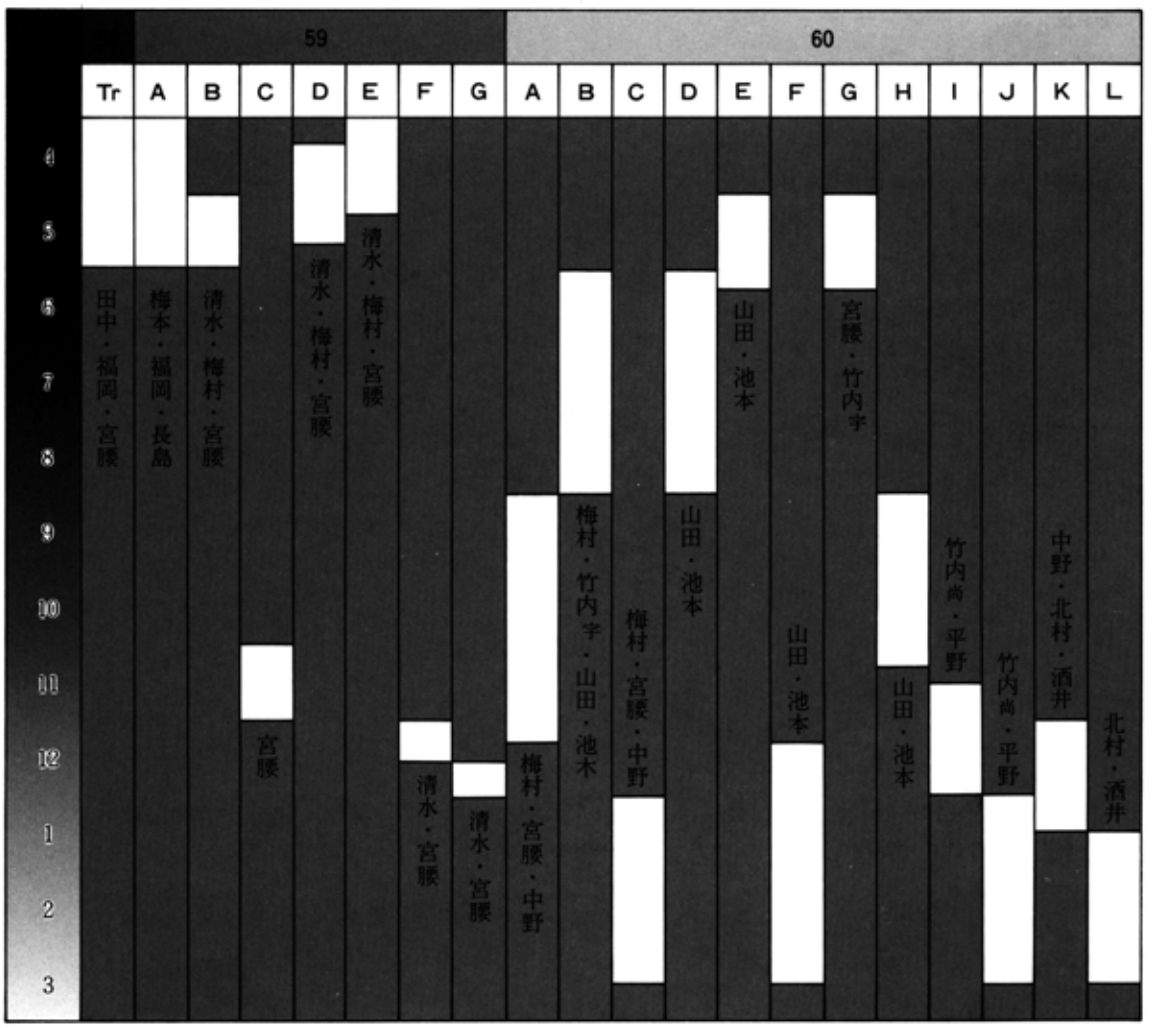
㈶愛知県教育サービスセンター　『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ』1984

㈶愛知県教育サービスセンター　『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』1985

㈶愛知県埋蔵文化財センター　『年報　昭和60年度』1986

㈶愛知県埋蔵文化財センター　『年報　昭和61年度』1987

㈶愛知県埋蔵文化財センター　『大渕遺跡・阿弥陀寺遺跡』1988



第１表　発掘調査工程表

61年度調査区
調査区
A1
B1
C1
F
A2
B2
TP1
A
C2
D
TP2
G
TP3
TP4
E
F
B
TP5
TP6
G
H
C
TP7
TP8
I
J
D
TP9
TP10
K
L
E
TP11
TP12
TP13
TP14
TP15
TP16
昭和58年度
昭和59年度
昭和60年度

第1図　調査区位置図

Ⅱ．位置と環境

位　置　大渕遺跡は、愛知県海部郡甚目寺町に位置する。甚目寺町は濃尾平野中央部のやや南よりにあり、現況は標高２～４ｍのほとんど比高差の無い平坦な低地状の地形を呈している。

立　地　遺跡の立地は、北側に展開する朝日遺跡・廻間遺跡・森南遺跡・阿弥陀寺遺跡同様、東西及び北東から南西に延びる微高地上であり、地山は沖積上部砂層の上部に堆積するシルト層からなっている。この微高地の形成については、五条川の自然堤防と海岸線に沿ってできる浜堤列という二つの見解があり、最北に位置する朝日遺跡が縄文時代後期、他の遺跡も弥生時代中期までには陸地化している。

歴　史　旧石器・縄文時代の遺跡は濃尾平野南部においてはほとんど確認されておらず、朝日遺跡において縄文時代後期前葉のドングリピットが検出されているのみである。

弥生時代においては、前期より始まる東海地方最大級の環濠集落の朝日遺跡をはじめ、旧河道を挟み北接する中～後期の環濠集落である阿弥陀寺遺跡、北西1.7kmにある中～後期の森南遺跡がある。

古墳時代では、集落としては弥生時代末～古墳時代前期にかけての廻間遺跡があり、北西1.2kmに二ツ寺神明社古墳、西方2.8kmに奥津社古墳、廻間遺跡前方後方型低墳丘墓、朝日遺跡・土田遺跡に後期の円墳がみられる。

古墳時代末～平安時代にかけては、稲沢市内に尾張国衙・国分寺・国分尼寺が造営され、甚目寺町内においても白鳳期に法性寺・清林寺等が建立されている。また、清林寺遺跡では礎石建物跡・瓦塔が検出されている。

鎌倉時代～室町時代には尾張低地部全域で大がかりな土地改変が行われているようであり、各遺跡で区画溝が多数確認されており、居住地がみつかっている阿弥陀寺遺跡・森南遺跡、方形土坑で構成される墓域を検出している土田遺跡・朝日遺跡などがある。

第２図　遺跡位置図

1．中島廃寺
2．東畑廃寺
3．尾張国府
4．尾張国分尼寺
5．尾張国分寺
6．正楽寺跡
7．三宅廃寺
7．七ツ寺跡
9．伝法寺廃寺
10．川井薬師堂廃寺
11．御土井廃寺
12．弥勒寺廃寺
13．仁昌寺跡
14．諸桑廃寺
15．奥津社古墳
16．淵高廃寺
17．寺野遺跡
18．篠田廃寺
19．二ツ寺古墳
20．四反畑遺跡
21．森南遺跡
22．清明遺跡
23．法性寺跡
24．大渕遺跡
25．阿弥陀寺遺跡
26．甚目寺
27．清林寺跡
28．土田遺跡
29．廻間遺跡
30．清洲城下町遺跡
31．朝日遺跡

第3図　周辺の主要遺跡

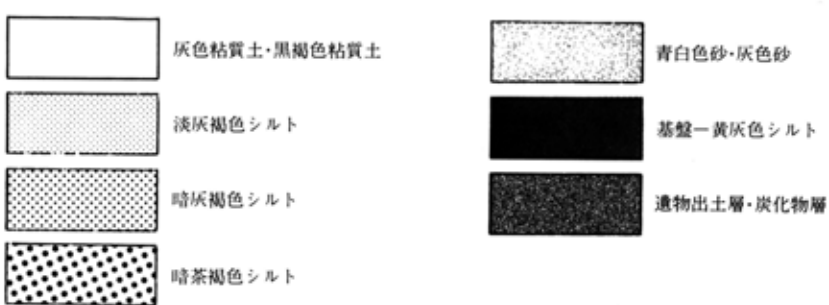
Ⅲ. 遺　構

1．遺構・層序の概要

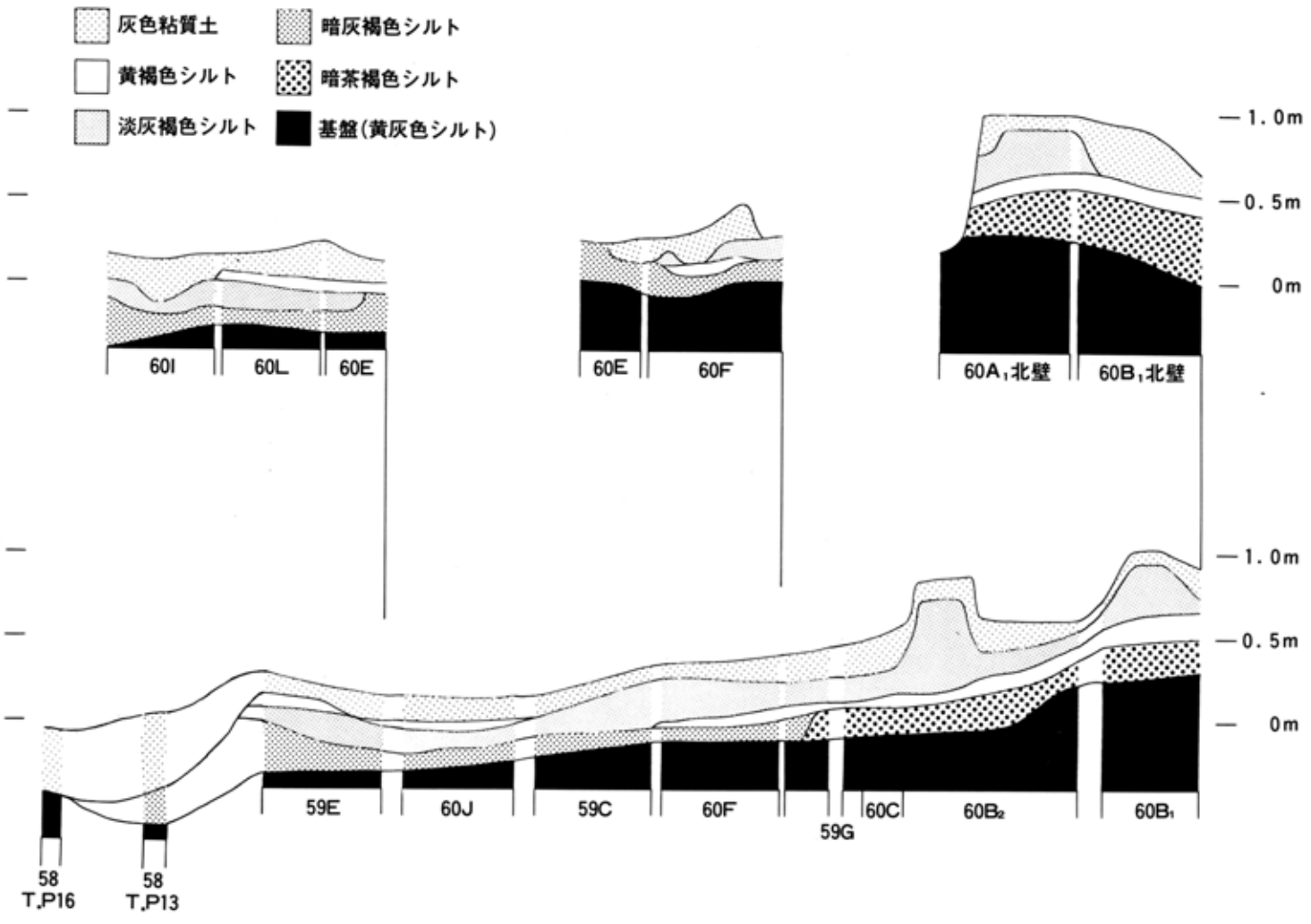
大渕遺跡は基本的に黄灰色シルトが基盤となっており、この基盤が北から南へ１ｍ程度の比高差をもって低くなっている。また、東西方向については、西側にむかってなだらかに基盤が低くなっていくことが、調査区内においても、遺跡中央北より走る道路部分の立会い調査においても確認されており、遺構も希薄となっている。東側についても若干低くなる傾向がみえるが、地形的な面は不明である。北側については、昭和56年～59年にかけての阿弥陀寺遺跡の調査，61年の福田川整備事業関係の大渕遺跡の調査において、旧福田川と思われる谷状の地形があることが認められており、遺跡内最高地である調査区北端のすぐ北側で急激に基盤が落ち込むものと思われる。この谷状の地形については、下限が護岸施設が作られた17世紀前後と想定されるのみで、上限についてははっきりしないが、遺構の分布からみて弥生時代中期においてすでに大渕遺跡と阿弥陀寺遺跡を隔てる地形があったものと考えられる。南側は、調査区南端で基盤が最も低くなっており、名鉄津島線をすぎて再び高くなっている。つまり大きく大渕遺跡の地形をみると、弥生時代～室町時代を通じて北側に谷状の地形をもち、西・南になだらかに落ち込んでいく微高地に遺構が作られているといえよう。

層序は下層より、基盤－黄灰色シルト（８層）、暗茶褐色シルト（７層）、暗灰褐色シルト（５層）、淡灰褐色シルト（３層）、灰色粘質土（１層）の順となっており、暗茶褐色シルトと暗灰褐色シルトの上層、淡灰褐色シルト（各々、６層、４層、２層）の上層に部分的に黄褐色シルトが乗っている。この黄褐色シルトには遺物はほとんど含まれず、下層との攪乱状態を示しており、整地に伴うものかと考えられた。基盤は６０Ａ$_2$区の北側で急な落込みをみせるが、この地形は後世にまで影響を与えているようである。さらに、弥生時代の包含層である暗茶褐色シルトは59Ｇ区の南側で終わるが、これは同期の遺構の分布とも合致する。古墳時代～11世紀にかけての遺物を包含する暗灰褐色シルトと淡灰褐色シルトは非常に似かよっており、場所によっては不可分な場合もあったが、６０Ｆ区などで黄褐色シルトで区分され、上下の層であることが確認された。淡灰褐色シルト上層の黄褐色シルトは、調査区南側でのみ検出されている。灰色粘質土はほぼ全面にみられ、12世紀以降の遺物を包含する。特に、調査区北側では淡灰褐色シルトを削平して凹凸のある地形を作り出しており、現代にまで影響を与えるような改変となっている。

以上のように層序が確認されたため、発掘調査では基盤と暗茶褐色＋黄灰色シルト上面、淡灰褐色シルト＋黄灰色シルト上面でそれぞれ弥生時代、古代、中世の遺構検出を試みたが、古代面と中世面は分かちがたく、結局、下面－弥生時代、上面－古代・中世という２面の検出に終わった。それにあわせて遺構番号も下面、上面別につけることとした。また、挿図の層序の基本的な分類は下記のとうりである。

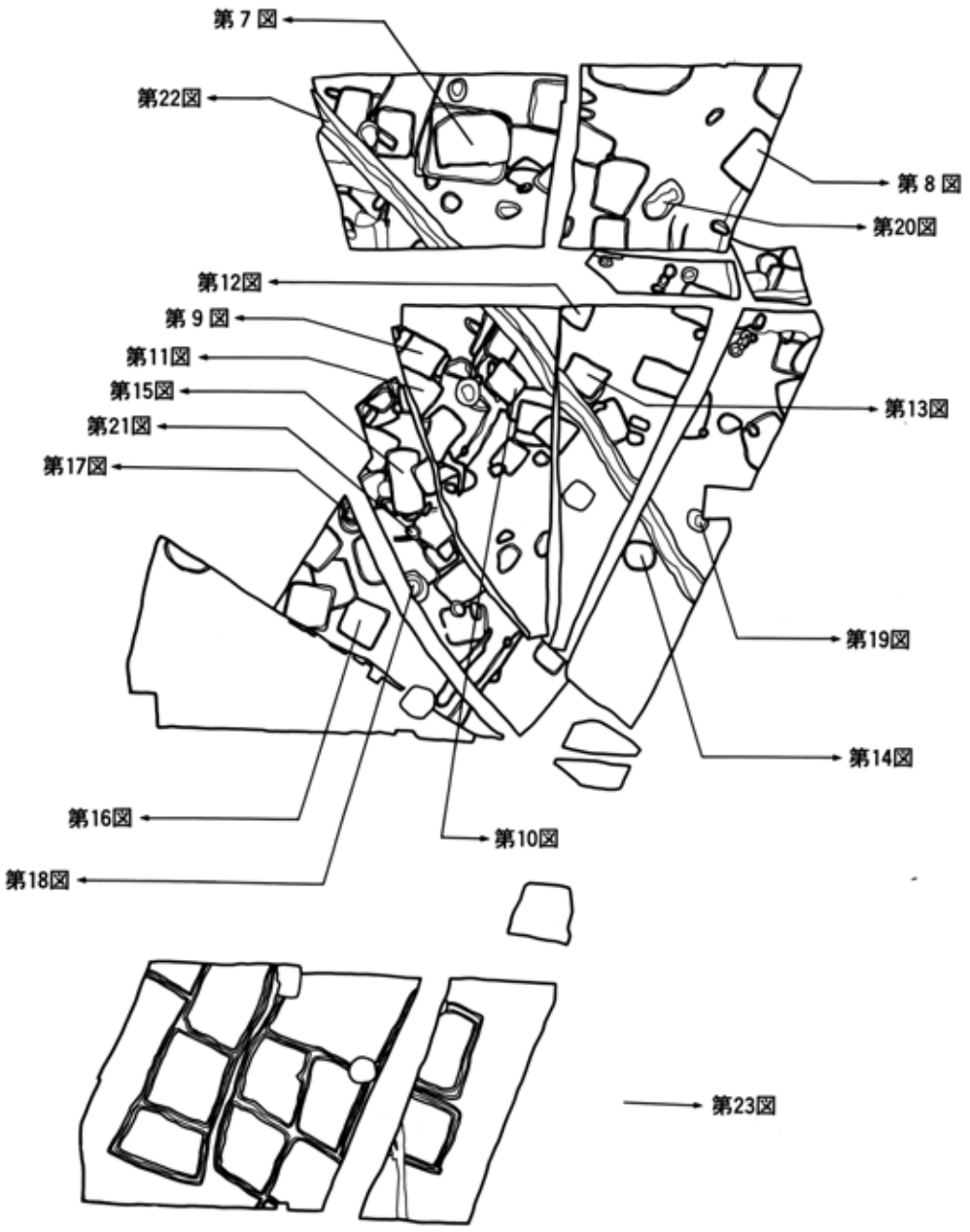


第４図　層名基本図


灰色粘質土
暗灰褐色シルト
黄褐色シルト
暗茶褐色シルト
淡灰褐色シルト
基盤(黄灰色シルト)
1.0m
0.5m
0m
60I
60L
60E
60E
60F
60A₁北壁
60B₁北壁
1.0m
0.5m
0m
59E
60J
59C
60F
59G
60C
60B₂
60B₁
58
T.P16
58
T.P13

第5図　土層模式図

弥生時代遺構――――――――――――――――――――下面



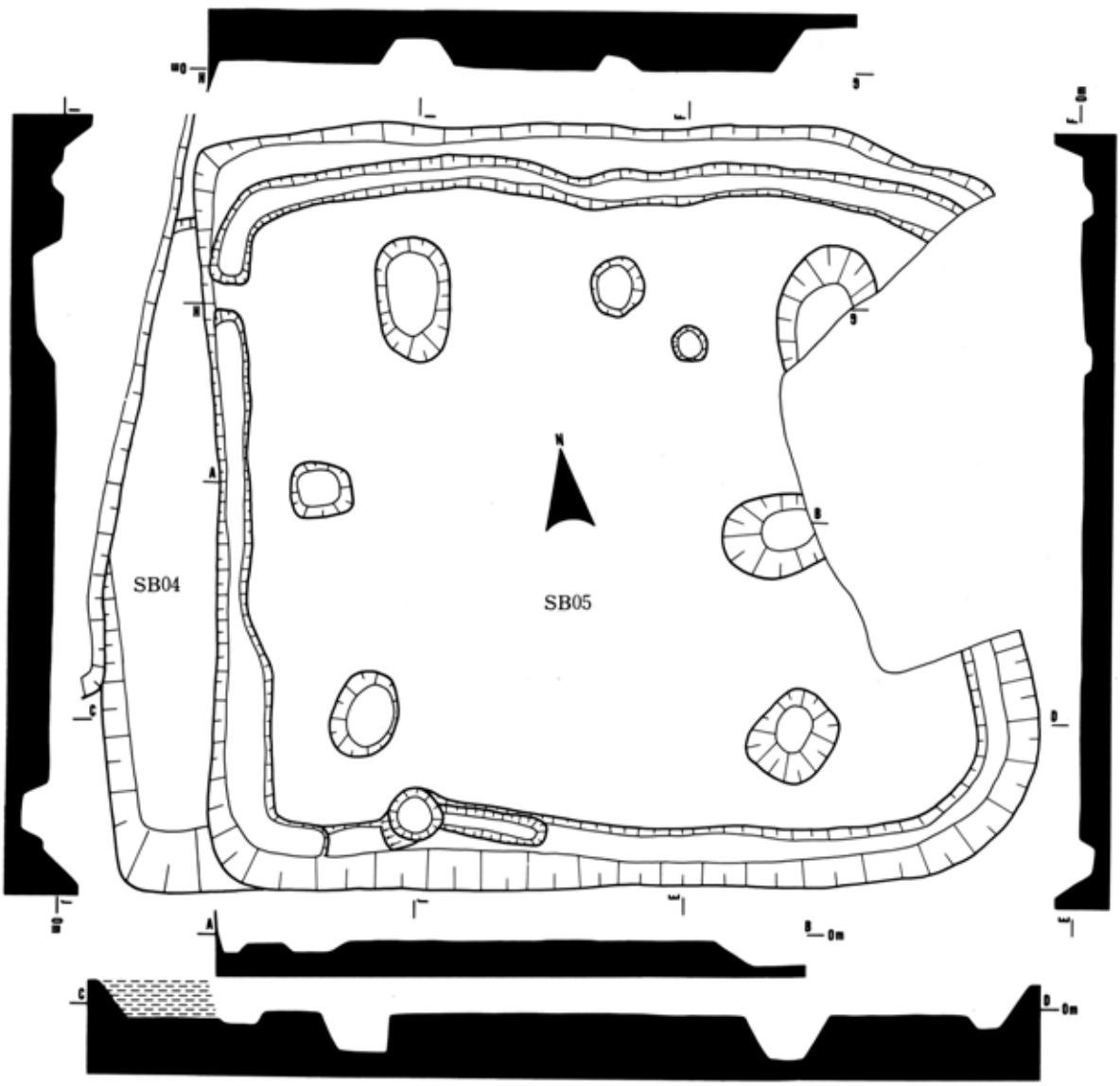
第６図　弥生時代挿図一覧

2．弥生時代――――――――――――――――――――――下　面

ＳＢ（住居）

弥生時代の住居は52軒検出されているが、全て竪穴住居である。住居は、６０A_1と区南と６０A_2北、６０B_1区北、６０A_2区と６０B_2と５９Ａ区の南部分において広場のような住居のない空間があり、その周辺に２～３回の切り合いをもって作られている。６０Ｄ区以南においては、住居の痕跡はまったくみられない。また、中央から北西にかけての住居群には周溝も柱穴もみられないものが多く、住居の掘込みレベルの差が影響しているためかと思われた。

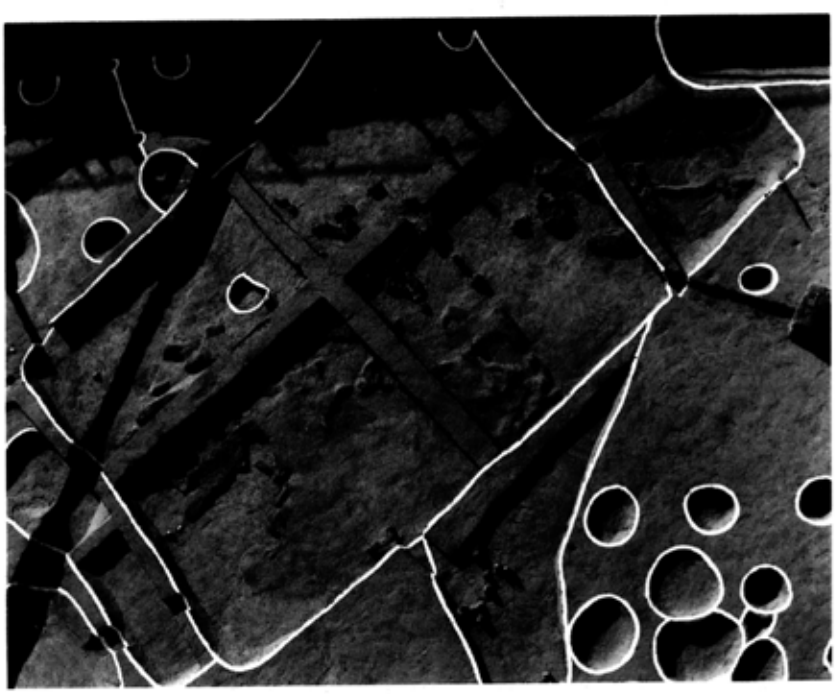
ＳＢ０１―　長径５ｍ・短径3.9ｍを測り、幅30～40㎝・床面より深さ５～10㎝の周溝が住居内を全周する。柱穴は少なくとも４基認められ、南側の中央部のものも候補にあげられる。ま



第７図　ＳＢ04・05（１：40）

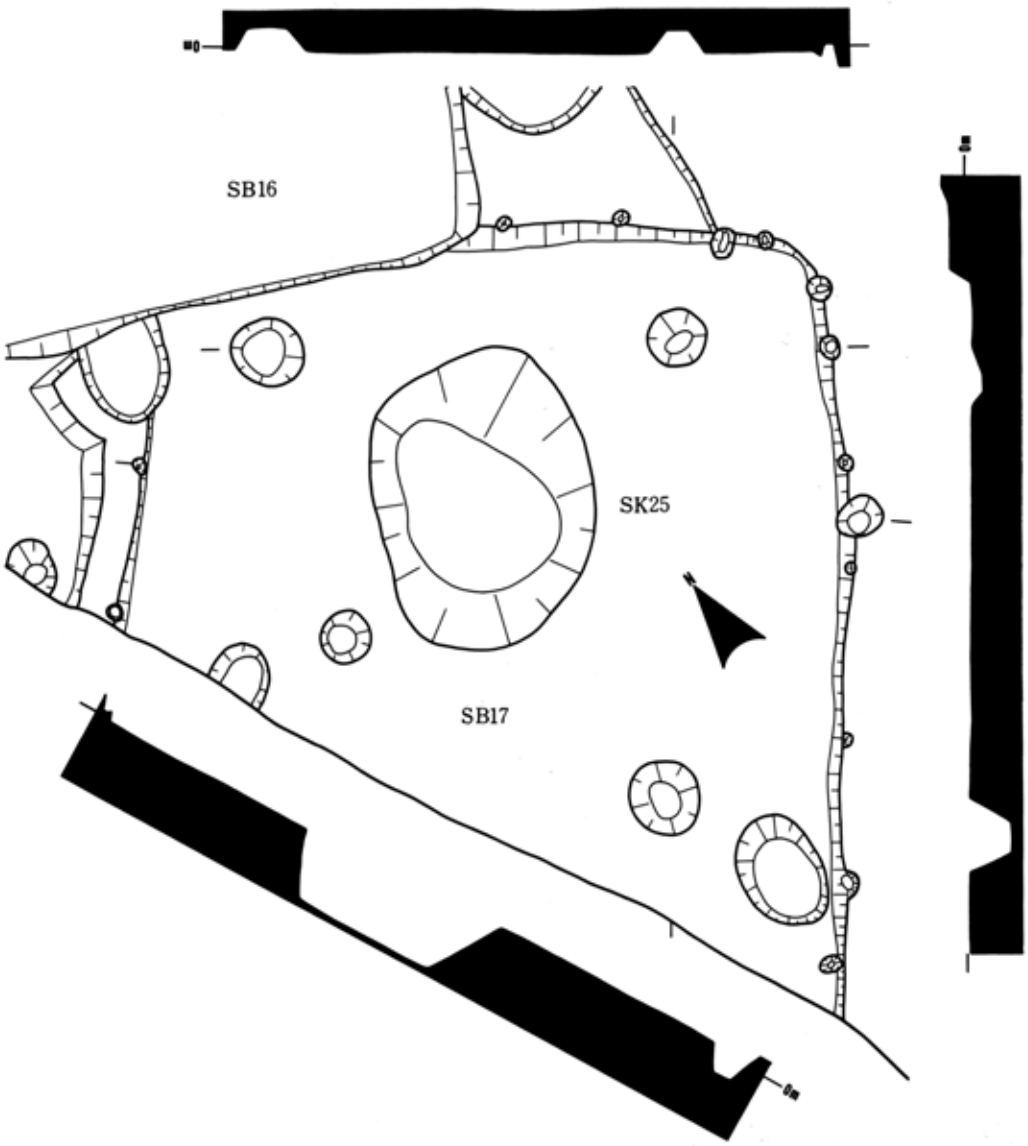
1．暗茶褐色シルト（やや砂質）
2．　〃　（基盤ブロック・炭化物を含む）

第8図　ＳＢ14（1：40）



上：第9図　ＳＢ21～23（南東より）
土器出土状態

左：第10図　ＳＢ16
炭化材出土状態



第11図　ＳＢ17（１：40）

た、掘形の端部には３個の小ピットがみられ、垂木及び支柱痕の可能性がある。ＳＢ０１→ＳＫ０３の順となる。

ＳＢ０２―　長径5.5m・短径4.3mを測り、周溝はみられない。柱穴は４基あるが、北西のもののみやや大きくなっている。ＳＢ０３→ＳＢ０２→ＳＫ０３の順となる。

ＳＢ０３―　当初その規模の大きさから不明落込みとして扱っていたが、その形態より大型竪穴住居として認定した。規模は短径6.2m・長径10m以上を測る。

ＳＢ０４―　ＳＢ０４→ＳＢ０５→ＳＢ０６の順に作られてゆくが、０４と０５については、ほぼ同
ＳＢ０５　規模で同位置・同方位で建てられており、近接した時期の建て替えである可能性がある。
ＳＢ０６　ＳＢ０６は、やや不定形な形状をなし３基の柱穴をもつ。床面上において多量の土器廃棄がみられたが、細片が多い。ＳＢ０５（第７図）は、掘形より床面まで約30cmを測り、竪穴住居中最も壁面のしっかり残っているものである。周溝はほぼ全周するが、北西部で一部途切れる場所がある。柱穴は６基あり、掘形が他の住居のものに比してやや大型であ

り、まん中の２基が僅かに西方にずれている。土器廃棄も床面上で若干みられ、ＳＢ０６と違って大きめの破片が目立った。

ＳＢ１１— 長径6.4m・短径4.3m～5.3mを測る。形態は不定形な台形状を示しており、４基の柱穴も方形をなす位置ではなく、壁に沿うように不安定に作られている。

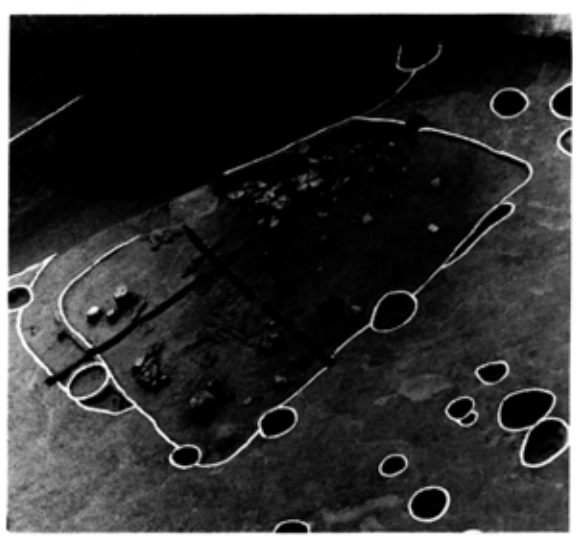
ＳＢ１４— 床面上においてまとまった炭化材と部分的に焼土が出土した（第８図）。北東から南西方向にある太めの部材は、サブトレンチの掘削によりほとんど失われたが、その位置からみて棟木と思われる。さらに、それに直行するように出土した太めの部材については、梁の可能性が考えられ、中央に向かって放射状に出土した部材は垂木及び支柱になるものであろう。また、住居掘形にそって検出された小ピットについても垂木・支柱の痕跡と思われる。柱穴は３個検出されたが、それに伴う部材については不明である。数個体の土器が南西部において出土したが、全て炭化材の上部からあり、床面で出土したものは数少ない。

ＳＢ１６— 北西側に拡張が認められる。まとまった炭化材の出土があり、棟木・垂木の可能性のあるものも若干みられたが、ＳＢ１４ほどはっきりとはしていない。土層の観察と炭化材の分布により、拡張時点での焼失であると考えられた。

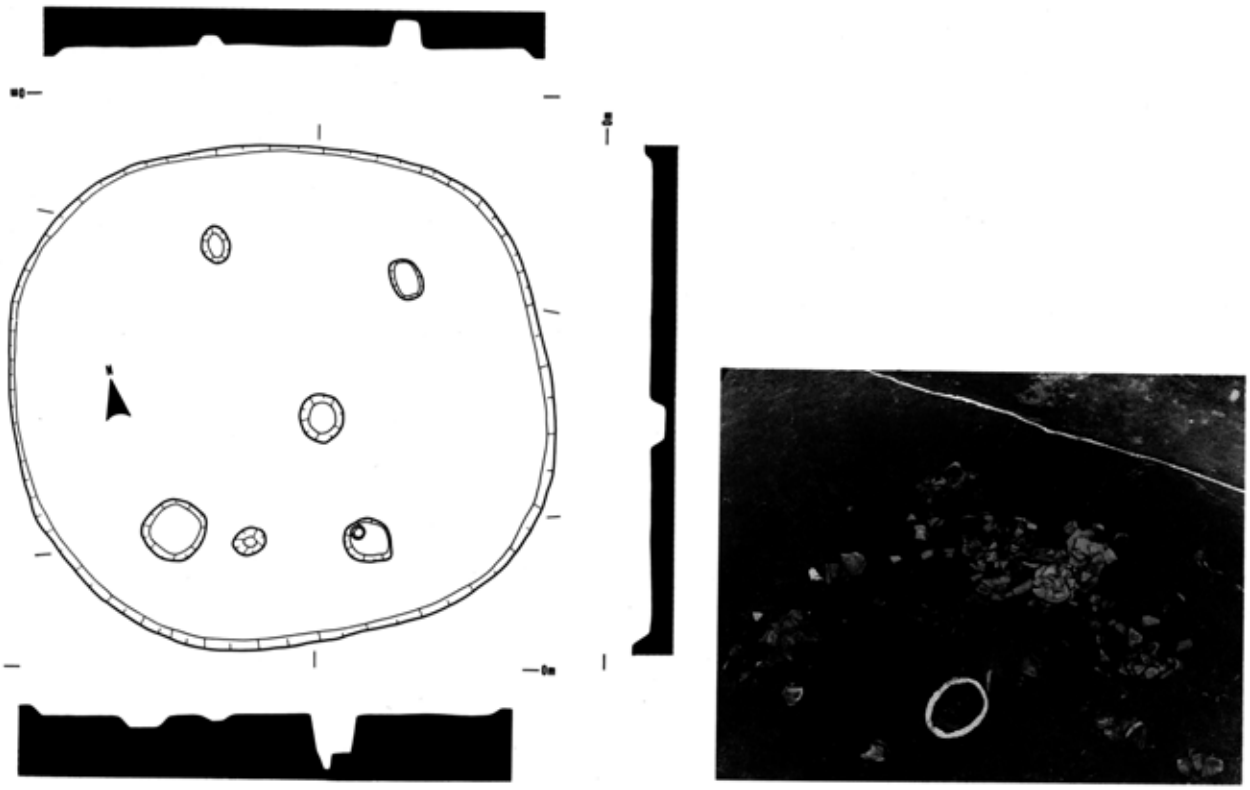
ＳＢ１７— 短径4.8mを測り、ＳＢ１６に切られている（第11図）。北西にも住居状の落込みがあるが、住居であるかどうか、確定できなかった。掘形である壁面上端から斜辺に、垂木及び支柱になるものと思われる小ピットが13基検出された。中央の大型土坑（ＳＫ２５）については、土層断面の観察により住居に伴う可能性が高く、埋土より多量の炭化物を出土している。柱穴はやや北東によった位置で４基確認されている。

ＳＢ２１— ＳＢ２１・２２・２３（第９・10図）とも長径約４～５ｍ、短径約３～４ｍの中程度規
ＳＢ２２ 模の住居であり、２２と２３には各々建て替えの痕跡がみられ、ＳＢ２２～２２建て替え
ＳＢ２３ →ＳＢ２３と、ＳＢ２２建て替え→ＳＢ２１の順となる。３軒ともにほとんど破片の状態であったが、床面上で多量の土器廃棄がみられた。それぞれ、柱穴・周溝とも検出されなかった。

第12図　ＳＢ26（西より）



第13図　ＳＢ27（西より）



第14図　ＳＢ35（１：40）
写真は上層土器出土状態（南から）

ＳＢ２５―　長径3.4m～短径2.8mを測る小型の住居である。遺物の出土はほとんどみられず、柱穴が３基確認されている。

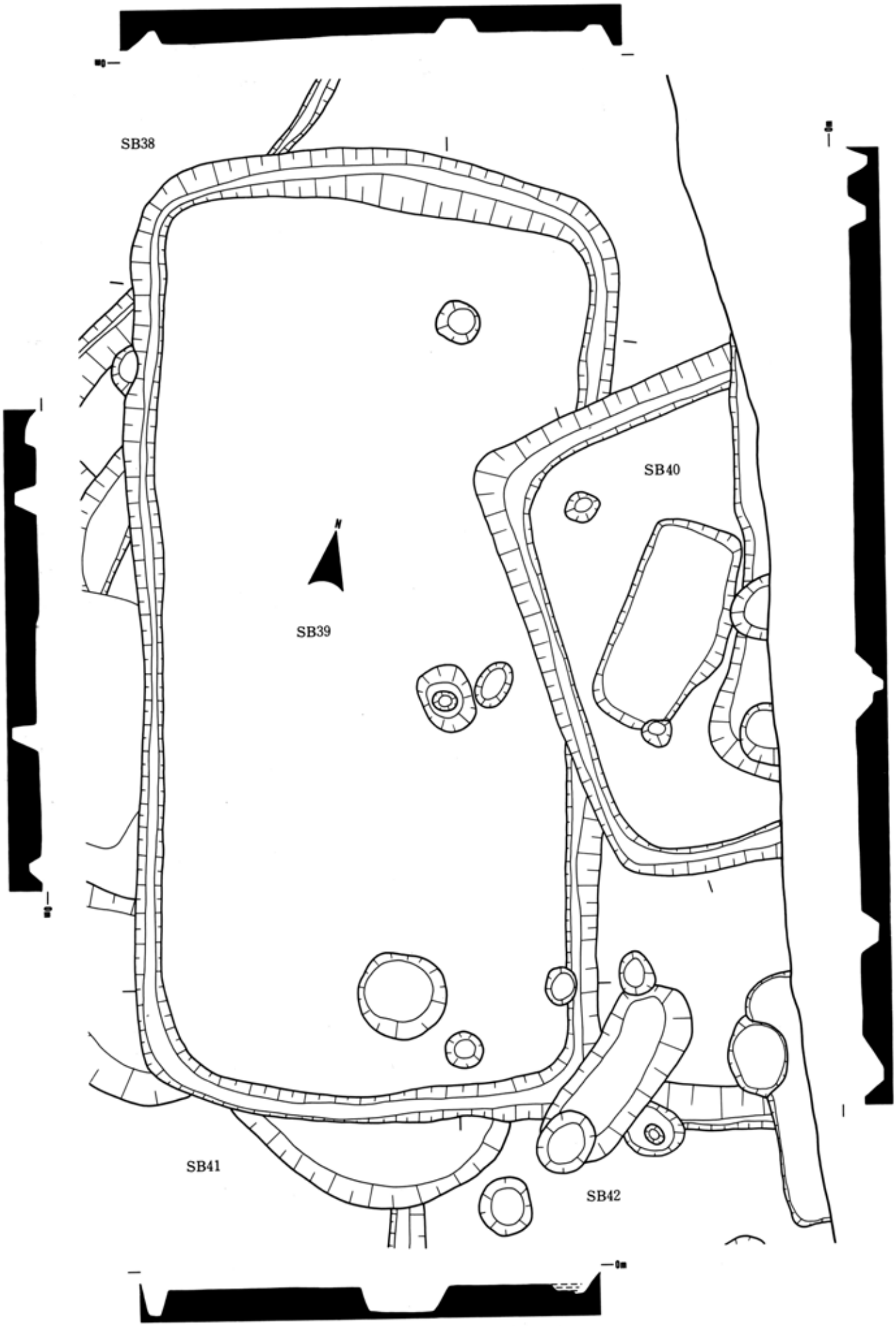
ＳＢ２６―　ＳＢ２１～ＳＢ２３と同規模・形態の住居であり、同じく床面上より破片状態の土器群
ＳＢ２７　が出土している。特に、ＳＢ２７では土器片間に若干の炭化物が見られた。

ＳＢ２９　短径3.3m・長径5.4m以上を測る長方形の住居で、ＳＢ０３やＳＢ３９と同形態をしているが、規模はそれらに比して小さい。柱穴等は確認できなかった。

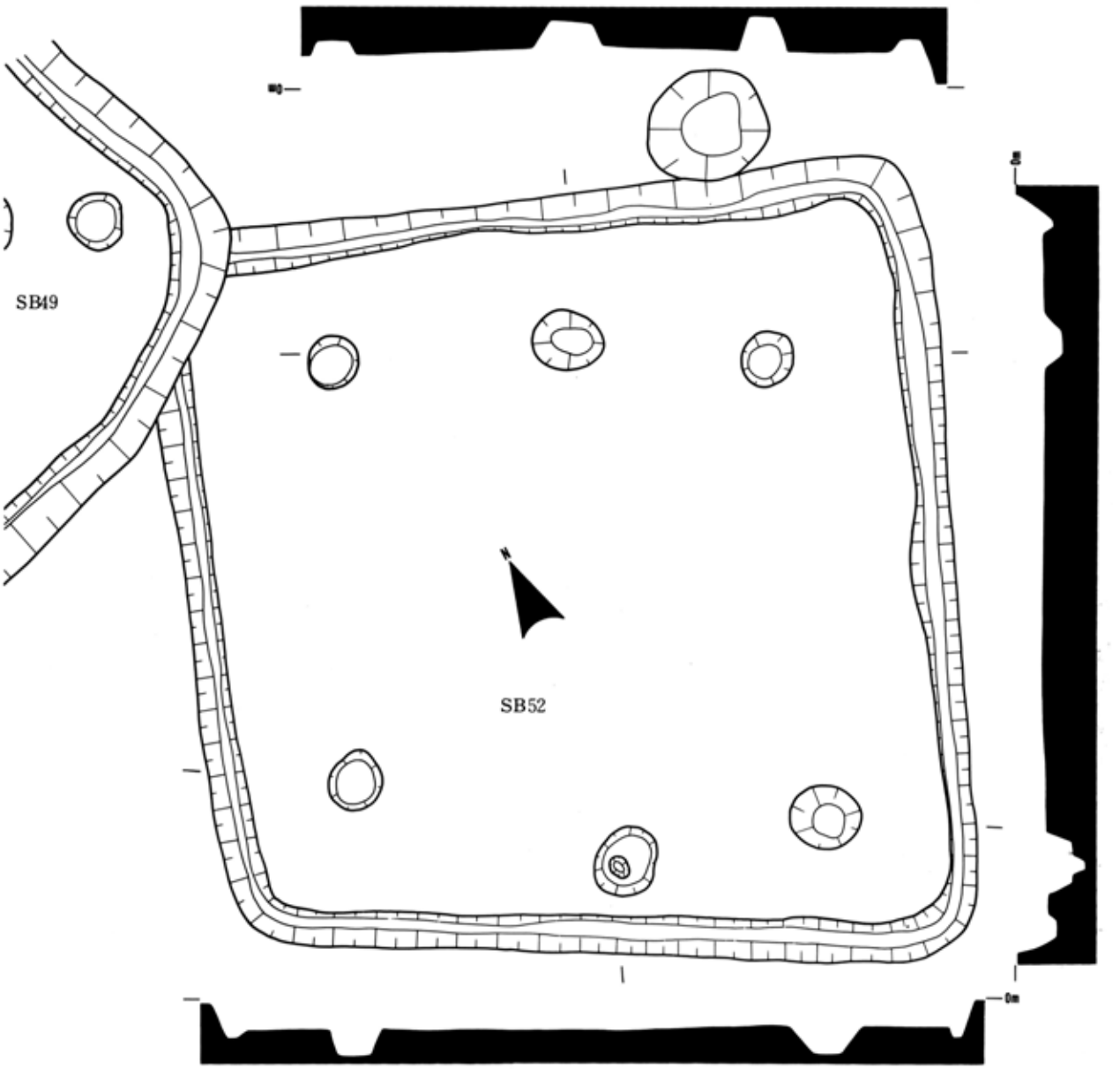
ＳＢ３３―　周辺の住居群の中で唯一明瞭に周溝が確認されたものであり、東側の南よりで１ケ所途切れる部分がある。長径は約5.3mで、やや隅丸方形を呈する。

ＳＢ３５―　長径3.5m、短径3.2mを測る隅丸か円形に近い住居であり（第12図）、埋土上層より多量のまとまった土器群が出土している。これらは、当初上位面で土器廃棄ＳＸ０１として扱っており、土層断面でもはっきりしたことは分からなかったが、廃棄の範囲がＳＢ３５と一致するため、住居廃絶後の投棄と考えた。構築されている所は、他の住居と切り合いながら重層的につくられていく場所ではなく、離れた地点に位置している。柱穴はやや不定形に４基検出され、中央よりにも同規模のものが１基みられた。

ＳＢ３６―　長径4.2m、短径3.0m～3.7mのやや台形状をなす住居である。周溝は全周確認された



第15図　ＳＢ39（１：40）



第16図　ＳＢ52（１：40）

が、柱穴については不明であった。

ＳＢ３９―　長径7.7m、短径4.8mを測る、長径が短径に比して非常に長い長方形の大型住居である（第13図）。 形態はＳＢ０３と類似する。周溝は全周し、柱穴は東側のみに３基検出された。ＳＢ３８→ＳＢ３９、ＳＢ４１→ＳＢ３９、ＳＢ３９→ＳＢ４０の順になる。

ＳＢ４４―　ＳＢ４４は検出された住居中最小のものであり、長径・短径とも3.3mを測る。周溝は

ＳＢ４７　全周するものと思われ、ＳＢ４３→ＳＢ４４→ＳＢ４２→ＳＢ４１の順となる。ＳＢ４７もＳＢ４４と同規模・形態のものである。

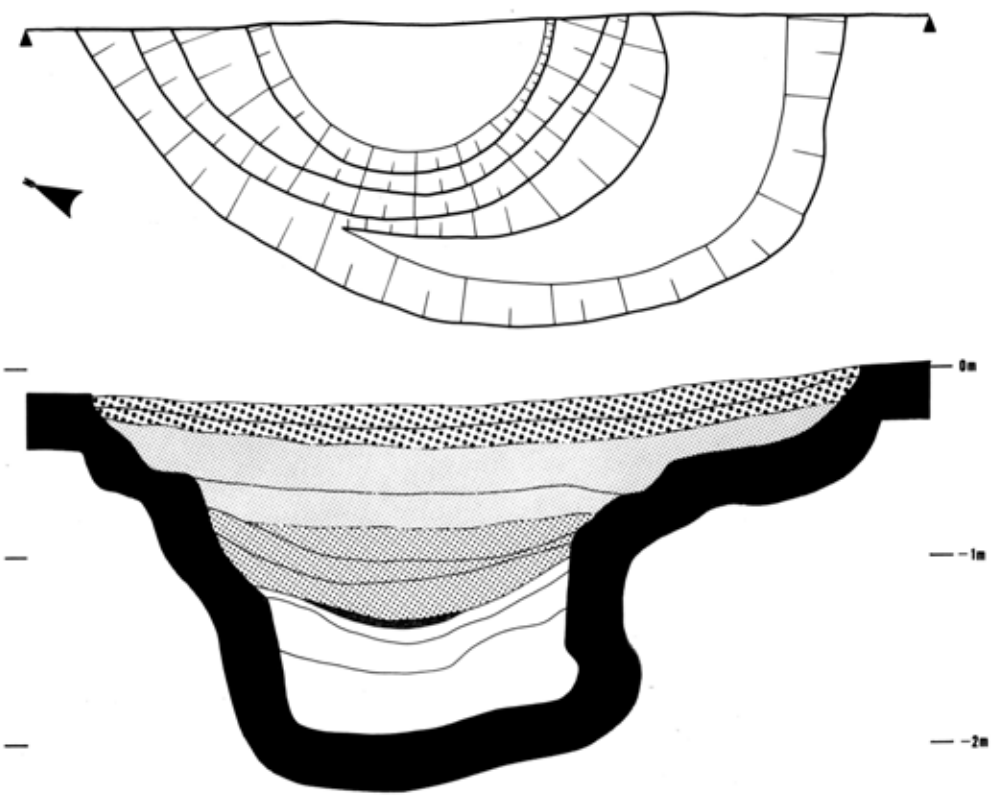
ＳＢ５２―　住居群の南端に位置するもので、６基の柱穴を持つ（第14図）。柱穴の内中央の２基、特に南側のものは外方向に張り出している。周溝は全周する。

ＳＥ（井戸）

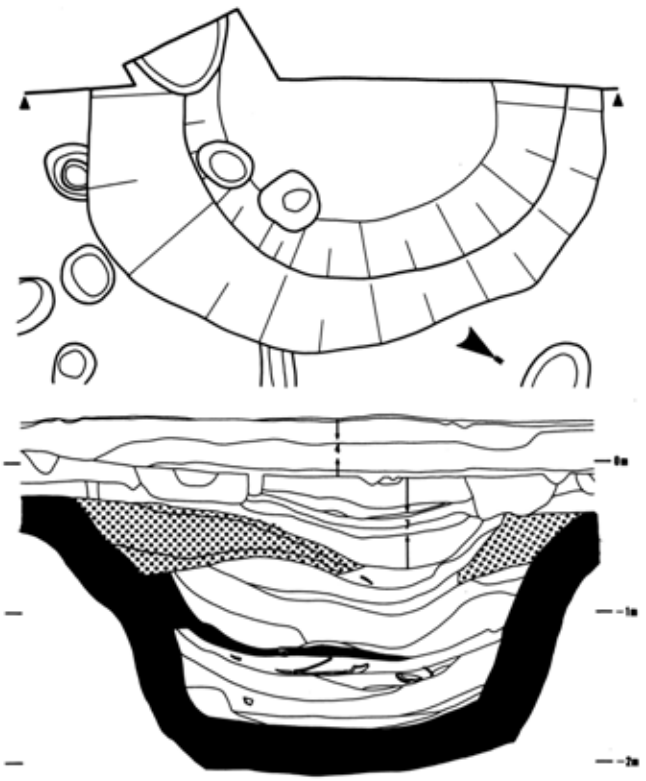
総数３基確認された。井戸枠等の施設の出土がみられなかったが、大型の土坑で、下端が砂層に達しており、上端が開くロート状の落込みを示すもののうち、二要素をもつものを井戸と認定した。掘削された場所は、弥生時代の遺構がみられる地域でもやや低い地点にあたる南部に集中している。

ＳＥ０１－　６０Ｃ$_3$区の北隅で検出されたため、１／２程度しか調査できなかった（第17図）。そのため、水道管のため未調査であった部分を挟んだＣ$_2$区に広がる深さ３～５㎝の浅い不定形な落込みが、上層でつながるかどうかは不明であった。壁は幾段かになる階段状に掘削されており、南側の上部ではやや大きめの平坦面が作られている。埋土は、下層に水平堆積する灰黒色及び灰色粘土があり、その上の窪み状の部分に炭化物と自然木が堆積し、さらにその上に暗灰褐色シルト・淡灰褐色シルトが水平堆積している。遺物は暗灰褐色シルト上部より若干量出土しているのみである。

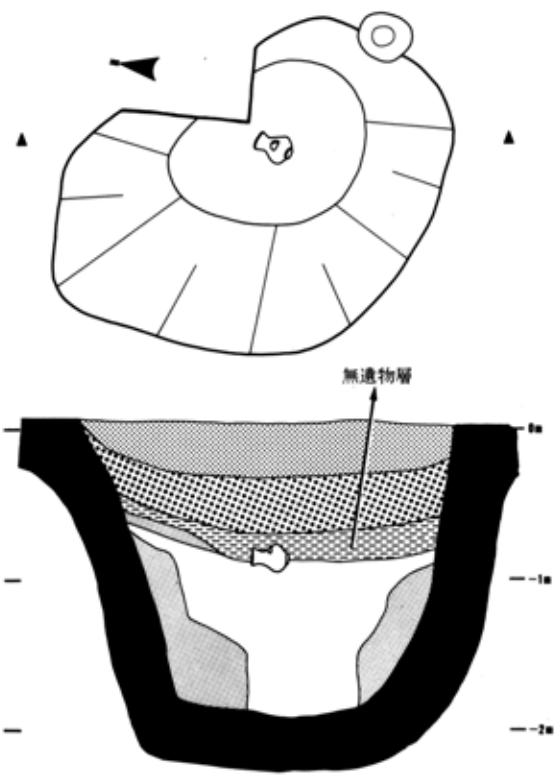
ＳＥ０２－　６０Ｃ$_2$区の南西壁沿いで検出したため、ＳＥ０１と同様１／２程度しか調査できなかった（第18図）。断面形は、上部でやや開く台形を呈している。埋土は、下層が黒褐色粘土、斜めにはいる炭化物層を間に挟んで青灰色粘土、暗茶褐色シルトが堆積する。ただ、この埋土中の粘土は粘度が低く、褐色シルト及び暗茶褐色シルトをブロック状に多く



第17図　ＳＥ01（１：40）



第18図　ＳＥ02（１：50）



第19図　ＳＥ03（１：50）

含んでいた。堆積状況は、下層下部は水平であるが、それより上の層はＳＥ０１と違って上部より土が順次流れ込んだような状態をみせている。遺物のほとんどは下層の上部、炭化物層のすぐ下の地点で自然木の木片と共に出土している。

ＳＥ０３

５９Ａ区の中央部東端で検出されたため（第19図）、全体の１／５程度は隣接する民家の土台の下になり、未調査のまま終わってしまった。また、下層については、湧水のために調査が困難をきわめた。埋土は、下層の両側に淡灰褐色シルトが二段からなる階段状に堆積しており、その中に灰色粘土（暗灰褐色シルトブロックが多く混入する）がロート状に堆積する。この灰色粘土は、下部の垂直に落ちるあたりで上下二層に分かれる可能性があったが、上述の理由で確認し得なかった。また、その上層には淡灰褐色シルト、暗灰褐色シルト（第19図の層名中「無遺物層」としているもの、炭化物を多量に混入する）、暗茶褐色シルト、暗灰褐色シルトの順にほぼ水平堆積している。

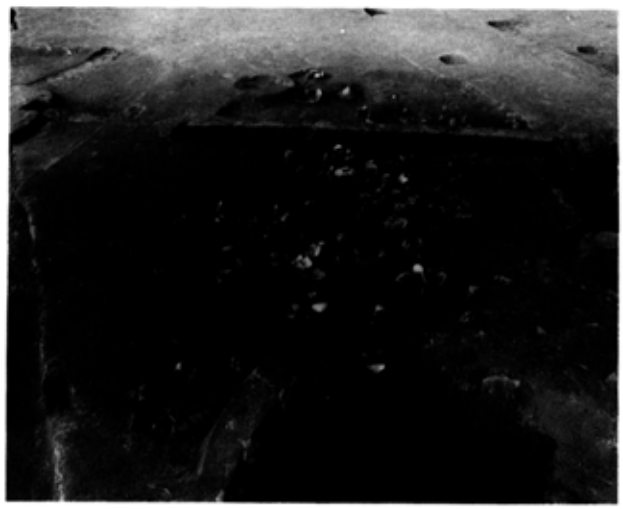
遺物は、上下層に分かれて出土しており、暗茶褐色シルト層より出土したものを上層遺物、灰色粘土層より出土したものを下層遺物として取り扱った。この両層の間に炭化物を含む暗灰褐色シルト層がはいっており、この層の下端で灰色粘土層の上端に半分埋まった状態で円窓付土器が横倒しになって出土した。同レベル付近での出土はこれ１点のみであり、埋没しつつある井戸に対する最終的な祭祀に関係するものかと思われ、炭化物を含む層が堆積した後に、新たな土器廃棄が行われている。

ＳＫ（土坑）

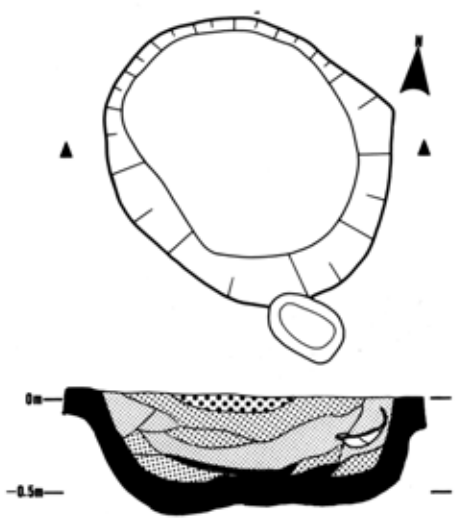
ＳＫ０３－　長径3.2m・短径2.5m・深さ30㎝の不定形な卵型を呈するもので、暗茶褐色シルトが埋土となっている。遺物群は当初包含層(暗茶褐色シルト)中で検出され、伴う遺構が不明であったが、土層観察の結果ＳＫ０３の最上層に廃棄されたものであることが確認された。

ＳＫ１０－　現長11.6m・深さ７㎝の下端に向かってゆるやかに傾斜する大型の土坑である。竪穴住居である可能性も考えられる。埋土は暗茶褐色シルトで、穿孔された円形土製品（甕体部）が出土している。

ＳＫ１３－　長径5.0m・短径2.8m・深さ40㎝を測る。下端は凹凸のある不安定な形状をなし、上端も全体に不定形な方形である。ＳＫ０３と同様に埋土の暗茶褐色シルト(第20図)の上部で土器群が出土している。



第20図　ＳＫ13　土器出土状態（南から）

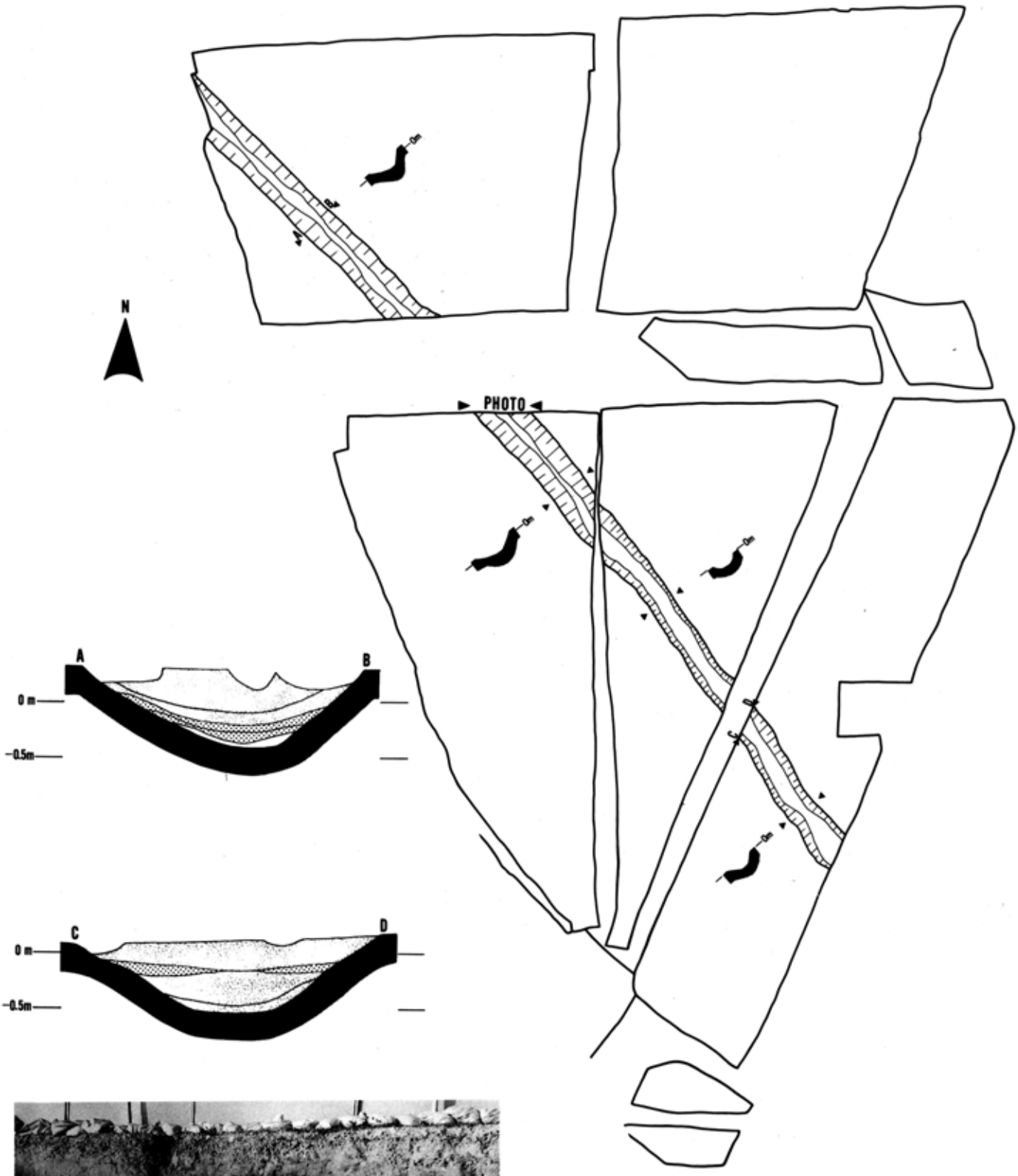


第21図　ＳＫ47（１：40）

ＳＫ４７－　弥生時代の土坑中最も炭化物の層が明瞭にみられたもので（第21図)、底面直上に炭化物層には焼土ブロックが多く含まれていた。埋土は両側からシルトが流れ込んだ状態となっており、壁際より甕１個体が出土している。

ＳＤ（溝）

ＳＤ０１－　調査区を北西から南東にかけて横断するように走る、幅２～３ｍ・深さ50～80㎝の溝である（第22図)、断面は、北西側でＶ及び台形、南西側で台形及びＵ字形を示す。埋土は、部分的に最下層や間層にシルト層がみられたが、ほとんどが砂（中～細砂）であり、水流があったことを示している。ＳＤ０１は、弥生時代中期末としたその他の全て遺構を切って掘削されており、遺物の大多数が中期のものであったが、中・上層の砂層より破片ではあるが弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が僅かに出土しており、少なくともその時期まで水流があり溝としての機能をもっていたものと考えたい。



第22図　ＳＤ01（１：40）

※　写真は60Ａ$_2$区北壁

ＳＸ（不明遺構）

ＳＸ０１－　弥生時代の居住地域から若干下がった低い場所にあたる６０Ｆ区・５９Ｂ区より検出された、溝で区画された方形の部分を全てＳＸ０１（第23図）と呼ぶこととする。

数片の土師質土器が溝内から出土したのみで、遺物はほとんどみられなかった。そのため、当初これらの調査区では弥生時代に属する遺構が無いことから、古墳時代後期遺構のものであろうと考えたが、当該区にある全ての遺構に切られることや、古墳時代以降の地割とすれば掘立柱建物と重複し、地割として問題を残すこととなり、それ以前に掘削されたものと考えたほうがよいという結論に達した。そのため、この遺構の時期としては弥生時代中期～古墳時代中期までの長い時間が充てられる。

溝は、幅30～70cm・深さ30～50cmを測り、断面はＵ字形をなす。全体に基盤とよく似た暗黄褐色シルトの均一な埋土で、水流の痕跡はみられなかった。また、溝と溝の交差部分についても精査したが、明瞭な切り合い関係は認められず、同時に掘削されたものと考えられた。基盤と類似した埋土であったため、厳密なものとは言い難いが、各々の溝底レベルを第２表に示した。これによれば、全体に北側が高くなることと、溝交差部よりその間の中央付近が深くなる傾向がみられることが窺える。Ａ～Ｋとした方形区画は、約７～９ｍの方形及び長方形をなし、北側にはさらに大きな区画が存在する。また、Ｉの南にももう一区画が想定できる。

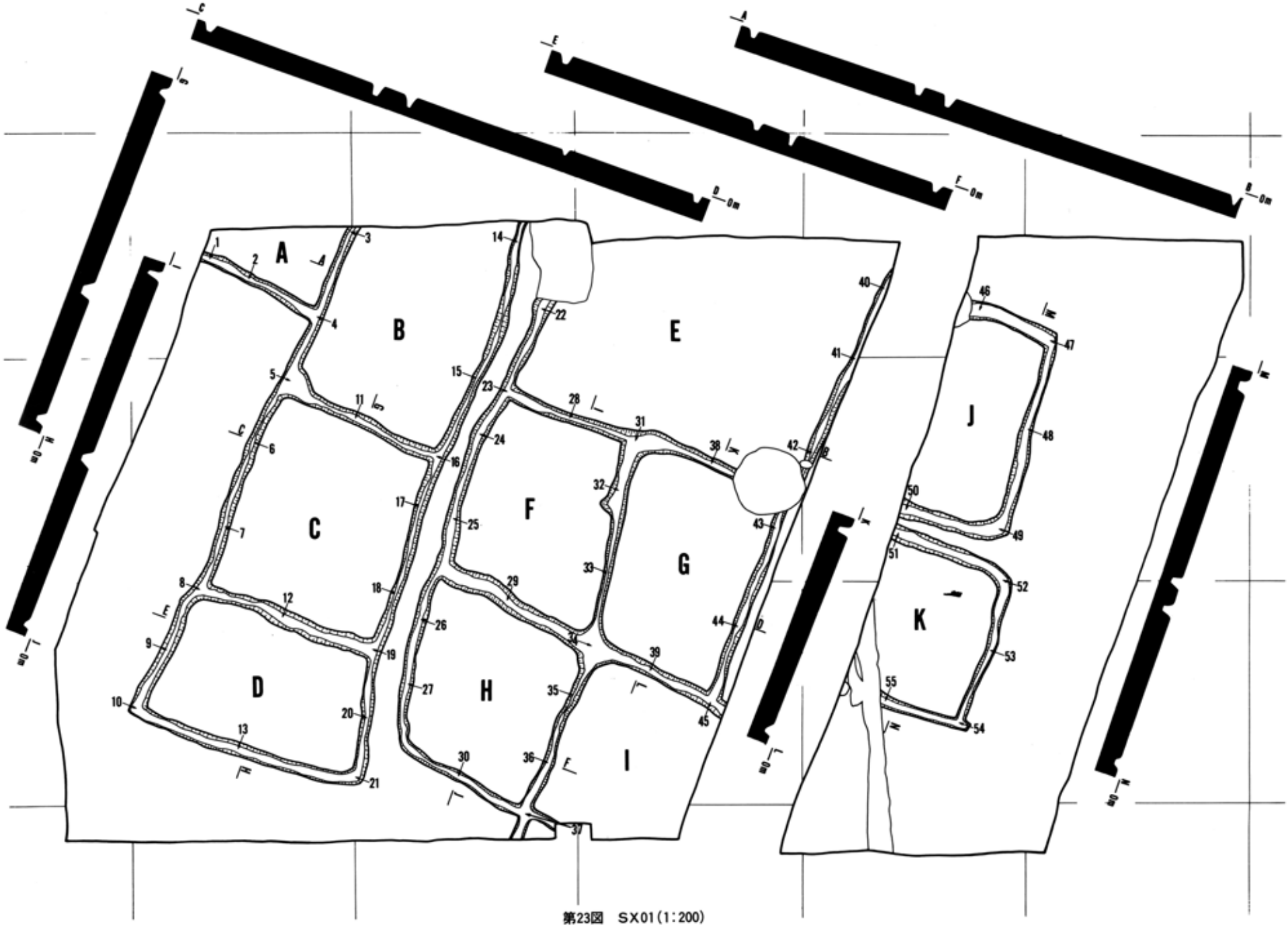
番号	レベル	番号	レベル	番号	レベル	地区	東　西	南　北	レ　ベ　ル
1	－21	21	－25	41	－18	A	—	—	－８　～　－11
2	－20	22	－30	42	－30	B	760	—	－８　～　－12
3	－23	23	－28	43	－29	C	810	910	－６　～　－16
4	－21	24	－35	44	－16	D	930	580	－８　～　－13
5	－28	25	－34	45	－24	E	1,320	—	－８　～　－14
6	－28	26	－30	46	－28	F	700	860	－５　～　－11
7	－30	27	－32	47	－31	G	640	920	－５　～　－９
8	－26	28	－35	48	－37	H	710	760	－９　～　－12
9	－28	29	－30	49	－30	I	—	780	－７　～　－14
10	－27	30	－23	50	－27	J	—	910	－７　～　－16
11	－21	31	－25	51	－25	K	—	685	－１　～　－８
12	－30	32	－23	52	－28				
13	－26	33	－21	53	－20				
14	－22	34	－26	54	－17				
15	－38	35	－35	55	－22				
16	－34	36	－24						
17	－35	37	－20						
18	－30	38	－34						
19	－28	39	－28						
20	－26	40	－16						

※　数値はcmである。

※　各地区の東西は北西－南東、南北が北東－南西をさす。

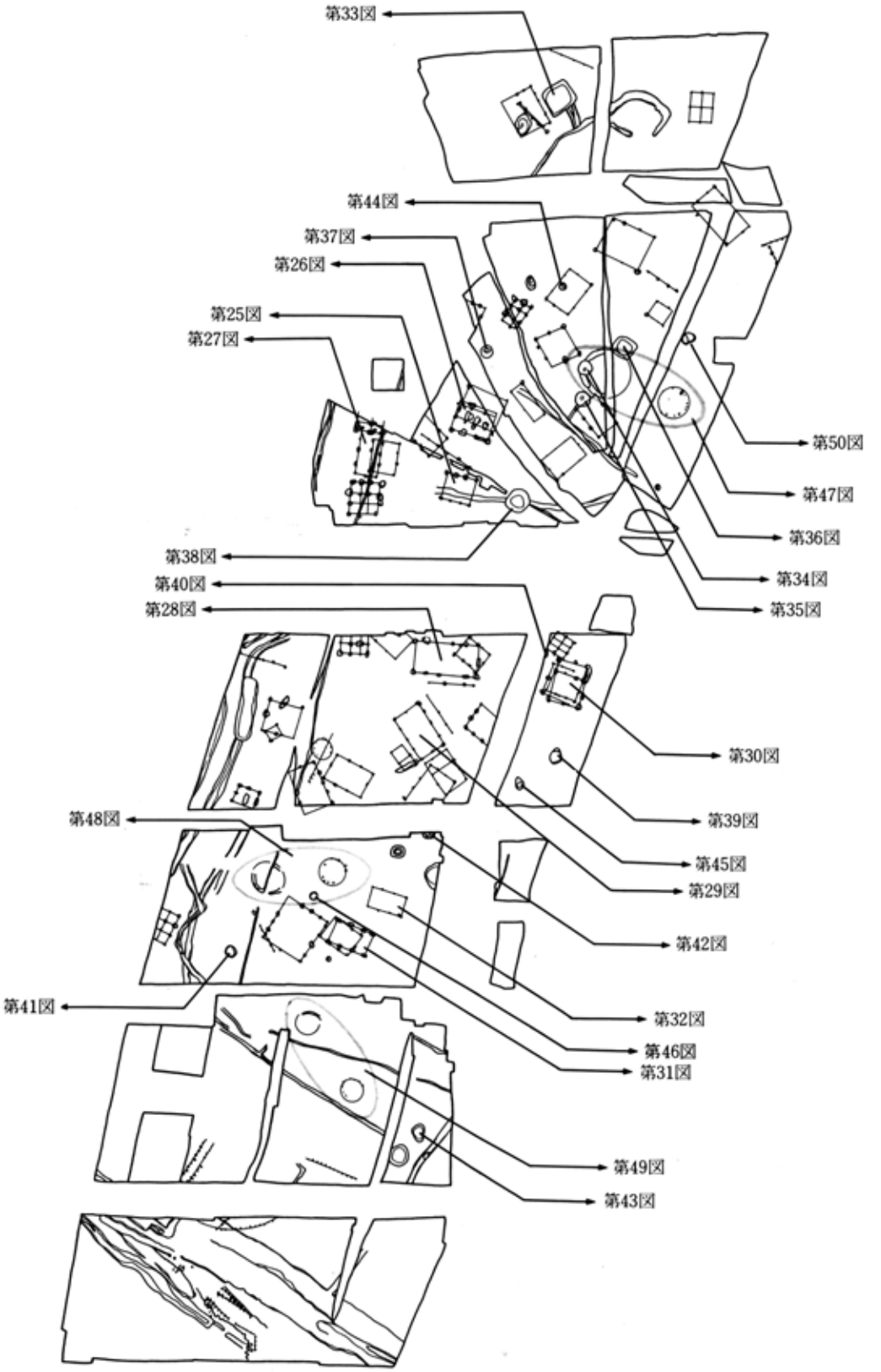
※　溝で囲まれた方形の区画を11に分け、各々の規模を計測した。計測値は方形区画側の下端間で求めた。

第２表　ＳＸ01　計　測　表



第23図　SX01(1:200)

古墳時代後期～平安時代中期遺構――――――上面



第24図　古墳時代後期～平安時代中期挿図一覧

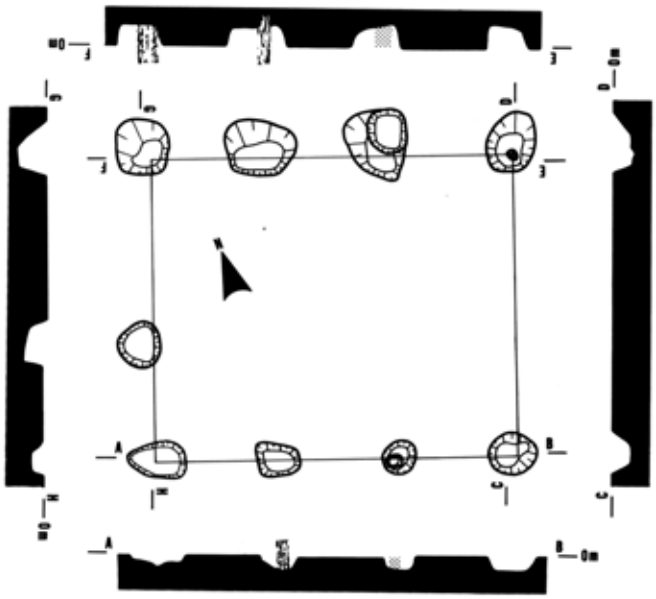
３．古墳時代後期～平安時代中期――――――――――――上　面

ＳＢ（住居），

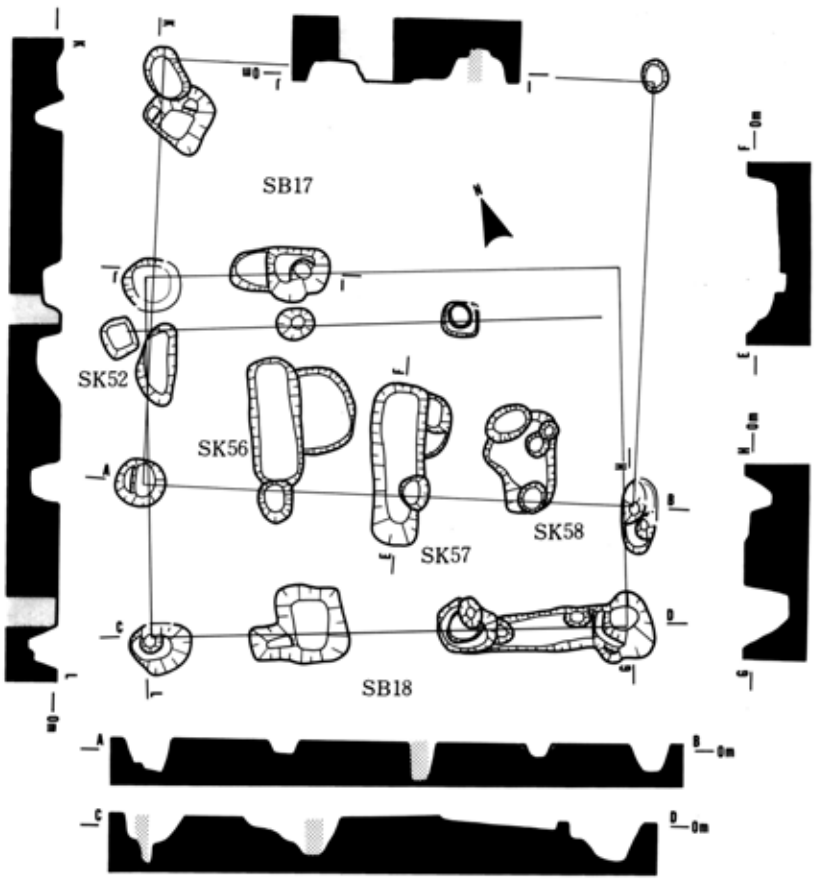
ＳＡ（柵列）として番号をふったものの中で、掘立柱建物に関連すると思われるピット列については、ここで扱う。

ＳＢ０１―　桁行４間または５間×梁間２間以上となる。桁行が法形の掘形をもつＳＥ０１と同方向をむき、同遺構との関連が考えられた。

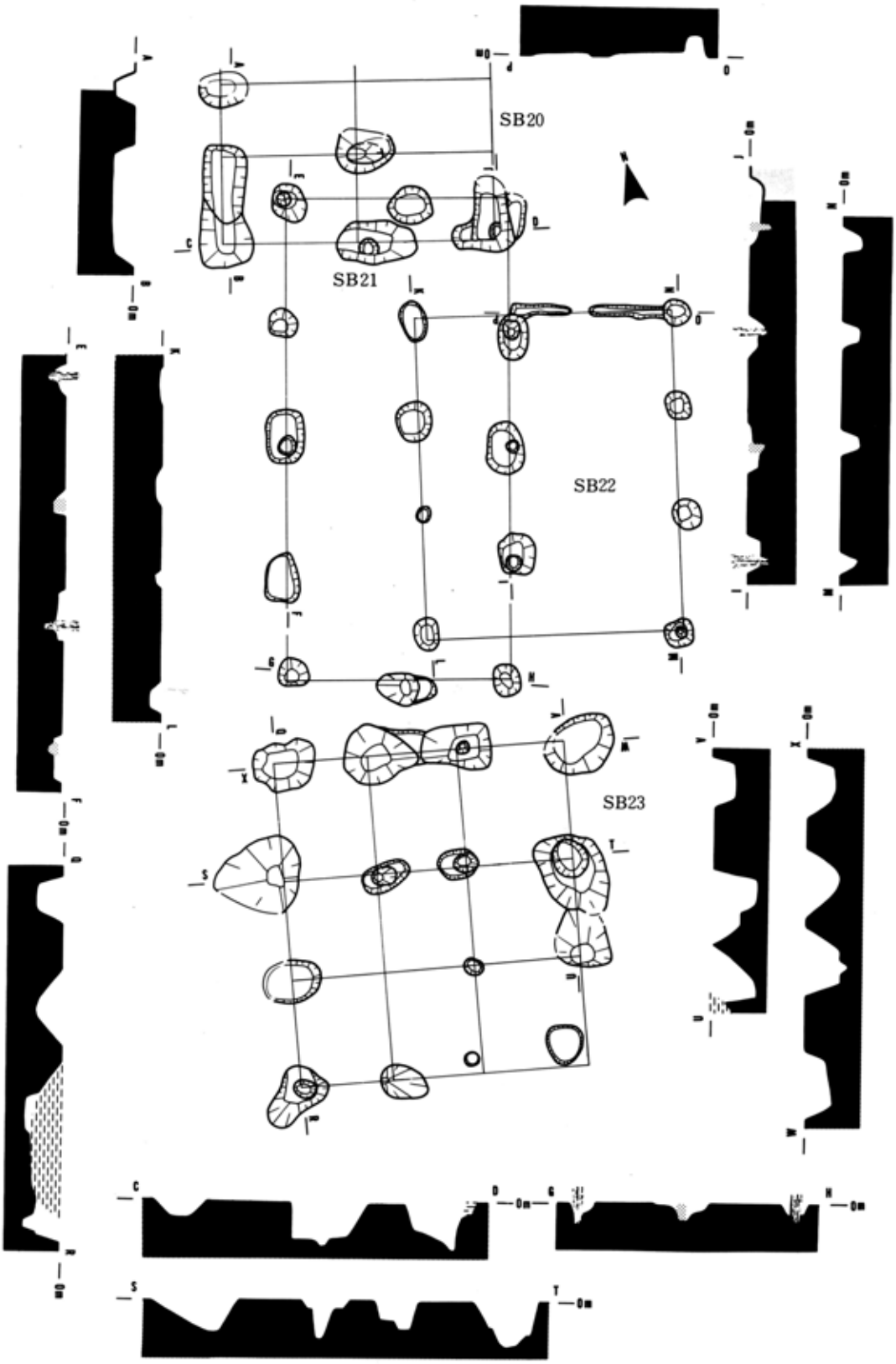
ＳＢ０２―　他の遺構と切り合うことなしに検出された２間×２間の総柱建物であるが、全ての柱穴が20～30㎝と他の総柱建物のそれと比べて、ずいぶん規模の小さなものになっている。



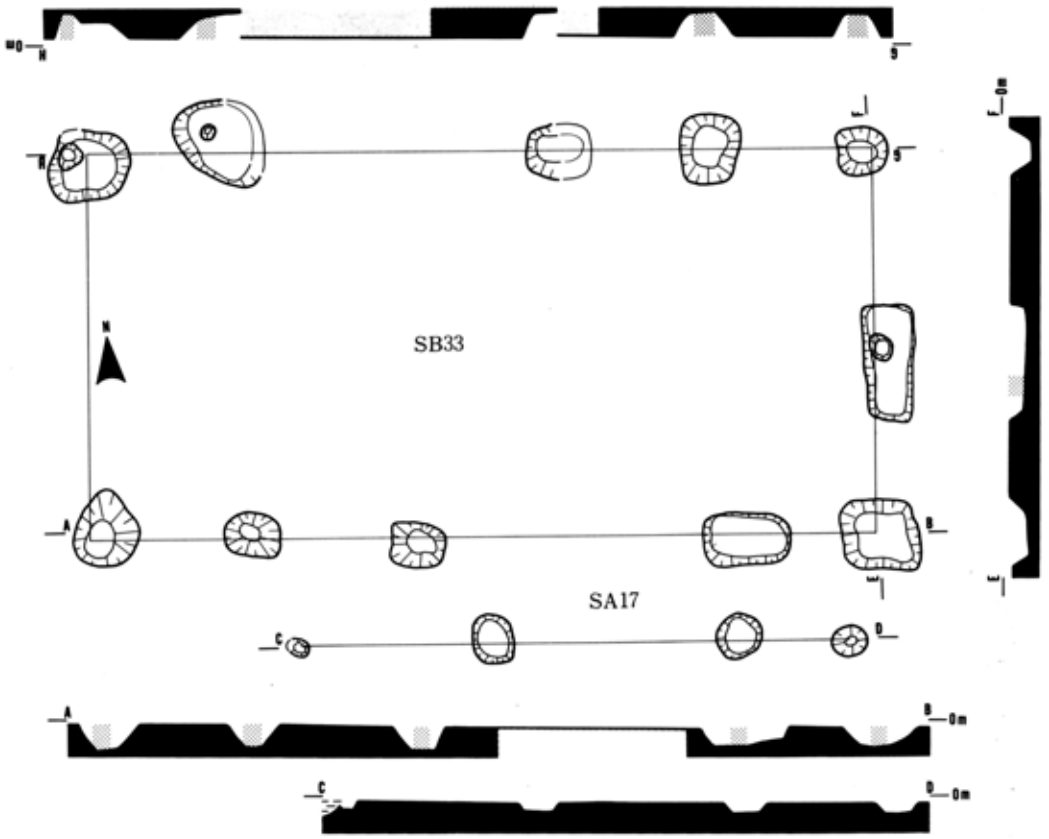
第25図　ＳＢ２４（１：40）



第26図　ＳＢ１７・ＳＢ１８（１：40）



第27図　ＳＢ２０・ＳＢ２１・ＳＢ２２・ＳＢ２３（１：40）



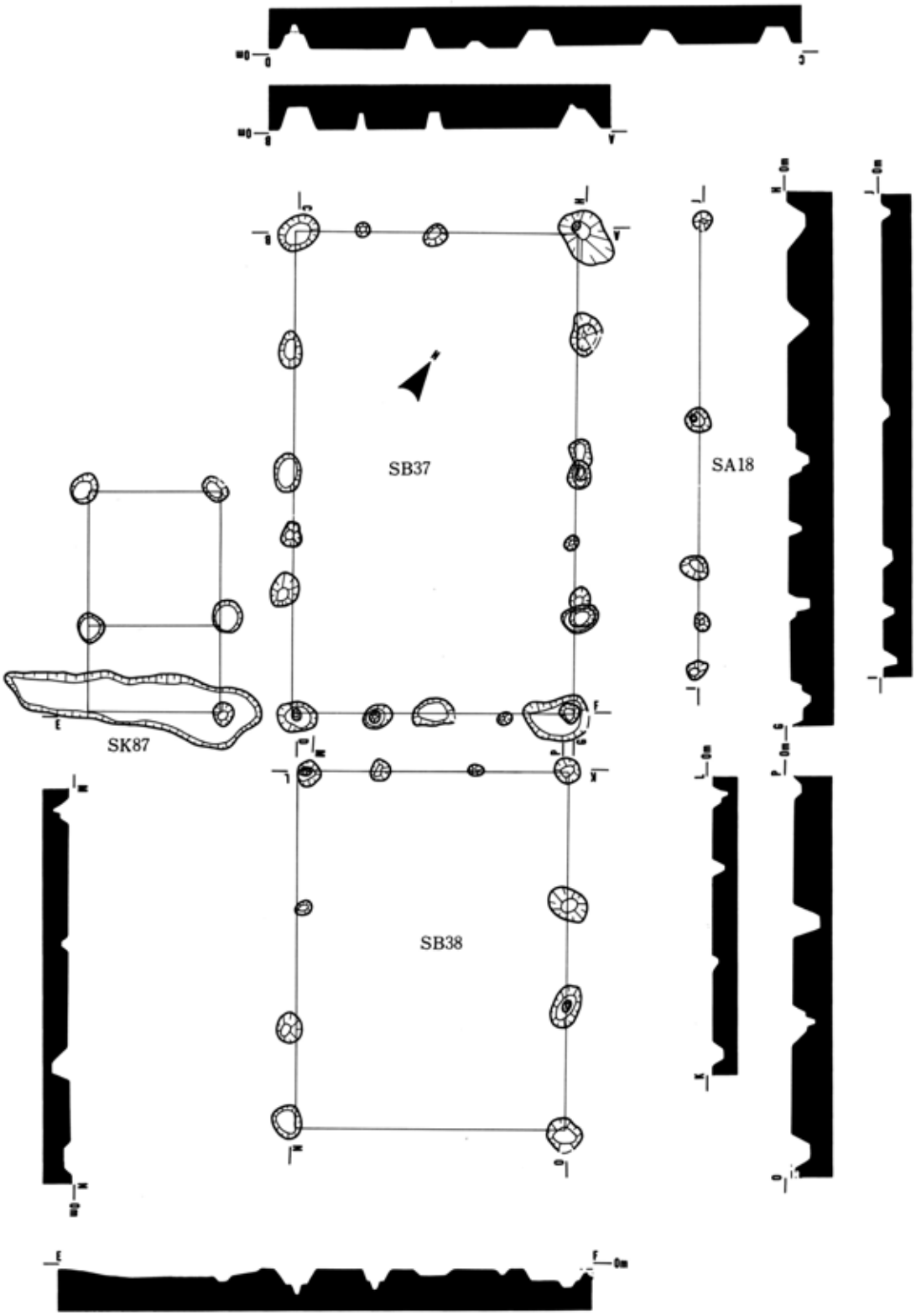
第28図　ＳＢ３３・ＳＡ１７（１：40）

ＳＢ１７－　ＳＢ１７は桁行４間×梁間１間で、これとほぼ重なるようにあるＳＢ１８も桁行３間×
ＳＢ１８　梁間１間で梁間側が狭くなっている（第26図）。ＳＢ１８の中央において斜方向に４基（？）並ぶ長楕円形の土坑ＳＫ５２・ＳＫ５６～５８は、ＳＢ１７の南側桁行にあたる柱穴に切られている。ＳＢ１８との関係は不明である。また、ＳＢ１８の北側桁行の内側には、若干ずれながらも並行して走るピット列があり、建て替えの可能性が考えられた。

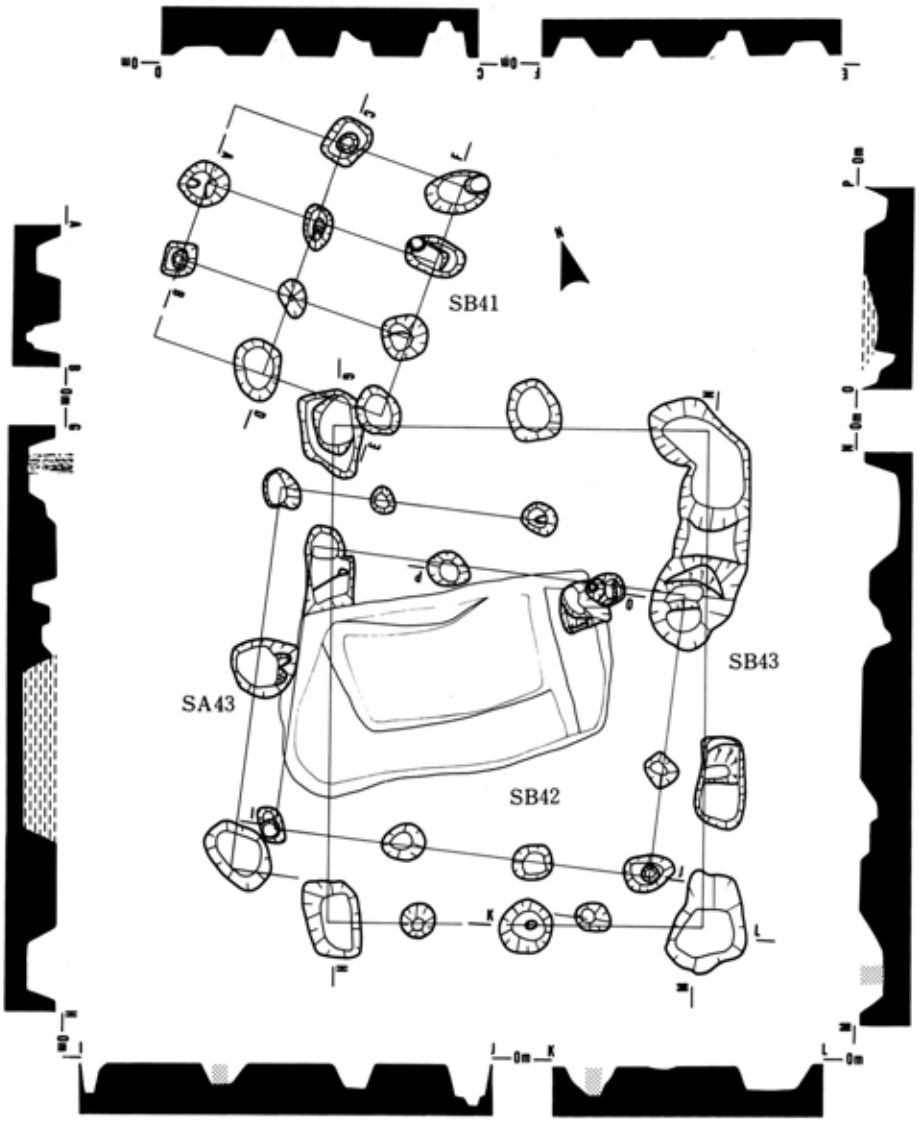
ＳＢ２０－　ＳＢ２０は東西方向２間の総柱建物で、西側の柱穴列において南→北の順に掘形が掘られ
ＳＢ２１　ていったことが観察された。ＳＢ２１は桁行４間×梁間２間の桁行方向に長い掘立柱建物
ＳＢ２２　で、ＳＢ２０に切られている。断片ながら柱部材は６基の柱穴に残っており、その他の全てに土
ＳＢ２３　層観察で柱痕が確認できた。ＳＢ２２は桁行３間×梁間１間を測り、北側梁間の柱間をつなぐように幅６㎝・深さ６㎝の溝が走っている。ＳＢ２３は、南側が後世の掘削で削られているが、３間×３間の今回の調査の中では最も大きい総柱建物となる。（第27図）

ＳＢ２４－　桁行３間×梁間１間（？）の掘立柱建物で、桁行の北側の２基、南側の１基において断片的に柱部材が残存する。梁間は西側のピットを使えば３間となるが、他は検出されていない。（第25図）

ＳＢ２７－　桁行２間×梁間２間と小規模なものであるが、ＳＢ１８でみられたような長楕円・長方形の土坑ＳＫ７８が中央にあり、南東側中央の柱穴の長さも他に比して長くなっており、総柱建物の可能性も考えられた。



第29図　ＳＢ３７・ＳＢ３８・ＳＡ１８（１：40）



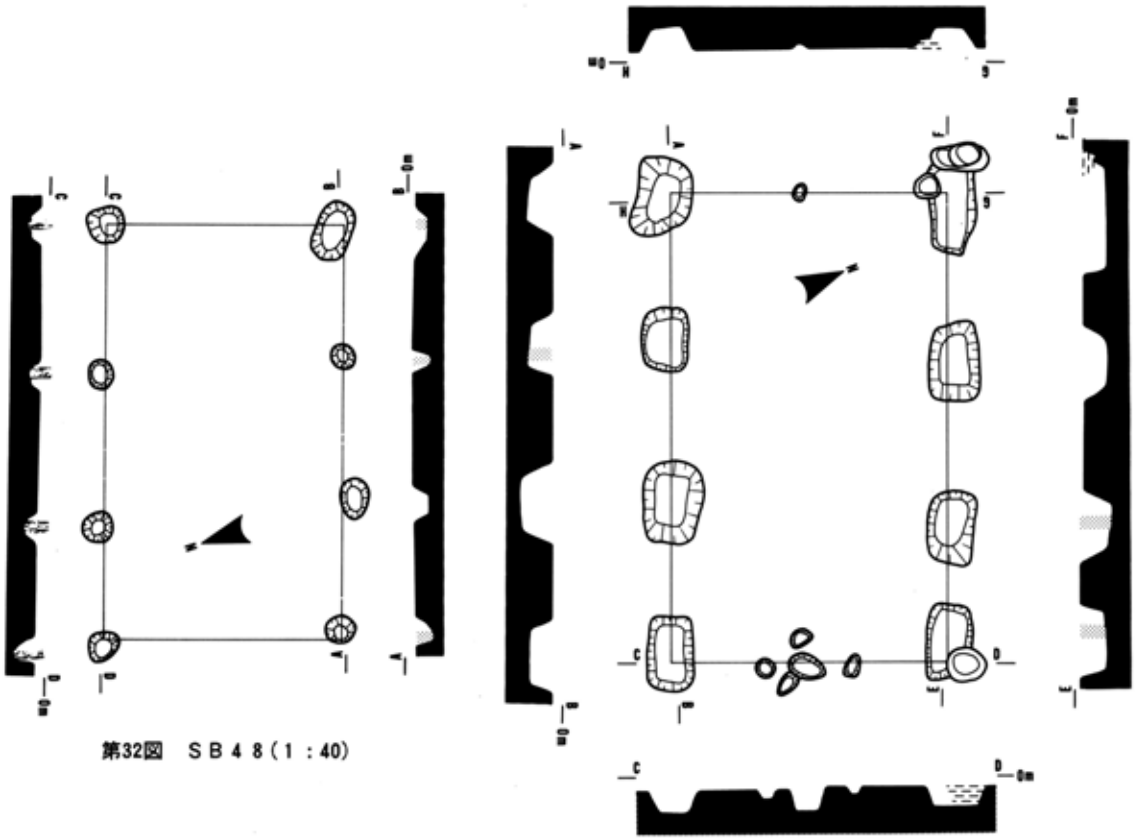
第30図　ＳＢ４１・ＳＢ４２・ＳＢ４３・ＳＡ４１（１：40）

ＳＢ３３－　桁行５間×梁間２間と桁行側に長い掘立柱建物で、ほぼ全てのピットに柱痕が確認されＳＢ１７　た。また南側桁行に沿って、柱間の距離がやや不揃いでるあが、ピット列が検出され、ＳＢ３３と関連が考えられる。（第28図）

ＳＢ３５－　桁行４間×梁間２間の掘立柱建物で、建物中央部に桁行方向に２基の小ピットが並ぶ。棟木を支える支柱であろうか。

ＳＢ３６－　桁行３間×梁間２間の掘立柱建物で、北西側に梁間と並行して走る小ピット列ＳＡ１３と楕円形に巡る小ピット列ＳＸ０３がある。

ＳＢ３７－　ＳＢ３７は桁行４間×梁間４間で、桁行側に長い。南側梁間を延長するようにＳＫ８７があり、それを南側梁間の掘形としたと思われる２間×１間の掘立柱建物がＳＢ３７と並行してみられた。また、北東側の桁行方向に、不揃いであるが、ピット列ＳＡ１８がある。さらに、同じくＳＢ３７と軸線を合わせるように南東側にＳＢ３８が存在している。



第32図　ＳＢ４８（１：40）

第31図　ＳＢ４７（１：40）

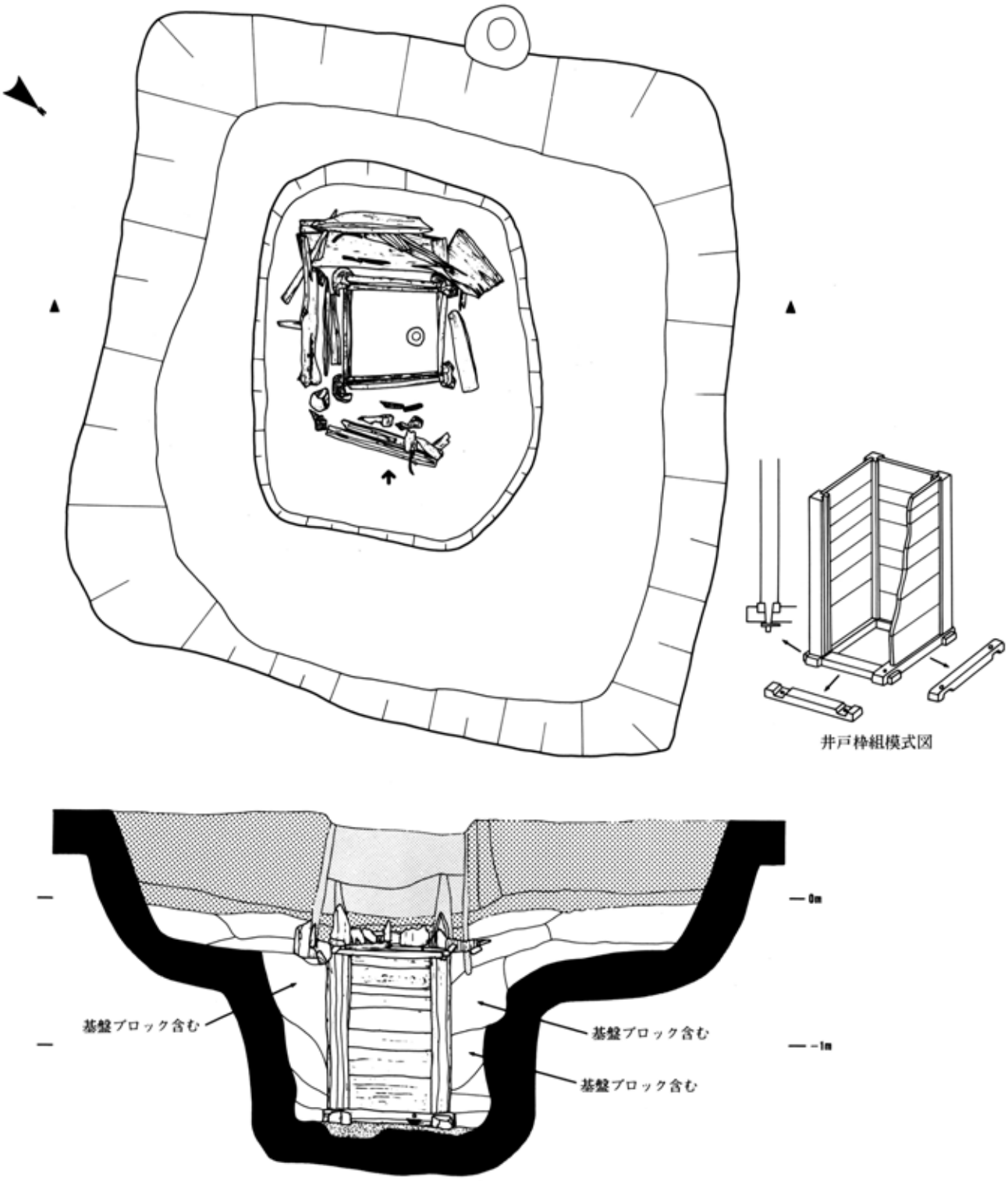
この建物は桁行３間×梁間３間で、梁間の長さはＳＢ３７とＳＢ３８の距離は、約70cmと近接している。（第29図）

ＳＢ４１－ＳＢ４２ ＳＢ４１は総柱建物で北東・南西方向は３間で、北西・南東方向は２間であるが、調査区外の北西側にまだ延びる可能性がある。ＳＢ４２の桁行は３間であるが、梁間については後世の掘削もあり、３間及び１間のどちらかであろう。このＳＢ４２を一回り大きくしＳＡ４３て、北西側をコ字状に囲むように検出されたＳＡ４３は、当所ＳＢ４２に伴う柵列と考えたが、北西側のピット列の規模がＳＢ４２のそれより大きいことから、建て替えがＳＢ４２の掘立柱建物に伴う施設である可能性も考えられた。ＳＢ４３は桁行３間×梁間２間で、南側梁間の柱穴間に小ピットが２基存在する。この建物には、今回の調査で検出された中では最大規模の長さ180cm・幅90cm・深さ50cmを測る柱穴を有し、その他のものも掘形が１ｍを超える大きさで、掘立柱建物としても最大となる。（第30図）

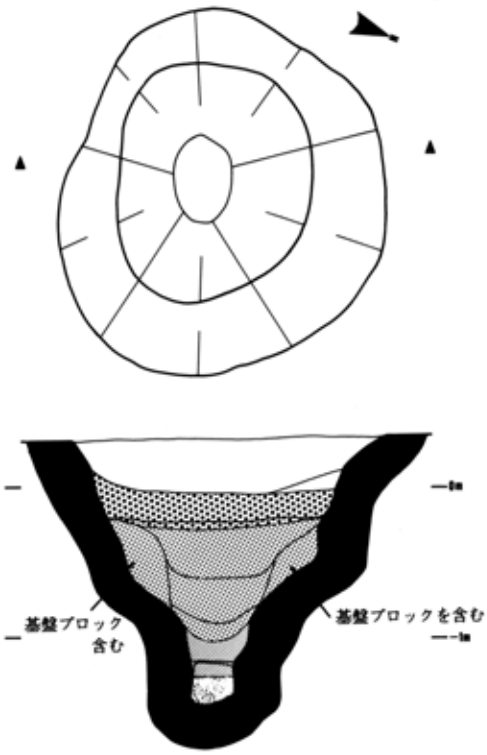
ＳＢ４７－ 桁行３間×梁間２間の掘立柱建物である。桁行方向の柱穴は、ほぼ長さ100cm・長さ70cm・深さ30～40cmで方形の掘形をもつ一様なものであったが、梁間方向の中央柱穴のほうは桁行側に比べて大変小さくなっている。（第31図）

ＳＢ４８－ 桁行３間×梁間１間で、北側の４基の柱穴全てに柱部材が残存していた。柱部材は、幅15～20cmのもので、底部部分のみが出土している。（第32図）

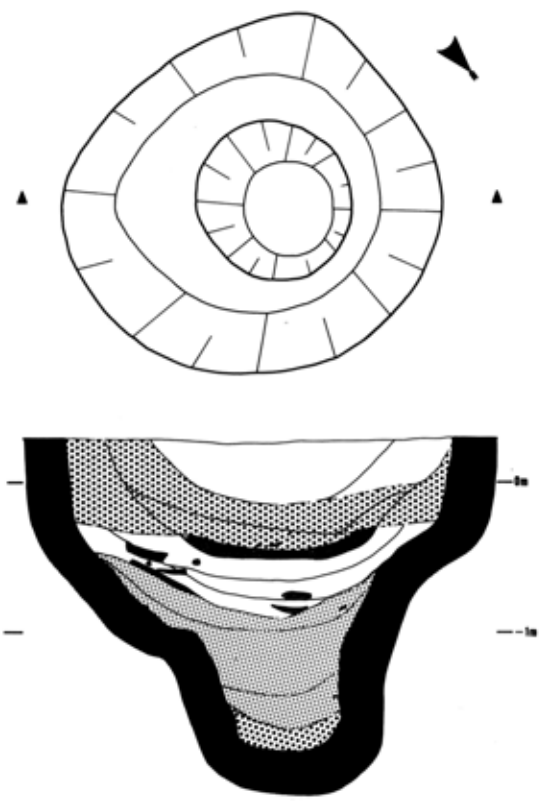
ＳＥ（井戸）



第33図　ＳＥ０１（１：40）



第34図　ＳＥ０８（１：50）



第35図　ＳＥ０９（１：50）

ＳＥ０１

今回の調査で最大規模の井戸であり、長径4.6m・短径4.3m・深さ2.2mでほぼ正方形の掘形を呈し、断面は二段掘りとなっている。構築順序は、まず地面を上下二段に掘り、規模の小さい下段に木枠を組んで裏込めを行い、またその上に上段の木枠を組み、裏込めをしている。上段については残存状態が悪く、土層観察では枠の痕跡が窺えたが、下段の木枠の上に断片が散乱していた。木枠の組み方であるが、まず細長い長方形の角材の両端に近い部分を抉り、その抉った部分を上下にして合わせて垂直方向に穿孔し、下端を補足した多角径の隅柱を挿入する。下位に突き出部分にも穿孔を施して楔状の木片差し込み、動かないようにしている。隅柱には垂直方向に溝が穿たれ７～８枚の長方形の板が横方向に落しこまれている。最下層より杯（609）が出土している。（第33図）

ＳＥ０７

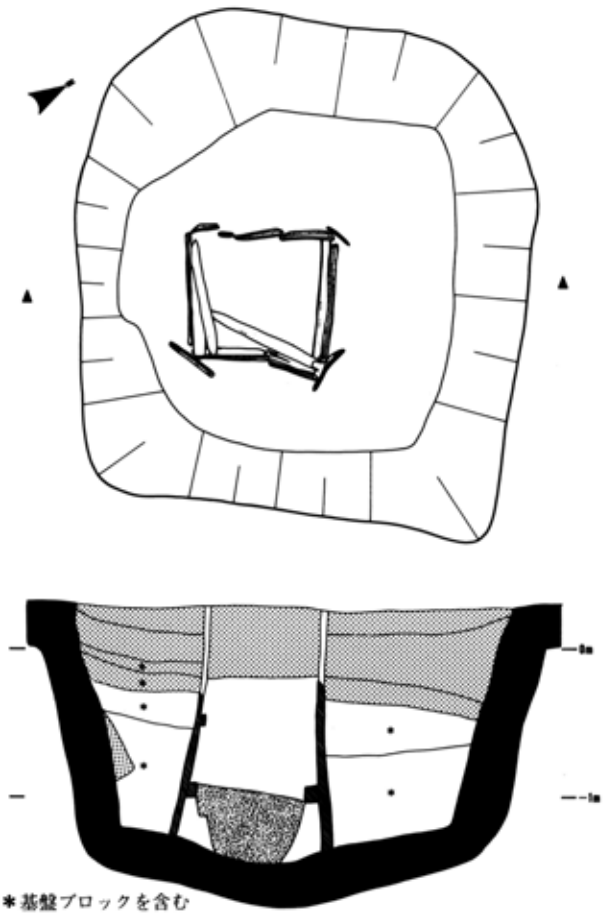
長径1.3m・短径1.1m・深さ1.3m、掘形は卵形を呈する小型の井戸である。断面は、細長い逆台形をなす。（第44図）

ＳＥ０８

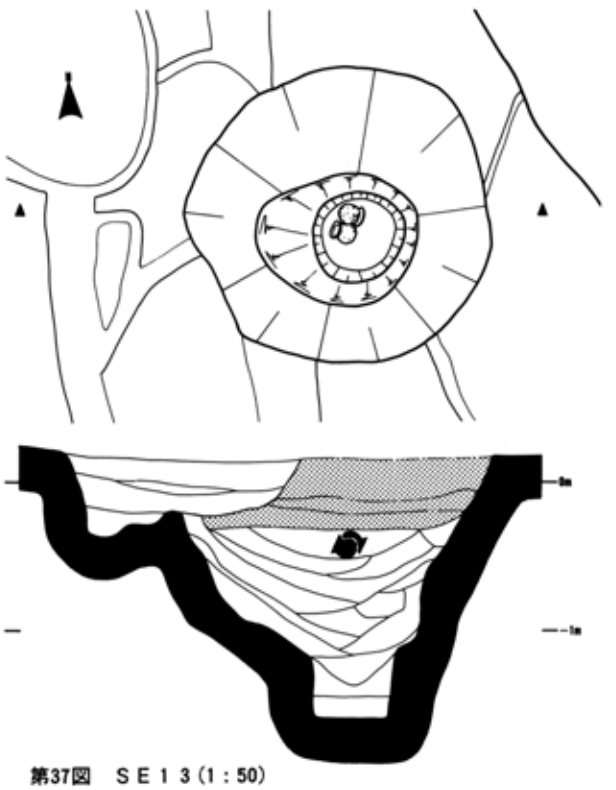
長径2.4m・短径2.2m・深さ1.8mの大きさで、円形の掘形を呈する。断面はロート状をなし、一～二段の段をもつ。下端は径40cm程度の広さしかなく、若干開いてそのまま中層まで続いており、中層ではその側部に基盤ブロックを多量に含む暗灰褐色シルトが裏込めしたように存在し、当時は円筒状の状況であったことが考えられる。曲物等の井戸枠は確認されなかった。（第34図）

ＳＥ０９

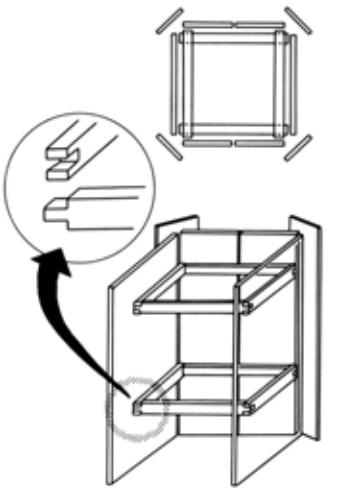
長径2.4m・短径2.3m・深さ2.1mを測



第36図　ＳＥ１０(1：50)



第37図　ＳＥ１３(1：50)



井戸枠組模式図

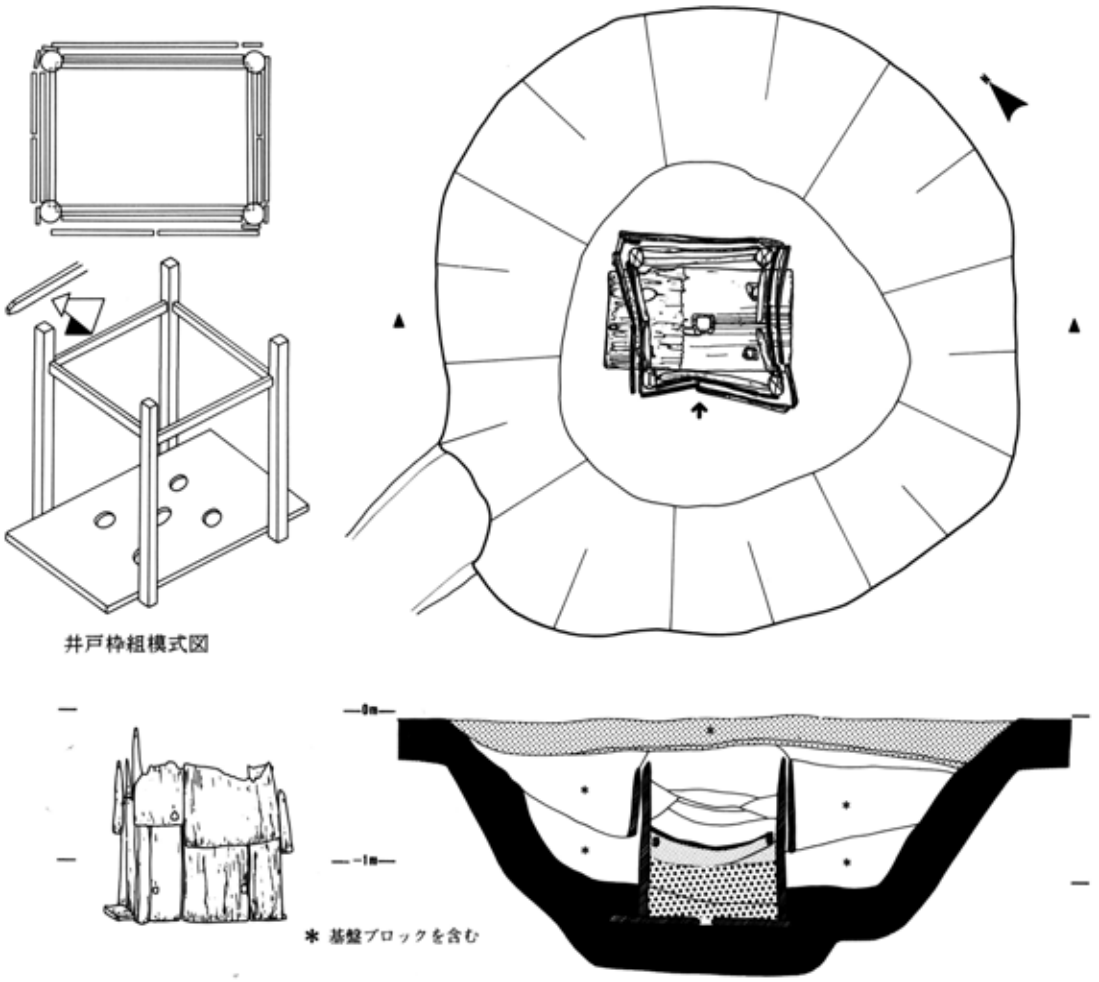
り、円形の掘形を呈する。断面はロート状で、シルトと粘土が交互に水平堆積している。下層の粘土層の上部には炭水化物・焼土がまとまってみられ、その下部より遺物・自然木が散乱して出土している。(第35図)

ＳＥ１０

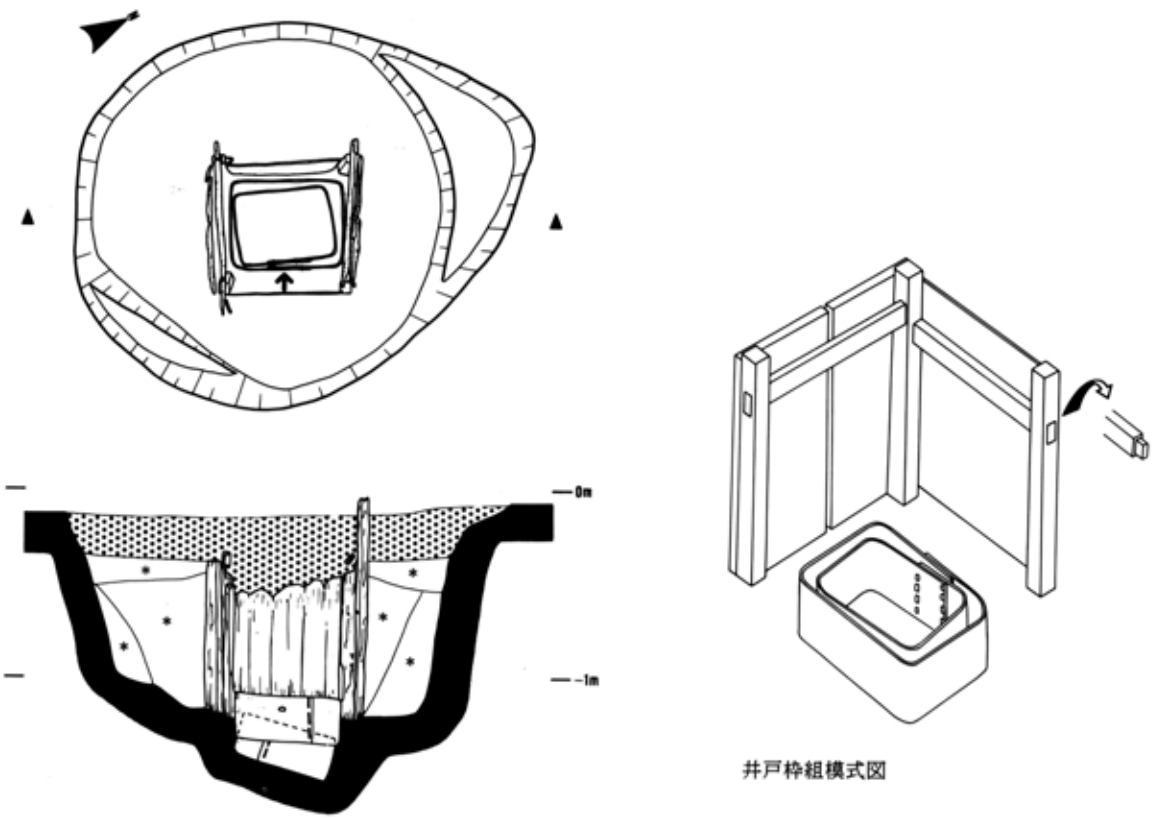
長径3.3m・短径3.0m・深さ1.7mで、方形の掘形をもつ。断面は逆台形を呈する。井戸枠は土層をみると二段あったようだが、上段のものは断片が散見できただけである。下段の木枠は隅柱をもたず、長方形の板のみで組まれている。横木は、凸状と凹状の端部合わせで方形に組まれたものが上下二段ある。側板はそれに添って、一枚のものと横に二枚合わせたものが、対面どうしに置かれており、四隅にあたる部分には細長い板が45度程度斜め方向に立てられている。木枠外には、基盤ブロックを含む灰色粘土が裏込めのように堆積する。遺物は木枠内に堆積する暗灰褐色シルト層より出土している。(第36図)

ＳＥ１３

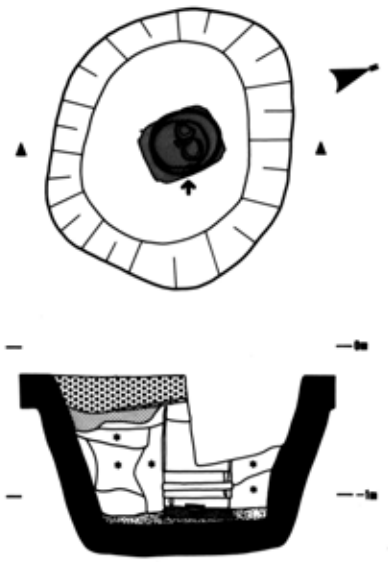
径2.0m・深さ1.6mの掘形が円形の井戸である。断面は段をもった逆ハ字状になり、下位部分のみ垂直に落ちる。埋土は、下層の垂直に落ちる部分は黒褐色粘土の水

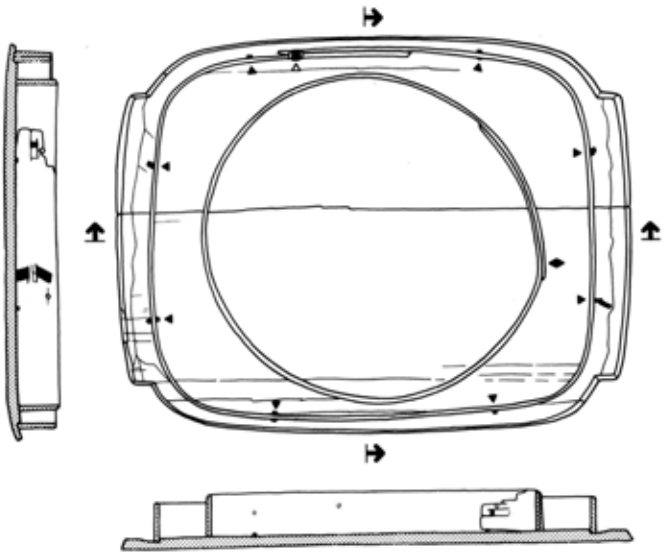


第38図　ＳＥ１４(1：50)



第39図　ＳＥ２２(1：40)

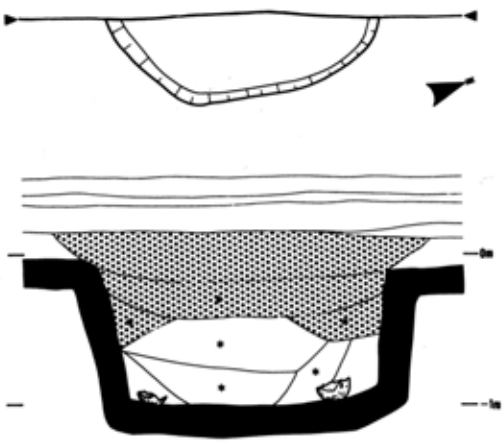




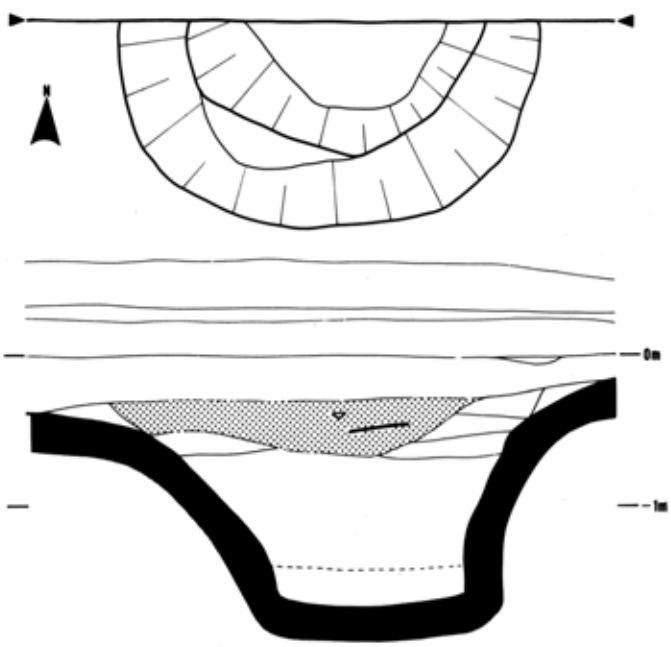
緩部の位置　　（1／4）

▶底板と側板　　▷側板　　◆曲物

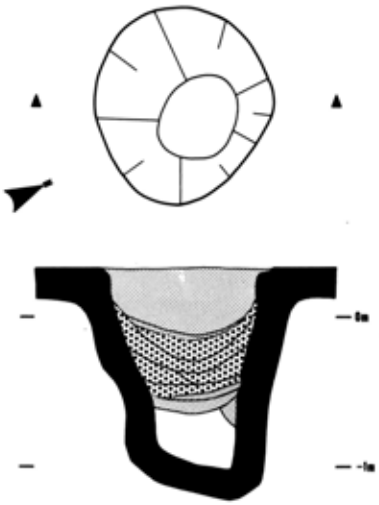
（1：50）



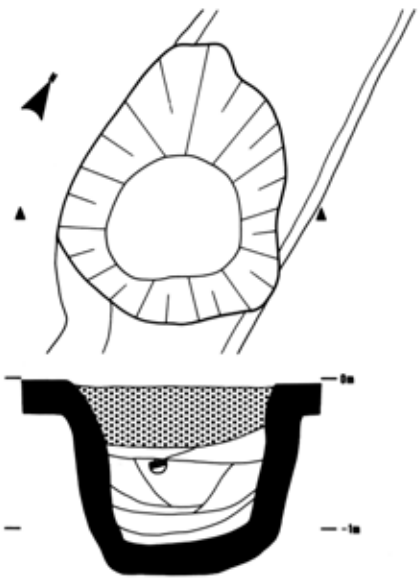
＊基盤ブロックを含む



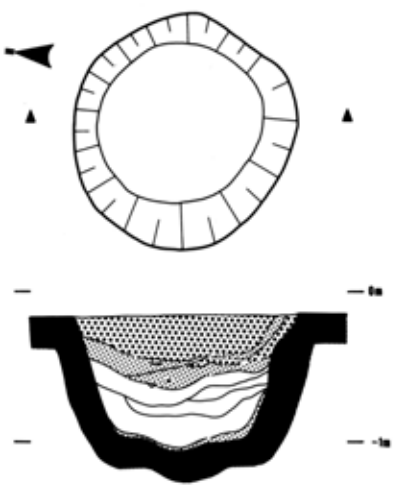
左中：第40図　ＳＥ２１（1：50）
左下：第41図　ＳＥ２８（1：50）
左上・右：第42図　ＳＥ２４と出土折敷・曲物



第44図　ＳＥ０７（１：50）



第45図　ＳＥ２３（１：50）



第46図ＳＥ２５（１：50）

平堆積であるが、中層は左右から黒褐色粘土及び灰色粘土が交互に流れ込んだ状態となっており、上層は暗灰褐色シルトの水平堆積に変わる。中層最上部で、小型甕が口縁を逆向きに、横位の状態で出土している。（第37図）

ＳＥ１４

ほぼ径3.7ｍの掘形が円形の井戸で、深さは1.0ｍを測る。断面は逆台形をなし、木枠部分のみ若干深い。木枠は上下二段あったようで、上段の下位部が僅かに残存していた。下段の木枠は、やや角のとれた方形の隅柱の上部に貫通しない穴を穿ち、端部を細くした横木をはめこみ、１～２枚の側板で周囲を囲っている。また、四隅には細長い板が立てられていた。最下層には、粗く両方向より穿孔された孔を５ヶ所持つ長方形の板が、横位に敷かれた状態で出土しており、砂押えのためのものかと考えられる。埋土は、基盤ブロックを含む黒褐色粘土が裏込めに使われており、上層に暗灰褐色シルトが水平堆積する。

ＳＥ２１

調査区壁際であったため半分しか検出されなかったが、現状では径1.8ｍ・深さ1.1ｍを測る。掘形はおそらく円形となろう。断面は、逆台形を呈する。最下層より、甕の底部が直立した状態で２点（423・424）出土している。（第40図）

ＳＥ２２

長径2.5ｍ・短径2.0ｍ・深さ1.1ｍを測る、掘形が卵形の井戸である。断面は、上部に僅かに段をもつ逆台形をなし、木枠部分のみ若干深い。木枠は、一段のみ確認されており、上部にもう一段あった痕跡はみられなかった。組み方は、方形の隅柱に貫通する枘

穴を穿ち、枘を付けた横木を差し込んで、それに添って厚く２枚の側板と薄くて１枚の側板が対面の位置に立てられている。さらに、この木枠内の底面には、入れ子状になった大きさの違う方形の曲物が、基盤の砂層に半分程度埋められた状態で出土している。

ＳＥ２３－　長径1.8m・短径1.5m・深さ1.0mを測る小型の井戸で、掘形は卵形を呈する。中層の掘り返し部分の上位より瓶・杯・蓋が出土している・（第45図）

ＳＥ２４－　長径1.9m・短径1.6m・深さ1.0mで、掘形が楕円形を呈する。断面は、逆台形である。調査を行った期間が丁度増水期にあたっていたため、井戸枠の曲物と土層を確認した時点で崩落がおき、最下層の詳細については確認できなかった。曲物は２段あり、土層観察ではさらに上部に続くものとおもわれ、側部を基盤ブロックを含む黒褐色粘土が裏込めされている。曲物内では底に近いレベルで椀（562）と皿に（563）が出土し、さらにその下に板状のものが敷かれているのを認めるにとどまった。崩落後に遺物のみを取り上げた時点で、第41図に図示した折敷と曲物最底部を確認した。折敷に残された痕跡から推測すると、スクリーントーンで示したような位置関係であったろうと思われる。（第41図）

ＳＥ２８－　５８Ｔ．Ｐ６で検出され、淡灰褐色シルト層より土器・土錘が出土する。（第41図）

ＳＥ３１－　長径2.6m・短径2.2m・深い0.9mを測る。掘形が楕円形の井戸で、断面逆ハ字状をなす。下層の中位より下駄・箸・鎌柄が出土し、中層の掘り返しを受けたと思われる層の上部で杯や瓶・自然木・自然石が出土している。（第31図）

ＳＤ（溝）

ＳＤ１０－　６０Ａ₁区と６０Ｂ₁区にかけて走る、幅約60～120cm・深さ約10cmの鉤の手状に屈曲す
ＳＤ１３　る溝で、ＳＤ１３を加えて60Ｂ区で方形の部分を作り出している。また、ＳＥ０１とつな
ＳＤ１８　がるようＳＤ０８・ＳＤ０９が走っており、ＳＤ１０・ＳＤ１３とも井戸と関わりのある
ＳＤ０９　施設の一部かと考えられる。

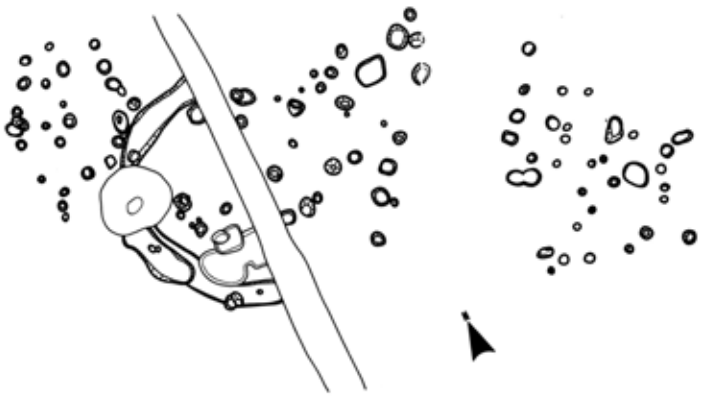
ＳＤ２６－　北西から南東にかけて走る幅約50cm・深さ約10cmの溝で、ＳＤ１０と同様に、直交する
ＳＤ２４　ＳＤ２４でＳＥ０９とつながる。

ＳＤ３２－　東西方向に走る、幅70cm・深さ10cmの溝で、東側でやや弧を描くように北に曲がりＳＥ１４の中央部を走る。切り合い関係は確認できないが、井戸の付属施設であろう。

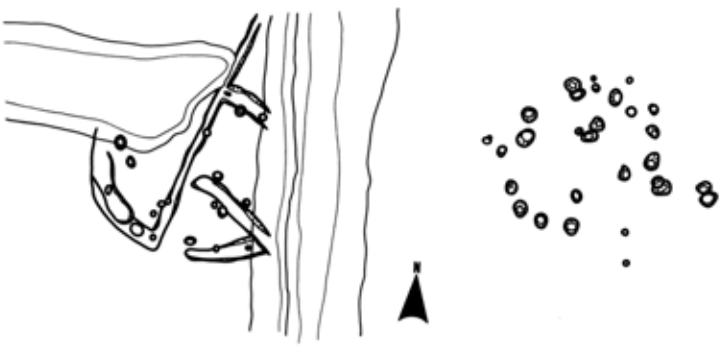
ＳＤ４１－　ＳＤ４１は、６０Ｄ区を北東から南西に走る幅約２ｍ・深さ約30cmの断面逆台形をな
ＳＤ４７　す。６０Ｅ・Ｇ区のＳＤ４７・４９も同様な規模で、おそらく何等かのつながりがあるも
ＳＤ４９　のと思われるが、６０Ｅ区の北側で東に屈曲し、確実なことは不明である。

ＳＤ４２－　ＳＤ４２は上記の溝に並行して走る、幅約40m・深さ約20cmの小溝で、南側のＳＤ５３
ＳＤ５３　とつながるものと思われる。北側は５８Ｔ．Ｐ１までは続いている。

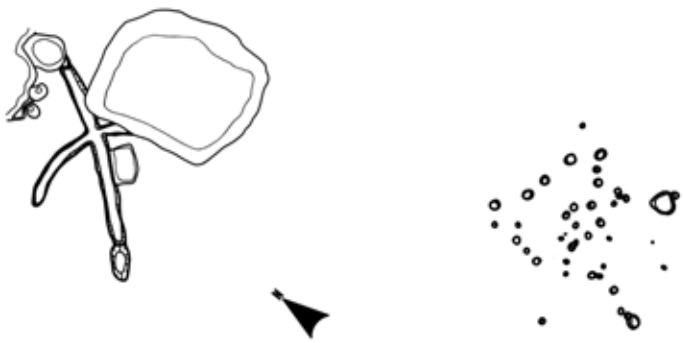
ＳＤ１１６－　６０Ｉ・Ｌ区・５９Ｅ区を北東－南西にかけて走る、幅約８ｍ・深さ５～10cm程度の浅い溝である。溝が埋没する過程で掘り直しが幾度が行われたようであり、何条かの溝が中でみられるが、埋土が浅く、切り合い関係や埋没過程については明らかにならなかった。



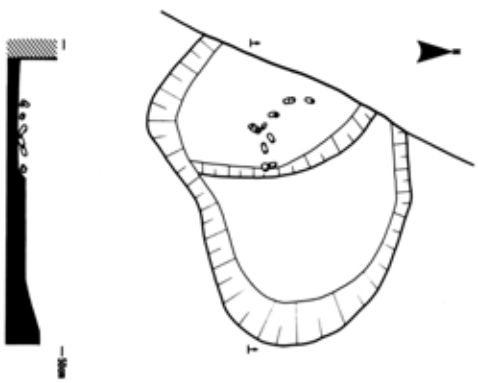
第47図　ＳＸ０１（１：200）



第48図　ＳＸ０４　（１：200）



第49図　ＳＸ０６　（１：200）



第50図　ＳＸ４１（１：40）

ＳＫ（土坑）

ＳＫ４３

長径2.1m・短径1.6m・深さ10～15cmを測り、底面に段がみられる。下段の底面に近いところで、弧状に並んだ９個の土錘が出土している。土錘は孔部どうしが向き合うようになっている部分もみられたが、明確な規則は窺えなかった。その他、埋土中より８個出土した。（第50図）

ＳＸ（不明遺構）

ＳＸ０１・０４・０６

円形に巡る深さ約５～10cmの浅い溝と、円形に並ぶ小ピット群で構成される遺構である。溝は全周せず、ピット列も完全な円ではないが、径を計測するとＳＸ０１は溝－7.2m・ピット－4.6m、ＳＸ０４は溝－4.6m・ピット－4.0m、ＳＸ０６は溝－4.6m・ピット－3.4mを測る。（第47・48・49図）

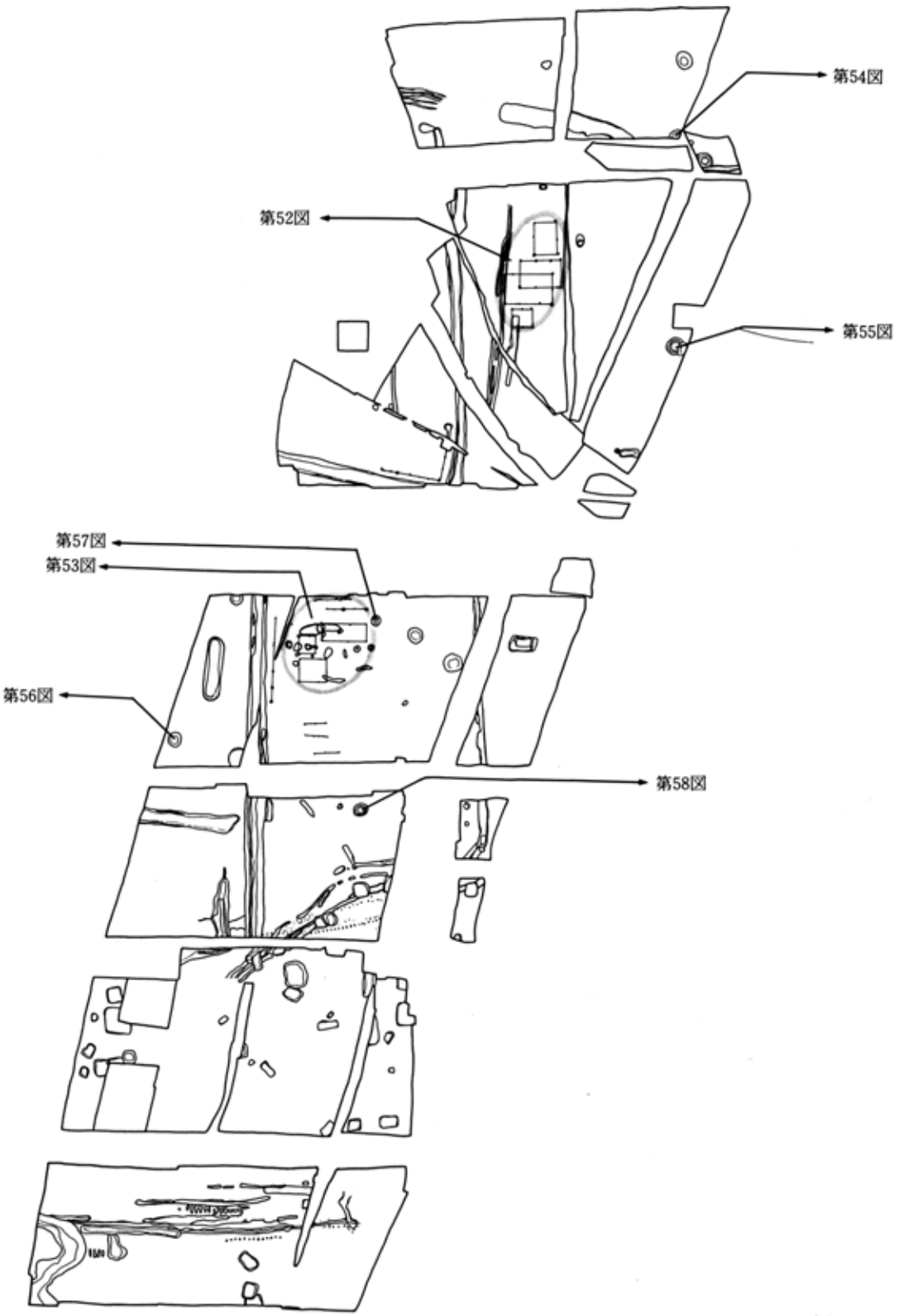
ＳＸ０２

６０Ｅ区の暗灰褐色シルト層中で出土した土器群であるが、伴う遺構は確認できなかった。

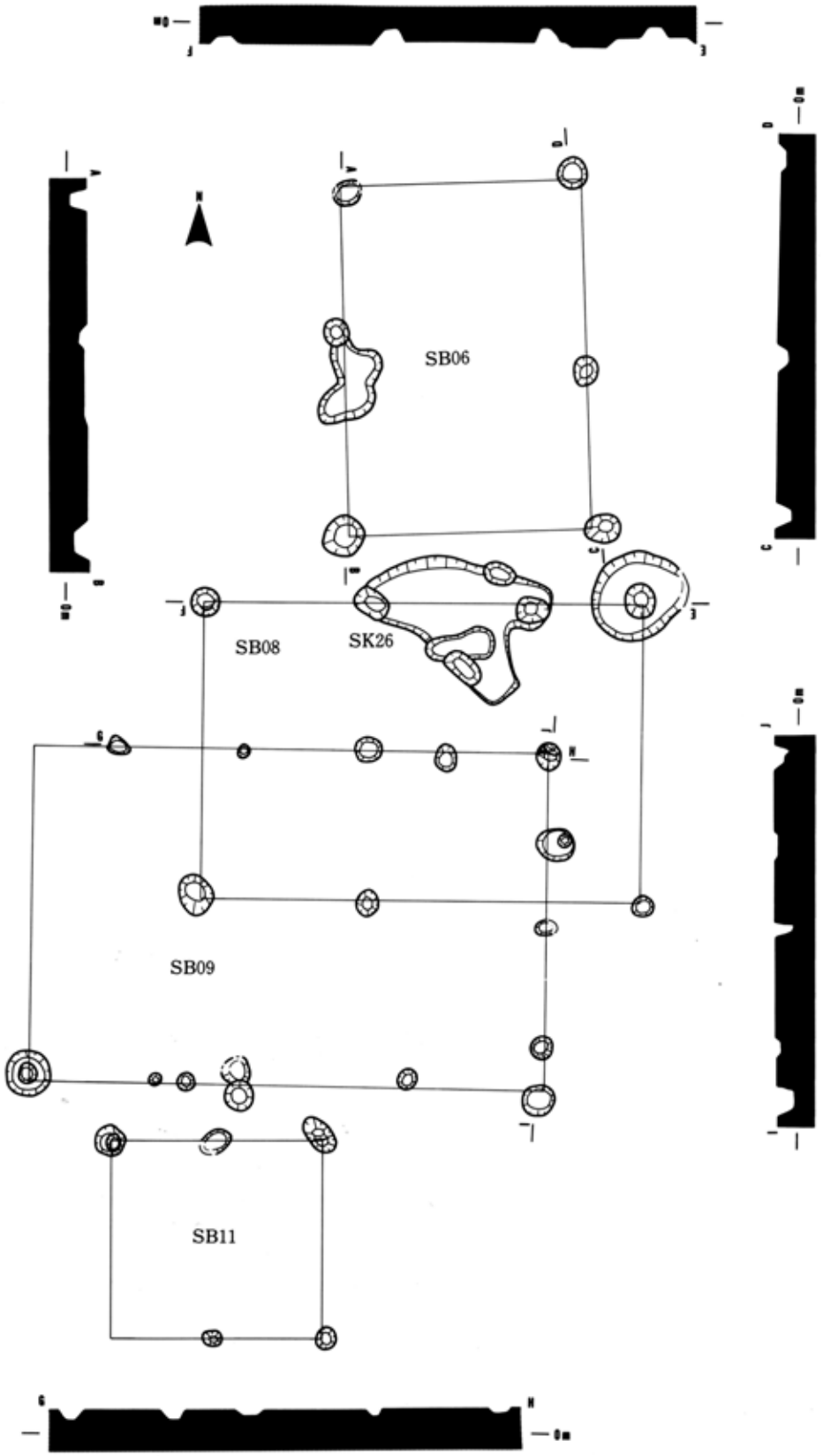
ＳＸ０３

６０Ｆ区でＳＡ１３と重なるように検出されたＳＸ０１等と同様の円形及び楕円形の小ピット列で、ＳＡ１３の部分で途切れ、半円形になる可能性がある。

平安時代後期～室町時代――――――――――――――――――――――上面



第51図　平安時代後期～室町時代挿図一覧



第52図　ＳＢ０６・ＳＢ０８・ＳＢ０９・ＳＢ１１（１：40）

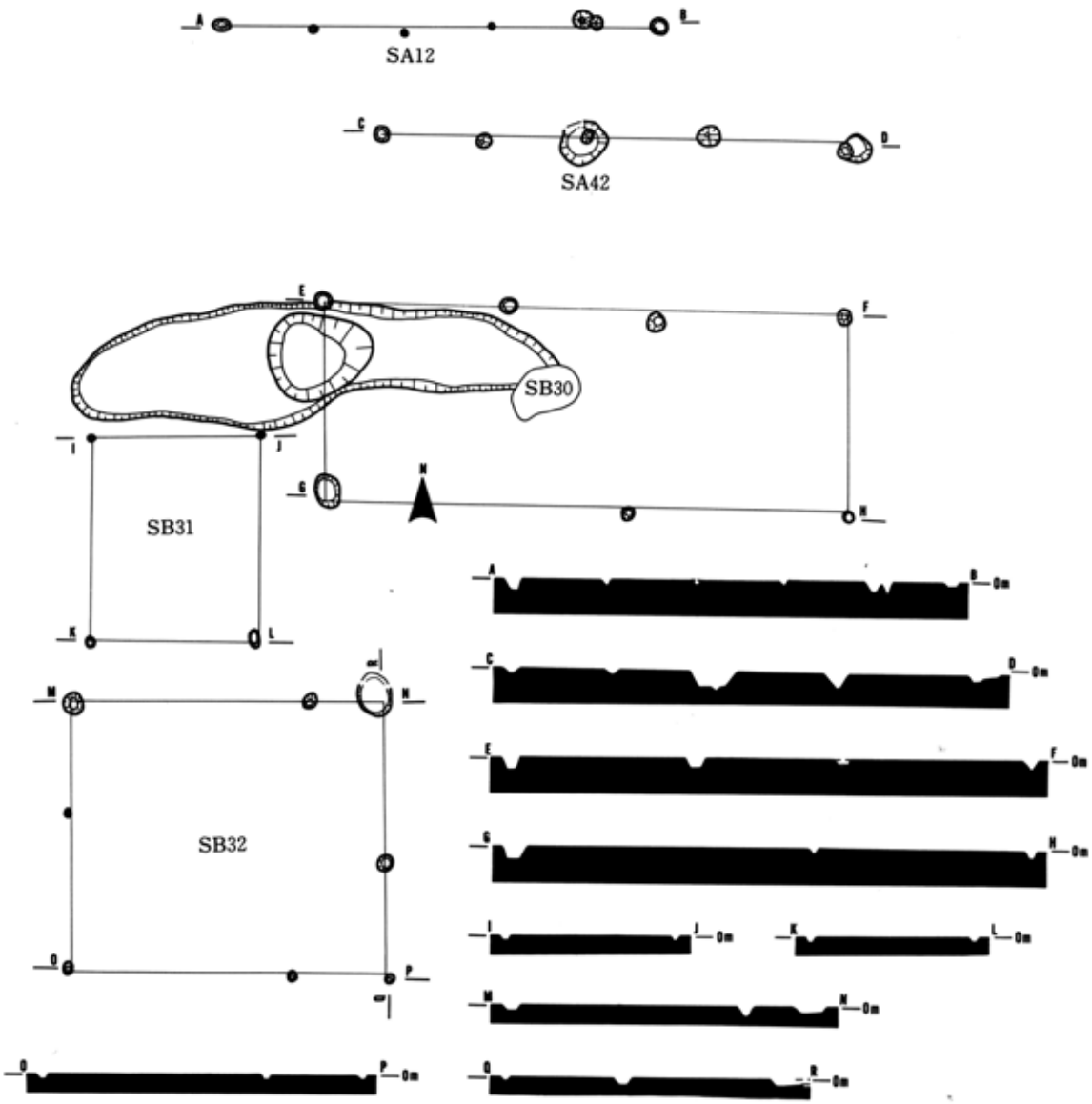
ＳＢ（住居）

ＳＢ０６・ＳＢ０８・ＳＢ０９・ＳＢ１１

60Ａ₂区で検出された４棟の掘立柱建物で、ＳＢ０６とＳＢ１１が桁行２間×梁間１間、ＳＢ０８とＳＢ０９が桁行３間×梁間２間である。柱穴は各々掘形30～50㎝・深さ10～30㎝の小規模ものである。ＳＫ２６は、その位置・方向からみてＳＢ０８に伴うものと考えられた。また、ＳＢ０９については柱間の距離が一定でなく、不明なピットもあるため、間数については問題がある。各住居の切り合いについては不明であるが、ＳＢ０９はＳＤ１８を切って作られている。（第52図）

ＳＢ３０・ＳＢ３１・ＳＢ３２・ＳＡ１２・ＳＡ４２

60Ｆ区で検出された３棟の掘立柱建物で、ＳＢ３０が桁行３間×梁間１間、ＳＢ３１が



第53図　ＳＢ３０・ＳＢ３１・ＳＢ３２・ＳＡ１２・ＳＡ４２（１：100）

１間×１間、ＳＢ３２が桁行３間（？）×梁間２間となる。柱穴は各々掘形10～30㎝・深さ５～10㎝を測る小規模なものである。ＳＢ３０の北側で桁行方向に続く４間のＳＡ４２と５間のＳＡ１２が検出された。また、ＳＢ３２の南約８ｍの地点で、同方向のピット列ＳＡ１４・ＳＡ１５・ＳＡ１６がみつかっている。（第53図）

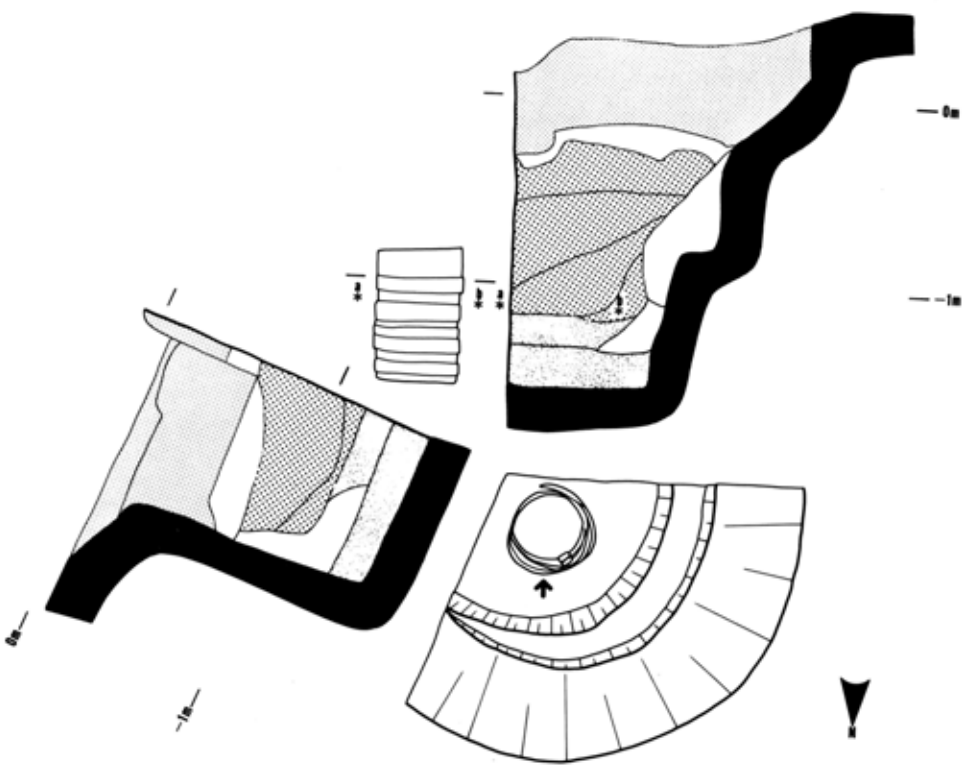
ＳＥ（井戸）

ＳＥ０４－　B_1区南東隅の調査区壁際で検出されたため、1／2程度しか確認されていない。掘形は円形で、深さ1.5ｍを測る。断面は上方がやや開く逆台形をなし、北西側に一段の段をもつ。井戸枠として、曲物が下層の砂層に埋め込まれる状態で出土している。曲物は、径45㎝の二段組で、一段の高さが約40㎝、上下に重ねられている。（第54図）

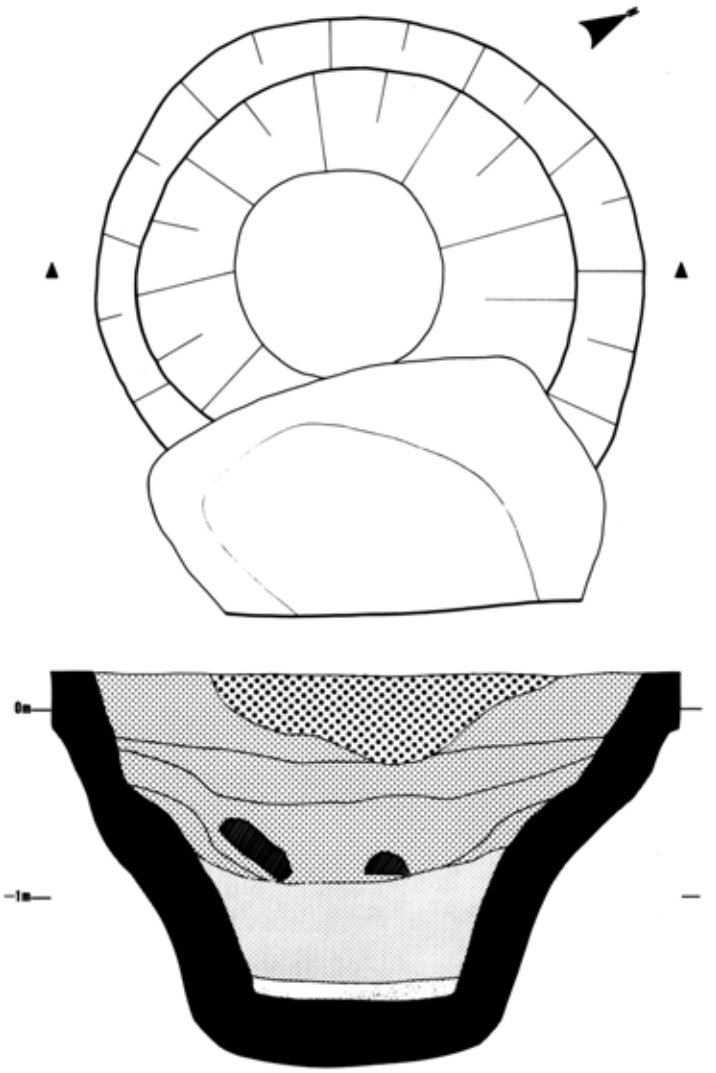
ＳＥ１１－　径約2.9ｍの円形の掘形をなす井戸で、深さは、1.7ｍを測る。断面は途中に一段をもつ逆ハ字状を呈する。中層の暗灰褐色シルト層の下部より、径25㎝の自然木を長さ50㎝に切って、さらに縦1／2にしたものが出土している。上層の暗茶褐色シルトより２点の椀（1631・632）が、口縁を合わせて縦位の状態で出土している。（第55図）

ＳＥ１６－　長径2.4ｍ・短径2.2ｍ・深さ1.1ｍを測る、掘形が円形の井戸である。断面は、逆台形を呈する。埋土は、下位2／3程度か灰色粘土で、北側より流れ込んだ状態で堆積している。遺物は、主に上層の淡灰褐色シルト層より出土している。（第56図）

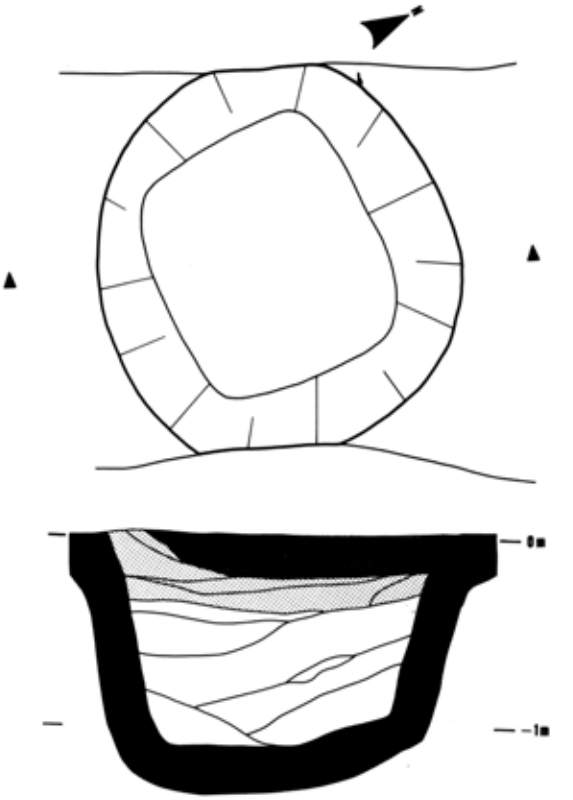
ＳＥ１８－　長径1.8ｍ・短径1.5ｍ・深さ1.3ｍを測る、掘形が円形の井戸である。断面は、北側の



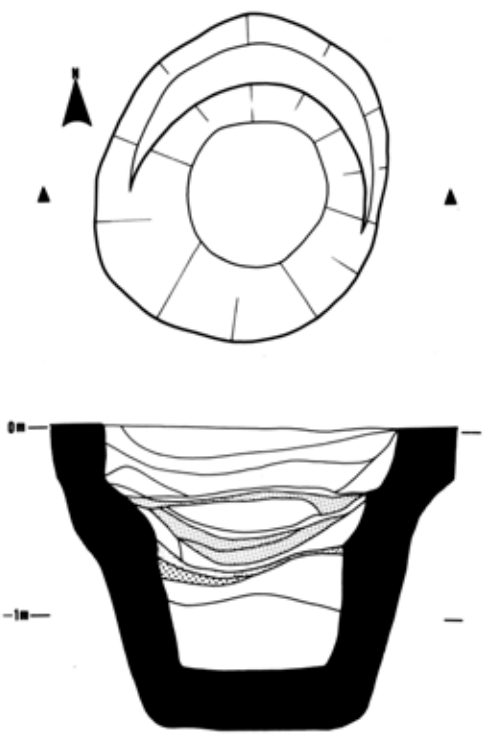
第54図　ＳＥ０４（１：40）



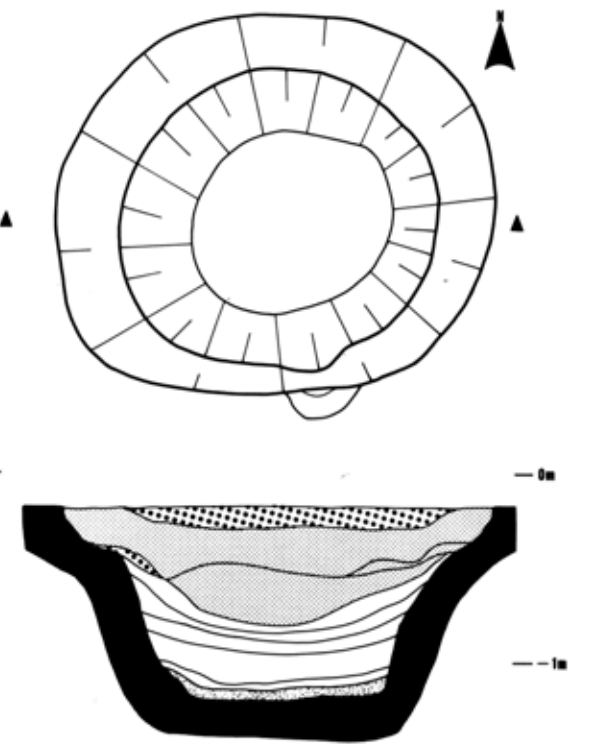
第55図　ＳＥ１１（１：40）



第56図　ＳＥ１６（１：40）



第57図　ＳＥ１８（１：40）



第58図　ＳＥ２７（１：40）

上部に一段の平坦面をもつ逆台形を呈する。中層の淡灰褐色シルトがU字状に窪んで堆積する層から遺物・自然木が出土している。（第57図）

ＳＥ１９－　ＳＥ１９は長径2.6m・短径2.4m・深さ0.9mを、ＳＥ２０は長径3.3m・短径3.0m・深さ1.1mを測る大型のもので、掘形・断面は双方とも円形・逆台形をなす。ＳＥ２０下層より、曲物片が出土している。

ＳＫ（土坑）

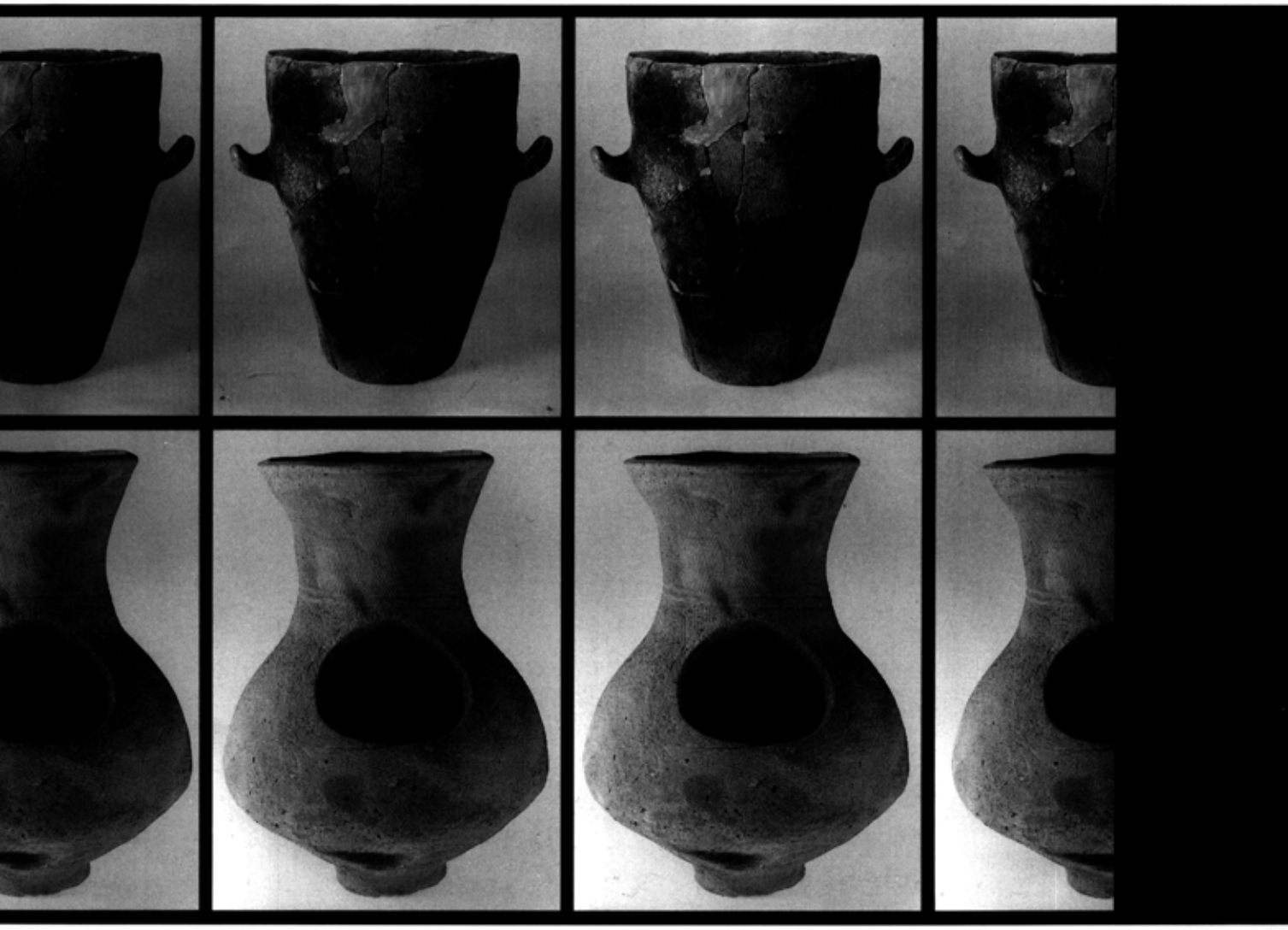
ＳＫ７４－　ＳＤ４９を拡張するように作られた大型の土坑で、長径10.0m・短径2.4m・深さ60cmを測る。断面は逆台形をなし、上部より灰釉系陶器が出土している。

方形土坑－ＳＤ５５より東、ＳＤ６８・71・72の溝群より南で検出された掘形が方形を呈する土坑で、39基確認されている。埋土は灰色粘土・灰褐色シルト・黄褐色シトル（基盤）の斑土となっているものが多いが、小型のものには灰褐色シルトに黄褐色シルト（基盤）ブロックが混入するものもみられる。掘形は上記したように隅の丸い方形を呈し、垂直に近い状態で掘り込まれ、底面はわずかに舟底状になる。規模は、長径４mを超える大型のもの、２～3.5mの中型、１～２mの小型のものに分かれる。掘形の形態も、正方形のもの、長方形のもの、細長い長方形と３形態みられる。また、主軸の方向も、南北方向をむくグループ、北より０～20°傾くグループ、北より40～60°傾くグループがある。その中で、ＳＫ９４は二重の掘形や平坦面をもつ特異な形態をしている。また、ＳＫ１１・114・ＳＫ１３・139のように連接して作られているものもみられる。

ＳＤ（溝）

溝は南北方向と東西方向の２方向があり、規則的に配置されている。南北方向の溝はほぼ真北方向に走り、東西方向のものはわずかに北西－南東方向をむき、最南の一群のみ東西方向を向く。南北方向の溝ＳＤ５０は幅約2.5m・深さ約60cmをはかる大きなもので、60Ｈ区と60Ｊ区の間で途切れる。そこから東へ約360mのところには並行して走るＳＤ５５とその南北方向の延長線上にあるＳＤ１５、またさらにそれと並行して走るＳＤ１８・19がある。ただＳＤ１５とＳＤ５５は規模に差があり、同一溝である確証は得られなかった。ＳＤ５５は南側でＳＤ５０の途切れ部方向に孤状に曲がり、この孤状になるあたりでは溝が何条も並行して走る。また、同じく途切れ部付近で直角に折れ、ＳＤ５０との間に通路状の部分を作り出すＳＤ６３がある。さらに、東西方向に走るＳＤ５９もＳＤ５０と約１mの間をあけ途切れてる。東西方向の溝は約62～68mの間隔で走っていおり、最北のＳＤ１１は６０A_1区で途切れ、その延長線上の西側は３条の溝となる。また、最南では幾条かの溝・柵が並行して走っている。

Ⅳ. 遺　物



1．弥生時代

土　　器

資料の性格

出土状況　大渕遺跡出土土器は、基本的には遺構出土に限られる。それ以外に廃棄空間が存在したかどうかは、現状における遺跡の削平状況では言及不可能であるが、すくなくとも居住域内廃棄が行われていたことはまちがいない。

出土状況が、その資料の性格を決定することに異論はない。しかし、それが全てではない。出土状況とそれを構成する遺物・土層・遺構そして空間的位置の全体が性格を決定する。その意味で、廃棄と埋没は区別しなければならない。廃棄とは遺物となる「物」をめぐっての確定された〈場〉ので人為的作用であり、因果系列の比較的明確な一次的作用である（広辞苑「不要として捨てさること」）。 それに対し、埋没は物だけでなく構造物をも含む広い概念で、自然と人為の両作用があるだけでなく、一次的・二次的作用もあり因果関係は不明確である（広辞苑「うもれかくれること。埋もれて見えなくなること」）。

廃棄は、それが一回きりのもので直後に整地でもされているのであれば、その単位にはまさに廃棄の同時性は保証されようが、その場合でも遺構形成が最初期でなければ整地土に混入して当該遺構以前の時期の土器片が遺構内埋土に含まれることはあり得る。通常大破片まではそれを混入として認めても、完全に近いようなものが複数あったときはそれらを単純に混入とすることは難しい。このような場合に、廃棄の単位がまさに使用されたそのまま（廃棄の必然性が高い資料）であれば〈群〉としての固有性はあるわけだから、生活実態に近いものとしての資料的有効性は高いものとなるけれども、廃棄への経路が開かれ多方向となればそれだけ偶然性も増し不安定（廃棄の偶然性の高い資料）となる。こうしたことは、出土状況をつぶさに観察しても果して認識できるかどうかは疑問なところである。

これに関連して、埋土が分層できたからといって廃棄をも部分に区分することができるかどうかという問題がある。過剰な分層が行われれば土器群を分けるような層区分線が引かれるかもしれないが、すでにあった土器群（大破片や完全に近い形のものが多ければそれだけ隙間も多い）に土が流入したのであれば両者は成因が異なる以上区別されねばならないことは当然であり、そこにおいて層区分線は土器群（廃棄単位）の区分線とはならない。

層区分線が遺物群を拘束するのは特定の層位と遺物が明確な正および負の内的な関係性を有しているときだけである。正関係は、貝層形成のように土と共に遺物が廃棄された場合。もちろんそこでは偶然的な混入の頻度が高くなる。他は自然埋没過程での人為的な遺

物の混入である。自然埋没という時間経過の中に含まれてくる遺物には時間的な拘束が伴いそれが層位の違いに対応した遺物自体の変化としても現れることになる。負関係は、自然的・人為的な層位形成の間に廃棄による遺物群形成が行われる場合である。巨視的には廃棄そのものが層位と同じ性格を有することになる。

住居では居住時期の決め手となるような「床面直上」と言われる資料や柱穴内出土土器はほとんどなく、大多数は住居廃絶後の窪地状部分に「廃棄された物」のようだ。火災にあっているＳＢ１４ですら出土した多量の土器は床面から浮いており、「廃棄の場」としての性格が強いことが窺える。だから「住居に伴う」ということは難しい。

ところで、住居跡出土土器には後述するように時期幅を有する例が比較的認められる。この時期幅という問題は一応の編年の確定を前提にしてのことであるけれども、「一括出土」として取り上げられたＳＢ３５の場合でもどうも２時期に細分できそうなのである。こうしたことは、「一括出土」であるか否かの判断は出土状況によって決定されるとしても、そのことがその一群についての廃棄の同時性を保証するものではないことを示している。

土坑は多くが廃棄土坑のようであり、土器はそこに「廃棄された物」である。

井戸は他の遺構に比べて完全な形になるものが多く、それらが「廃棄された物」であっても、他とは性格が異なるのかもしれない。

接合関係　大渕遺跡での廃棄単位間の接合は現状で次の２例が確認されている。②はまとまりのある群間での関係で時期的にも併行するが、①はＳＢ０２に一部小破片を含み不安定さがある。

①　ＳＫ０３……ＳＢ０２　　②　ＳＥ０３上層……ＳＢ３５上層

土器の分類と時期的区分

個別分類　大渕遺跡では住居跡・土坑・井戸などから土器組成サンプルが得られている。このうち完全に近い形の土器を多く含みかつ層位区分に連動して時期差に関わる群単位に区分できるものとしては、ＳＥ０３が最もすぐれた内容を有している。本遺構からは図示しただけでも38固体が出土しており、しかも出土土器は井戸の堆積及び土器廃棄の状況から上下２層に区分できることが確定している。だが、それはあくまで大渕遺跡資料中での優秀さであって、地域的・時期的総体では偏っていることは否めない。

本来「分類」は雑多な要素を秩序あるものにし、認識の階段を上方に登るために一定の段階でまとめることであることを考えるなら、特異な一個体にまで分類項目を与えることは無意味であるだけでなく、混乱を呼ぶ恐れさえある。単なる言葉の置き換えであるならそれは作業的（認識的）にも非経済的である。

系統分類　大渕遺跡にとどまらず尾張地方南西部における土器相は単純ではない。近畿地方に於て「様式」概念は旧国単位でさえ「小様式」にすぎないというような広域性が強調されているのであるけれども、当地方では旧国内でさえ「大様式」に対応する存在が複数並存するのである。現状ではそれらの範囲はなお確定できていないので、範囲を前提とする「様式」ではなく、ひとまず空間的問題を置いて時間的連続性を有する固有の運動体の存続を重視して、それを〈系〉としてくくることにする。これら〈系〉区分に関してはすでに提示している（石黒　1990ｂ）が、それは次のようになる。

Ⅰ系……いわゆる「朝日式」・「貝田町式」の連続にほぼ一致するが、伊勢湾西岸部と東岸部では細部に相違がある。前者をＩＷ系、後者をＩＥ系とする。

Ⅱ系……いわゆる〈条痕紋系土器〉の連続である。おもにⅡ系分布圏南部を占めて当初二枚貝条痕を特徴としたものをⅡＳ系、北部地域に分布し櫛条痕を特徴とするものをⅡＮ系とする。

Ⅲ系……いわゆる「瓜郷式」の連続である。

Ⅳ系……いわゆる「凹線紋系土器」である。

Ⅴ系……いわゆる「近江系土器」の連続である。おそらく地理的細分を必要とする。

時期区分　これらの遺構から出土した土器はほぼ〈凹線紋系土器〉展開期に限定される。上述のＳＥ０３出土土器の上下２層を、それぞれ時期区分の標識として、下層を１期、上層を２期とする。しかし、後述するように２期の資料には新古の２相が観察できるので、これを２期ａ、２期ｂとして区分する。２期ｂは独立させることができる可能性の高いものであるが、大渕遺跡では不十分であった。

資料解説

１期

ＳＥ０３　Ⅰ系　太頸壺・細頸壺・円窓付壺・台付甕がある。

下層　太頸壺はいずれも櫛描直線紋で磨消紋を有する例は確認していない。196は口縁部のヨコ
(図版32・33)ナデが顕著で、口唇部は凹面をなしている。頸部以下には波状紋→直線紋→斜格子紋→コンパス山形紋が施される。体部表面には籠目痕が観察できる。199は体部紋様は６・６の櫛三種で縦位直線のあと横に直線紋が施されている。櫛描紋帯間には研磨は施されない。

細頸壺は198がコンパス山形紋が施されている。直線紋下の波状紋はコンパス波状紋である。原体との接触点を交互に変えながらのコンパス動作が施紋の基本となっているようだ。197・201は口縁部だけでは時期の決定にとまどう資料である。200は体部上位の櫛描紋帯間に縦位波線を施すもので、紋様構成上珍しい。

円窓付壺の口縁部が直立気味に立ち上がり、口唇部には凹面をなすような強いヨコナデ

が施されている。円窓部左側には下書き線が消されないでそのまま残っている。底部外面には木の葉痕が認められる。

甕はおそらく総て台付甕であろう。203・204は口唇部にハケメ刻みが施されている。指頭圧痕紋を有する例はここでは出土していない。209は口唇部に二枚貝刺突が施されている。210は体部外面がナデ仕上げである。211は口唇部の上下端にハケメ刻みが施されている。

Ⅲ系　太頸壺口縁部が1点出土している。211は口唇部円周4分割の位置にヘラ状工具による部分圧痕が施されている。頸部には不揃いだが条溝の深い櫛によるあまり整わない波状紋が施されている。

Ⅳ系　細頸壺・短頸壺・甕・片口鉢が出土している。

細頸壺には無紋と有紋がある。212は口縁部が強くヨコナデされ、体部上半はタタキ調整の後ハケメ調整され、下半は縦方向のケズリの後ハケメ調整されている。213は口縁部は欠損しているが体部は同様の調整がされている。215は口縁部に2条の凹線がある。216は口縁部が欠損している。体部には2×3の櫛Ⅲ種で直線紋と波状紋が施されている。色調は淡橙色で、他と異なる。短頸壺214は口縁部に2条の凹線、体部には2の倍数の櫛Ⅲ種による櫛描紋が施されている。

甕はいずれも体部外面にタタキ調整、内面にはケズリ調整が施されている。

ＳＢ２７
（図版27）

Ⅰ系　細頸壺・小形太頸壺・甕・鉢がある。細頸壺125は体部上半を櫛描直線紋で区画した後下段に沈線で斜格子紋を施している。下半はミガキが施されてる。小型太頸壺127は体部紋様は上から、円形刺突→半円刺突→櫛描直線紋3条で間には指頭ナデが施されている。体部下半はミガキ調整が施されている。

甕は127がやや大型の甕で、体部外面の調整は縦ハケメの後斜めハケメが施されている。130は口唇部上端に刻みが施されている。131は体部外面調整こそⅠ系の特徴である斜めハケメが施されているものの、口縁部は強いヨコナデで内面が凹面を形成し、しかも体部内面には縦ケズリが施されている。一見するといわゆる「見晴台式」の甕に類似するものである。混入であるかもしれない。

鉢は、129は口縁部のヨコナデが顕著で、口唇部と口縁部内面が凹面をなすほどである。

Ⅳ系　甕のみ出土している。体部外面の調整によって3種に区分できる。132・133はタタキ調整の後ハケメ調整、135・136は縦ハケメの後横ハケメ（直線紋）、134は両者の中間でタタキ→縦ハケメ→横ハケメが施されている。

ＳＫ１３
（図版30）

Ⅰ系　太頸壺・細頸壺・甕・大形鉢がある。太頸壺169は口唇部にハケメ工具刻み、口縁部内面に瘤状突起が4個一単位で施されている。元々はＩＥ系固有の要素である。細頸壺170は頸部に沈線が施されておりこの時期の特徴を示している。大形鉢172・173は両者とも壺成形第2段階で成形を停止したもので口唇部の指頭圧痕紋が特徴的である。173は体部に斜格子紋が磨消線で施されて暗紋となっている。174は類例の余り無い大形鉢で、

口唇部には部分圧痕が施されている。

以上はＩＥ系であるが、１点ＩＷ系が出土している。175は体部上半の横ハケメ（直線紋)と内面の縦方向のユビナデが特徴的である。口唇部は、下端は連続した刻みであるが上端は円周４分割の位置に施され部分圧痕となっている。太頸壺167は口唇部下端の指圧痕が特徴的である。具体的な系譜関係は不明。ＩＷ系のⅣ系に変換したものかもしれない。

Ⅳ系　細頸壺・太頸壺・甕がある。細頸壺166は口縁部に凹線３条、斜位櫛刺突紋３段を方向を変えて羽条にし、以下２×４の櫛Ⅲ種によって直線紋と波状紋を交互に施し、最後に縦位直線を加えている。なお口縁部は右図のように一部欠損している。168は台付甕の脚台である。この時期にあるとは思えない。混入であろう。

２期ａ

ＳＥ０３
上層
(図版31)

Ｉ系　大形鉢がある。195は、体部成形が壺成形第２段階で停止し甕と同じ口縁部を付加したものである。

Ⅳ系　細頸壺・円窓付壺・甕・高杯・取っ手付鉢がある。

細頸壺184は口縁部に２条凹線、頸部には櫛描直線紋が施されている。口縁部下部にはタタキが観察できる。185は直線的に開く口縁部に２条の凹線をめぐらし、体部は無紋である。残念ながら円窓部分は欠損しているが、口縁部にくり込み部分は無いので水差し形土器ではないであろう。

甕は台付甕であるかどうかの断定はできない。体部外面の調整・施紋から、３種に区分できる。縦ハケメの後横ハケメ（直線紋）を施す187、タタキ調整の後縦ハケメを施す187・189、縦ハケメのあとタタキ調整を施す188である。

高杯は皿状杯部を有するものが確認できたのみで、鍔状口縁部を有する例は出土していない。190は口縁部に２条の凹線をめぐらし、後にミガキ調整が施されている。杯部下部はケズリが施されているようである。脚部は、191・193の端部はそれほど肥厚しないまま終わっているのに対し、192は強いヨコナデが加えられやや拡張気味に終わっている。193は上部に沈線が施されている。取っ手付鉢195は取っ手接合部の上部に、櫛による斜格子紋と円形浮紋が施されている。

ＳＢ０６
(図版22･23)
(図版34･35)

周溝および柱穴出土以外を取り上げる。若干の個体を除きほとんどⅣ系で占められる。

Ⅳ系　太頸壺・細頸壺・甕・高杯などがある。

太頸壺には単純口縁と受口状口縁がある。単純口縁のうち口唇部紋様が波状紋を基本とするものでは口縁部内面はハケメ工具による刺突紋が多用される傾向にある。凹線紋を基本とするものは258のみであるが口縁部内面には波状紋が施されている。なお253・257の口縁部内面には扇形紋が観察できる。受口状口縁では凹線紋のみの例が多いが、263は波状紋、264では円形刺突紋が施されている。頸部はハケメ工具連続圧痕、断面三角形突

帯、ハケメ工具連続圧痕突帯の３種が出土しているが、267は混入かもしれない。

細頸壺は袋状口縁６例のうちハケメ工具連続圧痕を２段施すのが５点で、１段は１点、18のような３段は含まれていない。261・262は受口状口縁を呈するものである。

甕41は口唇部がヨコナデで仕上げられており、やや凹面をなしている。46は横ハケメ（直線紋）と波状紋、47は受口状を成す口縁部の外面に波状紋、体部には横ハケメ（直線紋）が施されている。

高杯は鍔状口縁の48と皿状杯部の275がある。275は凹線４条の下に波状紋が施されている。277は脚部上半に斜格子紋が施されている。

そのほか、276は台付鉢で羽状のハケメ工具連続圧痕と凹線を１条もつ。おそらく上部は34のようになるのであろう。274は鉢である。

Ⅲ系　281～285である。

ＳＢ３５　Ⅰ系　短頸壺・甕がある。151は紐孔があり無頸壺と共通する。口縁部は強くヨコナデ
（図版28・29）されて口唇部は凹面をなす。152は通有の甕である。ＩＷ系の甕154がある。

Ⅲ系　台付甕153がある。

Ⅳ系　細頸壺・台付甕がある。

細頸壺138は袋状口縁を呈し166と同型であるが頸部に簾状紋の施されている点が構成上異なり、櫛描紋も３・２・３の櫛Ⅲ種によって施されている。しかし、口縁部の櫛連続刺突紋は１段目と２段目が押し引き状で古い特徴を有する。139は口縁部に凹線が２条施され、140は無紋の体部にタタキ目が観察できる。これも古い特徴である。Ⅰ系の存在を考えると混在かも知れない。

台付甕は低脚が主である。脚端部は141・146は面をなしており、単なる上げ底とは異なる。143は口縁部・体部上半の特徴がＩＷ系甕に共通する。内面のケズリも不十分である。ＩＷ系の変換したものであろう。

148・149はこれまで類例の無い甕である。148は体部内面にケズリが観察でき口縁部の刻みもいくらか他と共通すると言えるが、149は口縁部は肥厚気味で強くヨコナデされ、体部ミガキの有無は不明である。外面にはハケメ工具による羽条の圧痕が施されている。体部下半にはタタキ目が観察できる。まるで149・148は原型と模型との関係のようでもある。

Ⅴ系　155は受口状の口縁部をもち、全体に粗いハケメ調整が施され、刻みや紋様も同一工具で行われている。

２期ｂ　資料的には極めて不十分である。

ＳＢ０３　13は焼成前穿孔で、Ⅰ系有孔鉢の変換したものと考えられる。17は台部に大形円孔をも
（図版21）つ台付鉢で、杯部は大きく開く。凹線は杯部が10条、台部も５条と多条である。外面に

はタタキ調整痕が観察できる。杯部内面にはミガキが施されている。

ＳＢ１１　65は系譜が不明である他はすべてⅣ系である。太頸壺は単純口縁が出土している。2期ａ
(図版24・36)　と差はない。63はおそらく細頸壺である。64はミガキの範囲が広い。299は細頸壺で、上から櫛描直線紋とハケメ工具連続圧痕の反復、波状紋、斜格子紋となり、紋様構成が複雑化している。

大渕遺跡出土土器の変遷について

Ⅰ系　Ⅰ系は1期には壺・甕・鉢など器種も多様で一応すべての器種がそろっている。しかし、紋様的には壺に磨消線紋の使用頻度が低く、阿弥陀寺遺跡とは様相が異なる。このことは大渕遺跡が〈凹線紋系土器〉出現期に成立するという点に関わるのであろう。つまり、阿弥陀寺遺跡では「Ⅱ－2期」に盛行する磨消線紋系列が固有の伝統として継承されているのに対して、大渕遺跡ではそうした余地が無かったのである。同様のことは甕について言えそうで、これまでのところ指頭圧痕紋を有する例がほとんど認められていない。ただこうした点が同時期の系譜的な相違であるのか、あるいは多少の時期差を含むものであるかは実際明確ではない。2期には一部器種の残存があるようだが、基本的には頻度的に急激な低下を示す。

Ⅱ系　1期ではⅡＮ系が若干出土している。器種は深鉢と無頸壺である。ＳＢ０５の246～248は口縁部内面の櫛刺突紋が点列状で典型的である。249は口縁部内面に櫛条痕（一部列点状をなす）が施され、犬山市上野遺跡など知られている類例の少ない資料である。同じ所から出土している251はⅡ系深鉢がⅣ系に変換したものである。この系は2期以降も存在するが、大渕遺跡では確定したものとなっていない。

ところで、ⅡＳ系はすでに独自の存在ではなくなっており、ここで触れるものではないけれども、Ⅰ系に現れた斜格子紋や頸部の隆起などのように本来Ⅰ系固有ではない要素の取り扱いで問題となる。これらについては、阿弥陀寺遺跡報告で「Ｂ系統」（ここではⅢ系に相当する）としたが、どうもそうした理解では問題があると考えるようになった。たとえば90・125・286では櫛描直線紋は区画帯的な用法であり、本来Ⅰ系での用法とは異なるからである。共通した用法はⅡＳ系の多重沈線帯による区画と斜格子紋の組合せしかない。そうなると、Ⅰ系分布圏内において従属的に存続していたか、あるいはⅣ系の波及によって当地方の土器製作の場が不安定になったのを契機に表面化したかである。

Ⅲ系　1期は壺は確認したが甕は不明確である。2期は壺・甕とも出土頻度が著しく高くなる。ほとんど搬入品と考えられるから、人的な交流を含む現象である可能性が高い。

Ⅳ系　太頸壺。受口状口縁例に大きな変化はない。単純口縁例は1期には口縁部内面紋は櫛による連続刺突紋がほとんどで、2期にはほとんどがハケメ工具連続圧痕に変わる。扇形紋は2期以降に盛行するのであろう。頸部紋様は、1期は断面三角形突帯は存続するのに対

し、ハケメ工具連続圧痕帯は２期以降器面に直接施される連続圧痕紋となる。

細頸壺。袋状口縁例は、１期には口縁部の凹線は２条程度で以下の羽状紋は櫛で施されていたのが、２期には凹線は３条以上となり羽状紋もハケメ工具連続圧痕となる。この羽状紋は以降段数を減少し、また圧痕の方向もそろえて羽状でなくなる例も現れる。最後には１段となる。こうした羽状紋の変化に連動して口縁部の形態も口径比を増す方向に変わる。体部紋様は複雑な構成が２期以降に出現するのは阿弥陀寺遺跡でも同様である。

甕。１期には台付甕は成立していない。平底か若干の上げ底が存在する。体部上半は横ハケメを特徴とするの、縦ハケメ→タタキを施すもの、タタキ→縦ハケメを施すものがある。２期は低脚と高脚の２者の台付甕が出現する。前者は上げ底の類型化？したもの、後者はＩ系台付甕からの変換であろう。そのほか、体部外面に波状紋を施すものや受口状口縁を有するものが現れる。２期ｂ以降は台付甕が主流となる。

Ｖ系　　２期に出現するが、ＩＷ系分布圏を経由したものかも知れない。出土頻度は高くない。

（石黒　立人）

参考文献

石黒立人　1990a「弥生時代の遺構と遺物」『阿弥陀寺遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター

1990b「濃尾の弥生土器」『伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題』東海埋蔵文化財研究会

石　　器

石　鏃　全体で16点出土している。内訳は有茎三角形６点・有茎五角形８点・柳葉形１点・不明１点となる。有茎三角形鏃は長さの長短により、大型のものと小型のものに分かれる。有茎五角形鏃の中には、818のように長さ5.48cmを測る長大なものがあり、側部が内弯し刃部の基部でやや突起状を呈する。また、819も基部付近が突出する。831は、先端に近いところが最大幅になるもので、基部が欠損している。

磨製石鏃は４点出土しているが、834と835は同一固体である可能性が高い。そうすると、有茎三角形２点・柳葉形１点となる。

磨製石鏃　太型蛤刃石斧は８点出土しており、840以外は全て欠損の部位がある。840についても、刃部は非常に磨滅しており、やや平坦にさえなっている。また、841は欠損側がよく磨かれており、砥石として転用されていたと思われる。

偏平片刃石斧は５点出土しており、843以外は部位のどこかに欠損部分がある。

叩き石　確実に叩き石と認定でき図示したものは８点であるが、その他叩打部を持つものは20点近くあり、さらに詳細に検討すれば増加する可能性がある。柱状５点・小型柱状１点・円球状１点・不定形１点がある。不定形なもの854は、側面は磨面がみられる。

台　石　長さ18cm・幅12.4cm・最大幅5.5cmを測るもので、ＳＢ１２より出土している。上・下面が凹状になり磨痕がみられ、石皿・砥石としての機能が考えられる。（写真図版171）

0.21cmを測る。暗緑色をした凝灰岩である。836は一方が欠損しており、現長2.03cm・径0.24cm・孔径0.10cmを測る。褐色をした凝灰岩である。

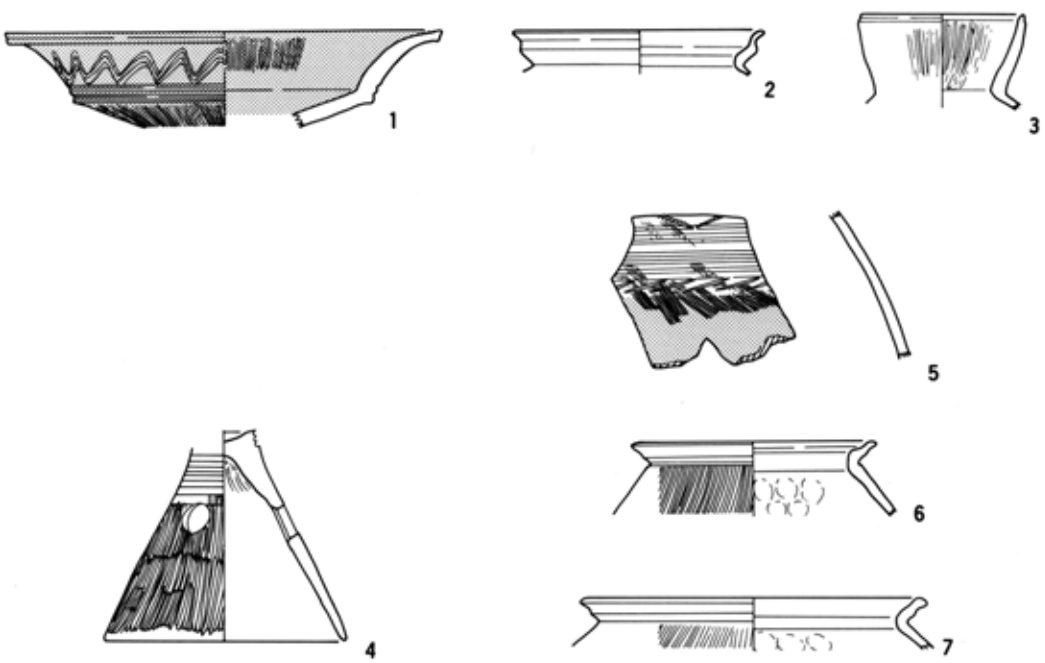
ガラス玉　中世の溝ＳＤ１８より出土しており、当該期に下る可能性もあるが、その形態からみると弥生時代のものと思われる。淡青色を呈し、径0.43cm・厚さ0.27cm・孔径0.14cmを測る。(838)

弥生時代後期以降

ＳＤ０１　第59図１の高杯は山中期通有の外反する杯部をもつもので、外反した杯部の下端に不揃いの原体で横線を巡らし、その上部に波状紋を施している。外・内面とも丹彩されている。２はＳ字状口縁甕Ｂにあたり、３はヒサゴ壺の口縁部となる。

そ の 他　第59図の４・５は欠山式通有の土器であり、４は内弯する深い杯部をもつ高杯、５はパレススタイル壺の体部中位で、丹彩が施される。６・７はともに古墳時代中期の土器で、７はＳ字状口縁甕Ｄ類の松河戸式にあたるものである。

（宮腰　健司）



第59図　弥生時代後期以降出土土器（１／４）

2．古墳時代後期～平安時代中期

土　　器

分　　類　大きく分類すれば土師器・須恵器・灰釉陶器の３つに分かれる。各々の分類はさらに器種に分割され、器種の中でいくつかの型式に分かれるものについてはアルファベット順に名称をつけ、一般的名称として定着しているものはそのままもちいた。（第60図）

土 師 器　煮炊具である甕・把手付甕・甑、食器である杯がある。

・甕

A　口頸部から口縁にかけて強いナデが施されるもので、特に口縁端部は上方につまみあげられるようになるもの。口縁端部の形状によりさらにＡ１～Ａ３類に分けられる。

B　口縁部がく字状に外反するもので、端部は丸い。単純口縁。

C　頸部から口縁にかけて強いナデが施されるもので、口縁端部は横位から下位の方向につまみだされる。口縁端部の形状によりさらにＣ１～Ｃ３類に分けられる。

D　頸部から口縁にかけて強いナデが施されるもので、口縁端部は外上方に延びるもの。

E　頸部から口縁にかけて強いナデが施されるもので、口縁部が大きく外反するもの。口縁端部は丸い。

F　頸部から口縁にかけて強いナデが施されるもので、口縁部が逆ハ字状に外に開くもの。小型品。

G　口縁部が強く外反し、荒いハケが外面及び口縁内面に施される。口縁部の違いによりＧ１～Ｇ３類に分けられる。

H　口縁部が水平になるぐらい外反するもので、外・内面ともナデ・イタナデが施される。

・把手付甕

上記の土師器甕に把手が付いたもの。分類は甕と同様とする。

・甑

逆ハ字状の円筒形の体部に把手が付き、底部に孔が開けられているもの。

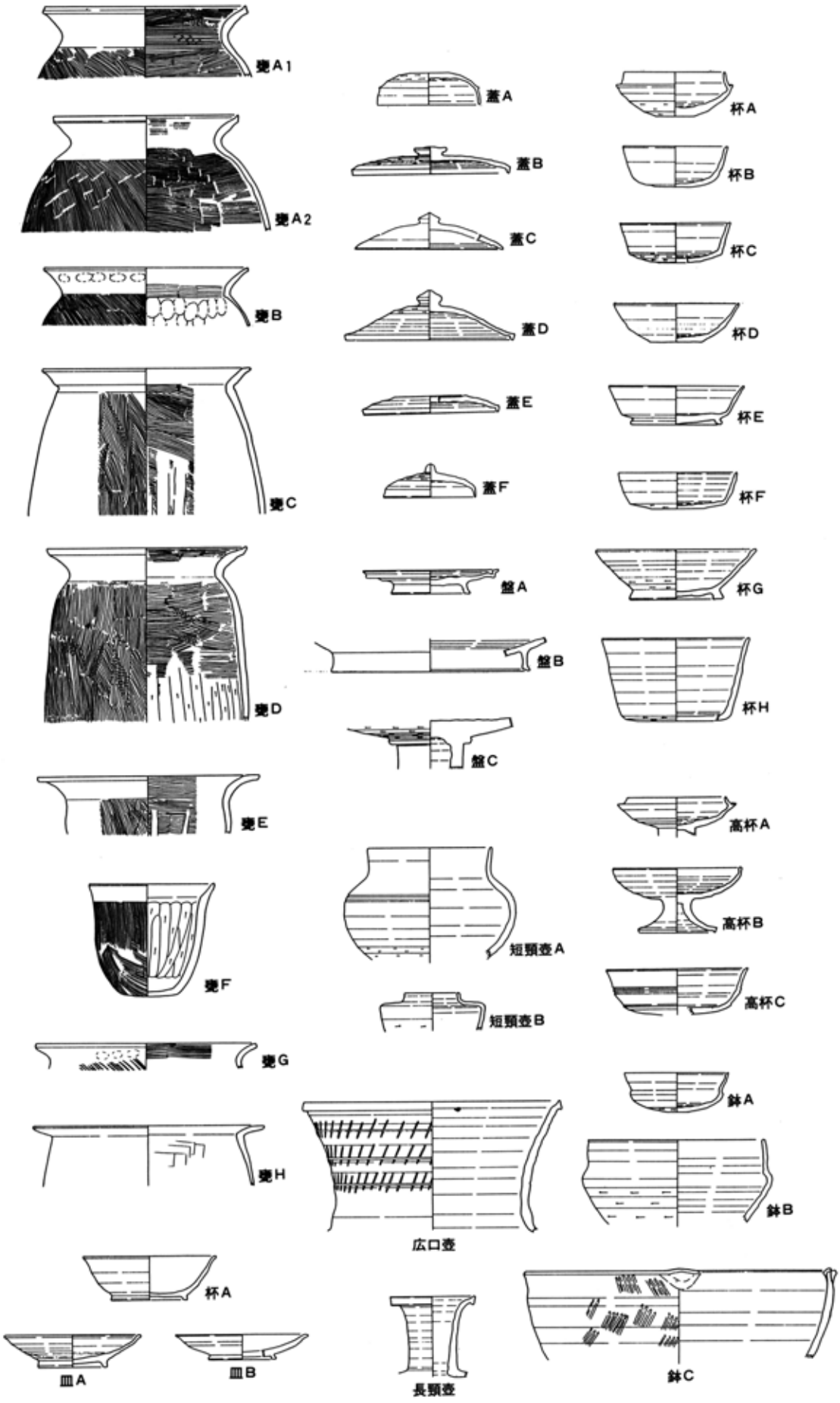
・杯

器高の低い皿状の形態をなすもので、ヘラミガキ・暗紋が施される。

須　恵　器　煮炊具である甑、食器である杯・甕・盤・鉢・高杯・甑・平瓶・貯蔵具である甕・広口壺・長頸壺・短頸壺・広口壺・提瓶がある。

・甑

A　逆ハ字状の円筒形の体部に牛角把手が付くもの。


甕A1
甕A2
甕B
甕C
甕D
甕E
甕F
甕G
甕H
杯A
皿A
皿B
蓋A
蓋B
蓋C
蓋D
蓋E
蓋F
盤A
盤B
盤C
短頸壺A
短頸壺B
広口壺
長頸壺
杯A
杯B
杯C
杯D
杯E
杯F
杯G
杯H
高杯A
高杯B
高杯C
鉢A
鉢B
鉢C

第60図　主要器種分類

B　鉢の体部に半円状の把手が付くもの。

・杯

A　体部にかえり部と受部をもつ、古墳時代からの伝統的な杯。

B　やや丸い体部をもつもので、底部は静止ナデか粗面のままになってい。

C　杯Bの底部外面にヘラケズリか施されたもの。

D　逆ハ字状にたちあがるやや深い体部をもつもので、底部がはっきりとしている。

E　箱型の体部をもつので、高台が付く。

F　杯Eの高台がないもので、底部は回転ヘラケズリが施される。

G　杯Dに高台が付くもの。

H　体部の器高が高く、深い箱型になるもの。

・蓋

A　天井部が丸い古墳時代からの伝統的な蓋。

B　端部が折り返されるもので、宝珠つまみが付く。

C　内面に受け部が付くもの。

D　器高が高く丸みをおび、やや外反して口縁部にいたるもの。宝珠つまみが付く。

E　蓋B・Dと同形態なすが、天井部か平たく、宝珠つまみが付かない。

F　端部が垂直に下がり、壺蓋になるもの。

・盤

A　浅い体部で、端部が折り返されたようになるもの。通常の高台が付く。

B　盤Aに高めの高台が付くもの。

C　盤Aに高杯の脚が付くもの。

・鉢

A　頸部が体部とあまり差がなく、偏平な体部に内弯する口縁部をもつもの。小型品。

B　頸部が体部とあまり差がなく、短い口縁部をもつもの。肩部が最大径になる。

・高杯

A　杯Aに脚が付くもの。

B　杯Bに脚が付くもの。

C　杯Bの杯部に沈線が巡るもの。

・甕

体部最大径が口縁部より大きく、タタキ成形されるもの。

・長頸壺

頸部が長く、口縁部にいくに従いゆるやかに外反するもの。頸部と体部の接合部は細い。

・短頸壺

A　体部に比べて、頸部が太く短いもの。

B　短頸壺Aに比べて頸部は締まり、肩部が張るもの。

・広口壺

体部に比べて、頸部が太く口縁部が大きく開くもの。

・提瓶

偏平な球形の体部側辺に口縁部が付くもの。

灰釉陶器　食器である杯・皿がある。

・杯

A　内弯してたちあがる体部に丸く外反する口縁をもつもの。高台が付く。

・皿

A　やや内弯する杯部をもつもの。高台が付く。

B　直線的な浅い杯部をもつもの。高台が付く。

ＳＥ０９　須恵器

壺Ａ・杯Ａ・高杯Ａ・Ｃ・平瓶・甕・甑Ａ・短頸壺Ａ・提瓶がある。蓋Ａに分類した351は口縁の端部が外反するというやや特異な形態をもち、焼成も軟質で砂粒の多い白っぽい胎土をしている。口縁内面には使用時に生じたものかと思われる多くの剥離が認められる。これと同じ焼成・胎土をもつものが352で、杯Ａに類似する。受け部は上方にまっすぐに延び、底部外面にはわずかな静止ヘラケズリがなされるのみで成形時のままになっている。杯Ａである345～350は、受け部の立ち上がりに差があるものの、口径や調整方法などほぼ同じものである。345と346の受け部端には使用痕と思われる欠損・磨滅が多くみられる。また、345には外・内面ともススが多量に付着していた。347の底部外面には並行して走る４本（うち最外のものが長い）の直線のヘラ記号がつけられている。高杯Ａの353は上述した杯Ａに脚がついたもので、355は高杯Ｂもしくは杯Ｂのどちらかであろう。高杯Ｃの359は２条の沈線が巡らされ、焼成が軟質で杯底部内面に木葉痕を残しており、同じく軟質の高杯脚357と同一個体である可能性がある。354は平瓶の口縁である。361は甕で体部外面に斜方向の平行タタキと３条の沈線が施され、内面はユビ及びイタによるナデ調整がなされている。362は甑Ａの体部上半。363・364は短頸壺Ａにあたる。369は提瓶になる。

土師器

甕Ａにあたるものばかりで、小型の369以外は大型のものになる。口縁端部の形態により、ヨコナデで内側につまみ上げるＡ１類（366～369）と上方につまみ上げるＡ２類(370～371）に分かれる。

ＳＥ２８　杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｅ・高杯脚・甕・広口壺・鉢Ｂがある。372の杯Ａは口径も狭く、立ち上がりも短い。373は杯Ｂで底部外面に静止ヘラケズリがなされ、Ｔ字状のヘラ記号がある。374は杯Ｂにあたり、底部外面に静止糸切りの痕跡がみられる。375は高杯Ｂの脚で、やや軟質である。377は短頸壺Ａで、口縁部がやや内弯して立ち上がり、肩部付近まで回転ヘラケズリが施される。378は広口壺で、３条の横位の沈線で区切られた部分にそれぞれ縦位の沈線が施される。

土師器

甕Ａ１類（379～381）と甕Ａ２類（382）があり、全体に口縁部端面が狭くなっている。また、甕Ｃ１類になるものとして383があり、口縁部がやや内弯気味になり、わずかに横方向にナデ上げられている。388の口縁はあまり外方に延びないが、甕Ｃになるか。385は甕Ｂになる。386・387は口縁部が大きく外方に広がる甕Ｅで、384も同類かと思われる。389は甑の口縁部である。

ＳＥ３１　須恵器

蓋Ａ・杯Ａ・瓶がある。蓋Ａの390～392は口径も大きく、天井部も丸い。杯Ａの393・394は同形体をなし、口径も大きく器高い。395もよく似ているが、立ち上がり部が短い。396は瓶で、注口が外に突出していない。肩部まで回転ヘラケズリがなされる。397の三方向に透穴をもつ脚を有するものは、脚付短頸壺であろうか。

土師器

甕Ａ１類（398・399）とＡ２類（400）がほとんどを占めている。

ＳＥ３２　須恵器

蓋Ａ・杯Ａがある。蓋Ａの401・402の天井部は丸く、403は平たくなっている。３点とも口径は大きく、自然釉の付着が多い。杯Ａの404・405はほぼ同形で、体部１／２以上に回転ヘラケズリがなされている。口径は大きい。

土師器

甕Ａ１類（406・408）と甕Ａ２類（407・409）がほとんどを占める。甕Ａ１類の408は上方に強くナデ上げられるものであるが、408はそれが弱くなっている。410は長胴の甕の体部であり、外面のハケの中に、体部下方から上に向かって施され中位で折り返されるものがみられる。内面は横位のハケの後、下方から上方へのヘラケズリがなされている。

ＳＫ１２　須恵器

蓋Ａ・杯Ａがある。蓋Ａは天井部がやや平たくなるものである。杯Ａの中には、412のような口径の狭い小型のものもあり、大小の差がみられる。415は壺類の底部であろう。

土師器

甕Ａ１類（418・419・421）と甕Ａ２類（417）がほとんどを占める。全体に口縁端部の面は狭い。420は甑で、底部に半円形の大きな孔を二ヶ所もつ。また、体部下位には対面の位置に二ヶ所、焼成前穿孔の小孔がみられる。口縁部には強いヨコナデがなされ、体部外面には縦位のハケ、内面には横位のハケ後ユビナデが施される。把手は、ユビによる押圧のみで成形される。

ＳＥ２１　遺物は小片がわずかに出土しただけで、実測できたものは土師器甕Ａ２類（422）と甕底部（423・424）のみである。423・424は井戸最下層より立位の状態で出土している。

ＳＥ１３　須恵器

蓋Ｂ・杯Ａ・高杯Ｂがある。蓋天井部外面２／３に回転ヘラケズリがなされる。杯Ａは偏平な体部をもつもので、底部外面付近にわずかに回転ヘラケズリがなされるもの(427・

428）や成形時のままのもの（426）がある。

土師器

甕Ａ１類（432・434）とＡ２類（430・431・433）がある。

ＳＥ０６　把手付甕ＡのＡ１類が出土している。口縁端部は内上方にナデ上げられ、偏平な体部を呈する。ユビ押圧のみで成形された２個の把手が対面に付く。

ＳＥ２２　須恵器のみが出土する。436は杯Ａで、偏平な体部をもち、体部外面２／３ら回転ヘラケズリを施している。437は杯Ｃ、438は杯Ｅ、440は平瓶の口縁部か。439は壺（短頸壺Ｂか）の高台と思われ、体部との接合面には、接合時につけたヘラによる条線が多数みられる。

ＳＥ２３　須恵器

高杯Ｂの脚（441）、 鼎（442）が出土している。鼎は注口が突出しているもので、体部上半にクシによる斜位の刺突がなされている。また、体部下半には静止ヘラケズリがなされる。

土師器

甕Ａ２類（443）がある。

ＳＤ９４　器蓋（444）、 杯Ａ（445・446）がある。445の底部は丸みをおび、静止のナデ（ヘラ）が施される。446は偏平な杯部をもち、１／２程度回転ヘラケズリがなされる。

ＳＸ０２　須恵器

蓋Ａ・Ｂ、杯Ａ・Ｂ・Ｃ、鉢ａ、高杯Ｂ、鼎、広口壺がある。蓋Ａ（448・449）は全体に丸みをおびて、小型のものとなっている。杯Ａ（450）も小型化し、立ち上がり部も短い。452は偏平な体部に内湾する口縁部をもつもので、体部外面下半１／３に回転ヘラケズリが施される。456の広口壺は３条の沈線かせ横位に巡り、その上からヘラ及びイタによる斜位の刺突がなされる。458の　は小型で、沈線で区切られた体部上半に斜位のクシによる刺突がなされているる体部下半には静止ヘラケズリが施される。

土師器

甕Ａ１類（463）と甕Ａ２類（464）、 甕Ｃ２類（461）、 甕Ｄ（465・466）、 把手付甕Ｃ３類（462）がある。459と460については横方向のナデが口縁端部になされ、わずかに外方に引き延ばされており、甕Ｄの範疇に入るかもしれない。462は把手部が欠損しているおり、長胴の体部と横位に引き延ばされた口縁端部をもつ。全体に体部に丸みがなくなり、円筒状になる。

ＳＥ１４　須恵器

蓋Ｂ、杯Ｂ・Ｄ・Ｅ、広口壺、甕がある。469・470の両杯とも底部外面には静止のナデ（ヘラによるものか）が施される。473は口径約59.4を測る大型の甕の口縁部である。

土師器

甕Ａ１類（474）と甕Ａ２類（475・476）がある。口縁端部が狭く、はっきりしなくなってきている。

ＳＫ４０　内面にかえりの付く須恵器蓋Ｃ（477）と、土師器甕Ａ３類（478・479）がある。土師器甕の口縁部はく字状に折れ、それに伴いヨコナデが施される範囲狭くなっている。口縁端部はナデにより内向する面が作られる。

ＳＤ６０　須恵器杯Ｃ（480）、平瓶（481）と土師器甕Ａ３類（481）、把手付甕Ａ３類（483）がある。

ＳＫ２０　須恵器

蓋Ｆ、杯Ａ、高杯Ｃがある。蓋Ｆ（484）は壺蓋になるもので、釣鐘状のつまみが付く。杯Ａの485・486は小型で、かえり部も短い。高杯Ｃ（487・488）は、杯部が直線的になり、沈線が１条しか巡らない。

土師器

489～491はともに甕Ａ３類となる。491は頸部のあまり締まらないものであり、体部内面にユビ及びイタによるナデがなされている。

ＳＥ２５　須恵器

蓋Ｂ、杯Ｂ、鉢Ｂ・Ｃがある。492・493は直線的な体部をもつ杯Ｂで、底部外面が成形時のままになっている。492の底部外面には並行する直線のヘラ記号がある。495は壺底部かと思われ、底外面に放射状のヘラ記号がみられる。499は鉢Ｃで、口縁部に２条の沈線があり、体部外面に斜位の並行タタキが施される。内面は磨滅が激しい。

土師器

500と502は甕Ｂで、器壁が薄く、砂粒の多い胎土をもつ。501も同様な傾向をみせるが、口縁部が板状に外上方にのび広いという特徴をもち、甕Ｅ及び甕Ｈとの関連が考えられる。503は平底になる甕底部である。

ＳＫ１０　須恵器

蓋Ｂ、杯Ｂ・Ｅ、短頸壺Ａがある。505は器高が非常に高くなり、器種は不明である。杯Ｅの506の底部外面には静止ヘラケズリが施される。507の底部外面には、ヘ字状のヘラ記号と有機物（墨痕か）がみられる。短頸壺Ａ（509）は、口縁端部が丸く肥厚し、底部外面に回転糸切り痕が残る。口縁部は、焼成時に変形し歪んでいる。

土師器

甕Ａ３類（511）と甕Ｂ（510）がある。

ＳＫ１１　513は須恵器壺底部で、下半に回転ヘラケズリが施される。514・515は土師器甕Ａ２類になるもので、両者とも頸部が太く、514は体部が深鉢状を呈する。512は土師器甕底部で、外面はナデ（ユビか）が施され、底部外面に木葉痕がみられる。

ＳＤ４１　須恵器

蓋Ｂ、杯Ａ・Ｂ・Ｅ・Ｆ・Ｈ、短頸壺Ｂ、瓶、甕、鉢Ｃがある。杯Ａである521は小型のもので、器高も低く、底外面にわずかに回転ヘラケズリが施される。杯Ｆの525は器壁が厚く、口縁端部もやや丸い。底外面には回転ヘラケズリが施される。526～530は杯Ｂで、底外面には静止のナデ及びヘラケズリがなされる。527は底部の粘土が横に肥厚し、

高台状になる。533は杯部が深くなる杯Hで、高台の有無は不明である。532は瓶で、注口部がわずかに突出し、体部上半の沈線で区画された部分に、クシによる斜位の刺突がなされている。535の甕は、口縁端部が肥厚して丸く、斜位の並行タタキがなされている。537は鉢Cで、口縁端部を内方にナデ、一方向の片口を作っている。体部は並行タタキ後回転ナデがなされている。531は器種不明である。

土師器

538は杯でやや丸みを帯びた箱型の杯部をもち、口縁端部がヨコナデにより丸く肥厚する。外内面ともヘラミガキが施されるが、剝離が激しく詳細は不明である。また、杯部内面には下半に縦位の、上半には格子状の暗紋がなされる。539は甕A２類、540は甕A３類になる。器壁が薄く、砂粒の多い541は甕Bになる。甕Dである542・543は、口縁部が直線的になり端面がわずかみられる程度になる。

ＳＥ２６　須恵器蓋B（544）とやや杯部が丸みを帯びる杯E（545）、口縁端部上面がわずかに凹状になる土師器甑（551）がある。

ＳＥ２９　546・547は須恵器の杯で、杯部が浅く口縁端部が鋭く、杯Dもしくは杯Gにあたるかと思われる。548は蓋B、549は杯E、550は器種不明である。

ＳＤ７２　552・553は、須恵器蓋Bになる。554は土師器甕で、口縁端部がナデにより外下方に延びる、甕C３類にあたるものである。

ＳＤ９７　555～563は須恵器である。555・556は、須恵器蓋Dになる。557は長頸壺の口頸部で根口縁端部が上下に延びる。558は、高い脚をもつ盤Cになるもので、杯部と脚部の接合による突帯状がみられる。559・560は甕口頸部、562・563は壺底部・高台部にあたる。561は平瓦の端部で、淡橙色を呈する。内面には布目・縄痕がある。その他瓦片は５点出土する。

ＳＤ４９　須恵器

杯B・C・D・E・F・G、長頸壺、甑B、短頸壺Aがある。杯Fの564の底部外面には回転糸切りが施される。同じ器形の565には回転ヘラケズリがなされ、並行する２条のヘラ記号をもつ。566は杯BもしくはDで、567は底部外面に回転糸切り痕をもつ杯Dである。杯Gである569も底部外面に回転糸切り痕をもち、並行する２条のヘラ記号をみられる。572はユビ押圧のみで成形された半円環状の把手をもつ、甑Bである。575は短頸壺Aで、口縁端部が回転ナデにより外方に肥厚する。573は長頸壺の体部下半・高台部、574は短頸壺Bの体部下半か。

土師器

576は甕Fで、逆台形状を呈する体部と、強いヨコナデにとり外方に延びる単純口縁をもっている。外面は縦位・斜位のハケ、内面はヘラケズリが施される。

ＳＫ０６　全て須恵器である。577は器高が高く、内弯する蓋Dである。578～581・583は底部外面に回転ヘラケズリを施す杯Fになる。582・584は杯Dで、底部外面に回転糸切り痕がみられる。585は長頸壺の頸部、586は底部の広い杯G、587は盤Aになる。

ＳＤ０２　全て須恵器である。588・589は蓋D、590は杯F、591・592は杯E、593・594は盤A、

595は高台の高い盤Ｂになる。

ＳＤ９０　須恵器

596は底部外面に回転糸切り痕のある杯Ｄ、597・598は杯Ｅになる。

土師器

602は、口縁部がく字状にゆるやかに外反し、外面に左上から右下にかけて、口縁内面には横位に条痕状の荒いハケが施される甕Ｇ１類になる。599～601甕Ｈで、口縁部が水平に直角に折れ、外・内面ともユビ及びイタによる丁寧なナデで仕上げられている。603は土錘に似た円筒状の土製品で、被熱しており、自然釉が付着する。フイゴの口部になるか。

ＳＥ０１　須恵器

604・605は杯部の浅い盤Ａで、606は灰Ｅになる。607～609は底部外面に回転糸切り痕のある杯Ｄで、608は口縁に二ヶ所の欠損部があり、そこからススが垂れたような状態で杯部に付着しており、燈明具として用いられたと思われる。610は長頸壺の口頸部、611は水注の注口である。

土師器

612～614は甕Ｇ２類で、口縁部が段をもって屈曲する。器壁は厚く、外・内面とも荒いハケが施される。平底の615は、荒いハケをもち、甕Ｇの底部になるであろう。616は603と同様のものである。

ＳＥ１０　617は灰釉陶器皿Ａで、つけがけ釉が杯部になされる。618は須恵器長頸壺の体部下半・高台部となる。

ＳＥ２４　619は灰釉陶器皿Ｂで、内面全体に釉がかかる。底部外面には回転ヘラケズリが施されており、「乃」が墨書される。620は内湾する杯部とわずかに外反する口縁部をもつ椀Ａで、全体に釉がかかる。621・622は須恵器蓋Ｄ、623・624は長頸壺の口縁部にあたる。

ＳＥ２７　625・626はそれぞれ小型・大型の杯釉陶器椀Ａで、高台部が高くなっている。両者とも内面に釉がかかる。626はやや杯部の浅い灰釉陶器皿Ａで、内面全体に釉がかかる。627は皿Ｂで、杯部１／２程度につけがけ釉がかかる。629・630は土師器甕Ｇ３類になる。

その他の土器

緑釉陶器　３点出土しており、全て杯である。862が一番残りがよく、杯釉陶器杯Ａになる。写真図版７も同じ器種になると思われ、両者とも淡緑色の薄い釉がかけられている。写真図版６は中世の方形土坑ＳＫ９４から出土したもので、口縁部にあたる。釉調は暗緑色を呈する。

製塩土器　知多式製塩土器の脚ばかり43点出土している。ユビ押圧で成形される大型のものと、ナデられる小型のものがあり、知多３・４類にあたる。(866～888)

土　錘　「Ⅶ－２、大渕遺跡出土の土錘」についてを、参照されたい。

そ の 他　864は小片であるが円面硯の杯部、863は１／３片残存する盤Ｂの大型品で、包含層よりの出土である。865はＳＫ３７より横位の状態で出土している。ほぼ完形。

文 字 資 料

木　簡　ＳＤ８９の上層より出土。木簡は下端にわずかに先に尖らせた痕跡がみられるが、その他は上端が折れ、左右も荒く割ったままで、裏面も剝離したままになっている。全体に墨痕は薄く、時間の経過とともに出土時よりも文字の判読がしにくくなっている。現況の長さは（225)×幅(18)×厚さ(６)㎜で、木簡学会の型式番号の051型式「長方形の材の一端を尖らせたもの」か081型式「折損、腐蝕その他ににによって原形の判明しないもの」のどちらかであろう。釈文としては、「□物□（部ヵ）□□」があてられる。(867)

土　器　856は60Ｄ区の包含層より出土したもので、須恵器系杯Ｃ及び杯Ｈの底部にヘラ状工具で「□月」と書かれている。855は中世のＳＤ１００より出土したもので、甕及び壺の体部にヘラ状工具で「奈口□□」と書かれる。

石　　器

勾　玉　ＳＢ４２の南東隅柱穴の中位の壁際より出土したもので、暗茶褐色と白色の縞模様を呈する蛋白石である。(861)

紡錘車　包含層より２点、ＳＫ１０より１点出土している。そのうち859と860は無紋であるが、858は、下面と側面に中を斜格子紋で充塡した鋸歯紋が沈線で施されている。また、孔内部には鉄芯が残存していた。石材は、全て滑石である。

木 製 品

下　駄　Ⅰ期にあたるＳＥ０９・31・32より連歯の下駄が出土している。ＳＥ０９出土の891は右足用で、右部と後部が欠損しているが、方形を呈するものと思われる。前部の紐孔と後部の紐孔１のみが残存しているが、その間隔はやや長い。892は完形のもので、足（指）痕がみられる。左足用。ＳＥ３１出土の889は右足用で、後部が欠けているものの２つの歯部と３つの紐孔は確認できる。また、表前部には足（指）痕がみられた。ＳＥ３２出土の890は縦２／３と前部が欠損しており、裏面の前部に前歯の痕跡が窺える。895はⅢ期にあたるＳＥ０７にり出土している、小型の左足用のもので、出土時より歪みが激しく、前部の紐孔が２つみられる。

鎌　柄　Ⅰ期のＳＥ３２より出土したもので、やや「く」字状に折れる偏平な長方形の棒の先端に縦位に焼く2.5㎝の切込みをいれ、刃が差し込めるようになっている。また、それとは反対側の先端は突起状に削り出されている。(893)

箸　Ⅰ期のＳＥ３２より出土したもので、長さ22㎝・厚さ0.65×0.5㎝のやや偏平に面取りされ、両端にいくほど細くなっている。(894)

折　敷　Ⅲ期の井戸ＳＥ２４の底部に敷かれた状態で出土したもので、上に二段の曲物が乗る。隅丸長方形の短部側が突出した形態をしており、１枚の板より削り出している。それに側板が乗るのであるが、長方形の形状にあわせて外側から若干削り込まれ、側板が動かないように、８ケ所樹皮で綴じてある。また、曲物の痕跡が明瞭に残存している。(第42図)

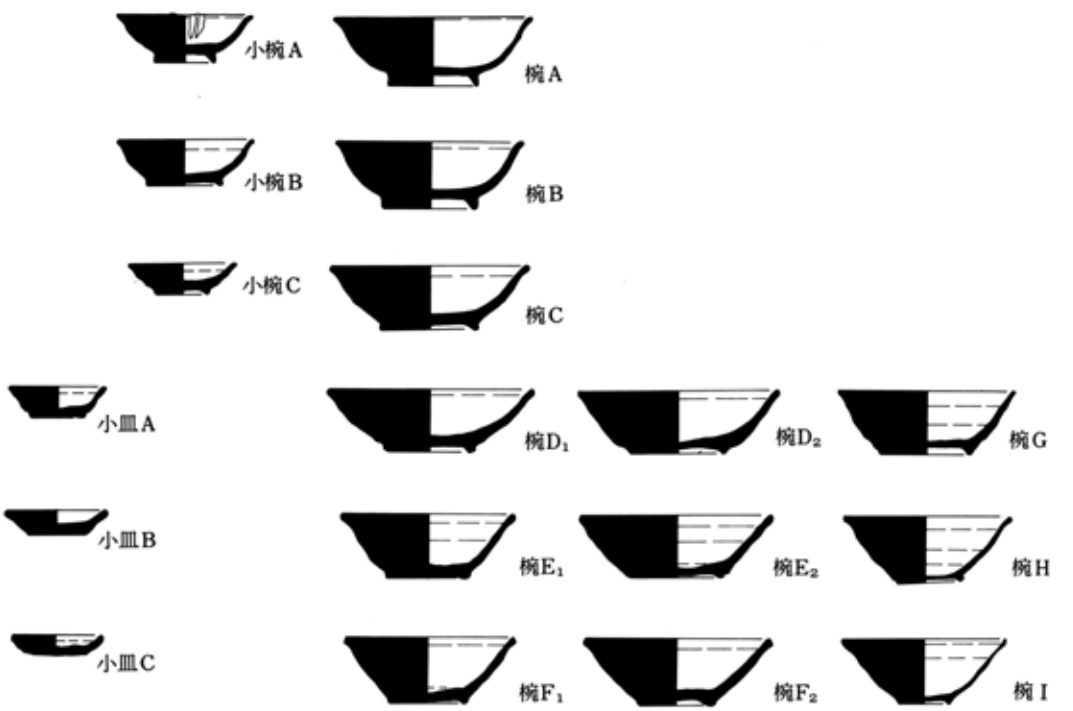
3．平安時代後期～室町時代

土　器

平安時代後期～室町時代に属する土器・陶器は、量的にはあまり多数とはいえず、その大半が溝からの出土で占められている。ここでは、これらについて、遺構埋土中より出土したものを中心に説明を加えるわけであるが、周知のように今日これらの分類については様々な意見がみられるため、事前に混乱を避けるため、土器・陶器類について、若干の分類と用語の整理をおこなう。

種　類　土器・陶器の種類には、前者については土師器、後者については灰釉系陶器・施釉陶器がある。

器　種　土器の器種としては、杯・皿・甕・鍋・釜がある。これらについては、一般的な呼称に従うこととする。次に陶器についてであるが、施釉陶器については、やはり一般的に用いられるものに従う。最後に灰釉系陶器についてであるが、器種としては、椀・小皿・蓋・壺・甕・鉢・陶錘があるが、特に大渕遺跡におけるこの時代の土器・陶器のなかで量的に最も多い椀・皿類については、以下に示す分類をさらに加えることとする。この区分は具体的には、椀についてはまず、大・小にわけ、さらに大型の椀を９つに（A～I）、小型の椀を３つに（A～C）区分した。また、小皿については、３つの（A～C）区分した。



第61図　灰釉系陶器　椀・皿の分類

椀　A　器高が高く、器壁は薄い。仕上げが他に比べ、ていねいであることが特色。多くは灰釉を薄く口縁部〜体部上方にツケガケすることを原則とする。形状は、体部が下方に丸みを持ち、全体に内湾ぎみで、口縁部は体部から外反し、丸く納められている。内面は、体部とみこみとの境が不明瞭で、みこみは平坦である。高台は高く、内外面丁寧にナデ付けられる。端部はやや尖り、平面形は整円であるものが通例である。

椀　B　椀Aの形状をややにぶくした形態。仕上げはていねいである。形状は。体部が下方で丸味を持ち、内湾して口縁部に至る。口縁部は外反し、丸くおさめられている。内面は、体部とみこみとの境が不明瞭で、みこみはほぼ平坦である。高台はやや高く。内外面ていねいにナデ付けられる。端部はやや丸く、平面形は整円である。

椀　C　口径・底径の割に器高がやや低く、全体に偏平で器壁はやや厚い。形状は、体部が下方で丸みを持ち、わずかに内湾して口縁部に至る。口縁部はやや外反し、丸くおさめられている。内面は、体部とみこみとの境が不明瞭で、みこみはほぼ平坦である。高台は低く、内外面ナデ付けられる。平面形はややゆがむ整円で、端部には砂粒もしくはモミガラの圧痕を留めるのが通例である。

椀　D　砂粒を胎土の混和材として若干用いた、やや粗雑な胎土を用いることが特色。口径・底径の割に器高が低く、全体に偏平な形状である。器壁はやや厚い。口縁部の形状は基本的には丸くおさめられているが、外面にわずかに帯状の面を持つ傾向がある。仕上げはややラフで、このため外面の中央が浅くくぼむものもみられる。内面の形状は、体部とみこみの境が不明瞭で、みこみはややくぼむ。仕上げはややラフである。高台は低く、内外面ナデ付けられるが、低くつぶれている。平面形は楕円。端部にはモミガラの圧痕を留めるのが通例である。

なお、椀Dは、体部の形状からさらに二分できる。具体的には、体部が丸味を持ち、口縁部で外反するもの（D１）と、ほぼ直線的なもの（D２）である。

椀　E　砂粒を胎土の混和材として用いた粗雑な胎土を用いることが特色。ぬた痕が多く観察でき、器壁はやや厚い。口縁部の形状は、外面に帯状の面を持つ。端部はやや丸い。仕上げはややラフで、外面の中央が浅くくぼむものもみられる。内面の形状は。体部とみこみの境が比較的明瞭で、この部分がややくぼむものもみられる。仕上げはややラフである。高台は低く、内外面ナデ付けられる。平面形は整円。端部にはモミガラの圧痕を留めるのが通例である。

なお、椀Eは、形状からさらに二分できる。具体的には、体部下方にわずかに丸みを持ち、やや小振りなもの（E１）と、体部が直線的に延び、口径・底径の割に器高が低く、偏平な形状をとるもの（E２）である。

椀　F　砂粒を胎土の混和材として用いた、粗雑な胎土を用いることが特色。ぬた痕が多く観察でき、器壁は厚い。体部の形状は直線的である。口縁部の形状は、端部が尖り、外面に帯状の面を持つ。仕上げはラフで、外面の中央が浅くくぼむものもみられる。内面の形状は、体部とみこみの境が明瞭で、この部分が浅くくぼむものもみられる。仕上げはラフで

ある。高台は低く、内外面ナデ付けられる。平面形はややゆがむ整円。端部にはモミガラの圧痕を留めるのが通例である。

なお、椀Ｆは、体部の立ち上がりの形状からさらに二分できる。具体的には、やや開くもの（Ｆ１）と、大きく開き、口径・底径の割に器高が低く、偏平な形状をとるもの（Ｆ２）である。

椀　Ｇ　砂粒がほとんどめだたない緻密で均質な胎土を用いることが特色。体部は下方にわずかに丸みを持ち、口縁部に至る。内面の形状は、体部とみこみの境が比較的明瞭で、みこみは平坦である。仕上げはていねい。高台は低く、内外面ナデ付けられる。平面形は整円。端部にはモミガラの圧痕を留めるのが通例である。

椀　Ｈ　砂粒がほとんどめだたない緻密で均質な胎土を用いることが特色。器壁は薄い。体部はほぼ直線的で、口縁部でわずかに外反する。口縁部は仕上げがややラフなため、端部の中央が浅くくぼむものもみられる。口縁部は端部が尖り、外面が帯状に面を持つ。内面の形状は体部とみこみとの境で２～３㎜の段を持つものが一般的。仕上げはラフである。高台は低く、内外面ナデ付けられる。平面形は整円だが、径が小さい。端部にはモミガラの圧痕を留めるのが通例である。

小　椀　椀Ａ～Ｃをそのまま小型化したもので、詳細は小椀Ａが椀Ａに、小椀Ｂが椀Ｂに、小椀Ｃが椀Ｃにそれぞれ一致する。

小皿Ａ　砂粒を胎土の混和材として若干用いたやや粗雑な胎土を用いることが特色。器壁はやや厚く、器高はやや高い。形状は体部がわずかに内湾し、口縁部は若干外反し丸くおさめる。平底で底部はやや突出する。

小皿Ｂ　砂粒を胎土の混和材として用いた粗雑な胎土を用いることが特色。器壁は厚い。平底。仕上げはややラフで、ぬた痕が多く観察できる。口縁部は偏平で、外面に帯状の面を持つ。端部はやや丸い。内面の形状は体部とみこみの境が明瞭で、この部分は浅くくぼむ。

小皿Ｃ　砂粒を胎土の混和材として若干用いた粗雑な胎土を用いることが特色。平底。仕上げはややラフで、ぬた痕が多く観察できる。口縁部は偏平で、外面に帯状の面を持つ。端部は尖る。内面の形状は体部とみこみの境が明瞭で、この部分は浅くくぼむ。

以上、灰釉系陶器の椀・皿類について、本項で用いる分類について説明を加えたわけである。この中て、椀Ｇ～Ｉについては他のものと使用胎土に大きな差異がみられ、生産地において、いわゆる「北部系」もしくは「均質手」と呼称される一群に属する。また、生産地では、これらとセットをなす小皿もみられるが、大渕遺跡においては確認されていない。なお、ここで用いる椀Ａ～Ｆ、小椀Ａ～Ｃ、小皿Ａ～Ｃは、藤澤良祐氏の編年（藤澤1982）に対応させれば、椀Ａ・小椀Ａが２型式、椀Ｂ・小椀Ｂが３型式椀Ｃ・小椀Ｃが４型時、椀Ｄ・小皿Ａが５型式、椀Ｅ・小皿Ｂが６型式、椀Ｆ・小皿Ｃが７型式にそれぞれあてはまり、椀Ｇ～Ｉ類については、田口昭二氏の編年（田口1973）に対応させれば、椀Ｈが、ほぼ白土原１号窯式～明和１号窯式、椀Ｉが、ほぼ大畑大洞４号窯式に該当している。

平安時代

ＳＥ１１　１～３は灰釉系陶器。１は小椀Ｂ。完形。高台はややゆがむが、仕上げはていねいで、みこみには使用痕が明瞭である。２も小椀Ｂ。１と合わせ口状になって出土している。完形。３か所にやや長い輪花がある。３は小椀Ｂ。底部１／２程度の破片で腰部より上方を欠く。高台はややゆがむ。みこみには使用痕が明瞭で、灰緑色の自然釉がかかる。

ＳＥ１６　４～10まで灰釉系陶器、11～17まで土師器である。４は椀Ｂ。完形。高台はややゆがむ。みこみに黒色ないし青紫色の付着物が認められる。５は椀Ｂ。口縁部を１／２程欠く。口縁部の仕上げはややラフでゆがむ。４か所にやや長い輪花がある。高台はややゆがみ、体部と接合がやや雑。みこみは使用痕が明瞭である。６は椀Ｂ。体部以下を欠く口縁部１／２程度の破片。仕上げはていねいである。口縁部にはやや長い輪花がある。４か所として図化した。体部外面に煤状のものが付着するが、二次的に比熱は受けてはいない。みこみには使用痕が明瞭である。７は椀ＢないしＣ。体部を欠く口縁部１／３程度の破片。口縁部にはやや長い輪花がある。４か所として図化した。みこみには使用痕が明瞭である。８は椀Ａ。底部１／３程度の破片。みこみには使用痕が明瞭である。９は椀Ｂ。底部１／４程度の破片。みこみには使用痕が明瞭である。10は小椀Ｂ。ほぼ完形。仕上げはていねいである。みこみには黒色の光沢を持つ付着物が認められるほか、使用痕が明瞭である。11は皿。大振りで、体部はやや内湾ぎみで口縁部にいたる。口縁部は丸みを帯びる。底部は平底となる。残存状況は口縁部２／３程欠く。0.3～0.5㎜大の砂粒を含む胎土を使用している。ロクロまたは回転台使用で、外底部に回転糸切り痕を留める。口縁部内外面に煤状のものが付着するが、二次的に比熱は受けてはいない。みこみは使用痕により摩滅するが、いわゆる「コロシ」と呼ばれる指なで痕が観察できる。12ははいわゆる「足高高台」を持つ杯で、完形。胎土は緻密で、仕上げはていねいである。ロクロまたは回転台を使用するが、みこみと外底部、特に後者に多くぬた痕が観察でき。表面には焼成時に黒色した部分が若干認められる。13は「足高高台」片。杯部を欠く。白色の非常に緻密な胎土を使用する。仕上げはていねいである。ロクロまたは回転台を使用し、外底部には回転糸切り痕を留める。みこみにはぬた痕が観察できるほか、煤状のものが付着する。14も「足高高台」片。やはり杯部を欠く。13に比較して器壁が薄く、やや小振りだが、胎土は緻密で、仕上げはていねいである。ロクロまたは回転台使用。15は甕。口縁部の小片で、いわゆる「清郷型甕」。0.3～1.5㎜大の砂粒を含むやや粗雑な胎土を使用している。二次的な比熱を受ける。

ＳＥ１７　16～22は灰釉系陶器、23・24は土師器である。16は椀Ｂ。口縁部を１／３程度欠く。みこみには使用痕が明瞭で、仕上げはていねいである。17は椀Ｂ。体部を欠く口縁部１／４程度の破片。口縁部はややゆがむ。みこみには使用痕が明瞭である。18は椀Ａ。底部片で体部より上方を欠く。高台はややゆがむ。みこみは青紫色の付着物が確認できるほか、使用痕が明瞭である。また、他の製品の高台端部が釉着するが、ここから外側に淡緑色の自

然釉が厚くかかる。釉着した高台端部は折り取ったままの粗面となっている。なお、他の製品の釉着は、高台端部にもみられるがこの部分については研磨により平滑化されている。また、外面には灰釉を施した痕跡も観察できるが、十分な発色はせず、白変している。19は小椀C。底部片で腰部より上方を欠く。高台はややゆがむ。外底部の回転糸切り痕は、なで消されている。みこみには使用痕が明瞭である。また、この部分にはに他の製品の高台端部が釉着し、ここから外側に淡緑色の自然釉が厚くかかる。みこみは使用痕が明瞭であるが、釉着した高台端部は折り取ったままの粗面となっている。20は耳皿で、耳部を欠く。高台はやや高い。外底部の回転糸切り痕は、なで消されている。みこみ及び体部には淡緑色の灰釉を施す。21・22は広口壺。胎土・焼成などの状況がよく一致し、同一個体と考えられる。21は、口縁部1／4程度の破片。頸部はやや太く、ラッパ状に開き、口縁部で縁帯を形成する。外面及び口縁部上方には淡緑色の灰釉を施す。内面にはやや粗い布の圧痕を部分的に残す。22は、底部1／4程度の破片。底くがっしりとした高台と直線的な体部を有する。外面には淡緑色の灰釉をハケヌリするが、一部に発色不良が認められる。23は椀か。底部片で高台を有し、白色の非常に緻密な胎土を使用する。表面の摩滅が著しいが、ロクロまたは回転台を使用しているか。24は甕。口縁部の小片で、0.3〜1.5㎜大の砂粒を含むやや粗雑な胎土を使用している。二次的な比熱を受ける。

ＳＫ０５　25〜27は灰釉系陶器。25は椀Ｄ２。ほぼ完形。みこみには使用痕が明瞭である。また、ここには他の製品の高台端部が部分的に釉着し、この部分より外側に緑白色の自然釉が部分的にみられる。みこみには使用痕が明瞭で、釉着した高台端部は研磨により平滑化されている。26は椀Ｄ１。1／3程度の破片で、ひどくゆがむ。また、みこみには他の製品の高台端部が部分的に釉着し、この部分より外側に淡緑色の自然釉が部分的にみられるほか、使用痕が明瞭である。なお、釉着した高台端部は研磨により平滑化されている。また、煤状のものが付着するが、これは破面にまでおよぶ。なお、二次的な比熱は受けてはいない。27は小椀C、口縁部を3／4程度欠き、全体にややゆがむ。高台が部分的に欠落する。みこみには使用痕が明瞭である。

ＳＫ７４　28〜33は灰釉系陶器。28は椀Ｄ１。完形。仕上げはていねいである。使用痕があまり認められない。29は椀C。ほぼ完形。内面には淡緑色の自然釉が厚くかかる。みこみには使用痕が明瞭である。30は椀Dか。体部以下を欠く口縁部1／4程度の破片。仕上げはていねいで、使用痕があまり認められない。31は椀Ｄ２。底部片で体部により上方を欠く。みこみには使用痕が明瞭である。32は椀C。底部片で体部より上方を欠く。みこみには使用痕が明瞭である。33は椀C。底部1／2程度の破片。体部より上方を欠く。みこみには使用痕、ぬた痕が明瞭である。

鎌倉時代

ＳＥ０４　34〜39まで灰釉系陶器。34は椀E。みこみには使用痕が明瞭である。35は、1／5程度の破片。みこみには使用痕が明瞭である。36は椀H。底部片で腰部より上方を欠く。みこ

みには使用痕が明瞭である。外底部には墨書『清？』がみられる。37は小皿Ｃほぼ完形。口縁部付近に濃緑色の自然釉がかかる。全体に使用痕があまり認められない。38は小皿Ｂ。ほぼ完形。やや大振りで、口縁部付近に部分的に濃緑色の自然釉がかかる。みこみには使用痕が明瞭である。39は小皿Ｃ。口縁部を1／4程度欠く。口縁部及びみこみに濃緑色の自然釉が厚くかかる。使用痕が認められず、焼成時に釉着した窯壁片すら研磨を加えてはいない。

ＳＥ１２　40は土師器皿。完形。胎土は緻密で、口縁部下方で屈曲し、口縁部は丸く納める。底部は平底となる。仕上げはていねいで、ロクロまたは回転台使用。外底部には回転糸切り痕を留める。口縁部内外面に煤状のものが付着するが、二次的は比熱は受けてはいない。みこみは使用痕により磨滅する。

ＳＥ１５　41は椀Ｆ２。口縁部を2／3程度欠く。高台は部分的に欠落する。体部内面及び口縁部には淡緑色の自然釉が厚くかかる。みこみには使用痕が明瞭である。口縁部の一部には、煤状のものが付着するが、これは破面にまで及ぶ。なお、二次的な比熱はうけてはいない。42は椀Ｅ１。1／5程度の破片。体部内面及び口縁部には淡緑色の自然釉が厚くかかる。全体に使用痕があまり認められない。43は椀Ｆ１。1／3程度の破片。口縁部はややゆがみ、高台は部分的に欠落する。体部内面には淡緑色の自然釉がまばらにかかる。みこみには使用痕が明瞭である。外底部には墨書がみられるが、文字は判読できない。44は椀Ｅ。底部片で体部より上方を欠く。高台は部分的に欠落する。みこみには煤状のものが付着するほか、使用痕が明瞭である。外底部には墨書『上』がみられる。45は椀Ｅ。底部片で体部より上方を欠く。みこみは淡緑色の自然釉がかかるが、使用痕が明瞭である。46は小皿Ａ。完形。体部内面には淡緑色の自然釉がまばらにかかる。みこみは黒色の光沢を持つ付着物が認められるほか、使用痕が明瞭である。47は小皿Ｃ。口縁部を1／5程度欠く。口縁部及びみこみの一部に濃緑色の自然釉が厚くかかる。みこみには使用痕が明瞭である。

ＳＥ１８　48～50まで灰釉系陶器、51・52は土師器である。48は椀Ｆ２。1／5程度の破片。全体にややゆがむ。内面に煤状のものが付着するほか、使用痕が明瞭である。49は椀Ｅ。底部1／2程度の破片で体部より上方を欠く。内面に煤状のものが付着するほか、みこみには使用痕が明瞭である。50は小皿Ｃ。1／2程度の破片。ややゆがみ、みこみには使用痕が明瞭である。51は皿。器壁は薄く、体部はやや内湾ぎみに口縁部にいたる。口縁部は丸く納める。底部は平底となる。残存状況は、口縁部を2／3程度欠く。0.3～0.5mm大の砂粒を含む胎土を使用している。ロクロまたは回転台使用で、外底部には回転糸切り痕を留める。みこみには使用痕により摩滅するが、いわゆる「コロシ」と呼ばれる指なで痕が確認できる。52は土師器皿。器壁はやや厚く、体部はやや内湾ぎみに口縁部にいたる。口縁部は丸く納める。底部は平底となる。残存状況は、2／3程度。胎土は緻密であるが、ややゆがむ。

ＳＥ２０　53～55まで灰釉系陶器、56・57は土師器である。53は椀Ｄ。底部片で体部より上方を欠く。高台は部分的に欠落する。みこみは煤状のものが付着するほか、使用痕が明瞭であ

る。54は椀H。底部1／3程度の破片で体部より上方を欠く。みこみには使用痕が明瞭である。55は小皿A。1／5程度の破片で、みこみには使用痕が明瞭である。。56は鍋で、いわゆる「伊勢型鍋」。口縁部の小片である。形態は頸部が短く外反する口縁部で、折り曲げにより、受け口状を呈する。外面には煤が付着する。57は甕。口縁部の小片で、太く短い口縁部を有する。口縁部は直角に屈曲する。胎土は0.3～1.5mmの砂粒を含み、やや粗い。外面には煤が付着し、二次的な比熱も若干受る。

ＳＫ１９　58は陶錘。上方に鈕を有する分銅形を呈する。鈕部上面、肩部、底部を除き縦方向のケズリ調整による。側面には淡緑色の自然釉がかかる。体部は部分的に欠けるが、これは使用痕と考えられる。重量は、現状で88.2ｇだが、これを比重により完形品の重量を計算すると108.0ｇとなる。

ＳＫ７７　59～61は灰釉系陶器。59は小皿Ｃ。やや大振りで、完形。体部内面には淡緑色の自然釉がまばらにかかる。みこみには使用痕が明瞭である。60は小皿Ｃ。完形。やや大振りで、口縁部付近に部分的に淡緑色の自然釉がかかる。使用痕が認められず、焼成時に釉着した窯壁片や、長石の噴き出しすら研磨を加えてはいない。61は壺。肩部より上方を欠く。形態は、丸みを帯びた体部を有し、底部は平底。体部には部分的に淡緑色の自然有がかかる。また、体部下方には他の製品の一部が有着しているが、研磨を加えている。なお、底部には使用痕が明瞭である。

ＳＫ７８　62・63は灰釉系陶器。62は椀Ｆ１。底部片で腰部より上方を欠く。高台は部分的に欠落する。全体に使用痕があまり認められない。63は椀Ｄ。底部片で腰部より上方を欠く。全体に使用痕があまり認められない。

ＳＫ１４４　64～66は灰釉系陶器。64は椀Ｄ。底部1／3程度の破片で、腰部より上方を欠く。体部内面には部分的に淡緑色の自然釉がかかる。みこみには煤状のものが付着するほか、使用痕が明瞭である。65は椀Ｅ１。底部1／2程度の破片。みこみには使用痕が明瞭である。66は小皿Ｂ。1／2程度の破片で、みこみには使用痕が明瞭である。

ＳＤ０５　67～69は灰釉系陶器。67は椀Ｇ。底部片で体部より上方を欠く。みこみには使用痕が明瞭である。68は椀Ｅ。底部片で体部より上方を欠く。体部内面には部分的に濃緑色の自然釉がかかる。高台は部分的に欠落する。みこみには煤状のものが付着するほか、使用痕がみられる。69は椀Ｄ。底部片で体部より上方を欠く。体部内面には部分的に淡緑色の自然釉がかかる。高台は部分的に欠落する。みこみには使用痕が明瞭である。

ＳＤ１５　70～81は灰釉系陶器、82～85は土師器である。70は椀Ｄ２。1／3程度の破片。口縁部はややゆがむ。高台は部分的に欠落する。みこみには使用痕が明瞭である。71は椀Ｅ１。1／5程度の破片。高台は部分的に欠落する。みこみには使用痕が明瞭である。72は椀Ｃ。底部片で口縁部を欠く。体部はゆがむ。内面には部分的に淡緑色の自然釉がかかる。高台は部分的に欠落する。みこみには煤状のものが付着するほか、使用痕がみられる。73は椀Ｃ。底部片で体部を欠く。みこみには使用痕が明瞭である。74は椀Ｃ。底部2／3程度の破片。みこみには使用痕が明瞭であるほか、部分的に淡緑色の自然釉がかかる。75は

椀Ｄ１。やはり底部２／３程度の破片。みこみには使用痕が明瞭である。76は椀Ｃ。底部片で口縁部を欠く。みこみには煤状のものが付着するが、これは破面にまで及ぶ。なお、使用痕が明瞭である。79は椀Ｅ２。底部１／２程度の破片。体部内面には部分的に淡緑色の自然釉がかかる。高台は部分的に欠落する。みこみには使用痕が明瞭である。80は鉢。底部１／４程度の破片。腰部がやや張る体部に高い高台を持つ。底部は胎土の練のが甘く、焼成時に気泡を生じる。体部内面には部分的に緑白色の自然釉がかかる。みこみには使用痕が非常に明瞭である。81は小皿Ａ。完形で、ややゆがむ。体部内面には部分的に濃緑色の自然釉がかかる。みこみには使用痕が明瞭である。82は小皿。口縁部をわずかに残存させる。胎土は0.3㎜大の砂粒のほか、シャモットを若干を含む。体部は内湾し、口縁部は丸く納める。底部は平底となる。仕上げはていねいで、ロクロまたは回転台使用。外底部には回転糸切り痕を留める。83は小皿。１／３程度の破片。胎土は0.3㎜大の砂粒をふくむが、緻密。体部はやや内湾ぎみに口縁部にいたる。口縁部は丸く納める。底部は平底となるが、体部との境が不明瞭。84は小皿。１／５程度の破片。胎土は0.5㎜大の砂粒をふくむ。器壁は薄く、体部はやや内湾ぎみに口縁部にいたる。口縁部は丸く納める。底部は平底となるが、体部との境は不明瞭。85は小皿で、いわゆる「柱状高台」を持つ。底部片で体部より上方を欠く。底部は平底で突出する。86は鍋。底部を欠く。ややつぶれる球形の体部に、短く外反する知恵を有する。口縁部は折り曲げにより、玉縁状を呈する。外面には煤が付着し、二次的に比熱を受ける。

ＳＤ４３　87～98は灰釉系陶器。87は椀Ｅ１。口縁部を１／３程度欠く。体部内面には部分的に淡緑色の自然釉がまばらにかかる。高台は部分的に欠落する。みこみには使用痕が明瞭である。88は椀Ｅ１。口縁部を３／４程度欠く。口縁部外面には部分的に灰緑色の自然釉がかかる。みこみには使用痕が明瞭である。焼成時に釉着した窯壁片が研磨を加えず残存する。89は椀Ｆ１。口縁部を２／３程度欠く。体部はゆがむ。口縁部および体部内面には部分的に淡緑色の自然釉がまばらにかかる。高台は部分的に欠落する。使用痕が認められず、焼成時に生じた長石の噴き出しすら研磨を加えてはいない。90は椀Ｈ。１／３程度の破片、口縁部はゆがむ。淡緑色の自然釉が、口縁部には部分的に、体部内面にはまばらにかかる。みこみには使用痕が明瞭である。91は椀Ｅ１。底部欠く口縁部１／４程度の破片。内面には部分的に白緑色の自然釉がにかかるほか、使用痕が明瞭である。92は椀Ｉ。体部以下を欠く口縁部１／４程度の破片。体部は胎土の練が甘く、焼成時に気泡を生じる。小振りで、内面には部分的に淡緑色の自然釉がまばらにかかる。使用痕があまり認められない。93は椀Ｃ。底部片で口縁部を欠く。体部はゆがみ、高台は部分的に欠落する。焼成はやや甘く、使用痕があまり認められない。94は小皿Ｃ。１／５程度の破片。使用痕があまり認められない。95は小皿Ｂ。口縁部を１／３程度欠く。内面には部分的に灰緑色の自然釉がまばらにかかるほか、みこみには使用痕が明瞭である。96は鉢。底部欠く口縁部１／５程度の破片。体部は直線的に口縁部いたる。口縁部は丸く納めるが、ゆがむ。内面には淡緑色の自然釉がまばらにかかるほか、使用痕が明瞭である。97は壺。肩部位下を

欠く1／5程度の破片。肩部からやや短く孤を描き口縁部にいたる。口縁部上方は幅2㎜程度沈線状にくぼむ。肩部内面を除き淡緑色の自然釉がかかるが、一部は剝落する。98は壺。いわゆる三筋壺。体部の破片で、上部には2本一組の沈線が巡る。

SD50　99～122まで灰釉系陶器、123が施釉陶器、125～127まで土師器である。99は椀D2。口縁部を1／3程度欠く。みこみには使用痕が明瞭である。口縁部の一部には、煤状のものが付着するが、これは破面にまで及ぶ。なお、二次的な比熱は受けてはいない。100は椀E1。口縁部を1／3程度欠く。口縁部の一部はに淡緑色の自然釉が厚くかかる。みこみには使用痕が明瞭である。101は椀F1。口縁部を1／4程度欠く。口縁部はややゆがむ。胎土の練りがやや甘く、焼成時に気泡を生じる。みこみには使用痕がみられる。102は椀はF1。1／4程度の破片。高台は部分的に欠落する。内面には淡緑色の自然釉がまばらにかかる使用痕があまり認められず、焼成時に生じた長石の噴き出しすら研磨を加えてはいない。103は椀F1。1／4程度の破片。高台は部分的に欠落する。内面には淡緑色の自然釉がまばらにかかる。内面には使用痕が明瞭である。104は椀F2。1／4程度の破片。使用痕があまり認められず、焼成時に生じた長石の噴き出しすら研磨を加えてはいない。外底部に墨書をもつ可能性があるが、欠落部分が大きく判断できない。105は椀H。1／4程度の破片。みこみには使用痕が明瞭である。106は椀H。口縁部を1／3程度欠く。全体にぬた痕が多い。みこみには淡緑色の自然釉がまばらにかかる。使用痕があまり認められず、ぬたの盛り上がりすら研磨を加えてはいない。107は椀I。1／3程度の破片。口縁部はややゆがむ。胎土の練がやや甘く、焼成時に気泡を生じる。みこみには使用痕があまり認められず、ぬたの盛り上がりすら研磨を加えてはいない。108は椀E。口縁部1／4程度の破片で底部を欠く。109は椀E。口縁部1／4程度の破片で底部を欠く。やや小振り。全体に淡緑色の自然釉がまばらにかかる。使用痕があまり認められず、焼成時に生じた長石の噴き出しすら研磨を加えてはいない。110は椀H。口縁部1／4程度の破片で底部を欠く。内面には使用痕が明瞭である。11は小皿B。完形。口縁部はややゆがむ。胎土の練りがやや甘く。焼成時に気泡を生じる。みこみには使用痕が明瞭である。112は小皿B。全体にゆがむ。みこみには使用痕が明瞭である。113は小皿B。完形。みこみには使用痕が明瞭である。114は小皿B。完形。焼成がやや甘い。みこみには使用痕が明瞭である。115は小皿C。全体にひどくゆがむ。使用痕があり認められず、焼成時に生じた長石の噴き出しすら研磨を加えてはいない。116・117は蓋。いずれも本来は生産地において窯道具として用いられるもの。傘形を呈し、天井部は平坦で、上面に回転糸切り痕を留める。いずれも使用痕は認められず、116には、焼成時に付着した窯壁すら研磨を加えてはいない。118は鉢。口縁部1／5程度の破片で底部を欠く。口縁部には淡緑色の自然釉がまばらにかかる。内面には使用痕が明瞭である。119は鉢。底部1／3程度の破片で、口縁部を欠く。みこみには使用痕が明瞭である。120は壺。いわゆる三筋壺。体部の破片で、上部には2本一組の沈線が巡る。121は壺。底部1／5程度の破片で体部より上方を欠く。底部は平底となる。底部の内面および破面には黒色の光沢を持つ付着物が認められる。122は杯。口縁

部を欠く1／4程度の破片。高く、緩やかに外反する高台と、丸みを帯びた杯部を持ち、形状は12～14に類似するのか。みこみと高台端部には濃緑色の自然釉がかかる。使用痕はあまり認められない。123は卸皿。1／5程度の破片。やや内椀する体部と玉縁部の口縁部を持つ。底部は平底となる。みこみは卸目と、これを取り巻く沈線を施す。全体に淡緑色の灰釉をハケヌリする。卸目には使用痕はあまり認められない。124は皿。いわゆる「柱状高台」を持つ底部片で、体部より上方を欠く。底部は平底で突出する。胎土は03mm大の砂粒や、シャモットなどを含む。表面の摩滅が著しく詳細は判断できない。125・126鍋で、いわゆる「伊勢型」。いずれも口縁部の小片。形態は頸部が短く外反する口縁部で、折り曲げにより受け口状を呈する。外面には一部媒が付着する。127は釜。口縁部の小片。やや内湾する体部に口縁部直下に突帯を持つ。外面にはハケメ調整の痕跡を留めるほか、煤が付着する。

なお、ＳＤ―５０からは、図化しなかったがこのほか若干の貿易陶磁片が出土している。

ＳＤ６３　128～131は灰釉系陶器、132は施釉陶器。128は椀Ｅ１。1／3程度の破片。みこみには使用痕が明瞭である。129は椀Ｇ。1／3程度の破片。内面には淡緑色の自然釉が部分的に認められるほか、みこみには使用痕が明瞭である。130は椀Ｉ。1／5程度の破片。内面には淡緑色の自然釉が部分的に認められる。使用痕しが認められず、焼成時に釉着した窯壁片すら研磨を加えてはいない。131は椀Ｆ。口縁部1／5程度の破片。底部を欠く。内面および口縁部には、淡緑色の自然釉がかかる。使用痕が認められず、焼成時に生じた長石の噴き出しすら研磨を加えてはいない。132は卸皿。1／5程度の破片で、やや内椀する体部に平坦な口縁部を持つ。底部は平底となる。みこみには箆による卸皿を持つが、使用痕はあまり認められない。全体に淡緑色の灰釉をハケヌリする。

ＳＤ５９　133・134は灰釉系陶器。133は椀Ｆ２。底部片で口縁部を欠く。内面には部分的に濃緑色の自然釉がまばらにかかる。みこみには使用痕はあまりみめられない。134は椀Ｆ。底部1／3程度の破片。内面には一部白変する淡緑色の自然釉が厚くかかる。みこみには使用痕はあまり認められない。高台には部分的に煤状のものが付着する。

室町時代

ＳＫ１７　135・136は施釉陶器。135は天目茶椀。口縁部1／4程度の破片で、底部を欠く。体部から丸みを持ち、口縁部直下で立ち上がる形状。外面下方を除き、前面に飴色の鉄釉を施す。136は緑釉皿。完形。体部はやや内湾ぎみに口縁部にいたる。口縁部は丸く納める。底部は平底てなる。口縁部には淡緑色の灰釉をツケガケする。みこみには使用痕が明瞭である。

（池本　正明）

注

1　灰釉系陶器の概念は、（池本正明「猿投窯の「山茶椀」－灰釉系陶器について－『マージナル』10　愛知考古学談話会　1990・池本正明「奥三河の灰釉系陶器　灰釉系陶器について２」

『考古学フォーラム』1　愛知考古学談話会　1990）による。

2　藤澤良祐　「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅰ　瀬戸市歴史民俗資料館　1982

3　田口昭二　『美濃古窯の灰釉陶器と山茶椀』　多治見市立精華小学校　1973

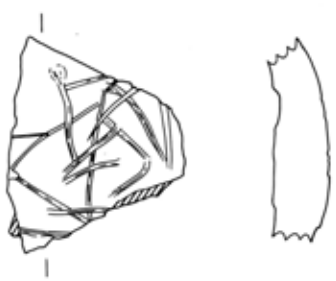
その他の土器

ヘラ記号　ＳＤ１５より出土した土器片で、常滑産の壺（下部の沈線からみると三筋壺か）の肩部に先端部が割れている軟弱な原体で施紋される。施紋順序はまず対面するく字状を描いて方形部わ作り、その間に縦位の沈線を引き、その後左上から右下に向かう二本の沈線、右上から左下に向かう５本の沈線・下部の横位の沈線・右側の縦位の沈線の順になる。（第62図）

土　製　品

加工円盤　土器の破片の側面を打ち欠くことにより円盤状の形態を作り出しているもので、総数73点出土している。その内、灰釉系陶器の高台部を使ったものが37点あり、３～４㎝程度の小型のもの（767～784）と６～７㎝程度の大型のもの（785～791）に分かれる。大型のものの中には、785のような小皿の底部を使用したものも２点みられる。体部を使ったものは17点あり、灰釉系陶器の椀・鉢・常滑産の壺（795）、鉄釉のかけられたもの（798～801、799は擂鉢）、天目茶椀（807）等、多様なものが出土している。また、須恵器を使ったものが15点みられた（810～817）。これらの遺物のうち遺構から検出されたものは全て鎌倉時代以降の遺構からの出土であり、確実に古代に遡る資料は見いだせなかった。ため、加工が施された時期は12世紀以降であると考えたい。また、土師器を加工したものも４点出土しているが（808・809）、これらはおそらく古代の甕の体部であり、加工時期は須恵器と同じく鎌倉期以降と思われる。使用部位は、杯・椀の高台・底部が多いが、宝珠つまみを打ち欠くもの（814～817）が特徴的である。

（宮腰　健司）



第62図　ヘラ記号を有する壺（１／２）

Ⅴ．考察１

V. 考　察　1

1．弥生中期土器にみる複数の〈系〉　その2
　　―　大渕遺跡並行期を中心として　―　　石黒立人

2．大渕遺跡出土の土錘について　　宮腰健司・古橋佳子

1．弥生中期土器にみる複数の〈系〉　その2

― 大渕遺跡並行期を中心として ―

はじめに

すでに我々は、伊勢湾地方の弥生中期土器について、それが複数の〈系〉によって構成され、しかもそれぞれが独自の動きをしつつも相互作用しながら全体的な動きを形成して推移するものであるという視点を提示した（石黒　1990ａ．1990ｂ．1990ｃ）。その場合の相互作用は、いちおうは同一水準で行われるものであると考えているが、しかしそれも大渕遺跡成立以前であり、大渕遺跡成立以後の時期においてはそれぞれの〈系〉も急激な変化をきたし、その存在様態を大きく変えることになる。

こうした変化の要因には〈凹線紋系土器〉があるわけだが、〈凹線紋系土器〉に関してはこれまで余り深く議論されることはなかった。私も「外来系」としてくくるのみで、その内容にまであまり深く立ち入らなかった。阿弥陀寺遺跡報告（㈶愛知県埋蔵文化財センター1990（石黒1990ａ））では、多少見通しめいたことをしるしはしたが、あくまで課題の提示にとどまるものであった。従って、ここではすでに提示した見通しの検討をするとともに、この時期の集落および文化要素全般の動向をにらみながら〈凹線紋系土器〉を含めた複数の〈系〉に関しての具体像を結んでみたいと考える。

なお、〈系〉区分については本文での規定に準じる。

1．大渕遺跡と周辺の遺跡

大渕遺跡の北ほぼ0.5㎞には甚目寺町阿弥陀寺遺跡、北西約1.5㎞には甚目寺町森南遺跡が存在する。そして北東約５㎞には一市３町にまたがる朝日遺跡が存在する。朝日遺跡を除いては一応比較に足る資料が提示されているので、それらとの比較を行いながら当該期の様相について概観しておこう。

森南遺跡（甚目寺町教育委員会　1990）ではＳＫ５９とされた貝殻廃棄を伴う大形の土坑からまとまった一群が出土している。報告では、上層、中層、下層の３層に区分されている。このうち中層土器群は上下層をつなぐ漸移的な様相を示し、資料的な混在が認められる。従って、中層を除いて上層と下層を基準とするのが良さそうである。

下層はⅠ系の組成的な安定とⅣ系との共存状態を典型的に示し、上層はⅠ系の組成が崩壊し存在しても断片的となってⅣ系とⅢ系の共存が特徴的になるという、それぞれ大渕遺跡における１期、２期ａの特徴を共有している。ほかに参考となる遺構は若干存在するが、概ね大渕遺跡の２期ａまでおさまるようである。

阿弥陀寺遺跡では居住域を取り巻く環濠からそれぞれまとまった一群が出土している。提示されている時期区分によれば、南部地区においては内側２条の環濠出土土器群がⅠ系が組成的に安定したままⅣ系と共存する傾向を示す「Ⅲ－１期」、もっとも外側の一群は「Ⅲ－２期」、北部地区においては外側２条が「Ⅲ－１期」、居住域に内接する環濠出土

土器群がⅠ系の組成的安定からⅣ系に台付甕が成立し始める段階である「Ⅲ－１期」から「Ⅲ－２期」の資料が出土している。

そのほか、方形周溝墓溝内や住居跡廃棄、土坑などからも比較的良好な資料が得られている。ここでも、「Ⅲ－１期」ではⅠ系が組成的に安定して存在しⅣ系と共存、「Ⅲ－２期」になるとⅠ系が断片的となってⅣ系とⅢ系の共存が特徴的になるという傾向が確認できる。以上の年代を対比すると次のようになる。

中期分区[1]	森南遺跡	大渕遺跡	阿弥陀寺遺跡
４－１	ＳＫ５９下層	１期	Ⅲ－１期
４－２	ＳＫ５９上層	２期ａ	Ⅲ－２期
４－３	×	２期ｂ　△	Ⅲ－３期　△

＊　×：認められない，△：少量で不安定.

ところで阿弥陀寺遺跡で設定した「Ⅲ－３期」は上述のように大渕遺跡の２期ｂに相当した内容である。それは一応独立させてはあるものの決して安定したものでなく、遺構数・土器の出土量とも極めて少ないのである。この時期（中期４－３）は、確認できない森南遺跡は当然として大渕遺跡・阿弥陀寺遺跡を通してその不安定さは特徴的でさえある。このことが、遺跡の存続期間に関わることなのか、あるいは遺跡の遺存状況に関わることなのかは大きな問題であるけれども、私はそれを尾張地方南西部低湿地帯における集落の衰微という共通した現象と考えたい。

このように考えるのは、名古屋台地以東において上記遺跡で衰微傾向を示す時期に対応するかのように新たに遺跡の増加・定着が認められるからである。

２．大渕遺跡と東方の地域

名古屋台地では弥生時代中期を通じて遺跡分布が希薄である中で、遺跡の増加するのは中期４－１以降である〈凹線紋系土器〉展開期であり、しかもその最初期はまとまった資料が少ない。古沢町遺跡（名古屋市教育委員会　1966）などで採集されているが断片的だし、「外土居式」の標準資料も詳細は不明である。報告された遺跡資料では、例えば瑞穂遺跡（名古屋市教育委員会　1984）の住居跡は中期４－２、方形周溝墓資料は中期４－３である。

高蔵遺跡はその広い遺跡範囲の中で、環濠の一部と考えることのできそうな「Ｅ地点濠状遺構」（瓜郷遺跡調査会　1963）と呼ばれた部分の存在から比較的遡る（中期３には確実遡り、中期２まで遡る可能性がある）安定した遺跡ではないかと考えられる[2]が、こうした痕跡は少ないのが現状である。

知多半島では位置的にその付け根部分に当たる知多市細身遺跡（知多市教育委員会　1980－84）で中期４－１相当のⅠ系土器群がまとまって出土している。それに対して本来この

地域が主たる分布圏と考えられてきたⅢ系 （「獅子懸式」と呼称されている）は中期４－２相当が主であり、両者には時期差が認められる。しかも重要なのは、Ⅰ系土器群の組成的安定とともに紋様には大渕遺跡や森南遺跡では出土頻度のきわめて低い磨消線紋が認められることで、阿弥陀寺遺跡の「Ⅱ－２ｂ期」との近似性が注目されるのである。Ⅳ系の主力がどちらに対応するのか確定できないが、このことは尾張地方でのⅠ系とⅣ系の関係を考える上で示唆的であるだけなく、後述の岡島遺跡（(財）愛知県埋蔵文化財センター 1990）のあり方を考える上でも示唆的である。

矢作川下流域の西尾市岡島遺跡では弥生時代中期を通じて遺跡が形成されているが、中期４－１のまとまった資料としてはＳＤ２５出土土器群がある。ここでは、Ⅲ系は当然として、Ⅰ系とⅣ系が出土している。Ⅰ系は細頸壺・台付甕があり、細頸壺には磨消線紋が認められる。台付甕はⅠ系そのものであり、両者の存在は上述の細身遺跡を経由させると理解し易いものとなる。岡島遺跡では中期４－２になるとⅢ系甕はほとんど台付甕となるが、Ⅰ系台付甕との技術的な共通性は無い。これはⅠ系の台付甕が表現的側面にのみ影響を与えたからであろう。Ⅳ系はこの時期はまだ断片的で尾張地方とは様相が異なる。Ⅲ系は尾張地方でのⅠ系のような急激な衰退は遂げないで漸移的に変化していくようである。しかし、結局は最後に比率が逆転してⅣ系が主体を占めるようになる。

知立市天神遺跡（知立市教育委員会　1985.86）は岡島遺跡とは異なり中期４以後に形成される遺跡で、ある意味で大渕遺跡と似通った形成を見せる遺跡であるが、ここでは、近接する小針遺跡(知立市教育委員会　1976)がほぼⅢ系で占められるのとは異なり、Ⅳ系の頻度が極めて高い。Ⅳ系壺には体部が稜を持つほどに強く屈曲し外面にミガキを施すものがあり、中期４－３に相当する。組成的には安定した様相を示している。台付甕の中にはⅢ系からⅣ系への変換もあるようで相互作用は包括的変換の完了に向かっている感がある。

豊橋市橋良遺跡では住居跡と方形周溝墓が検出されている。第13号竪穴住居跡出土土器にはⅠ系台付甕のかなり変形したもの（第８回東海埋蔵文化財研究会1990『伊勢湾地方の弥生時代中期をめぐる諸問題』資料集：Ｐ105－43）があり、中期４－１のⅠ系波及から時期的に下がる資料ではないかと考えられる。おそらく遡っても中期４－２ぐらいであろう。また在来系土器と考えられるものには第１号竪穴住居跡出土土器（前掲書：Ｐ104－36・37）のようにかなり東方的な様相を見せるものがあり、炉縁石の存在とあわせて今後検討の余地を残すものである。方形周溝墓資料では、当然住居跡よりは新しく中期４－３に相当するけれども、一部には第２号方形周溝墓資料（前掲書：Ｐ103－31）のようにさらに下がるのではなとかと考えられるものもある。

中期区分	尾張南西部	名古屋台地・知多半島	三河西部	三河東部
４－１	Ⅳ系◎Ⅰ系◎	Ⅰ系◎Ⅳ系△	Ⅰ系◎Ⅳ系△	？
４－２	Ⅳ系◎Ⅲ系◎	Ⅳ系◎Ⅲ系△	Ⅳ系△Ⅲ系◎	Ⅳ系◎Ⅲ系◎
４－３	Ⅳ系△	Ⅳ系◎	Ⅳ系◎Ⅲ系△	Ⅳ系◎

3．〈凹線紋系土器〉あるいはⅣ系土器の地域差

Ⅳ系土器は上述のように広範囲に展開する。それらがすべて同一の起源を有するものでないことは改めて述べるまでもないことであるが、一応ここで整理しておこう。

この諸特徴は伊勢湾地方西岸部と東岸部、あるいは北部と南部というように大きく区分できる。

伊勢湾地方西岸部

いわゆる伊勢地方は、東岸部と極めて緊密な関係を示す四日市市周辺の北部地域平野部、ほとんどⅤ系分布圏として見なすことのできる鈴鹿市から亀山市にかけての北部地域内陸山麓部、Ⅴ系および大和地方との関係を示す津市周辺の中部地域、伊賀地方南部（名張）を経由して大和地方との緊密な関係を示す松坂市・伊勢市周辺の南部地域というように区分できる（鈴木克彦　1990：前掲書所収）。

北部地域を代表する永井遺跡（四日市市教育委員会　1972）は、ＳＸ７４・７５という方形周溝墓出土土器で、低脚台付甕の存在からおおむね中期４－２以後に位置づけられる。包含層資料では中期４－１に相当する資料も出土している。ほとんど東岸部的特徴の延長である。

中部地域・南部地域では北部地域と異なり、甕に台付甕が分布しないだけでなく、技術的にも体部内面のケズリ手法が認められない。壺の紋様構成は簾状紋など差異が目だつ。さらに南部地域になると鳥居本遺跡（前掲書　所収）のように水差し形土器が存在し、畿内地方への傾斜を強める。

このように相互に差を示す４地区に区分できるわけであるが、Ⅳ系の系譜は伊勢湾東岸部に共通する一系統、大和地方経由の一系統で整理できる。伊賀地方北部を経由しての琵琶湖地方（近江地方）南東部との関係は、Ⅴ系に関しては言えても、Ⅳ系の伝達ルートとしてそれほど太いパイプであったかどうかは今後の検討に委ねる必要がある。かつては鈴鹿峠越えルートを考えていたが、この地域を占めるⅤ系の独自性の強さは分布上の連鎖を遮断するかの感があり、中期３までは媒介的だが中期４では閉鎖的になると考えたほうがよさそうである。

伊勢湾地方東岸部

Ⅳ系の特徴はなんと言っても出現期から認められる甕の内面ケズリ手法である。これは西岸部のⅣ系と明確に区分する指標である。そして台付甕の存在。これもⅠ系台付甕からの変換として尾張地方南西部で独自に発現した個性で、中期４－２以降の東岸部Ⅳ系甕を規定する要件となる。

Ⅳ系成立期である中期４－１の形質的・表現的属性および組成の共通する地域を伊勢湾地方の外部に求めると、最も近接するのは琵琶湖地方北東部（米原町・近江町・長浜市周辺）である。〈凹線紋系土器〉が尾張地方で成立したものでは無い以上、琵琶湖地方北東部からの波及を考えるのが妥当である。伊勢湾西岸部の永井遺跡の土器群も尾張地方南西

部だけでなく琵琶湖地方北東部からの直接波及を考える必要もある。

このような伊勢湾東岸部との関連が考えられる琵琶湖地方東北部であるけれども、さらにそこへの〈凹線紋系土器〉の波及はまた如何なる経路で行われたのかという点については、また新たな課題となる。現状では内面ケズリ甕の分布など検討の余地を残すようであるが、波及経路の微細な検討は湖上交通の独自性などもあり、陸上での細かな連鎖を追及しても追いきれない可能性がある。

いずれにしても、Ⅳ系は形質的属性にしろ表現的属性にしろ属性段階での離散性はⅢ系成立期のように顕著であるから、そうした属性の統合された枠組みが構築された地域の特定を今後進めなければならない。

伊勢湾東岸部においてⅣ系は中期４－２になると、甕の体部外面に波状紋が加えられたり、また口縁部が微妙に受口状口縁を呈するものが出現する。大渕遺跡では体部外面にハケメ工具による羽状連続圧痕が施されるものも出土している。壺では、中期４－１の細頸壺口縁部外面や太頸壺口縁部内面の櫛刺突羽状紋がハケメ工具連続羽状圧痕紋となる。こうしたハケメ工具連続羽状圧痕紋は、壺に限らず高杯や台付鉢にも認められる紋様手法であり、それが単に櫛刺突羽状紋の変化したものと看ることはできない。もともと櫛描紋手法に刺突紋は存在するが、それが主要な紋様手法となることは畿内地方中心にも認められない現象である。

原体の差と時間的な隔絶さを無視するならば、刺突紋手法は前期には日本海側地方で特徴的であり、中期になると近畿地方の日本海側地方だけでなく北陸地方にも散見されるようになる。こうしてここで言うＶ系でも刺突紋は顕著である。いま、琵琶湖地方のⅣ系を眺めるとそこにおけるハケメ工具連続羽状圧痕紋の分布は北半部においてやや濃いのであり、それと甕の内面ケズリとあわせて考えるなら日本海側地方との関連が強まった結果として理解できる余地がある。

ところで、Ｖ系でも受口状口縁壺の口縁部外面の紋様としてハケメ工具連続羽状圧痕紋が認められることについては触れたけれども、これはⅣ系における様相ほど普遍性はなく受口状口縁壺に限っての部分使用であるので一応無視できると考えるが、甕体部外面の波状紋は刺突紋が加わらないとはいえ直線紋を組み合わせる例もあるので、なお属性の起源が収束するかどうか検討の余地がある。

尾張地方ではⅣ系は斉一性が高く、そこに地域差は認められない。知多半島以東への波及期においてようやく時期的な差が顕在化する。

現状では三河地方の様相が完全には明らかとなっていないけれども、岡島遺跡の土器を参考に考えてみよう。

岡島遺跡では甕はすでに台付甕となっており、時期的には中期４－３に相当すると考えられる。体部外面にはタタキ調整、内面にはケズリ調整が施され一見尾張地方のⅣ系台付甕と同じ様であるが、実際にはタタキ調整の傾きが尾張地方では左上がりであるのに対し岡島遺跡資料中には右上がりという逆方向の例があるのである。　これは中期２のⅠ系を

原型とするⅢ系の甕にも言えることであるが、なぜか鏡像のように反転するのである。技術的には同一であるが、その具体的製作工程における所作に於て異なるのである。このことはタタキ調整痕が表現的属性とはなっていなかったことを示しているのであろう。

4．Ⅱ系の消息

〈条痕紋系土器〉であるⅡ系は、中期2にⅡＳ系とⅡＮ系に分岐する。後者は以降も継続して後期まで残存するようであるが、前者は中期3以降の消息が明確となっていない。明確ではないという事実は、朝日遺跡・阿弥陀寺遺跡など尾張地方南西部の遺跡群にあってのことであり、本来の分布圏での事実ではないので、なお確定的ではない。しかし、少なくとも中期2まではその存在は明確であったから、それが不明確となることは、ⅡＳ系固有の分布圏がⅠ系との相互作用によって不安定化したか、Ⅰ系分布圏の拡大によって統合された可能性はある。特に、Ⅰ系において中期3に成立する磨消ハケメ手法が、本来Ⅰ系櫛描紋の変化系列からは生じ得ない要素であることを考えると、それがⅡＳ系から参入した要素である可能性も考慮しなければならない。つまり、研磨を加えた無紋帯がⅠ系、ⅡＳ系両者には存在するが、Ⅰ系の変化は無紋帯と櫛描紋帯の幅狭化による多重化であり、そのなかで後者が欠落して磨消線紋となるのである。これに対し磨消ハケメ帯にはそうした傾向は希薄である。多重化はほとんど認められないのである。

磨消ハケメ帯は、櫛描紋に関わると言うよりは、非櫛描紋としての性格を強く示しているのであり、それは櫛描紋系土器への傾斜が著しいⅢ系ではありえないし、Ⅰ系と分布圏の重複するⅡＳ系に起源があるとする方が納得しやすいと考える。

このようなⅡＳ系のⅠ系との融合的変化のなかで、中期4になって新たに表面化するのが、第63図に提示した土器群である。これらについては、阿弥陀寺遺跡の報告で「Ｂ系統」（ここで言うところのⅢ系）との「折衷型」としてくくった。Ⅲ系が固有の特徴をもって体系的に存在し、しかも体制化し、尾張地方南西部へも搬入品として多数流入するという状況において、上述の点とも関わってここであげた土器群にはⅢ系との共通性があるとは言えないのではないかと、思い直すに至ったからである。

686・1374・1365・1168・1のように頸部に認められる隆起とそこに施された斜格子紋やヘラ描羽状紋は、Ⅲ系で主要な紋様として使用されるのは中期2か中期4－2以降であり中期3では衰退するから、中期3での存在が一部でも認められるⅡＳ系要素の存続したものと考える方が妥当なのではないかと思うのである。

このような微細な要素への注目は、体系とは無関係な個別の要素に対する過剰な反応であるという意見があるかも知れない。しかし、個別の要素が断片化するのは分布上のまとまりがなくなって一定の組合せ（シンタクス）が崩壊したときであり、それに対しこれらは分布上も限定されまた紋様的には頸部の隆起というⅠ系固有ではない特徴とそれに組み合う紋様という一定の関係が保持されているのである。そして、特に重要視すべきはそうした特徴に関わると考えられる資料が伊勢湾西岸部でも散見されることである。

この点で第63図の１はおもしろい資料である。南部地域で出土したものであるが、①口縁部から頸部にかけては北部地域的な特徴を有し、②体部は磨消線紋が施され尾張南西部的な特徴が顕著である。そして③頸部には隆起と斜格子紋が施されている。

西岸部のⅠ系内においては③のような特徴が、決して頻度は高いわけではないがⅢ系やⅤ系にはつながらない要素として広い範囲で認められるのである。これに関しては、西岸部のそれを固有の情報保持の場があると言うことは困難であるけれども、逆に保持の場として尾張地方があると考えることはできるのであり、そこに強く表面化することはない連続した場を想定したいのである。

こうした意味で、305・664・16・210のような連弧紋も同様に重視する必要があると考えるものである。連弧紋は元々ⅡＳ系固有の紋様であり、それがⅢ系の主紋様として伝わるという経緯がある。しかし、Ⅲ系の変遷過程のなかで連弧紋は櫛描紋化していくのであり、ここで挙げたような磨消線紋風の連弧紋とはならない。磨消線紋風であることはⅠ系の磨消線紋との関わりであろうが、勝川遺跡例１６のように二枚貝刺突紋による連弧紋の存在は、それも体部上半の紋様が磨消線紋の横帯構成であることを見るなら、中期２に存在した二枚貝刺突連弧紋壺からの系譜を強く示唆しないではおかないのである。

これら紋様がただ断片として、単なる意匠の選択肢を構成するものに過ぎないのであればそれほど重要視する必要もないし、そうであれば重要視ではなく過大評価ともなる。それについては、それら資料の分布状況の重視、その紋様構成（シンタクス）へ上のパターンや系譜上の近接さなどを判断材料とするという立場によって、固有性を認めることに問題はないと考える。

今後こうした事例が着実に増加することを期待するしか現在の我々には許されていないが、Ⅱ系の固有性はそれが分岐して伝統を明確に保持するにⅡＮ系だけでなく、Ⅰ系に引き付けられていくⅡＳ系にも認めることができると考えておきたい。そして、それは中期４という時期にあって、一旦はⅠ系の枠にはめ込まれたⅡＳ系にも、それが系譜的に存続していたが故に、独自な動きを許すことになったのだと考えたい。もちろん、これらの事例はあくまで土器に限定されていることであり、それが集団の行動そのものに対応するわけではない。が、土器の日常的な使用という生活資料としての実用的機能ではなく、儀礼などのような非日常的な場における使用というような非実用的機能としての象徴的役割（伝統の持続）を認めることが可能ならばなら、という思いが強くするのである[3]。

５．中期４の社会

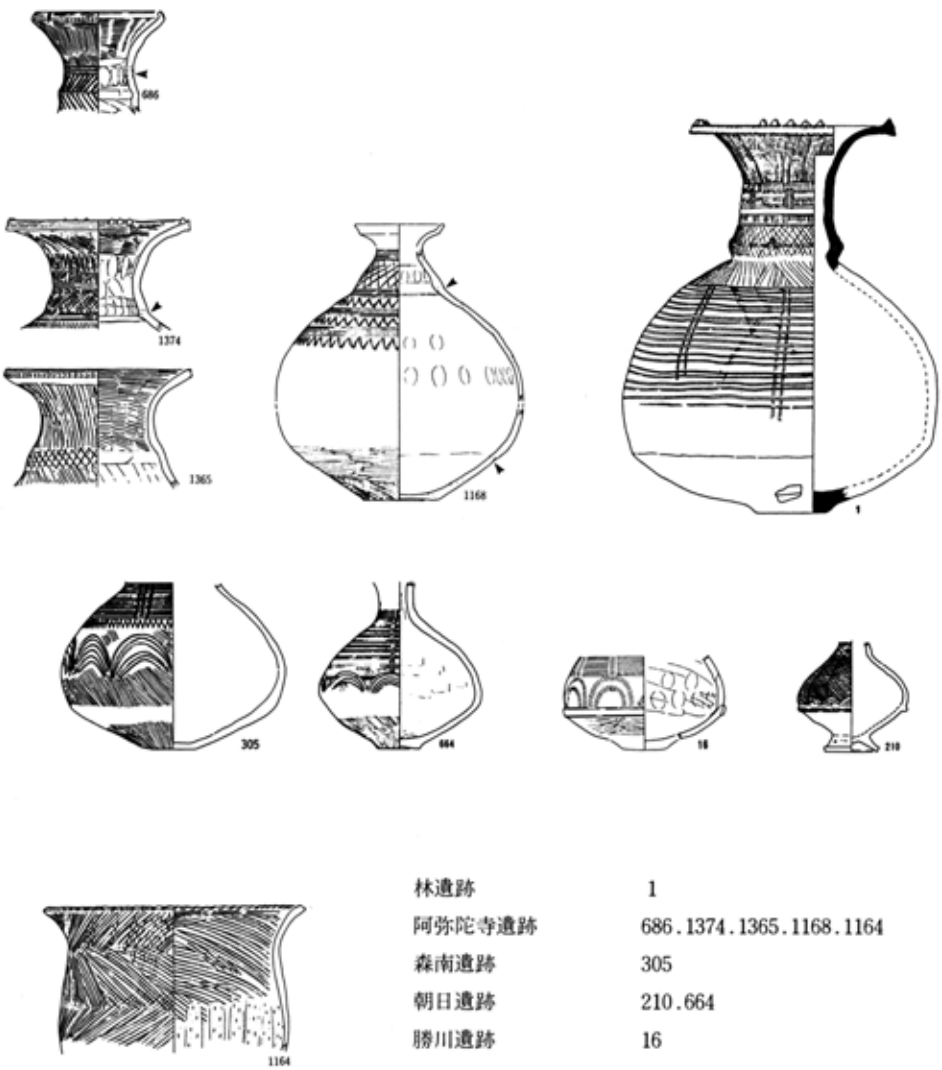
中期４は外来系としてのⅣ系と在来系としての諸系の相互関係の中で、最終的にはⅣ系主導の体制が形成されていくという、土器においてはⅠ系からⅣ系への交代の時期である。遺跡の展開に関しても、それ以前とは異なり形成・衰退が短期間で起こり極めて流動性の高いものとなっている。この高い流動性がある意味で斉一性を形成する基盤になっているともいえる。

中期４－１では大渕遺跡・阿弥陀寺遺跡・森南遺跡で見られるようにⅠ系とⅣ系との一遺跡内での共存という現象が生じる。この背景は、生産体制の共存であるのか、消費類型における共存であるのか、なお確定していないけれども、こうした共存現象はⅣ系の波及する地域では共通して観察できるのであり、ある意味で弥生時代前期の〈遠賀川系土器〉波及期とも共通するものである。

両者とも、伊勢湾地方にとって外部要素であり、異質な体系であることによって、すぐさま在地化することなく独自な系として表層的に分布圏を拡大するという現象を経過する。

このことは琵琶湖地方でも同様である。いわゆる「近江系土器」（ここで言うⅤ系に相当する）が独自性を強めるのもⅣ系の波及期で、北部と南部の地域差は別にしてこの時期には低地平野部と高地内陸部の相違も解消されるようである。

まさに、基層としての〈在来系〉と表層としての〈外来系〉であり、両者が一遺跡、一地域において二層構造を形成するのである。そして、この二層構造は相互作用における強



林遺跡	1
阿弥陀寺遺跡	686.1374.1365.1168.1164
森南遺跡	305
朝日遺跡	210.664
勝川遺跡	16

第63図　Ⅱ系土器の消息

弱の発現からみて、Ⅳ系が上位にそれ以外が下位に位置することによって、結果的にはⅣ系が全体化して以後の時代の方向を決定することになる。

ところで、このような土器に現れた変化は、社会としてはどのようであろうか。社会は基本的には不可視的な関係体であり、考古学的に把握することはきわめて難しい。遺跡配置論が社会論と同一レベルで考えられてはいるけれども、遺跡の配置が社会的に規定されたものであることを言うためには、①その配置が相互規定されたものであることを示さなければならない、②それぞれの遺跡の継続性が内的連続性を有したものであることを示さなければならない。③一定の範囲（境界）の存在が問題にされ示されなければならない。つまり、対象とする遺跡は定住集団が形成したものでなくてはならないし、そうした遺跡のネットワークが関係体の現象面の一端としての遺跡の空間的配置であることを証明しなければならない。従って、それによって描かれる得るのは定住農耕民社会であり、おそらく伊勢湾地方の一部を占めるであろう定住性の乏しい集団の社会は把握できないことになる。ということは、それによって描かれた社会は一面的であることになる。もちろん時代の主要な部分は定住農耕民社会によって形成されるであろうし、弥生時代以降の社会的趨勢が定住農耕民社会によって規定されていくことからもそれは間違った方法ではない。しかし、間違ってはいないが十分ではないのではなかろうか。列島の弥生時代以降の文化がすべてそれによって一色になるとは考えられないのである。これでは地域の個性を等閑視することになると考える。

社会を考えるについては処理すべき問題が多い中で、まず中期４の考古学的事実を整理するなら、①短期的な遺跡形成が顕著となる。②伝統的集落はその姿を変える。③Ⅳ系土器の分布圏について言えば、山間部も含めて地形環境における農耕不適地を阻害要因としないであらゆる地域に浸透する。④墓制、住居構造、石器などに大きな変化が生じる。など、画期としての様相が際だっている。①と③は構成する集団の移動性が非常に高いことを示している。あるいはⅣ系を中心としての周辺部の情報伝達が活発化すると見なすこともできる。④は伝統性の喪失、すなわち外部からの文化的圧力が強くそれによって変質させられたことを示す。この外部からの圧力とは、端的な表現が環濠の廃絶・埋没であろう。それはおそらく武力を伴うものであったろう。

このような画期的な様相の卓越する時期の社会は、まさに不安定なものであり、全体としてくくることができるようなものではないだろう。○○社会というような固有の枠を有しない、実態は個々の集落単位でまとまってしまっているようなものであると考える。その端的な表現は関東のモザイク的な囲郭集落の分布状況であろう。一旦まとまったかに見えたものではあるが、実際は外的な圧力に対して十分に求心力の働く場がなく、離散してしまったことを示すと考える。

社会とは、一定の空間的範囲において存在する集団の相互依存関係を表現する用語であるなら、中期４は以前の社会が崩壊して新しく構築されつつある時期として、新たな社会の築かれる時期、つまり変成期として把握する必要があると考える。

この変成期に、尾張地方を含めた伊勢湾地方は大きな社会的・文化的圧力をこうむり、一部は東方へと逃れ、他は新しい枠にからめとられている。新しい枠は、なお未完成であり、再度の構築を必要とするけれども、そのために固有の伝統は崩壊し、新たな容貌をみせることになるのである。　（石黒　立人）

註

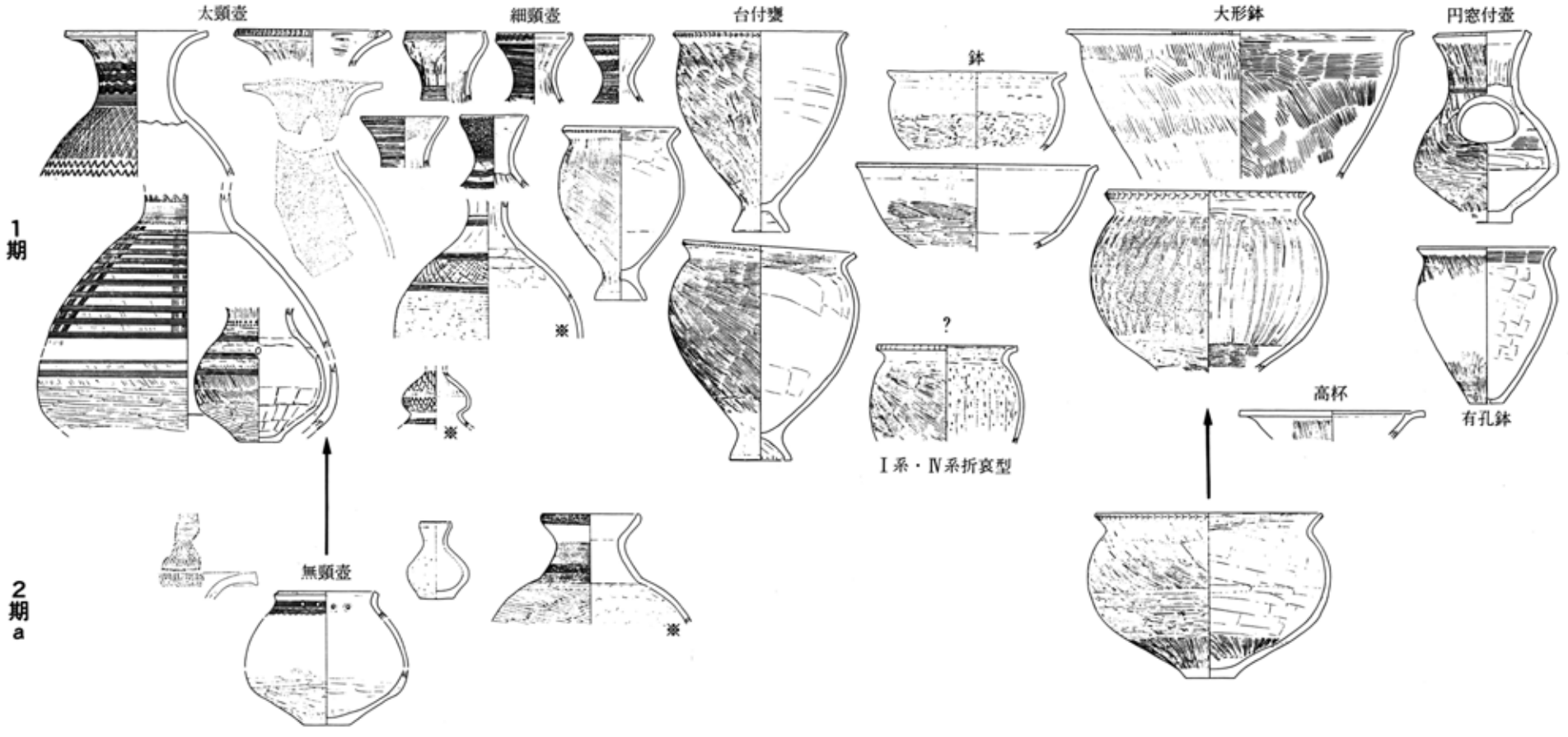
(1) 私はこれまでいくつかの時期区分表記を使用してきた。ここでの区分「中期４」は次の文献による。1986「伊勢湾周辺の弥生中期土器に関する覚書　86」『第７回　三県シンポジウム　東日本における中期後半の弥生土器』群馬県考古学談話会他。

しかし、そこでは中期４を「１段階」、「２段階」というように段階区分した。それに対してここでは、「段階」そのものの規定も問題と考え、単に序列としての１～３に改めるている。

弥生時代の時期区分ついては特に「こうあるべきだ」、「こうすべきだ」というような考えは持っていない。その時点での説明の簡便さ、対象との関係において最も適合的と思えるものであればよいと考えている。いずれにしても区分は便宜的なものである。

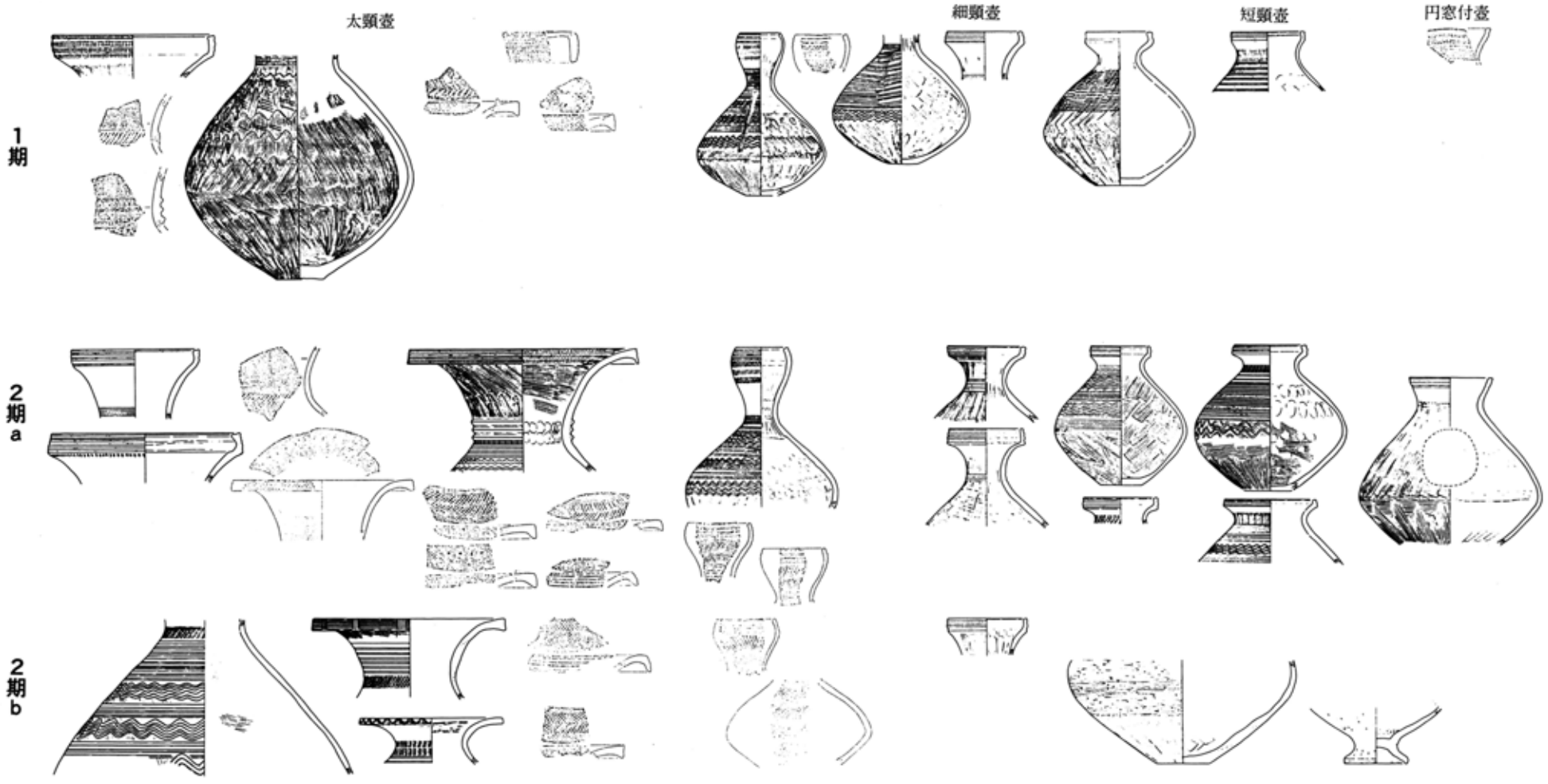
(2) 高蔵遺跡を含めて名古屋台地の諸遺跡は平野部の遺跡にも増して問題を内包している。それは、これまで調査例が少ないということではなく、地形的に余り水田可耕地が望めないと想定されるのに弥生時代前期から遺跡が形成されるという、単純な水田農耕社会一元論では理解できない側面を有するからである。その意味で、弥生時代前期ではなく、以後にも環濠集落が形成されていることが明らかとなれば、弥生社会の理解に対し寄与するところは大きいのではないかという思いがある。同様のことは知多半島に展開する諸遺跡についても言える。

(3) Ⅱ系（特にⅡＮ系）については、それがマイナーだから注視するではなく、「弥生時代とは何であるのか」という問いにおいてはメジャーな存在だからである。現状ではそれほど開発の及ばない地域、というよりそれゆえに埋蔵文化財に対する対応が遅れている地域が主要分布圏であるという現状にあって、現在把握できる資料から語り得る部分は少ない。ほとんど想像である。



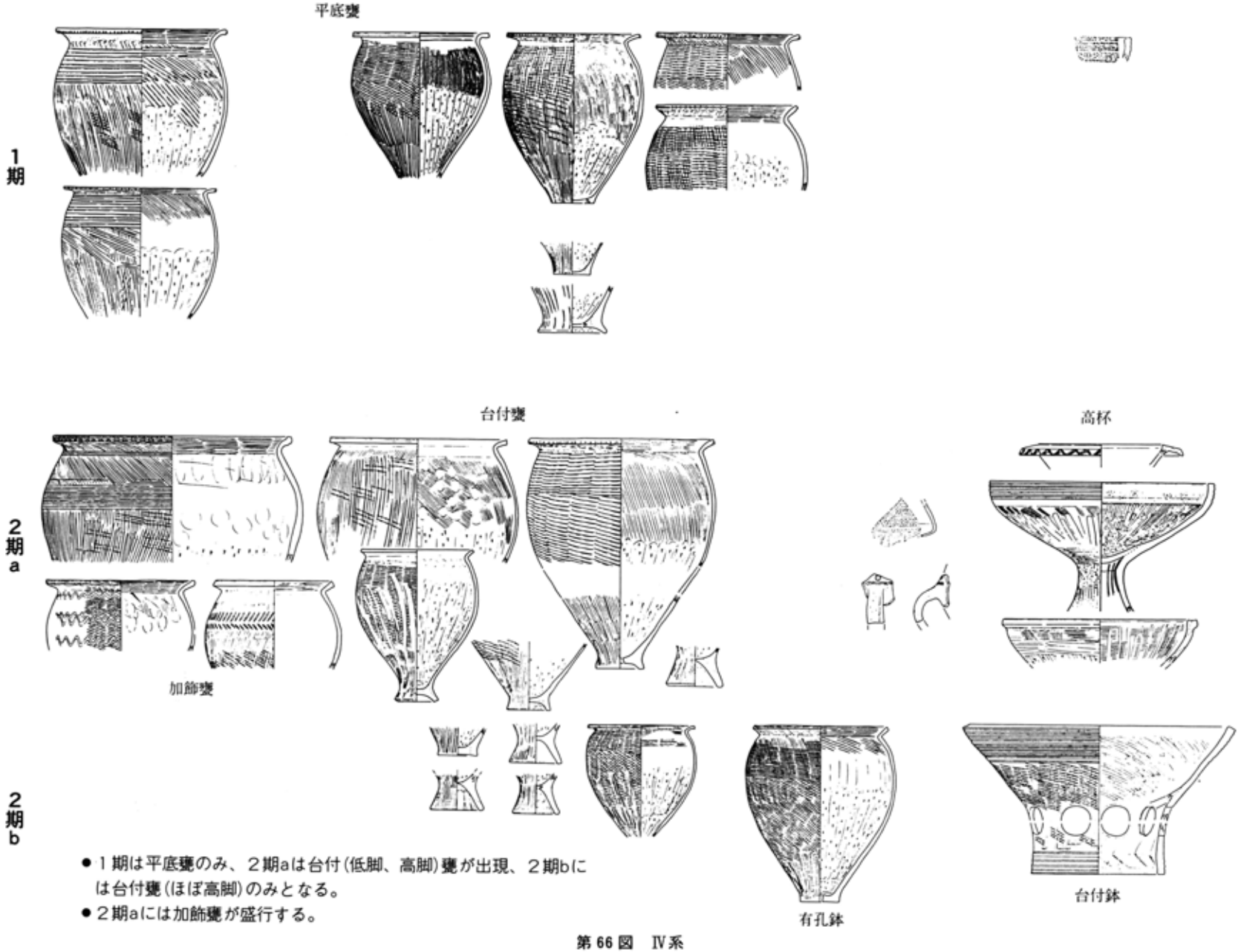
- 1期は組成が安定している。
- 2期aは断片的である。
- 2期bには存在しない。
- ※はⅡS系との関わりがあると考えられるもの。

第64図　ⅠE系



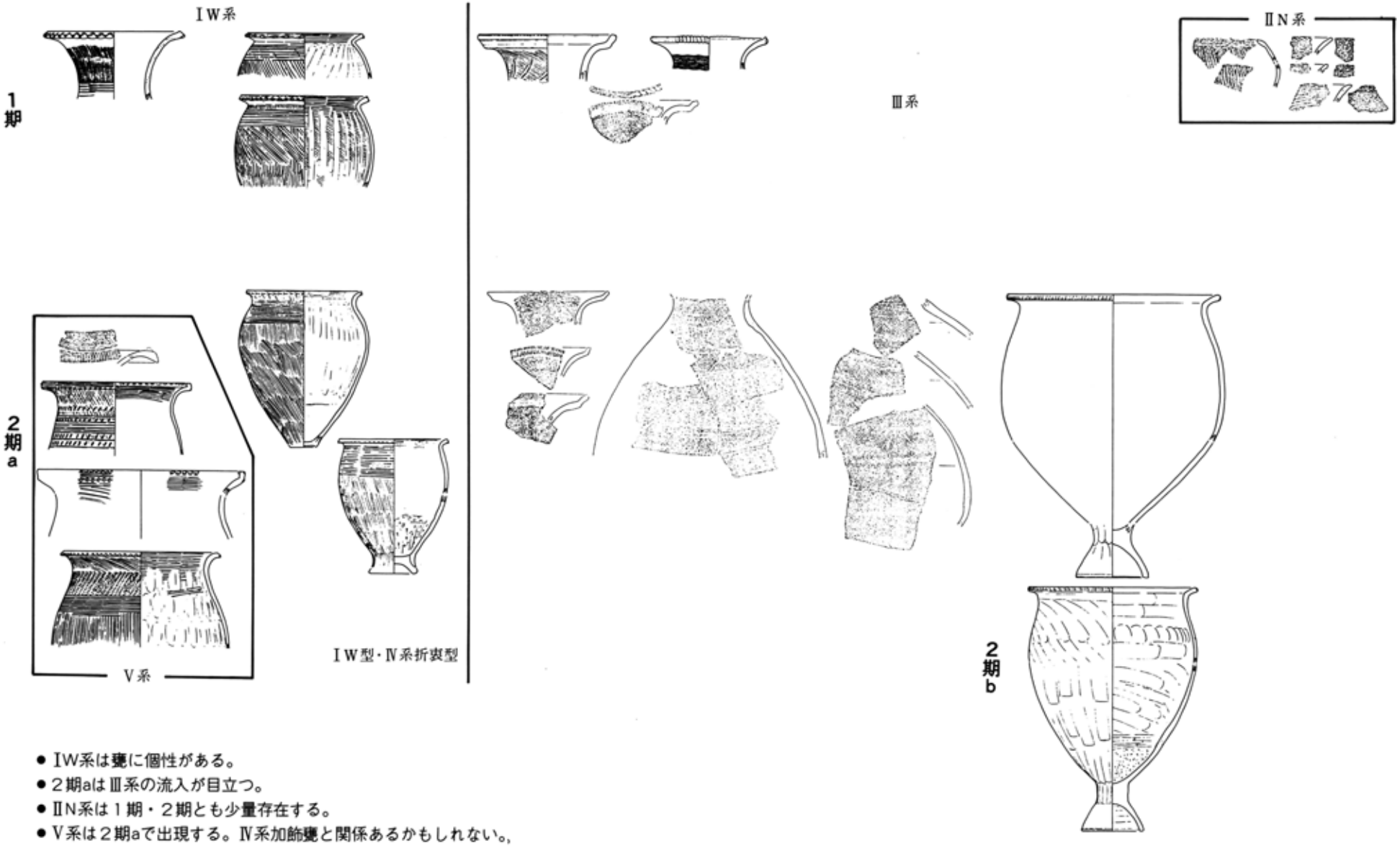
- 1期は太頸壺頸部ハケメ工具連続圧痕紋突帯・口縁部内面櫛刺突羽状紋、細頸壺口縁部櫛刺突羽状紋が特徴的。
- 2期は櫛刺突羽状紋がハケメ工具連続羽状圧痕紋に変わる。太頸壺頸部の突帯は直接施紋のハケメ工具連続圧痕紋に変わる。
- 2期bは細頸壺口縁部羽状紋が変形あるいは段数が1段となる。

第65図　Ⅳ系



● 1期は平底甕のみ、2期aは台付(低脚、高脚)甕が出現、2期bには台付甕(ほぼ高脚)のみとなる。
● 2期aには加飾甕が盛行する。

第66図　Ⅳ系



- ⅠW系は甕に個性がある。
- 2期aはⅢ系の流入が目立つ。
- ⅡN系は1期・2期とも少量存在する。
- Ⅴ系は2期aで出現する。Ⅳ系加飾甕と関係あるかもしれない。

第67図　諸系

2．大渕遺跡出土の土錘について

はじめに

大渕遺跡で出土した土錘は総数318点を数える。その全てを占める管状土錘は従来より漁網用とされており、河口地帯の低地部に立地する同遺跡の生業及び生活の一端を考える上で重要な位置にあると思われる。また、県内の古代遺跡でこのようにまとまった量が出土することは希少な例であるため、若干の統計的な処理をもとに、土錘の分類・製作・使用状況について考え、今後同様の環境を有する遺跡から出土する土錘の基礎データとしたい。

時　期　出土土錘のうち121点については、時期が明らかとなっている。109の1点のみが竪穴住居ＳＢ51より出土しており、弥生時代中期にあたる。また、31点が鎌倉～室町時代の溝・井戸・柵列ピット埋土内より出土しており、形態Ｃの須恵質のもの３点については、中世に下る可能性が考えられる。他の形態Ａ及び形態Ｂについては、中世遺構の土器の出土状態が、90％以上古代の遺物で占められるという状況があり、中世の土錘についてどのようなものがあるかははっきりしていないが、形態・胎土からみて混入と考えたほうがよいと思われる。さらに、大渕Ⅲ期に属するものがまったくみられなかったが、これは遺跡の性格の推移を考える上で重要なことと思われ、後述したい。

第68図 弥生時代の土錘

大渕Ⅰ－１期では17点、Ⅰ－２期48点、Ⅰ－３期８点出土しているが、この中で一括性が高いものをあげるとすれば、ＳＫ41の17点（うち埋土中６点）と若干問題は残るもののＳＥ28があるのみで、その他は確実性に乏しく、前述したように後掘された遺構に混入している可能性も考えられる。ただし、その形態からみて弥生期のものが多量に入ってきている確率は少ないものと思われる。そのため、数量的な問題もありⅠ期を細かくみることは意味があまり無く、時間的に幅はあるがⅠ期をまとめて扱い、Ⅱ期と比較してみたい。まず形態をみると、Ⅰ期の73点のうち形態Ａが66点を占め、形態Ｃが６点、形態Ｂは１点のみとなっている。Ⅱ期のもの16点のうち形態Ａが10点、形態Ｂが４点、形態Ｃが２点あり、Ⅰ期に比べてひとつの形態に集中しない傾向があり、特に形態Ｂがその割合を増しているのが目につく。次に重量の問題であるが、Ⅰ期の形態Ａの完形品で50.5ｇ～109.0ｇの間に33点分布し（１点201.9ｇのものがある）、うち20点が65ｇ～85ｇに集中する。一方、Ⅱ期の形態Ａは46.4ｇ～86.6ｇとⅠ期に比べてやや軽めの分布を示し、ばらつき気味である。また、形態Ｂは23.2ｇ～62.4ｇと軽い領域に落ち着く。形態Ｃについては、両時期ともにあまり差はない。

分　類　大渕遺跡の土錘318点は、すべて中心に貫通孔をもつ管状土錘であり、その他の形状のものはみられない。しかしその形態にはいくつかの特徴がみられ、その共通性によって3形態（形態A・B・Cとした）に分類することが可能と思われる。また同形態中においてもさらに細かく形態や端部の状態によって分類することができるようである。

以下に分類の結果を示す。

形　態　形態A（第71～74図）

229点。まっすぐな円筒形を特徴とする。大部分が比較的大型のもの（A_1）で、ごく少数きわめて小型のもの（A_2）がみられる。すべて土師質で、細かい砂粒を少し含む、淡褐色～淡橙色の胎土をもつ。

A_1：221点。長さ50.2～93.5㎜、径27.7～46.6㎜、孔径8.4～21.5㎜、重量42.5～201.9ｇであり、3形態のうちで最も大きい。ほぼ定型的な形をしているが、両端の面（土錘の厚み）の状態からさらに細分することができると思われる。すなわち、

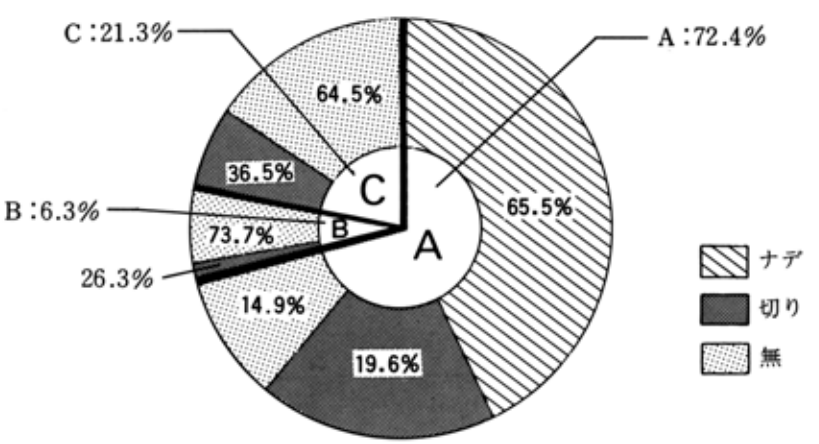
・端部をヘラ状のもので切ってそのままの面をもつもの41点（「切り」第71図1～32）、

・切った面の角をなでてなめらかにしているもの136点（「ナデ」第72図47～第74図144）、

・端面をもたないもの28点（「無」第74図145～160）の3種類で（不明17点）、ナデの状態のものが最も多いが、これは他の形態にはみられないもので、形態Aの特徴といえるであろう。

A_2：7点。長さ27.2～46.4㎜、径14.8～22.0㎜、孔径4.0～8.1㎜、重量5.7～27.8ｇと小型でサイズ的には後述のC形態の方に近いが、円筒形のためA形態に組み入れた。大型のものとの中間的な大きさのものも1点みられる（第72図46）。端面にはやはり切り（1点）。ナデ（2点）、無（3点）の3種類ともがみられる（不明1点）。

A_1 A_2とも製作時の指圧痕を顕著に残し、特に調整はなされていないものが大部分を占めているが、A_1には、タタキの痕が残っているもの（第71図35～38）、ハケ目の入っているもの（第71図33、34）、丁寧なナデが行われているもの（第71図39）が、ごく少数例外的にみられる。



第3表　端面処理状況表

形態B（第75図161～178）

20点。中央部に最大径をもつそろばん珠状の紡錘形を特徴とする。すべて土師質。やや粗い砂粒を含み、茶褐色～黒褐色の胎土をもつ。焼成は、やや軟～良好。長さ41.3～68.5㎜、径22.3～34.7㎜、孔径4.4～12.9㎜、重量23.2～67.0ｇ。端面の状態は、「切り」４点（第75図161～164）「無」15点（第75図167～178）の２種類（不明１点）。 Bの「無」の大きめのものにはA₁の「無」との区別が難しいものもある。指圧痕を残し、特に調整はなされていない。

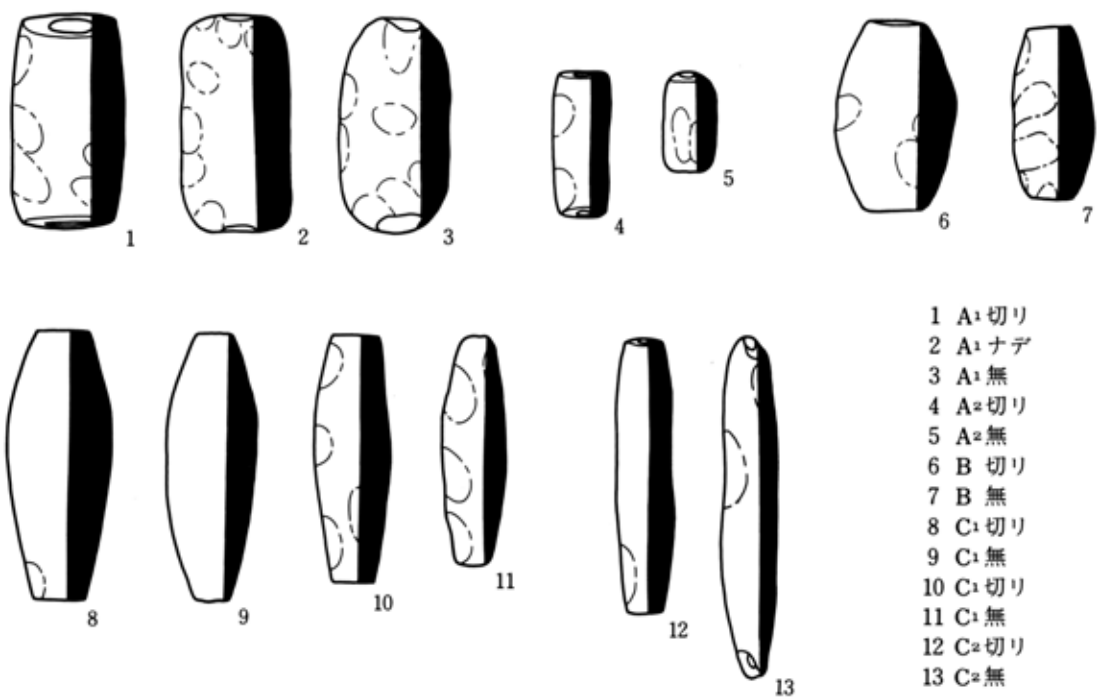
形態C（第75図179～229）

67点。細長い紡錘形を特徴とする。この形態はバリエーションに富み、丸みの強いもの（C_1）と長細いもの（C_2）とに大きく二分されるが、それぞれの中でも細かく分かれている。

C_1：58点。細長い紡錘形で、土師質と須恵質（21点）とがある。丸みの強い比較的太めのもの（須恵質が多い、第75図179～184、189～201）と、それよりもやや細めで小型のもの（第75図185～188、202～221）とにも分かれるようである。土師質のものは、黄褐色～茶褐色で、細かい砂粒を含んだり、指圧痕を顕著に残しがちであるが、須恵質のものは、灰白色で胎土は精良で、概してなめらかにナデてある。長さ41.4～72.0㎜、径10.2～24.5㎜、孔径3.3～7.0㎜、重量4.9～35.5ｇ。端面は、「切り」20点（第75図179～188）と「無」29点（第75図189～221）。

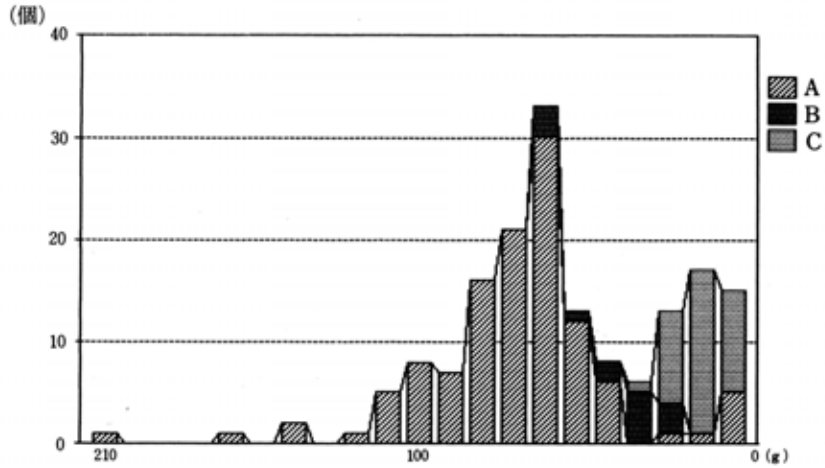
C_2：９点。やや長めで非常に細いもの。すべて土師質。細かい砂粒を含み、白色、黄褐色、淡橙色など様々な色をもつ。長さ9.3～63.3㎜、径5.9～15.4㎜、孔径1.4～5.4㎜、重量0.8～9.8ｇ。端面は「無」がほとんど（８点、第75図223～229）で、「切り」が１点（第75図222）。みな指圧痕が顕著。

形態による分類は以上の通りで、この形態の差異は、製作法の違いから、あるいは使用法の違いから生じるものと思われる。



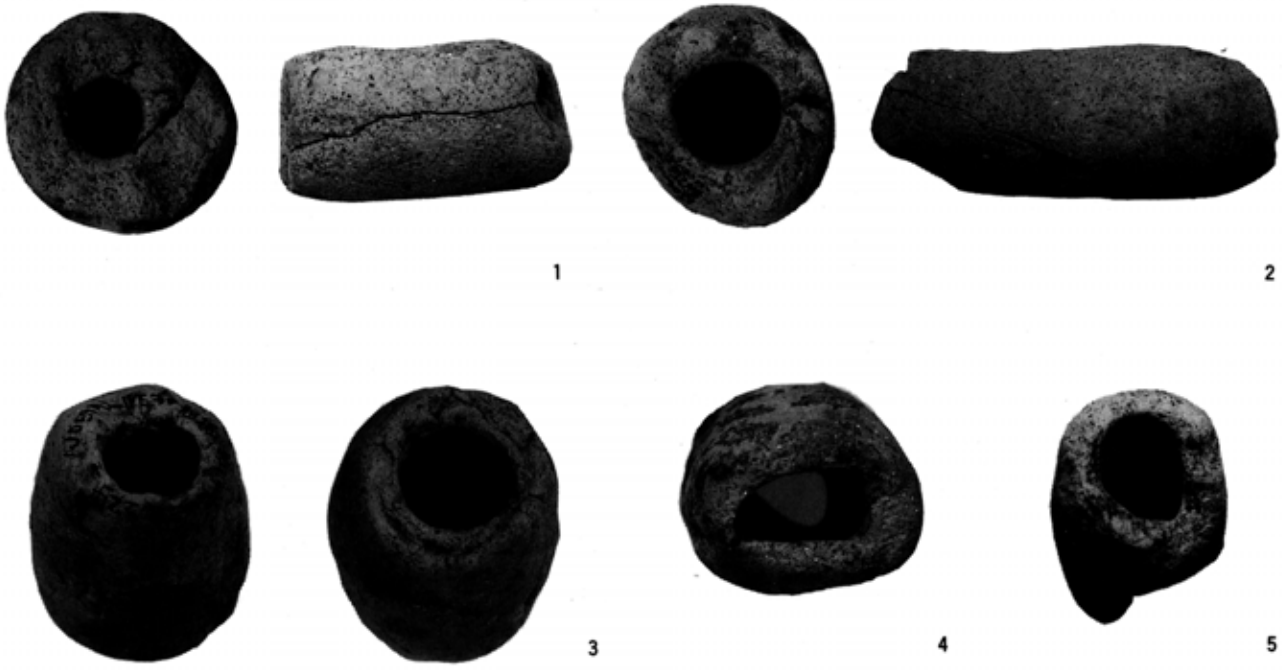
1 A¹切り
2 A¹ナデ
3 A¹無
4 A²切り
5 A²無
6 B 切り
7 B 無
8 C¹切り
9 C¹無
10 C¹切り
11 C¹無
12 C²切り
13 C²無

第69図　土錘分類模式図



第４表　形態別重量分布表

重　　量　次に、網を沈めるものとしての土錘にとって最も重要な属性である重量に注目してみる。ほぼ完形で重量を考慮できると思われるもの167点で、4.1～201.9ｇという広がりをみせるが、120ｇを超えるようなものはごく少数で、50～80ｇのものが最も多くみられる。第４、５表は、重量分布を形態でも分けて表したもので、これらから形態と特定重量との結びつきをみることができると思われる。すなわち、形態Ａは40～210ｇの重い部分を占め、形態Ｃが30ｇ以下の軽い部分、そして形態Ｂが20～50ｇと二者の中間の部分を占めている。また形態Ａは、さらに細かく、A_2にあたる５～15ｇ、Ａで最も多くみられる50～80ｇ、その次に多い80～100ｇ、それ以上という分布をみることができるようである。長さ、孔径と重量の関係は必ずしもはっきりしたものではなく、長いものが重い傾向にあるのは確かであるが、短くても厚みがあって重いというものもみられるのである。また端面の状態と重量の相関関係もはっきりしない。



第70図　製作法のわかる土錘

製 作 法　土錘の製作法は、土錘自身に残されている製作時の痕跡と思われるものから、おおよその方法を推測することができる。

・粘土を棒状のものに巻きつける。この巻いた状態のわかる土錘はしばしばみられ、そのつなぎめにおいて欠損がおきたりひびがはいったりしている（第70図１、２）。

・巻いた粘土を指や手の平で成形する。この時の指圧痕はほとんどの土錘に残っており、普通はそれだけしか行わないが、一部のものは、タタキを行っている。

・端面の処理は、面つまり厚みを中心の棒まで握りつぶしてしまえば、分類での「無」の状態になり、ヘラ状の道具で切ってしまえば「切り」となり、さらに丁寧に切ったものの角をナデて面取りすれば「ナデ」になる。この作り方から考えると、おそらく「無」は短い棒に粘土をつけ１つ１つ作ったと思われる。「切り」と「ナデ」は、長い棒に長く粘土を巻きつけ作ったとも考えられるが、やはり１つ１つ作って切ったものではないだろうか。切り口からみて、まだ少し柔らかさの残っている時に切断したと思われる。

・芯の棒を抜く。孔内面にしばしばこの時の痕跡の線が残っており、少し回しながら抜いたことがわかるものもある（第70図５）。 砂粒の動きから、やはりまだ柔らかさの残る時に行われているようである。抜いたときのはみ出した粘土が、そのまま残っているものもあり、中へ戻すように孔内へナデているものもある（第70図３）。 また棒を抜いた後、さらに握り直すように形を整えることも行われたようで、孔内に絞ったような線が残っているものや形のゆがんでしまったものもある（第70図４）。

・しばらく乾燥させた後、焼きあげられた。この時の火の当たり具合で、一部に黒斑の入ったものがある。

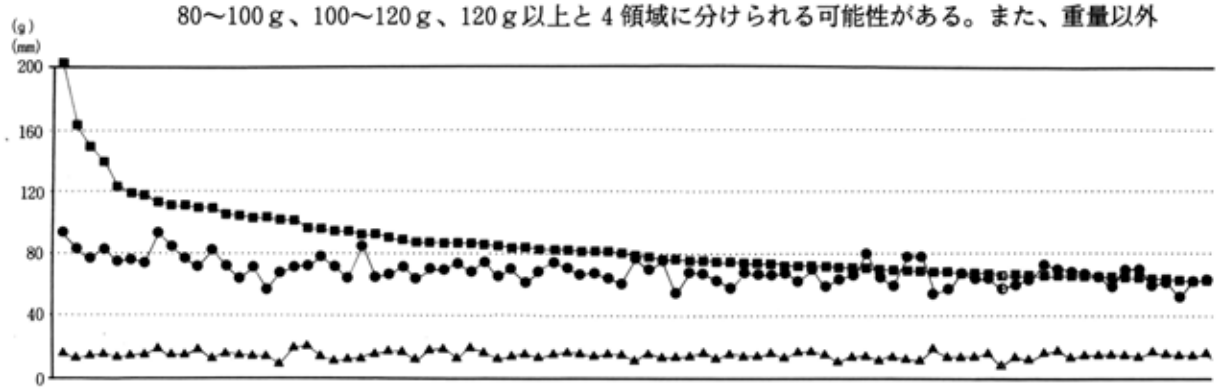
ま と め

このように、大渕遺跡出土の土錘の傾向をみてきたが、そこから窺える問題点について以下に述べてみたい。

弥生時代から古墳時代後期にかけての基本的な変遷と分類については、和田晴吾氏の論考[1]で明かであるが、その中で量的に発展することで画期となると述べられている古墳時代後期後葉以降については、各地で不明な点が多い。また、管状土錘の基本的な分類については和田氏のａ～ｅという五つの分類に示されているかと思われるが、そこからさらに細分を行う場合に、主な属性である重量・長さ・幅（周囲径）・孔径・形態・胎土の中で、どこに重きをおくかによって分類の基準が違ってきており、様々な“タイプ”を生む原因になっている。その中で特に着眼されるのが、重量・形態・長さの三属性である。これらはおそらく不可分な関係で相互に関連しあっているのであろうが、土錘を製作するうえで長さが最も比重を占めるとは考えにくく、重量の同じものでも長さにはかなり大きなばらつきがみられる。大渕遺跡の資料で例をあげると、256（長さ75.5㎜・径33.3㎜・孔径14.1㎜・重量76.1ｇ）、 283（長さ54.4㎜・径35.7㎜・孔径14.1㎜・重量75.9ｇ）、 105

（長さ76.9㎜・径33.5㎜・孔径11.7㎜・重量78.6ｇ）を比較すると、同孔径で重量が同じ場合には、長さと径は反比例の関係にあり、孔径が違うが、長さ・径・重量が同じなのは、器厚を厚くするからである。また別の視点がみると、62（長さ57.1㎜・径33.2㎜・孔径15.5㎜・重量56.6ｇ）と52（長さ80.0㎜・径33.4㎜・孔径15.4㎜・重量71.1ｇ）では、同径の原体に同じ厚さで粘土を巻くが、長さが違うために重量に差がでてきている。さらに、5（長さ80.0㎜・径33.4㎜・孔径15.4㎜・重量71.1ｇ）と215（長さ82.1㎜・径41.8㎜・孔径15.4㎜・重量140.0ｇ）を比べた場合、同径の原体に同じ長さで粘土を巻くが、粘土の厚さを変えることにより重量を違えている。つまり、製作のところで述べたが、型押し成形ではなく粘土を何らかの原体に巻き付けるかもしくは貼り付け、主に指ナデ・押圧で調整する当時の成形方法では、網の目の大きさを決定する“型”のようなものを使って常に厳密な計測値をもって多量に製作することは難しく、製作者が経験的に認識している“土錘”に似ていればよしとするか、同じ重さで同形態ならば長さ・粘土の厚さ・原体の太さはそんなには問題ではないというような常識が製作時にあったものと思われる。また、第３表でみるように形態Ａ$_1$の中でも孔径にはバライティがあり、粘土を巻き付ける原体に統一があったとは考えにくく、漁労網への装着方法からみても縄の太さによって幾種類も用意されていたとも思えない。このようにみてくると土錘の分類を行う場合、「網錘たる土錘の役割とは、漁網を水中に沈めたり、あるいは浮子と併用されて、沈降力と浮力によって漁網を水中に直立させたりする点にある。したがって、重量という要素は、土錘のもつ属性のなかで、最も重要の要素にほかならない。」という和田氏の指摘[1]が示すとおり、重量が大きな要素となり、次に伝統的に継承され受け継がれている形態が大きな比重を占めるであろう。別の見方をすれば、ある魚種の捕獲を目的とした網とそれに装着する錘を製作しようとする場合、形・重さが製作者の意図とするところになり、粘土を巻き付ける原体の太細や長さの長短・粘土の量は上記の二つの目的に沿って随時調節されていたものと思われる。

今回の分類では、まず第４表のように形態で分け、重量の分布と重ね合わした。この結果、形態のところで前述したが両要素には関連性があることが窺えた。形態Ａの中のＡ$_1$では、重量は漸移的に推移し明確な変換点は見いだせず細分はしなかったが、50～80ｇ、80～100ｇ、100～120ｇ、120ｇ以上と４領域に分けられる可能性がある。また、重量以外



第５表　土錘計測グラフ

の属性については、あまり規則性がみられなかったが、端部調整について、ナデを施すものが70～90ｇの範囲にはなく、重いものと軽いものの２つのグループになる傾向がある。A_2については、数が少なく形態Ａの中にいれたが、今後別形態になる可能性が高い。形態Ｂについては、まとまった形態・重量分布を示し、砂粒を多く含む胎土で暗褐色を呈するものがほとんどである。形態Ｃについては、細長い紡錘形を示すC_1とさらに長さが長くなったC_2に分かれる。形態C_1はやや重く須恵質のものを含み、形態C_2は軽く砂質の強い胎土を示すという特徴があり、将来的に２つのグループに分かれる可能性がある。以上のように分類については、さらに細分が可能であるが、そのことにより混乱をひきおこすというおそれもあったため、今回は大枠のものだけにとどめ、今後のまとまった資料の増加を待ちたいと思う。

形態と重量分布が密接な関係にあり、同時に記述したため、やや混乱してしまったきらいがあるが、両者の関連からグループ分けを行うと下記のようになる。

Ａグループ――――形態A_1

Ｂグループ――――形態Ｂ

Ｃグループ――――形態C_1・形態C_2・形態A_2

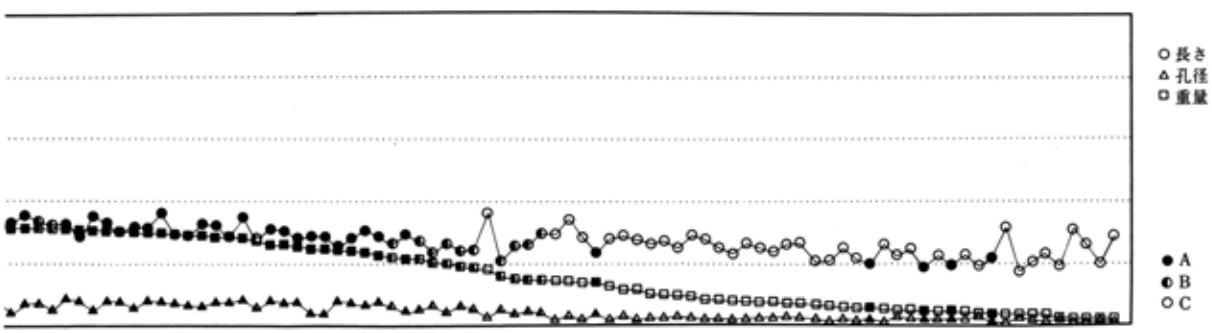
次に、これらの土錘がどのような漁労に使われ、どの種類の魚を捕獲していたかという問題であるが、これには、一つの網で数十から数百の単位で用いられる錘が遺跡では多くても数百の数しか出土しないこと、当時の遺跡環境（特に海や河川がどこにあり、どのような状況にあったのか）が正確に把握できていないということが大きな障害になっており、復元は困難なことである。そのため、現在行われている網漁労の資料を参考に推測してみたい。網の種類については、第６表に示したもの[2]が一般的に認められているものと思われ、これを基にしたい。農商務省水産局編纂『日本水産捕採誌』[3]と金田禎之『日本漁具・漁法図説』[4]より錘の重さのわかるものから平均的な値をだし、この重量値を先ほどの土錘の形態分類にあてはめると下記のようになる。

掩網類―11～15ｇ（特に投網）　　Ｃグループ

刺網類―3.8～225ｇ　　Ｂグループ

（20～100ｇのものが多い）

曳網類―75～1200ｇ



（地曳網―75.0～112.5ｇ）

（船曳網―1000ｇ前後～数kg）　　Ａグループ

旋網類―75～150ｇ

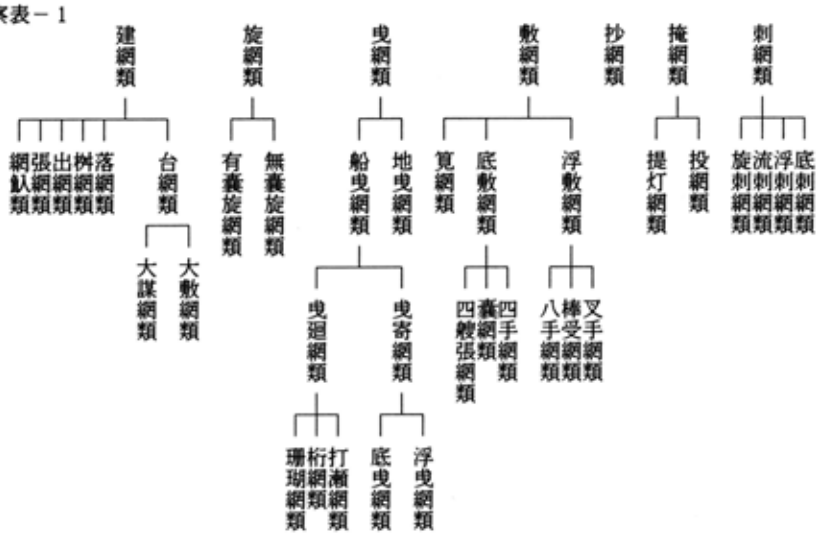
建網類―75～500ｇ

漁労条件の違いがあるため、一概にこの値を使うことは問題があり、偏差は極めて大きいと思われるが、およその傾向は示していると考えると、Ｃグループ[5]については、海岸部の遺跡・内陸部の遺跡とも出土するが、その占める比率は圧倒的に後者に多い。内陸部にある古墳時代～平安時代にかけての豊田市梅坪遺跡[6]では、計測された741点のほとんどがＣグループにあたり、河川で使用されていたことがわかる。遺跡付近の河口で行われた掩網（投網か[7]）か小型船による簡単な曳網・旋網・刺網が考えられる。Ｂグループについては類例は少なく、大阪湾周辺・遠江で僅かにみられるのみで、本県では一宮市清郷遺跡[8]で出土している。河口及び沿岸部で使用された刺網類に用いられたのであろうか[9]。次に、最も一般的であるＡグループであるが、このグループに属するものは山間部では出土せず、内陸部でも志貴野遺跡[10]のような大河川の近くの遺跡で使用されているようである。つまり流量の多い河川か海を対象に作られたものと思われ、沿岸部や内湾で行われる刺網類・曳網類・旋網類[11]・建網類が測定される。

以上、大渕遺跡出土の土錘の分析と推定の域をでない用途について述べてきた。この結果を遺跡に即して考えると、大渕Ⅰ期にあたる６世紀後半から７世紀にかけては、一定の形態・重量をもつ土錘をある程度の量必要とするような「計画的な漁労」が行われており、大渕Ⅱ期にあたる７世紀後半から８世紀前半には、形態Ｂの本格的な出現にみられる形態の分化や重量の分化がみられ、漁労の様相が若干変わってきているようである。その後、大渕Ⅲ期にあたる９世紀前半以降には規模の大きな漁労がおこなわれた様子はみられない。

（宮腰健司・古橋佳子）

考察表－１



第６表　魚網の種類（注７による）

註

(1) 和田晴吾「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考　小林行雄博士古希記念論文集』1982

(2) 高瀬増男『網漁具一資料一般一』1977を基にした。

(3) 渋澤敬三『日本水産捕採誌』農商務省水産局1910の復刻版1983による。

(4) 金田禎之『日本漁具・漁法図説』1977

(5) 形態Ｃについては管玉を模したものという見解（辰巳　均『下滝遺跡』浜松市遺跡調査会1985）もあり、祭祠の場で使用された可能性も十分あるが、使用痕があるものが多いことや、漁網の一単位を思わす129点の形態Ｃの土錘を同一土坑より出土した例（島根県教育委員会『前立山遺跡』）もあり、基本的には網錘でよいと思う。

(6) 杉浦裕幸「豊田市梅坪遺跡出土管状土錘の分類」『三河考古　第３号』1990

(7) 投網については、日本学士員日本科学史刊行会『明治前日本漁業技術史』では江戸中期以降の比較的新しい漁法とされている。

(8) 澄田正一ほか『新編一宮市史　資料編四』1974

(9) 小澤一弘氏の御教示によると、17世紀から19世紀にかけての名古屋城三の丸遺跡（㈶愛知県埋蔵文化財センター『名古屋城三の丸遺跡　Ⅰ』1990）においては形態のＢのものがみられる。

(10) ㈶愛知県埋蔵文化財センター『志貴野遺跡・小島遺跡』1990
小澤一弘「木曽川中流域のマス漁とウナギ漁」『民具マンスリー』第17巻９号　1984

(11) (7)の文献によると旋網は比較的沖合いの漁労であるとされている。

参考文献

秋山高志ほか『図録・山漁村生活史事典』1981

青森県立郷土館『青森県民俗資料図録第２集　青森県の漁具』1975

尼崎市教育委員会『尼崎市金楽寺貝塚　Ⅱ』1982

石川県立埋蔵文化財センター『寺家遺跡発掘調査報告　Ⅱ』1988

折井ほか『南中部の生業２　漁業・諸識』1982

京都府立総合資料館『京都府の民具　３．漁業』1979

財団法人東海水産科学協会・海の博物館『三重県水産図説』1883の復刻版1985

静岡県教育委員会『浜名湖における漁撈習俗Ⅰ』静岡県文化財調査報告書第30集98

鳥羽市教育委員会『鳥羽贄遺跡　第２次発掘調査報告』1987

埋蔵文化財研究会第19回研究集会資料『海の生産用具』1986

渡辺　誠『縄文時代の漁業』1973

第 7 表 土 錘 計 測 表

（遺構番号は旧番のままである。単位はmm・g）

番号	調査区	遺　　構	長さ	径	孔径	重量	焼成	形態	端面	調　整	図版番号
1	58TP4		(63.0)			(22.3)	土師質	A		ユビ押圧	
2	58TP4		(24.0)		5.9	(5.4)	土師質	C		ユビ押圧	
3	58TP5		67.0	37.5	16.7	(75.0)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
4	58TP5		66.8	34.2	15.8	(50.0)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
5	58TP5		80.0	33.4	15.4	71.1	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-129
6	58TP6	ＳＥ01	70.2	35.8	16.8	81.9	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-130
7	58TP6	ＳＥ01	63.8	39.8	15.7	104.4	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 6
8	58TP6	ＳＥ01	82.0	40.7	13.7	109.0	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-139
9	58TP6	ＳＥ01	(47.0)	22.2	7.1	(20.6)	須恵質	C	切り	ナデ	75-180
10	58TP6	ＳＥ01	70.7	32.9	18.1	65.9	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 7
11	58TP6	ＳＥ01	63.5	35.3	16.8	62.4	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 58
12	58TP6	ＳＥ01	54.7	19.8	6.4	20.1	須恵質	C	切り	ナデ	75-181
13	58TP6	ＳＥ01	59.7	34.8	15.8	60.0	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 8
14	58TP6	ＳＥ01	52.8	31.0	14.8	(41.7)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 47
15	58TP6	ＳＥ01	57.3			(43.7)	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 1
16	58TP6	ＳＥ01	61.4	35.9	15.5	83.1	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 9
17	58TP6	ＳＥ01	59.9	33.0	16.5	(41.7)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 59
18	58TP6	ＳＥ01	67.7	32.8	15.5	65.2	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 60
19	58TP6	ＳＥ01	66.9	35.3	17.0	(62.4)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	71- 10
20	58TP6	ＳＥ01	(21.5)	9.3	3.7	(1.3)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-223
21	58TP6		(70.0)	33.6	15.6	(45.9)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 61
22	58TP7		72.3	32.6	16.7	66.4	土師質	A	無	ユビ押圧	
23	58TP10		(38.3)	18.3	6.8	(9.8)	土師質	C	ナデ	ユビ押圧	75-202
24	58TP10		(39.3)	27.3	8.8	(13.6)	土師質	B			
25	58TP12		72.0	24.5	6.4	35.5	土師質	C	切り	ユビ押圧	75-179
26	58TP12		46.4	32.9	13.2	39.9	土師質	B	無	ユビ押圧	75-165
27	59A	ⅣＥ4o　ＳＫ09	(62.9)	38.4	16.9	(60.4)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 62
28	59A	ⅣＥ4o　ＳＫ14	(58.7)	35.0	15.3	(48.0)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 63
29	59A	ⅣＥ3p・q　ＳＫ16	70.1	38.0	18.1	72.3	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 64
30	59A	ⅣＥ4n　ＳＫ19	73.0	35.0	13.6	86.5	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 65
31	59A	ⅣＥ4n　ＳＫ19	67.1	30.7	18.6	(48.7)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 66
32	59A	ⅣＥ4n　ＳＫ19	(53.6)	36.0	17.7	(46.2)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 67
33	59A	ⅣＥ4o　ＳＫ19	61.0	34.7	16.8	(56.8)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 68
34	59A	ⅣＥ4o　ＳＫ19	(56.8)	37.4	16.9	(53.0)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 69
35	59A	ⅣＥ4o　ＳＫ19	76.8	34.0	16.1	(60.7)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 70
36	59A	ⅣＥ4n　ＳＫ19	54.9	36.0	15.6	50.5	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 48
37	59A	ⅣＥ4n　ＳＫ19	(60.8)	40.1	17.6	(57.3)	土師質	A	無	ユビ押圧	74-145
38	59A	ⅣＥ4o　ＳＫ19	(63.5)	34.0	13.4	(44.6)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 71
39	59A	ⅣＥ4o　ＳＫ19	(50.2)	33.3	14.1	(36.9)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 49
40	59A	ⅣＥ4o　ＳＫ19	(49.1)	36.0	15.4	(40.0)	土師質	A	無	ユビ押圧	74-146
41	59A	ⅣＥ4o　ＳＫ19	(69.2)	36.0	15.4	(51.0)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 72
42	59A	ⅣＥ4n　ＳＫ19	(55.4)	32.3	14.8	(38.5)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 73
43	59A	ⅣＥ4n　ＳＫ19	73.3	40.0	16.0	(75.8)	土師質	A	無	ユビ押圧	74-147
44	59A	ⅣＥ4n　ＳＫ19	63.0	38.1		(48.4)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 74
45	59A	ⅣＥ4n　ＳＫ19	69.0	35.1	15.5	(42.2)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 75
46	59A	ⅣＥ4n　ＳＫ19	(60.4)			(27.7)	土師質	A		ユビ押圧	
47	59A	ⅣＥ6n　ＳＫ26	71.6	35.6	16.7	(61.7)	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 11
48	59A	ⅣＥ6n　検出	56.4	15.4	5.4	(9.0)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-203
49	59A	ⅣＥ5h　検出	(33.7)	15.0	6.9	(5.0)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-224
50	59A	ⅣＥ3p　検出	64.8	39.8	16.0	92.0	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
51	59A	ⅣＥ4o　検出	68.4	35.5	13.8	72.9	土師質	A	無	ユビ押圧	74-148
52	59AL	ⅣＥ5o　検出	63.0	35.6	15.8	(64.2)	土師質	A	無	ユビ押圧	
53	59AL	ⅣＥ2o　検出	65.2	36.9	16.3	60.3	土師質	A	無	ユビ押圧	74-149
54	59AL	ⅣＥ3o　検出	55.6	33.7	14.9	47.6	土師質	A	無	ユビ押圧	
55	59A	ⅣＥ9n　検出	57.6	20.9	7.0	23.3	須恵質	C	切り	ナデ	

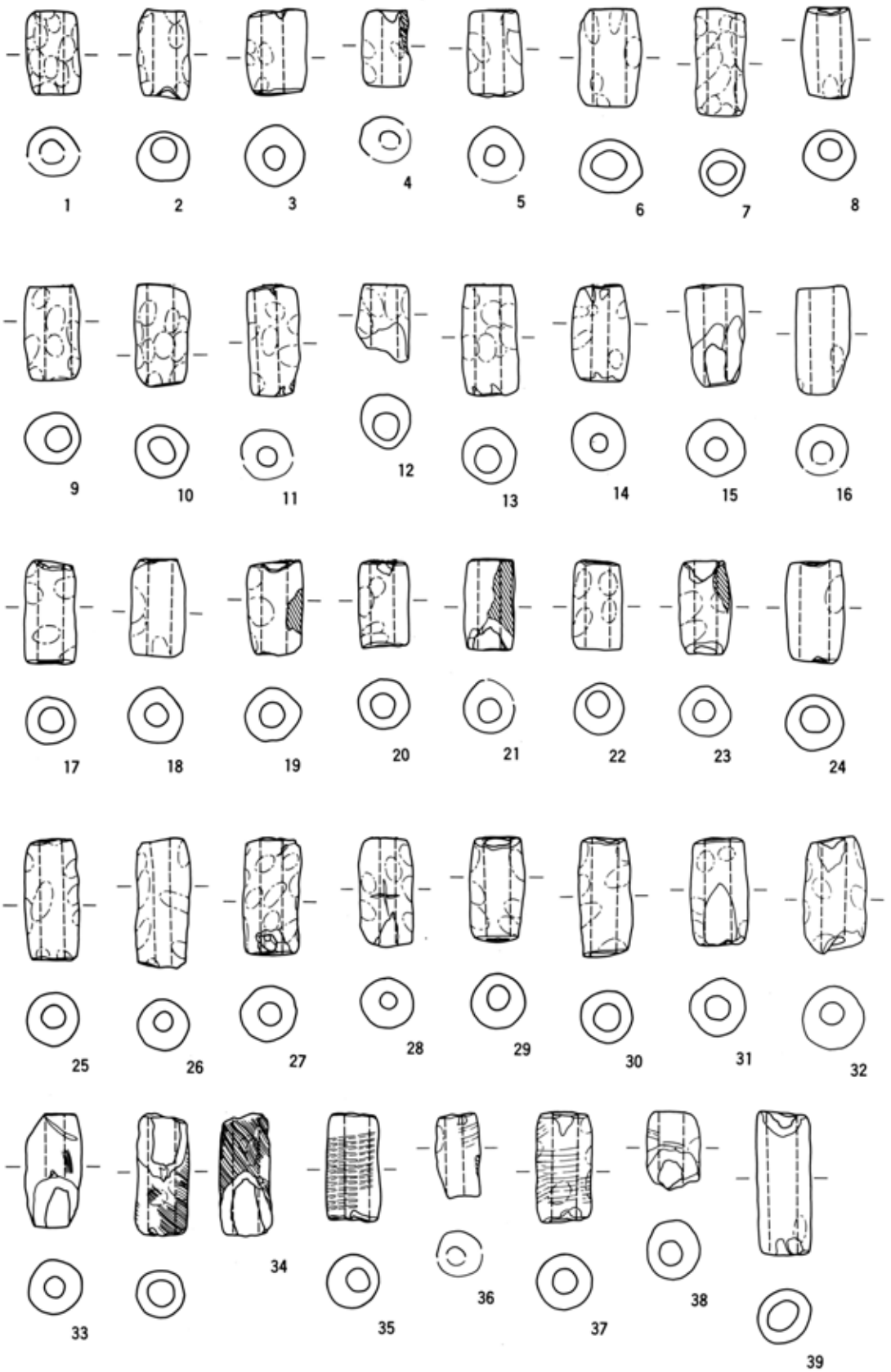
番号	調査区	遺　　構	長さ	径	孔径	重量	焼成	形態	端面	調　整	図版番号
56	59B	検出	58.8	35.0	16.4	(51.2)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
57	59B	検出	42.9	17.6	6.8	(10.0)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-189
58	59B	ⅣE18j　SE02	66.0	34.2	15.7	65.0	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 76
59	59B	ⅣE18j　SE02	(21.0)		9.4	(6.6)	土師質	B	切り	ナデ	75-161
60	59B	検出	47.8	20.5	6.4	15.4	須恵質	C	無	ナデ	75-190
61	59B	検出	(65.1)	37.1	16.2	(41.4)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
62	59B	ⅣE171 検出	57.1)	33.2	15.5	56.6	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 2
63	59B	ⅣE171 検出	38.7	15.1	6.0	8.4)	土師質	C	無	ナデ	75-191
64	59B	ⅣE18k　SK37	68.5	36.0	15.0	75.8	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 77
65	59B	ⅣE18k　SK01	67.0	36.6	17.3	75.1	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 78
66	59B	ⅣE18k　SK01	(54.0)		18.0	(36.2)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74- 79
67	59B	ⅣE17k　SK01中	(52.4)	36.1	16.0	(55.9)	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 12
68	59B	ⅣE17k　SK01中	78.3	32.7	13.6	69.7	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-131
69	59B	ⅣE16k　SK45	(45.7)	34.7	15.8	(43.6)	土師質	A	ナデ	ナデ	75- 80
70	59B	ⅣE17k　SK01枠	52.2	16.9	3.4	11.4	土師質	C	無	ユビ押圧	75-204
71	59C	検出	71.7	40.7	19.0	109.1	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-140
72	59C	検出	68.5			(51.8)	土師質	A		ユビ押圧	
73	59C	検出	71.7	38.4	16.2	104.8	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 13
74	59C	ⅤE3i　SK14	48.3	30.0	12.5	37.9	土師質	B	無	ユビ押圧	75-166
75	59C	ⅤE3i　SK21	(51.5)	32.3	13.2	(33.0)	土師質	A		ユビ押圧	
76	59D	ⅤE9f　SK11	71.8	40.0	15.0	103.0	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 81
77	59E	南サブトレ	(29.4)	9.4	4.3	(1.4)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-225
78	59F	表土	56.5	42.9	15.0	102.8	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 3
79	59F	検出	40.1	14.5	4.6	(6.8)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-205
80	59F	検出	(26.0)			(7.4)	土師質	?		ユビ押圧	
81	59G	SK08	77.9	35.0	14.9	95.4	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 25
82	59G	検出	84.1	35.4	15.3	110.9	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 26
83	59G	検出	76.6	36.2	15.5	(95.4)	土師質	A	切り	ハケ・ナデ	71- 33
84	59G	検出	65.3	34.5	17.5	68.0)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 82
85	59G	検出	63.8	38.1	12.9	87.2	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 14
86	59G	検出	(61.0)			(30.6)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
87	59G	検出	(51.0)			(30.1)	土師質	A	無	ユビ押圧	
88	59G	検出	(39.2)	22.4	6.3	(16.6)	須恵質	C	切り	ナデ	
89	59G	検出	(34.3)			(14.1)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
90	59G	表土	(50.9)			(9.5)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
91	59G	検出	52.6	31.8	12.9	43.3	土師質	B	無	ユビ押圧	75-167
92	60A1	ⅢE18j　SK152	93.5	38.6	19.4	112.9	土師質	A	ナデ	ナデ	71- 39
93	60A1	ⅢE16K　SK166	70.8	36.7	17.4	88.1	土師質	A	ナデ	T後ナデ	71- 35
94	60A1	ⅢE19j　SK167	(77.0)	41.2	17.0	(80.2)	土師質	A	無	ユビ押圧	74-159
95	60A1	ⅢE18K　SK173	59.8	36.6	17.5	63.7	土師質	A	切り	ユビ押圧	73- 83
96	60A1	ⅢE17i　SK368	(56.4)			(26.0)	土師質	A	ナデ	T後ナデ	71- 36
97	60A2	ⅣE2i　SE07	(61.5)	38.3	12.3	(73.9)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 84
98	60A2	ⅣE6k　SK03	92.9	46.6	16.6	201.9	土師質	A	無	ユビ押圧	74-160
99	60B1	ⅢE181　SD02	(68.6)	38.0		(44.9)	土師質	A		ユビ押圧	
100	60B1	SD03下層	64.5	35.4	17.0	(58.9)	土師質	A	無	ユビ押圧	74-150
101	60B1	ⅢE161　SK71	(50.9)	31.0	14.3	(42.3)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 85
102	60B2	ⅢE20m　SK07	(38.6)	(39.6)	(17.4)	(25.7)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 86
103	60C2	ⅣE91　SD01	74.9	36.6	17.3	85.9	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 27
104	60C2	ⅣE5H　SD13	52.6	18.3	6.7	15.1	須恵質	C	無	ユビ押圧	75-193
105	60C2	SE01	76.9	33.5	11.7	78.6	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-132
106	60C2	ⅣE4h　SK01上	(72.3)	35.6	18.5	(46.8)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 87
107	60C2	ⅣE2h　SK264	(9.3)	5.9	1.4	(0.8)	土師質	C		ユビ押圧	75-226
108	60C2	ⅣE7g　SD16	(74.2)	38.2	16.9	(87.7)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-141
109	60C3	ⅣE6h　SB02	56.3	17.8	5.4	17.3	土師質	C	無	ユビ押圧	
110	60D	南壁サブトレ	46.2	16.8	6.0	10.4	須恵質	C	無	ユビ押圧	75-210
111	60D	検出	82.9	40.3	13.0	162.5	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-142
112	60D	検出	(38.3)			(8.4)	土師質			ユビ押圧	

番号	調査区	遺　　構	長さ	径	孔径	重量	焼成	形態	端面	調　整	図版番号
113	60D	検出	(60.8)			(16.2)	土師質	A	無	ユビ押圧	
114	60D	検出									
115	60D	検出	59.4			(47.6)	土師質	A	切り	ユビ押圧	
116	60D	ⅣE9e　SD01上	(44.3)			(12.7)	土師質	A		ユビ押圧	
117	60D	ⅣE9c　SD01上	78.2	36.1	12.7	(54.8)	土師質	A	無	ユビ押圧	74-151
118	60D	ⅣE9c　SD01上	57.1	15.3	4.5	(9.8)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-206
119	60D	SD01上層	40.3	11.4	4.2	4.9	土師質	C	無	ユビ押圧	75-207
120	60D	ⅣE9e　SD01上	52.3	31.5	9.3	39.5	土師質	B	無	ユビ押圧	75-168
121	60D	ⅣE10e　SD01下	56.1	20.6	4.9	25.3	須恵質	C	切り	ヘラ削り	75-183
122	60D	ⅣE10e　SD01下	(51.8)		14.3	(19.2)	土師質	A	無	ユビ押圧	74-152
123	60D	ⅣE9e　SD01下	78.6	32.0	12.6	69.5	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-133
124	60D	ⅣE6c　SD02	69.0	31.5	14.8	68.4	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 88
125	60D	ⅣE5d　SD02上	78.7	32.3	17.8	(50.1)	土師質	A	切り	ハケ	71- 34
126	60D	SK05	(21.5)		4.2	(2.9)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-208
127	60D	SK07	(35.4)			(13.1)	土師質	A		ユビ押圧	
128	60D	SK07	(25.2)			(6.0)	土師質	A	無	ユビ押圧	
129	60D	P13柱痕	38.4	11.6	3.9	5.1	土師質	C		ユビ押圧	75-209
130	60D	P20掘り方	67.3	35.3	9.7	101.5	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 89
131	60D	P20掘り方	71.0	35.0	11.8	94.3	土師質	A	切り	ユビ押圧	
132	60D	表土	62.0	33.0	10.6	(45.1)	土師質	B	無	ユビ押圧	75-169
133	60D	表土	44.5	17.0	5.8	(12.0)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-195
134	60E	ⅣD14b 検出	(32.2)	13.4	4.0	(4.9)	須恵質	C	無	ユビ押圧	75-211
135	60E	ⅣD16a 検出	(60.7)			(27.3)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
136	60E	ⅣD16b 検出	(54.4)	26.0	6.3	(26.6)	土師質	C	切り	ユビ押圧	
137	60E	ⅣD16b 検出	(35.6)	17.9	3.8	(6.2)	土師質	C	無	ユビ押圧	
138	60E	ⅣD16b 検出	(37.1)			(10.8)	土師質	A	切り	ユビ押圧	
139	60E	ⅣD17a 検出	(47.2)		12.5	(14.2)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
140	60E	ⅣD15b.c 検出	58.9	32.3	9.8	67.0	土師質	B	無	ユビ押圧	75-170
141	60E	SE03上層	69.4	30.9	10.5	60.8	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 99
142	60E	SD01上	57.1	9.3	2.6	4.1	土師質	C	無	ユビ押圧	75-227
143	60E	SD01上	61.6	25.9	7.8	(31.9)	土師質	B	無	ユビ押圧	75-171
144	60E	SD01上	67.2	32.5	13.7	82.9	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 29
145	60E	ⅣD15b　SD01	76.2	37.0	13.6	(80.8)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 90
146	60E	SD01下層	57.5	37.4	13.7	(62.3)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 92
147	60E	SD01下層	72.3	33.1	15.3	59.0	土師質	A	無	ユビ押圧	74-153
148	60E	SD02サブトレ内	65.7	32.8	12.7	70.3	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 93
149	60E	SD02サブトレ内	70.0	34.6	16.6	77.7	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-134
150	60E	SD02	69.6	37.8	18.2	87.1	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-135
151	60E	SD02サブトレ内	71.9	41.0	21.5	96.3	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-136
152	60E	SD02下層	66.9	35.4	17.0	73.7	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 94
153	60E	SD03	68.7	40.4	19.4	86.6	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 95
154	60E	ⅣD19t　SD03	62.7	36.3	16.0	59.4	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 96
155	60E	SD03上層	(55.8)	33.2	16.1	(41.4)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 97
156	60E	17a　SK48	50.8		11.6	(34.7)	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 4
157	60E	SX01　C群	58.3	35.6	14.7	68.7	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-100
158	60E	SX01　C群	62.0	35.1	16.2	63.6	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-101
159	60E	SX01　C群	57.9	33.0	14.7	58.4	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-102
160	60E	SX01　C群	64.3	34.7	15.1	68.3	土師質	A	無	ユビ押圧	74-154
161	60E	SX01　D群	67.0	33.7	14.8	71.8	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-103
162	60E	ⅣE17a 検出	65.4	35.2	12.5	85.0	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
163	60E	ⅣE17a 検出	61.7	9.7	2.4	5.0	土師質	C	無	ユビ押圧	75-228
164	60E	ⅣE17a 検出	63.3	11.2	2.4	7.5	土師質	C	無	ユビ押圧	75-229
165	60E	ⅣE18t 検出	56.5	30.3	15.2	44.4	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
166	60E	ⅣE18a 検出	65.3	31.2	12.7	57.5	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
167	60E	ⅣE18a 検出	58.8	38.2	16.5	75.0	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
168	60E	ⅣE19b 検出	50.5	19.2	5.7	17.2	土師質	C	無	ユビ押圧	75-196
169	60E	表土	63.5	35.1	13.1	75.0	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	

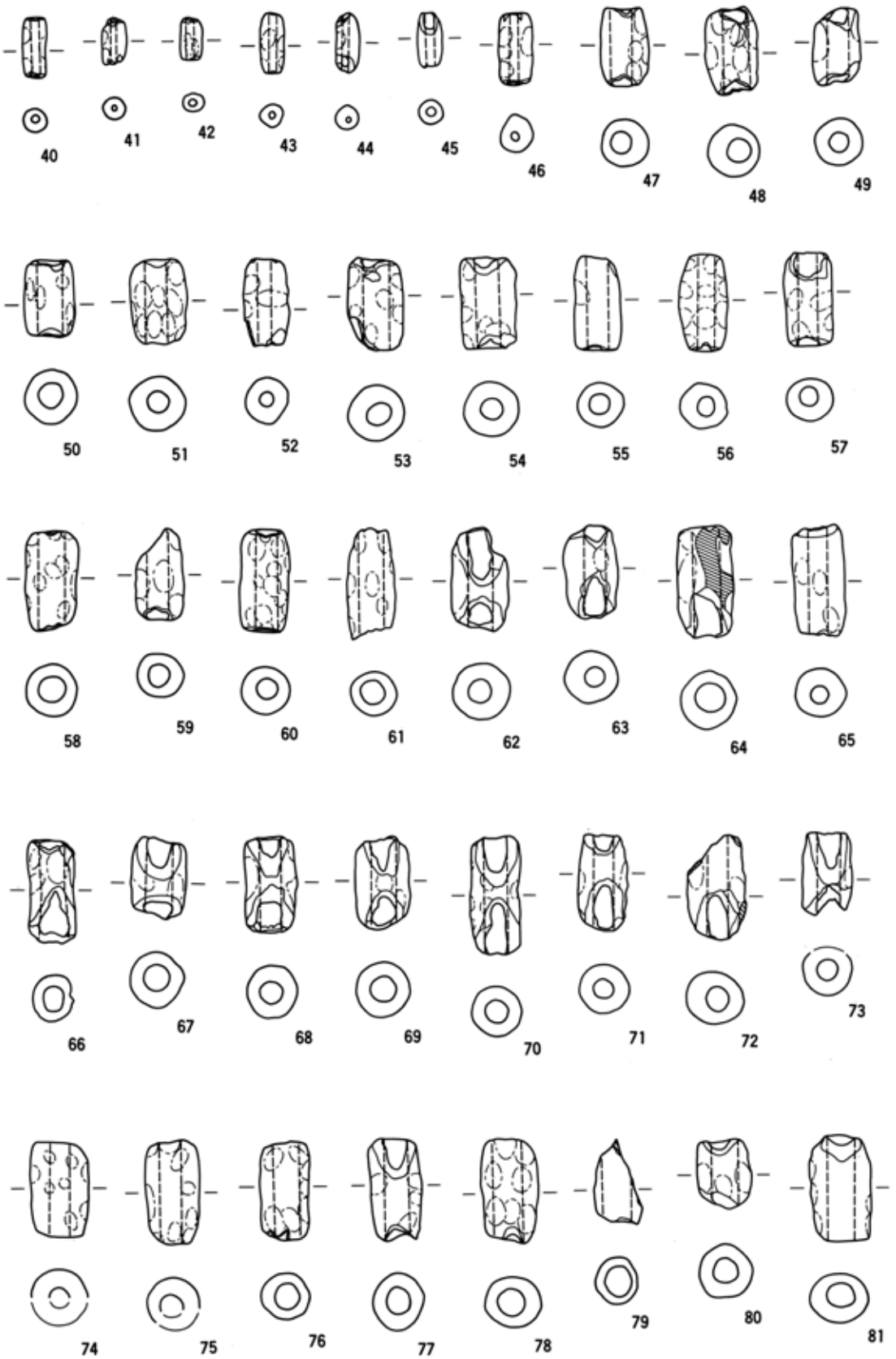
番号	調査区	遺　　構	長さ	径	孔径	重量	焼成	形態	端面	調　整	図版番号
170	60F	ⅣE14j ＳD10	68.7	29.7	10.7	(57.0)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-105
171	60F	ＳE01	51.2	12.9	5.3	(14.0)	須恵質	C		ナデ？	75-212
172	60F	ⅣE16h ＳD01下	59.0	21.4	5.0	28.3	須恵質	C	切り	ユビ押圧	75-184
173	60F	ⅣE16h ＳD01下	71.2	36.0	19.6	101.1	土師質	A	切り	T後ナデ	71- 37
174	60F	ⅣE14d ＳK25	67.5	36.8	14.5	81.0	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-106
175	60F	ⅣE14d ＳK27	70.2	33.3	14.9	64.7	土師質	A	無	ユビ押圧	74-156
176	60F	ⅣE14d ＳK28	(30.8)	(39.0)	13.1	(35.1)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-107
177	60F	ⅣE13.4f ＳK45	45.5	13.7	4.6	8.9	土師質	C	切り	ユビ押圧	75-185
178	60F	ＳK83	74.7	38.7	14.4	123.3	土師質	A	無	ユビ押圧	74-157
179	60F	P16	(61.7)	27.1	13.3	(36.2)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-108
180	60F	P325	(51.2)			(17.4)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-109
181	60F	P704	61.0	35.0	15.0	66.8	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 53
182	60F	検出	65.4	32.1	17.7	62.0	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-110
183	60F	検出	53.1	19.2	5.4	16.1	土師質	C	切り	ユビ押圧	75-186
184	60F	検出	75.9	39.5	15.8	110.6	土師質	A	無	ユビ押圧	
185	60F	ⅣD14d 検出	46.4	22.0	8.1	27.8	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 46
186	60F	ⅣD16g 検出	(49.4)	33.1	12.9	(36.2)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
187	60F	ⅣD16h 検出	56.1	35.6	13.0	69.0	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 5
188	60F	ⅣD17g 検出	50.4	21.7	6.7	20.0	須恵質	C	切り	ユビ押圧	
189	60F	ⅣD17g 検出	50.0	19.0	5.8	15.8	須恵質	C	無	ユビ押圧	75-213
190	60F	ⅣD17g 検出	68.6	33.8	16.8	55.8	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-111
191	60F	ⅣD18g 検出	39.9	19.4	4.5	(15.6)	土師質	C	無	ユビ押圧	
192	60F	ⅣD14d 検出	61.3	35.9	15.8	79.7	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-112
193	60F	ⅣD14e 検出	65.7	35.1	16.1	(60.3)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
194	60F	ⅣD14f 検出	(46.1)	37.7	17.4	(54.0)	土師質	A	切り	T後ナデ	71- 38
195	60F	ⅣD17c 検出	(31.7)	19.4	4.0	(7.6)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 41
196	60F	ⅣD17d 検出	38.2	16.3	5.0	9.7	土師質	A	無	ユビ押圧	72-198
197	60F	ⅣD18f 検出	50.5	18.3	5.7	12.7	須恵質	C	切り	ユビ押圧	
198	60F	ⅣD19e 検出	75.4	41.3	14.9	118.5	土師質	A	無	ユビ押圧	71- 28
199	60F	表土	(88.2)	(35.1)	(13.2)	(58.3)	土師質	A		ユビ押圧	
200	60F	表土	(42.2)	35.0	14.2	(42.4)	土師質	A	切り	ユビ押圧	
201	60F	表土	(36.7)	34.6	15.9	(31.1)	土師質	A		ユビ押圧	
202	60F	表土	66.5	35.1	15.9	81.3	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-113
203	60F	表土	(44.6)	14.8	5.3	(8.6)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-214
204	60F	表土	57.8	19.5	6.0	18.9	須恵質	C	切り	ユビ押圧	
205	60F	表土	49.8	15.9	5.6	10.3	土師質	C	無	ユビ押圧	75-215
206	60F	表土	52.0	20.8	6.0	20.4	須恵質	C	無	ユビ押圧	75-199
207	60F	表土	(57.5)			(30.4)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
208	60F	表土	(57.1)			(18.5)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
209	60F	表土	(29.9)			(3.6)	土師質	C	無	ユビ押圧	
210	60F	表土	(39.7)		14.3	(17.4)	土師質	A		ユビ押圧	
211	60F	表土	(62.0)		16.8	(38.7)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
212	60F	表土	69.7	32.4	13.9	(80.0)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-114
213	60G	VD1r 検出	(54.3)	41.4	16.1	(82.8)	土師質	A	無	ユビ押圧	
214	60G	VD3t 検出	61.9	34.7	15.2	62.5	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-143
215	60G	VD2a 検出	82.1	41.8	15.4	140.0	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
216	60G	表土	(46.0)			(15.8)	土師質	A		ユビ押圧	
217	60G	VD1t ＳD01	64.5	37.2	14.8	(69.4)	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 15
218	60G	VD4s ＳD05下	41.9	17.1	4.2	13.5	須恵質	C	切り	ユビ押圧	75-187
219	60G	VD4q 検出	68.5	23.3	7.1	28.2	土師質	A	無	ユビ押圧	
220	60G	VD3r 検出	(27.2)	14.8	4.6	(5.7)	土師質	A	無	ユビ押圧	72- 42
221	60G	表土	59.8	35.8	15.9	72.1	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 54
222	60G	表土	74.1	33.2	16.1	82.6	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 30
223	60G	表土	83.9	34.9	13.3	92.1	土師質	A	無	ユビ押圧	
224	60G	表土	(68.4)	33.6	14.6	(58.1)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
225	60I	ＳK03	(60.5)	47.1	17.6	(103.3)	土師質	A	無	ユビ押圧	74-158
226	60I	南壁トレンチ	59.2	25.1	9.1	29.6	土師質	B	無	ユビ押圧	75-172

番号	調査区	遺　　構	長さ	径	孔径	重量	焼成	形態	端面	調　整	図版番号
227	60I		(54.2)	32.6	14.3	(48.5)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
228	60I		64.7	36.0	16.0	80.9	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 18
229	60I		56.0	34.7	11.7	54.1	土師質	B	無	ユビ押圧	75-173
230	60I	ＶＤ8r検出	59.7	34.5	15.9	65.0	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 19
231	60I	表土	(53.9)	20.6	8.6	(19.9)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-201
232	60J	ＶＥ　ＳＤ01	51.6	25.8	9.9	29.6	土師質	B	無	ユビ押圧	75-174
233	60J	ＳＤ11	63.8	38.4	12.9	94.1	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-125
234	60J	ＳＤ17	(32.2)	15.5	3.5	(6.7)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-219
235	60J	ＳＤ19	55.1	33.6	19.5	68.7	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 20
236	60J	ＳＫ08上層	(30.2)			(10.3)	土師質	A		ユビ押圧	
237	60J	ＳＫ26	(32.9)	16.1	5.3	(8.5)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-220
238	60J	ＳＫ36	(42.8)	32.3	11.1	(45.0)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-126
239	60J	ＳＫ45	69.3	33.6	14.4	65.8	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-127
240	60J	ＳＫ51	55.3			(25.2)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
241	60J	ＶＥ6c　検出	69.5	34.1	15.6	64.9	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-128
242	60J	ＶＥ10d 検出	53.8	29.9	10.2	42.4	土師質	B	無	ユビ押圧	75-175
243	60J	西トレンチ	41.3	28.7	11.5	31.1	土師質	B	無	ユビ押圧	75-176
244	60J	検出	(49.1)			(25.3)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
245	60J	検出	46.6	13.9	3.3	7.3	土師質	C	無	ユビ押圧	75-218
246	60J	検出	(59.3)	36.8	14.8	(62.5)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
247	60J	表土	58.9	34.0	14.6	(53.7)	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 21
248	60J	表土	56.8	32.0	15.9	61.0	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 22
249	60J	検出	(61.9)	34.0	18.1	(58.8)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
250	60J	検出	53.2	18.2	6.3	15.0	須恵質	C	切り	ユビ押圧	
251	60K	検出	64.3	33.7	11.9	72.0	土師質	A	切り	ユビ押圧	75-221
252	60K	ＶＤ13q ＳＤ01	65.9	29.8	9.0	62.4	土師質	B	切り	ユビ押圧	75-162
253	60K	ＶＤ1 r ＳＤ01	(41.2)	(20.5)	4.3	(12.1)	土師質	C	切り	ユビ押圧	75-188
254	60K	ＶＤ14q ＳＫ56	45.3	16.0	5.2	9.6	土師質	C	無	ユビ押圧	
255	60K	Ⅱ期直上	46.1	25.1	10.6	(19.6)	土師質	B	切り	ユビ押圧	75-163
256	60K	VD12r 北壁トレンチ	75.5	33.3	14.1	76.1	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-138
257	60K	VD12q 北壁トレンチ	60.0	34.0	14.6	70.2	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 23
258	60K	表土	65.8	37.6	17.8	90.0	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 24
259	60K	ＶＤ15s ＳＫ16	64.4	30.5	11.0	62.4	土師質	B	切り	ユビ押圧	75-164
260	60L	ＶＤ13a ＳＤ04埋土	48.7	29.4	11.3	36.4	土師質	B	無	ユビ押圧	75-177
261	60L	ＶＥ16c 検出	(48.8)	20.6	6.0	(18.1)	須恵質	C		ユビ押圧	
262	60L	検出	(38.4)			(8.6)	土師質	C	切り	ユビ押圧	
263	60L	ＶＥ12・13c 検出	50.7	26.2	8.2	29.9	土師質	B	無	ユビ押圧	75-178
264	60E	ⅣＥ14b ＳＤ01	(49.3)	37.3	15.3	(51.7)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 91
265	60E	ＳＤ04上層	57.3	31.9	13.5	57.6	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 98
266	60E	ＳＤ04	55.5	22.3	4.7	23.2	土師質	C	無	ユビ押圧	75-194
267	60H	ＳＤ01下層	(49.8)	35.4	15.9	(26.9)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-115
268	60H	ＳＤ01	66.3	35.6	16.0	(65.3)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-116
269	60H	ＳＤ11	70.4	34.2	14.1	(51.4)	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 16
270	60H	ＳＤ301	60.3	31.4	14.5	51.7	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 55
271	60H	ＳＤ301	40.2	16.1	4.4	11.7	土師質	A	切り	ユビ押圧	72- 40
272	60H	ＳＤ305	70.3	34.6	15.0	62.4	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 17
273	60H	ＶＤ2c SE303下面	63.5	30.8	11.8	59.5	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 56
274	60H	ＶＥ1f　ＳＥ301	(45.3)	33.1	13.1	(28.5)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-117
275	60H	ＶＥ3b　ＳＫ13	60.5	30.4	13.0	46.4	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 57
276	60H	ＶＥ3b　ＳＫ13	(66.2)	37.4	16.1	(75.3)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-118
277	60H	ＶＥ3b　ＳＫ13	50.2	(34.3)	16.6	48.3	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 50
278	60H	ＳＫ301	67.9	37.5	19.9	86.1	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 31
279	60H	ＳＫ301	(38.6)			(11.4)	土師質	A	切り	ユビ押圧	
280	60H	ＳＫ301	(59.5)	37.9	13.2	(37.2)	土師質	A		ユビ押圧	
281	60H	ＶＤ2c SE303下面	67.6	35.7	15.2	(67.3)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-119
282	60H	ＳＫ305	62.8	35.0	17.5	72.7	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-120
283	60H	ＶＥ4e　ＳＫ306	54.4	35.7	14.1	75.9	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 51

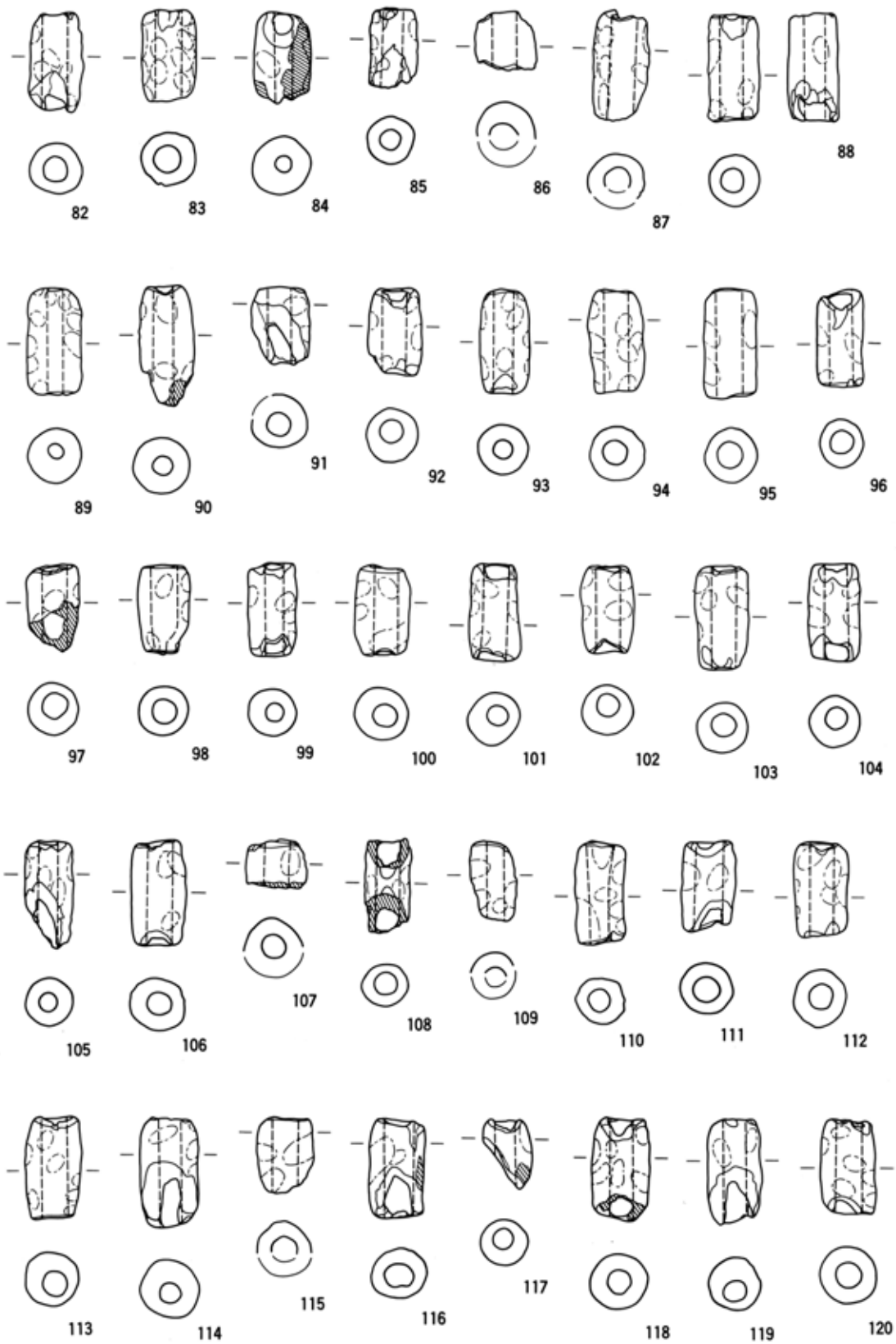
番号	調査区	遺　　構	長さ	径	孔径	重量	焼成	形態	端面	調　整	図版番号
284	60H	ＶＥ4e　ＳＫ320	69.4	35.5	14.4	83.2	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-137
285	60H	ＶＥ4e　ＳＫ320	76.8	42.1	14.7	149.4	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-144
286	60H	ＶＤ3d　Ｐ387	43.5	14.5	3.5	7.7	土師質	C	無	ユビ押圧	75-216
287	60H	ＶＥ4d　Ｐ400	(48.4)	32.1	15.2	(41.5)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-121
288	60H	ＶＥ4d　Ｐ448	67.4	35.0	14.8	74.3	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-122
289	60H	検出	(68.6)	38.0	16.4	(70.1)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
290	60H	検出	72.8	34.0	16.3	66.6	土師質	A	無	ユビ押圧	
291	60H	検出	58.0	33.6	14.4	(60.6)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
292	60H	ⅣＥ3e　検出	61.4	34.9	16.3	51.9	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
293	60H	ＶＥ1a　検出	39.3	16.0	4.7	9.4	土師質	A		ユビ押圧	72- 44
294	60H	ＶＥ4c　検出	35.3	16.6	5.6	7.5	土師質	A	無	ユビ押圧	72- 45
295	60H	2e　検出	(75.2)	(37.9)	(13.4)	(50.9)	土師質	A		ユビ押圧	
296	60H	2e　検出	41.4	16.3	5.6	13.9	須恵質	C	切り	ユビ押圧	
297	60H	ＶＥ4c　検出	(54.5)	37.8	14.0	(65.2)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
298	60H	3t　検出	(51.2)			(22.0)	土師質	A		ユビ押圧	
299	60H	3e　検出	(34.1)	(37.2)	(13.8)	(18.6)	土師質	A		ユビ押圧	
300	60H	3e　検出	41.4	13.9	3.7	7.4	土師質	C	無	ユビ押圧	75-217
301	60H	4t　検出	52.6	36.4	15.3	62.8	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
302	60H	検出	66.7	33.2	12.8	(40.9)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
303	60H	検出	73.8	40.0	15.5	117.6	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 32
304	60H	表土	43.8	17.4	4.3	12.1	土師質	C	切り	ユビ押圧	
305	60H	表土	(40.5)	19.1	5.7	(13.4)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-200
306	60H	表土	52.1	10.2	2.2	5.0	須恵質	C	切り	ユビ押圧	75-222
307	60H	表土	66.6	32.6	14.7	62.4	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-123
308	60H	表土	(45.9)			(18.3)	土師質	B		ユビ押圧	
309	60H	表土	66.7	35.8	15.1	73.7	土師質	C	ナデ	ユビ押圧	74-124
310	60H	表土	57.4	27.7	10.1	42.5	土師質	C	無	ユビ押圧	
311	60H	表土	(37.9)			(9.9)	土師質	B		ユビ押圧	
312	60E	ＳＸ01　Ｃ群	63.6	34.1	14.8	57.0	土師質	A	無	ユビ押圧	74-155
313	60E	ＳＸ01　Ｃ群	64.5	33.7	13.4	66.7	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-104
314	60A1	ⅢＥ18k　ＳＤ03	56.5	29.3	8.4	48.9	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 52
315	60A2	ⅣＥ3j　ＳＤ04	(36.5)	19.8	8.3	(13.1)	土師質	C		ユビ押圧	75-192
316	60B2	ⅣＥ4m　ＳＥ01	56.8	22.3	4.4	27.9	須恵質	C	切り	ユビ押圧	75-182
317	60B2	ⅣＥ4m　ＳＥ01	(48.7)	(23.2)	5.6	(16.3)	土師質	B	切り	ユビ押圧	
318	60F	ＳＥ03	46.3	17.9	4.9	16.4	土師質	C		ユビ押圧	75-197



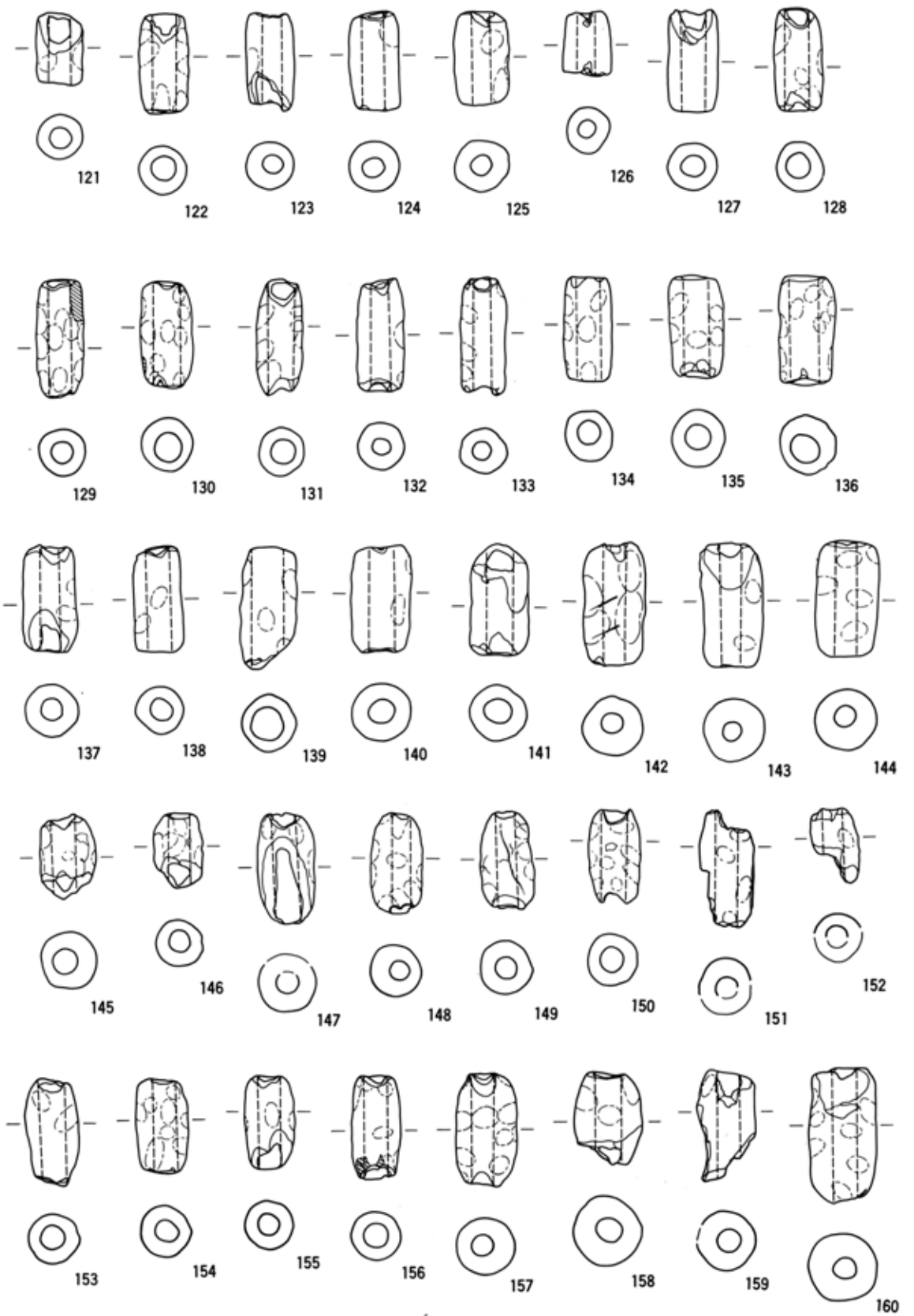
第71図　大渕遺跡出土土錘(1)　　（1／4）



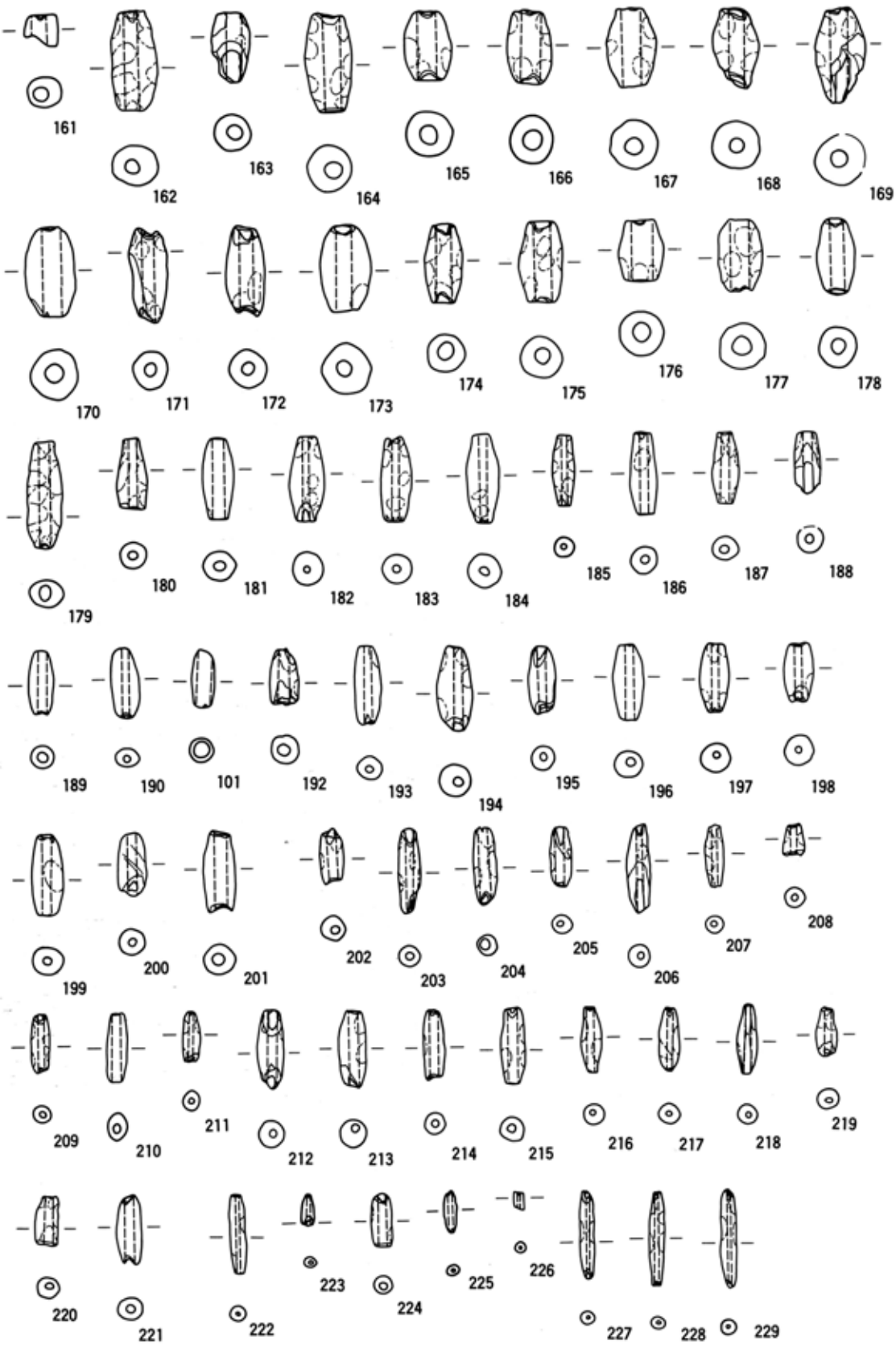
第72図　大渕遺跡出土土錘(2)　　（1／4）



第73図　大渕遺跡出土土錘(3)　　（1／4）



第74図　大渕遺跡出土土錘(4)　　（1／4）



第75図　大渕遺跡出土土錘(5)　　（1／4）

Ⅵ. 考察2

Ⅵ. 考察 2

1．大渕遺跡出土須恵器の蛍光X線分析　三辻　利一

2．大渕遺跡から検出された珪藻遺骸について　森　勇一・前田　弘子

1．大渕遺跡出土須恵器の蛍光Ｘ線分析

奈良教育大学　三辻　利一

1．はじめに

名古屋市内には古墳時代の初めから平安時代に至るまで古代全時代を通して須恵器を生産した猿投窯跡群がある。したがって、名古屋市周辺のほとんどの遺跡には猿投窯跡群産の須恵器が供給されていた可能性は強い。この点で、大阪陶邑窯群とその周辺の遺跡との関係に類似している。しかし、大阪陶邑窯群周辺では最近、小阪遺跡や大庭寺遺跡の須恵器に比べて、若干、胎土が異なる須恵器が伏尾遺跡で検出された。勿論、両者ともＲｂ－Ｓｒ分布図上で大阪陶邑領域に分布するのであるが、その分布位置が少し偏在しており、このことから胎土が異なることが見つけられた。これらが、それぞれ、どの窯の製品に対応するのか、目下、検索中である。同様にして、猿投窯群周辺の遺跡出土須恵器の胎土にも、若干、質の異なる須恵器が見つかるかもしれない。このような観点から、大渕遺跡出土須恵器の蛍光Ｘ線分析が行われた。

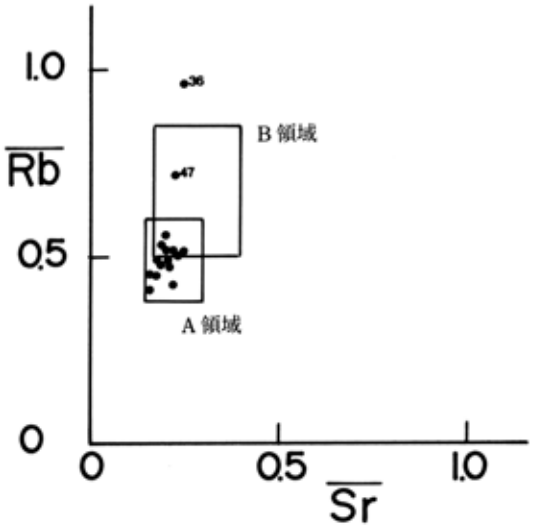
2．分析方法

須恵器片はすべて表面を研磨して付着物を除去し、所謂、胎土を取り出してタングステンカーバイト製乳鉢（硬度9.5）の中で、200メッシュ程度に粉砕された。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして約15トンの圧力を加えてプレスし、直径２㎝、厚さ３～５㎜の錠剤試料を作成した。このような処理方法をとるのは粉末試料をできるだけ均質化することと、蛍光Ｘ線分析の測定は相対測定であるので、測定試料のＸ線源、検出器に対する幾何学的条件を一定にするためである。定量分析の標準試料には岩石標準試料ＪＴ－１（群馬県産の花崗岩類）を使用した。そのため、分析値はＪＧ－１による標準比値で表示した。この方法をとると、この研究では多くのメリットがある。蛍光Ｘ線強度の測定には２次ターゲット方式のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置を使用した。Ｔｉを２次ターゲットにして真空中でＫ、Caを、また、Moを２次ターゲットにして空気中でFe、Rb、Srを測定した。

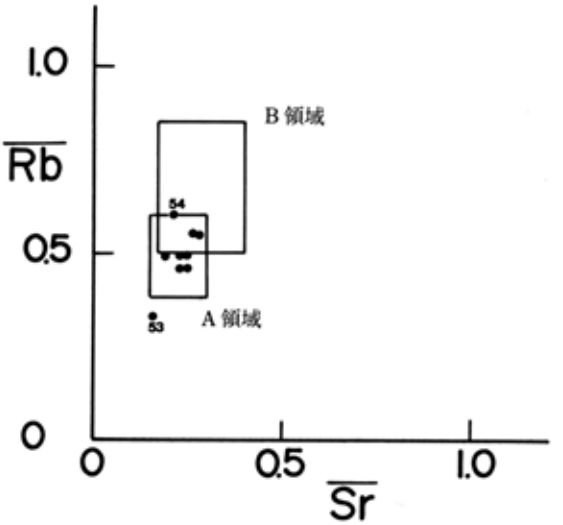
3．分析結果

全資料の分析値は表にまとめてある。この表から、例外なく、全試料にはCa、Sr量が少ないことがわかる。これは猿投窯群の須恵器の化学特性の一つである。したがって、これら２因子は試料の分類にはほとんど役に立たないことがわかる。しかし、K、Rb、Fe因子にはある程度のばらつきが表から認められる。そこで、須恵器の地域差をよく表示することで知られるRb－Sr分布図上で今回分析した試料の分類ができるかどうかを調べてみるとことにした。各年代ごとに分けてRb－Sr分布図を作成した。

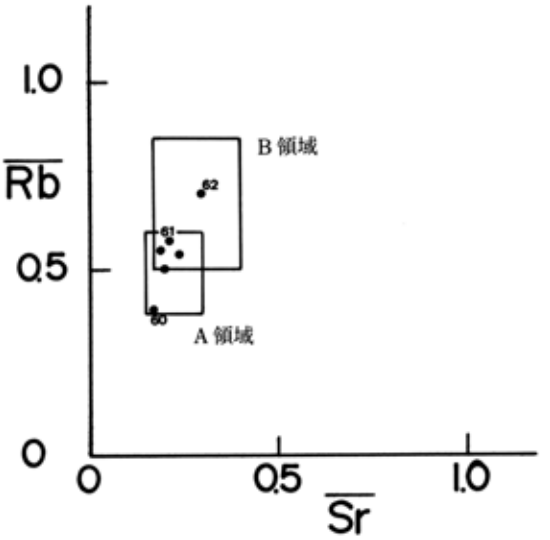
第76図には６Ｃ後～７Ｃ前と推定される須恵器のRb－Sr分布図を示す。全時代を通してRb－Sr



第76図　6C後～7C前の須恵器のRb－Sr分布図



第77図　7C前の須恵器のRb－Sr分布図



第78図　7C後の須恵器のRb－Sr分布図

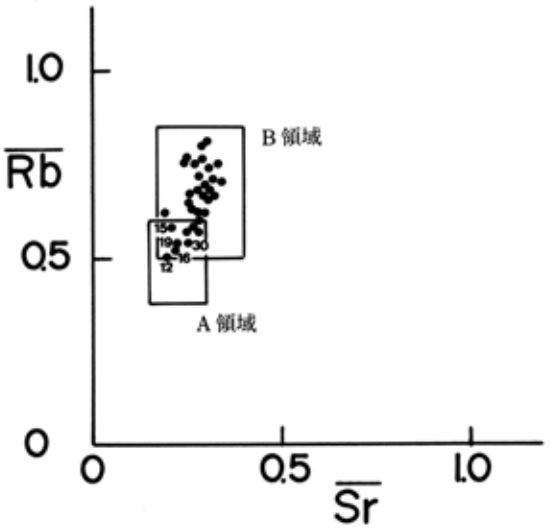
分布図を眺めてと、Rb量によってほぼ、2郡に分類できそうなので、Rb量の少ないグループをA群、逆に、多いグループをB群としてみた。そして、A群とみられる須恵器をすべて包含するようにしてA群領域を、また、同様にして、B群領域を設定した。勿論、これらの領域は定性的な意味しかもたないが、定性的にでも分類できるかどうかを直截的にみる上に役に立つ。そこで、第76図をみると、大部分のものはA群領域に分布することがわかる。№36、47の2点のみはK、Rb量が多く、他の須恵器とは胎土が異なる。第77図には7C前と推定される須恵器のRb－Sr分布図を示す。ほとんどすべてがA群領域に分布し、第76図と比較すると、これらは6C後～7C前の多くの須恵器と同じ胎土をもつことがわかる。第78図には7C後と推定される須恵器のRb－Sr分布図を示す。№62を除いて他はすべてA群である。このように、6C後から7C後に至るまでの須恵器はほとんどが同じ胎土をもっており、同じ窯の製品であることを示唆している。

これに対し、8C後～9C初と推定される須恵器のRb－Sr分布図を第79図に示す。7C代までのものとは違い、すべてがRb量が比較的多く、B群領域に分布することがわかる。ただ、№12、15、16、19、30などはA、B両群が重なる重複領域に分布し、どちらに帰属するか判断し難い。ただ、全体として眺めると、よくまとまってB群領域に分布することがわかる。第80図には10C代の須恵器のRb－Sr分布図を示す。10C代のものもすべて、まとまってB群領域に分布する。第81図には11C代の須恵器のRb－Sr分布図を示す。11C代のものもすべてB群領域に分布する。なお、K、Ca、Rb、Sr因子を使ってク

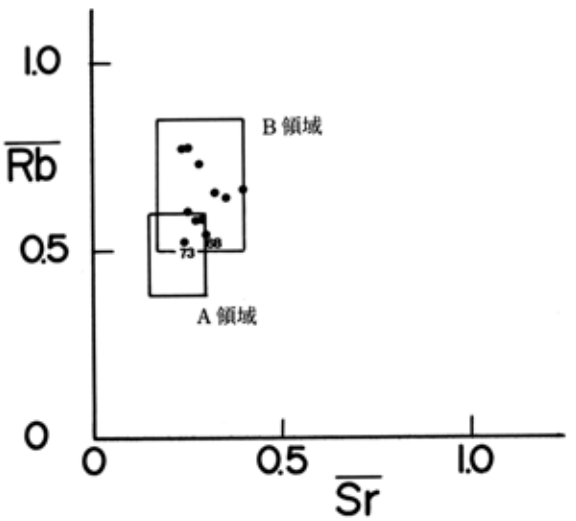
ラスター分析を行ったが、最短距離法を使っても、最長距離法を使っても、Rb－Sr分布図上での分類ほどきれいには分かれなかった。そのため、デンドログラムは省略した。Rb－Sr分布図上での分類がうまくできたのは、年代ごとに区切って分布図を作成したことによると思われる。

以上の結果から、大渕遺跡の古い須恵器のほとんどがA群領域に分布し、9C以後の新しい時期の須恵器はB群領域に分布し、須恵器の供給源（窯）が時代によって変わったことが判明した。これらを一括してK－Rb相関図上にプロットしたのが第82図である。K因子とRb因子の間には正の相関性があることがわかる。そして、一部は重複領域に分布するものの、6C後～7C後の須恵器は左下半分のK、Rb量がより少ない領域に分析し、また、9C以後の新しい須恵器は右上半分のK、Rb量がより多い領域に分布することがわかる。A、B群とも猿投窯群的性格をもっているので、その産地は猿投窯群内にあると筆者は考えている。このことは逆に、猿投窯群は2群に分割できる可能性があることを示す。

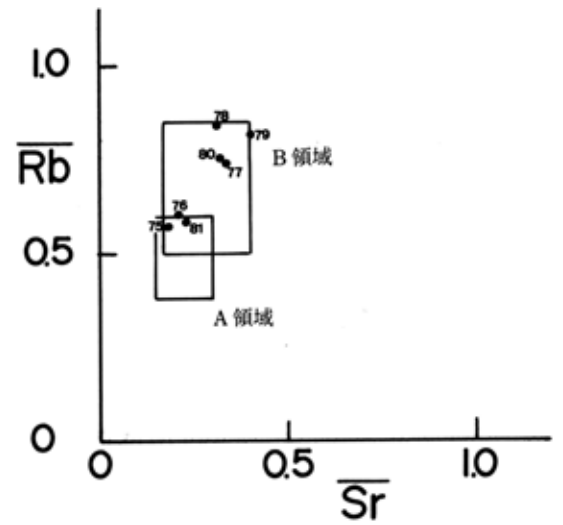
Fe因子にも年代的にみて変化がみられる。第83図にFe因子を比較してある。6C後～7C後の須恵器では、K、Rb因子同様、Fe因子でも差違は認められない。ところが、9C代から、10、11C代へと年代が下がるにつれて次第にFe量が少なくなっていることがわかる。このことは若しかしたら、灰釉陶器が出現することと関係があるのかもしれない。胎土にFe量が少なく、白い素地になると美しく施釉できる。灰釉陶器にはことごくFe量が少ないことがこれまでの分析データからわかっている。したがって、猿投



第79図　8C後～9C初の須恵器のRb－Sr分布図



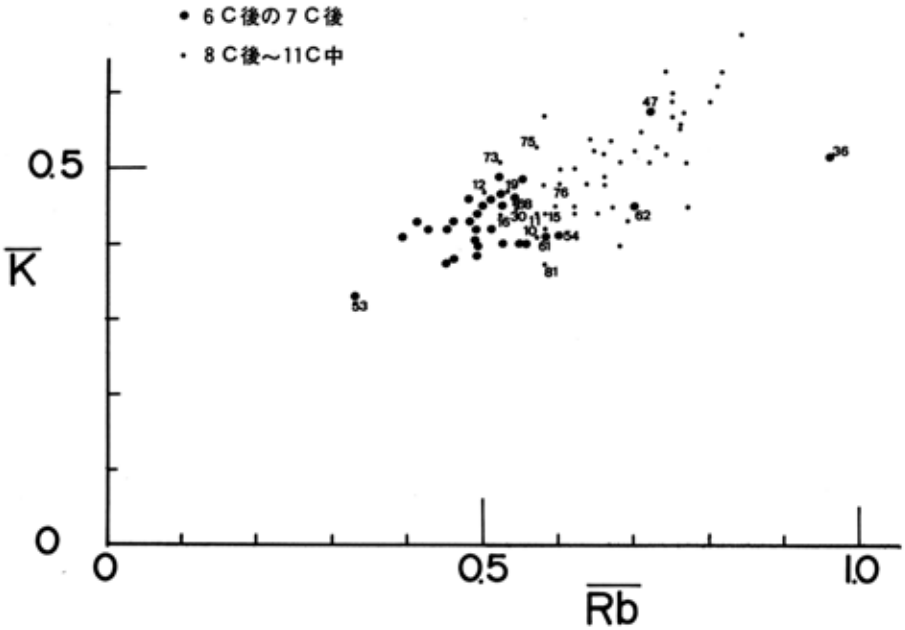
第80図　10C前の須恵器のRb－Sr分布図



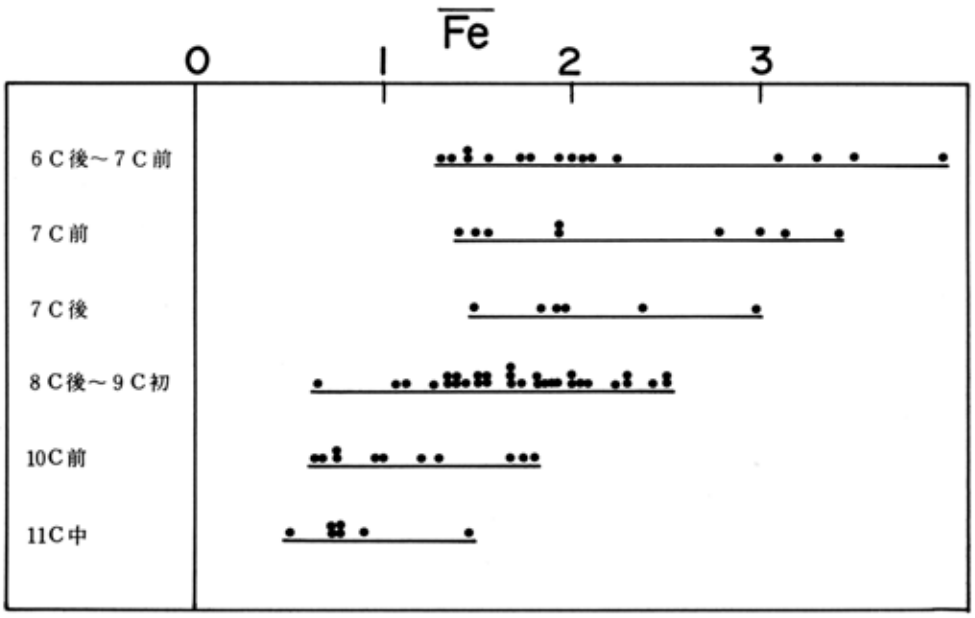
第81図　11C中の須恵器のRb－Sr分布図

群内でも年代が下がるにつれて、Fe量の少ない白い粘土を選択的に求めていったことを第83図は示しているのかもしれない。このことはいずれ、猿投窯群内の須恵器の分析データを年代ごとに分けて整理していけば明らかになることと思う。

以上の結果、大阪陶邑群の場合と同様、周辺の遺跡出土須恵器の分析データの比較から、猿投群の中でも、胎土からみて須恵器を分類できる可能性が出て来た。



第82図　大渕遺跡出土須恵器のK－Rb相関図



第83図　Fe因子の比較

時代	No.	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	時代	No.	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr
8C後～9C初	1	杯	0.402	0.135	0.654	0.684	0.311		42	杯	0.405	0.047	1.47	0.487	0.214
	2	〃	0.503	0.110	1.92	0.623	0.303		43	甕	0.432	0.060	1.73	0.481	0.211
	3	〃	0.553	0.097	1.69	0.708	0.317		44	〃	0.423	0.056	3.11	0.454	0.171
	4	〃	0.574	0.050	1.39	0.765	0.247		45	〃	0.492	0.069	2.24	0.520	0.217
	5	〃	0.588	0.080	1.82	0.802	0.290		46	〃	0.460	0.092	1.78	0.571	0.230
	6	〃	0.519	0.088	1.90	0.737	0.311		47	〃	0.575	0.120	3.97	0.719	0.227
	7	〃	0.561	0.039	1.36	0.764	0.247		48	〃	0.457	0.060	1.40	0.487	0.226
	8	〃	0.525	0.090	2.23	0.645	0.256	7C前	49	蓋	0.422	0.060	1.40	0.487	0.226
	9	〃	0.537	0.067	1.85	0.669	0.262		50	〃	0.443	0.066	1.49	0.487	0.240
	10	〃	0.408	0.072	1.81	0.571	0.248		51	杯	0.399	0.123	2.78	0.551	0.275
	11	〃	0.436	0.115	2.51	0.571	0.276		52	〃	0.404	0.052	1.93	0.493	0.194
	12	〃	0.466	0.069	1.70	0.501	0.202		53	〃	0.332	0.052	3.42	0.331	0.164
	13	〃	0.477	0.071	1.69	0.635	0.264		54	甕	0.412	0.055	1.55	0.497	0.212
	14	〃	0.436	0.032	2.09	0.616	0.192		55	〃	0.384	0.106	1.95	0.460	0.253
	15	〃	0.441	0.068	2.29	0.581	0.214		56	壺	0.428	0.094	3.14	0.460	0.232
	16	甕	0.436	0.051	1.55	0.519	0.222		57	甕	0.485	0.115	2.98	0.554	0.277
	17	〃	0.593	0.079	1.39	0.750	0.269	7C後	58	杯	0.398	0.041	1.96	0.551	0.185
	18	〃	0.507	0.107	1.57	0.681	0.277		59	〃	0.463	0.084	2.38	0.539	0.236
	19	〃	0.469	0.072	2.02	0.530	0.221		60	〃	0.412	0.068	2.98	0.387	0.170
	20	〃	0.611	0.076	1.37	0.807	0.296		61	壺	0.410	0.076	1.93	0.582	0.213
	21	〃	0.556	0.081	1.51	0.763	0.287		62	〃	0.449	0.124	1.48	0.698	0.301
	22	〃	0.491	0.104	1.12	0.665	0.323		63	甕	0.447	0.045	1.84	0.497	0.201
	23	〃	0.450	0.082	1.07	0.670	0.290	10C前	64	〃	0.534	0.081	0.643	0.733	0.279
	24	〃	0.451	0.097	2.43	0.623	0.276		65	〃	0.454	0.062	0.678	0.773	0.236
	25	〃	0.424	0.092	2.29	0.578	0.266		66	〃	0.510	0.062	0.758	0.773	0.248
	26	蓋	0.481	0.098	1.43	0.660	0.310		67	〃	0.501	0.097	1.75	0.597	0.252
	27	〃	0.445	0.088	1.51	0.597	0.276		68	壺	0.455	0.188	1.21	0.542	0.303
	28	〃	0.513	0.066	1.27	0.717	0.278		69	甕	0.524	0.162	1.01	0.659	0.396
	29	〃	0.427	0.121	2.06	0.687	0.302		70	〃	0.477	0.122	1.30	0.578	0.271
	30	〃	0.448	0.094	2.48	0.535	0.252		71	杯	0.442	0.153	0.775	0.647	0.322
	31	〃	0.603	0.118	1.99	0.754	0.336		72	〃	0.539	0.142	1.68	0.639	0.354
	32	〃	0.526	0.165	1.73	0.703	0.339		73	〃	0.512	0.102	1.79	0.523	0.242
6C後～7C前	33	〃	0.450	0.045	2.07	0.526	0.185		74	甕	0.565	0.078	0.991	0.582	0.275
	34	〃	0.465	0.048	2.10	0.523	0.199	11C	75	杯	0.530	0.089	0.510	0.569	0.182
	35	〃	0.398	0.053	1.98	0.555	0.202		76	〃	0.483	0.074	0.770	0.603	0.214
	36	〃	0.513	0.053	1.56	0.959	0.250		77	〃	0.628	0.184	0.747	0.738	0.335
	37	杯	0.424	0.060	1.45	0.509	0.248		78	〃	0.678	0.068	0.768	0.838	0.308
	38	〃	0.421	0.104	3.31	0.425	0.225		79	〃	0.635	0.257	0.896	0.815	0.402
	39	〃	0.385	0.045	1.30	0.490	0.183		80	〃	0.574	0.159	0.773	0.750	0.321
	40	〃	0.428	0.041	1.36	0.411	0.164		81	甕	0.375	0.057	1.46	0.577	0.231
	41	〃	0.374	0.041	1.93	0.451	0.175								

第8表　大渕遺跡出土須恵器蛍光X線分析データ

2．大渕遺跡から検出された珪藻遺骸について

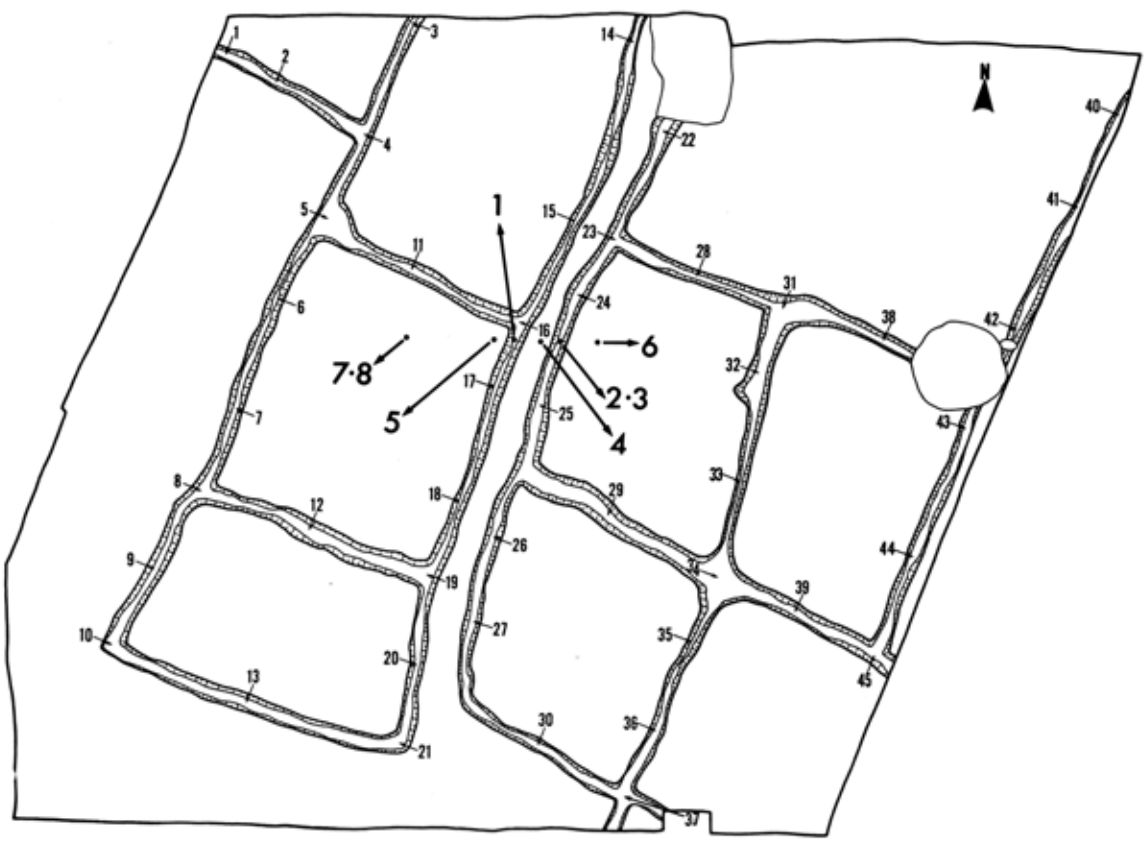
1．はじめに

1984・1985年度に実施された愛知県海部郡甚目寺町大渕遺跡の発掘調査に際して、一辺5～6mの方形区画（弥生時代中期～古墳時代中期）の溝、および方形区画の基盤層中より採取された試料の珪藻分析を実施し、遺構の性格や遺跡基盤層の堆積過程などについて知見を得ることができたので、その概要をここに報告する。

2．試料の採取と処理

大渕遺跡は、濃尾平野の中央部からやや東よりの氾濫平野南端部に位置する標高0～1mの低湿性遺跡ということができる。出土した遺物や遺構などによって、弥生時代中期、および古墳時代～室町時代にわたる複合遺跡であることが明らかになった。

分析を行ったのは、60F区の方形区画をめぐる溝中より3試料（試料1～3）、60F区方形区画下位の地層中より4試料（試料4～7）および古代の包含層中より1試料（試料8）の計8試料である。採取した試料の標高は、試料1～3については－0.13～－0.34m、試料4～7については－0.10～－0.14m、試料8は＋0.30mである。試料の採取位置図は第84図に示した。



第84図　試料採取位置図

試料の分析にあたって、乾燥重量1gをトールビーカー（300mℓ）にとり、過酸化水素水（35%）を加えて約5分間煮沸し、有機物の分解と漂白を行った。つぎに岩片を除去し、水洗を4～5回くり返しながら同時に比重選別を行った。このようにして得られた試料をピペットでとり、カバーグラス上に広げて乾燥させた。次に封入剤（和光純薬製マウントメディア）をスライドグラスに滴下したのち、試料を塗布したカバーグラスをかぶせ、加熱後、永久プレパラートとした。プレパラートはそれぞれの試料について5枚ずつ作成した。

検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用し、各試料とも200個の珪藻殻を同定するよう努めたが、試料中に含まれる珪藻殻が少ない場合には、200個に達しなくても検鏡を打ち切った。

珪藻の分類と生態的特性などは、Hustedt（1930, 1927－1966), Krammer and Lange－Bertalot（1986・1988), Hendey（1964), Patrick and Reimer（1966, 1975）などによった。

3．分析結果

試料中より出現した珪藻遺骸24属81種（2変種を含む）計800個体のリストを**第9表**に示した。出現した珪藻は、いずれの試料においても淡水生種のみで海～汽水生種はまったく認められなかった。pHについては好アルカリ～不定性種、水流性についてはそのほとんどが不定性種で占められた。また、珪藻の生態性については付着生種（61%）で大半が占められ、底生種（38%）がそれについだ。浮遊生の種群の出現率は1%にも満たなかった。

試料中に含有される珪藻殻数は全体に少なく、見いだされた珪藻殻も破損したものが多かった。種組成では、全体を通して好アルカリ・水流不定性で付着生種の*Synedra ulna*（15%)、同じく好アルカリ・水流不定性で付着生種の*Cocconeis placentula* var. *euglypta*（9.8%、基本種を含む)、*Gomphonema clevei*（6.5%）や、好アルカリ・水流不定性で好気性珪藻として知られる*Hantzschia amphioxys*（7.6%)、pH不定・真止水性で好気性種の*Pinnularia subcapitata*（6%）などが目だった。

属組成では、全体に底生の*Pinnularia*属（18.1%)、付着生の*Synedra*属（16.4%）・*Cymbella*属（8.9%）・*Gomphonema*属（13.5%）などが多く出現した。

試料別にみると、試料1～3では*Pinnularia*属や*Navicula*属・*Neidium*属などの底生の種群（51%）が、試料4～7では*Synedra ulna*をはじめとした*Synedra*属、*Cymbella*属・*Gomphonema*属などの付着生の種群（71%）が多く出現している。試料8は珪藻遺骸の出現率がもっとも低く、とくに目だつ種も認められなかった。

4．考　　察

珪藻の分析結果に加えて試料の土色・粒径などの諸性質から、大渕遺跡における弥生時代中期～古墳時代中期の頃（考古遺物による）の方形区画の成因やその埋積過程等について検討を加える。

方形区画をめぐる溝中の試料（試料1～3）と、方形区画基盤層（試料4～7）および古代の包含

層中の試料（試料８）をくらべてみると、１～８のすべての試料とも「暗～淡灰褐色砂質シルト層」というべきものにあたり、土質のうえでは両者にはとくに明瞭な差異は認められなかった。これら砂質シルトは、甚目寺町周辺の沖積低地一帯では、後背湿地や小河川の河道内部・沼沢地などにしばしば見られ、現在では水田土壌としても盛んに利用されているものにあたっている。

珪藻の分析結果では、溝中の試料では底生種の出現率（51％）が付着生種（49％）をいくぶん上回ったのに対して、基盤層中の試料では底生種の出現率はわずか29％に過ぎずその大部分が付着生種（71％）で占められた。また、溝中の試料では水の干上がった地表面などをはじめ、水流の影響を直接受けないところでも生活することができる「陸生珪藻」が21％も出現している。その結果、試料１～３が真に溝に堆積した地層中から採取されたものであるとすれば、この溝の堆積環境としては次のようなものである可能性が考えられる。

(1) 底生の種群が付着生の種群より多いことから、溝の水深は浅くて、流速も小さい。そして、溝の周囲や溝側面には挺水植物や沈水植物などの水生植物がほとんど繁殖していなかったことが考えられる。

(2) 溝中から見いだされた珪藻遺骸のなかに、富栄養水域や水質汚濁に耐性があるとされる種群の出現率が比較的少ないことから、方形区画における土地利用は短期間かつ小規模なものであったと考えられるが、それがどのような利用形態であったのか推定することは現状では難しい。

(3) 陸生珪藻の出現率が比較的高いこと、および珪藻の含有殻数がきわめて少ないことから、その溝には水は年間を通じて短い期間しか存在しなかったか、さもなくばこの溝の機能した期間が短かったことが推定される。

(4) 珪藻殻片に完形殻が少なく破壊殻片が多数を占めることから、これら溝中の堆積物そのものも方形区画の基盤層と同様、他所から移動して運び込まれた二次化石であるか、あるいはそれらが混入している可能性が考えられるが、このことは土層の堆積状況等を詳細に観察し総合的に判断する必要があり、分析試料のみから判断することは困難である。

なお、方形区画基盤層の試料４～７では、珪藻の含有殻数が乏しく破壊殻片が全体の57％にも達すること、一般に流水の影響下に生息する付着生種群の出現率が73％もみられたこと、また陸生珪藻がわずかに13％しか認められなかったことなどから、試料中の珪藻殻は明らかに異地性の珪藻遺骸と考えられ、遺跡の基盤層を構成する砂質シルト層は、弥生時代中期を溯る河川性の水流によって運ばれた堆積物であろうと推定される。

古代の包含層である試料８では、珪藻の含有殻数が著しく少ないうえに、付着生の*Cymbella*属の種群がまったく認められないことから、流水の影響の乏しい環境下で堆積した地層であると考えてよい。

しかし、これらの推定はいずれも珪藻分析等を利用した乏しい情報をもとに考察したものであり、今後、大渕遺跡周辺の遺跡基盤層や遺構埋土などを詳細に観察し分析することによって、正しい古環境復元に努めていきたい。

（森　勇一・前田弘子）

第9表　大渕遺跡から産出した珪藻遺骸のリスト

（　）内は破壊された珪藻殻片数

Species	pH	Curr.	Ecol.	1	2	3	4	5	6	7	8	TOTAL
Achnanthes brevipes Agardh.	Alph	?	Epip		1 (1)	2 (2)		2 (2)	1 (1)		1 (1)	7 (7)
Achnanthes lanceolate Brebisson	Alph	Ind	Epip			1				1		2
Achnanthes linearis W. Smith	Ind	Ind	Epip		1				1 (1)			2 (1)
Amphora ovalis var. *libyca* (Ehr.) Cleve	Alph	Ind	Bent	1	3 (1)	3	1	2	2			12 (3)
Caloneis bacillum (Grun.) Cleve	Alph	Ind	Bent	3	3 (1)	1	1	1	3 (2)			12 (3)
Caloneis silicula (Ehr.) Cleve	Acph	Ind	Bent	1								1
Cocconeis diminuta Pantocsek	Albi	Ind	Epip		1 (1)							1 (1)
Cocconeis placentula (Ehrenberg)	Alph	Ind	Epip			1 (1)	2	1 (1)		5 (3)		9 (5)
Cocconeis placentula var. *englypta* (Ehr.) Cleve	Alph	Ind	Epip	2 (2)	3	10 (9)	15 (8)	8 (3)	9 (7)	17 (11)	5 (5)	69 (45)
Cyclotella stelligera Cl. u. Grunow	?	Libi	Plan				1 (1)					1 (1)
Cymbella cuspidata Kützing	Alph	Ind	Epip			2 (1)	1					3 (1)
Cymbella helvetica Kützing	Ind	Ind	Epip					3 (3)				3 (3)
Cymbella leptoceros (Ehr.) Grunow	Ind	Liph	Epip				1 (1)		3 (2)	2 (1)		6 (4)
Cymbella minuta Ravenhorst	Ind	R−ph	Epip	4	7 (4)	3 (2)	1	4 (1)	2	2		23 (7)
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ind	Ind	Epip	2			1	1				4
Cymbella perpusilla Cleve	Ind	R−ph	Epip							1 (1)		1 (1)
Cymbella sinuata Gregory	Ind	Libi	Epip				1		1			2
Cymbella subaequalis Grunow					1							1
Cymbella tumida (Breb.) V. Heurck	Acph	Ind	Epip	1 (1)	2 (2)		1	1	1 (1)	2		8 (4)
Cymbella turgidula Grunow	Ind	Ind	Epip		1 (1)		6 (5)	3 (3)	2	7 (6)		19 (15)
Diatoma vulgare Bory	Alph	Ind	Epip				1			1		2
Diploneis ovalis (Hilse)Cleve	Ind	Ind	Bent	2	1 (1)							3 (1)
Epithemia zebra (Ehr.) Kützing	Alph	Ind	Epip	4 (3)	6 (5)	5 (5)	5 (3)	7 (4)	10 (10)	7 (5)	3 (2)	47 (37)
Eunotia flexuosa Kützing	Acph	Ind	Epip	1 (1)	2 (1)		1	1 (1)		1 (1)		6 (4)
Eunotia pectinalis (Kütz.) Rabenhorst	Acph	Ind	Epip	3 (1)	5 (2)		1	1	4 (3)	4 (3)	2 (1)	20 (10)
Eunotia praerupta Ehrenberg	Acph	Ind	Epip					2 (2)	1			3 (2)
Fragilaria brevistriata Grunow	Alph	Ind	Epip	1								1
Frustulia vulgaris Thwaites	Ind	Ind	Epip							1		1
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ind	Liph	Epip	1	1	1					1	4
Gomphonema clevei Fricke	Alph	Liph	Epip	3 (1)	4 (2)	6 (2)	8 (4)	6 (5)	8 (3)	15 (6)	2	52 (23)
Gomphonema constrictum Ehrenberg	Alph	Ind	Epip	1								1
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ind	Liph	Epip	1	2	2 (1)	1		2 (1)	2 (1)		10 (3)
Gomphonema lanceolatum Ehrenberg	Alph	Ind	Epip		2 (2)		1	2				5 (2)
Gomphonema olivaceum (Lyng.) Kützing	Alph	Ind	Epip			4			3			7
Gomphonema parvulum (Kütz.) Kützing	Ind	R−ph	Epip	2	7 (5)	2 (1)	4 (1)	7 (2)	2 (1)	3 (2)	1	28 (12)
Gomphonema subtile Ehrenberg	Ind	Ind	Epip	1								1
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Alph	Ind	Bent	7 (5)	11 (7)	12 (9)	7 (6)	5 (3)	7 (5)	9 (6)	3 (2)	61 (43)
Navicula americana Ehrenberg	Ind	Ind	Bent	1 (1)							1	2 (1)
Navicula cuspidata (Kütz.) Kützing	Alph	Ind	Bent	1	2 (1)					1 (1)	1	5 (2)
Navicula elginensis (Greg.) Ralfs	Alph	R−bi	Bent	2 (1)	2	1	1	1	1		1	9 (1)
Navicula goeppertiana (Bleisch)H. L.Smith	Ind	Ind	Bent					1 (1)				1 (1)
Navicula mutica Kützing	Ind	Ind	Bent	1 (1)	4 (1)		1		1			7 (2)
Navicula oppugnata Hustedt	Alph	Ind	Bent							1 (1)		1 (1)
Navicula pupula Kützing	Ind	Ind	Bent		2		1		1 (1)			4 (1)
Navicula radiosa Kützing	Ind	Ind	Bent		2 (1)							2 (1)
Navicula viridula (Kütz.) Ehreberg	Alph	R−ph	Bent	1								1
Neidium affine (Ehr.) Cleve	Ind	Libi	Bent	1								1
Neidium ampliatum (Ehr.) Krammer	Ind	Ind	Bent		1		1					2
Neidium bisulcatum (Logerst.) Cleve	?	?	Bent	2 (1)				1	1			4 (1)
Neidium iridis (Ehr.) Cleve	Ind	Liph	Bent	3	4 (3)	2 (2)					3 (1)	12 (6)
Nitzchia ignorata Krasske	?	?	?	2					1			3
Nitzchia linearis W. Smith	Alph	R−bi	Bent		2 (1)							2 (1)
Nitzchia obtusa W. Smith	Alph	?	Bent		1							1
Nitzchia palea (Kütz.) W. Smith	Ind	Ind	Bent	1								1
Nitzchia romana Grunow	Alph	Ind	Bent	1					1			2
Pinnularia acrosphaeria Rabenhorst	Ind	Ind	Bent		1							1
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ind	Ind	Bent	1	3 (3)	1		1	1	1	2 (2)	10 (5)
Pinnularia brevicostata Cleve	Acph	Ind	Bent					1		1	1	3
Pinnularia divergens W. Smith	Acph	Ind	Bent						1			1
Pinnularia divergentissima (Grun.) Cleve	Acph	Ind	Bent						2 (1)			2 (1)
Pinnularia gibba Ehrenberg	Acph	Ind	Bent								1	1
Pinnularia hemiptera (Kütz.) Cleve	Acph	Libi	Bent	1	3 (1)	4 (1)		3 (3)	7 (5)		1	19 (10)
Pinnularia interrupta W. Smith	Ind	Ind	Bent	3 (1)	2 (2)	2 (1)	2	3 (2)	5 (3)	2		19 (9)
Pinnularia major Kützing	Acph	Ind	Bent	3 (3)								3 (3)
Pinnularia microstauron (Ehr.) Cleve	Acph	Ind	Bent	2 (1)	3 (2)		2 (1)		4 (3)	1		12 (7)
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ind	R−ph	Bent						1			1
Pinnularia stomatophora Grunow	Acph	Ind	Bent	2 (2)	3 (2)		1					6 (4)
Pinnularia subcapitata Gregory	Ind	Libi	Bent	7 (4)	15 (10)	6 (3)	3	2 (1)	10 (3)	4 (1)	1 (1)	48 (23)
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ind	Ind	Bent	1 (1)	9 (6)	3 (2)	1	2 (1)	1	2 (1)		19 (11)
Rhoicosphenia curvata (Kütz.) Grunow	Alph	Ind	Epip					1				1
Rhopalodia gibba (Ehr.) O.Müller	Alph	Ind	Epip			1				1		2
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O.Müller	Alph	Ind	Epip	2 (1)	1 (1)	2 (1)	1 (1)			2 (2)		8 (6)
Stauroneis acuta W. Smith	Ind	Ind	Bent	1								1
Stauroneis phoenicenteron Ehrenberg	Ind	Ind	Bent		4 (1)	2 (1)		1	1		2	10 (2)
Steppanodiscus astraea (Ehr.) Grunow	Albi	Liph	Plan		1							1
Surirella elegans Ehrenberg	Ind	Ind	Bent		1							1
Surirella linearis W. Smith	Alph	Ind	Bent					1				1
Surirella ovata Kützing	Alph	Ind	Bent					1				1
Synedra rumpens Kützing	Iid	Liph	Epip						1			1
Synedra ulna (Nitz.) Ehrenberg	Alph	Ind	Epip	12 (12)	13 (13)	14 (14)	12 (9)	15 (14)	16 (15)	32 (32)	7 (7)	121 (116)
Synedra vaucheriae Kützing	Alph	R−ph	Epip	1 (1)		2 (2)	3 (2)		1 (1)	1	1	9 (6)
TOTAL				93 (44)	143 (84)	95 (61)	90 (42)	91 (52)	119 (69)	129 (84)	40 (22)	800 (457)

生態値凡例

pH（pH spectra）

Albi : Alkalibiontic forms（真アルカリ性種）

Alph : Alkaliphilous forms（好アルカリ性種）

Ind : Indifferent forms（不定性種）

Acph : Acidophilous forms（好酸性種）

Acbi : Acidobiontic forms（真酸性種）

? : Unknown（不明種）

水流性（Current spectra）

Libi : Limnobiontic forms（真止水性種）

Liph : Limnophilous forms（好止水性種）

Ind : Indifferent forms（不定性種）

R−ph : Rheophilous forms（好流水性種）

R−bi : Rheobiontic forms（真流水性種）

? : Unknown（不明種）

生態性（Ecology）

Bent : Benthonic forms（底生種）

Epip : Epiphytic forms（付着生種）

Plan : Planktonic forms（浮遊生種）

? : Unknown（不明種）

文　献

Cholnoky, B.J.(1968), Die Okologie der Diatomeen Binnengewassern. Cramer, Germany. 699p.

Hendey, N.I.(1964), An introductory Account of the smaller algae of British coastal waters. Part V : *Bacillariophyceae* (*diatom*). Her Majetsy's Stationary Office, London, 317p.

Hustedt, F.(1930), Bacillariophyta. *Die Süsswasser Flora Mitteleuropas*, **10**, G.Fischer, Jena, 466p.

Hustedt, F.(1937－1938), Systimatische und Okologische Untersuchungen uber die Diatomeen Flora von Java, Bali und Sumatra, nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda－Expedition. *Arch. Hydrobiol, Suppl*, **15**, 131－177.

Hustedt, F.(1927－1966), Die Kieselalgen Deutschland, Osterreichs und der Schweiz unter Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. *Kryptogamen Flora von Deutschland*, Teil **1**～**3**, Leipzig, W. Deutschland, 920p, 845p, 816p.

Krammer, K. and Lange－Bertalot, H.(1986・1988), Bacillariophyceae. Teil **1**, Teil **2**, *Pascher A. Süsswasserflora* von *Mitteleuropa*, 876p, 596p.

森　勇一（1989),町田遺跡における珪藻遺骸群集.愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第９集,町田遺跡報告書,64－73.

森　勇一・伊藤隆彦（1989),古生物学的にみた朝日遺跡の古環境の変遷.愛知県埋蔵文化財センター年報（昭和63年度),76－91.

森　勇一（1990), 遺跡の立地および地理的環境.愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第11集,阿弥陀寺遺跡報告書, 4－5.

森　勇一・伊藤隆彦（1990ａ), 愛知県岡島遺跡における珪藻遺骸群集. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第14集, 岡島遺跡報告書, 43－47.

森　勇一・伊藤隆彦（1990ａ), 清洲城下町遺跡の中堀から検出された珪藻遺骸（付・昆虫遺体). 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集, 清洲城下町遺跡報告書, 103－108.

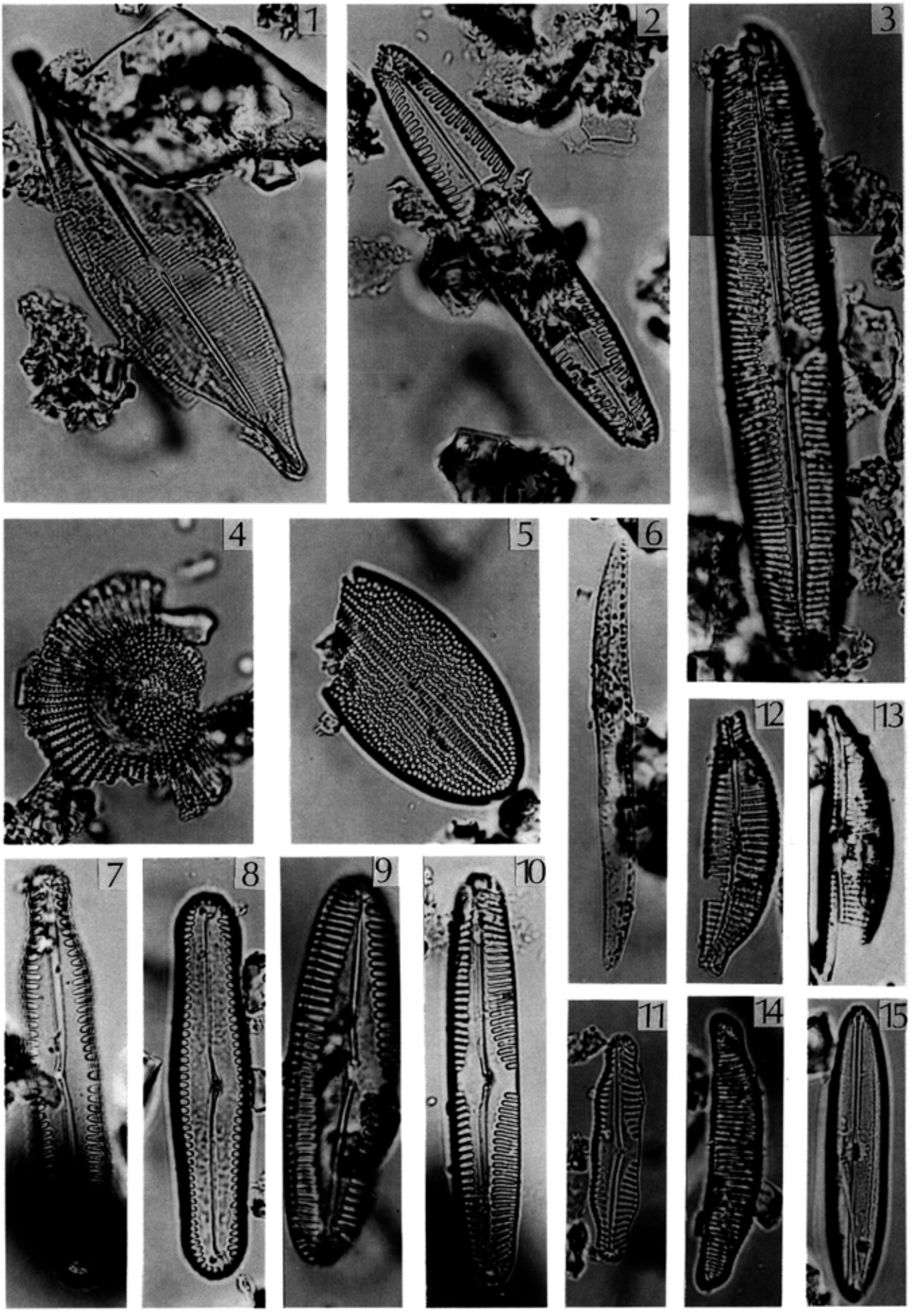
森　勇一・伊藤隆彦・永草康次・楯真美子（1990), 濃尾平野周辺地域における遺跡基盤層の粒度および鉱物組成. 愛知県埋蔵文化財センター年報（平成元年度). 65－84.

Patrick, R. and C. W. Reimer (1966・1975), The Diatoms of the United States. *Monogr. Acad. Nat. Sci. Philadelphia*, no. **13**, Philadelphia, 688p., 213p.

海津正倫（1988), 濃尾平野における縄文海進以降の海水準変動と地形変化. 名古屋大学文学部研究論集, 285－303.

大渕遺跡産の珪藻遺骸の顕微鏡写真

1. *Navicula cuspidata* (Kütz.) Kützing
2. *Pinnularia stomatophora* Grounow
3. *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg
4. *Stephanodiscus astraea* (Ehr.) Grunow
5. *Cocconeis placentula* var. *euglypta* (Ehr.) Gleve
6. *Nitzschia ignorata* Krasske
7. *Pinnularia interrupta* W. Smith
8. *Pinnularia acrosphaeria* Rabenhorst
9. *Pinnularia hemiptera* (Kütz.) Rabenhorst



第85図　大渕遺跡出土珪藻遺骸写真

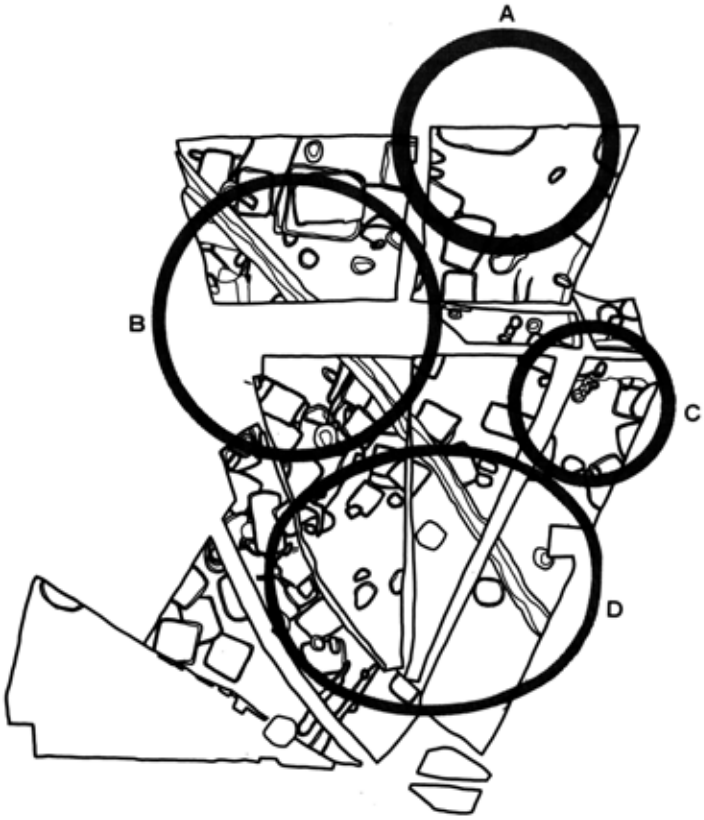
Ⅶ. まとめ

弥生時代

時　期　Ⅳ. 遺物のところでも触れていたが、大渕遺跡の弥生時代の主要な時期は凹線紋系土器の展開とほぼ重なっている。この凹線紋系の時期は、上・下層に分かれて遺物の出土したＳＥ01資料を基準として１・２期に分けることができ、さらに２期が新・古に分かれる。また、Ⅰ～Ⅴ系統の中で中心となるものは、Ⅰ系（朝日式・貝田町式系）とⅣ系（凹線紋系）であり、２期以降にⅢ系・Ⅴ系がはいるようになる。特にⅢ系の混入頻度は高く、ほとんどが搬入品と考えられることからみても、Ⅲ系分布圏である三河・知多との交流が活発であったことが窺われる。Ⅱ系については、出土数が極めて少ない。さらに、Ⅰ系の変化の仕方についても、貝田町式の影響を残したまま凹線紋系土器群を受け入れている阿弥陀寺遺跡とは異なり、大渕遺跡の土器群は凹線紋系の強い影響のもとに成立している。このことが、拠点集落と短期集落の差にあるのか、若干の時間のズレにあるのかは今後の問題となろう。

集　落　凹線紋系土器の時期には52軒の竪穴住居・３基の井戸・50基を上回る土坑が検出されており、遺構は遺跡北側の標高の高い部分に集中して作られている。竪穴住居は、単独で検出されたものもあるが、通常建て替えも含めて３回程度の切り合いが確認されており、特に60Ａ$_1$区と60Ｃ$_2$区付近に幾度も作られている。また第86図にあるようにまったく住居が建てられない部分が少なくとも３～４ケ所あり、その無住居地域の周囲を弧を描くような住居が占地する傾向がみられる。この無住居地域の中の、Ａエリアには穿孔土製円盤を出土した大型土坑ＳＫ10、Ｄエリアには円形に近い隅丸方形という当遺跡内では特殊な形態を示すＳＢ35や円窓付土器を出土したＳＥ03、さらにＳＫ53もＳＫ10と同様のものである可能性があり、特異な空間であった可能性が高い。

次に集落としての性格を考える場合、谷地形を挟んで北接する阿弥陀寺遺跡の存在が大きく関わってくる。阿弥陀寺遺跡は貝田町式期前半には環濠をもった集落として成立するが、高蔵式期には衰退し、山中式期に再び環濠が掘削されている。また、北東に位置する拠点集落である朝日遺跡では、高蔵式期には環濠が掘削されず、生活域が不明瞭になり、方形周溝墓の構築規範もこの時期に大きく変化することがわかっている。大渕遺跡はこれらの大規模な〈囲郭集落〉が衰退・混乱する時期である高蔵式期に成立し、若干は次期にまで続くものの、生活空欄としての役割はその一時期で終わってしまうようである。一方、阿弥陀寺遺跡の北西に位置する森南遺跡は阿弥陀寺遺跡とほぼ同期間にわたって遺跡が存続するが、環濠は有さず、調査面積の関係で確実なことは言えないが、高蔵式期における明瞭な衰退はみられないようである。遺跡のタイプとしては明らかにこの森南遺跡に類似しており、近隣



第86図　弥生時代遺構図

の〈囲郭集落〉が凸線紋系土器の波及という変化に遭遇し混乱した時期に、それらの拠点的な集落と密接な関係をもって成立し、その平常化とともに遺跡が営まれなくなるのであろう。尾張部の遺跡をみても、高蔵式期に始まる遺跡が多数あり、特に平野部においては短期間しか存続しない例が多くみられ、この時期に広い地域で大きな変革があったことが想定される。

方形区画　60F区・59B区にかけて検出された溝で仕切られた方形区画遺構は、溝内出土の遺物が小片でかつ少なく、時期を決定するにいたらなかったが、周囲より貝田町式期以前の遺物が出土しないことと溝が古墳時代後期の遺構に切られることから、弥生時代中期～古墳時代中期に属するものであると考えられる。性格についての考察は、自然科学的分析を十分に行わなかったこともあってさらに難しく、唯一実施したⅥ－２．の珪藻分析では、溝は浅くて水流が乏しく、短期間しか水流がないか利用されていない、二次堆積物が埋土となっている可能性があるという結果が述べられており、土層の観察からも水が流れていたとは思えなかった。このことは、これらの溝が灌漑や排水のために掘削されたものではないことを示している。区画の規模や低い位置に作られていることからみても、当然水田跡という推定がなされるであろうし、近年宮城県富沢遺跡の調査などで、このような溝で区切られた直線的な区画を水田跡の可能性があるものとされている。また、溝が畦畔をつくるためのものであるならば、珪藻分析で言われる二次堆積物があってしかるべきである。このようなことから、この方形区画は水田の床土や畦畔が総て削平された状態のものであると推定したい。

中期以降　弥生時代中期の居住域を横切るように、北西から南東にかけて走るＳＤ01は掘削時期についての確実な資料は得られなかった。ただ、切り合い関係にある全ての竪穴住居よりも新しくなること、中・上層の砂層より弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が出土していることからみて、弥生時代中期でも新しい時期か後期に掘削され、古墳時代前期にかけて埋没するものと思われる。また、後期以降の土器は古代～中世の遺物に混じって出土することが多く、その分布は60Ａ$_1$区・60Ｂ$_1$区に集中している。このことから、古墳時代後期以降の削平で消失してしまったが、調査区北側に該当期の遺構があったことが想定でき、ＳＤ01が何らかの役割を果たしているものと考えられる。

古墳時代後期以降

執筆の都合上、遺構・遺物とも古墳時代後期～平安時代中期、平安時代後期～室町時代という分けかたで記述してきたが、遺跡の連続性を考えると、両者を同時に述べるほうが混乱が少ないと考え、以後第９表時期区分に従い説明をしていきたい。また、主要遺構との対応関係も同表に示した。

時期区分　大渕遺跡の古墳時代後期以降を土器によって区分すると大きくⅠ～Ⅳ期に分けられる。

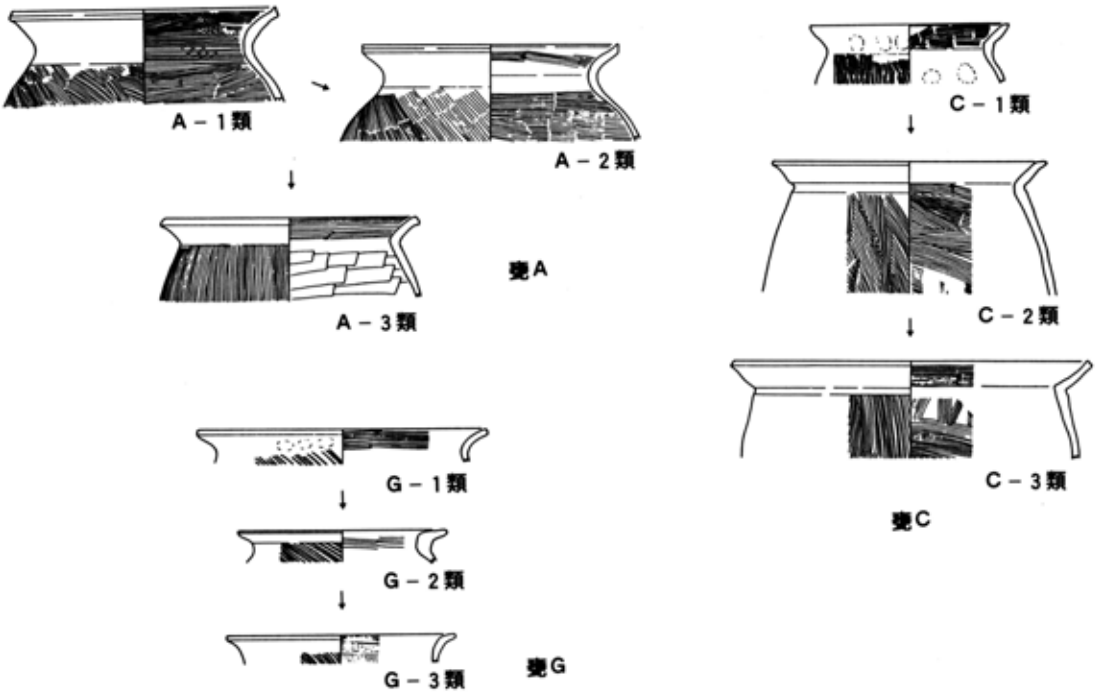
Ⅰ期　煮炊具である土師器甕Ａ１・Ａ２類が用いられている時期。煮炊具が全器種の40％以上を占める。食器は古墳時代から続く須恵器杯Ａ・Ｂが主なものとなる。

1　煮炊具はほとんがが土師器甕Ａで、口縁端部をナデ上げるＡ１類・Ａ２類で占められる。食器は須恵器杯Ａと蓋Ａの組み合わせとなる。

2　煮炊具の土師器甕ＡはＡ２類が主体となり、土師器甕Ｃ１・Ｃ２類・Ｅが新たにみられる。食器の須恵器杯Ａと蓋Ａは以前として残るが、蓋Ｂと杯Ｅの割合が増加する。

	Ⅰ				Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
	1	2	3	4	1	2	1	2			
ＳＥ	06・09 23・31 32・33	13・14 22・28		25	26・29		01	10・24	11・16 17	04・12 15・20	
ＳＫ	125	20 118	40	108		06・90			05・74	19・77 78・144	171
ＳＤ		94	60	41	72	48・49 97				05・15 43・50 59・63	
ＳＸ		01									

第10表　古墳時代後期以降時期別主要遺構



第87図　土師器甕細分類（1／6）

Ⅱ期　煮炊具である土師器甕Ａ３類・Ｂが用いられている時期。食器は須恵器杯Ａ・蓋Ａの組み合わせがみられなくなり、須恵器杯Ｅ・蓋Ｂ・Ｃが主流となる。

1　煮炊具の土師器甕ＡはＡ３類が主体となる。食器は蓋Ｂ・Ｃと杯Ｅが主なものとなる。

2　煮炊具は土師器甕Ａ３類が少なくなり甕Ｂが多くなる。食器は須恵器蓋とＢが杯Ｅが主体となり、杯Ｆもみられる。

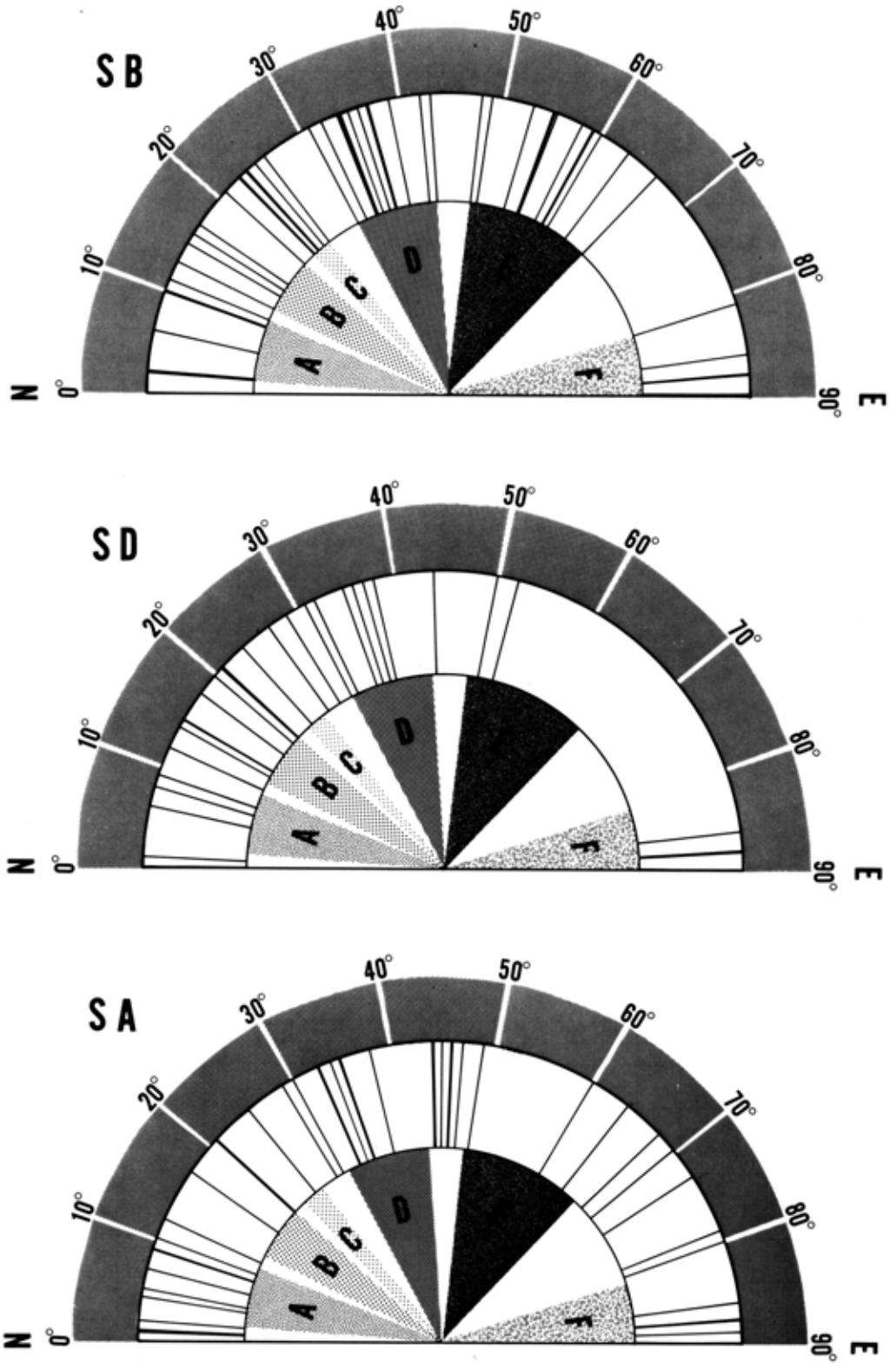
Ⅲ期　煮炊具である土師器甕Ｇ・Ｈが用いられる時期。煮炊具が全器種の10％以下となる。食器は蓋Ｄが主流となり、盤Ａに代表される盤や金属器写しの器種が現れる。

1　煮炊具は土師器甕Ｆ・ＨとＧ１類がみられる。食器は定型化した須恵器蓋Ｄと器高の深い盤Ａ・直線的にのびる体部をもつ杯Ｄ・Ｆが主流となる。

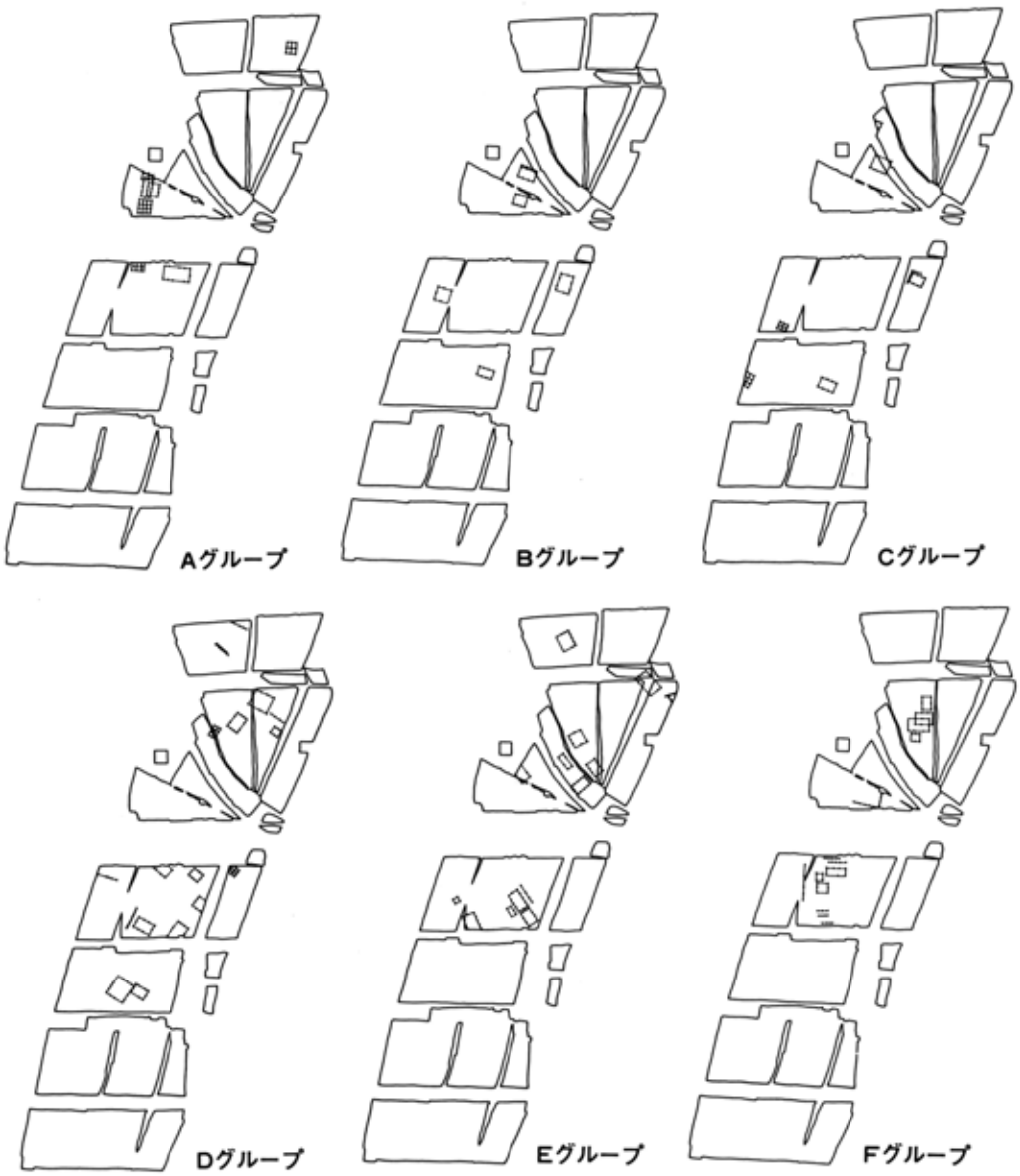
2　煮炊具は土師器甕Ｇ２類となる。食器は器高の浅い杯Ｄとやや内弯して椀状を呈する杯Ｄとなる。

Ⅳ期　煮炊具は土師器甕Ｇ３類となり、全器種に占める割合は５％以下となる。食器には灰釉陶器が加わり、灰釉陶器椀ＡやⅢＡ・Ｂがみられる。

Ⅴ期　灰釉系陶器が使われ始める時期。灰釉系陶器椀Ａ～Ｄ、小椀、「足高高台」杯、土師器椀などの多様な器種がみられる。



第88図　主要遺構軸線方位グラフ



第89図　グループ別掘立柱建物

Ⅵ期　灰釉系陶器のいわゆる「山茶碗」が用いられる時期。灰釉系陶器椀D～Ⅰ、小皿A～Cが主流となる時期。

Ⅶ期　大窯で生産された施釉陶器がみられる時期。

この各時期を生産地の窯様式をもとに年代を与えると、Ⅰ期－H－44～H－50（6世紀末～7世紀前半）、Ⅱ期－Ⅰ－17～Ⅰ－41（7世紀後半）、Ⅲ期－O－10～ⅠG－78（8世紀後半～9世紀初）。Ⅳ期－K－90～O－53（10世紀前半）、Ⅴ期－百代寺窯式（11世紀中頃）、Ⅵ期－13世紀、Ⅶ－15世紀となる。

集　落　大渕遺跡のⅠ期からⅦ期末は約900年という長期間にわたっており、集落も当然幾度かの建て替えがあったはずであるが、この時期の住居形態である掘立柱建物では時期の決定や切り合い関係を把握することは難しく、変遷を追うことは困難を伴う。ただ、多くの当

該期の集落の事例では、掘立柱建物だけで構成される建物群は、おおむね軸線を合わせながら作られていくという傾向が認められており、これにより大渕遺跡の掘立柱建物・柵・溝の軸線をみると、第88図のようになる。この中で最もはっきりとしたまとまりがみられるのが掘立柱建物で（第89図）、切り合い関係を考慮すると、A～Fの6グループに分かれる。溝も掘立柱建物ほどではないが、4グループ程度に分かれ、それぞれB・C、D、E、Fグループに対応する。柵についても、いくつかのグルーピングが可能であるが、掘立柱建物のそれとはうまく対応しない。

さらにこの掘立柱建物と溝のグループがどのような順序でつくられていったかということであるが、まず①調査区南側を何度も掘り返されながら走る溝群は、自然地形の制約を受けるためか、各溝ともほぼ同方向をむき、Ⅰ期からⅢ期までの遺物が出土することからみて、この軸線方向の溝が長期間にわたって使用されていたことが考えられる。逆にいえば、最も古い軸線方向がこの方向である可能性がある。②Cグループ→Dグループという切り合いがみられる。③EグループにはいるSB37の柱穴内よりⅢ期の杯Eが出土している。④Ⅲ期の井戸SE01と隣接するSB01と関連するような場所に位置する。⑤Fグループの掘立柱建物は包含層上面で検出が可能である。⑥SB23はSD43に切られている、の条件をもとにA～Fの順序を想定してみると、第90図のようになる。これをまとめると下記のようになる。

1．南側の溝群の軸線方向にあわせるように、Dグループが作られる。掘立柱建物は北・中・南の3グループに分かれ、北と中のグループには総柱建物がみられる。その居住域を区切るように、西にSD58、南にSD82、東にSD94が走る。

2．南SD53を基準にCグループが作られる。1と同じく北・中・南の3グループに分かれるが、通常の掘立柱建物はSD53の東側、総柱建物は西側という配置になる。

3．2を踏襲するように、Bグループが作られ、SD53の西側にも通常の掘立柱建物がみられる。

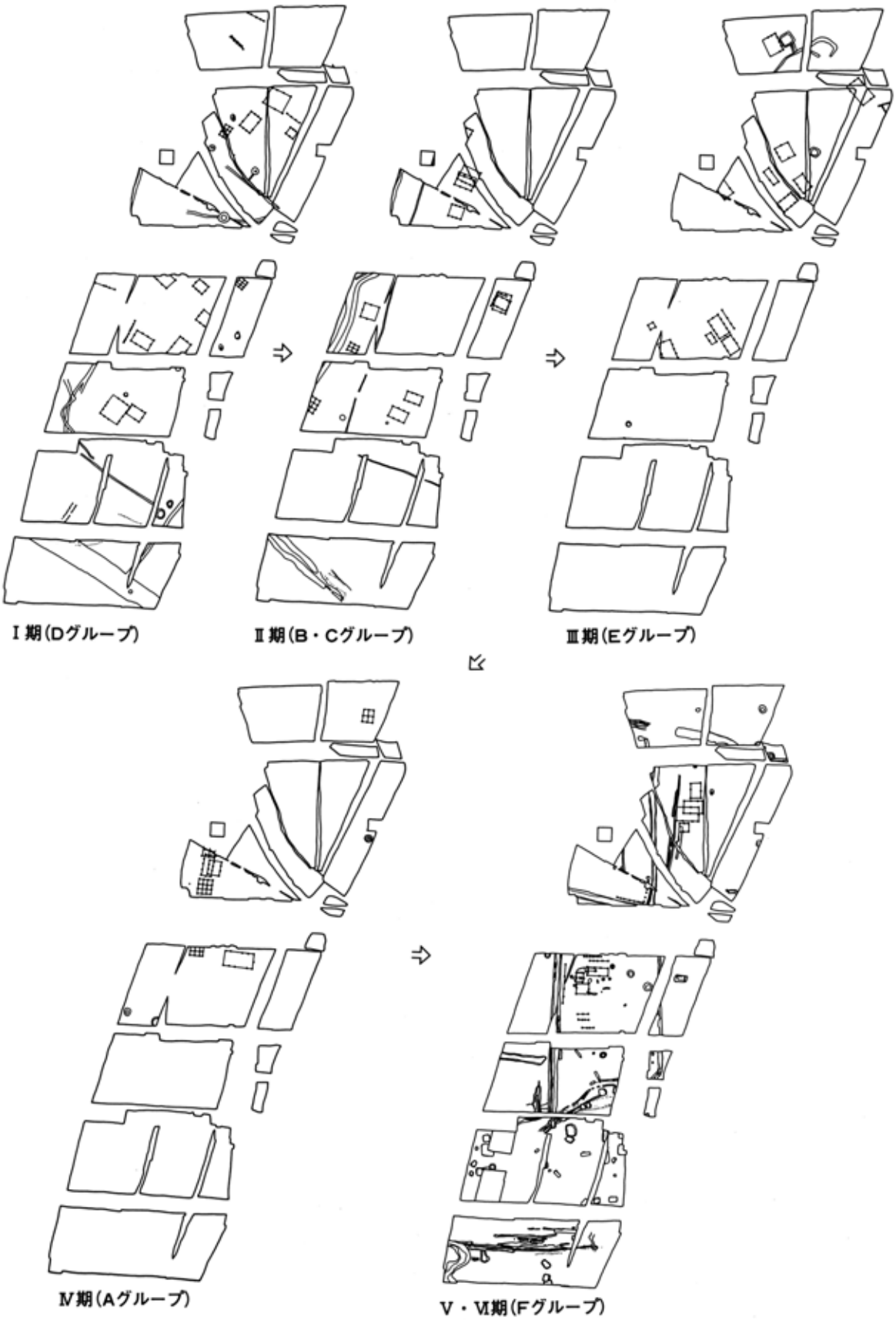
4．Eグループが作られるが、建物の軸線方位に大きな変化がみられる。1と同じく北・中・南の3グループに分かれるが、総柱建物はみられない。

5．Aグループが作られる。掘立柱建物と総柱建物という組み合わせで、中央部に集中し、北に一棟総柱建物がみられる。

6．ほぼ南北方向を向くFグループが南・北の2グループに作られ、それを囲むように南北・東西の軸線方位をもつ溝が走る。

これを土器からみた時期区分にあてはめると、Ⅰ期－Dグループ、Ⅱ期－C・B期グループ、Ⅲ期－Eグループ、Ⅳ・Ⅴ期－Aグループ、Ⅵ期－Fグループと考えられ、Ⅱ期とⅢ期、Ⅳ・Ⅴ期とⅥ期の間に大きな画期があることがわかる。

Ⅰ・Ⅱ期　大渕遺跡の性格を考える場合、官衙や寺院といった大規模な計画的な建物群としてとらえることは難しい。かといって清洲城下町遺跡や名古屋城三の丸遺跡でみられた竪穴住居と掘立柱建物で構成される自然集落的な様相とも違っており、Ⅰ期の6世紀末より建物は



第90図　主要遺構変遷図

掘立柱建物しかみられない。このようなありかたは明らかに畿内的な様相を強くもっていると言え、「ナデ上ゲ」を特徴とした甕Aが分布する範囲は畿内、伊勢、尾張、中・西美濃地域であり、特に長胴甕との折衷型が多くみられるのは、近江以東である。つまり大渕遺跡の成立は畿内と強い結び付きをもって現れ、その主体は、阿部義平氏が（『官衙』1989ニューサイエンス社）述べられている「地方の在地豪族総が大化改新時に評造になど任命されるまで、自らの由来や職掌を各自が主張したことがみえ、国造や評造以外にも有力者が在地におったことは確実である」中の「有力者」がそれにあたるであろう。また、一定の規格をもった土錘を用いた計画的な漁労の存在も、遺跡が官衙的な性格でなく、地域に密

Ⅲ・Ⅵ期

着していることを窺わせる。そして、7世紀後半の甚目寺や法性寺等の古代寺院の建立後にⅡ期とⅢ期の画期がみられるが、これはその「有力者」官編成に組み入れられ、寺を中心として居住体形に変化したためではないかと思われる。次に遺跡が営まれるⅢ期の8世紀後半は、全国的に私有地を伴う新田開発が盛んに行われる時期であり、遺跡の居住者は新たな開発を行うため、再び旧地に居住地を求めたことになる。ただ、遺構配置等をみると、これらの進出も計画的に行われたものである可能性が高い。また、Ⅲ期以降は土錘が全くみられなくなり、村落の生活構造がⅠ・Ⅱ期とは変わってきていることが指摘できる。さらに、そのⅢ・Ⅳ期にみられる、荒いハケを施す甕Gの分布は、尾張、三河、遠江、南・中信となっており、生産地である尾張を中心とした灰釉陶器の流通ルートと深く関わっているものと考えられる。

Ⅴ・Ⅵ期　Ⅴ期の遺跡の様相については、井戸が3基検出されているだけで、居住地域の検出はできなかった。

Ⅵ期は、13世紀前後に濃尾平野全域にみられる、溝を用いて居住域や墓域を区画する集落形態を示す。この中世集落には、溝方位がほぼ南北を向く土田遺跡や阿弥陀寺遺跡のようなタイプと自然地形に合わせたように不整方向に来る森南遺跡のようなタイプがみられる。大渕遺跡は明らかに前者のタイプで、東西方向の溝間の距離が北から62m、68m、62m、南北方向の溝間の距離が36mで、前者のタイプの30～40mを測る溝間距離とも一致する。ただ、居住域と墓域を不整方向の溝や柵列で区切る例は他には無く、新たな知見を加えたといえよう。また、方形土坑に切り合いがあることや軸線に二方向あること、溝出土の遺物に時間巾があることからみて、Ⅵ期はさらに二時期に分かれる可能性がある。

下　面

SB　竪穴住居

新番号	長径 (cm)	短径 (cm)	底面レベル (cm)	旧番号
01	500	392	0	60A1 SB06
02	556	436	9	60A1 SB05
03	——	570	3	60A1 SB08
04	——	750	-16	60A1 SB10
05	1036	868	-7	60A1 SB04
06	(820)	420	7	60A1 SB03
07	592	——	7	60A1 SB01
08	——	516	14	60A1 SB07
09	——	318	45	60A1 SK100
10	(668)	428	4	60A1 SK259 60B1 SB03
11	652	492	-6	60B1 SB04
12	——	372	7	60C1 SB01 60B1 SB05
13	——	——	-3	60B1 SB02
14	640	——	12	60B1 SB01
15	372	——	6	60C1 SB02 60B2 SB05
16	448～644	364	-1～9	60A2 SB301 •304•305
17	——	372	2	60A2 SB302
18	(516)	392	-4	60A2 SB303
19	——	——	6	60A2 SB306
20	——	316	5	60A2 SB307
21	388	336	4	60A2 SB308
22	——	384	-1	60A2 SB313•309
23	——	420 476	-4 -9	60A2 SB310•312
24	(400)	(368)	-7	60A2 SB311 60B2 SB01
25	336	276	-6	60A2 SB314
26	——	328	8	60B2 SB02
27	460	352	4	60B1 SB06
28	484	——	-13	60B2 SB07
29	——	332	-7	60B2 SB06
30	356	——	9	59A SB01
31	——	——	2	59A SB04
32	——	——	11	59A SB02
33	(544)	——	-7	59A SB06
34	——	444	1	59A SB03
35	336	312	-29	59A SB07
36	396	360	-4	60C2 SB14
37	——	——	-12	60C2 SB12
38	472	——	-13	60C2 SB15
39	768	360	-15	60C2 SB08
40	396	——	-5	60C2 SB09
41	——	(452)	-16	60C2 SB06
42	——	——	-20	60C2 SB06
43	——	——	-19	60C2 SB04
44	328	320	-10	60C2(IVE6i)
45	——	420	-8	60C2 SB03
46	476	408	-9	60C2 SB02
47	348	——	-22	60C2 SB01
48	488	——	-17	60C3 SB01
49	536	412	-19	60C3 SB03
50	516	480	-22	60C3 SB05
51	584	——	-18	60C3 SB02
52	468	460	-20	60C3 SB06

SK　土拡

新番号	長径 (cm)	短径 (cm)	底面レベル (cm)	旧番号
01	258	198	-28	60A1 SK209
02	(252)	136	22	60A1 SK207
03	328	236	-4	60A1 SK451
04	——	——	12	60A1 SK520
05	162	108	-1	60A1 SK426
06	214	——	6	60A1 SK374
07	252	186	-28	60A1 SK314
08	148	——	10	60B1 SK107
09	108	——	9	60B1 SK108
10	(1164)	——	-6	60B2 SX01
11	210	92	20	60B1 SK04
12	224	——	2	60B1 SK125
13	508	256	4	60B1 SK72
14	120	106	-23	60B1 SK130
15	——	116	-16	60B1 SK108
16	130	110	-74	60C1 SK29
17	128	74	-3	60C1 SK24
18	(150)	100	-14	60C1 SK42
19	170	128	-81	60C1 SK41
20	176	164	-89	60C1 SK16
21	——	235	2	59F SK02
22	——	130	2	59F SD01
23	——	——	0	59F SK03
24	284	198	-10	60A2 SK350
25	162	118	-36	60A2 SK383
26	298	240	-40	60A2 SK351
27	——	136	-20	60A2 SK354
28	154	134	-22	60A2 SK363
29	152	140	-8	60A2 SK364
30	122	96	-19	60A2 SK368
31	180	110	-13	60A2 SK374
32	316	(220)	-29	60A2 SK376
33	290	——	-24	60A2 SK378
34	162	106	9	60B2 SK302
35	198	82	0	60B2 SK363
36	130	100	-4	60B2 SK305
37	224	106	-12	60B2 SK317
38	178	130	-14	60B2 SK307
39	160	100	-34	59A SK28
40	——	115	-22	59A SK15-4
41	——	100	-26	59A SK15-3
42	145	——	-20	59A SK15-2
43	145	140	-29.5	59A SK15-1
44	——	195	34	59A SK15
45	(160)	110	-29.5	59A SK32
46	——	——	-37	60C2 SK285

新番号	長径 (cm)	短径 (cm)	底面レベル (cm)	旧番号
47	164	138	-51	$60C_2$ SK290・352
48	118	94	-19	$60C_2$ SK317
49	180	152	-42	$60C_2$ SK330
50	196	106	-22	$60C_2$ SK322
51	120	88	-12	$60C_2$ SK353
52	194	112	0	$60C_2$ SK368
53	——	——	-24	60D SK11

SE 井戸

新番号	長径 (cm)	短径 (cm)	底面レベル (cm)	旧番号
01	406	——	-175	$60C_3$ SE01
02	340	——	-171	$60C_2$ SE02
03	280	195	-150.5	59A SE02

SD 溝

新番号	長径 (cm)	短径 (cm)	底面レベル (cm)	旧番号
01	190～300	-59～-41		$60A_1$ SD11・$60A_2$ SD303 $60B_2$ SD301・59A SD03
02	110～140	-9～-3		$60A_2$ SD301
03	100～140	-15～-5		$60C_2$・C_3 SD18
04	75～170	-14～-5		$60C_2$・C_3 SD19

上面

SB 掘立柱建物

遺構番号	規模 (cm)		方向
01	5間 630	(2間 250)	N-59°-E
02	2間 450	2間 350	N-2°-E
03	(5間?840)	(3間 501)	N-59°-E
04	3間 400	2間 300	N-34°-E
05	3間 720	1間?610	N-25°-E
06	2間 520	1間 350	N-81°-E
07	3間?610	3間 430	N-35°-E
08	3間 660	1間 450	N-86°-E
09	3間?770	2間?510	N-88°-E
10	3間?510	2間 490	N-63°-E
11	2間 310	2間 300	N-88°-E
12	3間 600	(1間 380)	N-55°-E
13	2間 330	1間 280	N-36°-E
14	(3間?350)	(2間?350)	N-24°-E
15	2間?600	1間 220	N-55°-E
16	3間?600	2間 380	N-53°-E
17	4間 650	2間 480	N-23°-E
18	3間 640	2間 420 500	N-21°-E
19	(2間 350)	1間?400	N-48°-E
20	(1間 230)	2間 430	N-10°-E
21	4間 760	2間 350	N-11°-E
22	3間 520	1間 400	N-10°-E
23	3間 520	3間 450	N-6°-E
24	3間 500	2間?420	N-15°-E
25	2間?530	2間 500	N-16°-E
26	1間 215	1間 190	N-49°-E
27	2間 360	2間 300	N-26°-E
28	3間 420	(2間 300)	N-2°-E
29	(2間?440)	1間 400	N-43°-E
30	3間 725	1間 275	N-90°-E
31	1間 280	1間 235	N-90°-E
32	2間?440	2間 375	N-90°-E
33	5間 1200	2間?520	N-3°-E
34	2間 430	2間 360	N-42°-E
35	4間 800	2間 440	N-67°-E
36	3間 660	2間 440	N-31°-E
37a	4間 770	2間 440	N-58°-E
37b	2間 370	1間 200	N-55°-E
38	3間 550	3間?420	N-60°-E
39	(3間 680)	3間 480	N-39°-E
40	(2間 360)	3間 450	N-37°-E
41	3間 335	2間 325	N-37°-E
42	3間 500	2間 360	N-23°-E
43	3間 640	2間 500	N-13°-E
44	3間 500	(2間 300)	N-25°-E
45	5間?760	4間?720	N-34°-E
46	3間 500	2間 480	N-34°-E
47	3間 620	1間 370	N-24°-E
48	3間 550	1間 300	N-17°-E

SA 柵

遺構番号	規模 (cm)	方向
01	5間 730	N-25°-E
02	3間 530	N-49°-E
03	4間 650	N-46°-E
04	3間 550	N-33°-E
05	(4間 435)	N-68°-E
06	(3間 300)	N-64°-E
07	5間 940	N-33°-E
08	(3間 460)	N-12°-E
09	4間?940	N-10°-E
10	3間?765	N-17°-E
11	4間?1360	N-4°-E
12	5間 610	N-90°-E
13	7間?830	N-29°-E
14	2間 340	N-88°-E
15	2間 360	N-4°-E
16	2間 400	N-88°-E
17	3間?730	N-5°-E
18	3間 680	N-47°-E
19	?540	N-60°-E
20	1800	N-73°-E
21	1370	N-80°-E
22	1200	N-79°-E
23	(10間?740)	N-34°-E
24	(10間?720)	N-35°-E

遺構番号	規　模（cm）	方　向
25	11間　820	N-35°-E
26	（6間　410）	N-44°-E
27	2間　125	N-7°-E
28	（4間　285）	N-4°-E
29	（4間？275）	N-1°-E
30	（3間　250）	N-45°-E
31	？1120	？
32	？980	N-2°-E
33	13間？1030	N-2°-E
34	12間　960	N-86°-E
35	9間　640	N-44°-E
36	8間　570	N-38°-E
37	4間　280	N-70°-E
38	7間　480	N-46°-E
39	（5間　350）	N-30°-E
40	（6間？400）	N-1°-E
41	（？300＋180＋180 660）	N-89°-E
43 a	2間　360	N-21°-E
43 b	2間　480	N-21°-E
42	4間　660	N-1°-E

SK　土坑

新番号	長径（cm）	短径（cm）	底面レベル（cm）	旧　番　号
01	224	82	39	$60A_1$　SK51
02	268	214	15	$60A_1$　SK141
03	89	——	14	$60A_1$　SK305
04	184	156	46	$60A_1$　SK58
05	166	132	41	$60A_1$　SK59
06	——	172	29	$60A_1$　SK96
07	186	98	16	$60A_1$　SK109
08	196	126	38	$60A_1$　SK110
09	(236)	174	-6	$60A_1$　SK315
10	——	98	10	$60A_1$　SK323
11	128	110	35	$60A_1$　SK158
12	——	170	5	$60B_1$　SK71
13	175	140	17	$60B_1$　SK14
14	180	160	6	$60B_1$　SK01
15	264	120	-2	$60B_1$　SK68
16	216	160	6	$60B_1$　SK45
17	265	80	17	$60B_1$　SK39
18	——	120	16	$60B_1$　SK28
19	119	90	8	$60A_2$　SK23
20	380	105	5	$60A_2$　SK13
21	510	380	29	$60A_2$　SK78
22	400	236	12	$60A_2$　SK39
23	296	194	27	$60A_2$　SK79
24	166	106	16	$60A_2$　SK88
25	326	180	28	$60A_2$　SK76
26	298	170	28	$60A_2$　SK72
27	120	80	5	$60A_2$　SK97
28	120	90	-15	$60A_2$　SK217
29	100	82	21	$60A_2$　SK230
30	——	140	21	$60A_2$　SK231
31	——	100	20	$60A_2$　SK249
32	——	160	17	$60B_2$　SK181
33	244	88	13	$60B_2$　SK31 ・131
34	186	130	-32/-13	$60B_2$　SK69
35	——	118	-19	$60B_2$　SD01
36	212	140	-20	$60B_2$　SK118
37	85	64	9	$60B_2$　SK117
38	(480)	(300)	33	59A　SK03
39	210	130	26	59A　SK12
40	145	140	20.5	59A　SK16
41	——	215	25	59A　SK17
42	——	152	31	59A　SK13
43	——	195	19/23	59A　SK19
44	245	——	-15	59A　SK27
45	186	168	7	59A　SK22
46	——	——	10	59A　SK21
47	170	135	11	59A　SK23
48	168	130	8	59A　SK20
49	325	125	-42.5	59A　SK35
50	(174)	100	-27	59A　SK36
51	(160)	70	-34	$60C_2$　SK241
52	107	52	-25	$60C_2$　SK49
53	216	160	-82	$60C_2$　SK38
54	140	92	-13	$60C_2$　SK45・46
55	180	——	8	$60C_2$　SK13
56	173	68	6	$60C_2$　SK76
57	213	71	-34	$60C_2$　SK89・87
58	135	94	-25	$60C_2$　SK93
59	——	140	-7	$60C_2$　SK146
60	——	——	-9	60D　SK03
61	200	——	-23	60D　SK01
62	(142)	——	-30	60D　SK09
63	130	111	-39	59G　SK01
64	130	86	-28	59G　SK02
65	——	——	-33	59G　SK05
66	116	110	-53	59G　SK10
67	156	108	-32	59G　SK14
68	——	168	-31	59G　SK15
69	(220)	——	-43	58T P.3　SK01
70	——	100	-15	60E　SK33
71	100	70	-23	60E　SK40
72	144	84	-18	60E　SK46
73	152	84	-21	60E　SK48
74	1000	240	-48	60E　SD04
75	212	75	-51	60E　SK78
76	244	194	-32	60F　SK95
77	145	120	-58	60F　SK24
78	680	170	-10	60F　SD01
79	130	100	-19	60F　SK05
80	164	125	-12	60F　SK33
81	110	92	-27	60F　SK02
82	170	122	-7	60F　SK09
83	108	100	-71	60F　SK19
84	110	92	-37	60F　SK13
85	162	116	-31	60F　SK55
86	180	124	-16	60F　SK44
87	388	98	-22	60F　SK39
88	——	95	-15	60F　SK73
89	212	——	-61	60F　SK69
90	362	100	-51	60F　SD11
91	132	97	-22	60F　SK83
92	136	94	-25	60F　SK88
93	108	98	-17	60F　SK85

新番号	長径 (cm)	短径 (cm)	底面レベル (cm)	旧番号
94	445	240	-101/-59	59B SK62 58T.P4 SK04
95	121	——	-16	59B SK42
96	310	(100)	-20	59B SK38
97	(132)	96	-22	59B SK37
98	154	90	-12	59B SK22
99	114	114	-29	60G SK05
100	198	173	-78	60G SK13
101	——	(189)	-46	58T.P5 SK05
102	120	82	-54	58T.P5 SK01
103	141	87	-52	58T.P5 SK02
104	——	——	-61	60G SK32
105	138	100	-32	60G SK54
106	155	95	-26	60G SK58
107	325	235	-46	60G SK74
108	150	146	-40	60H SK313
109	164	142	-37	60H SK301
110	220	100	-16	60H SK05
111	262	254	-49	60H SK03
112	300	——	-55	60H SK04
113	204	170	-64	60H SK06
114	230	(196)	-64	60H SK07
115	114	112	-35	60H SK308
116	216	206	-38	60H SK306
117	164	——	-32	60H SK320
118	(246)	152	-35	60H SK305
119	170	120	-51	60H SK304
120	——	164	-39	60H SK307
121	108	100	-81.7	59C SK02
122	80	70	-17	59C SK05
123	82	75	-54	59C SK04
124	140	105	-46	59C SK11
125	305	——	-48.5	59C SK20
126	175	120	-52.5	59C SK18
127	110	75	-24.7	59C SK01
128	175	130	-35	59C SK13
129	160	100	-65.5	59C SK21
130	——	95	-25	59C SK16
131	(210)	189	-24	59C SK14
132	——	120	-68	59C SK22
133	254	250	-83	60I SK01
134	138	114	-53	60I SK02
135	430	414	-71	60I SK03
136	238	184	-104	60I SK07
137	166	150	-88	60I SK39
138	284	——	-65	60I SK27
139	——	——	-66	60I SK04
140	222	202	-114	60I SK28
141	164	92	-76	60I SK34
142	540	370	-40	60I SK14
143	152	128	-57	60I SK35
144	——	155	-80	60J SK48
145	(120)	94	-46	60J SK13
146	124	82	-25	60J SK59
147	128	82	-57	60J SK49
148	——	152	-41	60J SK15
149	140	66	-56	60J SK26
150	180	162	-108	60J SK07
151	——	160	-27	60J SK17
152	144	118	-37	60J SK19
153	178	96	-53	60J SK05
154	(230)	(122)	-44	60J SK02
155	192	162	-42	60J SK28
156	118	80	-49/-53	60J SK32
157	243	140	-80	60J SK43
158	——	——	-89	59D SK05
159	365	——	-75	59D SK01
160	(470)	——	-67	59D SK02
161	180	125	-60	59D SK16
162	100	98	-31	59D SK15
163	205	190	-72.5	59D SK04
164	300	175	-70	59D SK03
165	——	110	-33.5	59D SK08
166	150	73	-54	58T.P10 SK01
167	232	76	-52	60K SK77
168	——	226	-66	60K SD13
169	182	164	-106	60K SK78
170	(420)	230	35	60K SK60
171	(445)	240	-65	60K SK46
172	182	148	-16	60K SK71
173	108	67	-33	60L SK413
174	140	——	-16	60L SK06
175	224	79	-40	60L
176	530	210	-40	60L SK404
177	334	196	-79	60L SK11
178	130	70	-61	60L SK402
179	262	230	-89	60L SK12
180	——	278	-53	60L SK13
181	——	150	-39	59E SK01
182	——	——	-45	59E

SE 井戸

新番号	長径 (cm)	短径 (cm)	底面レベル (cm)	旧番号
01	458	424	-157.2	$60A_1$ SEO2 (SK95)
02	320	250	18 -11	$60A_1$ SK167 (SE01)
03	288	250	-41	$60B_1$ SE01
04	——	——	-152	$60B_1$ SE02
05	——	(233)	-145	59F SK04
06	126	112	-67	$60A_2$ SE07
07	134	118	-48	$60A_2$ SE01
08	240	214	-93	$60A_2$ SE02
09	240	228	-180?	$60A_2$ SE03
10	330	310	-120	$60B_2$ SE01
11	——	290	-155.5	59A SE03
12	95	90	-68	59A SE04
13	210	202	-161	$60C_2$ SE01
14	372	350	-124	60D SE01
15	210	——	-130.5	60E SE02
16	235	220	-127	60E SE01
17	——	——	-128	60F SE05
18	172	150	-141	60F SE01
19	256	234	-92	60F SE02
20	320	(302)	-124	60F SE03
21	——	——	-135	59B SK57
22	258	200	-136.5	59B SE01

新番号	長径 (cm)	短径 (cm)	底面レベル (cm)	旧番号
23	185	158	-128	59B SE02
24	190	172	-90	60G SK80 60H SE304
25	154	142	-107	60H SE303
26	95	91	-61	60H SE01
27	232	202	-119	60H SE302
28	222	——	(-120)	58T.P6 SE01 SK04
29	430	——	-139	60H SE301
30	202	162	-144	60I SE01
31	255	215	-109	59D SE02
32	330	(310)	-181	59D SE01
33	140	115	-137	59E SE01

SD 溝

新番号	幅(cm)	底面レベル (cm)	主方向	旧番号
01	58	47		$60A_1$ SD02 SK04
02	52	7		〃 SD12
03	50	12		〃 SD13
04	100	9		〃 SD14
05	82	6		〃 SK429
06	24	47		〃 SD10
07	85	33		〃 SD12
08	55	38		〃 SD06
09	80	37		〃 SD07
10	60～140	20～44	N-52°-E	$60A_1$ SD05・8・11 $60B_1$ SD01
11	315	43	N-0°-E	$60A_1$ SK173 $60B_1$ SD10
12	42	45		〃 SD03？
13	85	34～44		$60B_1$ SD02
14	80	-49		59F SD02
15	170	-56～0		$60A_2$ SD15 $60C_2$ SD13 $60C_3$ SD06 60D SD04
16	165	23		$60A_2$ SD02
17	48	29		〃 SD03
18	55	9～26	N-6°-E	$60A_2$ SD04 $60C_2$ SD16 $60C_3$ SD12
19	35	25		$60A_2$ SD05
20	25	23		〃 SD07
21	43	30		〃 SD08
22	120	18	N-9°-E	$60A_2$ SD09
23	90	20		〃 SD13 SD15
24	50	19		〃 SD11
25	85	22		〃 SD10
26	60	17	N-35°-E	$60A_2$ SD12 59A SD01 $60C_2$ SD06・SD09
27	47	22		$60C_2$ SD14
28	40	16		〃 SD11
29	30	15		〃 SD17
30	40	19		〃 SD04
31	51	19		$60C_2$ SD03 $60C_3$ SD09
32	80	-19～17	N-1°-E	$60C_2$ SD01 $60C_3$ SD08 60D SD10
33	50	1～11	N-88°-E	$60C_3$ SD01

新番号	幅(cm)	底面レベル (cm)	主方向	旧番号
34	60	2～19		〃 SD04
35	60	-25～-6		〃 SD05
36	75	-10		〃 SD03
37	80	1～11		〃 SD02
38	60	-29～-6		〃 SD10
39	50	-4～12		$60C_3$ SD11 $60C_2$ SD15
40	35	-22		60D SD05
41	100	-47～-36	N-15°-E	〃 SD02
42	50	-23	N-14°-E	〃 SD06
43	250	-52～-45	N-15°-E	60D SD01
44	——	-24		59G SD01
45	150	-33		SD02
46	——	-24		SD03
47	——	-41～-23	N-20°-E	60E SD06 SD02
48	34～74	-18～-9		〃 SD05
49	100～180	-57～-22	N-24°-E	60E SD04,03 60G SD02
50	250	-71～-45	N-0°-E	60E SD01 60H SD01
51	55	-11～-5		60E SD09
52	40	-23		〃 SD07
53	35	-35～-27		60F SD06
54	55	-23		〃 SD04
55	80～160	-18～-12	N-88°-E	60F SD10 59B SD01 59C SD01
56	40～62	-16		59B SD02
57	68～150	-25～8		60G SD07
58	92～140	-40～-19	N-21°-E	〃 SD06
59	250	-47～-37	N-8°-E	〃 SD01
60	60～130	-67～-29		〃 SD05
61	45	-36～-23		60H SD310
62	40	-37～-29		〃 SD309
63	220	-109～-91	N-0°-E	60H SD10 60J SD16
64	90	-18～-9		60H SD11
65	70	-18～-11		〃 SD18
66	80	-10～-5		〃 SK04
67	50～90	-22～-9		〃 SD03
68	10～80	-25～-6		60H SD05・07・08・09 60J SD20
69	55	-14		60H SD06
70	70	-18		〃 SD301
71	40～110	-45～-13		60H SD302・305・306 60J SD20
72	100	-46～-39		〃 SD304 60J SK21 SK47,SD19
73	35	-21～-11		59C SD02
74	80	-29		SD07
75	85～128	-40～-21		SD03
76	35	-24		SD04
77	46	-23		SD05
78	——	-78		60I SD10
79	26～50	-547～-29	N-18°-E	60J SD14,13,02 59D SD02
80	50	-35		60J SD15
81	50	-24～-13		〃 SD11
82	60	-39～-26	N-32°-E	60I SD05 60J SD03 58T.P7 SD02
83	70	-49～-32		60I SD07

新番号	幅(cm)	底面レベル(cm)	主方向	旧番号
84	60～130	-36～-28		〃 SD04
85	40	-61		60I SD17
86	——	-68		〃 SD31
87	40	-80～-64		〃 SD15
88	45	-34～-23		〃 SD16
89	30	-37～-28		60J SD09
90	40	-36～-29		SD08
91	30	-29～-23		SD01
92	45～90	-41～-29		SD06
93	40～82	-46.5	N-29°-E	58TP8 SD01
94	105	-39	N-36°-E	58TP10 SD01 59E SD04 60L SD16 59D SD01
95	60～150	-49～-44	N-38°-E	60I SD32 60K SD20
96	100	-37～-21	N-27°-E	60K SD05
97	140	-32～-24	N-44°-E	〃 SD01
98	120～220	-91～-70	N-37°-E	〃 SD02 SD12
99	120	-30～-20		〃 SD08
100	210～400	-114～-68		〃 SD06
101	55～75	-44～-24	N-90°-E	60K SD04 60L SD04
102	40	-33～-17		60L SD07
103	——	-33～-21	N-88°-E	60K SD09 60L SD09
104	55～145	-39～-16	N-90°-E	60K SD07 60L SD05
105	120～150	-84～-67	N-90°-E	60K SD10 60L SD03
106	30～60	-41～-21	N-86°-E	60L SD01 59E SD01
107	80	-48～-36		60K SD23
108	50～80	-47～-38		〃 SK64
109	50～80	-40～-33		60L SD14 SK07
110	25～70	-28～-18		〃 SD15
111	90～140	-24～-16		〃 SD02
112	50	-41～-31		〃 SD08
113	45～80	-44～-37		〃
114	60～155	-63～-54		59E SD02
115	65～100	-42～-29		〃 SD05
116	(730)	——	N-31°-E	59E SD06 60L SD13
117	200	-33～-23		60I SD01

土器

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
1	$60A_1$-E-1	太頸壺	20.2	—	—	—	下SB01
2	$60A_1$-E-2	甕	22.0	22.4	—	—	下SB01
3	$60A_1$-E-3	高杯	15.7	—	—	—	下SB01
4	$60A_1$-E-4	甕	21.3	—	—	—	下SB01
5	$60A_1$-E-5	甕	23.0	—	—	—	下SB01
6	$60A_1$-E-6	細頸壺	10.0	—	—	—	下SB02
7	$60A_1$-E-7	細頸壺	10.5	—	—	—	下SB02
8	$60A_1$-E-8	細頸壺	14.2	—	—	—	下SB02
9	$60A_1$-E-9	甕	—	—	5.7	—	下SB02
10	$60A_1$-E-10	甕	—	—	6.7	—	下SB02
11	$60A_1$-E-11	甕	—	—	7.5	—	下SB02
12	$60A_1$-E-12	太頸壺	25.8	—	—	—	下SB03
13	$60A_1$-E-13	甕	18.8	21.6	5.6	25.1	下SB03
14	$60A_1$-E-14	甕	—	—	7.6	—	下SB03
15	$60A_1$-E-15	甕	—	—	7.6	—	下SB03
16	$60A_1$-E-16	甕	—	—	5.7	—	下SB03
17	$60A_1$-E-17	鉢	37.2	—	19.1	21.1	下SB03
18	$60A_1$-E-18	太頸壺	—	—	48.4	—	下SB05
19	$60A_1$-E-19	太頸壺	—	—	(40.0)	—	下SB05
20	$60A_1$-E-20	太頸壺	19.7	—	—	—	下SB05
21	$60A_1$-E-18	細頸壺	11.2	—	—	—	下SB05
22	$60A_1$-E-22	高杯	15.8	—	—	—	下SB05
23	$60A_1$-E-23	甕	—	—	7.0	—	下SB05
24	$60A_1$-E-24	甕	—	—	7.0	—	下SB05
25	$60A_1$-E-25	甕	—	—	8.4	—	下SB05
26	$60A_1$-E-26	甕	—	—	7.6	—	下SB05
27	$60A_1$-E-27	甕	—	—	8.5	—	下SB05
28	$60A_1$-E-28	甕	—	—	6.8	—	下SB05
29	$60A_1$-E-29	甕	—	—	9.0	—	下SB05
30	$60A_1$-E-30	高杯	25.7	—	—	—	下SB05
31	$60A_1$-E-31	高杯	27.6	—	—	—	下SB05
32	$60A_1$-E-32	太頸壺	19.6	—	—	—	下SB05
33	$60A_1$-E-33	甕	(30.8)	—	—	—	下SB05
34	$60A_1$-E-34	鉢	13.0	—	—	—	下SB06
35	$60A_1$-E-35	太頸壺	16.0	—	—	—	下SB06
36	$60A_1$-E-36	甕	—	—	7.4	—	下SB06
37	$60A_1$-E-37	甕	—	—	10.7	—	下SB06
38	$60A_1$-E-38	高杯	—	—	12.5	—	下SB06
39	$60A_1$-E-39	甕	—	—	8.5	—	下SB06
40	$60A_1$-E-40	細頸壺	25.3	—	—	—	下SB06
41	$60A_1$-E-41	甕	25.2	28.8	—	—	下SB06
42	$60A_1$-E-42	甕	—	—	6.6	—	下SB06
43	$60A_1$-E-43	甕	—	—	8.4	—	下SB06
44	$60A_1$-E-44	甕	—	—	7.0	—	下SB06
45	$60A_1$-E-45	甕	—	—	6.1	—	下SB06
46	$60A_1$-E-46	甕	—	—	—	—	下SB06
47	$60A_1$-E-47	甕	34.2	36.4	—	—	下SB06
48	$60A_1$-E-48	高杯	17.6	—	—	—	下SB06
49	$60A_1$-E-49	鉢	—	—	10.0	—	下SB06
50	$60A_1$-E-50	甕	(17.3)	—	—	—	下SB06
51	$60A_1$-E-51	細頸壺	7.2	—	—	—	下SB08
52	$60A_1$-E-52	甕	29.1	—	6.7	—	下SB08
53	$60A_1$-E-53	甕	19.5	—	—	—	下SB08
54	$60A_1$-E-54	甕	6.6	—	—	—	下SB08
55	$60B_1$-E-1	甕	21.0	—	—	—	$60B_1$検出
56	$60B_1$-E-2	細頸壺	9.6	—	—	—	下SB10
57	$60B_1$-E-3	細頸壺	17.0	—	—	—	下SB10
58	$60B_1$-E-4	高杯	—	—	14.6	—	下SB10
59	$60B_1$-E-5	ミニチュア	4.0	8.0	4.5	7.2	下SB10
60	$60B_1$-E-6	太頸壺	—	36.4	—	—	下SB10
61	$60B_1$-E-7	甕	—	—	72.	—	下SB10
62	$60B_1$-E-8	甕	15.6	—	—	—	下SB10
63	$60B_1$-E-9	太頸壺	—	—	8.4	—	下SB11
64	$60B_1$-E-10	壺	—	30.4	7.0	—	下SB11
65	$60B_1$-E-11	甕	15.2	—	—	—	下SB11
66	$60B_1$-E-12	ミニチュア	3.1	5.0	2.9	7.2	下SB11
67	$60B_1$-E-13	細頸壺	25.2	—	—	—	下SB12
68	$60B_1$-E-14	細頸壺	10.1	—	—	—	下SB12
69	$60B_1$-E-15	太頸壺	17.4	—	—	—	下SB12
70	$60B_1$-E-16	ミニチュア	5.0	—	3.2	5.8	下SB12
71	$60B_1$-E-17	高杯	31.2	—	—	—	下SB12
72	$60B_1$-E-18	高杯	20.8	—	—	—	下SB12
73	$60B_1$-E-19	壺	—	—	5.2	—	下SB12
74	$60B_1$-E-20	甕	22.0	—	—	—	下SB12
75	$60B_1$-E-21	甕	20.6	—	—	—	下SB12
76	$60B_1$-E-22	甕	20.7	—	—	—	下SB12
77	$60B_1$-E-23	甕	18.6	—	—	—	下SB12
78	$60B_1$-E-24	甕	—	—	6.8	—	下SB12
79	$60B_1$-E-25	甕	17.6	—	—	—	下SB14
80	$60B_1$-E-26	細頸壺	9.8	—	—	—	下SB14
81	$60B_1$-E-27	壺	—	—	9.5	—	下SB14
82	$60B_1$-E-28	甕	—	—	7.6	—	下SB14
83	$60B_1$-E-29	甕	15.8	17.6	5.2	21.6	下SB14
84	$60B_1$-E-30	太頸壺	12.4	—	—	—	下SB14
85	$60A_2$-E-1	短頸壺	12.2	—	—	—	下SB20
86	$60A_2$-E-2	甕	—	—	5.9	—	下SB20
87	$60A_2$-E-3	甕	28.1	—	—	—	下SB20
88	$60A_2$-E-4	甕	21.6	—	—	—	下SB20
89	$60A_2$-E-5	甕	—	—	6.0	—	下SB20
90	$60A_2$-E-6	特殊壺	—	8.8	—	—	下SB21
91	$60A_2$-E-7	甕	22.0	—	—	—	下SB21
92	$60A_2$-E-8	甕	24.6	—	—	—	下SB21
93	$60A_2$-E-9	甕	—	—	7.4	—	下SB21
94	$60A_2$-E-10	甕	—	—	6.7	—	下SB21
95	$60A_2$-E-11	甕	—	—	8.7	—	下SB21
96	$60A_2$-E-12	甕	—	—	6.8	—	下SB21
97	$60A_2$-E-13	甕	22.6	—	—	—	下SB21
98	$60A_2$-E-14	甕	—	—	8.3	—	下SB21
99	$60A_2$-E-15	甕	—	—	10.1	—	下SB21
100	$60A_2$-E-16	鉢	14.0	—	6.5	6.7	下SB21
101	$60A_2$-E-17	甕	19.4	—	—	—	下SB21
102	$60A_2$-E-18	甕	25.0	—	—	—	下SB21
103	$60A_2$-E-19	甕	24.2	—	—	—	下SB21
104	$60A_2$-E-20	甕	—	—	9.4	—	下SB21
105	$60A_2$-E-21	細頸壺	9.4	—	—	—	下SB21
106	$60A_2$-E-22	太頸壺	30.4	—	6.4	—	下SB21
107	$60A_2$-E-23	甕	—	—	—	—	下SB21
108	$60A_2$-E-24	甕	24.0	—	—	—	下SB21
109	$60A_2$-E-25	甕	20.2	—	—	—	下SB21
110	$60A_2$-E-26	甕	32.4	—	—	—	下SB21

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
111	60A_2-E-27	甕	—	—	5.3	—	下SB21
112	60A_2-E-28	甕	17.0	—	—	—	下SB21
113	60A_2-E-29	短頸壺	7.9	17.6	5.2	18.4	下SB22
114	60A_2-E-30	把手	—	—	—	—	下SB22
115	60A_2-E-31	甕	29.4	—	—	—	下SB22
116	60A_2-E-32	甕	—	—	6.9	—	下SB22
117	60A_2-E-33	甕	—	—	6.2	—	下SB22
118	60A_2-E-34	甕	17.0	—	—	—	下SB22
119	60A_2-E-35	甕	26.6	—	—	—	下SB22
120	60A_2-E-36	短頸壺	11.0	17.4	—	—	下SB23
121	60A_2-E-37	甕	16.2	—	—	—	下SB23
122	60A_2-E-38	甕	16.4	—	—	—	下SB24
123	60B_2-E-1	鉢	31.0	—	—	—	下SB26
124	60B_2-E-2	甕	28.6	—	—	—	下SB26
125	60B_2-E-3	細頸壺	—	24.4	—	—	下SB27
126	60B_2-E-4	太頸壺	17.0	—	4.8	—	下SB27
127	60B_2-E-5	甕	27.9	—	—	—	下SB27
128	60B_2-E-6	鉢	23.0	—	—	—	下SB27
129	60B_2-E-7	鉢	27.4	—	—	—	下SB27
130	60B_2-E-8	甕	13.3	—	—	—	下SB27
131	60B_2-E-9	甕	18.1	—	—	—	下SB27
132	60B_2-E-10	甕	21.0	—	—	—	下SB27
133	60B_2-E-11	甕	22.7	—	—	—	下SB27
134	60B_2-E-12	甕	22.6	—	—	—	下SB27
135	60B_2-E-13	甕	16.7	—	—	—	下SB27
136	60B_2-E-14	甕	19.2	—	—	—	下SB27
137	60B_1-E-31	土製品	—	4.4	—	—	下SK10
138	59A-E-125	細頸壺	6.8	20.6	—	—	下SB35
139	59A-E-119	細頸壺	10.4	—	—	—	下SB35
140	59A-E-124	細頸壺	—	23.2	6.8	—	下SB35
141	59A-E-130	甕	20.7	23.2	6.6	(28.4)	下SB35
142	59A-E-117	甕	21.0	—	—	—	下SB35
143	59A-E-186	甕	15.9	—	—	—	下SB35
144	59A-E-128	甕	—	—	9.0	—	下SB35
145	59A-E-120	甕	—	—	6.2	—	下SB35
146	59A-E-131	甕	26.2	—	6.8	(32.7)	下SB35
147	59A-E-129	甕	34.0	—	—	—	下SB35
148	59A-E-123	甕	17.0	—	—	—	下SB35
149	59A-E-122	甕	16.6	—	—	—	下SB35
150	59A-E-11	細頸壺	8.6	—	—	—	下SB35
151	59A-E-127	短頸壺	12.5	20.8	6.0	(17.0)	下SB35
152	59A-E-116	甕	19.9	—	—	—	下SB35
153	59A-E-132	甕	31.4	—	10.8	—	下SB35
154	59A-E-115	甕	16.9	—	19.2	—	下SB35
155	59A-E-126	甕	22.0	—	—	—	下SB35
156	60C_2-E-1	甕	22.0	24.4	27.5	—	下SK47
157	60B_2-E-15	甕	22.6	—	—	—	下SK35
158	60B_1-E-32	甕	24.6	—	8.3	(36.0)	下SK12
159	60A_1-E-55	太頸壺	19.0	—	—	—	下SK03
160	60A_1-E-56	太頸壺	11.0	—	—	—	下SK03
161	60A_1-E-57	甕	—	—	7.0	—	下SK03
162	60A_1-E-58	甕	—	—	9.7	—	下SK03
163	60A_1-E-59	太頸壺	30.4	—	—	—	下SK03
164	60A_1-E-60	甕	—	—	7.2	—	下SK03
165	60A_1-E-61	甕	—	—	6.2	—	下SK03
166	60B_1-E-33	細頸壺	5.5	17.2	4.0	21.6	下SK13
167	60B_1-E-34	太頸壺	19.6	—	—	—	下SK13
168	60B_1-E-35	甕	—	—	7.6	—	下SK13
169	60B_1-E-36	太頸壺	19.6	—	—	—	下SK13
170	60B_1-E-37	細頸壺	10.2	—	—	—	下SK13
171	60B_1-E-38	甕	22.2	—	—	—	下SK13
172	60B_1-E-39	鉢	22.8	—	—	—	下SK13
173	60B_1-E-40	鉢	26.2	30.6	—	—	下SK13
174	60B_1-E-41	鉢	44.5	—	—	—	下SK13
175	60B_1-E-42	甕	18.8	—	—	—	下SK13
176	60A_3-E-39	甕	17.0	—	—	—	下SK26
177	60A_3-E-40	鉢	29.4	—	—	—	下SK26
178	60A_3-E-41	甕	—	—	9.0	—	下SK26
179	60A_3-E-42	甕	—	—	6.2	—	下SK26
180	60C_2-E-2	短頸壺	9.3	20.0	—	(19.3)	下SE02
181	60C_2-E-3	高杯	32.0	—	—	—	下SE02
182	60C_2-E-4	甕	19.6	—	—	—	下SE02
183	60C_2-E-5	甕	18.0	—	—	—	下SE02
184	59A-E-24	細頸壺	10.6	—	—	—	下SE03
185	59A-E-36	円窓付壺	11.2	24.6	—	—	下SE03
186	59A-E-17	甕	18.5	—	—	—	下SE03
187	59A-E-26	甕	20.8	—	—	—	下SE03
188	59A-E-262	甕	17.8	—	—	—	下SE03
189	59A-E-25	甕	18.4	—	—	—	下SE03
190	59A-E-28	高杯	27.6	—	—	—	下SE03
191	59A-E-30	高杯	—	—	14.5	—	下SE03
192	59A-E-29	高杯	—	—	15.0	—	下SE03
193	59A-E-23	高杯	—	—	12.8	—	下SE03
194	59A-E-15	把手	—	—	—	—	下SE03
195	59A-E-49	鉢	29.0	31.2	6.2	21.2	下SE03
196	59A-E-48	太頸壺	18.4	—	—	—	下SE03
197	59A-E-34	細頸壺	8.6	—	—	—	下SE03
198	59A-E-108	細頸壺	—	14.4	3.6	—	下SE03
199	59A-E-52	太頸壺	—	38.2	—	—	下SE03
200	59A-E-51	細頸壺	—	25.6	5.2	—	下SE03
201	59A-E-20	細頸壺	10.0	—	—	—	下SE03
202	59A-E-50	円窓付壺	11.5	18.8	6.3	24.4	下SE03
203	59A-E-55	甕	22.2	—	7.4	25.6	下SE03
204	59A-E-35	甕	14.5	—	6.5	22.1	下SE03
205	59A-E-37	甕	—	—	6.7	—	下SE03
206	59A-E-18	甕	—	—	11.4	—	下SE03
207	59A-E-39	甕	23.8	—	—	—	下SE03
208	59A-E-54	甕	—	—	8.1	—	下SE03
209	59A-E-31	甕	23.0	—	—	—	下SE03
210	59A-E-27	甕	22.8	—	—	—	下SE03
211	59A-E-38	甕	23.4	—	—	—	下SE03
212	59A-E-43	細頸壺	8.8	20.0	6.2	20.6	下SE03
213	59A-E-41	細頸壺	—	19.8	7.0	—	下SE03
214	59A-E-19	短頸壺	10.0	—	—	—	下SE03
215	59A-E-33	細頸壺	10.0	—	—	—	下SE03
216	59A-E-42	細頸壺	—	18.6	4.0	—	下SE03
217	59A-E-32	甕	19.8	—	—	—	下SE03
218	59A-E-56	甕	24.0	—	—	—	下SE03
219	59A-E-53	甕	19.0	—	6.2	24.2	下SE03
220	59A-E-14	鉢	10.4	—	5.0	5.8	下SE03
221	59A-E-16	太頸壺	17.0	—	—	—	下SE03
222	59A-E-40	甕	17.6	—	4.2	20.2	下SE03
223	60B_2-E-16	高杯	37.6	—	—	—	下SD01
224	59A-E-65	高杯	23.7	—	—	—	下SD01
225	59A-E-62	甕	—	—	10.8	—	下SD01
226	59A-E-63	細頸壺	9.6	—	—	—	下SD01
227	60A_4-E-62	壺	—	—	—	—	下SB01
228	60A_4-E-63	壺	—	—	—	—	下SB01

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
229	60A$_1$-E-64	壺	—	—	—	—	下SB01
230	60A$_1$-E-65	壺	—	—	—	—	下SB01
231	60A$_1$-E-66	甕	—	—	—	—	下SB01
232	60A$_1$-E-28	太頸壺	—	—	—	—	下SB02
233	60A$_1$-E-68	細頸壺	8.0	—	14.5	—	下SB02
234	60A$_1$-E-69	鉢	—	—	—	—	下SB02
235	60A$_1$-E-70	細頸壺	—	—	—	—	下SB02
236	60A$_1$-E-71	壺	—	—	—	—	下SB02
237	60A$_1$-E-72	太頸壺	—	—	—	—	下SB02
238	60A$_1$-E-73	壺	—	—	—	—	下SB02
239	60A$_1$-E-74	甕	—	—	—	—	下SB03
240	60A$_1$-E-75	壺	—	—	—	—	下SB03
241	60A$_1$-E-76	甕	—	—	7.6	—	下SB03
242	60A$_1$-E-77	甕	—	—	—	—	下SB03
243	60A$_1$-E-78	甕	—	—	—	—	下SB05
244	60A$_1$-E-79	甕	—	—	—	—	下SB05
245	60A$_1$-E-80	甕	—	—	—	—	下SB05
246	60A$_1$-E-81	甕	—	—	—	—	下SB05
247	60A$_1$-E-82	甕	—	—	—	—	下SB05
248	60A$_1$-E-83	甕	—	—	—	—	下SB05
249	60A$_1$-E-84	鉢	—	—	—	—	下SB05
250	60A$_1$-E-85	太頸壺	—	—	—	—	下SB05
251	60A$_1$-E-86	甕	—	—	—	—	下SB05
252	60A$_1$-E-87	太頸壺	—	—	—	—	下SB06
253	60A$_1$-E-88	太頸壺	—	—	—	—	下SB06
254	60A$_1$-E-89	太頸壺	—	—	—	—	下SB06
255	60A$_1$-E-90	太頸壺	—	—	—	—	下SB06
256	60A$_1$-E-91	太頸壺	—	—	—	—	下SB06
257	60A$_1$-E-92	太頸壺	—	—	—	—	下SB06
258	60A$_1$-E-93	太頸壺	—	—	—	—	下SB06
259	60A$_1$-E-94	細頸壺	—	—	—	—	下SB06
260	60A$_1$-E-95	細頸壺	20.6	—	—	—	下SB06
261	60A$_1$-E-96	細頸壺	—	—	—	—	下SB06
262	60A$_1$-E-97	太頸壺	—	—	—	—	下SB06
263	60A$_1$-E-98	太頸壺	—	—	—	—	下SB06
264	60A$_1$-E-99	太頸壺	—	—	—	—	下SB06
265	60A$_1$-E-100	壺	—	—	—	—	下SB06
266	60A$_1$-E-101	壺	—	—	—	—	下SB06
267	60A$_1$-E-102	壺	—	—	—	—	下SB06
268	60A$_1$-E-103	細頸壺	—	—	—	—	下SB06
269	60A$_1$-E-104	細頸壺	—	—	—	—	下SB06
270	60A$_1$-E-105	細頸壺	8.8	—	—	—	下SB06
271	60A$_1$-E-106	細頸壺	8.3	—	—	—	下SB06
272	60A$_1$-E-107	細頸壺	8.3	—	—	—	下SB06
273	60A$_1$-E-108	細頸壺	7.8	—	—	—	下SB06
274	60A$_1$-E-109	細頸壺	—	—	—	—	下SB06
275	60A$_1$-E-110	細頸壺	—	—	—	—	下SB06
276	60A$_1$-E-111	細頸壺	—	—	—	—	下SB06
277	60A$_1$-E-112	高杯	—	—	—	—	下SB06
278	60A$_1$-E-113	甕	—	—	6.4	—	下SB06
279	60A$_1$-E-114	甕	—	—	6.3	—	下SB06
280	60A$_1$-E-115	甕	—	—	6.1	—	下SB06
281	60A$_1$-E-116	太頸壺	—	—	—	—	下SB06
282	60A$_1$-E-117	壺	—	—	—	—	下SB06
283	60A$_1$-E-118	太頸壺	—	—	—	—	下SB06
284	60A$_1$-E-119	太頸壺	—	—	—	—	下SB06
285	60A$_1$-E-120	細頸壺	—	—	—	—	下SB06
286	60A$_1$-E-121	壺	—	—	—	—	下SB07
287	60A$_1$-E-122	太頸壺	—	—	—	—	下SB07
288	60A$_1$-E-123	細頸壺	6.8	—	—	—	下SB07
289	60A$_1$-E-124	甕	—	—	—	—	下SB08
290	60A$_1$-E-125	細頸壺	12.0	—	—	—	下SB08
291	60A$_1$-E-126	太頸壺	—	—	—	—	下SB08
292	60A$_1$-E-127	鉢	—	—	—	—	下SB08
293	60A$_1$-E-128	甕	—	—	—	—	下SB08
294	60A$_1$-E-129	甕	—	—	—	—	下SB08
295	60A$_1$-E-130	太頸壺	20.0	—	—	—	下SB08
296	60B$_1$-E-43	太頸壺	—	—	—	—	下SB11
297	60B$_1$-E-44	太頸壺	—	—	—	—	下SB11
298	60B$_1$-E-45	太頸壺	—	—	—	—	下SB11
299	60B$_1$-E-46	細頸壺	—	—	—	—	下SB11
300	60B$_1$-E-47	太頸壺	—	—	—	—	下SB12
301	60B$_1$-E-48	太頸壺	—	—	—	—	下SB12
302	60B$_1$-E-49	太頸壺	—	—	—	—	下SB12
303	60B$_1$-E-50	太頸壺	17.8	—	—	—	下SB12
304	60B$_1$-E-51	太頸壺	—	—	—	—	下SB12
305	60B$_1$-E-52	太頸壺	—	—	—	—	下SB12
306	60B$_1$-E-53	太頸壺	—	—	—	—	下SB12
307	60B$_1$-E-54	太頸壺	—	—	—	—	下SB13
308	60B$_1$-E-55	甕	27.0	—	—	—	下SB13
309	60B$_1$-E-56	太頸壺	—	—	—	—	下SB13
310	60B$_1$-E-57	甕	—	—	—	—	下SB13
311	60B$_1$-E-58	細頸壺	8.0	—	—	—	下SB14
312	60C$_1$-E-1	壺	—	—	—	—	下SB15
313	60C$_9$-E-1	壺	—	—	—	—	下SB50
314	60A$_2$-E-43	太頸壺	—	—	—	—	下SB20
315	60A$_2$-E-44	高杯	—	—	—	—	下SB20
316	60A$_2$-E-45	甕	—	—	—	—	下SB20
317	60A$_2$-E-46	甕	—	—	—	—	下SB20
318	60A$_2$-E-47	壺	—	—	—	—	下SB20
319	60A$_2$-E-48	太頸壺	—	—	—	—	下SB21
320	60A$_2$-E-49	壺	—	—	—	—	下SB21
321	60A$_2$-E-50	壺	—	—	—	—	下SB21
322	60A$_2$-E-51	壺	—	—	—	—	下SB21
323	60A$_2$-E-52	壺	—	—	—	—	下SB22
324	60A$_2$-E-53	壺	—	—	—	—	下SB22
325	60B$_2$-E-17	細頸壺	5.8	—	—	—	下SB26
326	60B$_2$-E-18	細頸壺	7.9	—	—	—	下SB26
327	60A$_1$-E-131	太頸壺	—	—	—	—	下SK01
328	60A$_2$-E-54	太頸壺	24.0	—	—	—	下SB24
329	60A$_2$-E-55	太頸壺	—	—	—	—	下SB24
330	60A$_1$-E-132	壺	—	—	—	—	下SK03
331	60A$_1$-E-133	壺	—	—	—	—	下SK03
332	60A$_1$-E-134	壺	—	—	—	—	下SK03
333	60A$_1$-E-135	壺	—	—	—	—	下SK03
334	60A$_1$-E-136	壺	—	—	—	—	下SK03
335	60B$_1$-E-59	細頸壺	18.0	—	—	—	下SK13
336	60B$_1$-E-60	細頸壺	—	—	—	—	下SK13
337	60A$_2$-E-56	高杯	—	—	—	—	下SK36
338	60B$_2$-E-19	細頸壺	34.0	—	—	—	下SK26
339	60A$_2$-E-57	短頸壺	—	—	—	—	60A$_2$検出
340	60A$_2$-E-58	壺	—	—	—	—	60A$_2$検出
341	60A$_2$-E-59	壺	—	—	—	—	60A$_2$検出
342	60A$_2$-E-60	壺	—	—	—	—	60A$_2$検出
343	60A$_2$-E-61	蓋	10.7	—	—	—	上SE09
344	60A$_2$-E-62	蓋	11.5	—	—	(3.7)	上SE09
345	60A$_2$-E-63	杯	10.6	12.4	4.0	4.7	上SE09
346	60A$_2$-E-64	杯	10.3	12.6	3.6	4.7	上SE09

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
347	60A$_2$-E-65	杯	10.4	12.6	5.2	3.9	上SE09
348	60A$_2$-E-66	杯	10.4	12.6	3.6	4.7	上SE09
349	60A$_2$-E-67	杯	9.6	11.8	3.8	3.8	上SE09
350	60A$_2$-E-68	杯	11.6	14.0	5.0	4.2	上SE09
351	60A$_2$-E-69	蓋	13.2	—	—	—	上SE09
352	60A$_2$-E-70	杯	—	14.0	9.2	—	上SE09
353	60A$_2$-E-71	高杯	10.8	—	12.6	—	上SE09
354	60A$_2$-E-72	平瓶	2.6	—	—	—	上SE09
355	60A$_2$-E-73	高杯	10.8	—	—	—	上SE09
356	60A$_2$-E-74	高杯	—	—	9.8	—	上SE09
357	60A$_2$-E-75	高杯	—	—	10.9	—	上SE09
358	60A$_2$-E-76	高杯	14.8	—	—	—	上SE09
359	60A$_2$-E-77	高杯	15.2	—	—	—	上SE09
360	60A$_2$-E-78	高杯	12.7	—	—	—	上SE09
361	60A$_2$-E-79	甕	13.6	27.6	—	—	上SE09
362	60A$_2$-E-80	甑	25.8	—	—	—	上SE09
363	60A$_2$-E-81	短頸壺	13.1	18.0	—	—	上SE09
364	60A$_2$-E-82	短頸壺	—	15.2	4.2	—	上SE09
365	60A$_2$-E-99	提瓶	19.4	37.6	—	48.8	上SE09
366	60A$_2$-E-83	甕	25.2	—	—	—	上SE09
367	60A$_2$-E-84	甕	21.0	—	—	—	上SE09
368	60A$_2$-E-86	甕	16.0	—	—	—	上SE09
369	60A$_2$-E-87	甕	19.4	—	—	—	上SE09
370	60A$_2$-E-88	甕	19.2	—	—	—	上SE09
371	60A$_2$-E-89	甕	20.4	—	—	—	上SE09
372	58-E-109	杯	8.8	10.2	5.1	2.6	上SE28
373	58-E-114	杯	11.0	—	4.3	4.4	上SE28
374	58-E-112	杯	13.2	—	5.3	4.1	上SE28
375	58-E-108	高杯	—	—	10.7	—	上SE28
376	58-E-119	甕	18.2	—	—	—	上SE28
377	58-E-111	短頸壺	18.5	20.0	—	—	上SE28
378	58-E-116	広口壺	29.6	—	—	—	上SE28
379	58-E-110	甕	22.0	—	—	—	上SE28
380	58-E-132	甕	16.3	—	—	—	上SE28
381	58-E-123	甕	16.4	—	—	—	上SE28
382	58-E-128	甕	17.1	—	—	—	上SE28
383	58-E-117	甕	16.0	—	—	—	上SE28
384	58-E-118	甕	22.2	—	—	—	上SE28
385	58-E-115	甕	20.0	—	—	—	上SE28
386	58-E-113	甕	23.3	—	—	—	上SE28
387	58-E-120	甕	15.1	—	—	—	上SE28
388	58-E-129	甕	20.6	—	—	—	上SE28
389	58-E-122	甕	21.0	—	—	—	上SE28
390	59D-E-29	蓋	11.5	—	—	(4.0)	上SE31
391	59D-E-27	蓋	11.3	—	—	4.2	上SE31
392	59D-E-19	蓋	11.0	—	—	4.1	上SE31
393	59D-E-22	杯	10.4	12.2	5.0	4.5	上SE31
394	59D-E-23	杯	10.4	12.0	4.0	4.1	上SE31
395	59D-E-21	杯	11.9	14.2	5.0	4.5	上SE31
396	59D-E-26	鍑	—	8.8	—	—	上SE31
397	59D-E-24	壺	—	—	—	—	上SE31
398	59D-E-25	甕	17.8	—	—	—	上SE31
399	59D-E-28	甕	19.9	—	—	—	上SE31
400	59D-E-20	甕	16.2	—	—	—	上SE31
401	59D-E-15	蓋	12.0	—	—	(3.9)	上SE32
402	59D-E-11	蓋	11.8	—	—	(4.0)	上SE32
403	59D-E-14	蓋	11.4	—	—	3.5	上SE32
404	59D-E-12	杯	9.2	10.8	5.0	4.2	上SE32

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
405	59D-E-13	杯	10.0	11.8	2.1	4.6	上SE32
406	59D-E-9	甕	15.6	—	—	—	上SE32
407	59D-E-16	甕	15.5	—	—	—	上SE32
408	59D-E-18	甕	19.1	—	—	—	上SE32
409	59D-E-17	甕	15.5	—	—	—	上SE32
410	59D-E-10	甕	—	—	—	—	上SE32
411	59C-E-18	蓋	12.2	—	—	(3.7)	上SK135
412	59C-E-15	杯	9.3	11.0	4.9	3.1	上SK135
413	59C-E-16	杯	9.9	11.6	3.5	4.1	上SK135
414	59C-E-17	杯	12.5	14.2	5.2	5.0	上SK135
415	59C-E-20	壺	—	—	(4.5)	—	上SK135
416	59C-E-19	杯	10.4	12.6	—	—	上SK135
417	59C-E-21	甕	15.6	—	—	—	上SK135
418	59C-E-23	甕	20.0	—	—	—	上SK135
419	59C-E-22	甕	16.8	—	—	—	上SK135
420	59C-E-26	甑	24.5	32.0	12.6	30.0	上SK135
421	59C-E-25	甕	20.0	—	—	—	上SK135
422	59B-E-46	甕	17.4	—	—	—	上SE21
423	59B-E-24	甕	—	—	—	—	上SE21
424	59B-E-25	甕	—	—	—	—	上SE21
425	60C$_2$-E-6	蓋	14.0	—	—	2.0	上SE13
426	60C$_2$-E-7	杯	9.3	10.6	5.0	3.2	上SE13
427	60C$_2$-E-8	杯	7.6	10.0	3.4	3.5	上SE13
428	60C$_2$-E-9	杯	8.9	11.2	6.0	2.8	上SE13
429	60C$_2$-E-10	高杯	11.5	—	8.5	7.7	上SE13
430	60C$_2$-E-11	甕	15.6	17.8	—	18.3	上SE13
431	60C$_2$-E-12	甕	13.8	15.8	—	16.4	上SE13
432	60C$_2$-E-13	甕	17.3	—	—	—	上SE13
433	60C$_2$-E-14	甕	18.7	—	—	—	上SE13
434	60C$_2$-E-15	甕	22.1	—	—	—	上SE13
435	60A$_2$-E-90	甕	32.0	40.2	—	—	上SE06
436	59B-E-35	杯	11.5	13.2	6.7	(3.5)	上SE22
437	59B-E-50	杯	10.0	—	7.1	2.7	上SE22
438	59B-E-49	杯	—	—	11.6	—	上SE22
439	59B-E-29	壺	—	—	13.7	—	上SE22
440	59B-E-41	鉢	14.7	—	—	—	上SE22
441	59B-E-5	高杯	—	—	9.2	—	上SE23
442	59B-E-26	鍑	—	9.4	—	—	上SE23
443	59B-E-51	甕	20.0	—	—	—	上SE23
444	59D-E-7	蓋	10.4	—	—	—	上SD94
445	59D-E-8	杯	12.3	14.0	6.0	4.0	上SD94
446	58-E-205	杯	14.0	16.2	8.0	4.3	上SD94
447	59E-E-1	杯	11.0	12.8	—	(4.5)	上SE33
448	60E-E-1	蓋	10.0	—	—	3.6	上SX01
449	60E-E-2	蓋	9.1	—	—	4.5	上SX01
450	60E-E-3	杯	8.6	10.6	3.8	3.0	上SX01
451	60E-E-4	高杯	13.5	—	7.9	7.0	上SX01
452	60E-E-5	鉢	10.9	—	2.5	4.2	上SX01
453	60E-E-6	杯	10.0	—	3.6	3.5	上SX01
454	60E-E-7	蓋	14.3	—	—	2.9	上SX01
455	60E-E-8	杯	11.0	—	3.8	4.3	上SX01
456	60E-E-9	広口壺	27.0	—	—	—	上SX01
457	60E-E-10	杯	10.7	—	5.4	4.2	上SX01
458	60E-E-11	鍑	—	7.1	—	—	上SX01
459	60E-E-12	甕	21.2	—	—	—	上SX01
460	60E-E-13	甕	18.6	—	—	—	上SX01
461	60E-E-14	甕	22.0	25.0	—	—	上SX01
462	60E-E-15	甕	24.3	—	—	—	上SX01

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
463	60E-E-16	甕	17.4	—	—	—	上SX01
464	60E-E-17	甕	16.0	—	—	—	上SX01
465	60E-E-18	甕	18.0	—	—	—	上SX01
466	60E-E-19	甕	20.9	—	—	—	上SX01
467	60D-E-1	蓋	—	—	—	—	上SE14
468	60D-E-2	蓋	22.0	—	—	—	上SE14
469	60D-E-3	杯	13.0	—	7.4	3.2	上SE14
470	60D-E-4	杯	11.0	—	—	(4.5)	上SE14
471	60D-E-5	杯	—	—	13.3	—	上SE14
472	60D-E-6	甕	25.8	—	—	—	上SE14
473	60D-E-7	甕	59.4	—	—	—	上SE14
474	60D-E-8	甕	13.4	—	—	—	上SE14
475	60D-E-9	甕	(13.6)	—	—	—	上SE14
476	60D-E-10	甕	(14.7)	—	—	—	上SE14
477	59A-E-74	蓋	(15.6)	—	—	—	上SK40
478	59A-E-76	甕	20.2	—	—	—	上SK40
479	59A-E-77	甕	20.7	—	—	—	上SK40
480	60G-E-1	杯	12.0	—	5.7	4.0	上SD60
481	60G-E-2	甕	18.9	—	—	—	上SD60
482	60G-E-3	甑	29.7	—	—	—	上SD60
483	60G-E-4	甕	26.3	35.0	—	—	上SD60
484	60A$_2$-E-91	蓋	9.6	—	—	3.6	上SK20
485	60A$_2$-E-92	杯	(10.3)	(12.4)	—	—	上SK20
486	60A$_2$-E-93	杯	9.7	11.4	—	—	上SK20
487	60A$_2$-E-94	高杯	14.2	—	—	—	上SK20
488	60A$_2$-E-95	高杯	—	14.2	—	—	上SK20
489	60A$_2$-E-96	甕	14.5	—	—	—	上SK20
490	60A$_2$-E-97	甕	22.0	—	—	—	上SK20
491	60A$_2$-E-98	甕	29.9	—	—	—	上SK20
492	60H-E-1	杯	11.0	—	4.1	4.5	上SE25
493	60H-E-2	杯	12.2	—	—	—	上SE25
494	60H-E-3	鉢	15.2	—	—	—	上SE25
495	60H-E-4	壺	—	—	—	—	上SE25
496	60H-E-5	蓋	15.5	—	—	—	上SE25
497	60H-E-6	蓋	15.2	—	—	—	上SE25
498	60H-E-7	杯	15.8	—	11.3	4.2	上SE25
499	60H-E-8	甑	31.4	—	—	—	上SE25
500	60H-E-9	甕	21.6	—	—	—	上SE25
501	60H-E-10	甕	22.4	—	—	—	上SE25
502	60H-E-11	甕	16.0	—	—	—	上SE25
503	60H-E-12	甕	17.0	—	—	—	上SE25
504	60H-E-13	蓋	16.5	—	—	—	上SK108
505	60H-E-14	蓋	17.2	—	—	—	上SK108
506	60H-E-15	杯	15.0	—	10.9	4.2	上SK108
507	60H-E-16	杯	15.6	—	11.4	4.0	上SK108
508	60H-E-17	杯	11.6	—	5.6	3.6	上SK108
509	60H-E-18	短頸壺	8.0	14.2	7.1	12.2	上SK108
510	60H-E-19	甕	20.7	—	—	—	上SK108
511	60H-E-20	甕	29.4	—	—	—	上SK108
512	60H-E-21	壺	—	—	6.0	—	上SK118
513	60H-E-22	壺	—	—	8.2	—	上SK118
514	60H-E-23	甕	29.2	—	—	—	上SK118
515	60H-E-24	甕	30.8	—	—	—	上SK118
516	60D-E-11	蓋	16.8	—	—	3.5	上SD41
517	60D-E-12	蓋	14.8	—	—	3.0	上SD41
518	60D-E-13	蓋	17.2	—	—	4.3	上SD41
519	60D-E-14	蓋	14.5	—	—	3.4	上SD41
520	60D-E-15	蓋	16.3	—	—	—	上SD41
521	60D-E-16	杯	8.7	10.6	2.5	3.3	上SD41
522	60D-E-17	杯	14.2	—	9.6	4.0	上SD41

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
523	60D-E-18	杯	15.8	—	11.6	4.4	上SD41
524	60D-E-19	杯	15.2	—	10.7	4.1	上SD41
525	60D-E-20	杯	16.2	—	11.7	3.8	上SD41
526	60D-E-21	杯	12.8	—	6.8	3.9	上SD41
527	60D-E-22	杯	9.8	—	6.2	2.9	上SD41
528	60D-E-23	杯	12.4	—	5.5	4.4	上SD41
529	60D-E-24	杯	12.0	—	5.4	(4.8)	上SD41
530	60D-E-25	杯	10.8	—	4.0	4.3	上SD41
531	60D-E-26	杯	—	—	7.8	—	上SD41
532	60D-E-27	鍋	—	9.0	—	—	上SD41
533	60D-E-28	杯	15.5	—	10.8	—	上SD41
534	60D-E-29	高杯	—	—	9.9	—	上SD41
535	60D-E-30	甕	18.3	—	—	—	上SD41
536	60D-E-31	短頸壺	5.6	11.0	—	—	上SD41
537	60D-E-32	鉢	32.4	—	—	—	上SD41
538	60D-E-33	杯	18.4	—	13.0	4.5	上SD41
539	60D-E-34	甕	15.2	—	—	—	上SD41
540	60D-E-35	甕	21.4	—	—	—	上SD41
541	60D-E-36	甕	25.9	—	—	—	上SD41
542	60D-E-37	甕	25.7	—	—	—	上SD41
543	60D-E-38	甕	24.3	—	—	—	上SD41
544	60H-E-25	蓋	18.6	—	—	—	上SE26
545	60H-E-26	杯	16.7	—	13.6	3.8	上SE26
546	60H-E-27	甑	26.0	—	—	—	上SE26
547	60H-E-28	杯	15.6	—	—	—	上SE29
548	60H-E-29	杯	19.8	—	—	—	上SE29
549	60H-E-30	蓋	13.4	—	—	—	上SE29
550	60H-E-31	杯	—	—	11.0	—	上SE29
551	60H-E-32	提瓶	11.6	—	—	—	上SE29
552	60H-E-33	蓋	15.2	—	—	3.45	上SD72
553	60H-E-34	蓋	18.1	—	—	—	上SD72
554	60H-E-35	甕	28.4	—	—	—	上SD72
555	60K-E-1	蓋	—	—	—	—	上SD97
556	60K-E-2	蓋	18.8	—	—	—	上SD97
557	60K-E-3	長頸壺	7.0	—	—	—	上SD97
558	60K-E-4	盤	—	—	—	—	上SD97
559	60K-E-5	甕	21.8	—	—	—	上SD97
560	60K-E-6	甕	17.0	—	—	—	上SD97
561	60K-E-7	瓦	—	8.4	—	2.6	上SD97
562	60K-E-8	長頸壺	—	—	9.8	—	上SD97
563	60K-E-9	長頸壺	—	—	8.0	—	上SD97
564	60E-E-20	杯	12.0	—	4.9	3.7	上SD49
565	60E-E-21	杯	12.7	—	6.5	3.7	上SD49
566	60E-E-22	杯	14.7	—	7.0	4.0	上SD49
567	60E-E-23	杯	12.5	—	4.4	4.4	上SD49
568	60E-E-24	杯	10.0	—	8.0	3.9	上SD49
569	60E-E-25	杯	17.0	—	10.0	5.3	上SD49
570	60E-E-26	杯	20.6	—	15.8	4.0	上SD49
571	60E-E-27	杯	9.0	—	—	—	上SD49
572	60E-E-28	甑	32.2	37.4	—	—	上SD49
573	60E-E-29	長頸壺	—	—	8.8	—	上SD49
574	60E-E-30	壺	—	—	5.6	—	上SD49
575	60E-E-31	短頸壺	14.6	16.4	—	—	上SD49
576	60E-E-32	甕	13.1	—	5.5	11.9	上SD49
577	60A$_1$-E-137	蓋	17.6	—	—	5.2	上SK06
578	60A$_1$-E-138	杯	12.5	—	5.5	3.9	上SK06
579	60A$_1$-E-139	杯	13.4	—	7.0	4.2	上SK06
580	60A$_1$-E-140	杯	12.0	—	6.8	3.9	上SK06
581	60A$_1$-E-141	杯	12.6	—	7.6	3.7	上SK06
582	60A$_1$-E-142	杯	12.3	—	6.8	4.4	上SK06

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
583	60A$_4$-E-143	杯	11.4	—	6.3	4.0	上SK06
584	60A$_4$-E-144	杯	11.7	—	6.3	3.5	上SK06
585	60A$_4$-E-145	長頸壺	—	—	—	—	上SK06
586	60A$_4$-E-146	杯	15.6	—	—	—	上SK06
587	60A$_4$-E-147	盤	16.4	—	8.4	3.1	上SK06
588	60K-E-107	蓋	—	—	—	—	上SD98
589	60K-E-11	蓋	15.5	—	—	—	上SD98
590	60K-E-12	杯	12.0	—	6.5	4.0	上SD98
591	60K-E-13	杯	—	—	10.6	—	上SD98
592	60K-E-14	杯	15.2	—	11.8	4.9	上SD98
593	60K-E-15	盤	13.2	—	9.3	2.7	上SD98
594	60K-E-16	盤	15.7	—	—	—	上SD98
595	60K-E-17	盤	—	—	20.8	—	上SD98
596	60F-E-1	杯	13.1	—	6.8	4.0	上SK90
597	60F-E-2	杯	13.6	—	10.1	4.1	上SK90
598	60F-E-3	杯	13.4	—	9.7	3.6	上SK90
599	60F-E-4	甕	24.4	—	—	—	上SK90
600	60F-E-5	甕	26.6	—	—	—	上SK90
601	60F-E-6	甕	26.0	—	—	—	上SK90
602	60F-E-7	甕	23.1	—	—	—	上SK90
603	60F-E-8	土製品	—	6.2	—	1.2	上SK90
604	60A$_4$-E-148	盤	14.2	—	7.5	2.7	上SE01
605	60A$_4$-E-149	盤	14.3	—	8.3	2.4	上SE01
606	60A$_4$-E-150	杯	—	—	10.4	—	上SE01
607	60A$_4$-E-151	杯	10.5	—	6.2	3.3	上SE01
608	60A$_4$-E-152	杯	11.2	—	4.1	4.1	上SE01
609	60A$_4$-E-153	杯	12.3	—	5.7	4.1	上SE01
610	60A$_4$-E-154	長頸壺	7.3	—	—	—	上SE01
611	60A$_4$-E-155	水注	—	4.0	—	2.0	上SE01
612	60A$_4$-E-156	甕	15.6	—	—	—	上SE01
613	60A$_4$-E-157	甕	16.6	—	—	—	上SE01
614	60A$_4$-E-158	甕	22.2	—	—	—	上SE01
615	60A$_4$-E-159	甕	—	—	8.2	—	上SE01
616	60A$_4$-E-160	土製品	—	3.6	—	1.3	上SE01
617	60B$_2$-E-20	皿	14.2	—	7.4	3.5	上SE10
618	60B$_2$-E-21	長頸壺	—	17.0	8.5	—	上SE10
619	60H-E-36	皿	15.3	—	8.1	2.3	上SE24
620	60H-E-37	椀	13.9	—	8.0	4.7	上SE24
621	60H-E-38	蓋	14.2	—	—	—	上SE24
622	60H-E-39	蓋	14.1	—	—	—	上SE24
623	60H-E-40	長頸壺	8.9	—	—	—	上SE24
624	60H-E-41	蓋	10.4	—	—	—	上SE24
625	60H-E-42	椀	11.0	—	5.8	3.9	上SE27
626	60H-E-43	椀	14.8	—	6.9	6.3	上SE27
627	60H-E-44	皿	14.0	—	7.2	2.7	上SE27
628	60H-E-45	皿	10.8	—	—	—	上SE27
629	60H-E-46	甕	19.4	—	—	—	上SE27
630	60H-E-47	甕	18.2	—	—	—	上SE27
631	59A-E-58	椀	10.3	—	5.4	3.2	上SE11
632	59A-E-57	椀	10.5	—	5.1	3.2	上SE11
633	59A-E-59	椀	—	—	5.7	—	上SE11
634	60E-E-33	椀	15.8	—	6.1	5.7	上SE16
635	60E-E-34	椀	15.4	—	7.3	5.0	上SE16
636	60E-E-35	椀	16.6	—	—	—	上SE16
637	60E-E-36	椀	14.2	—	—	—	上SE16
638	60E-E-37	椀	—	—	6.9	—	上SE16
639	60E-E-38	椀	—	—	6.7	—	上SE16
640	60E-E-39	椀	10.6	—	5.-	3.7	上SE16
641	60E-E-40	皿	15.2	—	6.4	4.3	上SE16

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
642	60E-E-41	杯	10.3	—	6.9	4.6	上SE16
643	60E-E-42	杯	—	—	7.8	—	上SE16
644	60E-E-43	杯	—	—	6.5	—	上SE16
645	60E-E-44	甕	—	—	—	—	上SE16
646	60E-E-45	椀	14.9	—	7.2	5.4	上SE17
647	60E-E-46	椀	15.2	—	—	—	上SE17
648	60E-E-47	椀	—	—	6.8	—	上SE17
649	60E-E-48	椀	—	—	4.9	—	上SE17
650	60E-E-49	耳皿	—	—	5.0	—	上SE17
651	60E-E-50	広口瓶	20.8	—	—	—	上SE17
652	60E-E-51	広口瓶	—	—	18.4	—	上SE17
653	60E-E-52	甕	—	—	—	—	上SE17
654	60E-E-53	椀	—	—	—	—	上SE17
655	60A$_1$-E-161	椀	16.0	—	7.6	5.1	上SK05
656	60A$_1$-E-162	椀	16.4	—	6.6	5.1	上SK05
657	60A$_1$-E-163	椀	8.4	—	4.1	2.6	上SK05
658	60E-E-54	椀	15.1	—	7.0	5.0	上SD49
659	60E-E-55	椀	15.7	—	7.7	5.1	上SD49
660	60E-E-56	椀	17.1	—	—	—	上SD49
661	60E-E-57	椀	—	—	8.3	—	上SD49
662	60E-E-58	椀	—	—	7.2	—	上SD49
663	60E-E-59	椀	—	—	8.2	—	上SD49
664	60B$_5$-E-59	椀	18.6	—	5.9	4.54	上SE04
665	60B$_5$-E-60	椀	14.4	—	6.7	5.0	上SE04
666	60B$_5$-E-61	椀	—	—	5.6	—	上SE04
667	60B$_5$-E-62	皿	7.2	—	5.2	1.5	上SE04
668	60B$_5$-E-63	皿	8.0	—	4.8	1.8	上SE04
669	60B$_5$-E-64	皿	7.2	—	4.3	1.4	上SE04
670	59A-E-61	皿	9.6	—	4.4	1.4	上SE12
671	60E-E-105	椀	14.6	—	7.1	5.1	上SE15
672	60E-E-106	椀	12.9	—	5.7	4.6	上SE15
673	60E-E-107	椀	13.4	—	6.0	5.3	上SE15
674	60E-E-108	椀	—	—	6.5	—	上SE15
675	60E-E-109	椀	—	—	6.6	—	上SE15
676	60E-E-110	皿	7.4	—	3.7	2.1	上SE15
677	60E-E-111	皿	7.1	—	5.1	1.7	上SE15
678	60F-E-9	椀	14.9	—	6.1	5.2	上SE18
679	60F-E-10	椀	—	—	6.7	—	上SE18
680	60F-E-11	皿	7.7	—	4.8	1.5	上SE18
681	60F-E-12	皿	11.2	—	4.9	2.6	上SE18
682	60F-E-13	皿	7.3	—	5.0	1.7	上SE18
683	60F-E-14	椀	—	—	7.4	—	上SE20
684	60F-E-15	椀	—	—	4.9	—	上SE20
685	60F-E-16	皿	7.1	—	4.3	(1.7)	上SE20
686	60F-E-17	鍋	—	—	—	—	上SE20
687	60F-E-18	甕	22.9	—	—	—	上SE20
688	60A$_2$-E-100	陶錘	—	2.1	—	2.8	上SK19
689	60F-E-19	皿	7.7	—	5.2	1.8	上SK77
690	60F-E-20	皿	7.9	—	5.2	1.8	上SK77
691	60F-E-21	壺	—	—	10.6	—	上SK77
692	60F-E-22	椀	—	—	5.1	—	上SK78
693	60F-E-23	椀	—	—	5.7	—	上SK78
694	60J-E-1	椀	—	—	8.4	—	上SK144
695	60J-E-2	椀			5.6		上SK144
696	60J-E-3	皿	8.2	—	5.0	1.5	上SK144
697	60A$_1$-E-164	椀	—	—	7.2	—	上SD05
698	60A$_1$-E-165	椀	—	—	6.3	—	上SD05
699	60A$_1$-E-166	椀	—	—	7.7	—	上SD05
700	60C$_2$-E-16	椀	16.0	—	6.9	5.4	上SD15

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
701	60C_2-E-17	椀	13.2	—	5.1	5.8	上SD15
702	60C_2-E-18	椀	—	—	6.9	—	上SD15
703	60C_2-E-19	椀	—	—	7.1	—	上SD15
704	60C_2-E-20	椀	—	—	6.8	—	上SD15
705	60C_2-E-21	椀	—	—	7.0	—	上SD15
706	60C_2-E-22	椀	—	—	7.0	—	上SD15
707	60C_2-E-23	椀	—	—	6.8	—	上SD15
708	60C_2-E-24	椀	—	—	6.0	—	上SD15
709	60C_2-E-25	椀	—	—	7.2	—	上SD15
710	60C_2-E-26	鉢	—	—	13.3	—	上SD15
711	60C_2-E-27	皿	7.6	—	4.1	2.6	上SD15
712	60C_2-E-28	皿	7.8	—	4.7	1.9	上SD15
713	60C_2-E-29	皿	9.2	—	5.5	1.7	上SD15
714	60C_2-E-30	皿	8.6	—	4.5	2.2	上SD15
715	60C_2-E-31	皿	—	—	3.3	—	上SD15
716	60C_2-E-32	鍋	20.8	28.6	—	—	上SD15
717	60D-E-39	椀	14.7	—	6.8	5.1	上SD43
718	60D-E-40	椀	13.9	—	6.5	5.2	上SD43
719	60D-E-41	椀	14.0	—	6.0	5.6	上SD43
720	60D-E-42	椀	15.4	—	5.7	5.2	上SD43
721	60D-E-43	椀	14.8	—	—	—	上SD43
722	60D-E-44	椀	12.5	—	—		上SD43
723	60D-E-45	椀	—	—	7.7	—	上SD43
724	60D-E-46	皿	7.1	—	4.5	1.7	上SD43
725	60D-E-47	皿	7.5	—	4.0	1.7	上SD43
726	60D-E-48	鉢	28.2	—	—	—	上SD43
727	60D-E-49	壺	20.2	—	—	—	上SD43
728	60D-E-50	壺	—	—	—	—	上SD43
729	60E-E-60	椀	15.4	—	7.2	5.1	上SD50
730	60E-E-61	椀	13.6	—	5.9	5.2	上SD50
731	60E-E-62	椀	13.6	—	6.3	4.9	上SD50
732	60E-E-63	椀	14.8	—	6.4	5.6	上SD50
733	60E-E-64	椀	13.4	—	6.4	5.9	上SD50
734	60E-E-65	椀	13.8	—	7.0	5.3	上SD50
735	60E-E-66	椀	15.4	—	6.7	5.4	上SD50
736	60E-E-67	椀	13.2	—	5.0	5.4	上SD50
737	60E-E-68	椀	13.1	—	3.8	5.1	上SD50
738	60E-E-69	椀	12.9	—	—	—	上SD50
739	60E-E-70	椀	14.6	—	—	—	上SD50
740	60E-E-71	椀	14.2	—	—	—	上SD50
741	60E-E-72	皿	7.9	—	4.4	2.0	上SD50
742	60E-E-73	皿	7.9	—	4.6	1.9	上SD50
743	60E-E-74	皿	7.7	—	4.6	1.8	上SD50
744	60E-E-75	皿	7.5	—	3.9	1.9	上SD50
745	60E-E-76	皿	7.7	—	4.6	1.5	上SD50
746	60E-E-77	蓋	—	—	4.8	—	上SD50
747	60E-E-78	蓋	—	—	4.1	—	上SD50
748	60E-E-79	鉢	13.1	—	—	—	上SD50
749	60E-E-80	鉢	—	—	14.0	—	上SD50
750	60E-E-81	壺	—	—	—	—	上SD50
751	60E-E-82	壺	—	—	11.8	—	上SD50
752	60E-E-83	杯	—	—	5.1	—	上SD50
753	60E-E-84	卸皿	14.7	—	10.0	4.4	上SD50
754	60E-E-85	皿	—	—	3.4	—	上SD50
755	60E-E-86	鍋	—	—	—	—	上SD50
756	60E-E-87	鍋	—	—	—	—	上SD50
757	60E-E-88	釜	—	—	—	—	上SD50
758	60J-E-4	椀	14.8	—	6.5	5.9	上SD63
759	60J-E-5	椀	14.2	—	7.0	5.1	上SD63
760	60J-E-6	椀	12.8	—	4.0	5.3	上SD63
761	60J-E-7	椀	14.4	—	—	—	上SD63
762	60J-E-8	卸皿	17.7	—	14.8	3.6	上SD63
763	60G-E-5	椀	—	—	8.2	—	上SD59
764	60G-E-6	椀	—	—	7.5	—	上SD59
765	60K-E-18	天目	13.0	—	—	—	上SK171
766	60K-E-19	皿	9.8	—	4.8	2.5	上SK171
855	60K-E-20	甕	—	5.6	—	—	上SD100
856	60D-E-58	杯	—	—	10.3	—	60D検出

加工円盤

番号	登録番号	長径	短径	重量	出土地点
767	60F-E-24	3.65	3.13	13.1	上SE20
768	60F-E-25	2.93	2.54	12.0	上SE20
769	60D-E-51	2.92	2.12	11.5	上SE14
770	60D-E-52	2.73	2.33	11.9	60D検出
771	60E-E-89	2.64	2.78	10.1	上SE50
772	60E-E-90	3.12	2.24	10.5	上SE50
773	60E-E-91	2.85	2.53	11.9	上SE50
774	60E-E-92	2.12	1.90	7.0	上SE50
775	60E-E-93	2.58	2.24	9.4	上SE50
776	60E-E-94	2.19	1.82	7.0	上SE50
777	60J-E-9	3.24	2.85	11.1	上SK144
778	60E-E-95	3.91	2.79	15.4	60E検出
779	60E-E-96	1.87	2.44	7.9	60E検出
780	60E-E-97	2.0	2.14	5.8	60E検出
781	60E-E-98	2.53	2.55	11.2	60E検出
782	60G-E-7	3.65	2.77	9.8	60G検出
783	60G-E-8	3.04	2.75	12.1	60G検出
784	60H-E-48	1.93	1.95	3.3	60H検出
785	60D-E-53	4.87	5.55	41.7	上SD43
786	60J-E-10	4.62	4.39	22.5	上SD63
787	60J-E-11	4.04	3.55	17.7	上SD63
788	60D-E-54	4.54	3.83	20.4	60D検出
789	60E-E-99	4.15	3.38	18.0	60E検出
790	60G-E-9	5.12	4.20	29.4	60G検出
791	60H-E-49	4.22	3.90	20.9	60H検出
792	60D-E-55	1.85	2.08	7.2	60D検出
793	60E-E-100	2.18	2.68	4.4	上SD50
794	59C-E-37	2.28	2.19	5.4	上SD55
795	60F-E-26	2.01	1.97	11.5	上SE19
796	60J-E-12	2.64	3.05	14.1	上SK144
797	60J-E-13	2.20	2.69	14.3	上SK144
798	60H-E-50	2.10	1.98	7.3	60H検出
799	60E-E-101	2.40	2.47	7.2	60E検出
800	60L-E-1	2.18	1.68	5.0	60L検出
801	60D-E-56	1.98	1.88	4.4	60D検出
802	60E-E-102	2.52	2.39	7.8	60E検出
803	60F-E-27	2.69	2.89	10.7	60F検出
804	60F-E-28	2.25	2.66	7.5	60F検出
805	60H-E-51	2.63	3.44	9.8	60H検出
806	60K-E-20	3.03	3.07	8.6	60K検出
807	60J-E-14	4.12	4.03	20.8	60J検出
808	60C_2-E-33	3.77	4.01	15.4	上SD15
809	60J-E-15	3.17	3.44	8.9	60J検出
810	60E-E-103	2.98	2.48	13.0	上SE16
811	60E-E-104	2.75	2.30	10.9	上SE16

番号	登録番号	長径	短径	重量	出土地点
812	60D-E-57	3.47	3.06	10.4	60D検出
813	60G-E-10	3.17	3.12	10.4	60G検出
814	60G-E-11	3.40	2.76	14.4	60G検出
815	60G-E-12	3.49	3.17	10.6	60G検出
816	60G-E-13	5.67	4.04	26.0	60G検出
817	60G-E-14	5.53	4.0	24.1	60G検出

石器

番号	登録番号	長径	短径	重量	出土地点
818	$60A_1$-S-1	5.48	1.29	3.23	$60A_1$検出
819	$60B_1$-S-1	3.44	1.61	2.68	SK13
820	$60B_1$-S-2	3.44	1.66	2.80	$60B_1$検出
821	$60B_1$-S-3	3.57	1.40	2.20	$60B_1$検出
822	60F-S-1	(3.09)	1.42	2.28	60F検出
823	$60A_1$-S-2	(2.69)	1.09	1.80	$60A_1$検出
824	$60A_2$-S-1	3.27	1.15	2.14	$60A_2$検出
825	$60B_1$-S-1	(2.31)	1.30	0.92	$60B_2$検出
826	$60A_1$-S-3	2.30	1.57	1.50	$60A_1$SK10
827	$60A_1$-S-4	2.82	1.61	2.11	下SK10
828	$60B_1$-S-4	3.47	1.24	1.82	下SB13
829	59C-S-2	3.14	1.37	1.46	59C検出
830	59A-S-2	3.41	1.28	2.41	59ASK02
831	$59B_1$-S-2	(3.80)	1.15	2.36	59B検出
832	$60A_1$-S-5	4.60	1.54	3.21	$60A_1$検出
833	$60A_1$-S-6	(3.54)	1.77	2.04	下SB05
834	$60C_2$-S-1	(1.81)	(1.66)	1.29	下SK46
835	$60A_1$-S-7	(2.67)	1.94	2.99	$60A_1$検出
836	$60A_1$-S-8	(2.03)	0.24	0.18	$60A_1$検出
837	$60A_1$-S-9	1.99	0.68	1.60	$60A_1$検出
838	$60A_2$-S-2	0.43	0.27	0.08	上SD18
839	$60B_1$-S-5	(12.87)	6.27	644	$60B_1$検出
840	59A-S-5	14.43	6.72	566	59A検出
841	60K-S-1	11.08	3.20	60.14	上SD100
842	$60B_1$-S-6	3.77	2.73	13.8	$60B_1$検出
843	$60B_2$-S-2	4.34	3.62	28.6	$60B_2$検出
844	$60B_1$-S-7	4.63	3.26	25.2	$60B_1$検出
845	$60A_1$-S-10	5.08	2.74	25.4	下SB04
846	59A-S-3	6.70	(3.00)	41.0	59ASK02
847	$60A_2$-S-3	11.33	5.44	346	下SB22
848	$60A_1$-S-11	10.17	4.62	236	$60A_1$検出
849	$60A_2$-S-4	9.07	4.63	2848	上SE09
850	60E-S-1	8.30	3.30	107	上SD50
851	$60B_1$-S-8	11.20	4.61	190	上SK13
852	$60B_1$-S-9	7.10	5.42	218	下SB13
853	$60A_1$-S-12	7.97	4.13	128	$60A_1$検出
854	$60B_1$-S-10	16.15	9.95	1135	SB12

製塩土器

番号	登録番号	タテ(cm)	ヨコ(cm)	遺構番号
867	$60B_2$-E-22	(5.76)	1.59	SE10
868	59B-E-52	(3.48)	1.66	SE22
869	59B-E-33	(3.47)	1.19	〃
870	59A-E-262	(4.12)	1.87	SK49
871	$60C_3$-E-34	(3.49)	1.60	SK57
872	58-P-68	(4.73)	1.64	58T.P_4検出
873	60F-E-29	(3.34)	0.88	60F0SD11
874	$60A_2$-E-100	(3.56)	1.45	SE09
875	59A-E-263	4.83	1.49	59AP113
876	59A-E-211	7.40	1.25	59A検出
877	59A-E-216	(5.38)	1.55	59A検出
878	59A-E-212	6.98	1.59	59A検出
879	59A-E-219	(6.46)	1.68	59AL検出
880	$60C_3$-E-2	(5.59)	1.63	$60C3_3$AD13
881	59B-E-8	5.84	1.61	59B検出
882	60G-E-15	(7.13)	1.94	SD59
883	60G-E-15	—	—	〃
884	60E-E-112	(3.19)	1.19	60E0表土
885	59B-E-45	(3.46)	1.26	59B0SK53
886	58-P-158	(3.48)	(1.22)	58BT.P6検出
887	60H-E-52	(3.47)	1.16	60BH0検出Ⅰ
888	60F-E-29	(3.40)	1.14	SD55
889	60J-E-8	3.65	1.19	60J検出

木製品

番号	登録番号	タテ(cm)	ヨコ(cm)	厚さ(g)	遺構番号
889	59D-W-2	(21.65)	11.27	3.63	SE31
890	$60A_2$-W-2	(18.10)	(8.10)	3.70	SE09
891	$60A_2$-W-3	18.25	8.81	1.88	SE09
892	59D-W-4	34.90	1.81	1.41	SE32
893	59D-W-3	21.82	0.58	0.47	SE32
894	$60A_2$-W-1	14.15	6.35	2.25	SE07
895	60K-W-1	21.80	1.75	0.66	SD98
896	60H-W-1	54.60	42.20	5.60	SE24

挿図

土器

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
59-1	$60A_1$-E-167	高杯	23.2	—	—	—	上SD10
-2	$60A_1$-E-168	甕	13.2	—	—	—	上SD10
-3	$60B_2$-E-23	ヒサゴ壺	8.6	—	—	—	下SD01
-4	$60B_1$-E-65	高杯	12.8	—	—	—	下SE03
-5	$60B_1$-E-66	壺	—	—	—	—	上SE03
-6	$60A_1$-E-169	甕	13.0	—	—	—	上SD01
-7	$60A_1$-E-170	甕	18.4	—	—	—	上SD09
62-1	$60C_2$-E-34	甕	—	—	—	—	上SD15

特殊遺物・その他

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
855	60K-E-29	甕	—	—	—	—	上SD100
856	60D-E-74	椀	—	—	(26.2)	—	60D検出
857	60K-W-2	木簡	—	1.8	—	22.5	上SD98
858	60H-S-1	紡錘車	—	8.1	—	3.0	60H検出
859	60F-S-1	紡錘車	—	6.8	—	1.6	60F検出
860	60H-S-2	紡錘車	—	—	—	—	上SK108
861	59B-S-2	勾玉	—	3.9	—	—	上SB42
862	60E-E-25	長頸壺	4.4	7.2	4.6	10.2	上SK37
863	60E-E-144	椀	—	—	11.0	—	60F検出
864	60G-E-22	平瓶	5.4	9.2	—	9.2	上SD60
865	59A-E-255	硯	(26.3)	—	—	—	59A検出

土　錘

番号	登録番号
71－1	58－P－142
－2	59B－E－7
－3	59F－E－1
－4	60E－E－130
－5	60F－E－45
－6	58－P－134
－7	58－P－137
－8	58－P－140
－9	58－P－143
－10	58－P－146
－11	59A－E－98
－12	59B－E－30
－13	59C－E－13
－14	59G－E－5
－15	60G－E－17
－16	60H－E－55
－17	60H－E－58
－18	60I－E－3
－19	60I－E－5
－20	60J－E－18
－21	60J－E－26
－22	60J－E－27
－23	60K－E－26
－24	60K－E－27
－25	59G－E－1
－26	59G－E－2
－27	60C_2－E－35
－28	60F－E－58
－29	60E－E－118
－30	60G－E－21
－31	60H－E－64
－32	60H－E－76
－33	59G－E－3
－34	60D－E－68
－35	60A_1－E－168
－36	60A_1－E－171
－37	60F－E－33
－38	60F－E－49
－39	60A_1－E－167
72－40	60H－E－57
－41	60F－E－50
－42	60G－E－19
－43	58－P－142
－44	60H－E－73
－45	60H－E－74
－46	60F－E－44
－47	58－P－141
－48	59A－E－86
－49	59A－E－89
－50	60H－E－63
－51	60H－E－67
－52	60A_1－E－172
－53	60F－E－41
－54	60G－E－20
－55	60H－E－56
－56	60H－E－59
－57	60H－E－61
－58	58－P－138
－59	58－P－144
－60	58－P－145
－61	58－P－149
－62	59A－E－68
－63	59A－E－69
－64	59A－E－75
－65	59A－E－80
－66	59A－E－81
－67	59A－E－82
－68	59A－E－83
－69	59A－E－84
－70	59A－E－85
－71	59A－E－88
－72	59A－E－91
－73	59A－E－92
－74	59A－E－94
－75	59A－E－95
－76	59B－E－3
－77	59B－E－23
－78	59B－E－27
－79	59B－E－28
－80	59B－E－39
－81	59D－E－6
73－82	59G－E－4
－83	60A_1－E－170
－84	60A_2－E－101
－85	60B_1－E－66
－86	60B_2－E－23
－87	60C_2－E－38
－88	60D－E－67
－89	60D－E－71
－90	60E－E－119
－91	60E－E－139
－92	60E－E－120
－93	60E－E－122
－94	60E－E－126
－95	60E－E－127
－96	60E－E－128
－97	60E－E－129
－98	60E－E－140
－99	60E－E－115
－100	60E－E－131
－101	60E－E－132
－102	60E－E－133
－103	60E－E－135
－104	60E－E－143
－105	60F－E－30
－106	60F－E－34
－107	60F－E－36
－108	60F－E－39
－109	60F－E－40
－110	60F－E－42
－111	60F－E－47
－112	60F－E－48
－113	60F－E－52
－114	60F－E－56
－115	60H－E－53
－116	60H－E－54
－117	60H－E－60
－118	60H－E－62
－119	60H－E－65
－120	60H－E－66
74－121	60H－E－71
－122	60H－E－72
－123	60H－E－79
－124	60H－E－80
－125	60J－E－16
－126	60J－E－20
－127	60J－E－21
－128	60J－E－22
－129	58－P－86
－130	58－P－133
－131	59B－E－34
－132	60C_2－E－37
－133	60D－E－66
－134	60E－E－123
－135	60E－E－124
－136	60E－E－125
－137	60H－E－68
－138	60K－E－25
－139	58－P－135
－140	59C－E－5
－141	60C_2－E－40
－142	60D－E－59
－143	60G－E－16
－144	60H－E－69
－145	59A－E－87
－146	59A－E－90
－147	59A－E－93
－148	59A－E－221
－149	59A－E－223
－150	60B_1－E－65
－151	60D－E－60
－152	60D－E－65
－153	60E－E－121
－154	60E－E－134
－155	60E－E－142
－156	60F－E－35
－157	60F－E－38
－158	60I－E－1
－159	60A_1－E－169
－160	60A_2－E－102
75－161	59B－E－4
－162	60K－E－22
－163	60K－E－24
－164	60K－E－28
－165	58－P－213
－166	59C－E－28
－167	59G－E－11
－168	60D－E－63
－169	60D－E－72
－170	60E－E－114
－171	60E－E－117
－172	60I－E－2
－173	60I－E－4
－174	60J－E－15
－175	60J－E－23
－176	60J－E－24
－177	60L－E－2
－178	60L－E－3
－179	58－P－212
－180	58－P－136
－181	58－P－139
－182	60B_2－E－24
－183	60D－E－64
－184	60F－E－32
－185	60F－E－37
－186	60F－E－43
－187	60G－E－18
－188	60K－E－23
－189	59B－E－2
－190	59B－E－7
－191	59B－E－17
－192	60A_2－E－103
－193	60C_2－E－36
－194	60E－E－141
－195	60D－E－73
－196	60E－E－138
－197	60F－E－57
－198	60F－E－51
－199	60F－E－55
－200	60H－E－77
－201	60I－E－6
－202	58－P－200
－203	59A－E－210
－204	59B－E－48
－205	59F－E－2
－206	60D－E－61
－207	60D－E－62
－208	60D－E－69
－209	60D－E－70
－210	60D－E－58
－211	60E－E－113
－212	60F－E－31
－213	60F－E－46
－214	60F－E－53
－215	60F－E－54
－216	60H－E－70
－217	60H－E－75
－218	60J－E－25
－219	60J－E－17
－220	60J－E－19
－221	60K－E－21
－222	60H－E－78
－223	58－P－147
－224	59A－E－218
－225	59E－E－2
－226	60C_2－E－39
－227	60E－E－116
－228	60E－E－136
－229	60E－E－137

写真番号対照表

写真	実測図	遺　構
1	861	上SB42Pit
2	837	60A$_1$検出
3	836	60A$_1$検出
4	838	上SD18
5	863	60E検出
6	−	上SK94
7	−	60E検出
8	1	下SB01
9	59	下SB10
10	66	下SB11
11	70	下SB12
12	16	下SB03
13	19	下SB05
14	−	下SB10
15	60	下SB10
16	69	下SB12
17	113	下SB22
18	120	下SB23
19	90	下SB21
20	106	下SB21
21	84	下SB14
22	−	下SB20
23	115	下SB22
24	154	下SB35
25	153	下SB35
26	155	下SB35
27	158	下SK12
28	158	下SK12
29	137	下SK10
30	156	下SK47
31	173	下SK13
32	166	下SK13
33	181	下SE02
34	180	下SE02
35	183	下SE02
36	195	下SE03
37	198	下SE03
38	220	下SE03
12-37	202	下SE03
12-38	196	下SE03
39	211	下SE03
40	208	下SE03
41	218	下SE03
42	217	下SE03
43	212	下SE03
44	216	下SE03
45	222	下SE03
46	604	上SE01
47	608	上SE01
48	610	上SE01
49	−	上SE01
50	611	上SE01
51	348	上SE09
52	346	上SE09
53	349	上SE09
54	350	上SE09
55	−	上SE07
56	617	上SE10

写真	実測図	遺　構
57	618	上SE10
58	369	上SE09
59	365	上SE09
60	428	上SE13
61	429	上SE13
62	431	上SE13
63	430	上SE13
64	384	上SE28
65	424	上SE21
66	423	上SE21
67	442	上SE23
68	620	上SE24
69	619	上SE24
70	391	上SE31
71	392	上SE31
72	393	上SE31
73	395	上SE31
74	399	上SE31
75	398	上SE31
76	403	上SE32
77	407	上SE32
78	406	上SE32
79	413	上SE125
80	412	上SE125
81	420	上SE125
82	421	上SE125
83	484	上SK20
84	486	上SK20
85	488	上SK20
86	−	上SK08
87	−	上SK06
88	577	上SK06
89	578	上SK06
90	584	上SK06
91	−	60A$_1$検出
92	450	上SX02
93	453	上SX02
94	452	上SX02
95	451	上SX02
96	461	上SX02
97	458	上SX02
98	596	上SK90
99	598	上SK90
100	597	上SK90
101	601	上SK90
102	602	上SK90
103	538	上SD41
104	862	上SK37
105	509	上SK08
106	864	上SD60
107	631	上SE11
108	632	上SE11
109	642	上SE16
110	634	上SE16
111	635	上SE16
112	641	上SE16
113	643	上SE16
114	644	上SE16

写真	実測図	遺　構
115	646	上SE17
116	651	上SE17
117	670	上SE12
118	691	上SK77
119	688	上SK19
120	716	上SD15
121	717	上SD43
122	718	上SD43
123	720	上SD43
124	729	上SD50
125	730	上SD50
126	733	上SD50
127	735	上SD50
128	736	上SD50
129	743	上SD50
130	745	上SD50
131	−	上SD50
132	766	上SK171
133	767～784	
134	785～791	
135	810～817	
136	792～801	
137	818	60A$_1$検出
138	819	下SK13
139	820	60B$_1$検出
140	821	60B$_1$検出
141	822	60F検出
142	823	60A$_1$検出
143	824	60A$_1$検出
144	825	60B$_2$検出
145	826	上SK08
146	827	下SK10
147	828	下SB13
148	829	59C検出
149	830	59A検出
150	831	59B検出
151	832	60A$_1$検出
152	833	下SB05
153	834	下SK46
154	835	60A$_1$検出
155	839	60B$_1$検出
156	840	59A検出
157	842	60B$_1$検出
158	843	60B$_2$検出
159	844	60B$_1$検出
160	845	下SB04
161	846	59A検出
162	848	60A$_1$検出
163	847	下SB22
164	853	60A$_1$検出
165	852	下SB13
166	854	下SB12
167	−	上SD49
168	−	下SB05
169	−	上SD50
170	−	上SK27
171	855	上SD100
172	856	60D検出

写真	実測図	遺　構
173	62－1	上SD05
174	858	60H検出
175	859	60F検出
176	860	上SK108
177	857	上SD98
178	892	上SE32
179	893	上SE32
180	891	上SE09
181	888	上SE31
182	894	下SB07
183	160・142・27・−	
184	25・9・8・6・24・20・18・14	
185	60・78・140・83・133・100・56・137	
186	148・150・153・157	
187	48・46・43・40・50・47・3・2	
188	165・166・167・176 175・170・162・164	
189	181・−・185・187・−・197・196・215・42・45・228・229	
190	33・34・39・35・36・37・38	

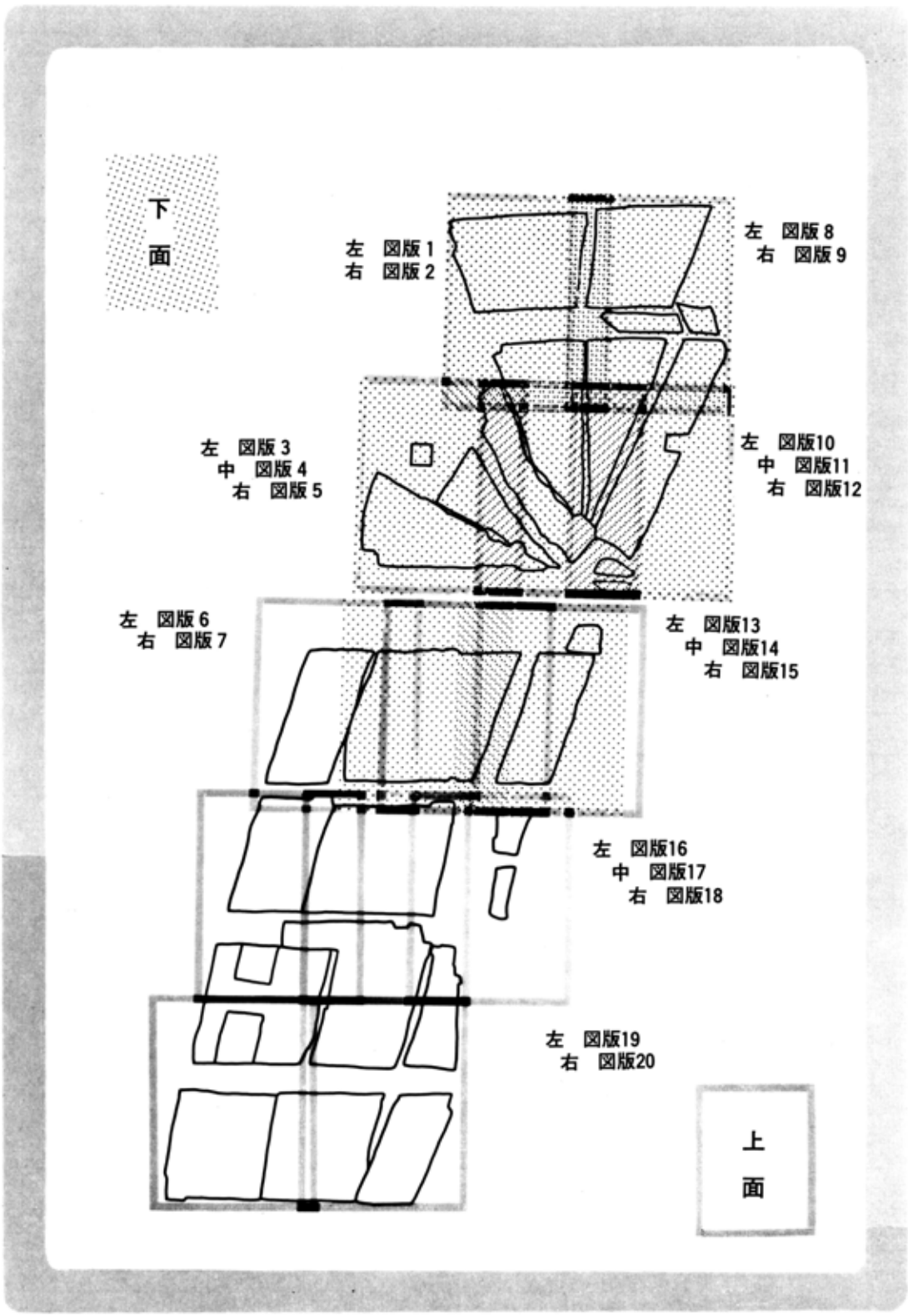
図版

写真図版

遺構・遺物図版

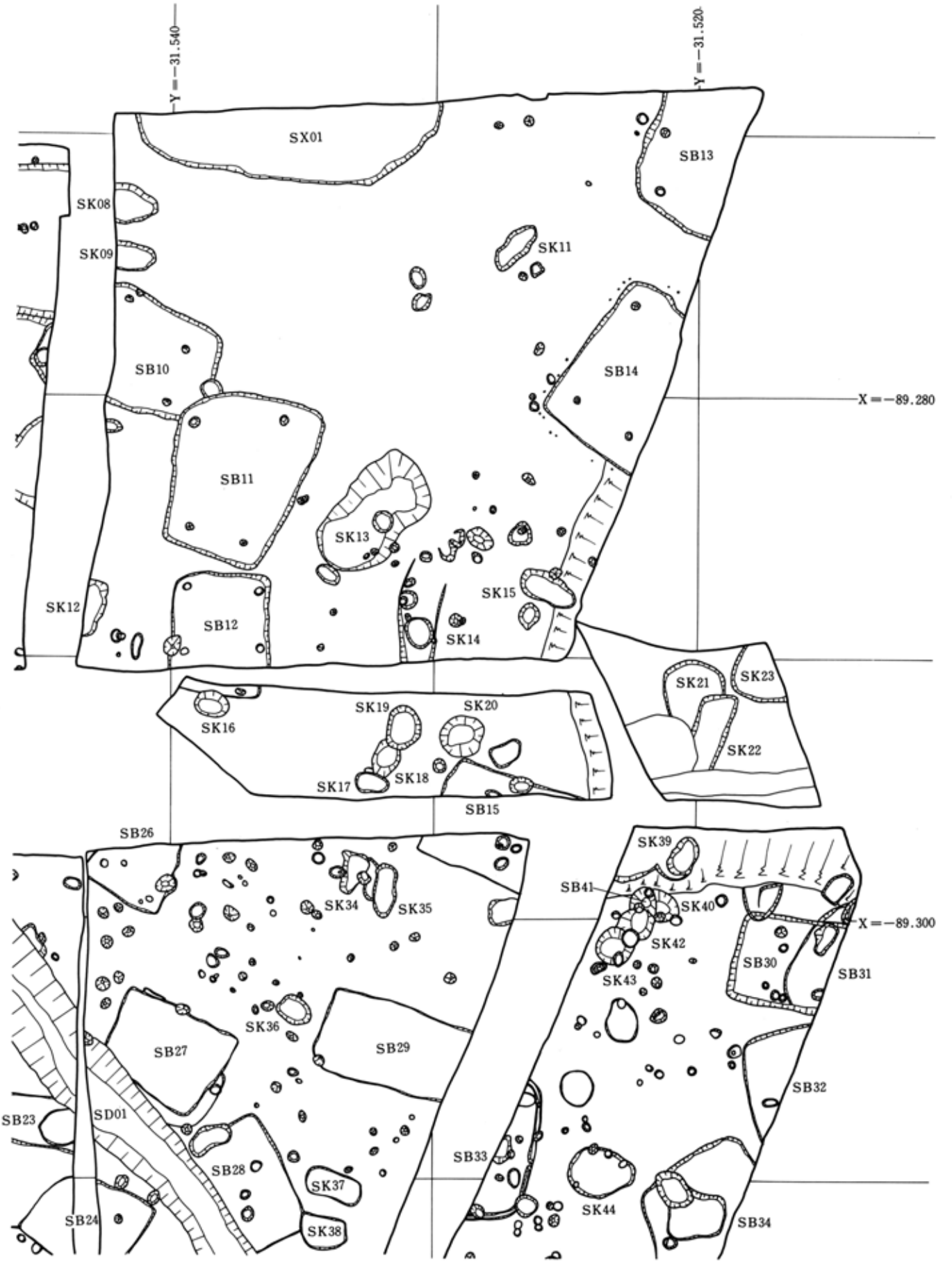
● 遺構図割付表

※遺構図版の縮率は１：200



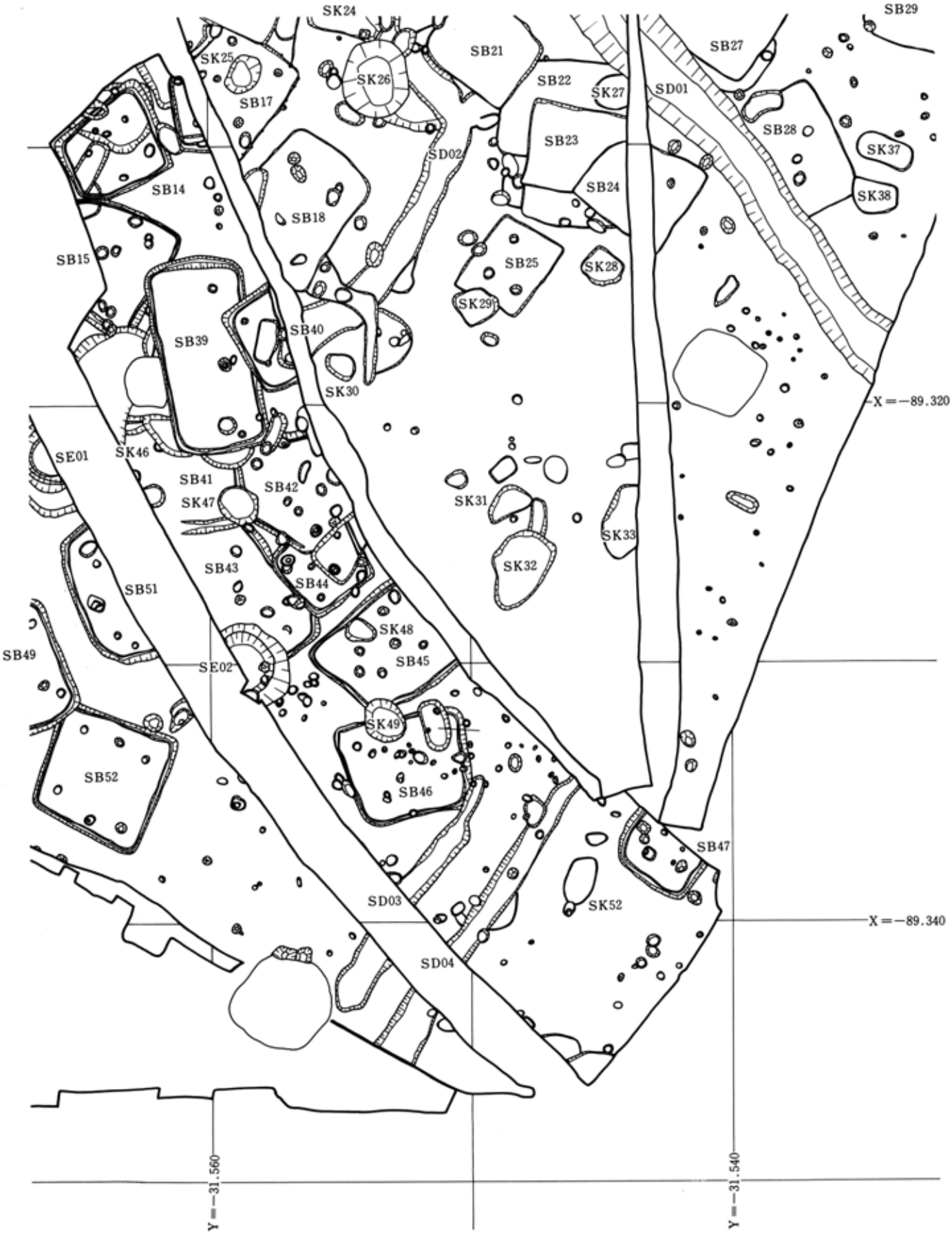
Y=−31.560
X=−89.280
X=−89.300
Y=−31.540
SX01
SK01
SK02
SK03
SK04
SK05
SK06
SK07
SK08
SK09
SK12
SK24
SK25
SK26
SK27
SB01
SB02
SB03
SB04
SB05
SB06
SB07
SB08
SB09
SB10
SB11
SB12
SB13
SB14
SB15
SB16
SB17
SB18
SB19
SB20
SB21
SB22
SB23
SB24
SB26
SB27
SD01
SD02

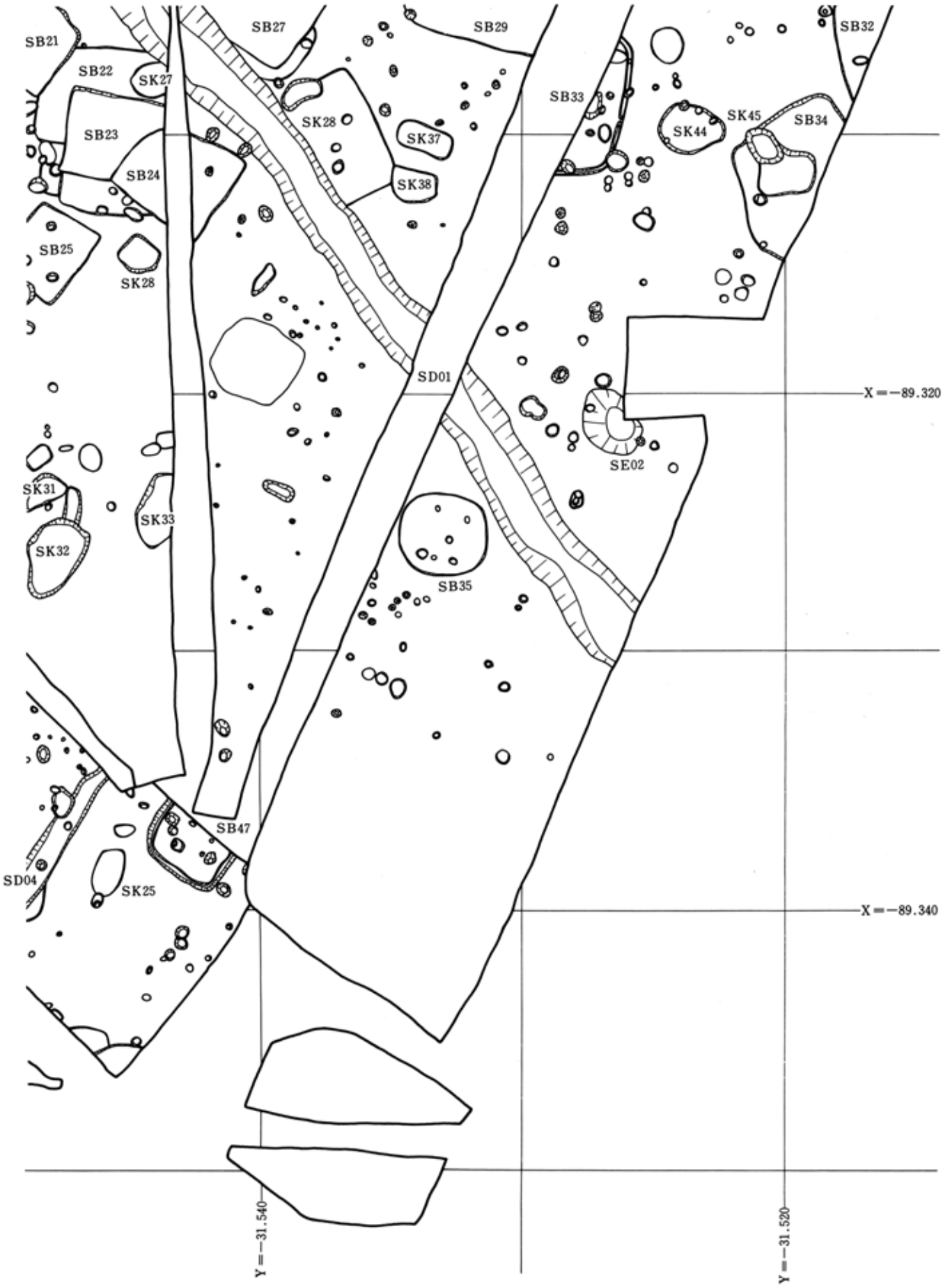
図版 2


Y=−31.540
Y=−31.520
X=−89.280
X=−89.300
SX01
SB13
SK08
SK09
SK11
SB10
SB14
SB11
SK13
SK15
SK12
SB12
SK14
SK21
SK23
SK16
SK19
SK20
SK22
SK17
SK18
SB15
SB26
SK39
SB41
SK40
SK34
SK35
SK42
SB30
SB31
SK43
SK36
SB27
SB29
SB32
SB23
SD01
SB33
SB28
SK37
SK44
SB34
SB24
SK38

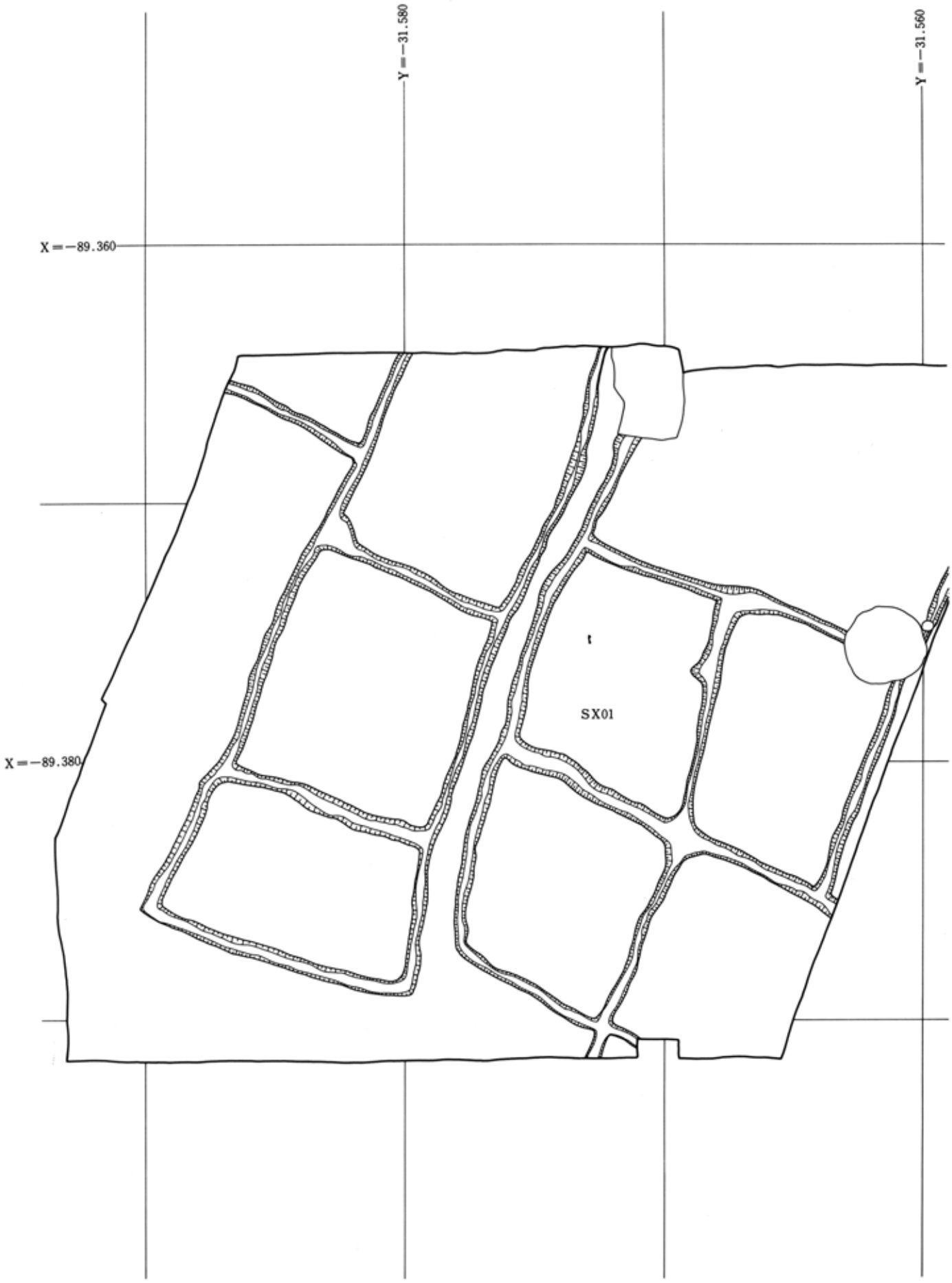
SK25
SB17
SB18
SB14
SB15
SB39
SB40
SE01
SK46
SB41
SK47
SB48
SB51
SB43
SB44
SK53
SB49
SE02
SB50
SB52
X＝−89.320
Y＝−31.580
Y＝−31.560

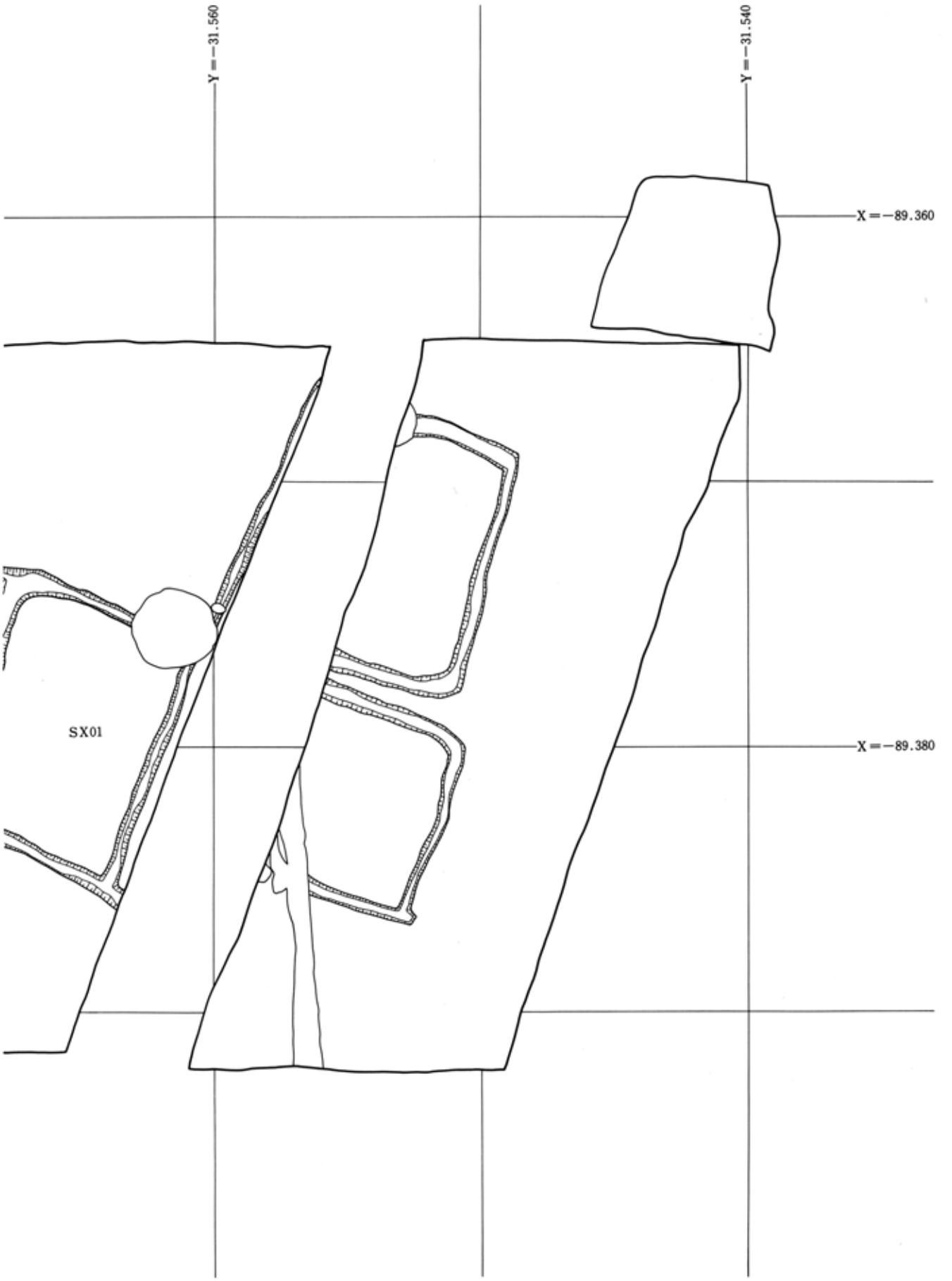
図版 4


SK24
SB29
SK25
SB21
SB27
SK26
SB22
SK27
SD01
SB17
SB28
SB23
SK37
SD02
SB14
SB24
SK38
SB18
SB15
SB25
SK28
SK29
SB39
SB40
SK30
X=−89.320
SE01
SK46
SB41
SB42
SK47
SK31
SK33
SK32
SB43
SB44
SB51
SK48
SB49
SB45
SE02
SK49
SB52
SB46
SB47
SD03
SK52
X=−89.340
SD04
Y=−31.560
Y=−31.540

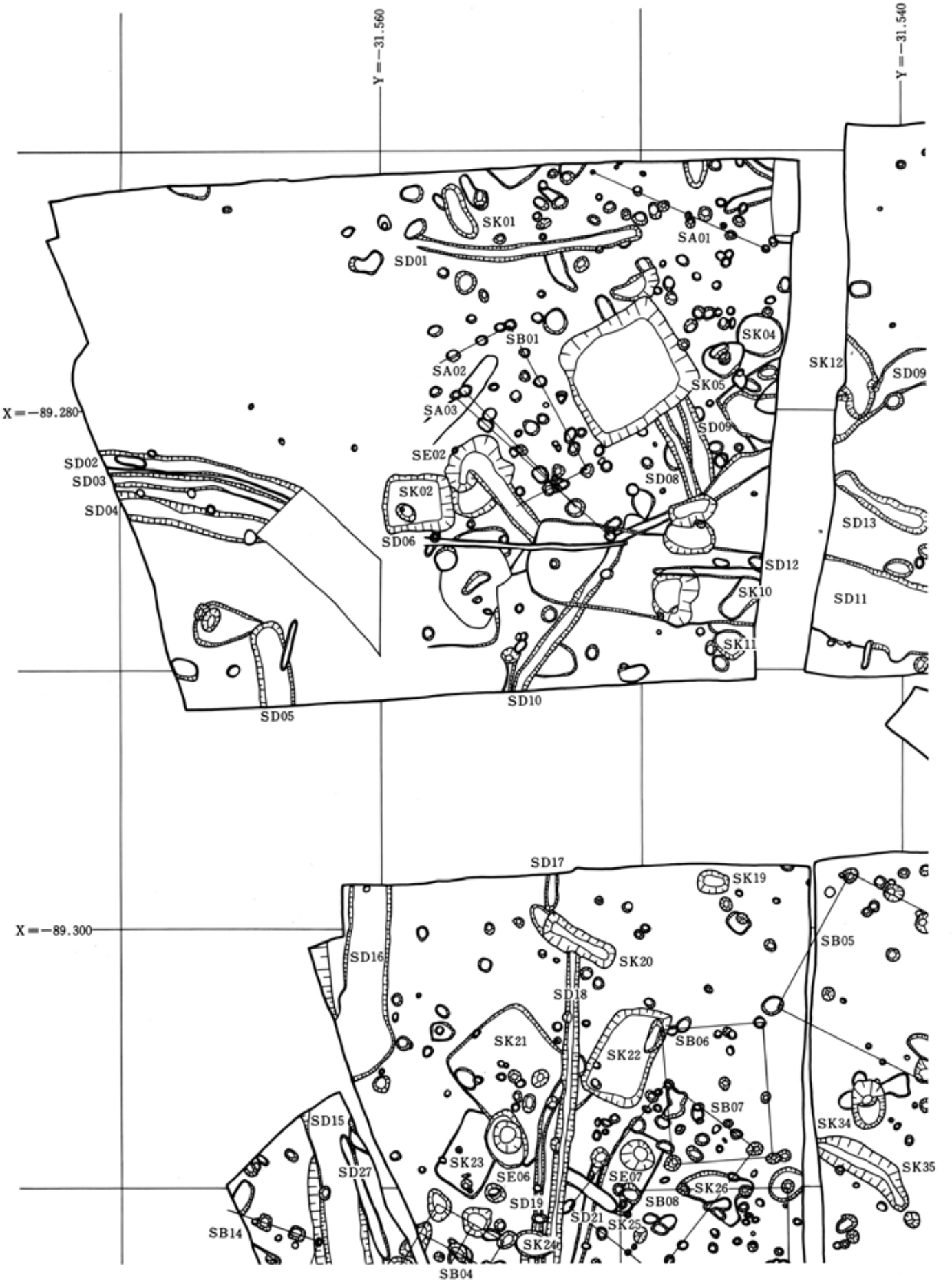

SB21
SB22
SK27
SB23
SB24
SB25
SK28
SB27
SK28
SB29
SK37
SK38
SD01
SB33
SK44
SK45
SB34
SB32
SE02
SK31
SK32
SK33
SB35
SB47
SD04
SK25
X=−89.320
X=−89.340
Y=−31.540
Y=−31.520

図版 6




Y=−31.560
Y=−31.540
X=−89.360
X=−89.380
SX01

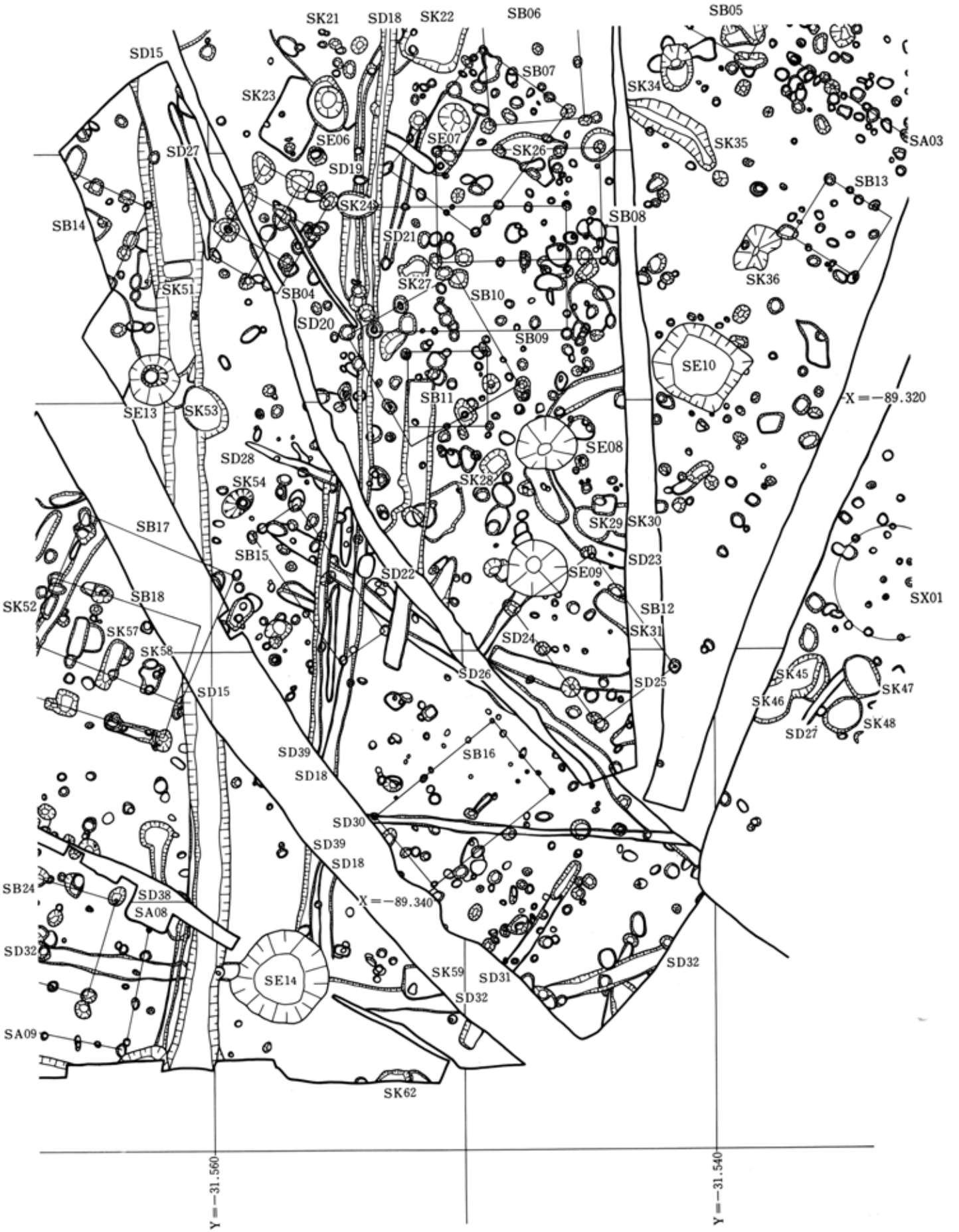
図版 8


Y=−31.560
Y=−31.540
X=−89.280
X=−89.300
SK01
SA01
SD01
SB01
SA02
SA03
SK04
SK05
SK12
SD09
SD08
SE02
SD02
SD03
SD04
SK02
SD06
SD13
SD12
SK10
SD11
SK11
SD05
SD10
SD17
SK19
SB05
SD16
SK20
SD18
SK21
SK22
SB06
SB07
SK34
SD15
SK23
SD27
SE06
SE07
SK26
SK35
SD19
SB08
SD21
SK25
SB14
SK24
SB04

Y=−31.540
Y=−31.520
X=−89.280
X=−89.300
SK14
SK04
SK12
SD09
SK13
SE03
SD10
SB02
SD13
SD12
SK10
SD11
SK15
SK16
SK17
SE04
SE05
SD14
SB03
SB05
SA05
SK38
SA06
SB06
SK39
SK34
SB07
SK35
SA04
SK42
SK40
SB13
SB08

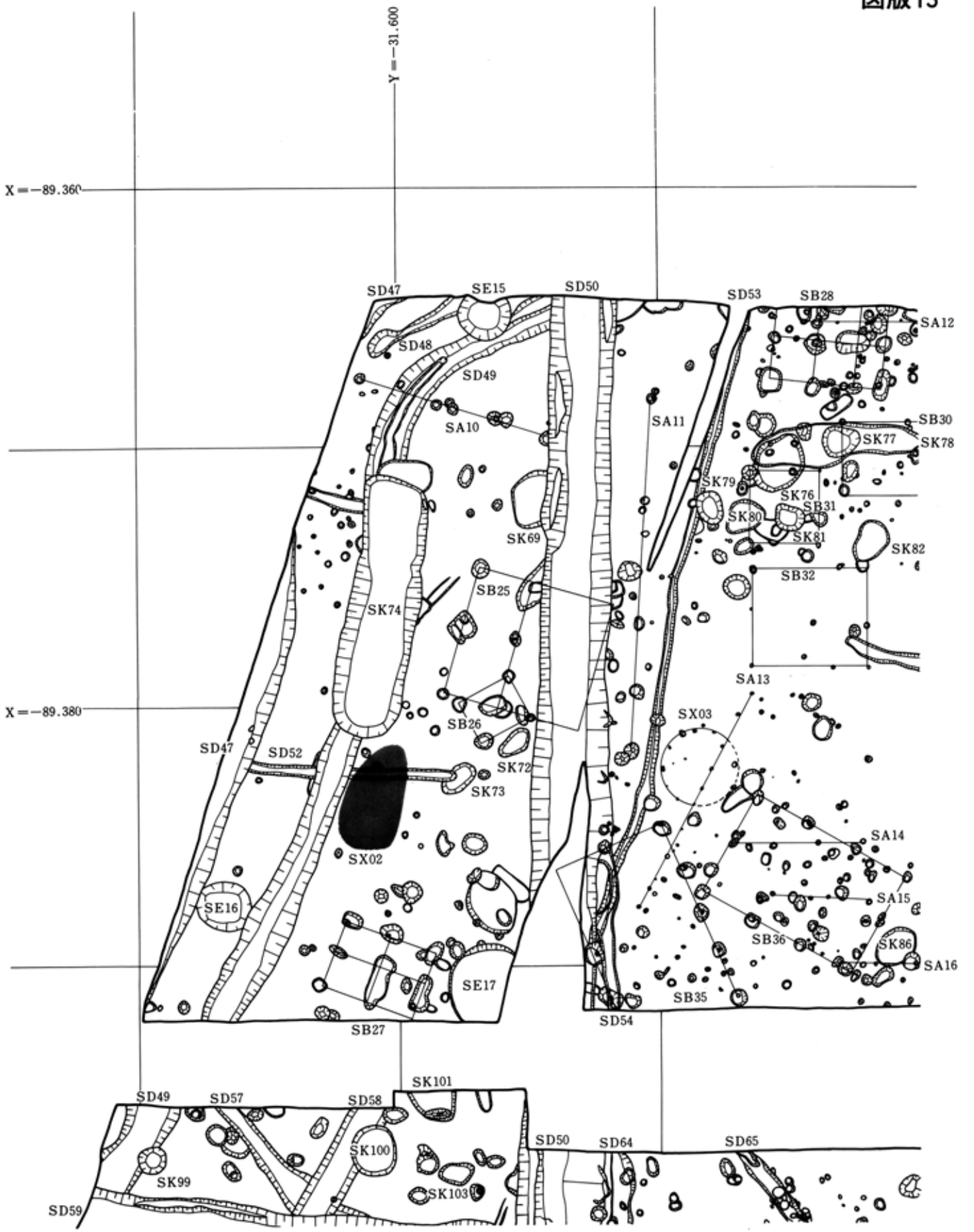
図版10

SD15
SK23
SD27
SB14
SB04
SK51
X=−89.320
SE13
SK53
SD42
SD28
SK54
SD35
SB17
SB15
SD41
SK55
SD33
SD34
SK52
SB18
SB20
SK56
SK57
SK58
SD15
SB21
SB19
SB22
SA07
SK60
X=−89.340
SD38
SA08
SB23
SD32
SB24
SE14
SD43
SA09
SD42
Y=−31.580
Y=−31.560


SK21
SD18
SK22
SB06
SB05
SD15
SB07
SK34
SK23
SE06
SE07
SK26
SK35
SA03
SD27
SD19
SB13
SK24
SB08
SB14
SD21
SK36
SK51
SK27
SB04
SB10
SD20
SB09
SE10
SB11
X=−89.320
SE13
SK53
SE08
SD28
SK54
SK28
SK29
SK30
SB17
SB15
SD23
SD22
SE09
SX01
SK52
SB18
SB12
SK57
SK31
SK58
SD24
SD26
SK45
SD25
SK47
SD15
SK46
SK48
SD27
SD39
SB16
SD18
SD30
SD39
SD18
SB24
SD38
X=−89.340
SA08
SD32
SE14
SK59
SD31
SD32
SD32
SA09
SK62
Y=−31.560
Y=−31.540

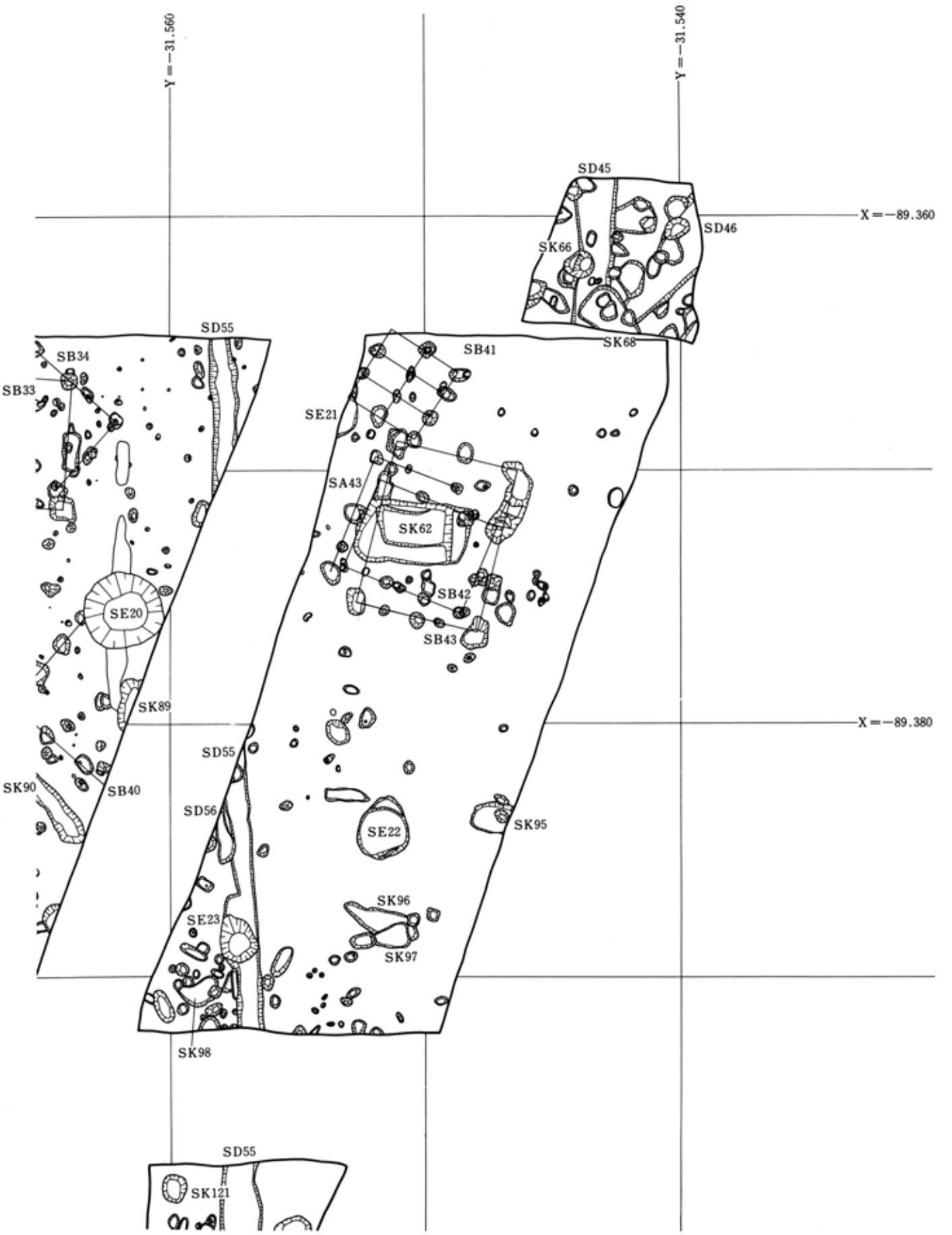
図版12

SK34
SK35
SA04
SK39
SK42
SK40
SB08
SB13
SK36
SK41
SB09
SE10
SK43
X=−89.320
SE02
SK44
SE11
SD23
SB12
SK31
SX01
SK45
SK47
SD28
SK46
SD26
SD27
SK48
SD30
SD31
X=−89.340
SK49
SE12
SK50
SD32
SD44
SK63
SK64
SK65
Y=−31.540
Y=−31.520

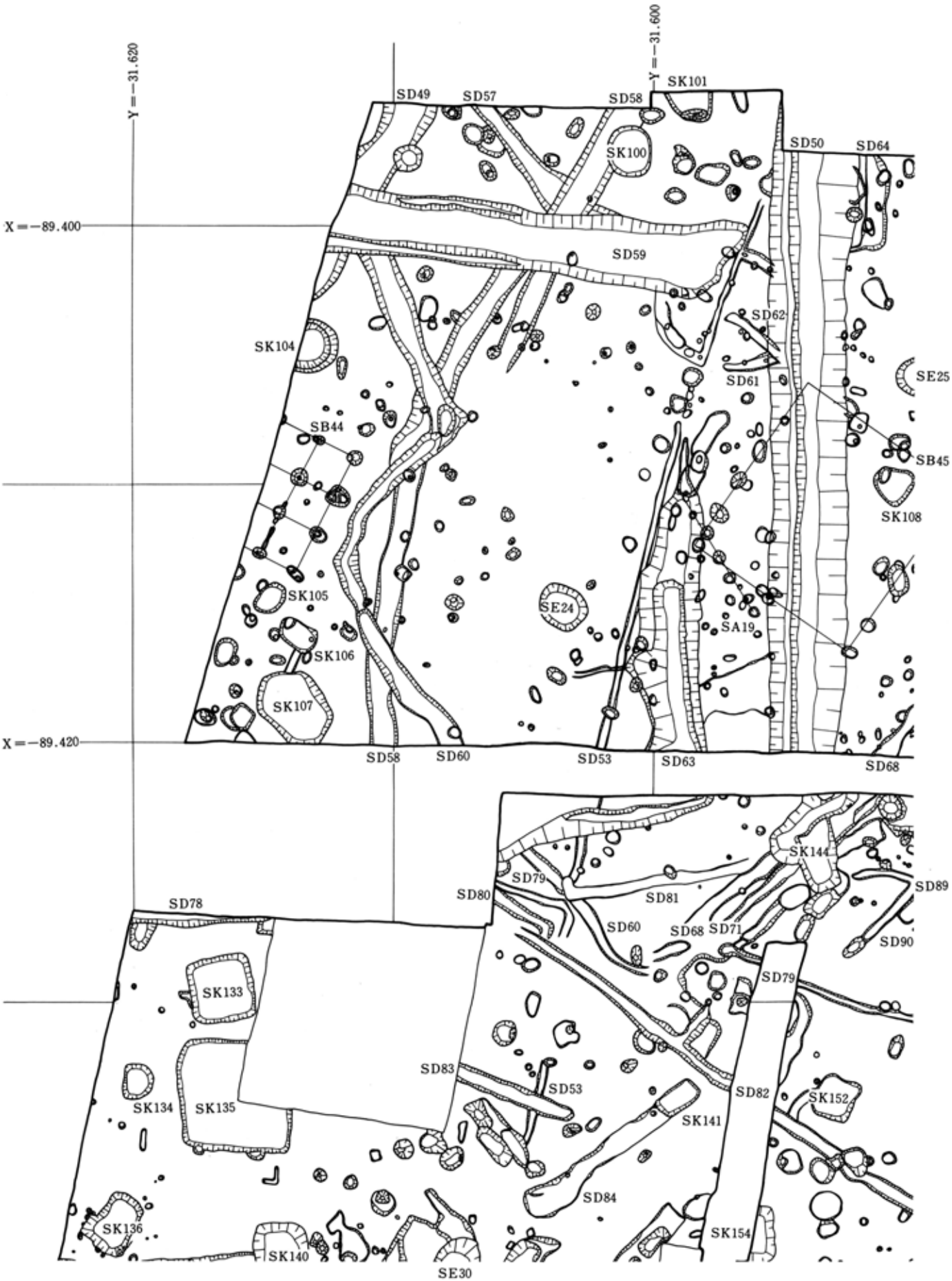

Y=−31.600
X=−89.360
X=−89.380
SD47
SE15
SD50
SD53
SB28
SA12
SD48
SD49
SA10
SA11
SB30
SK77
SK78
SK79
SK76
SB31
SK80
SK81
SK82
SK69
SB32
SB25
SK74
SA13
SX03
SB26
SD47
SD52
SK72
SK73
SA14
SX02
SA15
SE16
SB36
SK86
SA16
SE17
SB35
SD54
SB27
SK101
SD49
SD57
SD58
SK100
SD50
SD64
SD65
SK99
SK103
SD59

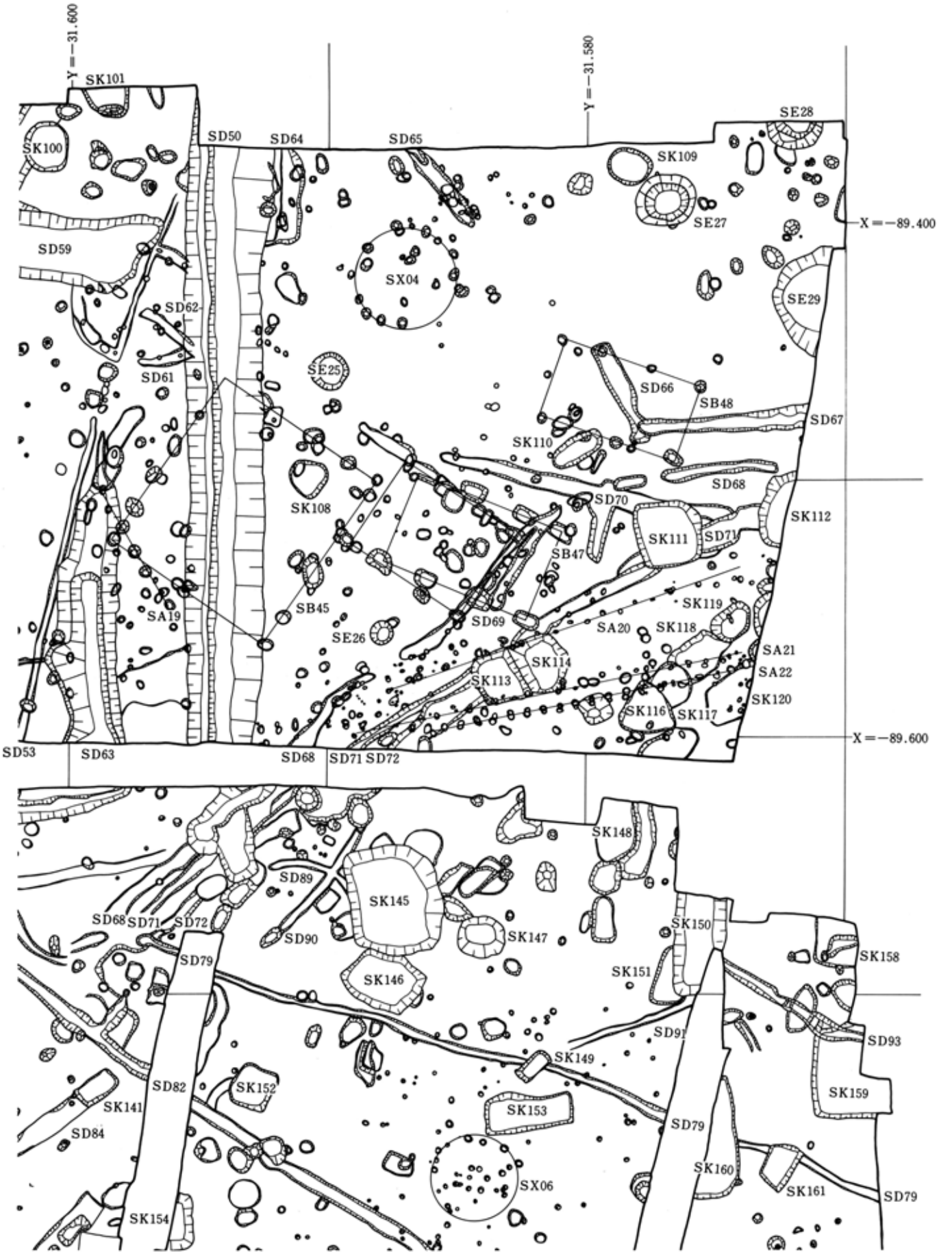
図版14

Y=−31.580
Y=−31.560
X=−89.360
X=−89.380
SB28
SB29
SA12
SB33
SB34
SD55
SB41
SE21
SE18
SK55
SE19
SK77
SK78
SB30
SA43
SK94
SA17
SK83
SK84
SA18
SK82
SB32
SB42
SB43
SE20
SK88
SB37
SK89
SD55
SB40
SD56
SE22
SK90
SA14
SB35
SA15
SB38
SK91
SK87
SK96
SK92
SE23
SK97
SK93
SK86
SA16
SB39
SK98
SE28
SK109
SD65
SE27
SD55
SK121


Y=−31.560
Y=−31.540
X=−89.360
X=−89.380
SD45
SD46
SK66
SK68
SD55
SB34
SB33
SB41
SE21
SA43
SK62
SB42
SB43
SE20
SK89
SK90
SB40
SD55
SD56
SE22
SK95
SK96
SE23
SK97
SK98
SD55
SK121

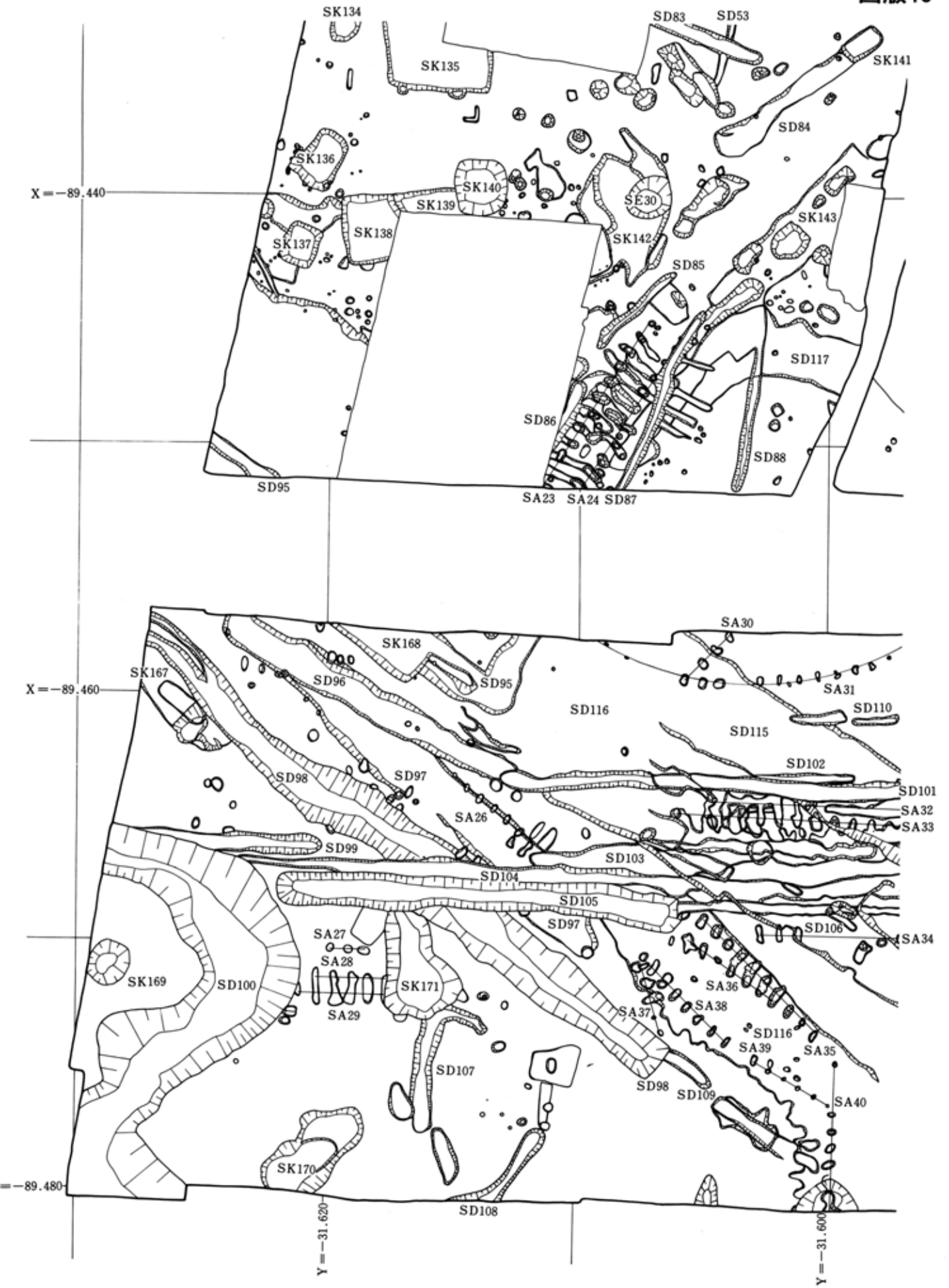
図版16


Y=−31.620
Y=−31.600
X=−89.400
X=−89.420
SD49
SD57
SD58
SK101
SK100
SD50
SD64
SD59
SD62
SD61
SK104
SE25
SB44
SB45
SK108
SK105
SE24
SA19
SK106
SK107
SD58
SD60
SD53
SD63
SD68
SK144
SD79
SD80
SD81
SD89
SD78
SD60
SD68
SD71
SD90
SD79
SK133
SD83
SD53
SD82
SK152
SK134
SK135
SK141
SD84
SK136
SK154
SK140
SE30

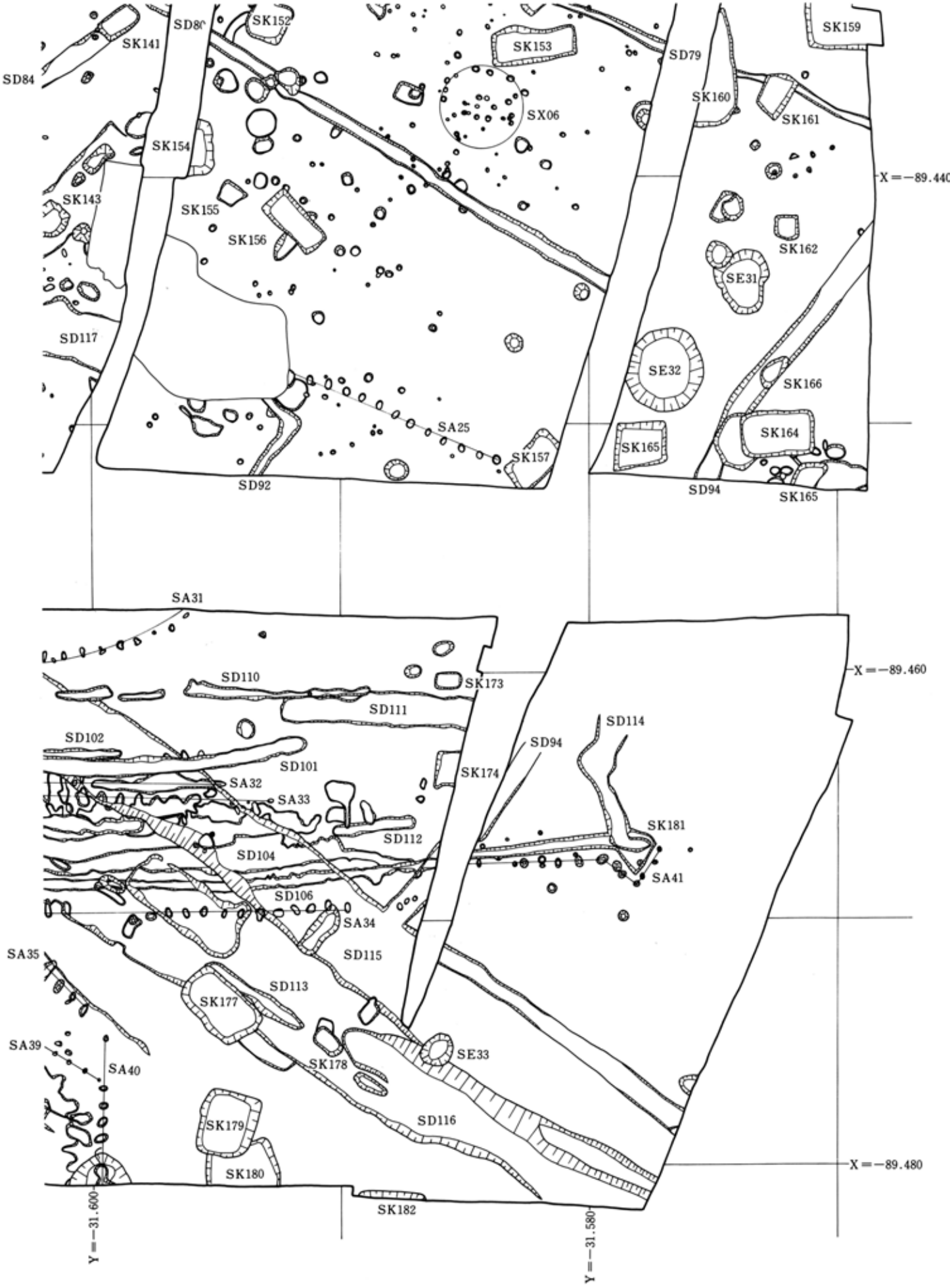

Y=−31.600
Y=−31.580
X=−89.400
X=−89.600
SK101
SK100
SD50
SD64
SD65
SE28
SK109
SE27
SD59
SX04
SE29
SD62
SD61
SE25
SD66
SB48
SD67
SK110
SD68
SK108
SD70
SK112
SK111
SD71
SB47
SA19
SB45
SD69
SK119
SA20
SK118
SE26
SK114
SA21
SA22
SK113
SK120
SK116
SK117
SD53
SD63
SD68
SD71 SD72
SK148
SD89
SK145
SD68 SD71 SD72
SK150
SD90
SK147
SK158
SD79
SK146
SK151
SD91
SD93
SK149
SK159
SD82
SK152
SK141
SK153
SD84
SD79
SK160
SX06
SK161
SD79
SK154

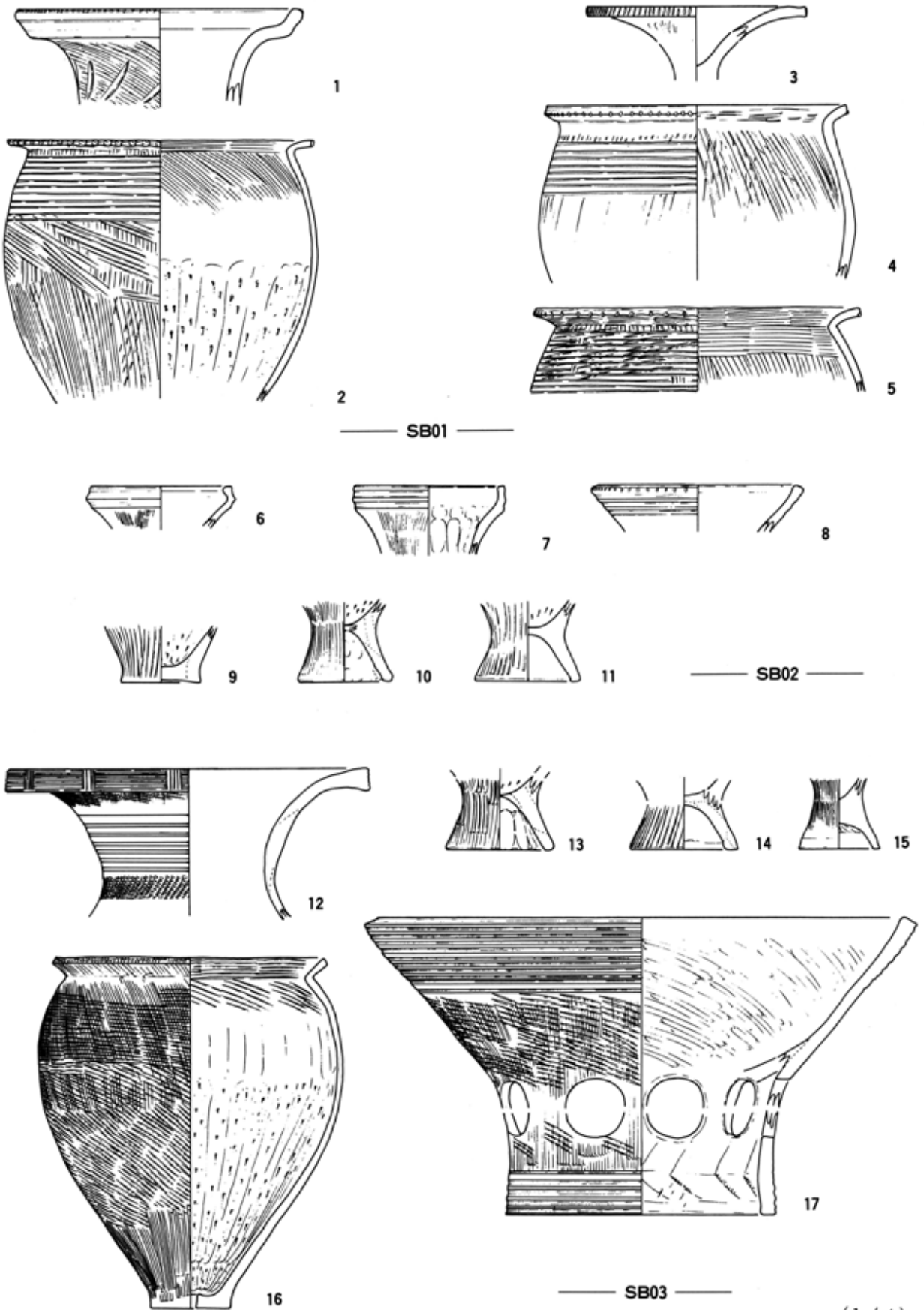
図版18

Y=−31.560
X=−89.400
X=−89.420
SE28
SK109
SE27
SE29
SD66
SB48
SD67
SD68
SD70
SK112
SK111
SD71
SA20
SK119
SK118
SA21
SA22
SK120
SK116
SK117
SD55
SK121
SK124
SK122
SK123
SK125
SK126
SK127
SD73
SD74
SK128
SD75
SD75
SK129
SK131
SK130
SD76
SD77
SX05
SK132
SK148
SK150
SK158
SK151
SD91
SD93
SD79
SK160
SK161


SK134
SD83
SD53
SK135
SK141
SD84
SK136
X=−89.440
SK140
SE30
SK139
SK143
SK138
SK137
SK142
SD85
SD117
SD86
SD88
SD95
SA23
SA24
SD87
SA30
SK168
SK167
X=−89.460
SD96
SD95
SA31
SD116
SD110
SD115
SD102
SD98
SD97
SD101
SA26
SA32
SA33
SD99
SD103
SD104
SD105
SD97
SD106
SA34
SA27
SA28
SK169
SD100
SK171
SA36
SA29
SA37
SA38
SD116
SA39
SA35
SD107
SD98
SD109
SA40
SK170
=−89.480
SD108
Y=−31.620
Y=−31.600

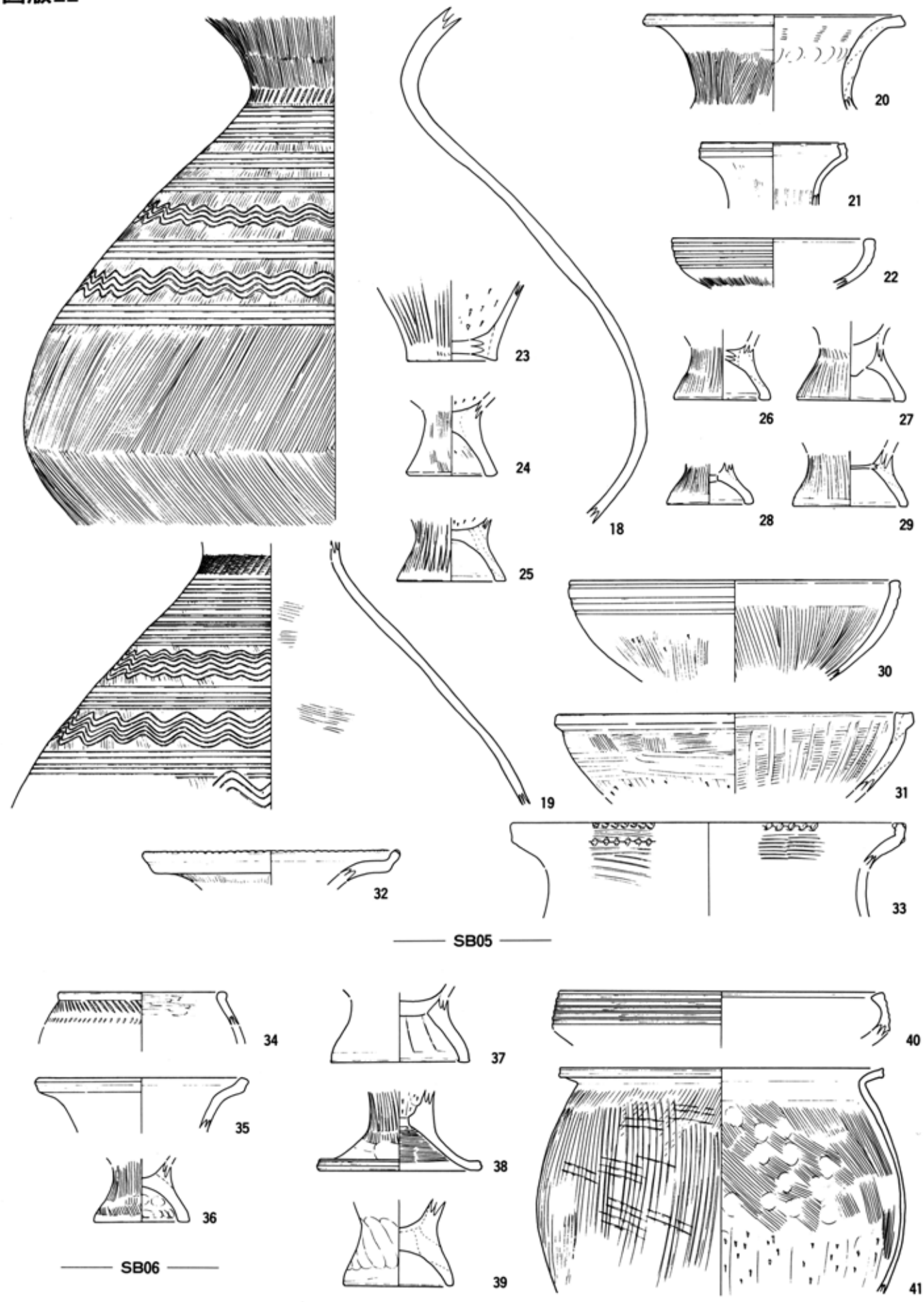
図版20


SD84
SK141
SD80
SK152
SK153
SD79
SK159
SX06
SK160
SK161
SK154
SK143
SK155
SK156
SK162
SE31
SD117
SE32
SK166
SA25
SK157
SK165
SK164
SD92
SD94
SK165
X=−89.440
SA31
SD110
SK173
SD111
SD102
SD101
SK174
SD94
SD114
SA32
SA33
SD112
SK181
SD104
SA41
SD106
SA34
SD115
SA35
SD113
SK177
SA39
SA40
SK178
SE33
SK179
SD116
SK180
SK182
X=−89.460
X=−89.480
Y=−31.600
Y=−31.580

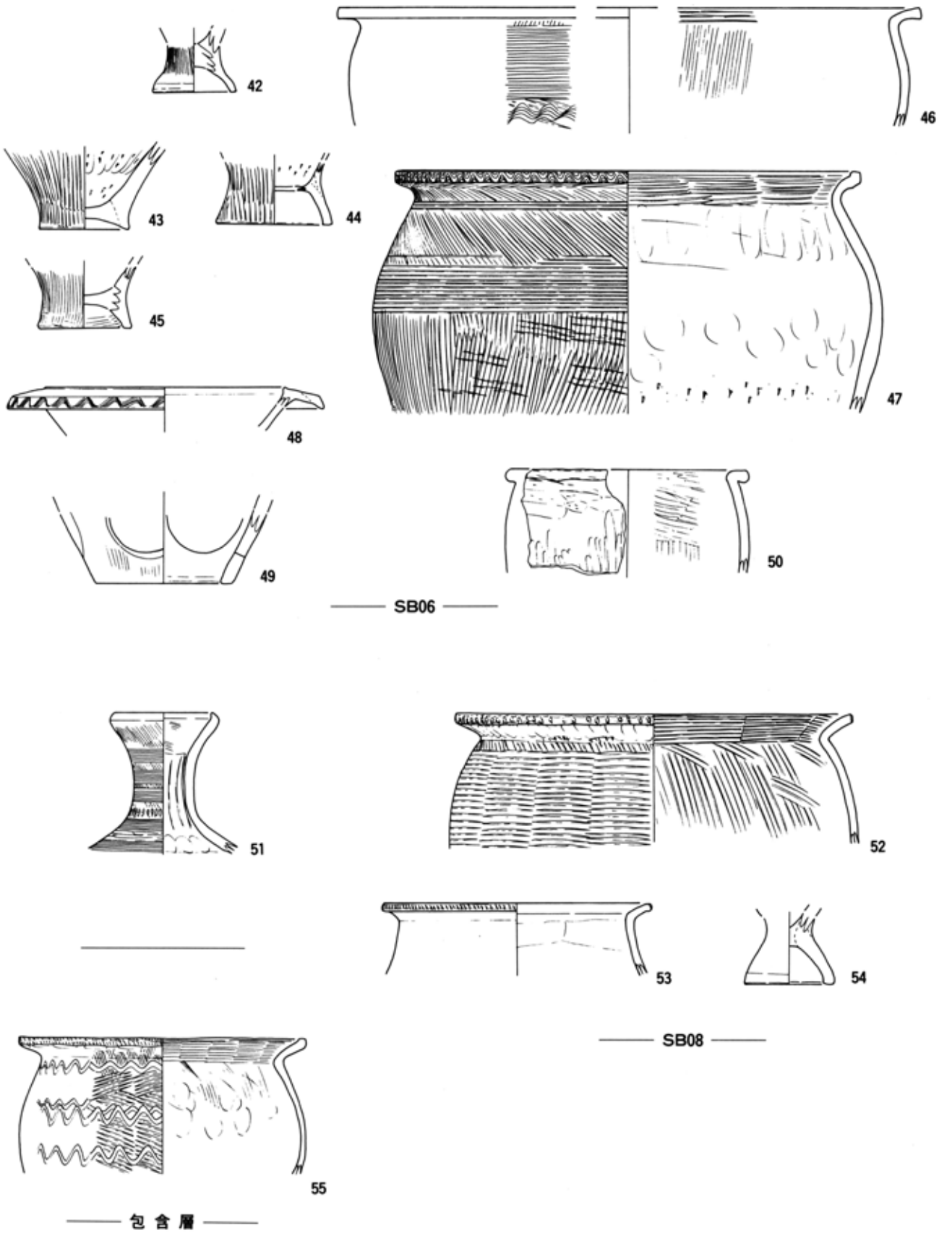


(1 / 4)

図版22

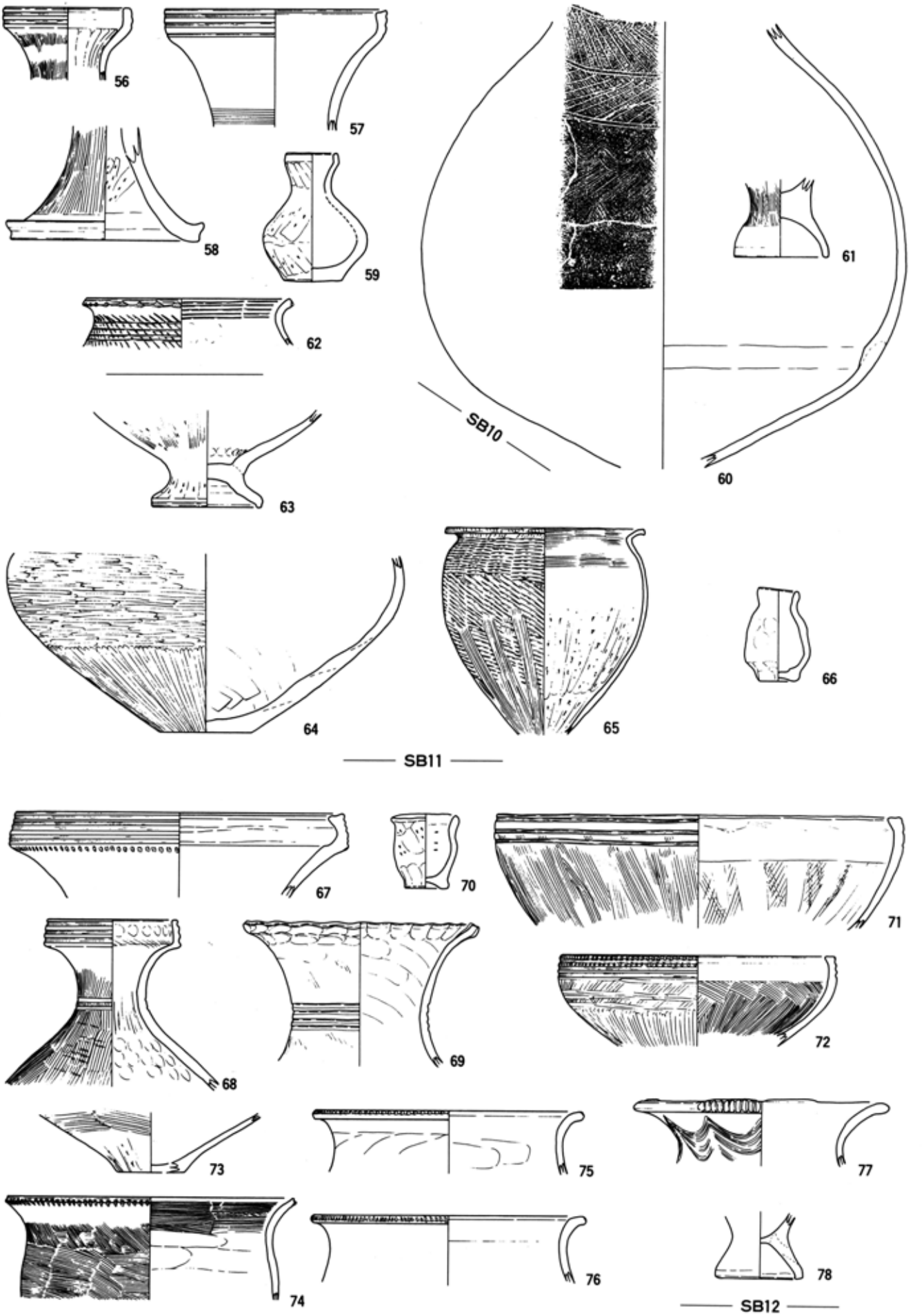

18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
SB05
34
35
36
37
38
39
40
41
SB06

(1 / 4)

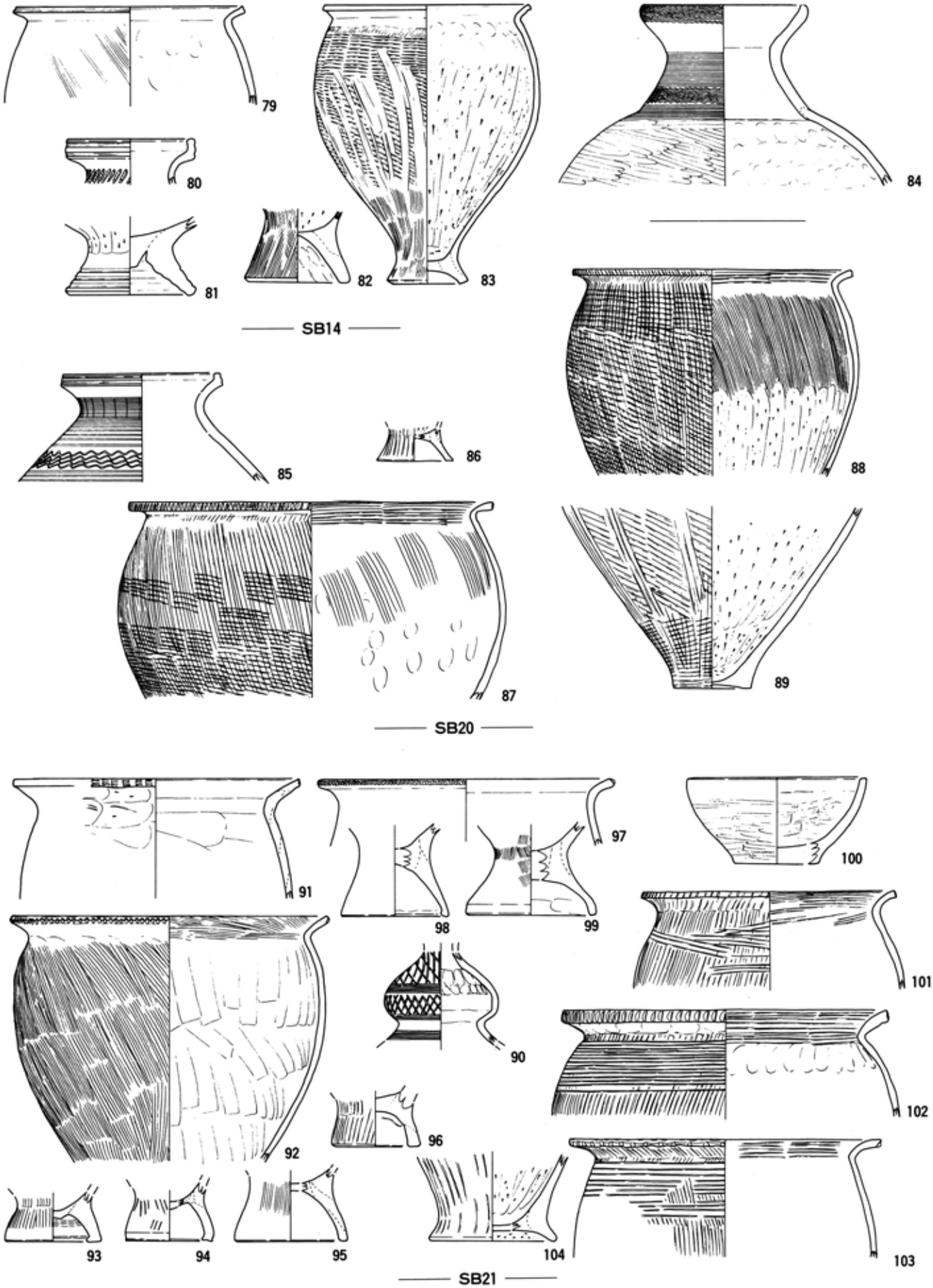


(1 / 4)

図版24

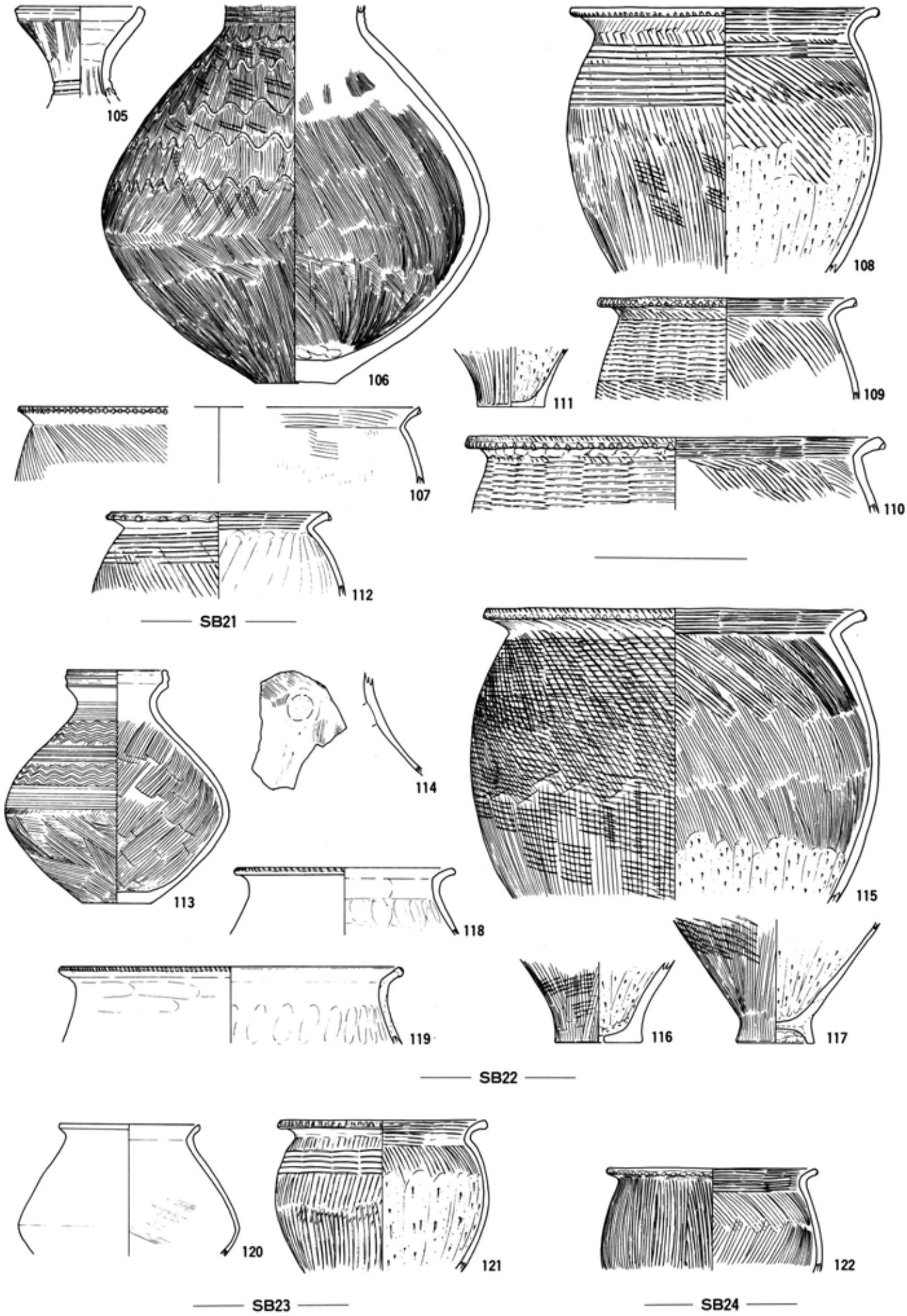

56
57
58
59
62
63
SB10
60
61
64
65
66
SB11
67
70
71
68
69
72
73
75
77
74
76
78
SB12

(1 / 4)

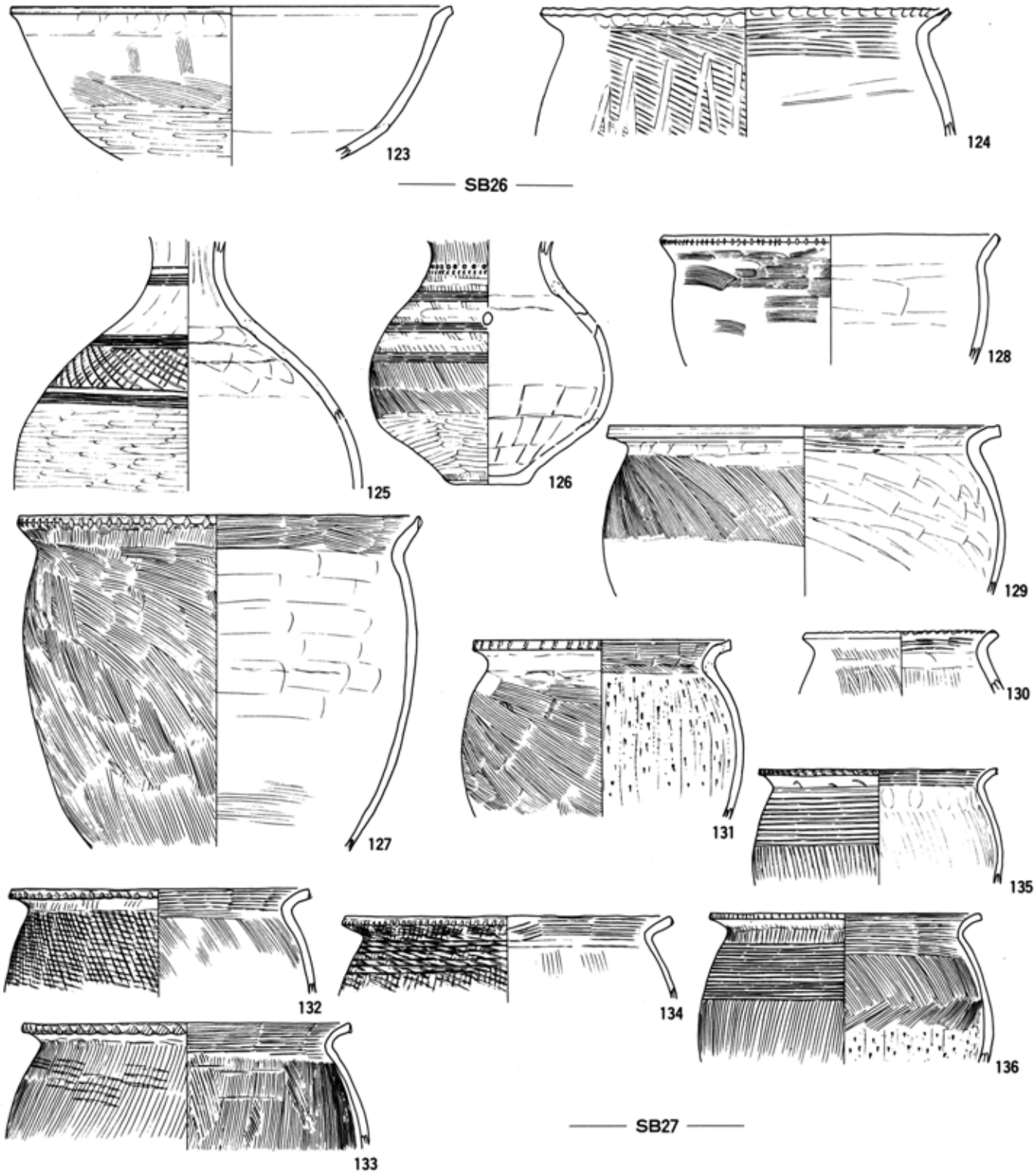

79
80
81
82
83
84
SB14
85
86
87
88
89
SB20
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
90
SB21

(1 / 4)

図版26

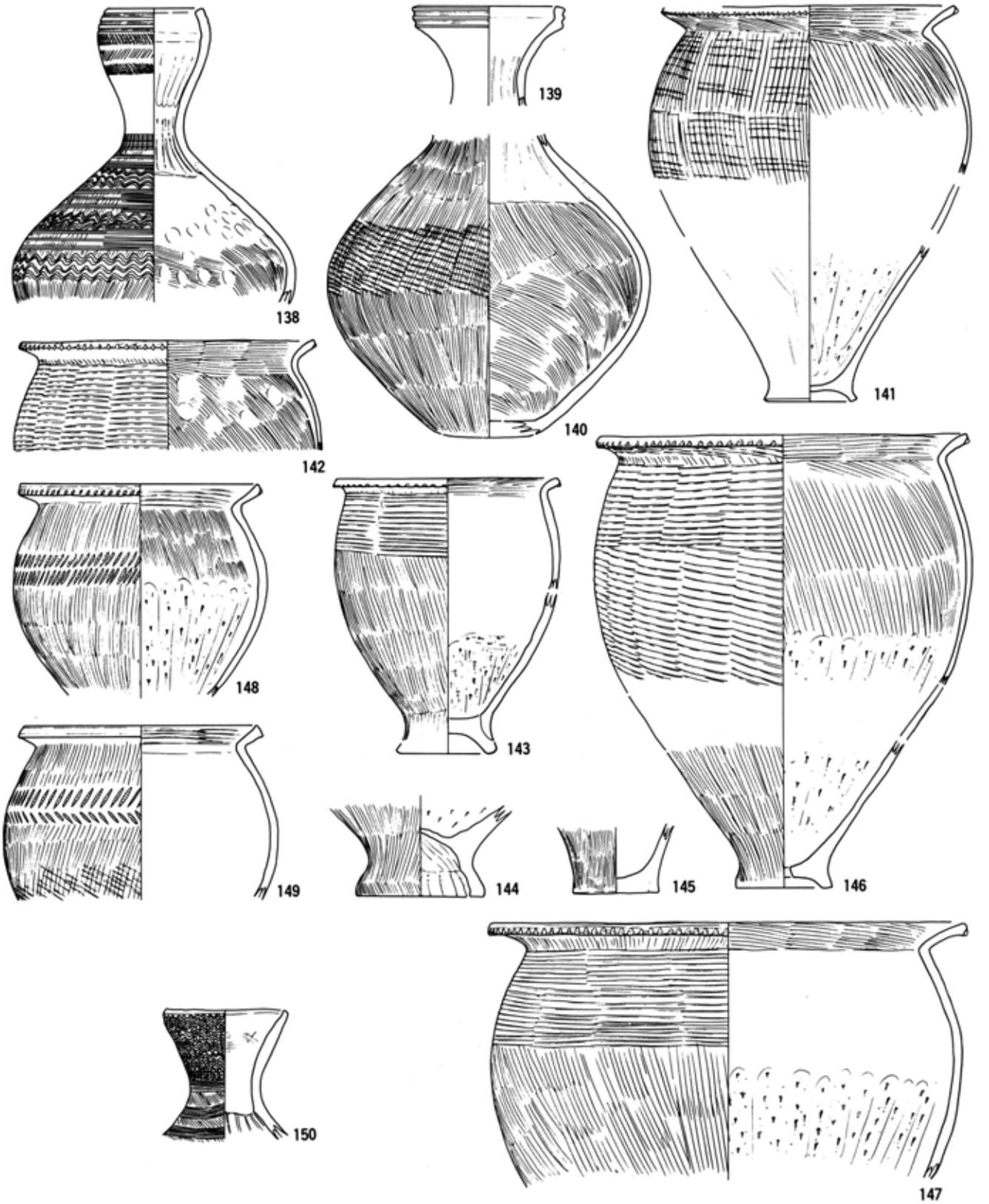

105
106
108
109
111
107
110
112
SB21
113
114
115
118
119
116
117
SB22
120
121
122
SB23
SB24

(1 / 4)


123
124
SB26
125
126
128
129
127
131
130
135
132
134
136
133
SB27
137
SK10

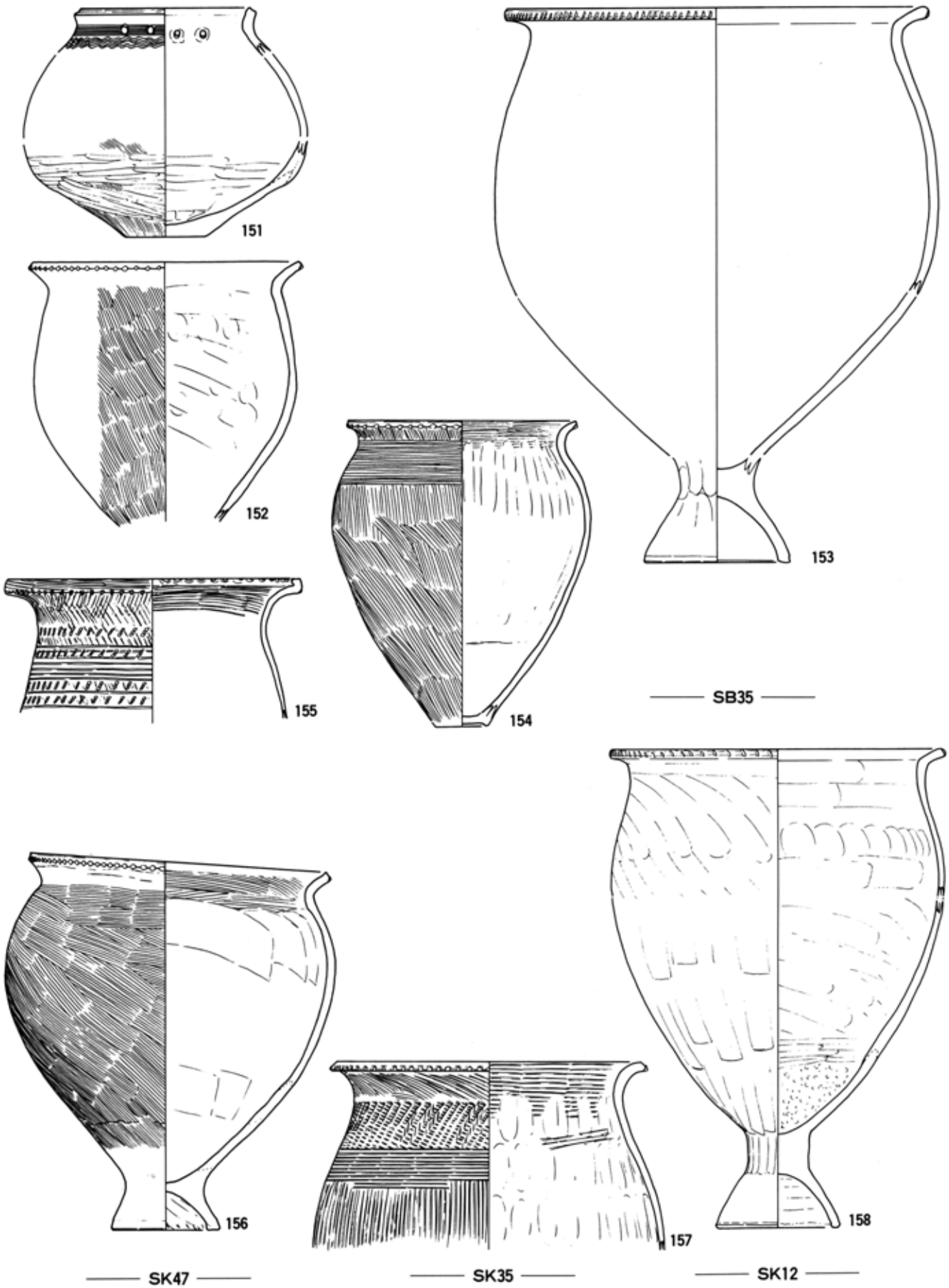
(1 / 4)

図版28

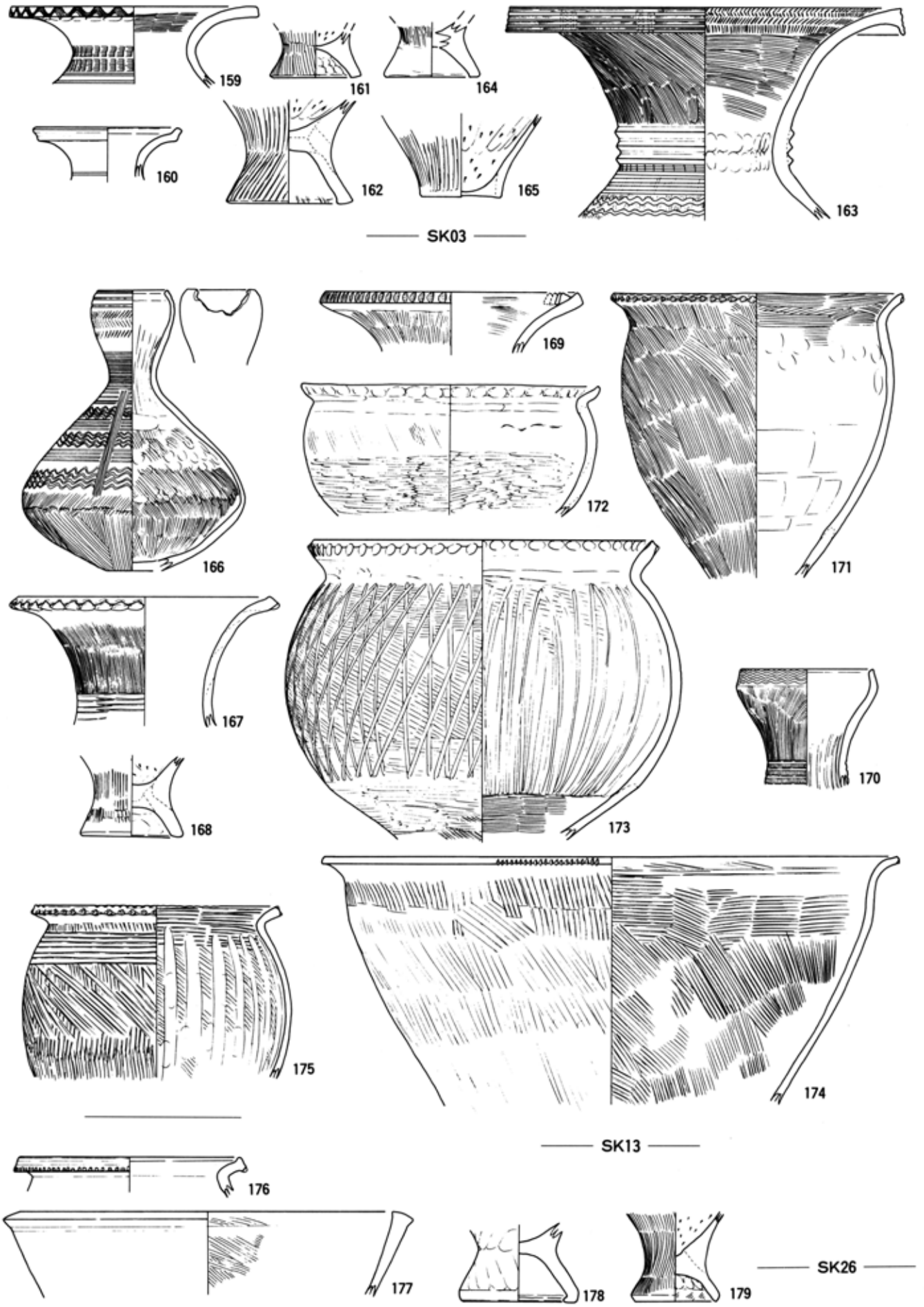


SB35

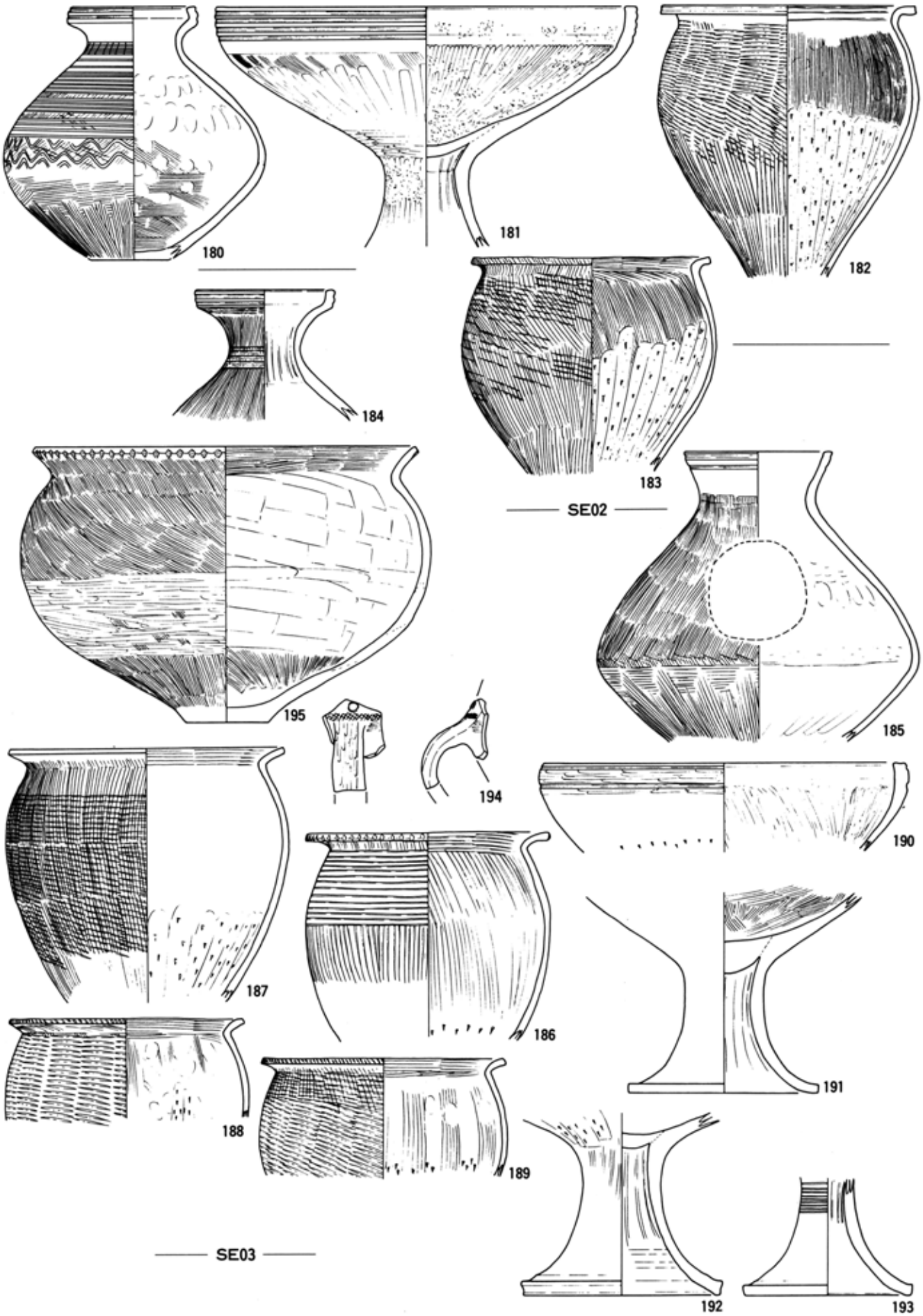
(1 / 4)

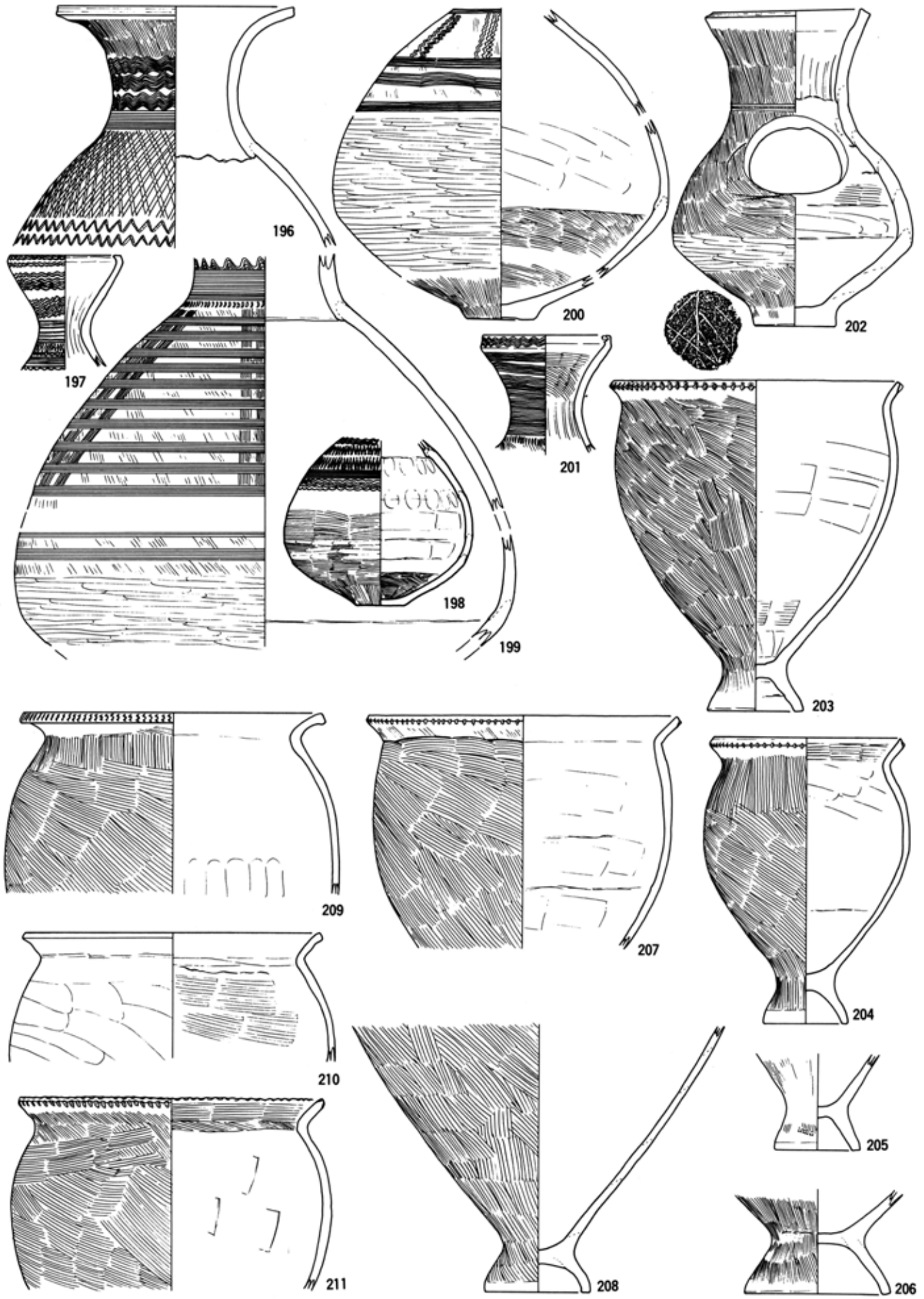

151
152
153
154
155
SB35
156
157
158
SK47
SK35
SK12

図版30


159
161
164
160
162
165
163
SK03
169
172
171
166
167
173
170
168
175
174
SK13
176
177
178
179
SK26

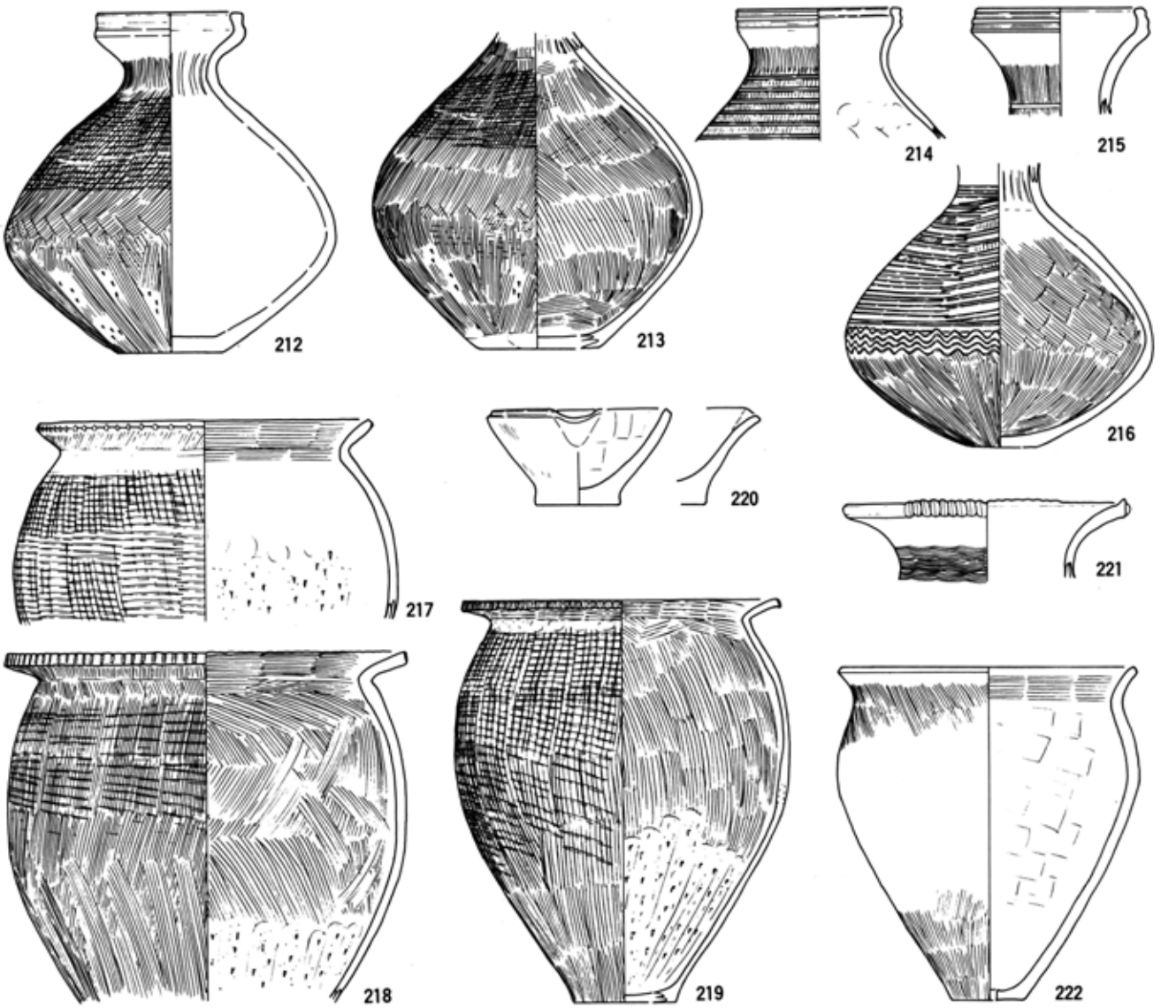
(1 / 4)


180
181
182
184
183
SE02
185
195
194
190
187
186
191
188
189
SE03
192
193

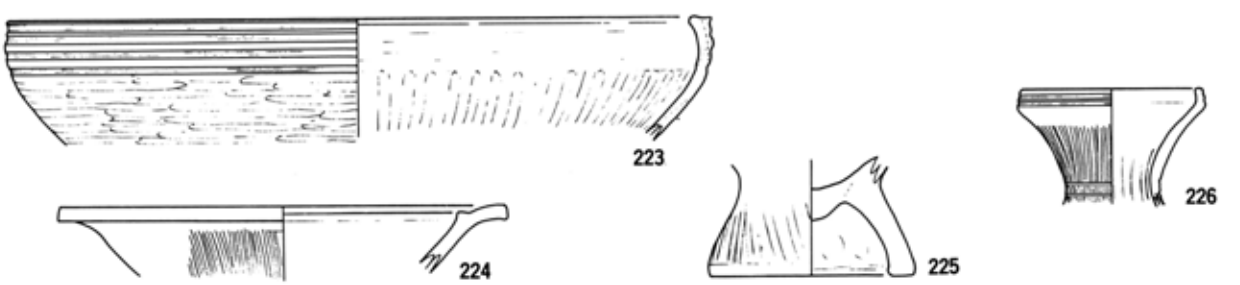


SE03

(1 / 4)



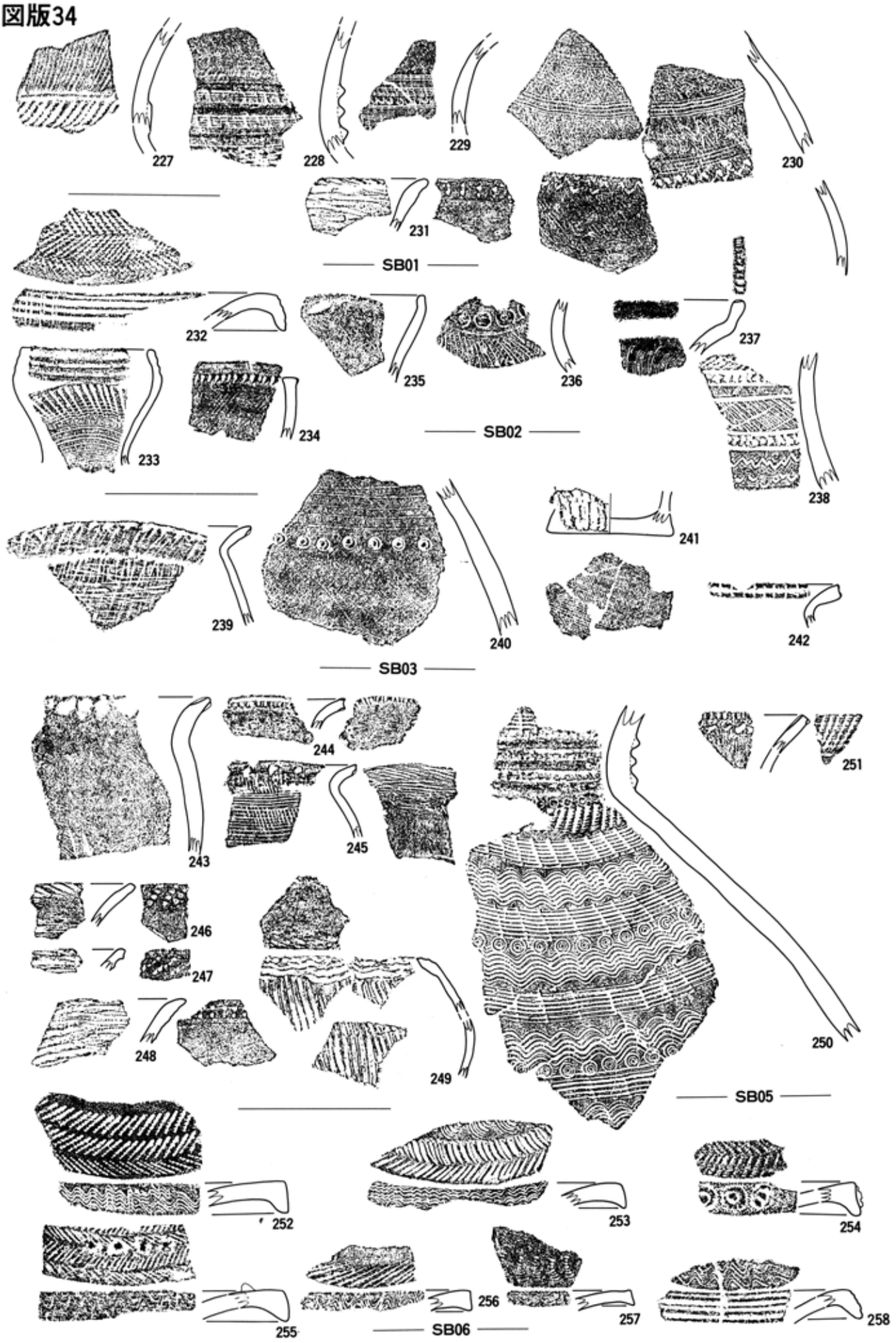
SE03



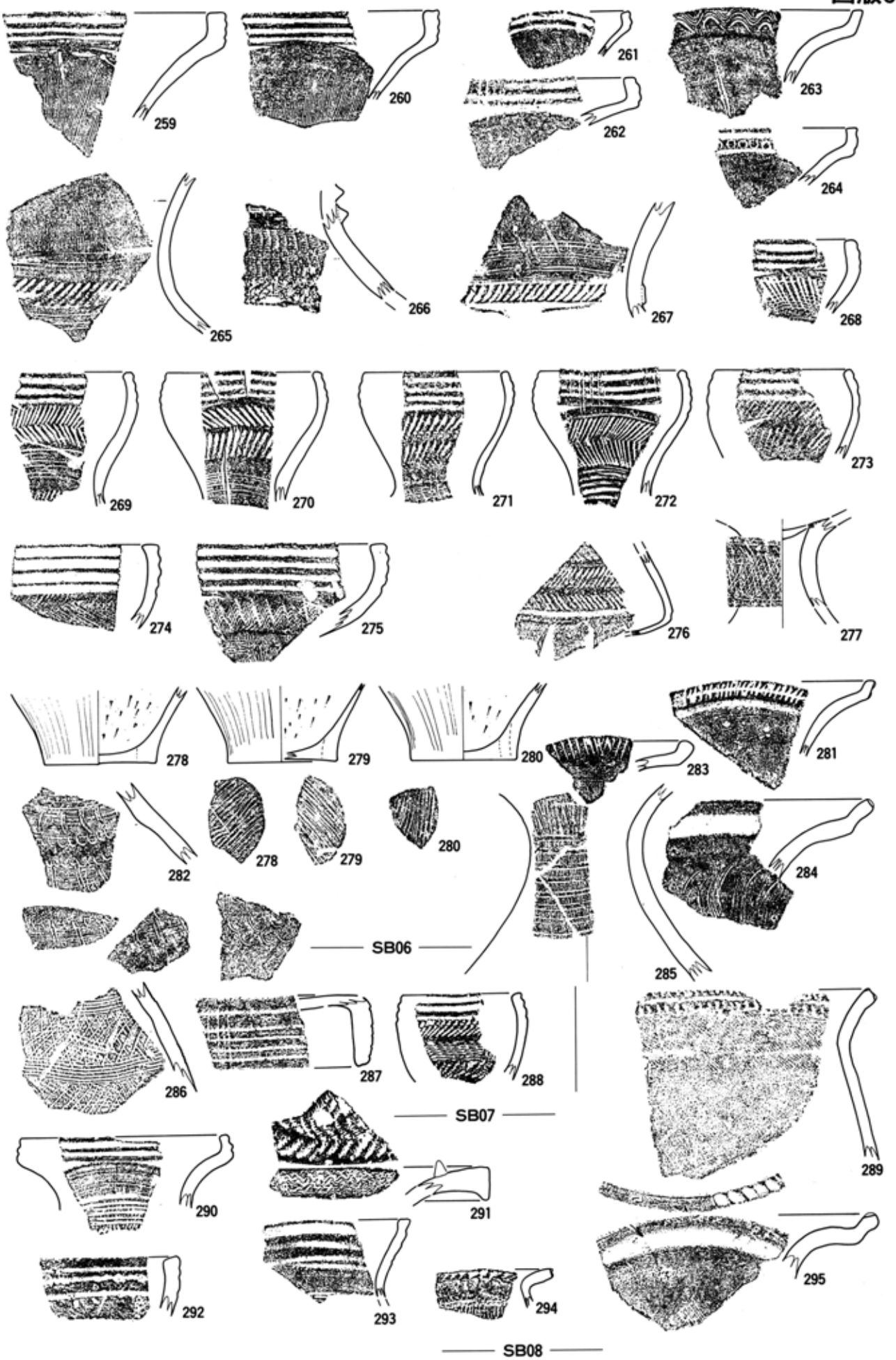
SD01

(1 / 4)

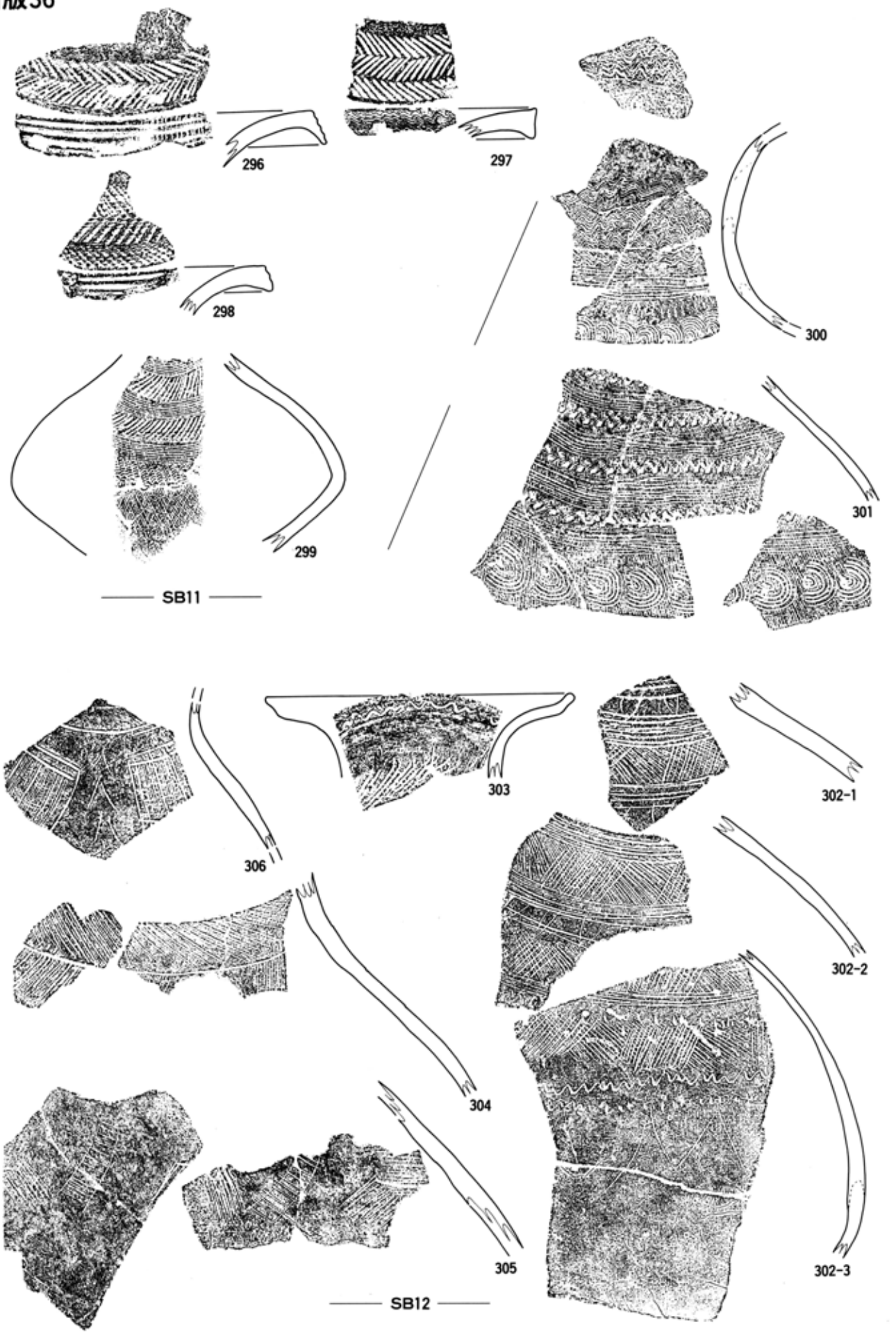
図版34


227
228
229
230
231
SB01
232
233
234
235
236
237
238
SB02
239
240
241
242
SB03
243
244
245
246
247
248
249
250
251
SB05
252
253
254
255
256
257
258
SB06

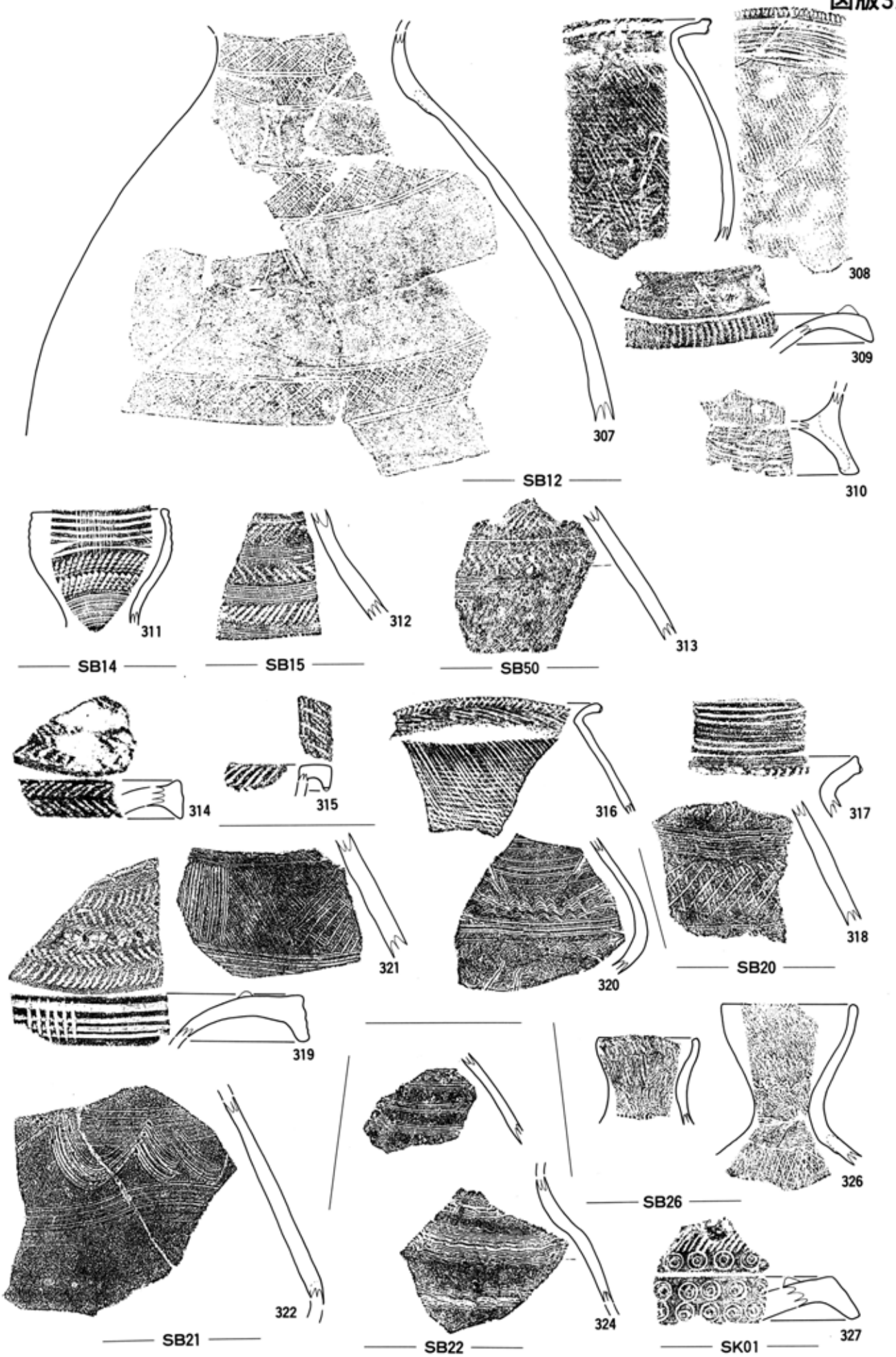
(1 / 3)


259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
SB06
SB07
SB08

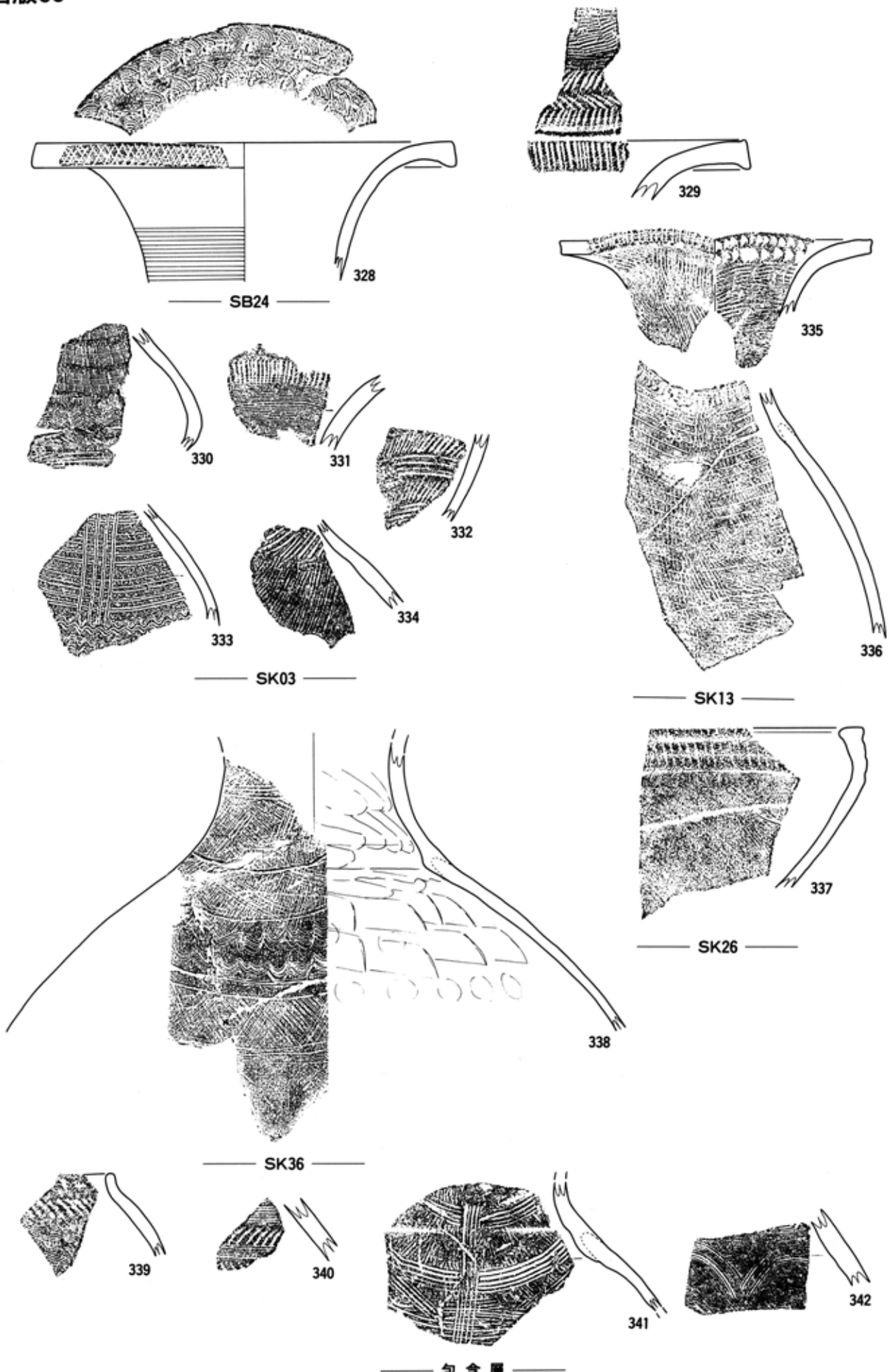
図版36


296
297
298
299
300
301
SB11
302-1
302-2
302-3
303
304
305
306
SB12

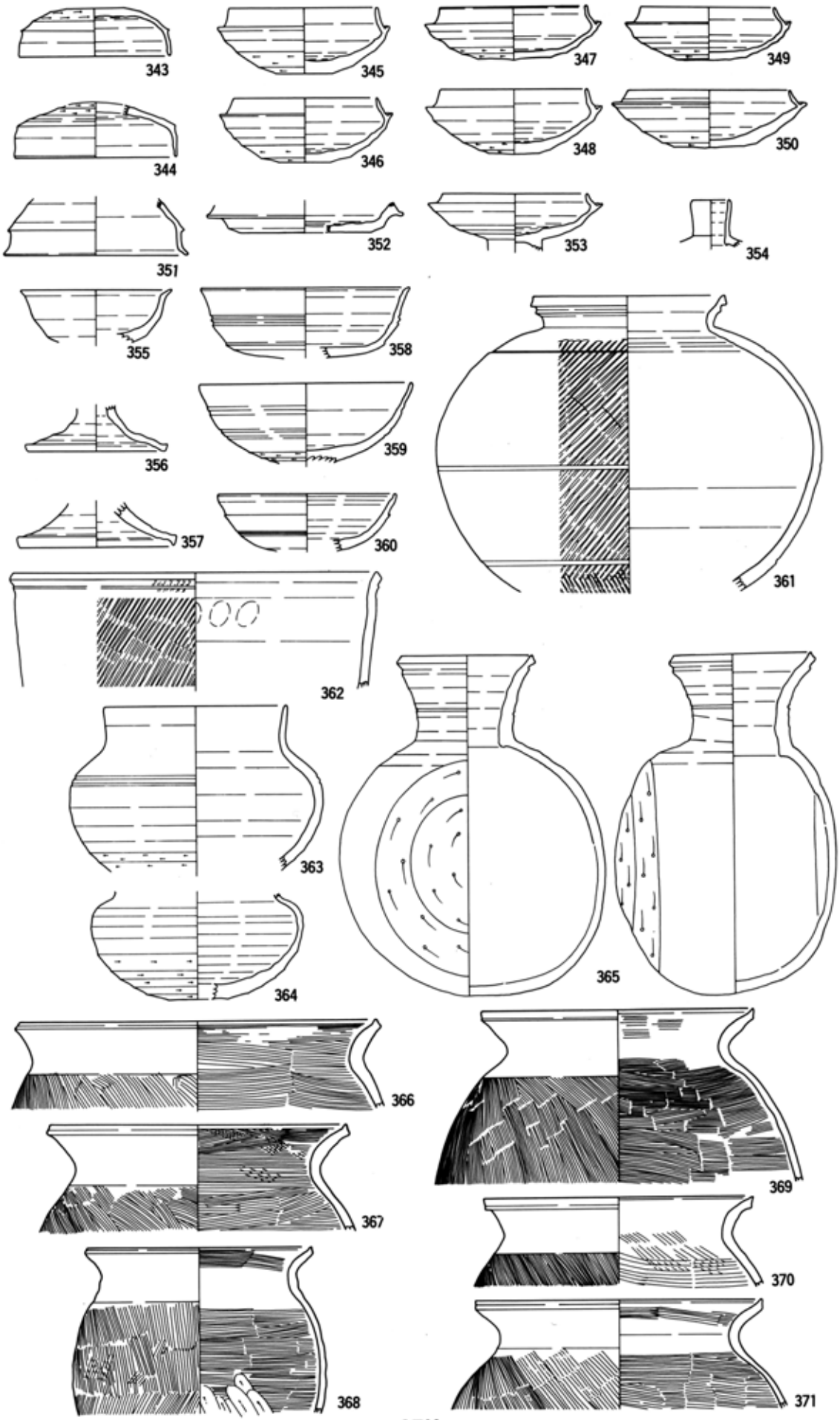
(1 / 3)


307
308
309
310
SB12
311
SB14
312
SB15
313
SB50
314
315
316
317
318
SB20
319
320
321
322
SB21
324
SB22
326
SB26
327
SK01

図版38


328
329
SB24
330
331
332
333
334
SK03
335
336
SK13
337
SK26
338
SK36
339
340
341
342
包含層

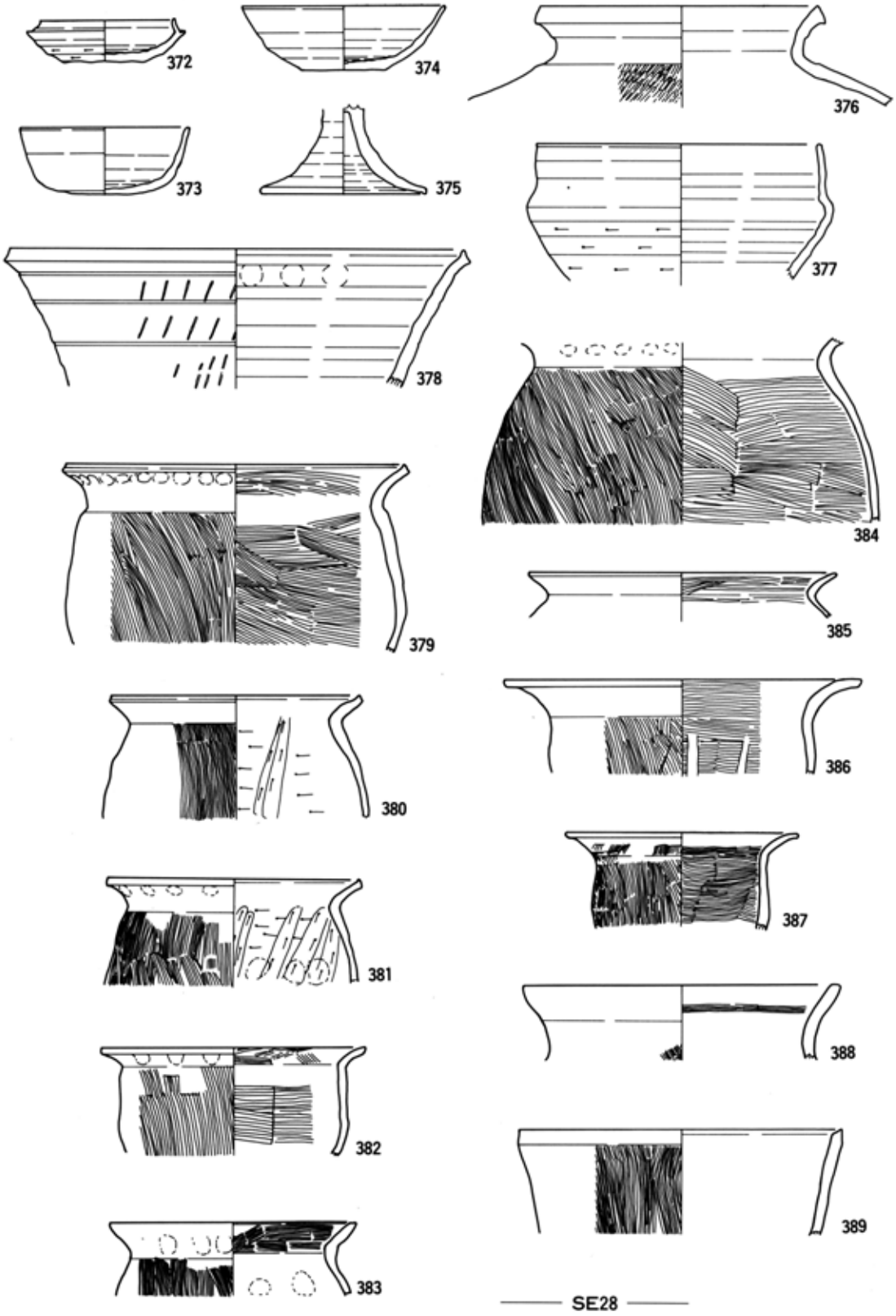
(1 / 3)


343
345
347
349
344
346
348
350
351
352
353
354
355
358
356
359
357
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371

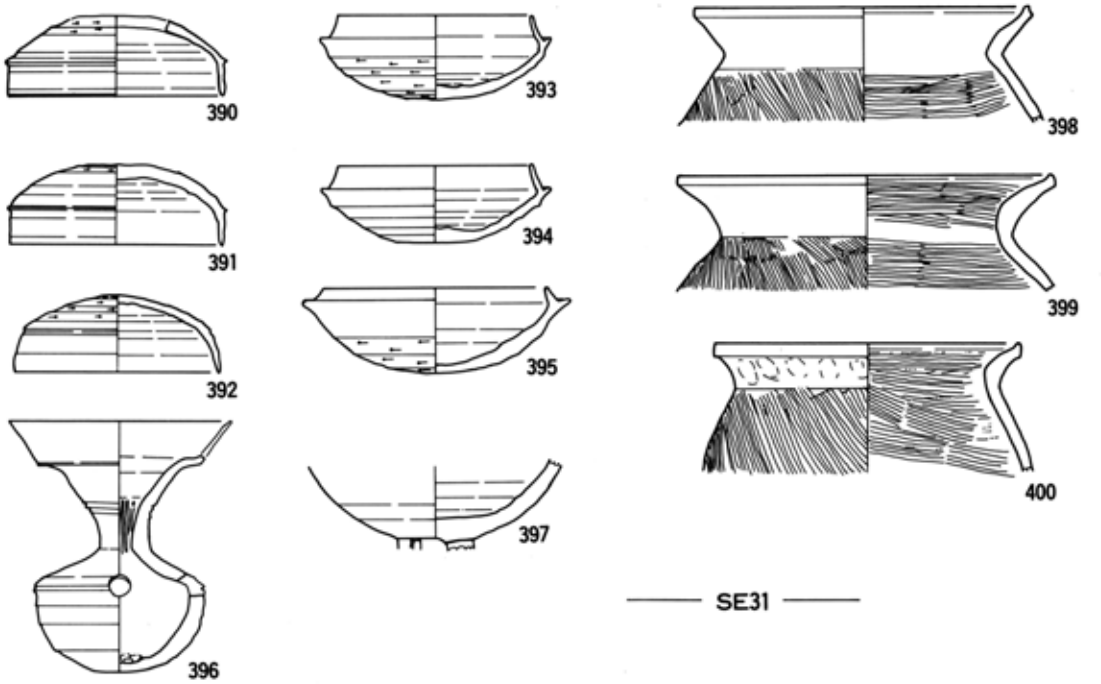
SE09

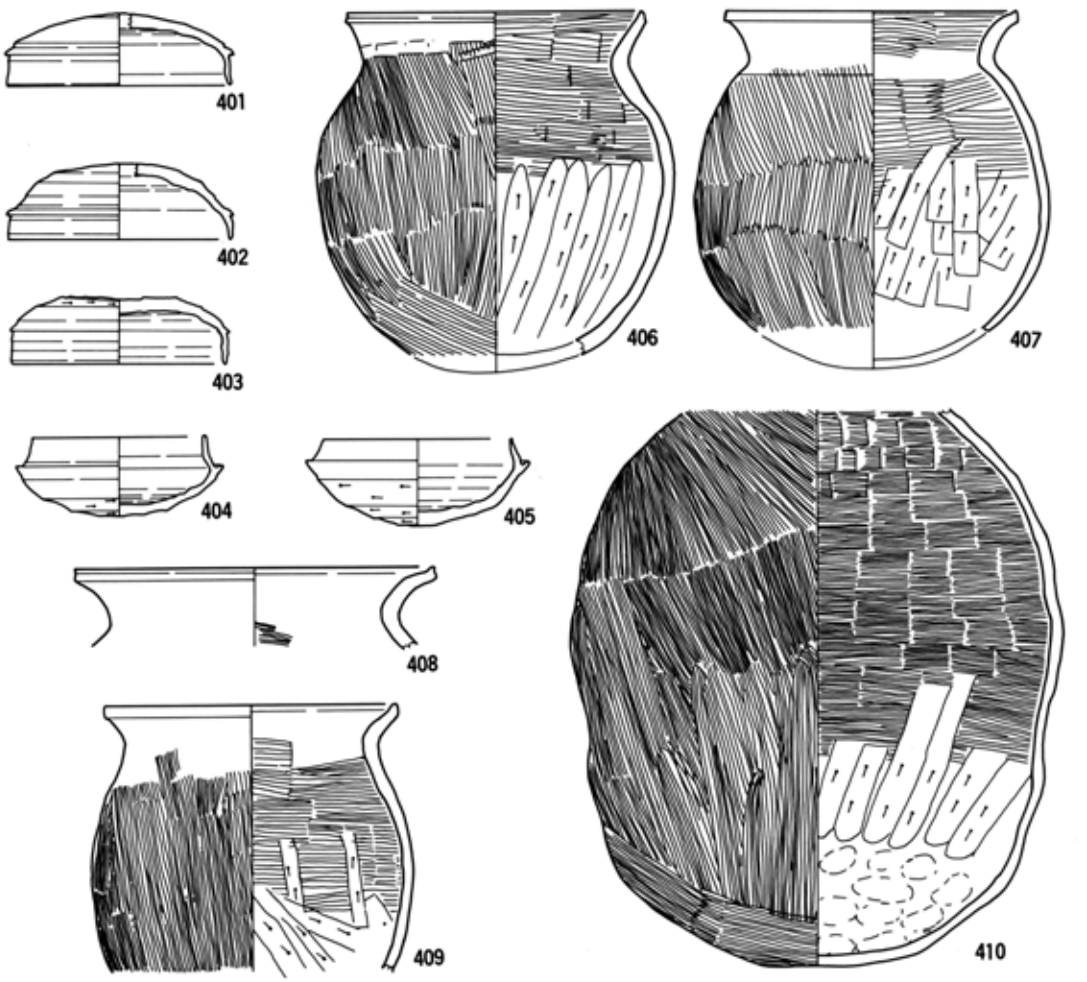
(1 / 4)

図版40


372
374
376
373
375
377
378
384
379
385
380
386
387
381
388
382
389
383
SE28

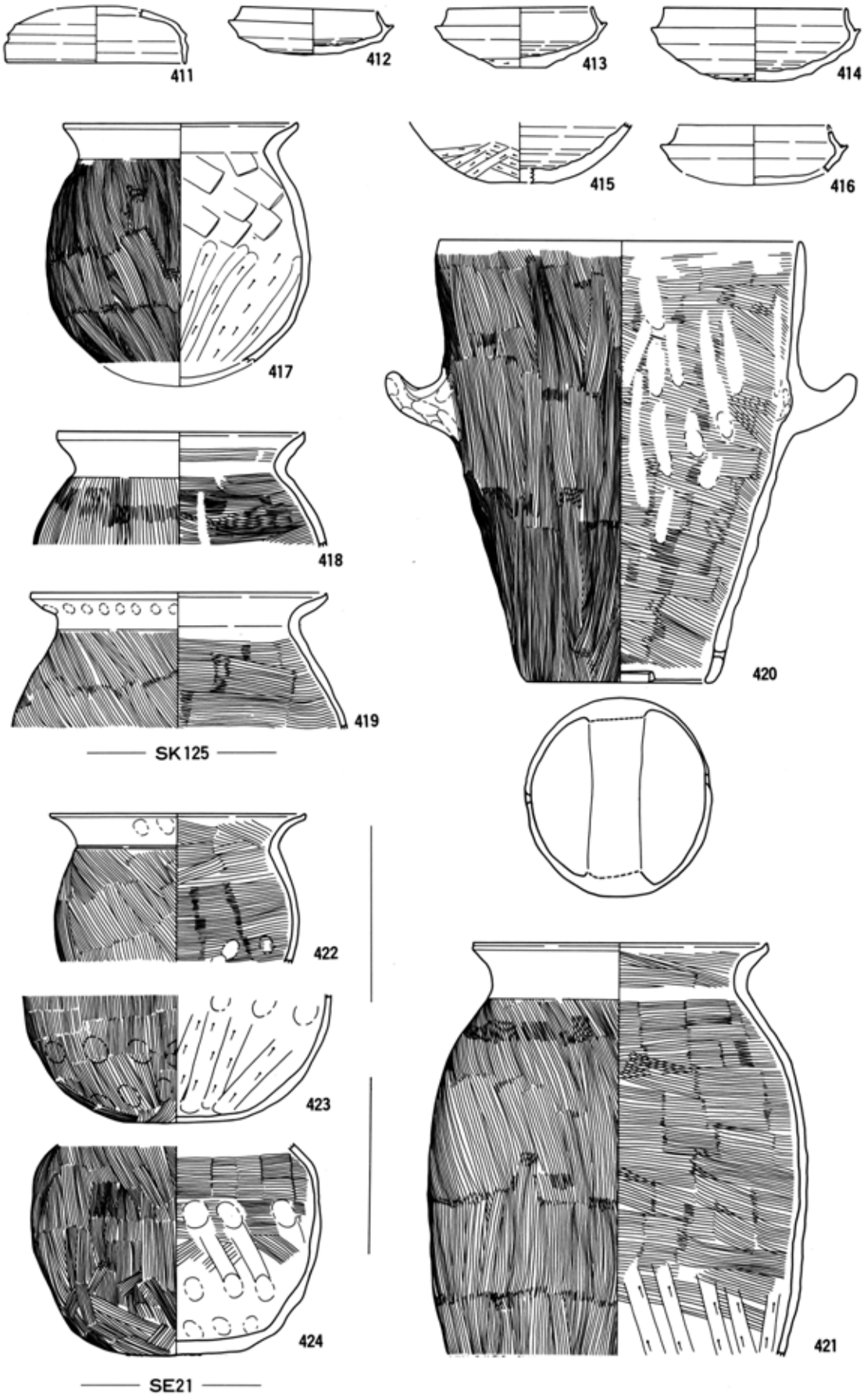
(1 / 4)


390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
SE31

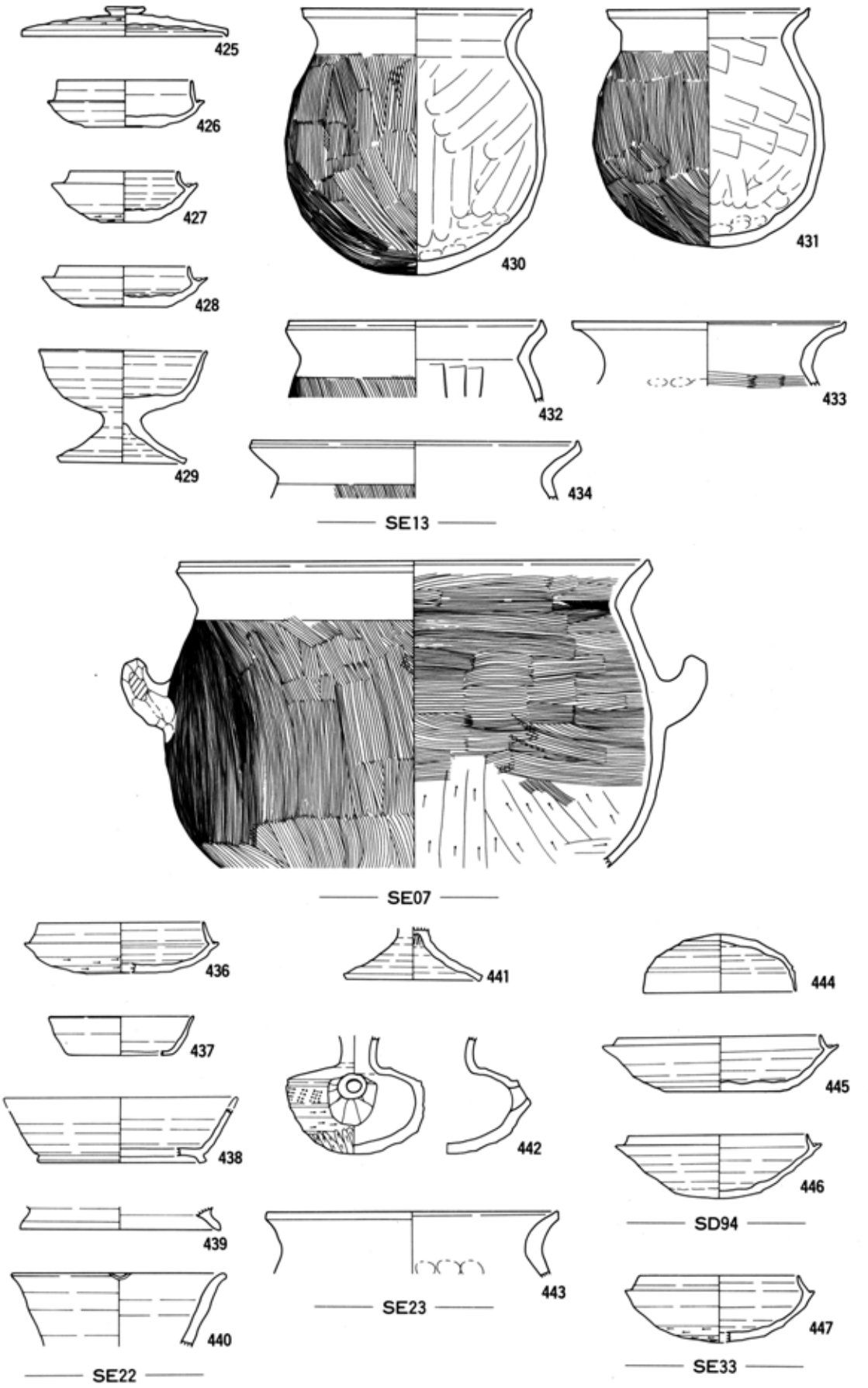

401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
SE32

(1 / 4)

図版42

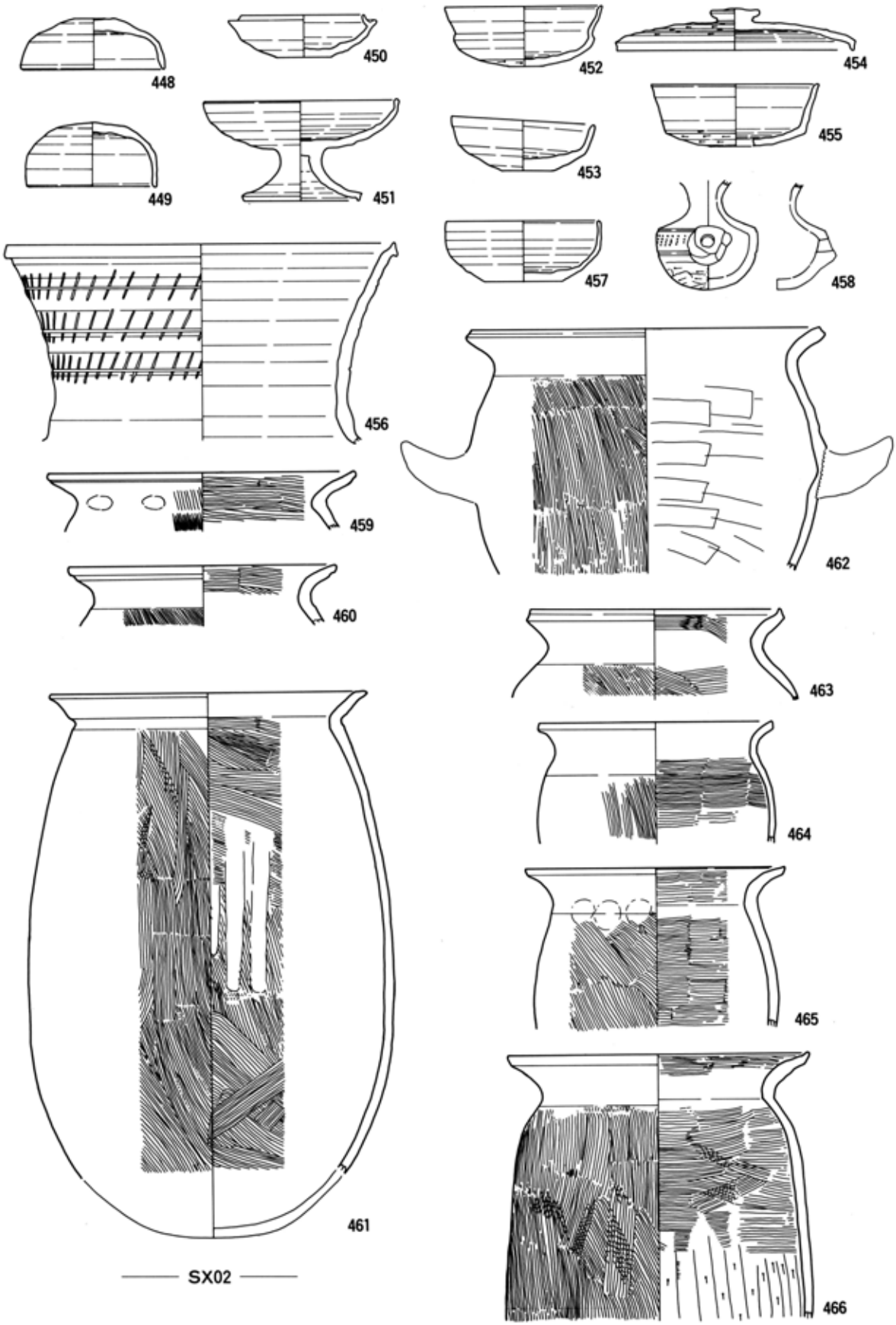

411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
SK125
422
423
424
421
SE21

(1 / 4)

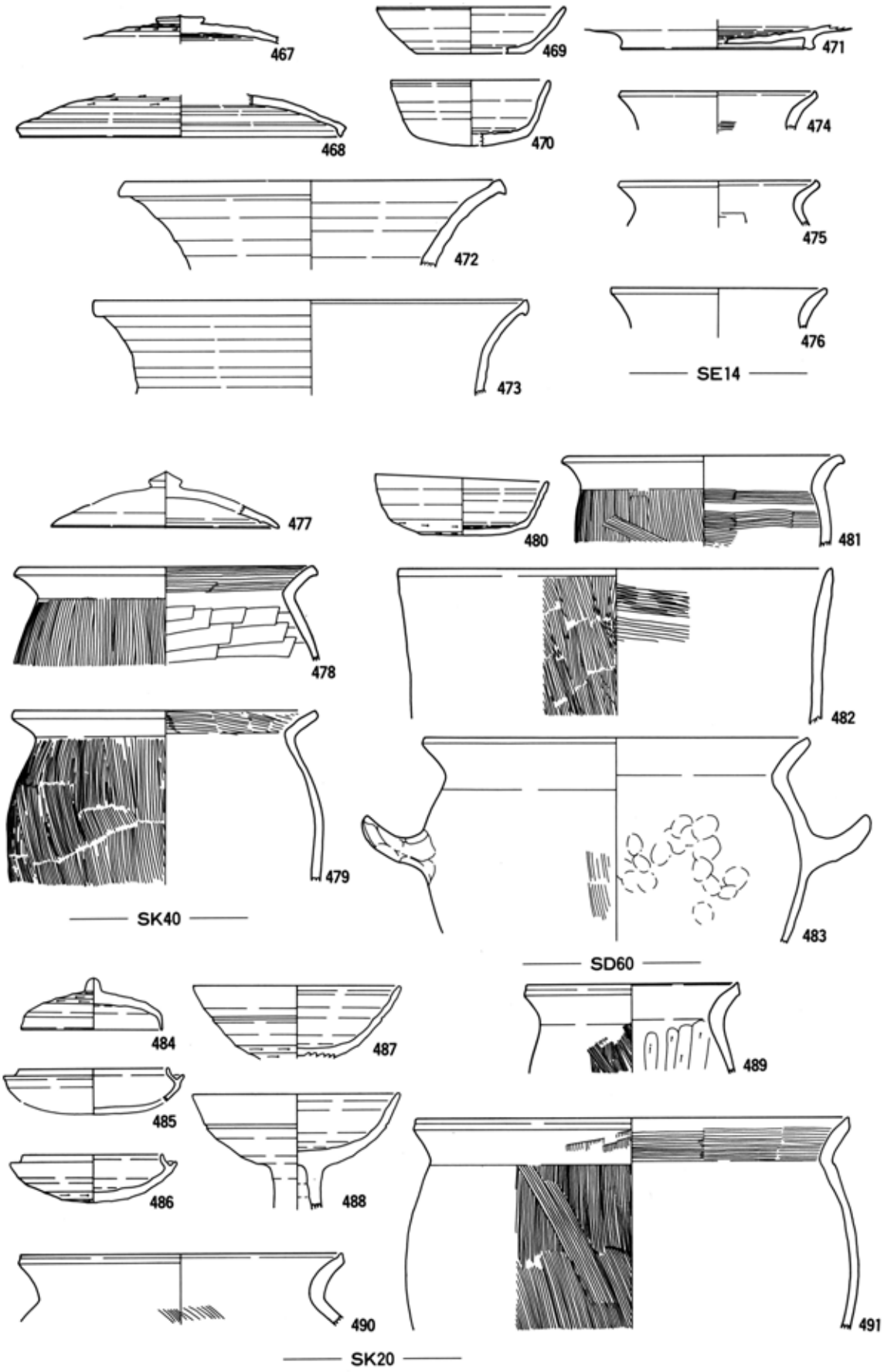

425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
SE13
SE07
436
437
438
439
440
SE22
441
442
443
SE23
444
445
446
SD94
447
SE33

(1 / 4)

図版44

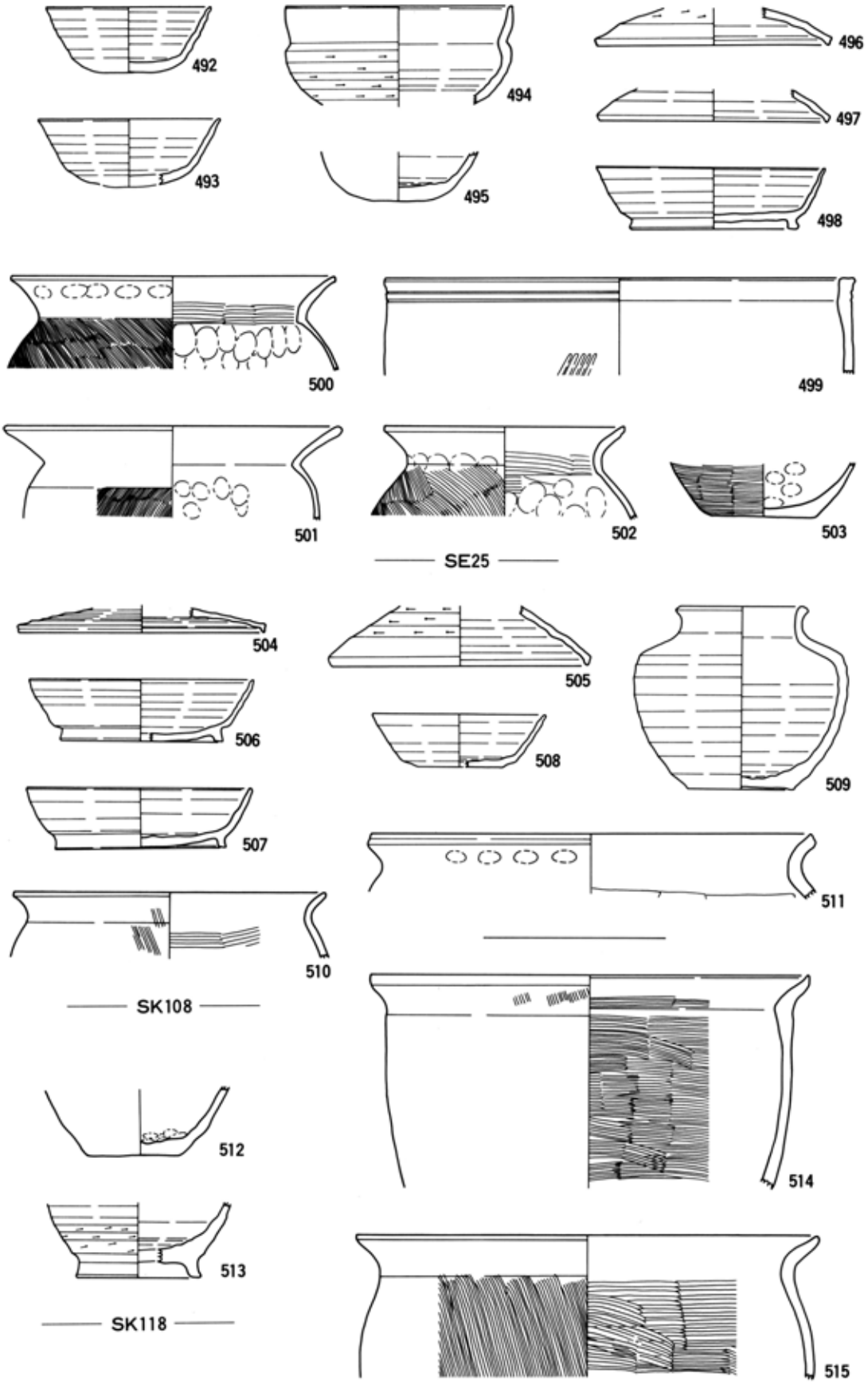

448
450
452
454
449
451
453
455
457
458
456
459
462
460
463
461
464
465
466
SX02

(1 / 4)

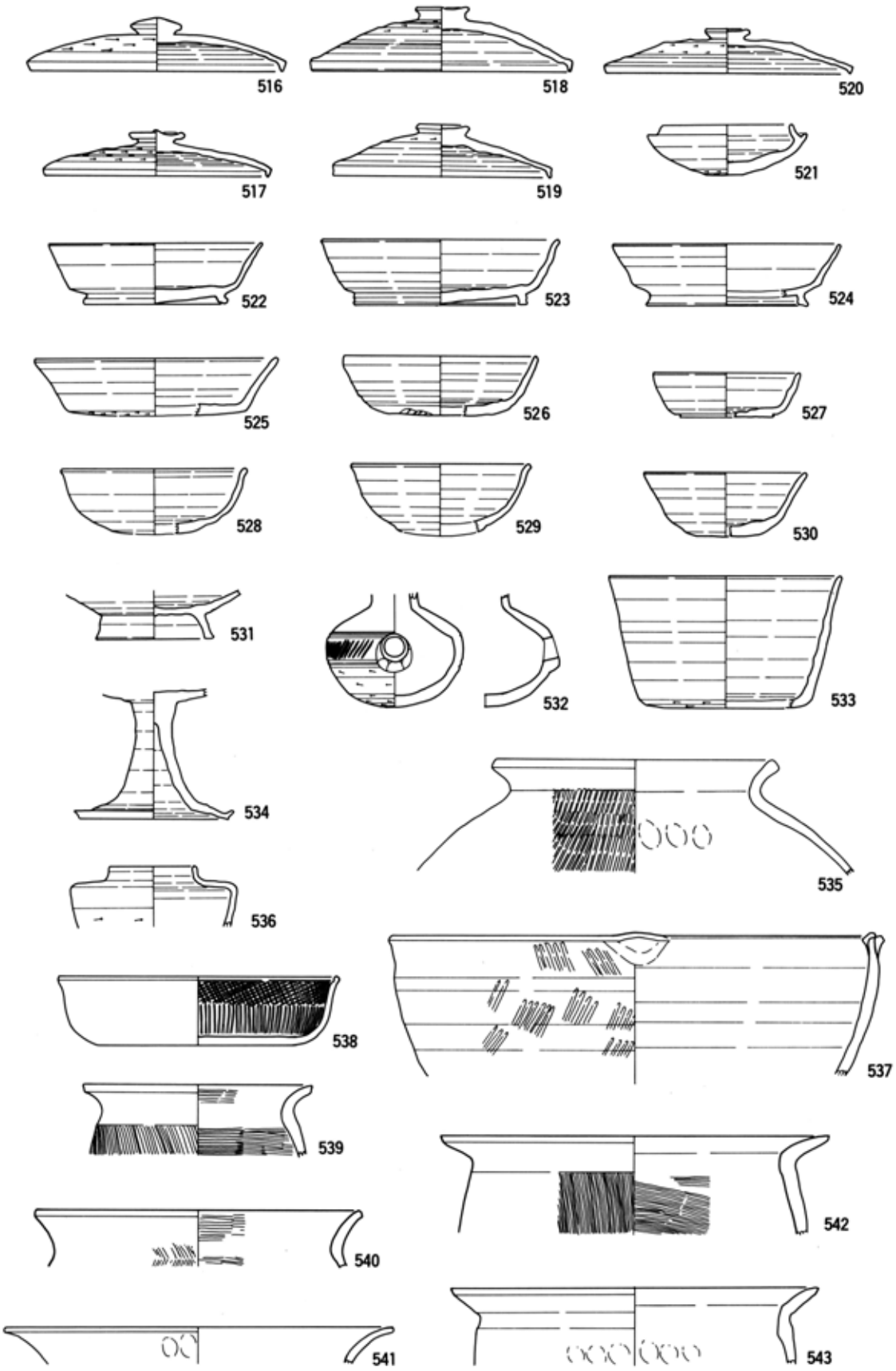

467
469
471
468
470
474
472
475
473
476
SE14
477
480
481
478
482
479
SK40
483
SD60
484
487
489
485
486
488
490
491
SK20

（1／4、473は1／8）

図版46


492
493
494
495
496
497
498
500
499
501
502
503
SE25
504
505
506
508
509
507
511
510
SK108
512
514
513
SK118
515

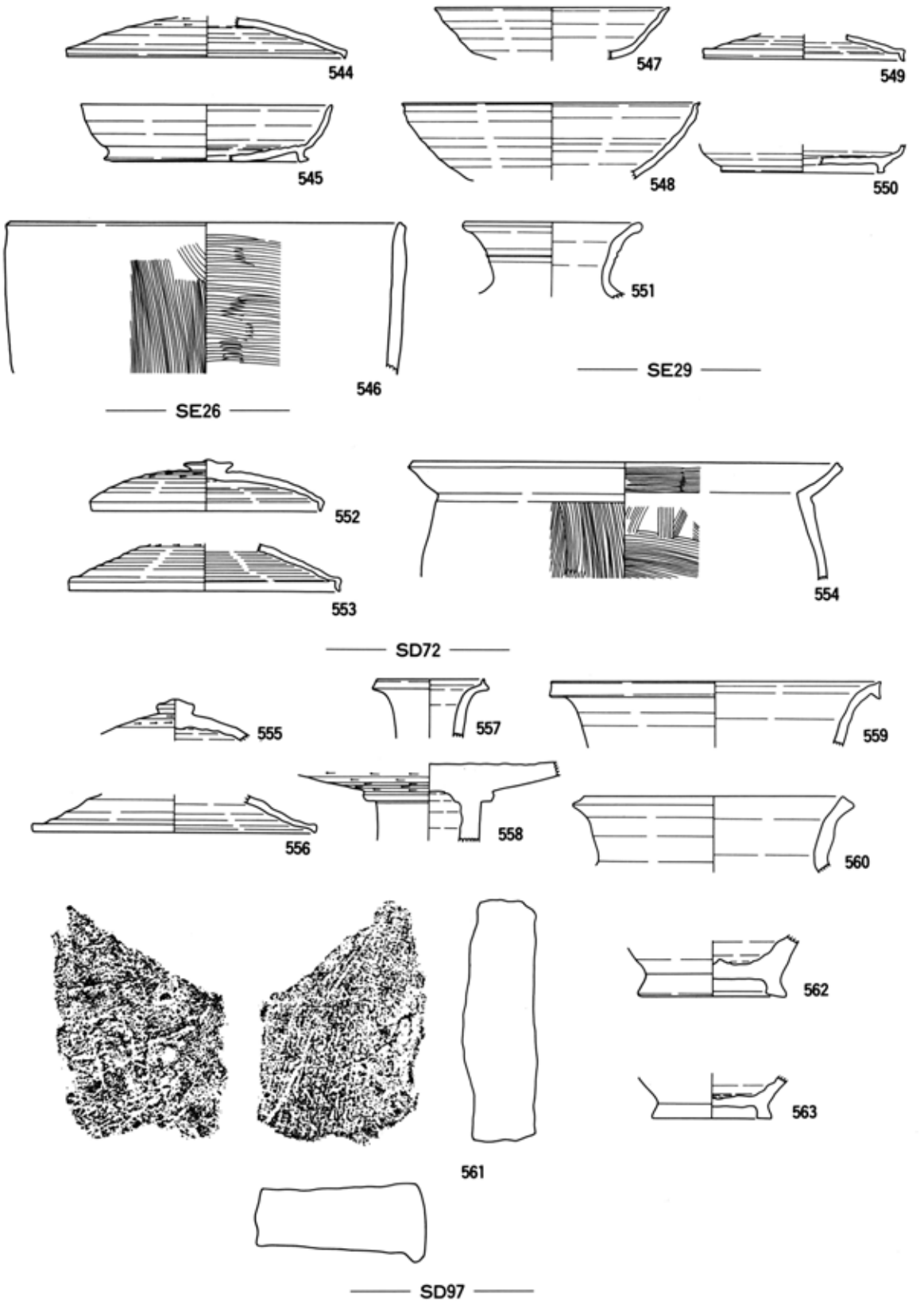
(1 / 4)


516
518
520
517
519
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543

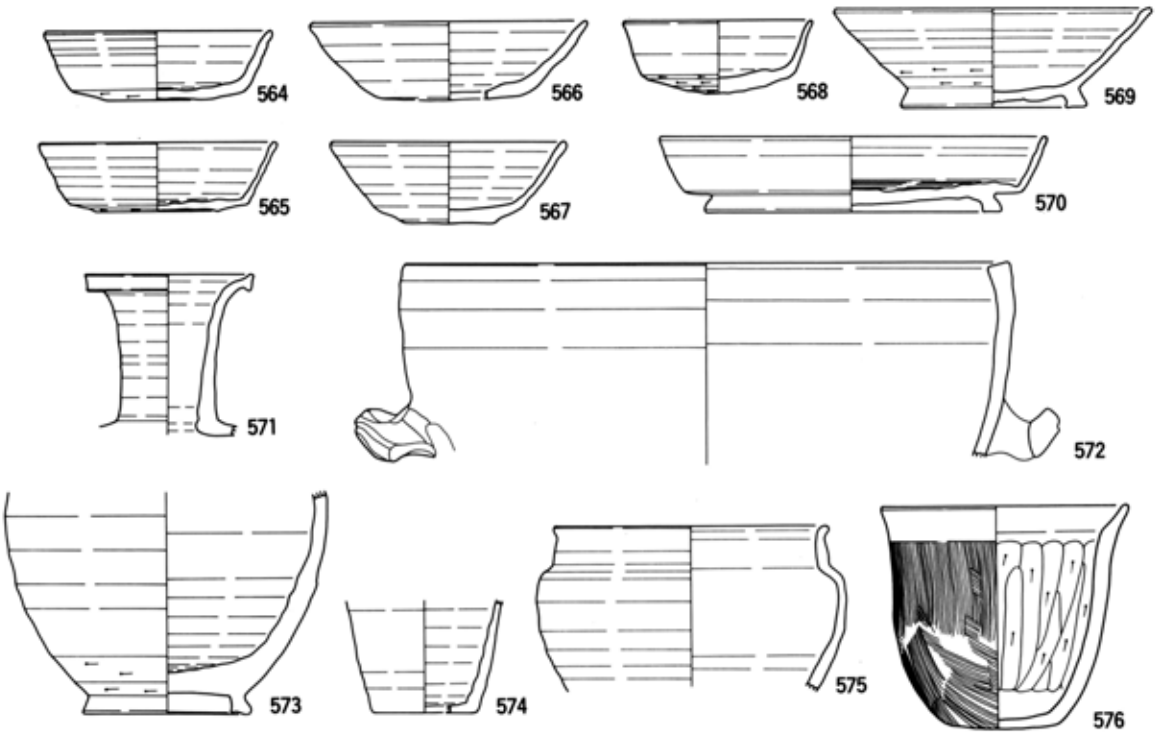
SD41

(1 / 4)

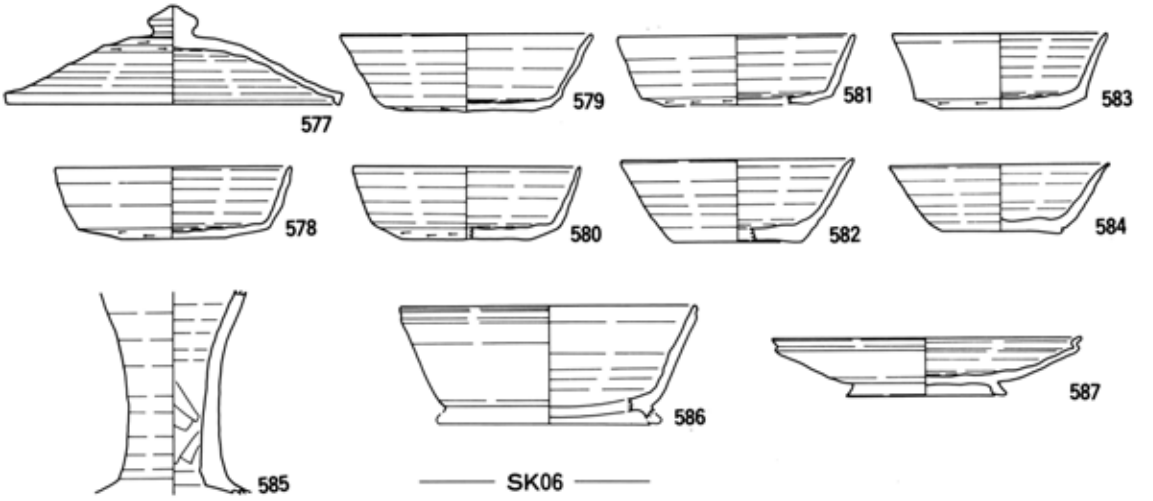
図版48


544
547
549
545
548
550
546
551
SE29
SE26
552
553
554
SD72
555
557
559
556
558
560
562
563
561
SD97

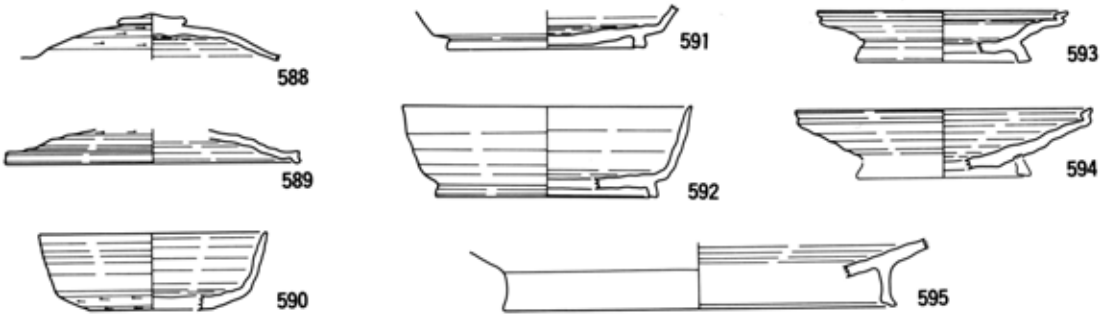
(1 / 4)



SD49



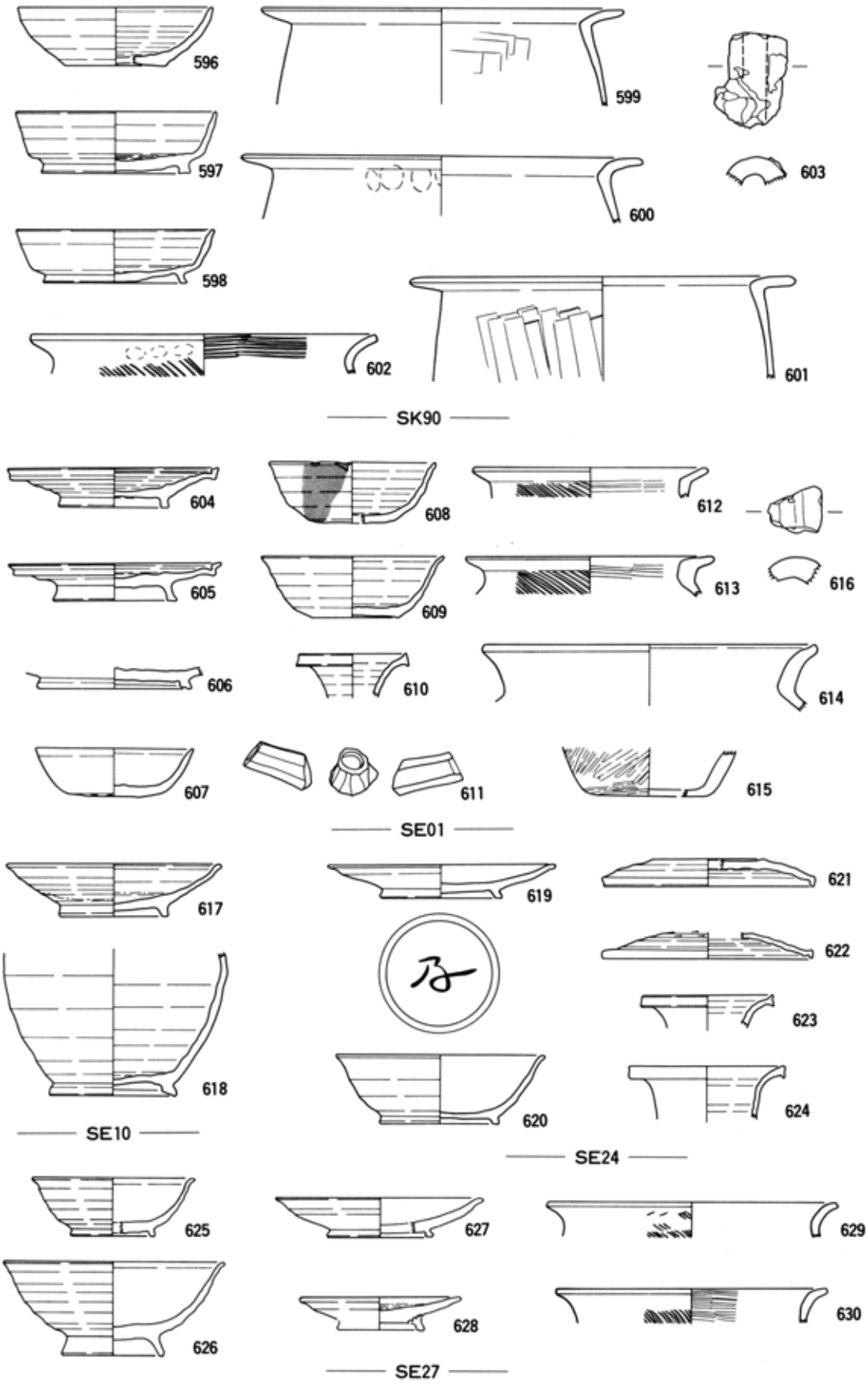
SK06



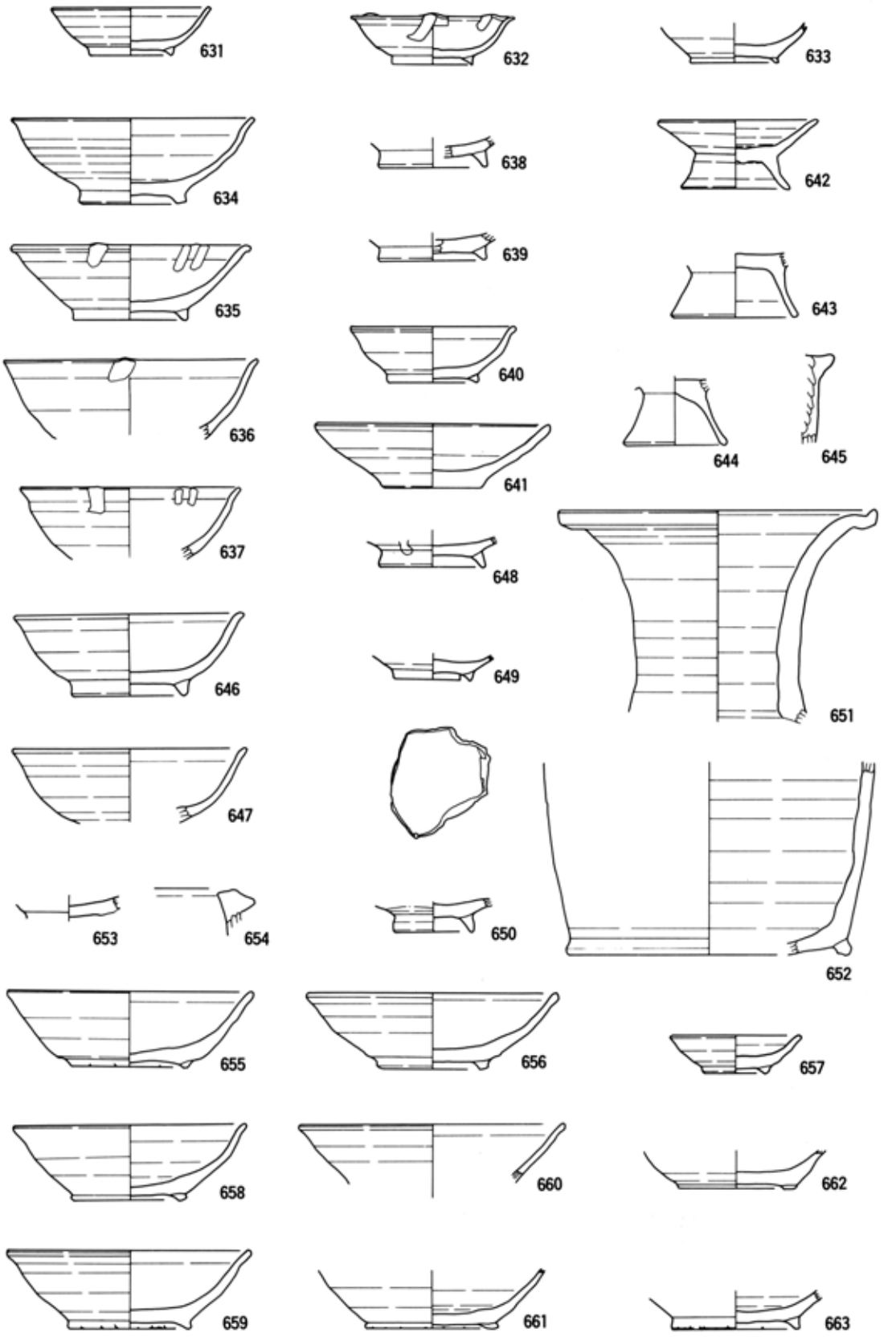
SD98

(1 / 4)

図版50

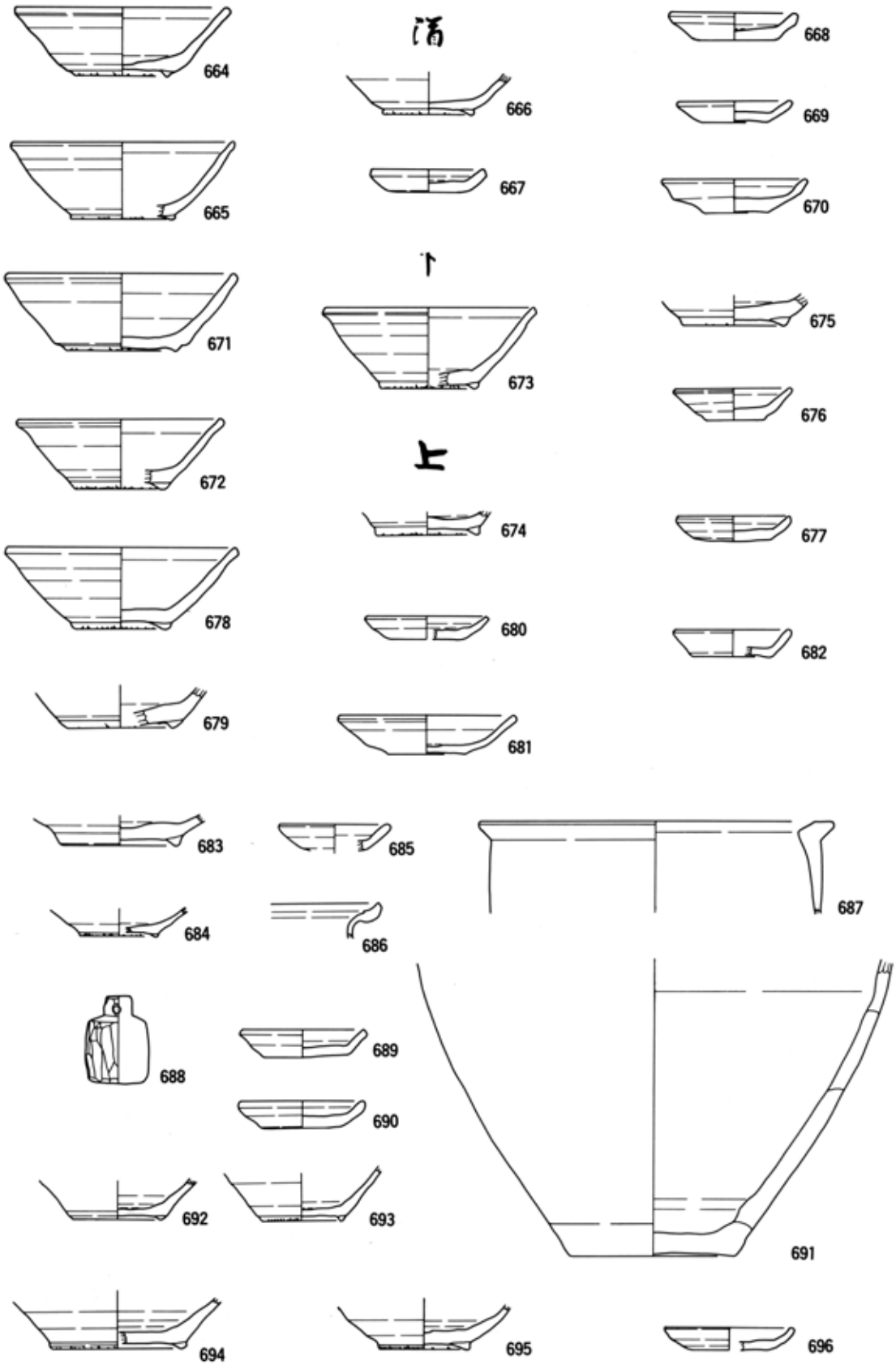

596
599
597
603
600
598
602
601
SK90
604
608
612
605
609
613
616
606
610
614
607
611
615
SE01
617
619
621
622
618
623
620
624
SE10
SE24
625
627
629
626
628
630
SE27

(1 / 4)



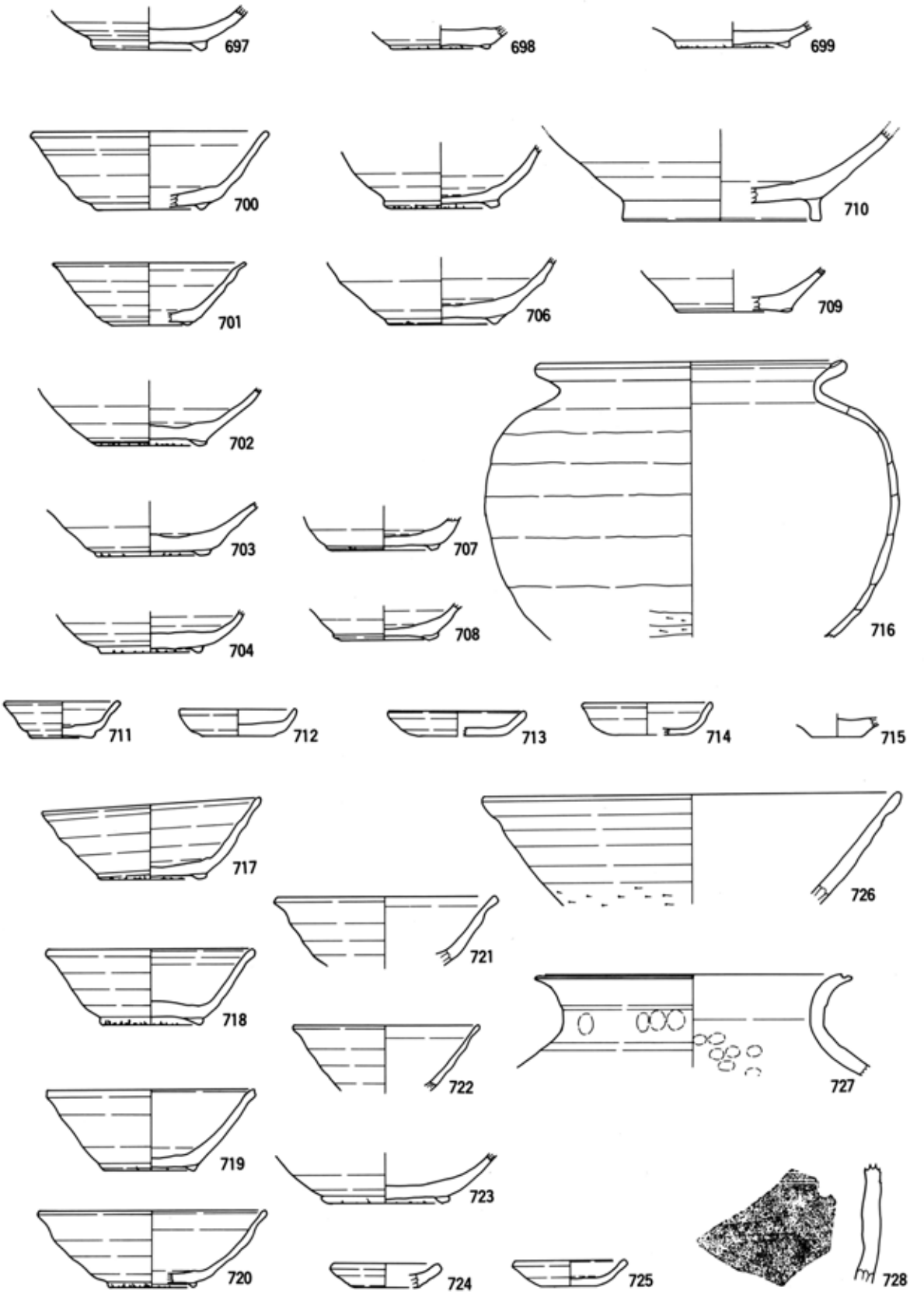
631～633　SE11、　634～645　SE16、　646～654　SE17
655～657　SK05、　658～663　SD49

図版52



664～669 SE04、670 SE12、671～677 SE15、678～682 SE18
683～687 SE20、688 SK19、689～691 SK77、692・693 SK78、694～696 SK144

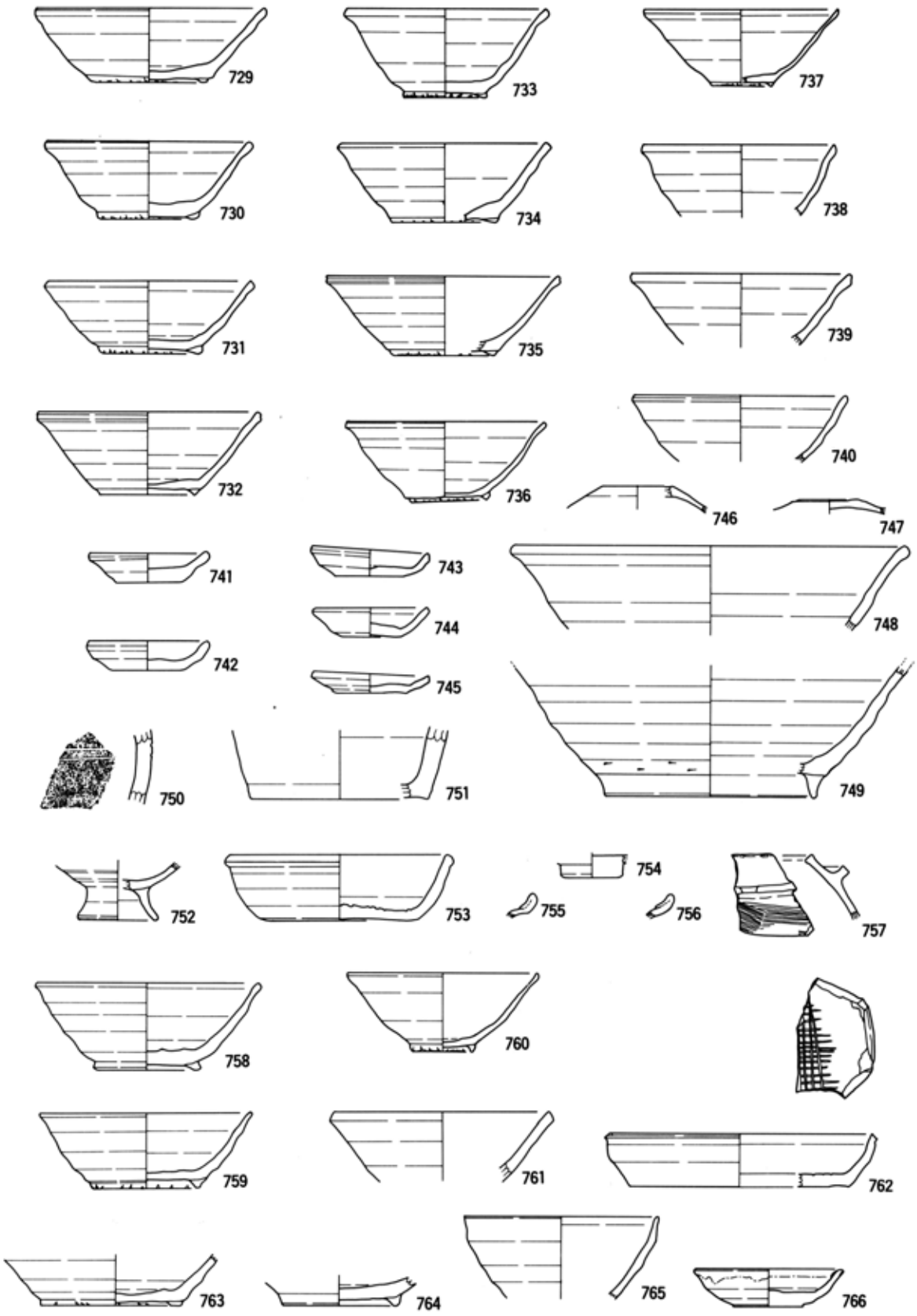
（1／4、688は1／2）



697～699 SD05、700～716 SD15、717～728 SD43

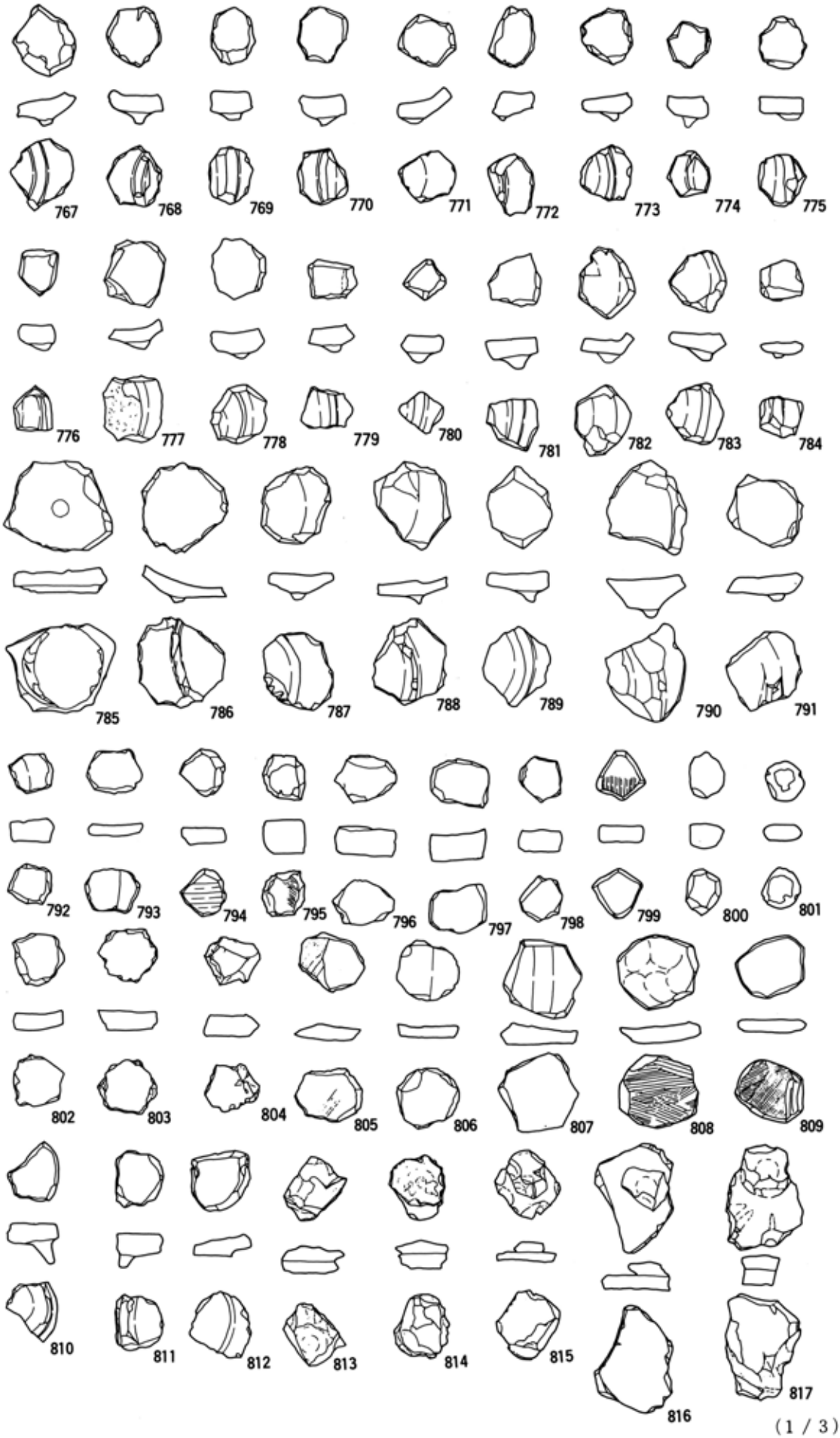
(1 / 4)

図版54

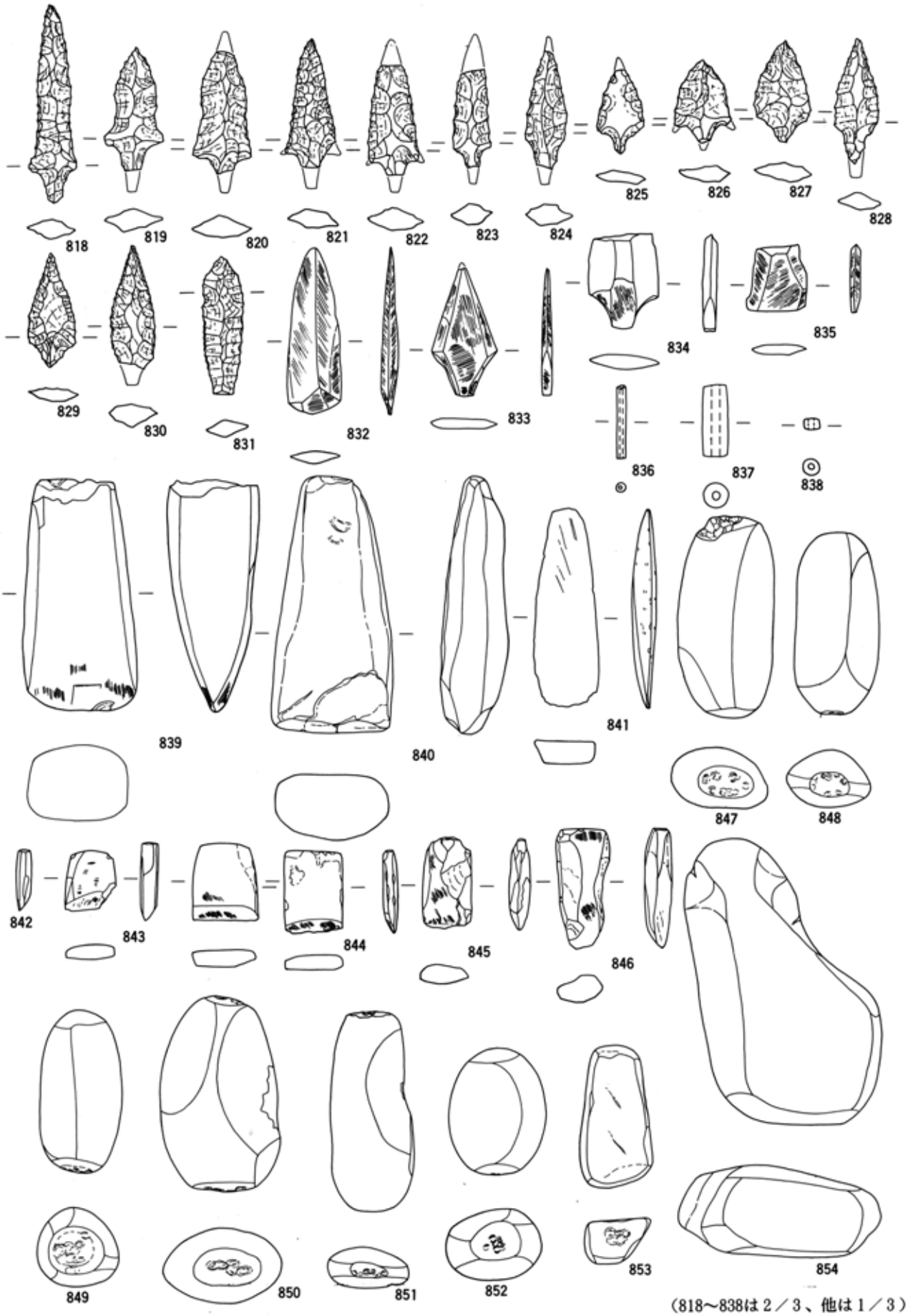


729～757　SD50、758～762　SD63、763・764　SD59
765・766　SK171

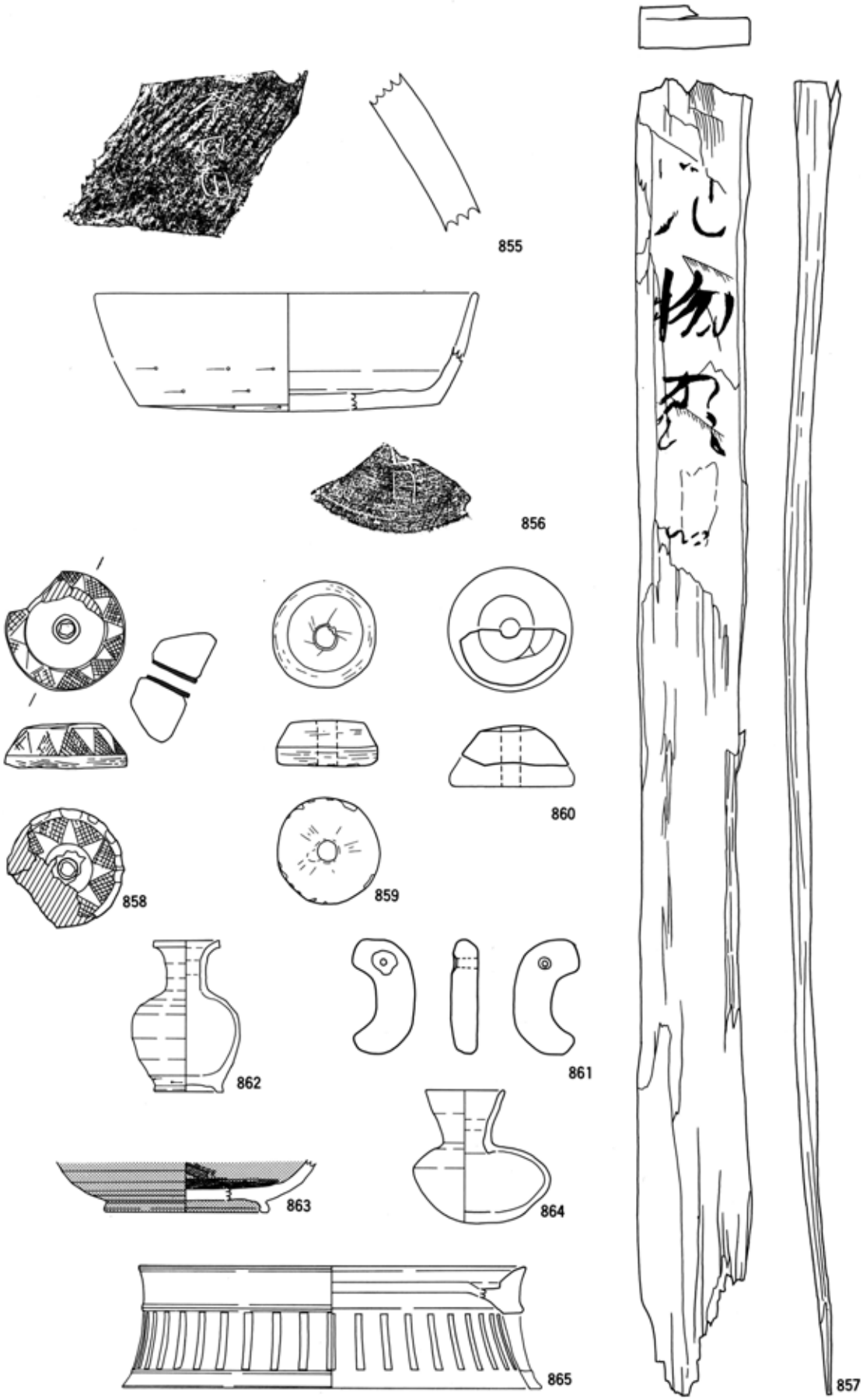
（1 / 4）


767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817

図版56

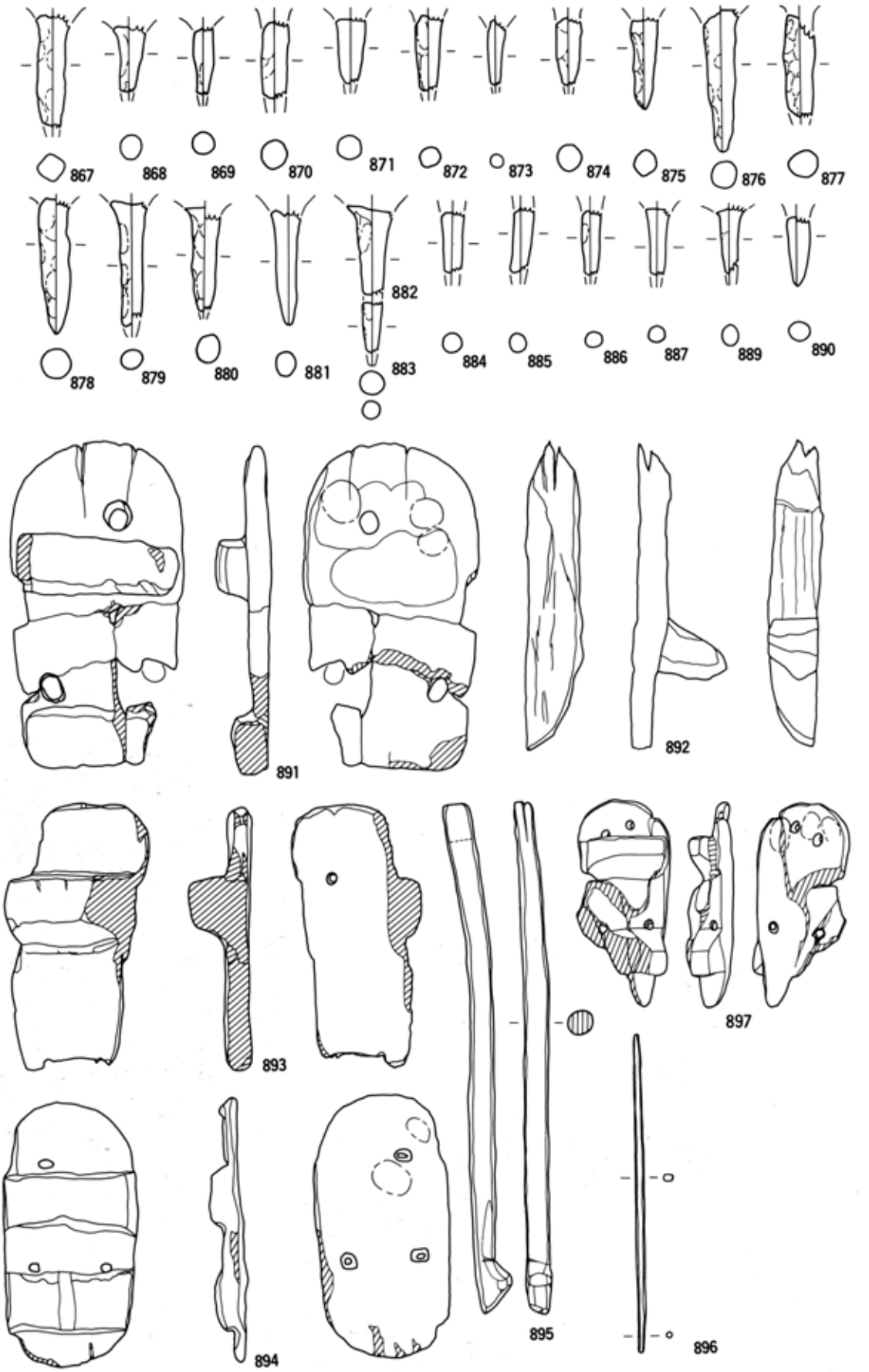


（818～838は２／３、他は１／３）



（857は１／１、855～861は１／２、他は１／４）

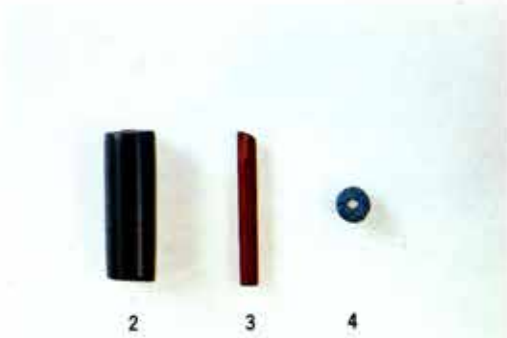
図版58



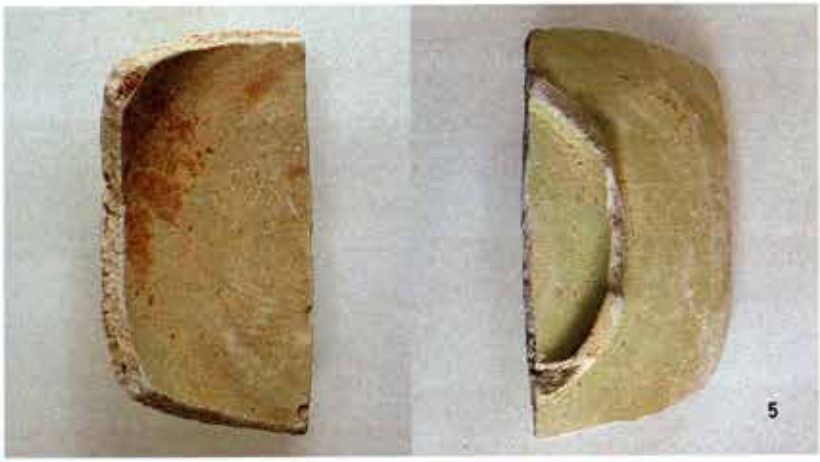
（867～890は１／３、他は１／４）

写真図版 1

1



2 3 4

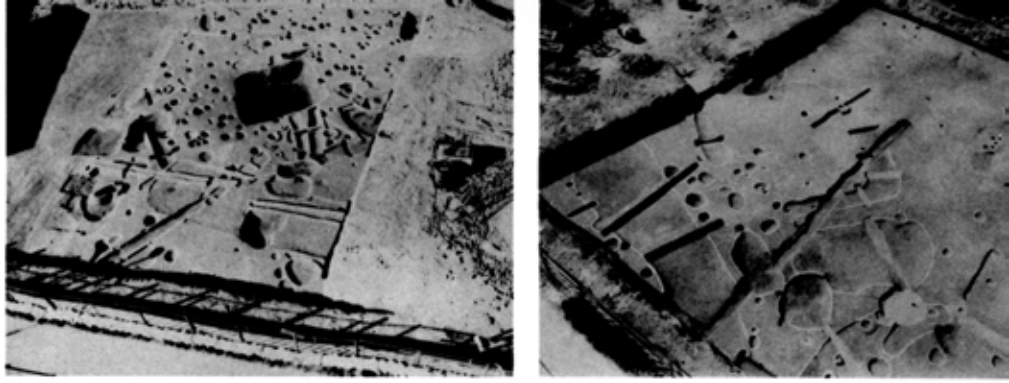


5

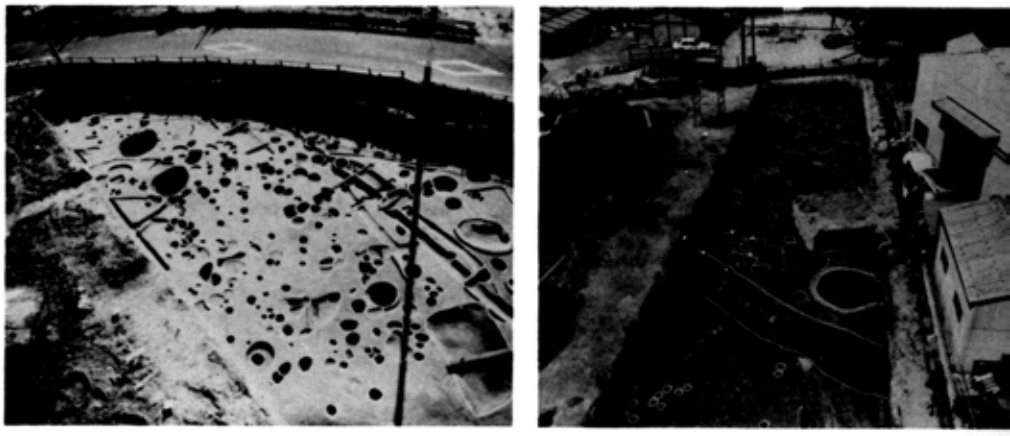
6 7

左：上面SE01（西から）
右：下面SE03円窓付土器出土状態
（上　南東から、下　南西から）

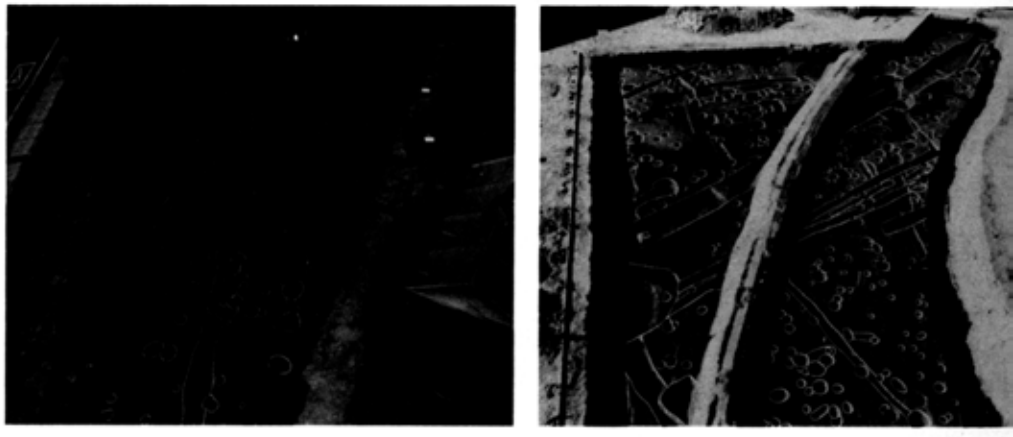
写真図版 2



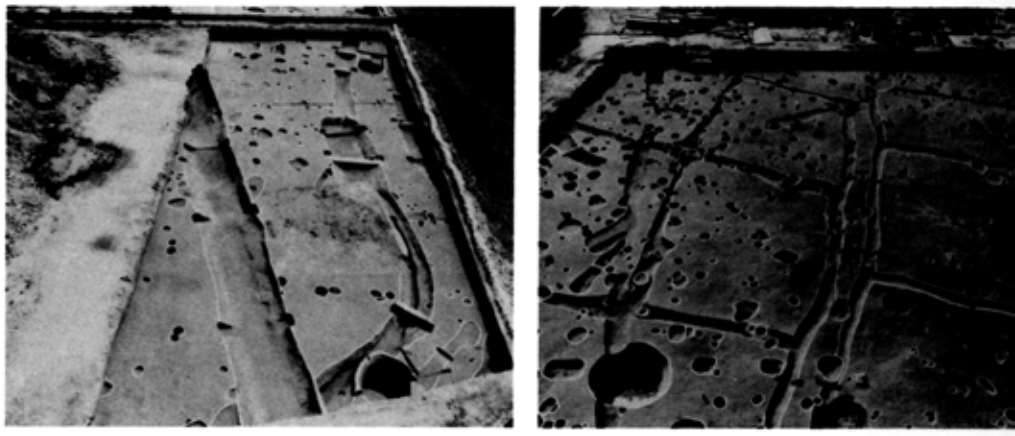
左：60 A_1区上面(南から)
右：60 B_1区上面(南東から)



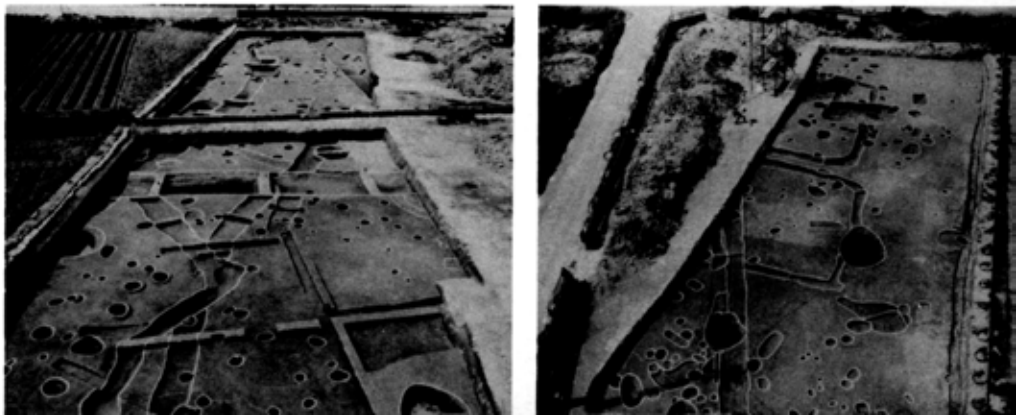
左：60 A_2区上面南側(北東から)
右：59 A区(北から)



左：60 D区上面西側(東から)
右：60 C_2・C_3区上面(東から)

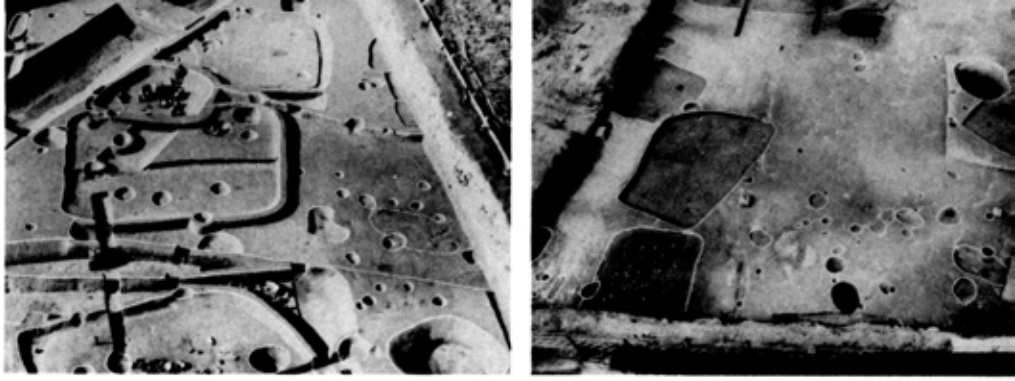


左：60 E区(北から)
右：60 H区(北から)

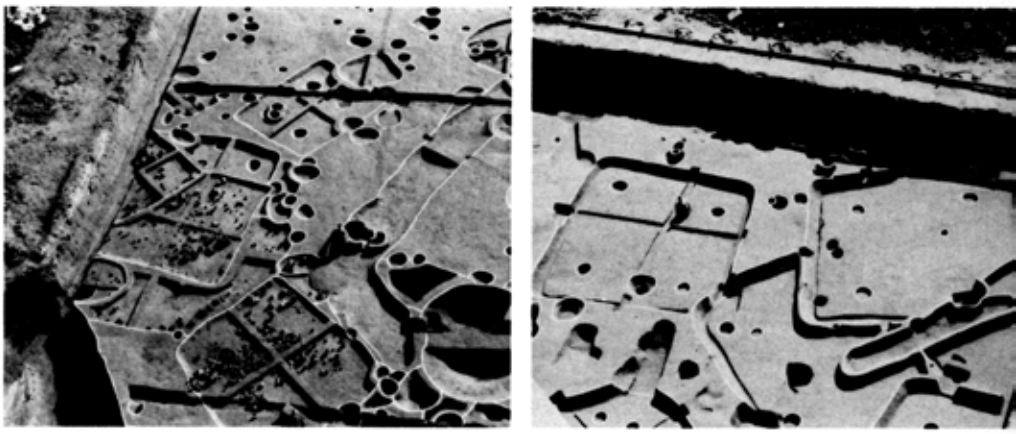


左：60 G区(南から)
右：59 B区(南から)

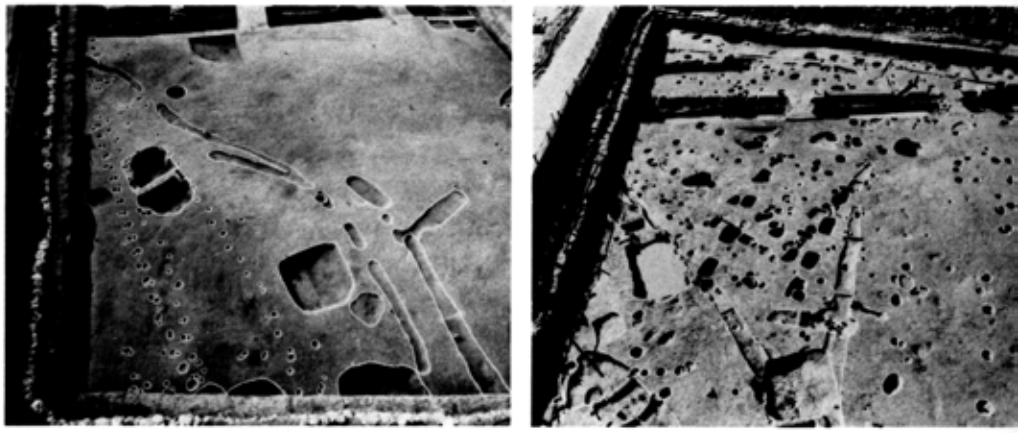
写真図版 3



左：60 A_1区下面西側(東から)
右：60 B_1区下面(南から)



左：60 A_2区下面北東側(西から)
右：60 C_3区下面西側(東から)



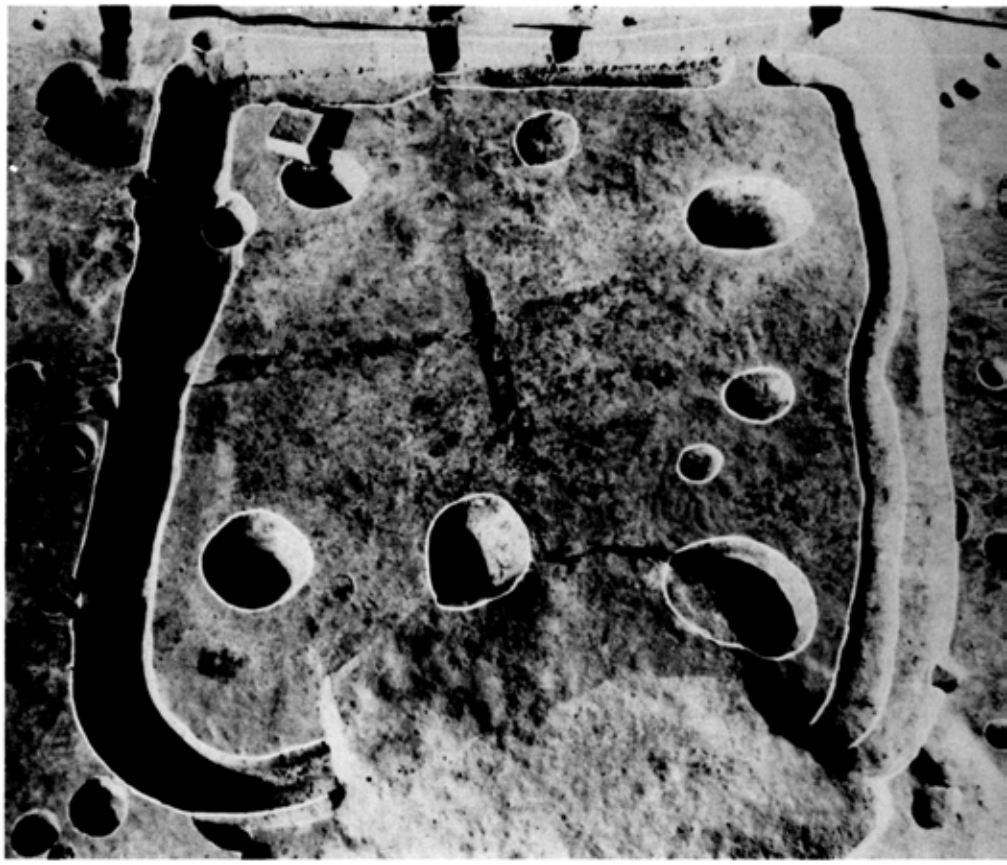
左：60F区中世遺構(東から)
右：60F区(東から)

左：60 I 区南側(北西から)
右：60J区(北東から)

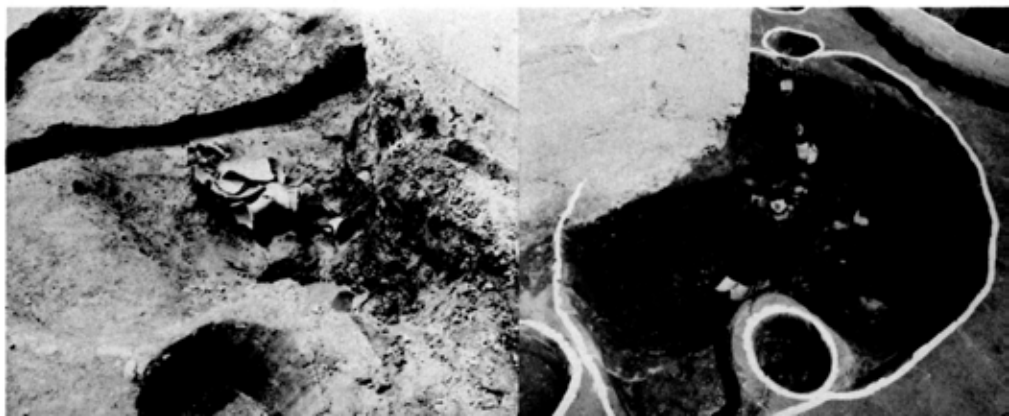
左：60K区(東から)
右：60L区(東から)

写真図版 4

下面 ＳＢ05・ＳＢ06(東から)



下面 ＳＢ05(東から)



下面 ＳＥ03
左：上層土器出土状態(南から)
右：下層土器出土状態(西から)

写真図版 5

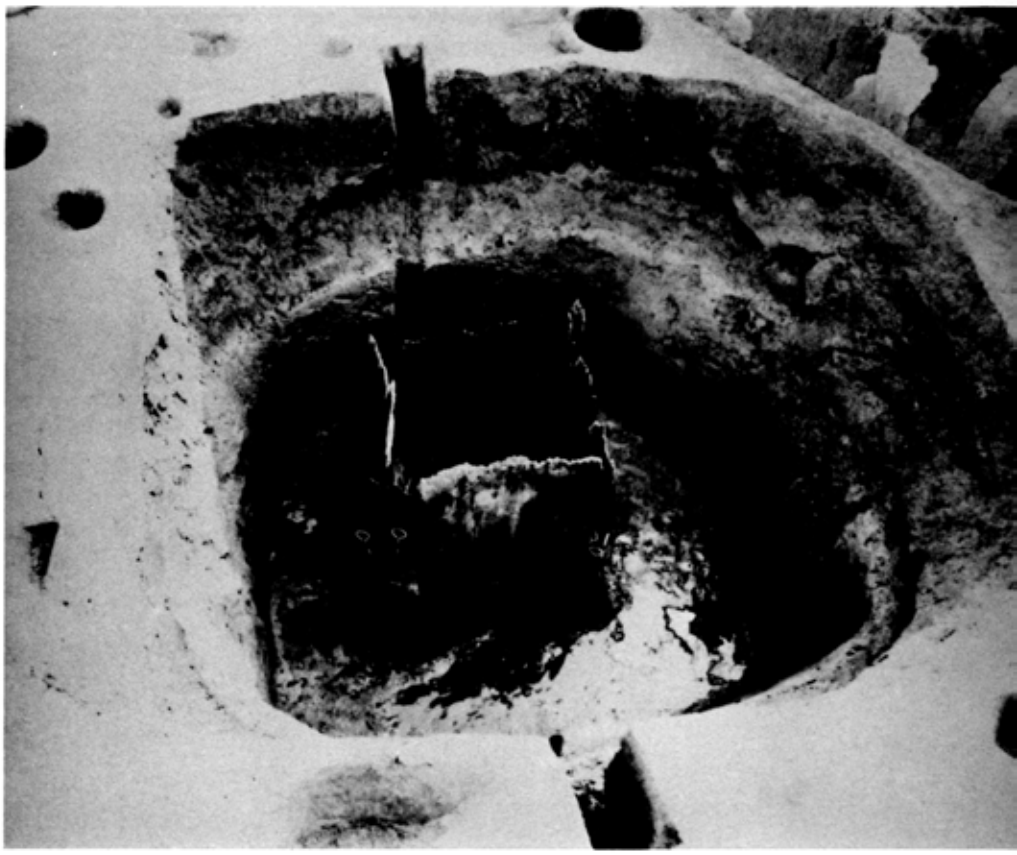
下面 ＳＢ14
炭化材・土器出土状態（南西から）

下面 ＳＢ26
炭化材・土器出土状態（東から）

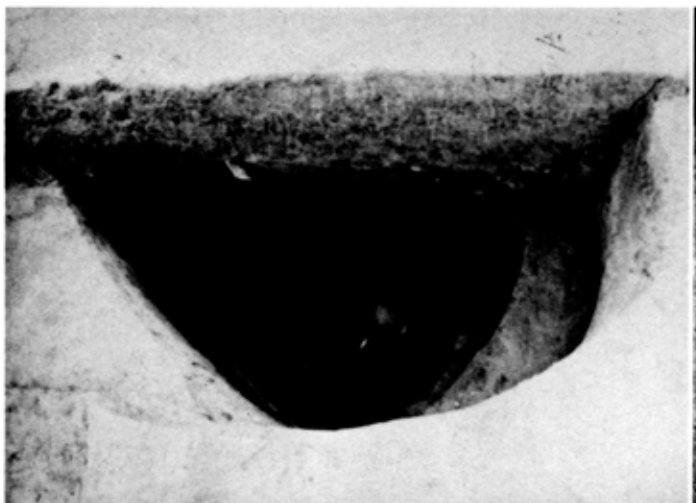
下面 ＳＢ19

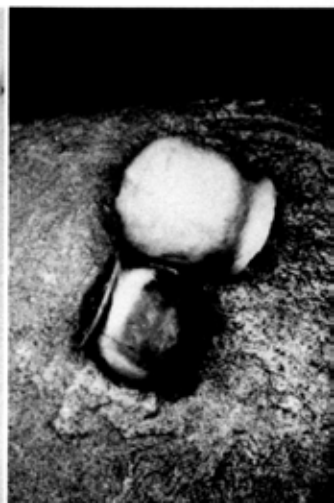
写真図版 6

ＳＥ22
井戸枠・曲物出土状態（東から）



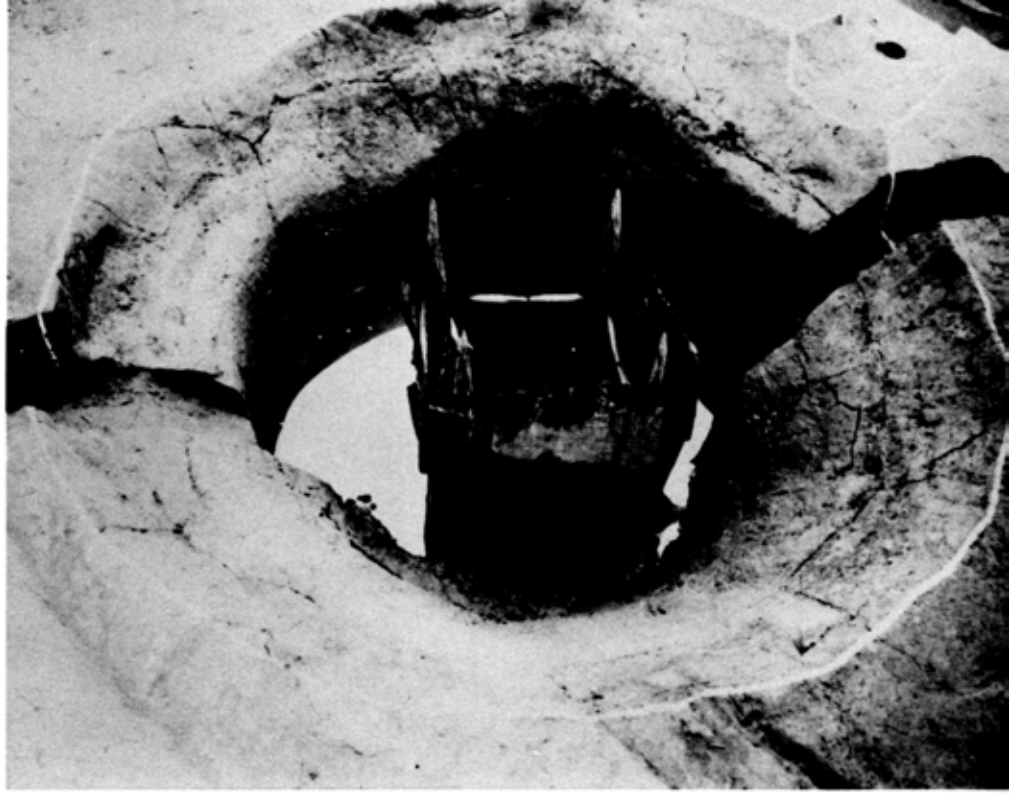
ＳＥ10
井戸枠出土状態（北東から）





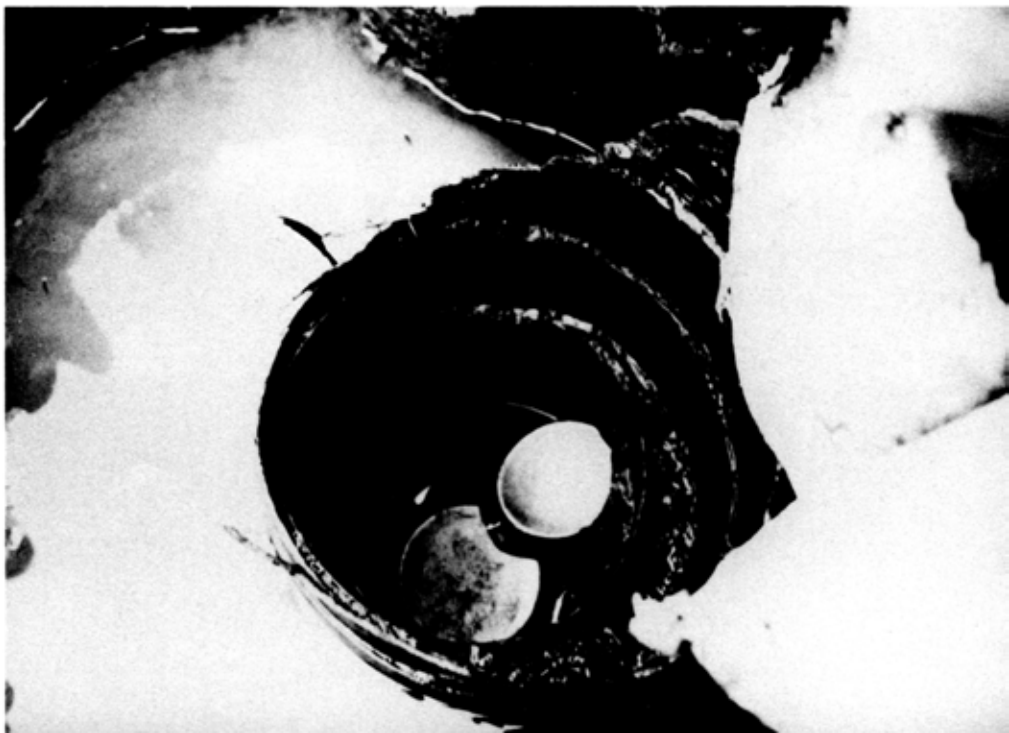
ＳＥ13
土器出土状態（北から）

写真図版 7



ＳＥ14
井戸枠出土状態(北東から)

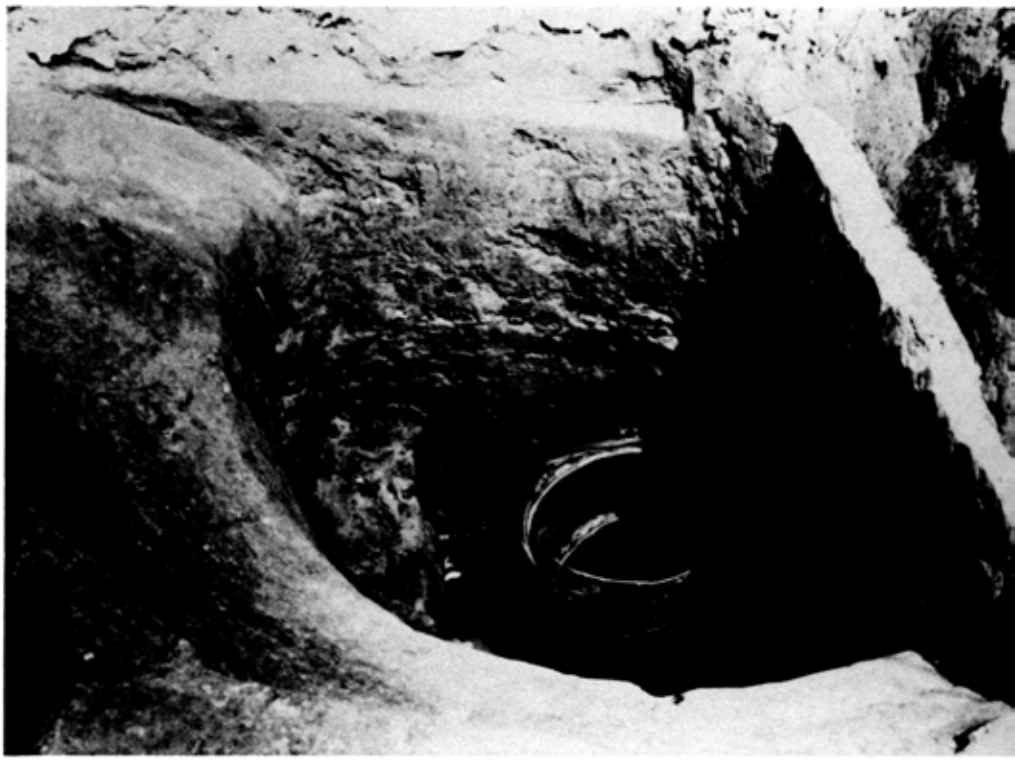
ＳＥ14
井戸枠・砂おさえ出土状態(南から)



ＳＥ24
土器・曲物出土状態(北から)

写真図版 8

ＳＥ11
土器出土状態(北西から)



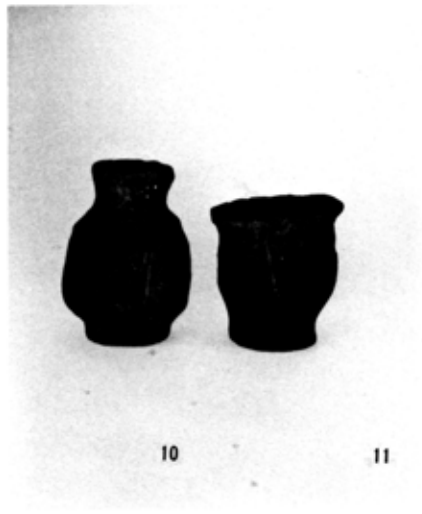
ＳＥ03
曲物出土状態(西から)

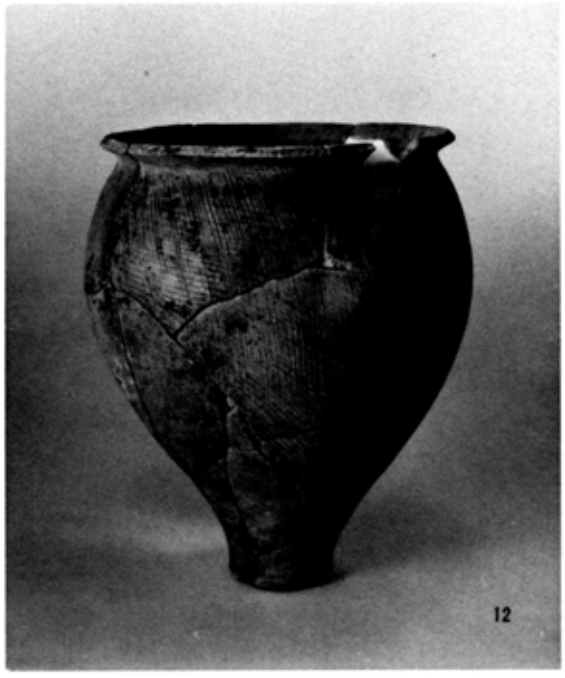
ＳＫ125
土器出土状態(南から)

写真図版 9

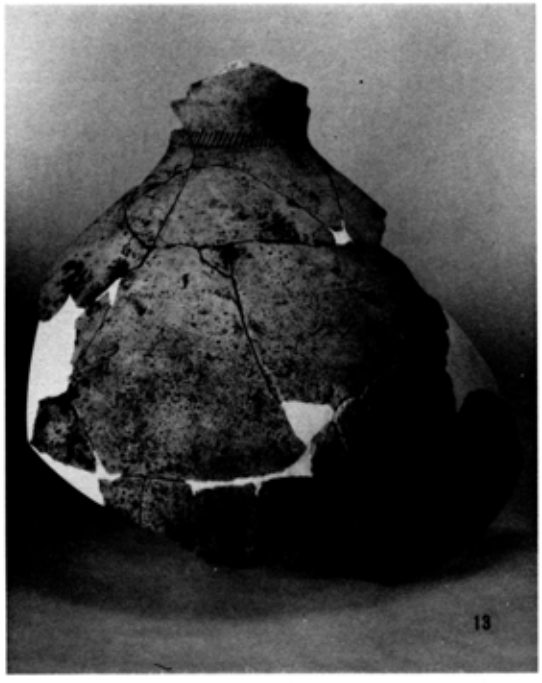
8

9


10 11


12

14


13

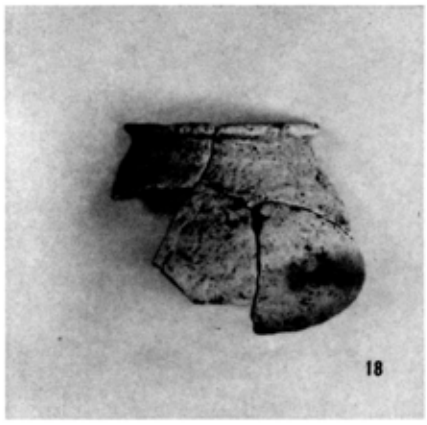
15

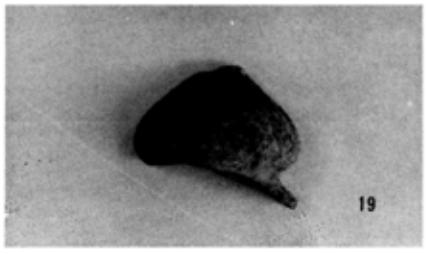
(9～11は1/3，13は1/5，他は1/4)

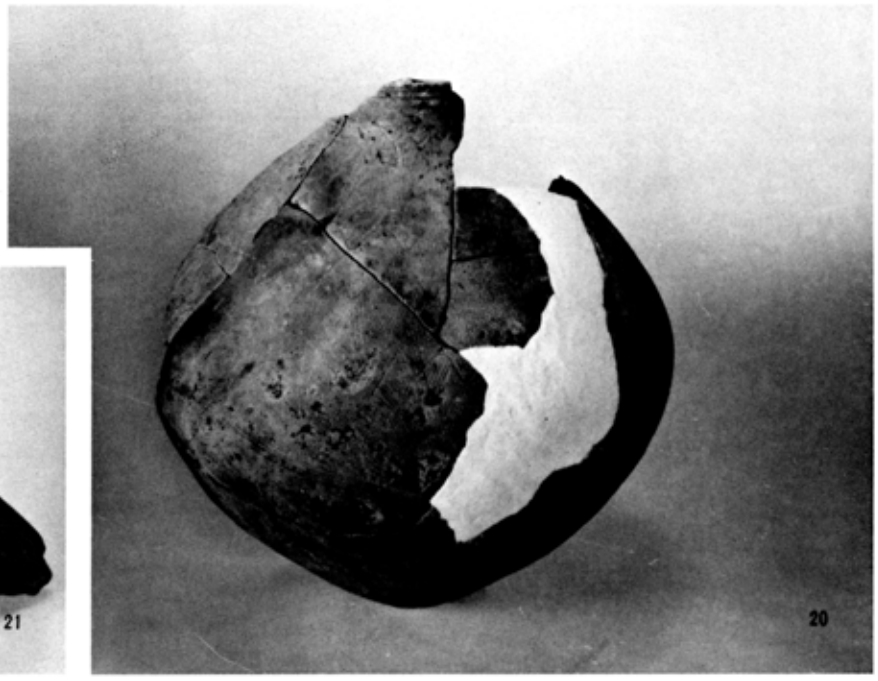
写真図版10

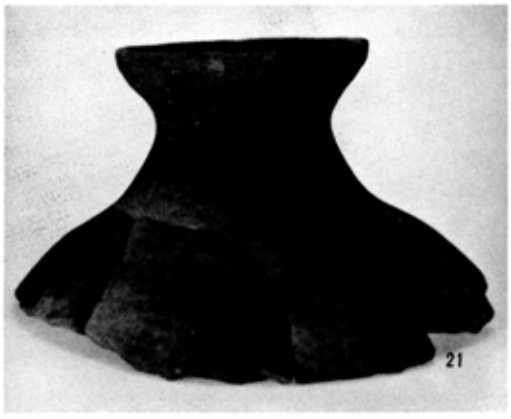
16

17


18


19


20

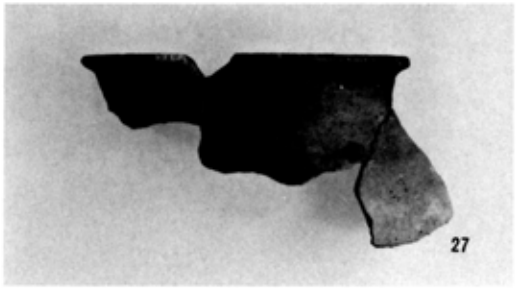

21

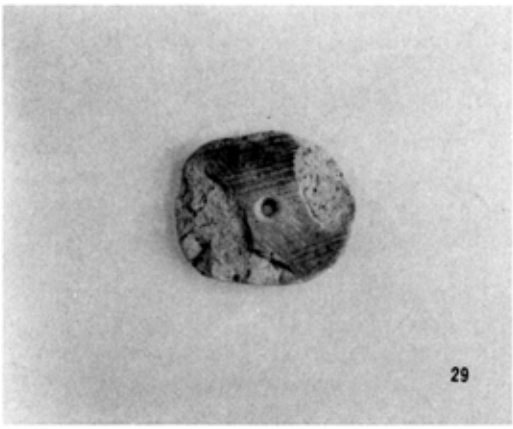
22

23

(22は1/5，他は1/4)

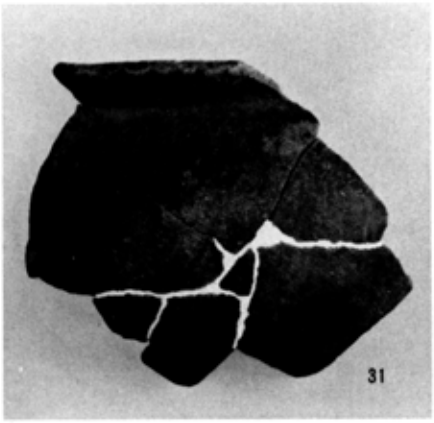
写真図版11

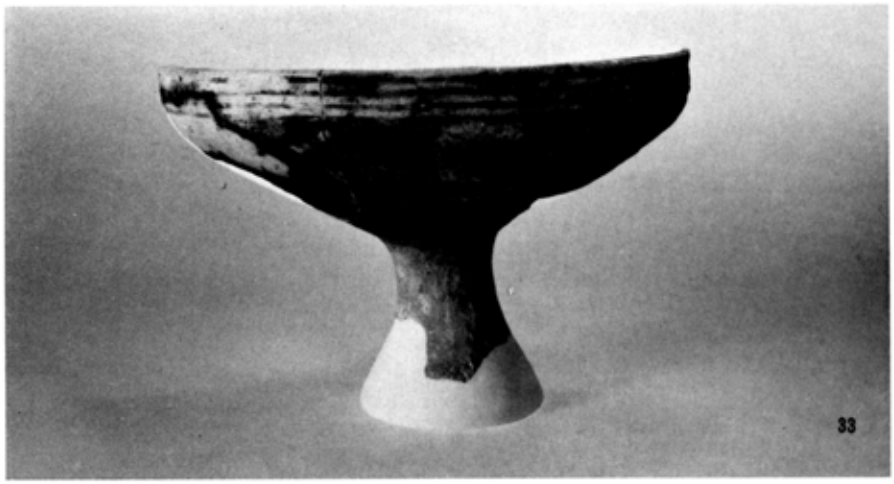


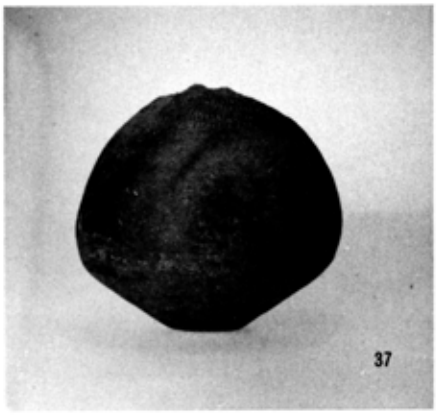


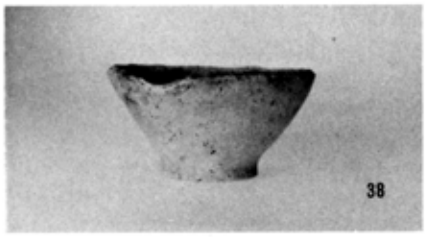
(29は1/2，他は1/4)

写真図版12









(38は1/3，他は1/4)

写真図版13

37

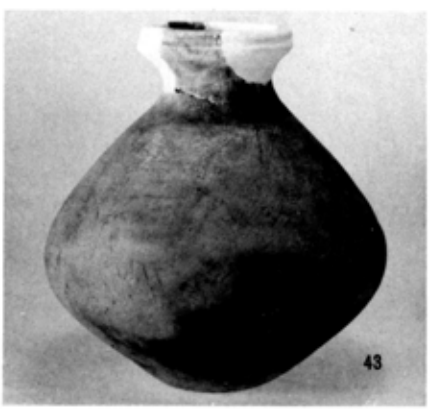
38

39

40

41

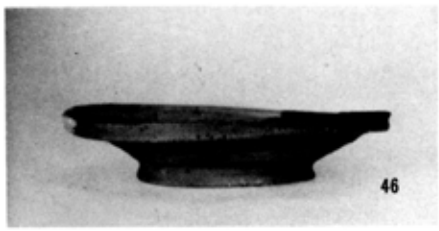
42

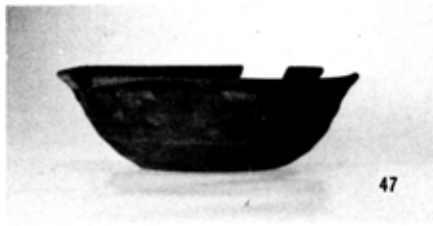

43

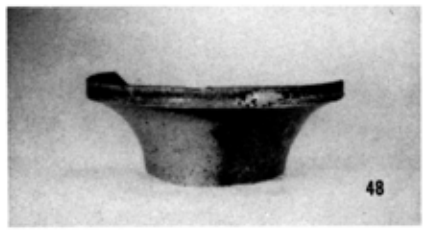
44

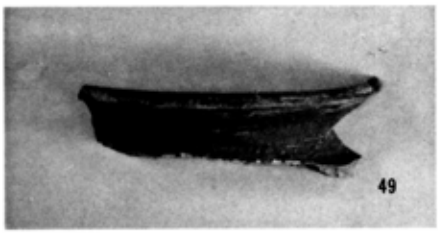
45

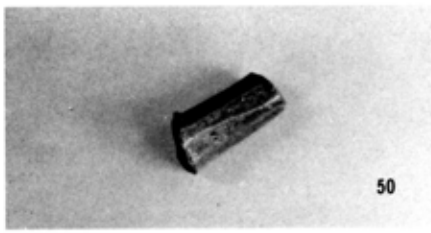
写真図版14


46


47

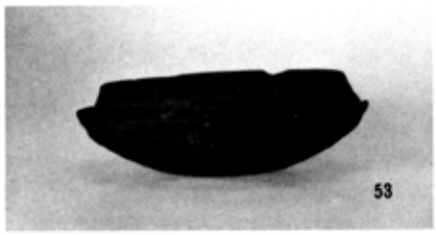

48

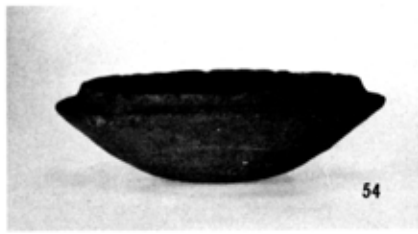

49


50

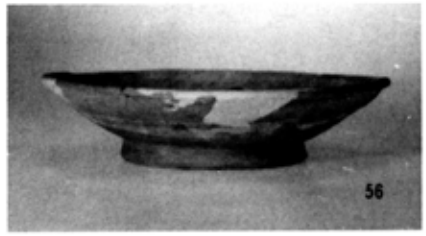
51

52


53

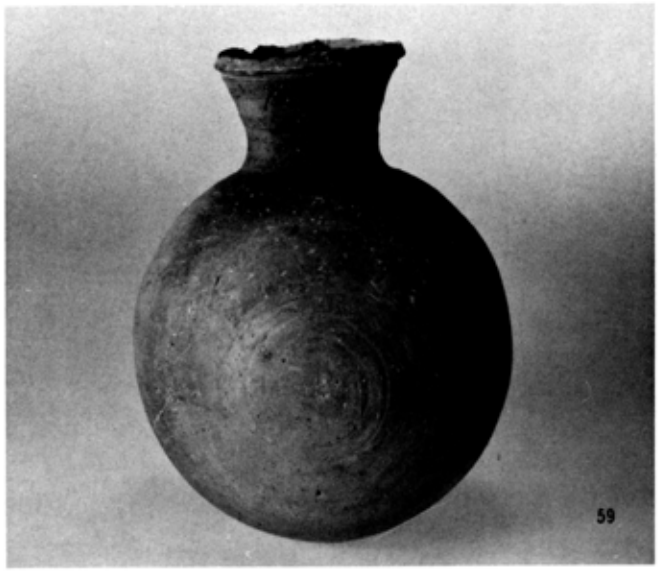

54

55


56

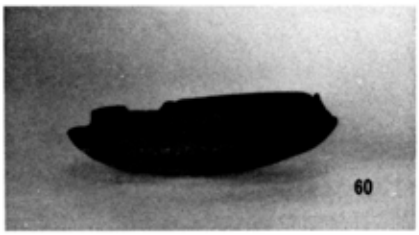
57

58

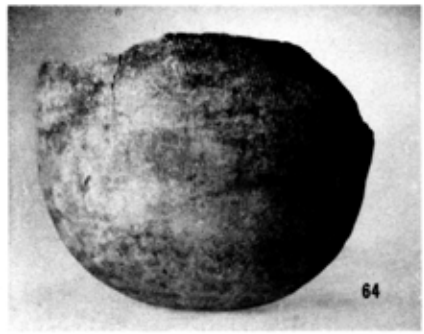

59

(55・58は1/4，他は1/3)

写真図版15


60

61


64

62

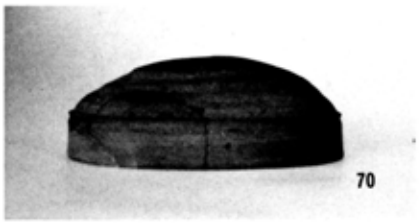
63

65

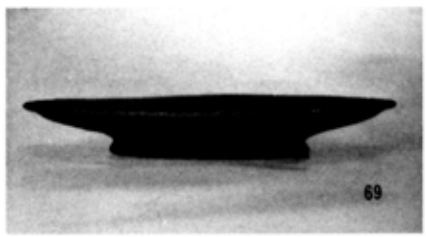
67

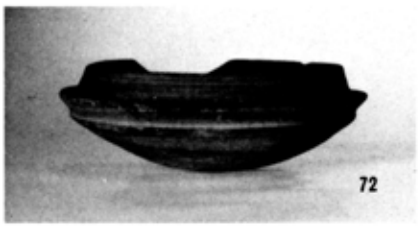
66

68

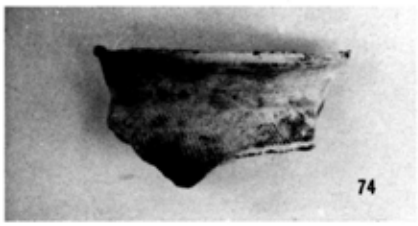

70

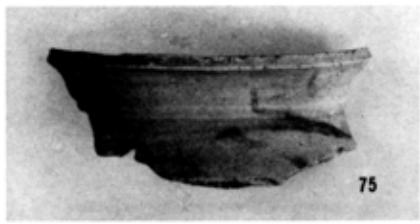
71


69


72

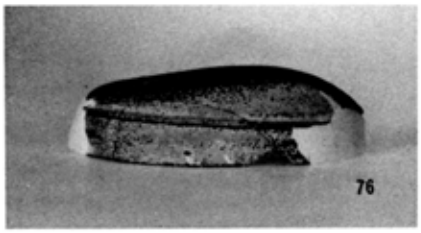
73

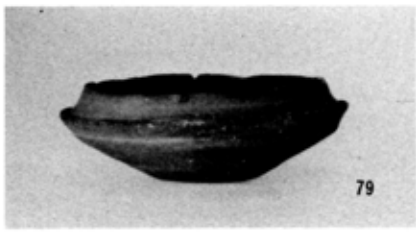

74

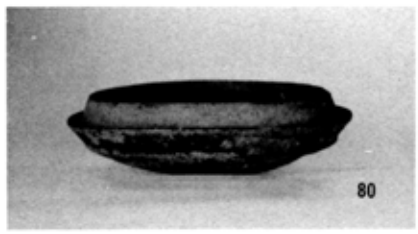

75

(62～65・67・74・75は1/4，他は1/3)

写真図版16

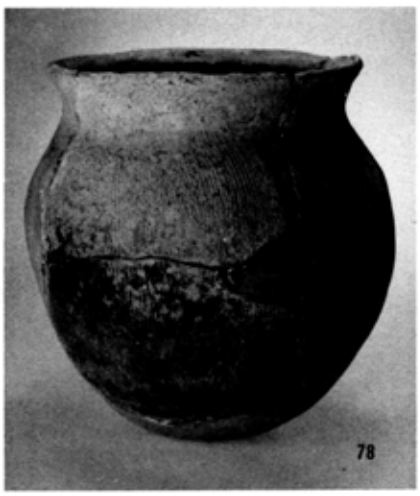

76


79

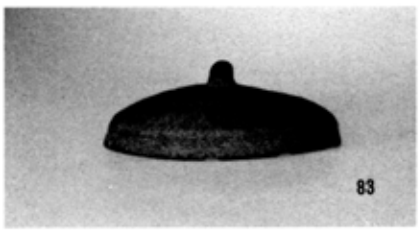

80

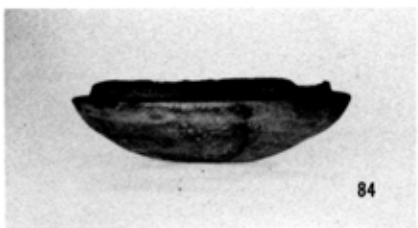
77

81

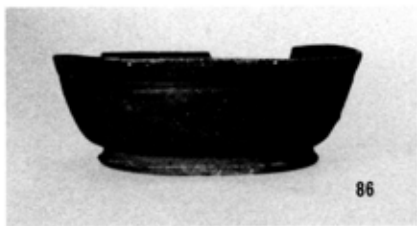

78

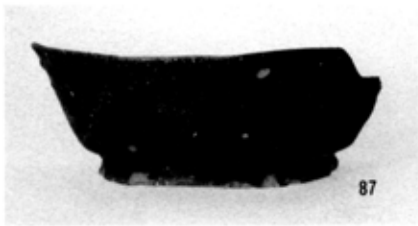
82


83


84

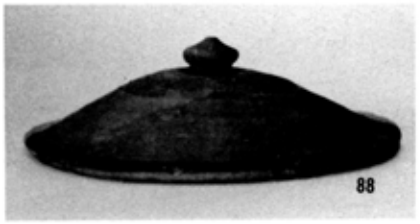
85

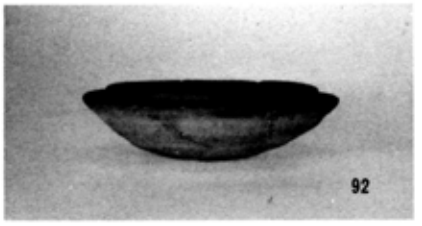

86


87

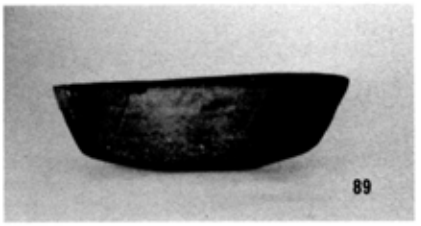
(77・78・81・82は1/4，他は1/3)

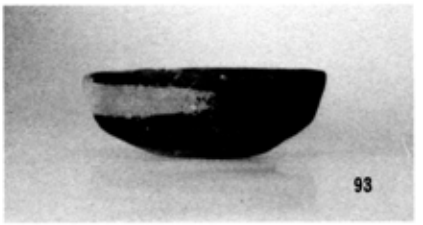
写真図版17

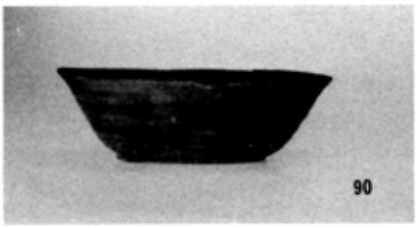

88

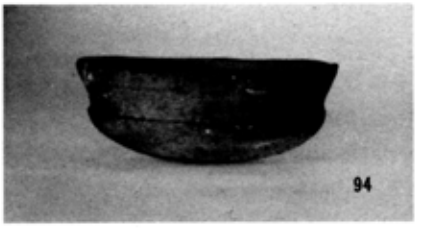

92

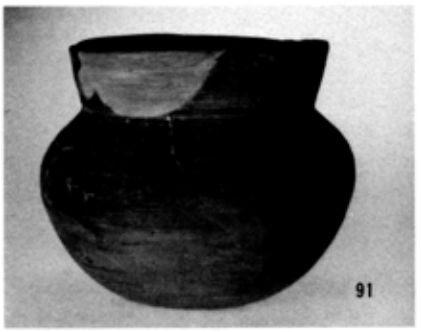
96


89

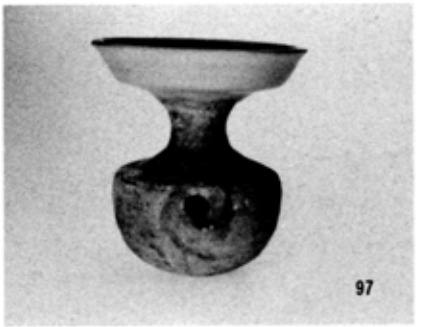

93

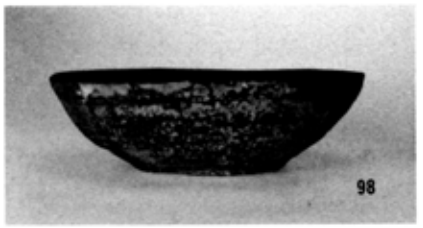

90

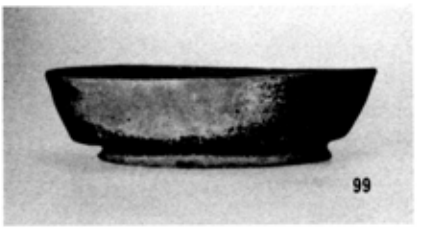

94


91

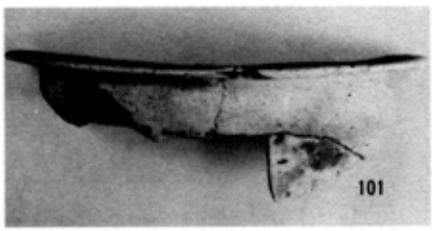
95

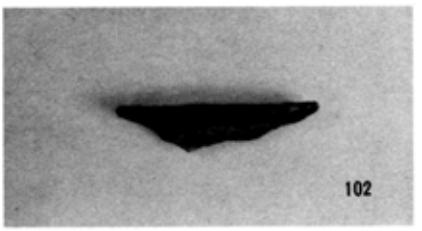

97


98


99

100


101


102

103

104

105

106

(96・101は1/4，他は1/3)

写真図版18

107

108

109

110

111

112

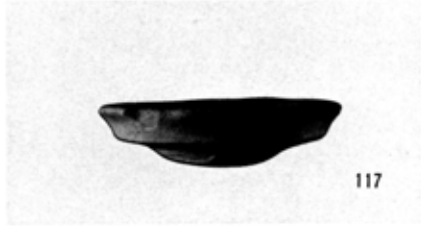
113

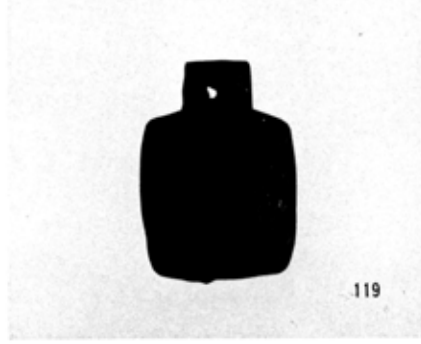
114

115

116

118

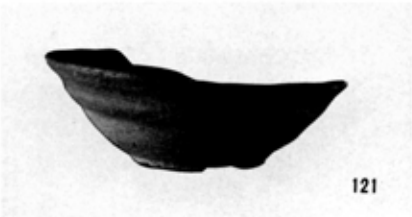

117


119

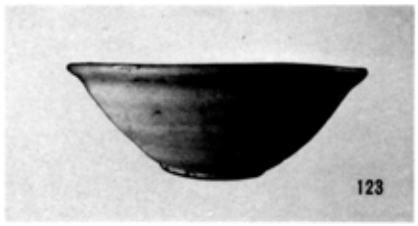
120

（119は1/2，他は1/3）

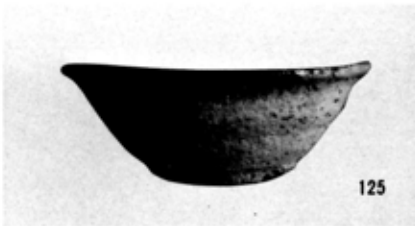
写真図版19

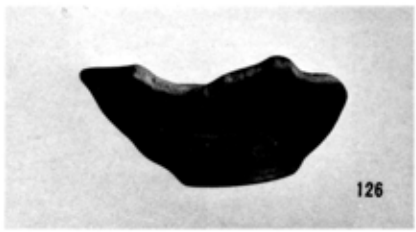

121

122

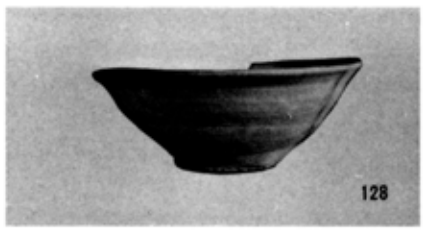

123

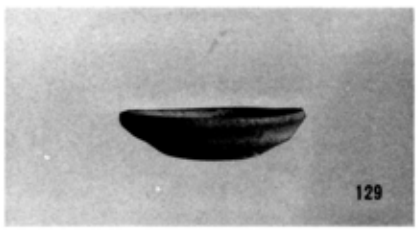
124


125

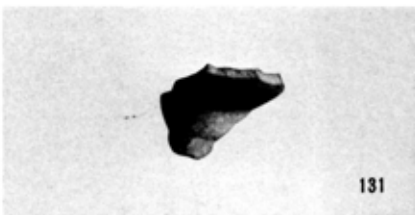

126

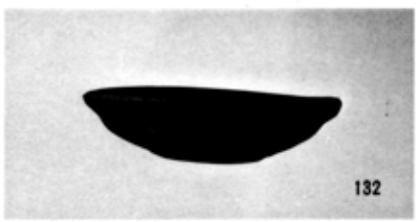
127


128

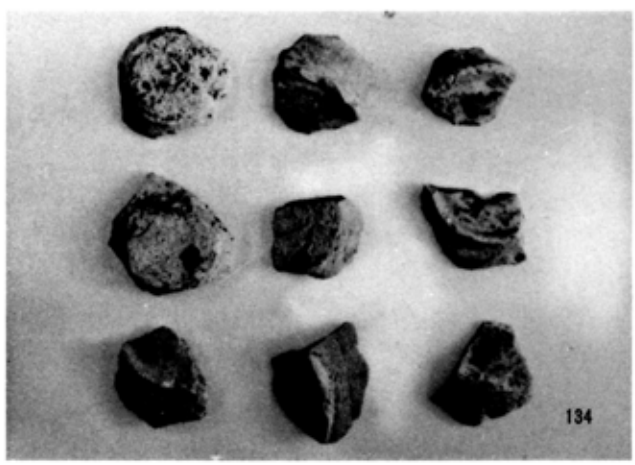

129

130

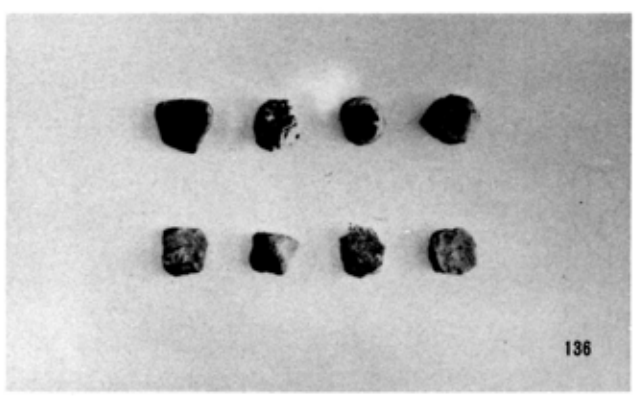

131


132

133

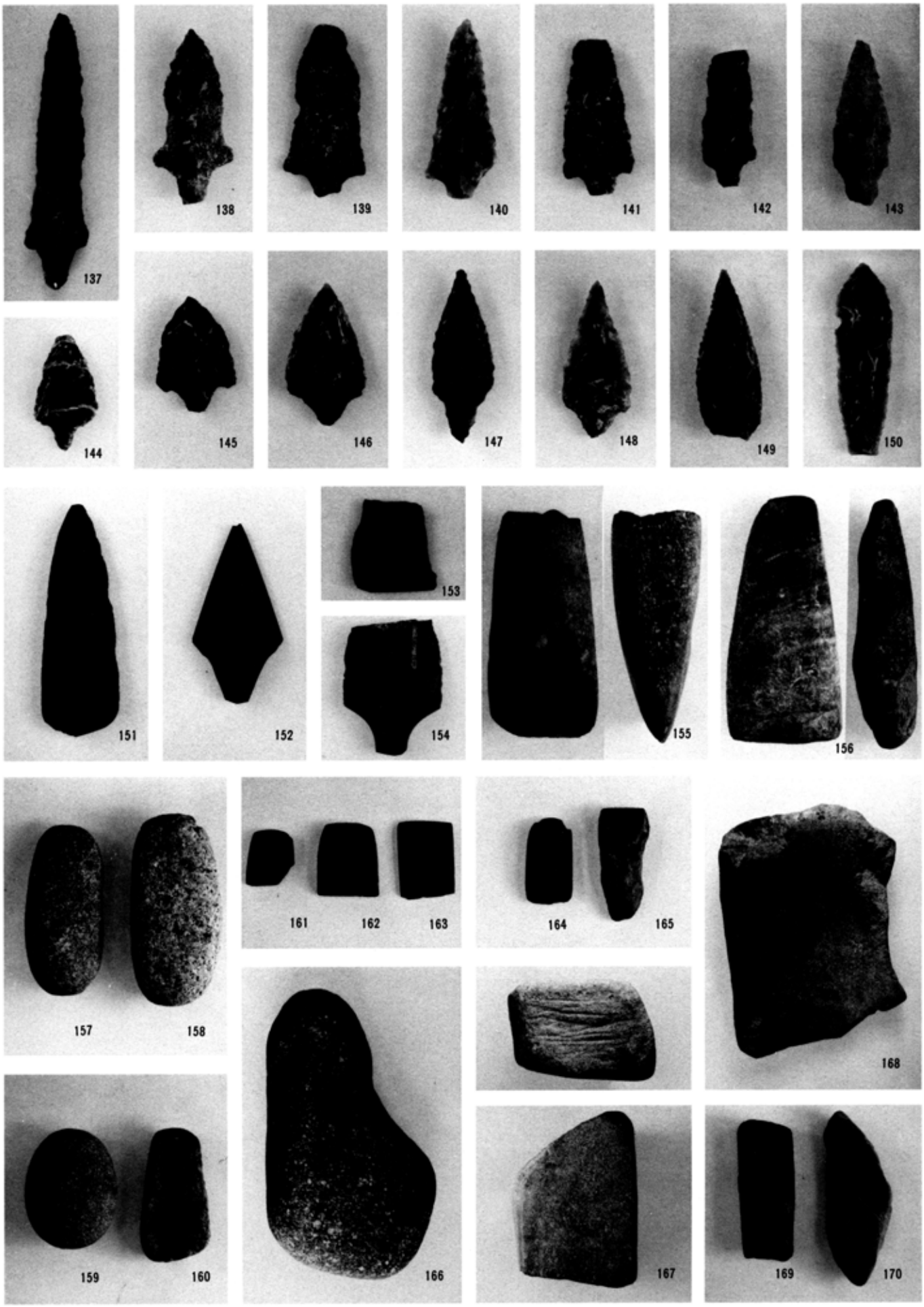

134

135


136

(133～136は1/2，他は1/3)

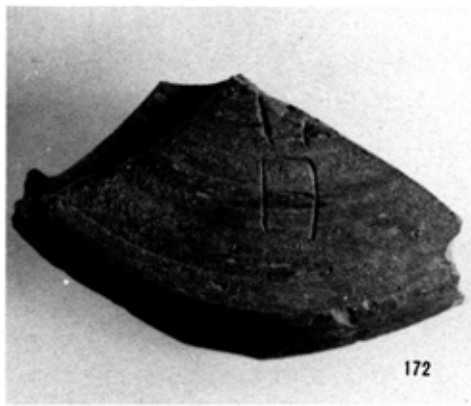
写真図版20

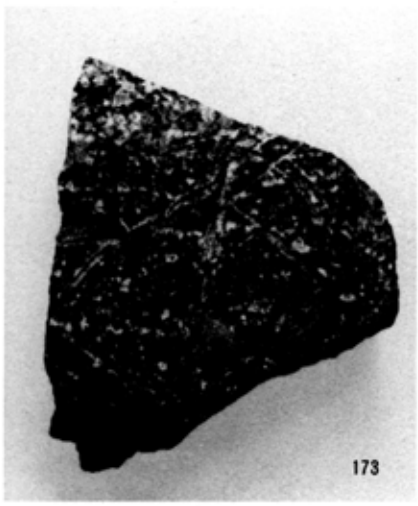


(155～166・169・170は1/3，167・168は1/4，他は1/1)

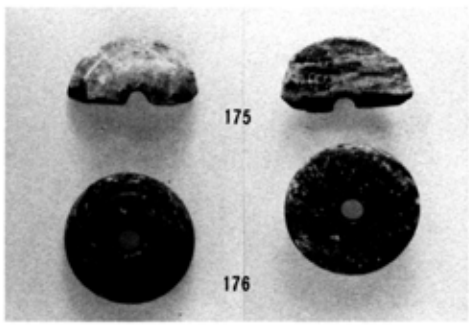
写真図版21

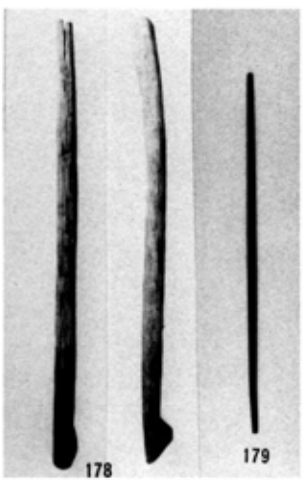
171

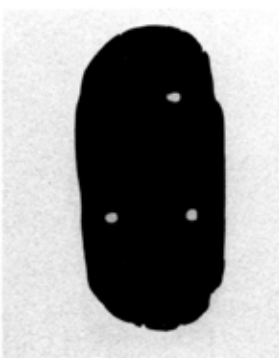

172


173

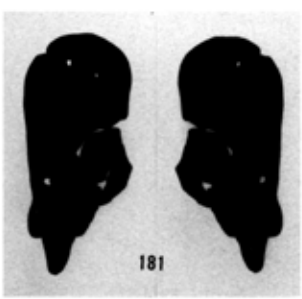
174

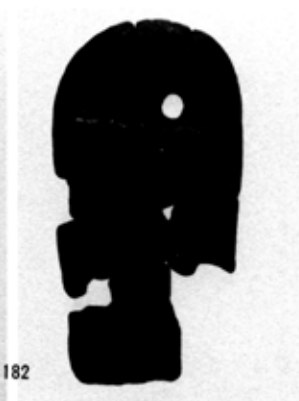

175 176

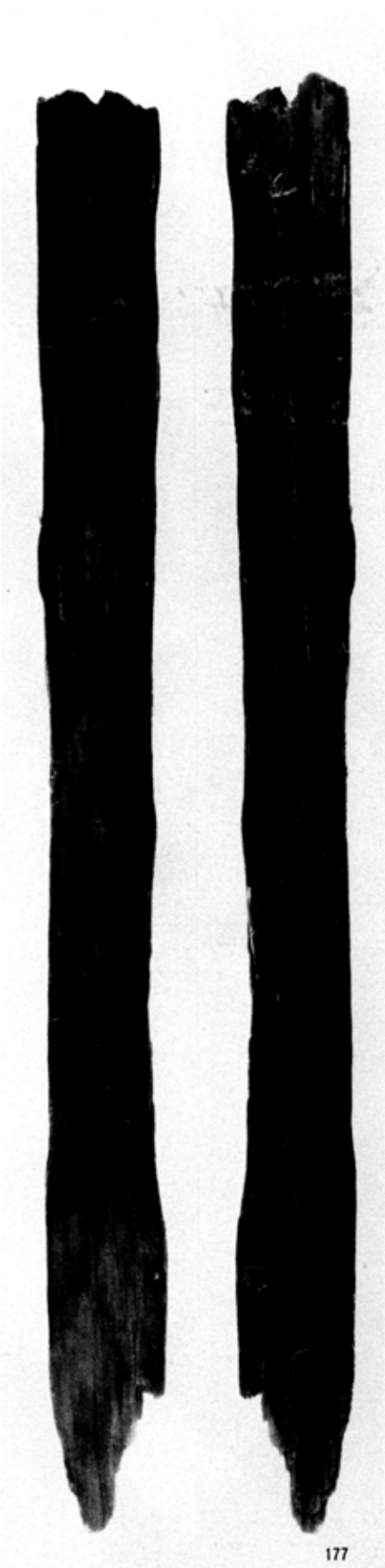

178 179



180

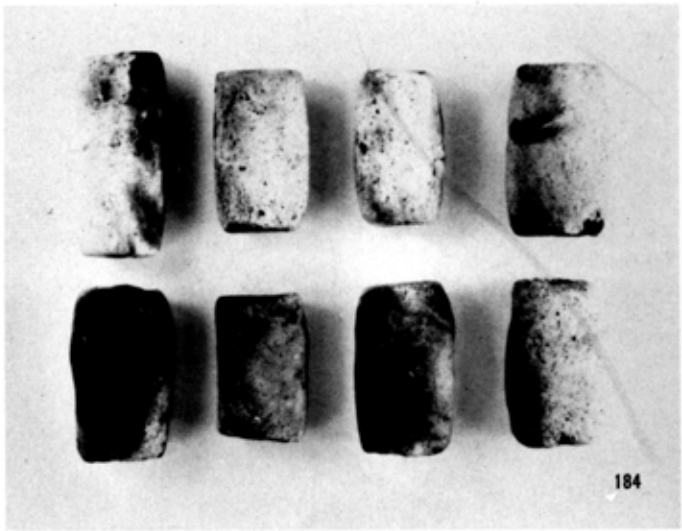

181

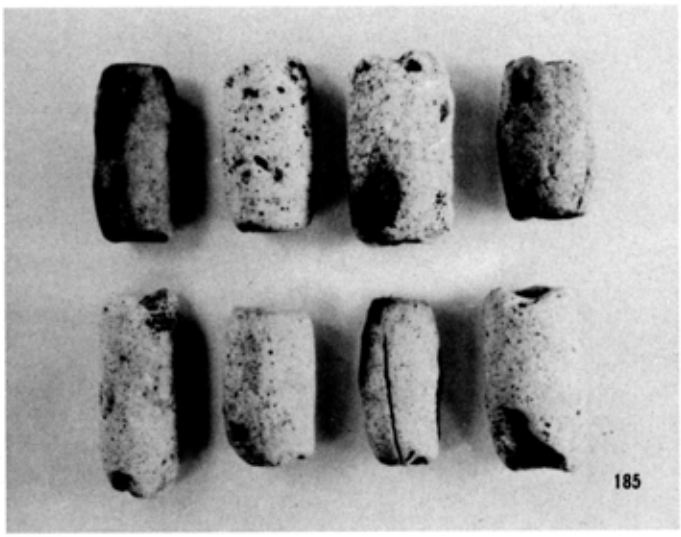

182

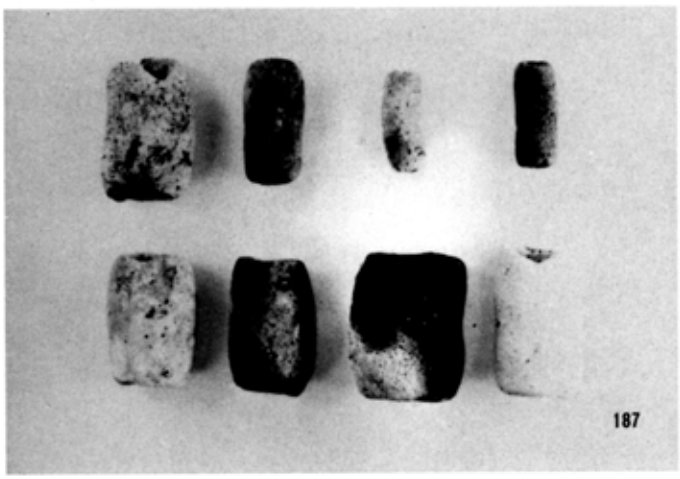

177

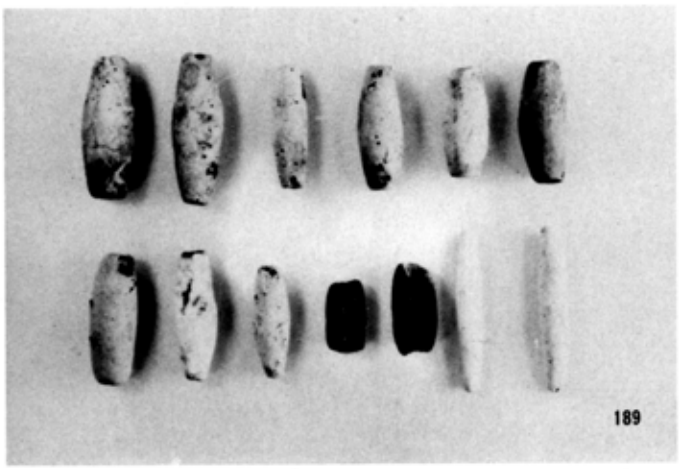
（171～176は1/2，177は1/1，179は1/3，他は1/4）

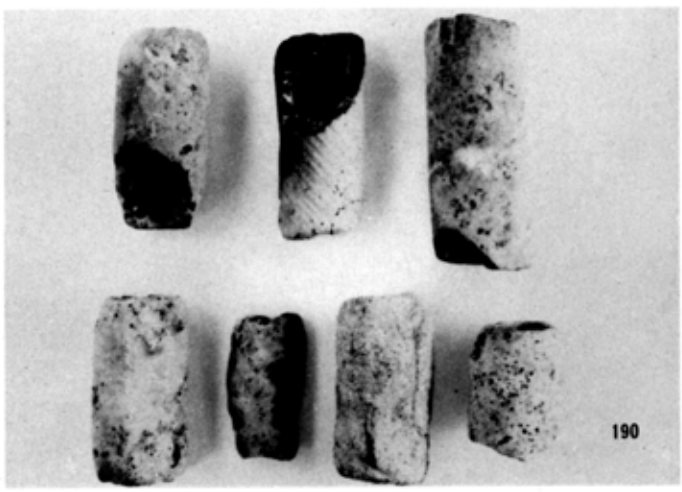
写真図版22











(1/3)

(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第18集

大　渕　遺　跡

1991年 3 月31日

編集・発行　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印　　刷　第 一 法 規 出 版